

图 225 2号墳 西裾遺物出土状況（中央部）

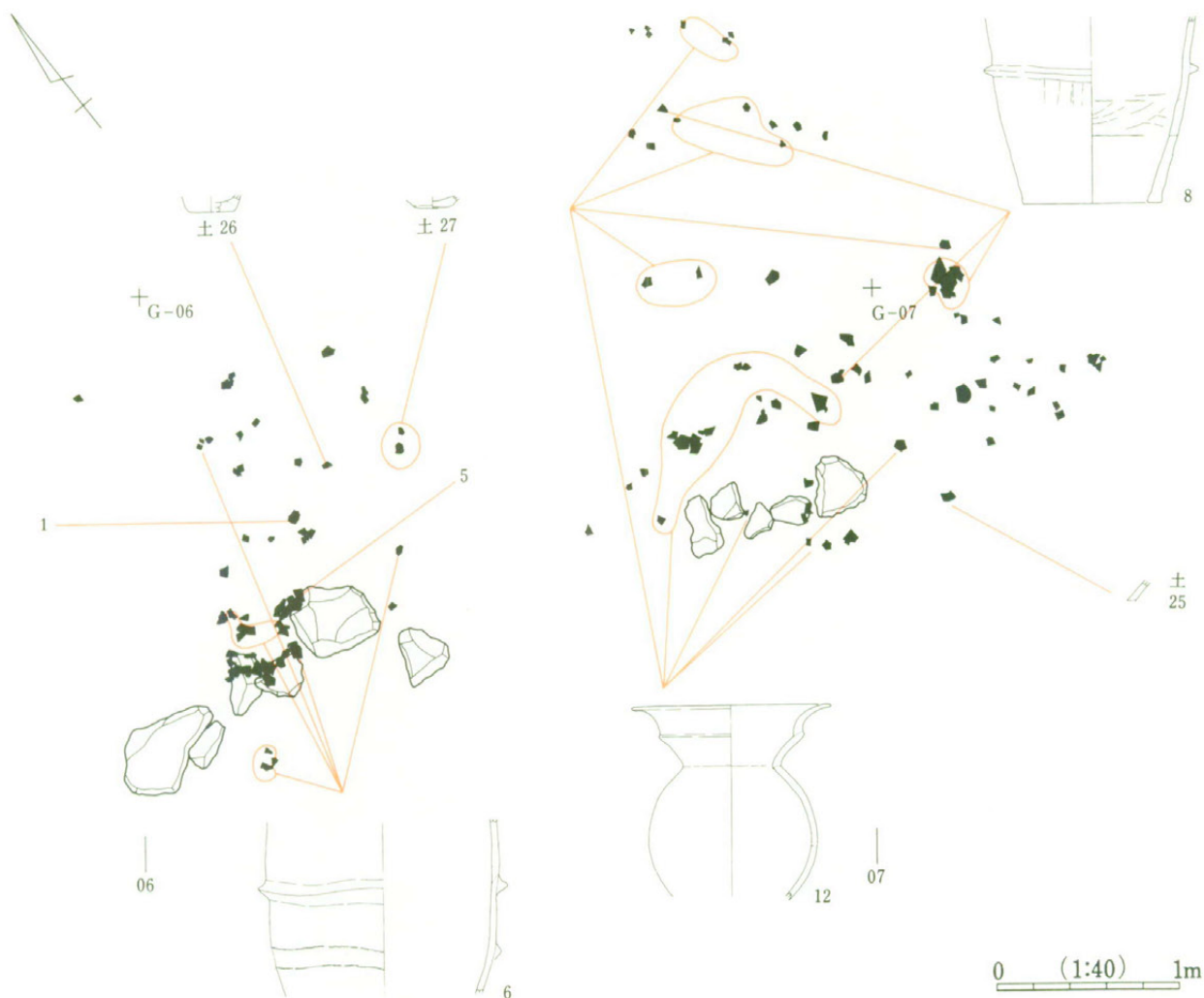


図 226 2号墳 西裾遺物出土状況(北部)

以上の様相から埴輪・土師器の配置状態を復元すると、埴輪は、墳頂平坦面上に、墓壙を取り囲むように、円筒埴輪と壺形埴輪を交互に立て並べた状態が想定される。土師器類は、主体部陥没土層内にも多く包含されていることを考え併せれば、主体部上の東寄りにまとめて配置されたものが一部東裾に転落した状況を推測できよう。

2 主体部

(1) 墓壙 (図 227)

墳頂平坦面のほぼ中央に位置する。平面形状は、南辺西寄りがやや膨らむものの、検出面での規模が長軸 5.0 m、短軸 1.3 m を測る長方形である。主軸は $N-115^{\circ}-E$ を向き、尾根筋に平行させた墳丘主軸と一致する。墓壙は盛土を掘り込んでつくられ、横断面形は逆台形を成す。検出面からの深さは約 50cm である。墓壙壁は、南北長壁(側壁)・西短壁は底面から屈折して直線的に約 80 度に立ち上がるが、東短壁は 60 度と傾斜が緩くなっている。

(2) 棺と立石 (図 227)

墓壙底中央の木棺を設置する範囲はさらに掘り込まれ、棺床部を造り出している。棺床部は、幅 53cm、深さ 36 ~ 27cm の断面 U 字形を呈し、長さは 3.93 m を測る。底面東端レベルは西端より 10cm 程高い。両

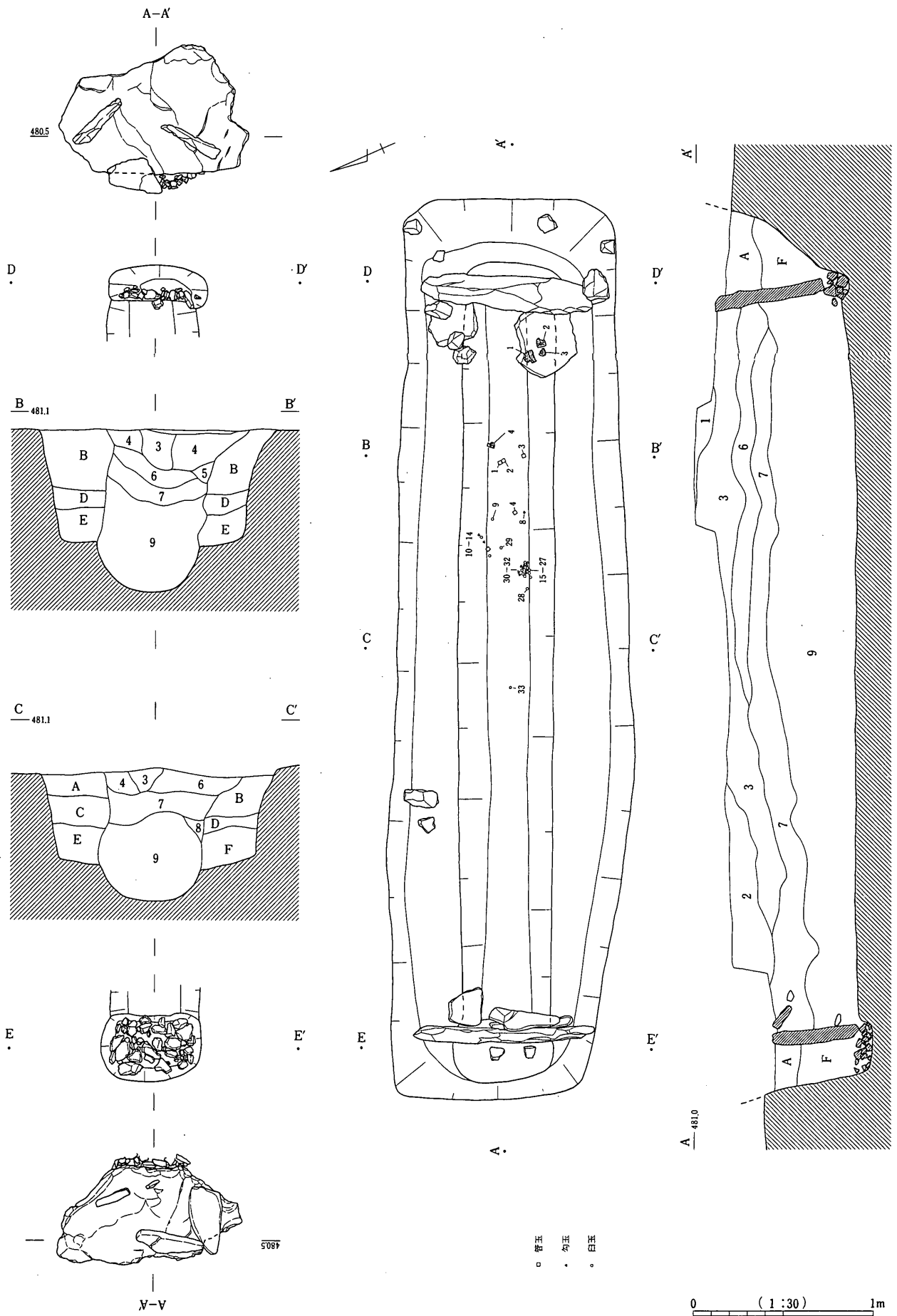


图227 2号墳 主体部

2号墳主体部土層

崩壊土・流入土

- 1: 黄褐色土 (粒子やや細かくパサパサした土)
- 2: 黒色土 (砂粒含みザラザラした土)
- 3: 黒褐色 (2層に組成がよく似るが、やや色調明るい)
- 4: 暗茶褐色土 (3層によく似るが、黒色味が弱い)
- 5: にぶい黄灰褐色土 (ブロック様相少ない。B層に似る)
- 6: 黒褐色土 (2層に組成がよく似るが、黒色味が弱い)
- 7: 暗黄灰褐色土 (橙褐色・暗黄灰褐色・黒灰色の細かなブロック <1cm以下>。黒と橙はあまり多くない。間隙多く、すきまに砂粒)
- 8: にぶい暗黄灰色土 (砂粒少なく、しまり弱い。D層に似る)
- 9: 暗橙黄灰褐色土 (7層に組成が似るが、ブロックが大きい <2~5cm>。黒と橙の割合多い。間隙多)

- 墓壇埋戻し土: 明橙褐色土・黄灰褐色土・黒灰褐色土・明黄褐色土の4種ブロックで構成
- A: やや明るい橙灰褐色土 (1~2cm程の明橙褐色土ブロック主体)
 - B: やや暗い黄灰褐色土 (黒灰褐色土ブロック主体。ブロック径大。締め強い)
 - C: やや暗い黄灰褐色土 (B層に似るが、ブロック径小<1cm程>。やや締め弱い)
 - D: にぶい黄灰褐色土 (ブロック様相があまり顕著ではない)
 - E: やや明るい黄褐色土 (2~3cmの明黄褐色土ブロック主体。他種土の割合少ない。間隙多い)
 - F: 黒黄灰褐色土 (1~3cmの黒灰色土ブロック主体。割合は半分以上)

端外側は一段深くまた幅広く掘り込まれ、小角礫を詰めて立石構築の基礎とする。

立石は緑色凝灰岩の大形板状石を立てたものである。東立石は幅105cm、高さ71cm、厚さ7cmの大きさを持ち、内側に40cm弱の板石を2枚伴う。この2枚の性格は不明であるが、木棺東端側面に斜めに立てかけた状態、或いは立石南北両端付近に垂直に立てた状態で、墓壇埋め土内に埋設されたものであろう。西立石は幅104cm、高さ55cm、厚さ7cmと東立石に比べやや小振り、内側に3枚の板石を伴うが、この3枚のうち2枚が平坦面を立石側面に密着させていることから、立石と木棺小口の隙間に詰め込んだものと推測する。

木棺は腐朽し、全く遺存していない。しかし、棺床の形状および土層断面に現れた痕跡から考えて、外径55cm程の割竹形木棺を想定するのが妥当と思われる。長さは、棺床部長の3.93cmがほぼ棺長を示すとみてよいだろう。棺小口の構造は明確ではないが、西立石内側の板石を詰め物とみる先の推測が正しいとすると、小口板をもつか或いは小口壁を削り残していた可能性が考えられないでもない。

木棺設置後の墓壇内は明橙褐色土・黄灰褐色土・黒灰褐色土・明黄褐色土のブロック土を混合した埋め土が、立石内側で3層、外側では2層に施され、墓壇を埋め尽くしている。

なお、木棺の腐朽に伴って棺内に陥ち込んだ土層上部(2~4・6層)から土師器壺・高杯の破片が多量に出土した。主体を占めるのは高杯である。これらの土器群は、古墳の埋葬行為に係る祭祀に伴って、主体部上に置き並べられた、或いは寄せ集められたことを想定し得る。分布は、棺痕跡のプラン内に収まり、かつその東寄りの、東立石内縁から50cm~120cmの範囲に集中する。この範囲は、棺内で検出された玉類のまとまり(図227)にかなりの部分が重なり、主体部上土器群の配置が被葬者の位置と関係して設定された可能性を指摘できよう。

(3) 副葬品の出土状況 (図227)

副葬品はほぼ副葬時の品目・位置を保つものと考えられる。副葬品は棺床底面直上ないし僅かに浮いた位置にあった。その分布には二つのまとまりが認められる。一つは棺床東端付近の南側面に位置する豎櫛3点(豎櫛1~3)のまとまりである。いま一つは棺床東端から80~160cmの範囲に分布する玉類を主体としたまとまりである。後者のまとまりには、その東端北寄りに豎櫛1点(4)が位置し、西端南寄りに勾玉・白玉が密集する部分(玉15~27・30~32)があり、両者は約70cm離れている。この状態は、豎櫛4を被葬者の頭に挿したものの、勾玉・白玉密集部を左腕に装着した腕飾りと想定すると理解しやすい。また、この左腕飾りと想定される玉類密集部の北側にも玉類の集中がみられ(10~14・29)、これは右腕飾りの可能性があろう。管玉はやや散在的だが東側に集まる傾向をみせ(1~4)、首飾りの一部として捉えられるかもしれない。以上の様相から、この棺の被葬者は、豎櫛4の辺りに頭部を置き、西側に脚を伸ばした埋葬状態をとっていたと推定する。従って、棺東端部の豎櫛3点は装身されたものではないことになる。

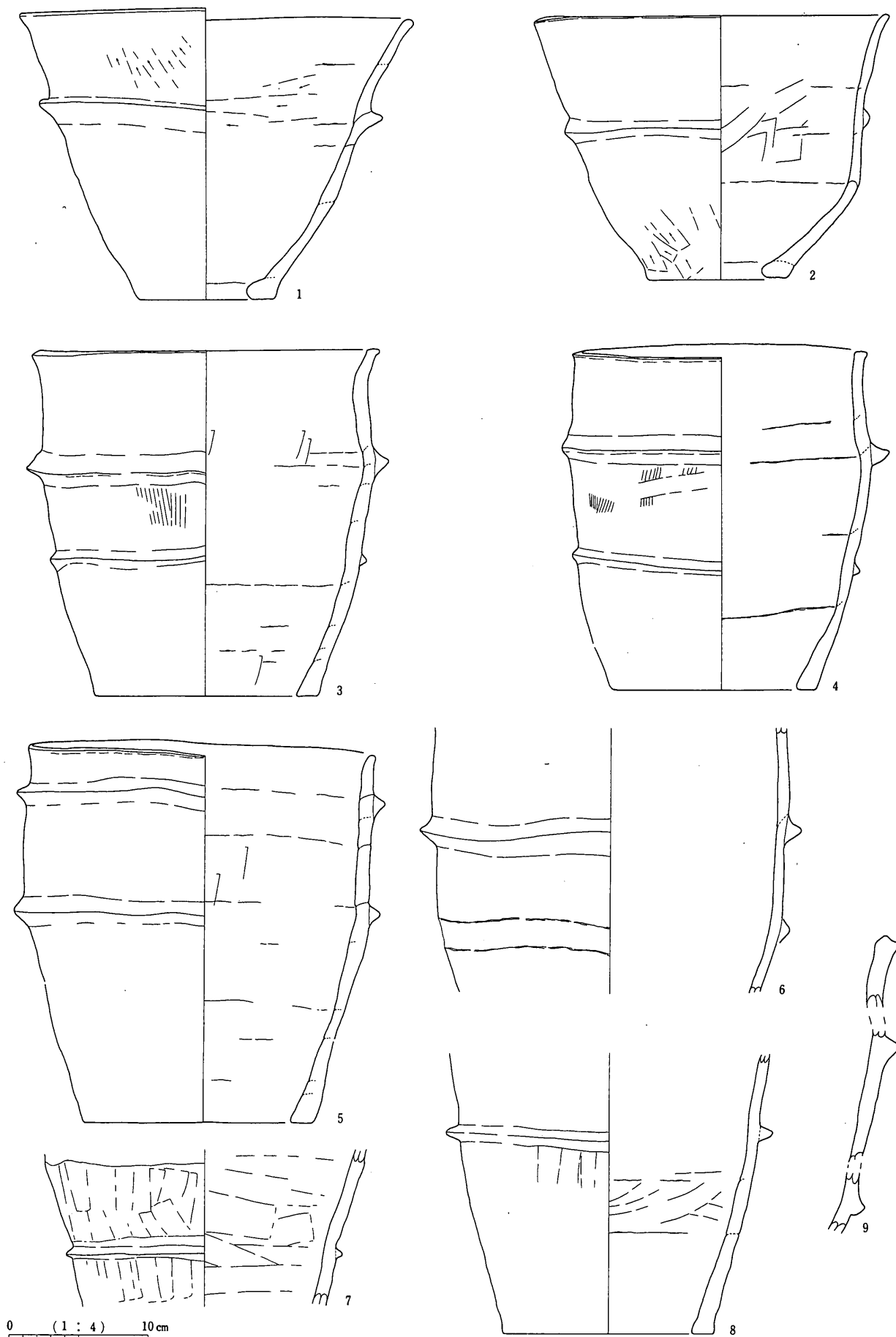


図228 2号墳 埴輪(1)

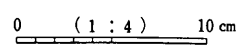
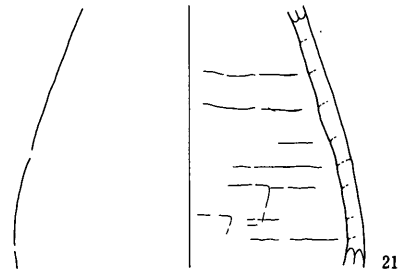
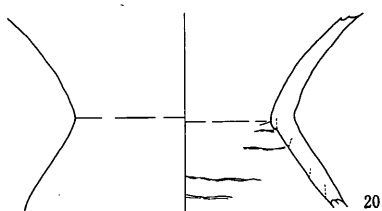
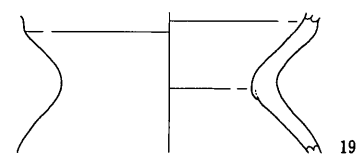
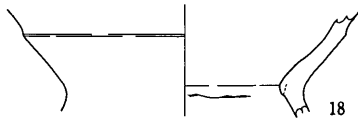
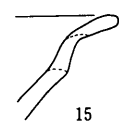
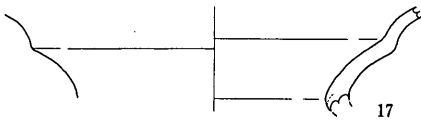
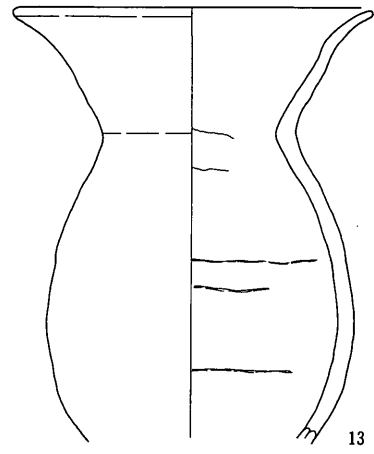
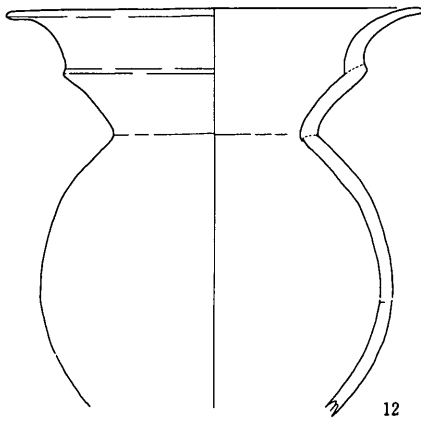
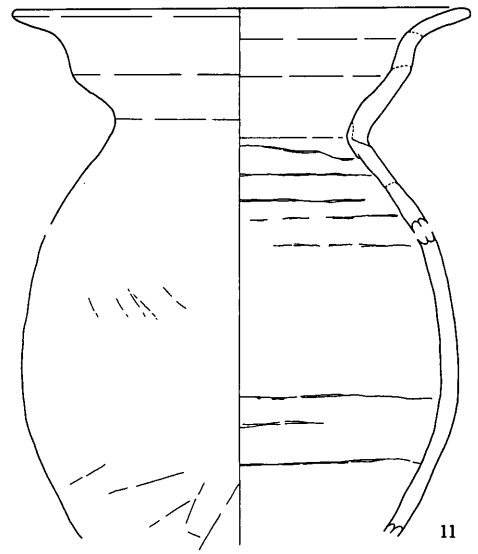
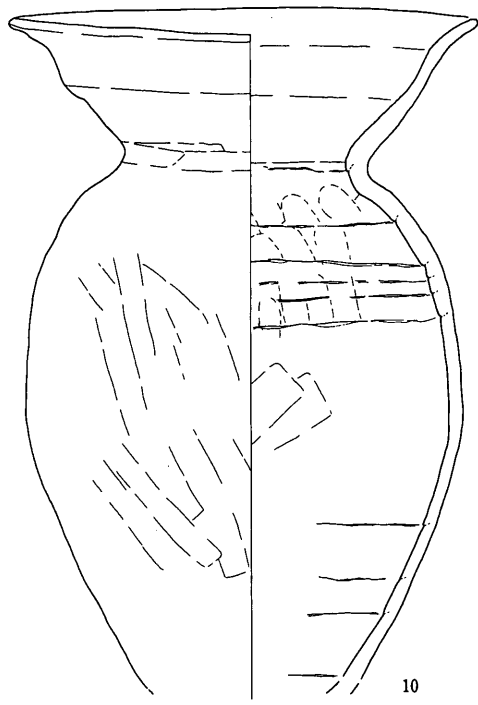


图229 2号墳 埴輪(2)

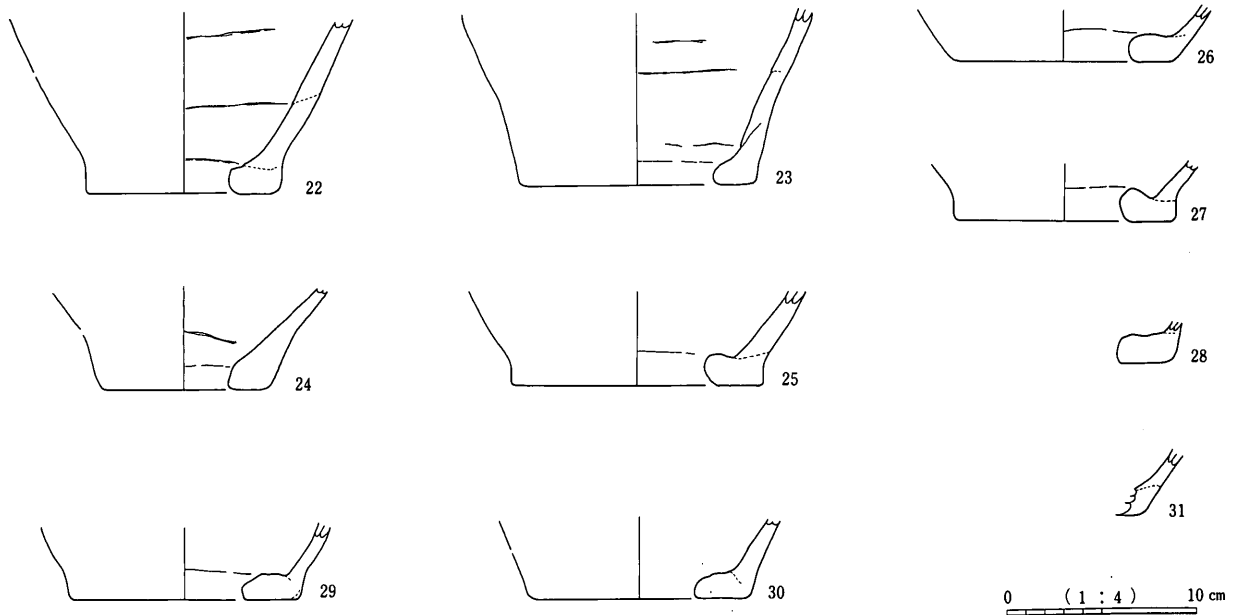


図 230 2号墳 埴輪 (3)

3 出土遺物

(1) 埴輪

埴輪は円筒埴輪と壺形埴輪がある。円筒埴輪のうち5個体が全体器形を復元できた。壺形埴輪については全形が判明するものはないが、底部を除く器形が復元されたもの3個体を数える。埴輪の胎土は金雲母片を多く含み、土師器との区別は比較的容易だが、壺形土器の一部に、埴輪と共通する胎土をもつものがある。また、赤色塗彩を施したものが目立つ。色調は、器表面は橙褐色～灰黄色に焼き上がっているが、器壁内部は灰黒色を呈しており、摩滅等により内部の灰黒色が露呈する場合が多い。

円筒埴輪 (図 228)

特殊な形態の小形埴輪であるが、新井原2号墳では、以下2類としたものに類似する形態の埴輪が出土している(渋谷1996、風間1998)。突帯数と器形から2大別3細分する。透しをもつ破片が1点ある。

1類：1条突帯のもの (1・2)

確認できた器形は、径の小さい底部から口縁端部まで逆ハ字状に大きく開いて立ち上がる器形に限られる。円筒と呼ぶのは適当でないかもしれない。扁平な輪状粘土紐外縁部の上から底部を成形してゆく手法を採り、従って底端部内縁は内側に突出気味の形態となる。口縁部は僅かに外反し、端部をまるくおさめる。突帯は断面三角形形状を呈し、貼り付け突帯(2)と擬口縁突帯(1)がみられる。

2 a類：2条突帯で口縁部(上段突帯から上)が長いもの(3・4・6)

基底部(下段突帯から下)は内彎的に底端部へと至り、下に向かうにつれ器厚を増すが、底端部内縁は突出しない。口縁部は直立した後に外反し、口縁端部は面取り状をなす。突帯は断面三角形形状を呈する貼り付け突帯である。3・4の下段突帯は幅狭く矮小なものである。6の下段突帯は剥落痕からみて矮小形態でないことは確実であろう。3・4の外面には粗いタテハケが観察できる。

2 b類：2条突帯で口縁部が短いもの(5)

基底部は長く、直線的にすばまって底端部へと至る。2 a類同様、基底部は下に向かうにつれ器厚を増すが、底端部内縁は突出しない。口縁部は直立し、口縁端部はまるくおさめている。突帯は断面三角形形状を呈する貼り付け突帯である。6は上半を欠くが基底部の長さから本類に属するものと考え

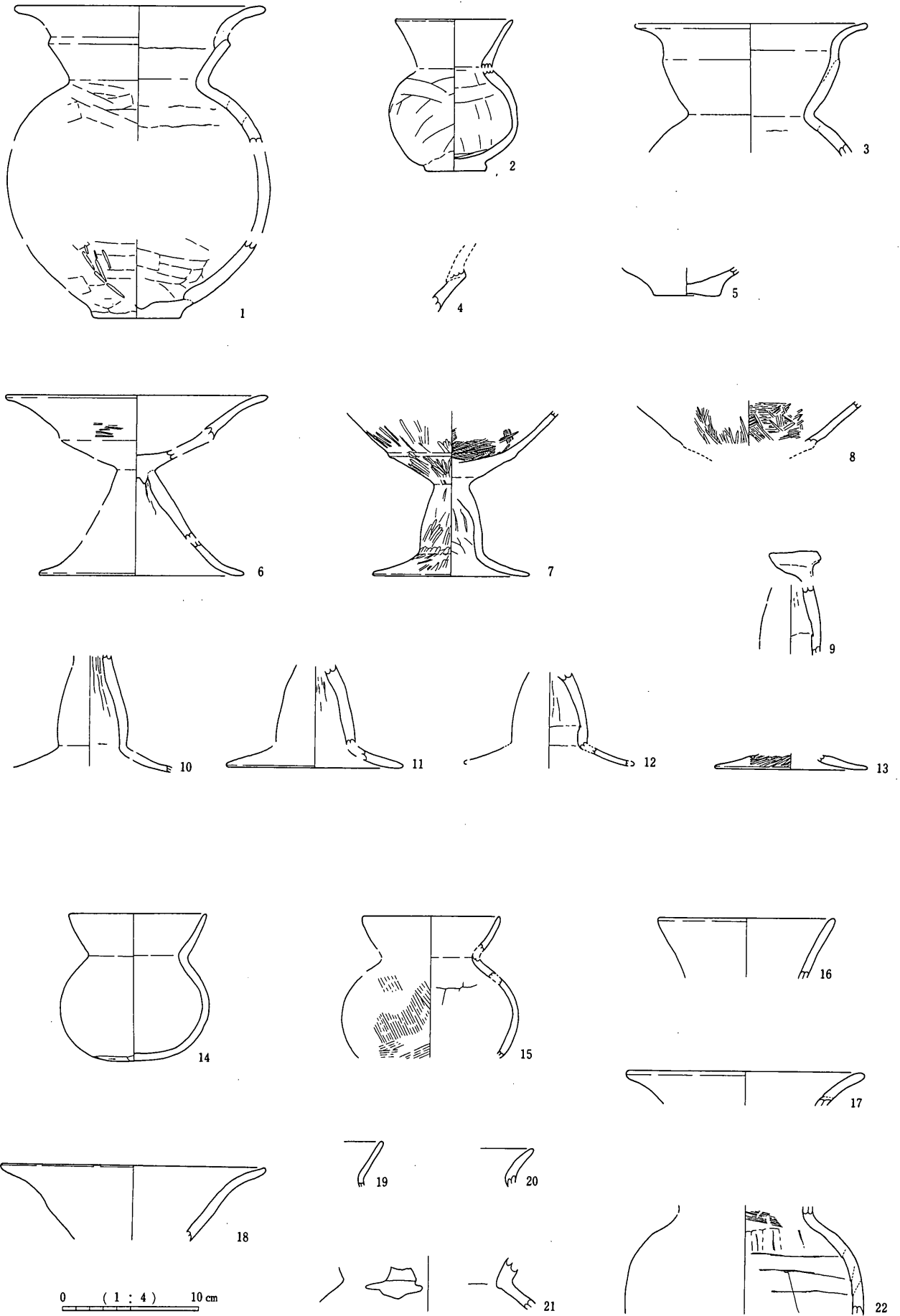


图 231 2号墳 土器 (1)

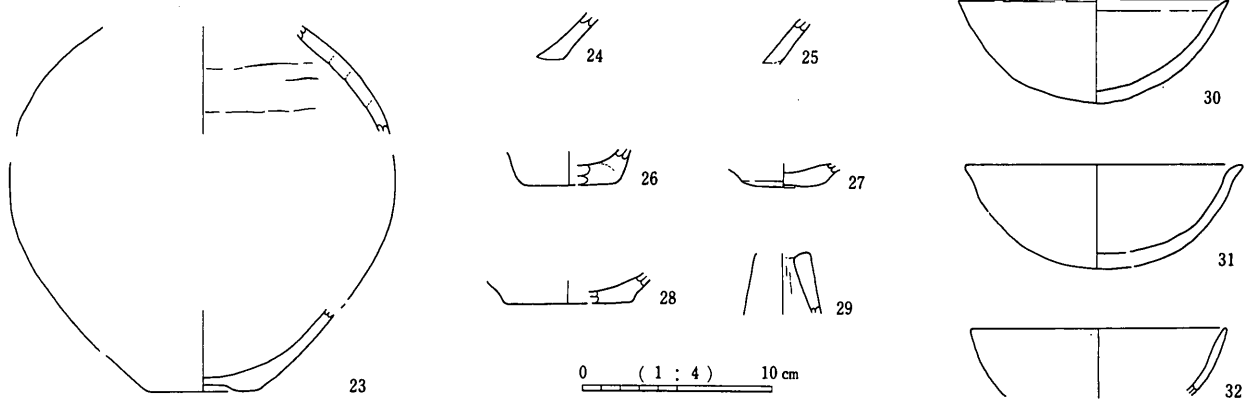


図 232 2号墳 土器 (2)

たい。とすれば、本類も下段突帯が矮小形態を取る資料を含むことになる。9については2 a類、2 b類いずれとも判断し難い。

壺形埴輪 (図 229)

胴部形態から2類型を認める。全体形が判明する例はない。

1類：長胴を呈するもの (10・11・13・21)

胴部は中位に最大径がある。口縁部は大きく外反し、有段口縁をなすもの (10・11) と段部はないが口縁上部を屈曲させるもの (13) がみられ、これにより細分可能と考えるが、資料状態が少ないので可能性の提示にとどめる。有段口縁の段部の稜は鈍く、口縁端部はまるくおさめている。

2類：球胴を呈するもの (12)

胴部は中位に最大径がある。口縁部は有段口縁をなして大きく外反し、段部の稜は突出する。口縁端部はまるくおさめる。

14～20は口縁部～頸部の破片で、15・17～19は有段口縁のもの、20は口縁部の長さから13に近い形態の可能性がある。

底部破片 (図 230)

扁平な輪状粘土紐外縁部の上から底部を成形することで、底端部内縁部が内側に突出するものが多い。22・24は底径が小さく、23・25～30は底径が大きい。しかし、底径が大きいものでも、円筒埴輪2類よりは小さい。おそらく、壺形埴輪の底部が大部分を占めるものと考えられるが、円筒埴輪1類の底部も含まれている可能性がある。

(2) 土器 (図 231・232)

土器はすべて土師器である。主体部の陥没土層中から出土したもの (1～13) と墳丘裾から出土したものの (14～32) がある。器種は壺・高坏・坏がみられる。

壺 (1～5・14～28)

主体部出土の壺は、いずれも埴輪に類似した胎土・焼成状態を示し、赤色塗彩されている。器形は、有段口縁を呈する大形のもの (1・3～5) と、単純に外反する口縁をもつ小形壺 (2) がある。底部は突出した形態である。

墳丘裾出土の壺は、赤色塗彩を施したもの (16～18・21・22) と、そうでないものがある。前者は埴輪に似た胎土・焼成状態を示し、いずれも破片で全体形を窺い知ることができる例はないが、直線的に伸びる長めの口縁部 (16)、外反する長い口縁部 (18) の他、有段口縁を想定できるもの (17) がみられる。赤色塗

彩されない壺は、やや扁球形の胴部に若干内彎する単純口縁をもつ小形の壺(14・15)、球形胴部で凹底状の底部をもつ大形のもの(23)がある。23は胎土に粗い石英粒を多量に含み、色調も赤褐色を呈しており異質である。

高坏(6~13)

高坏は主体部の陥没土層中から多く検出された。全体形が判明する例が少ないため、各部位に分けてその形態について述べる。

坏部は、底部と口縁部の境に稜をもつ形態を呈し、口縁が外反する1類(6)、口縁が直線的に伸びる2類(7・8)に分類できる。7の坏部外面の稜はやや段を成している。

脚部は、ハ字状に開く形態のa類(6)、下膨れの柱状部に大きく開いた裾部を付けた形態のb類(7・9~13)に分類される。

6は坏部1類と脚部a類が組み合い、これをA型とする。7は坏部2類と脚部b類をもち、これをB型とする。8・9・11~13は、7と酷似した胎土・色調を有しており、B型の器形を取る可能性が高い。A型は確認できる資料が6の1点のみであり、本古墳出土の高坏の主体はB型といえよう。10は6と同様な胎土・色調をもち、脚柱状部が若干細身で長さも長いように見受けられることから、2類坏部とは組み合わないことも考えられる。なお、6の坏部と脚部の接合は、脚内に挿入したホゾ状の突起によって為され、ホゾの下端部は指頭で押し潰されている。10も剥離痕からホゾを用いた接合方法を取るものと推定される。

坏(30~32)

半球形を呈する体部をもち、口縁端部は外反する。

(3) 玉類(図223)

総数50点が出土した。内訳は管玉9、勾玉20、白玉21点である。原位置で検出したものと棺内覆土の篩別・水洗で検出したものがある。なお、巻末掲載の玉類計測表では、種類を問わず、穿孔方向で「長さ」を計測し、それに直交する方向で「長径」「短径」を計測している。

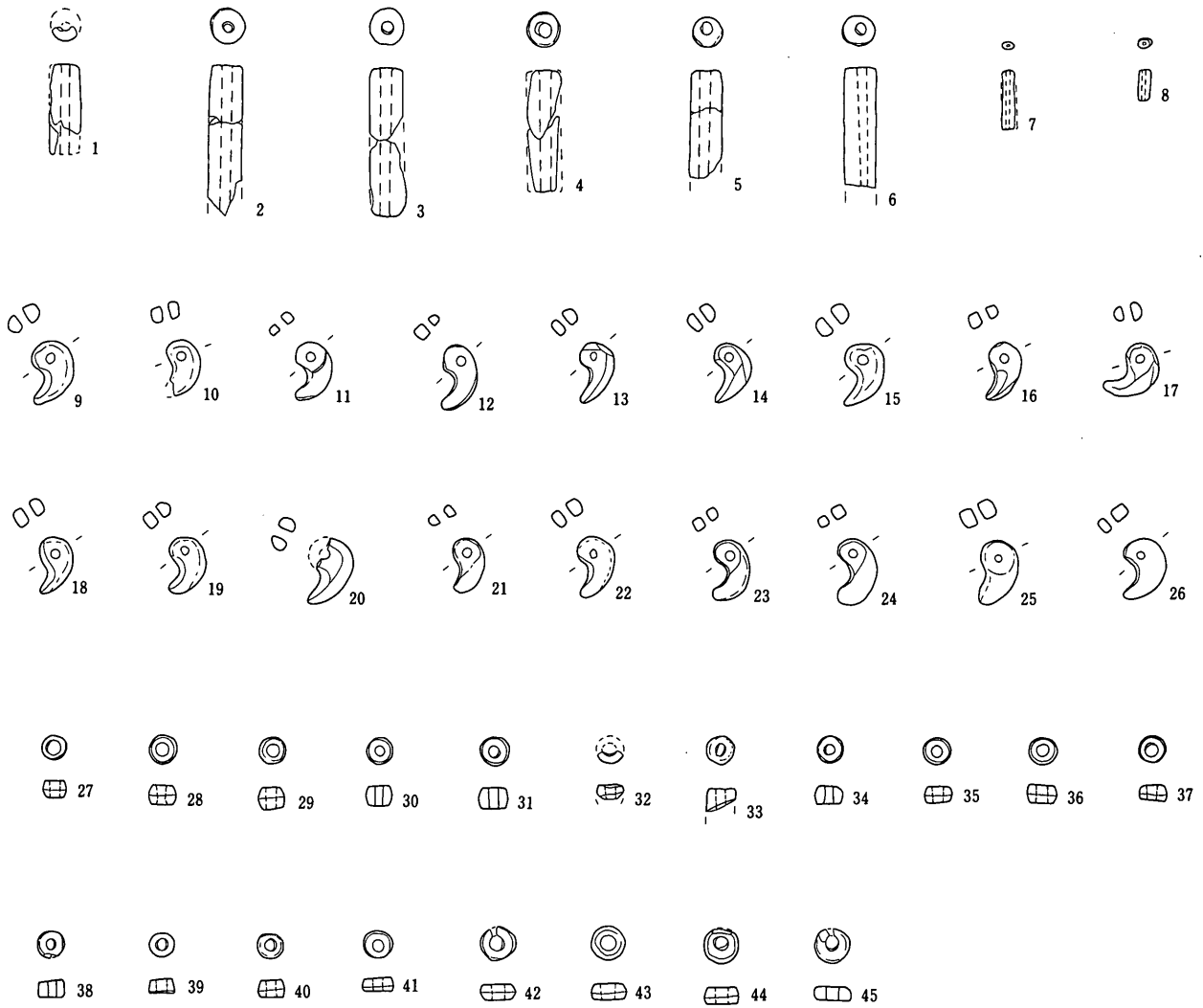
管玉(1~8) 1~6は緑色凝灰岩製である。風化が進行し、非常に脆くなっている。穿孔方法は確認できる3点はいずれも片面穿孔。7・8は極細のもので、或いは人工物ではないかもしれない。

勾玉(9~26) すべて滑石製。腹部は半円形を呈する。尾部は尖った形状のものが大部分を占めるが、丸く太いものも一部みられる。

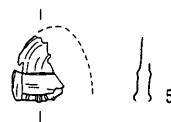
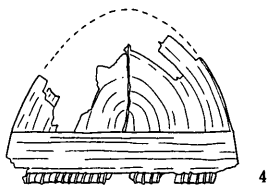
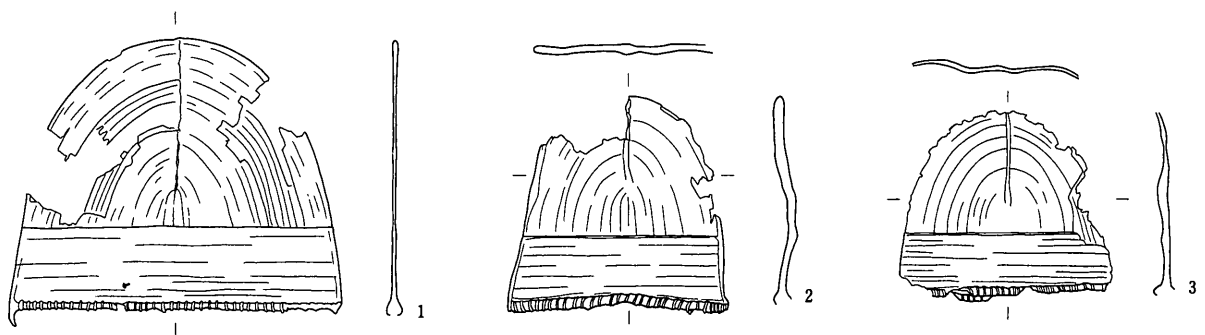
白玉(27~45) 緑色凝灰岩製の1点を除き、すべて滑石製である。厚みのあるもの、薄いもの、その中間的な厚さのものがある。穿孔はすべて片面穿孔で、孔面の研磨は、1点が片面、残りは両面を研磨している。側面形状は、鈍い稜をもつ算盤玉状のA類が主体を占め、側面が角張り気味の棗玉状を呈するB類(30・31・34・45)と、側面が直線的な円筒状のC類(33・38・39)が若干ある。側面の研磨方向は、穿孔軸に対して斜め方向に研磨するものが大部分で、A類で横方向(穿孔軸に平行方向)に研磨するものが3点、B類で縦方向に研磨するものが1点みられるだけである。

(4) 豎櫛(図233)

5点検出された。大形のもの(1)、中形のもの(2~4)、小形のもの(5)がある。いずれも歯の部分消失する。棟部についても、櫛本体は腐朽しているが、漆膜に残された痕跡により、構造を窺うことができる。それについては巻末の遺物観察表に委ねる。1~3は棺内東端部、4・5は中央寄りの玉類集中部付近で出土した。



0 (1:1) 2cm



0 (2:3) 5cm

図233 2号墳 玉類・豎櫛

第3節 東平1号墳

1 墳丘

(1) 築成

1号墳は円墳である。墳裾を取り巻いてテラス状平坦面が巡っている。墳丘規模は、主体部主軸方向の墳丘斜面からテラス面への傾斜変換点（墳裾）で測って直径16.7 mである。これが企画上の直径と考えられる。高さは北側で2.0 m、南側で2.5 mを測る（図218・234）。

主体部主軸に直交する方向では、西側は砥沢川の急崖に面しているため崩壊が進行し、墳丘端は消失している。東側では墳丘端は、見かけ上、2号墳によって切り取られたような形となっている。北側と南側で検出された墳裾ラインに合致する直径16.7 mの円を描くと、2号墳墳丘内に入り込んでしまうが、2号墳下の旧地表面には墳端を画す溝や地形改変は認められない。1号墳が先に築かれたとするなら、東側に高まる自然地形と墳丘を切り離す溝が見つかる筈である。同様に、2号墳が後に築造されたとする、2号墳の東には十分な余地があるにもかかわらず、わざわざ1号墳と重複するほど接近させたのも不自然である。以上の状況から、1号墳の築造が2号墳に遅れ、1号墳の東側墳形の不自然さは、砥沢川の崖と2号墳の間の狭い余地に直径16.7 mの墳丘を強引に築こうとしたために生じた変形と理解する。

墳丘は上部を盛土、下部は地山を削り出すことによって築成している。盛土は2号墳に比べて厚く、最大80cmが残存する。基本的に、1：小礫を多く含んで非常に硬く締まる黄褐色土、2：礫をあまり含まず締まりがあるやや砂質の黄灰褐色土、3：礫を含まない軟質かつ粘質の赤褐色～橙褐色土、の3種の土層を交互に積み重ねてゆく。東西断面（1A1-1A2断面）をみると、西側は、硬く締まりの強い1・2種土層を主体にしており、積み方は、まず西端部に小範囲の盛土を施し、次いでそれを覆う広い範囲の盛土を重ね、これを交互に繰り返して盛土上面を水平に近付けて行く（13～19層）。水平が達成された後は、今度は西側を土手状に高く盛り上げるような積み方が為されている（1・2・5・7・9～12層）。急崖に面した西側部分の崩壊防止と強度保持を強く意識した構築方法といえる（図234）。

旧地形は、2号墳下でみられた東西方向の緩やかな尾根状地形がそのまま続き、砥沢川の急崖に至る。尾根の頂部は墳丘中心を通る。旧地表面上には、盛土下全域に広がる炭化物と焼土の分布がみられた。そして、その中心には壁面・底面が被熱して赤褐色に酸化した1号土坑が位置している（図234）。墳丘築成開始前に地表の草木を焼き払った痕跡として理解されるが、1号土坑の存在は、単なる焼き払いではなかったことを推測させる。

(2) 墳丘施設（図218・234）

墳丘裾の外側にはテラス状の平坦面が巡っている。現状の幅は、最も広いところで2.4 m、最も狭いところで1.4 mを測る。砥沢川の急崖に臨む西側では消失しており、或いは本来的に存在しなかったかもしれない。東側ではやや不明瞭となるが、2号墳の西切離し溝に突き当たるように終わる。テラス面は水平ではなく、若干下り勾配をなしている。

墳丘斜面下部からテラス面にかけて比較的小振りの緑色凝灰岩の角礫が散在しており、特に南西部に多かった。しかし、人為的に据え付けた状況を示すものは全く認められなかった。地山にはもともと緑色凝灰岩礫が多く含まれており、南西部には岩盤の露出が顕著に認められる。以上の事実から、1号墳は葺石をもたないと考えてよいだろう。

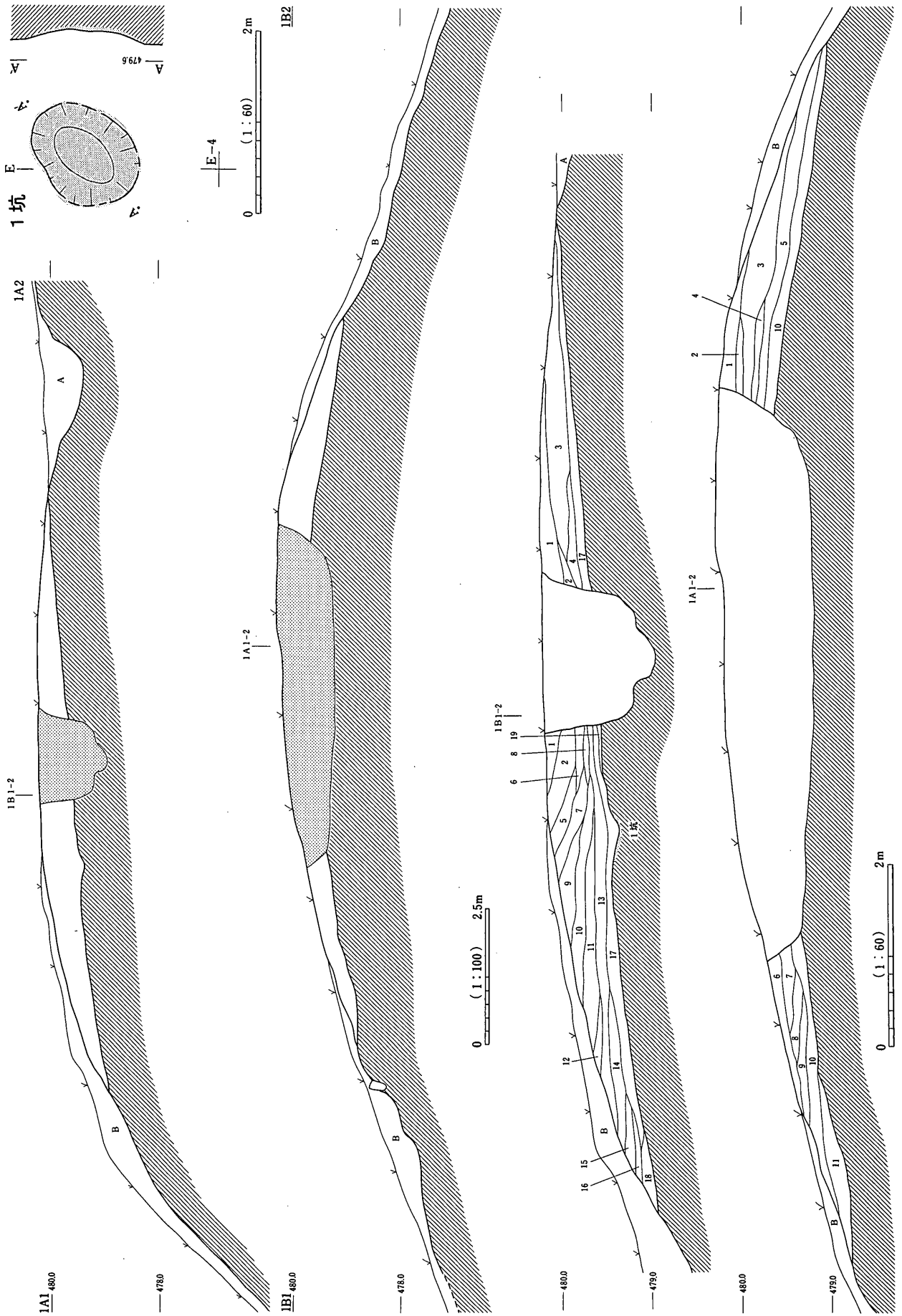


图243 1号墳 断面図・1号土坑

1号墳墳丘土層

2号墳溝覆土：A

流土：B

盛土：南北1～11、東西1～19

南北断面（1B1-2）

- 1：赤褐色土（下部は、ところにより10cm前後の小礫を含む。また3～5mmの黄色あるいは灰白色の小礫も疎らに含む。上部には礫は殆ど含まれない）
- 2：暗赤褐色土（1層と似るが、小礫がほぼ一様に入る。1層より黒色が強い）
- 3：明黄褐色土（灰色・黄色・淡緑色の30mm以下の小礫を多量に含む）
- 4：暗赤褐色土（礫殆どなし。他層に比べやや粘性あり。3層に似る。）
- 5：暗黄灰褐色土（3～5mmの黄色・灰白色の小礫を含む。締まり弱く、ぼろぼろする）
- 6：淡赤褐色土（黄白色の10mm前後の小礫を疎らに含む。石英粒を他層より多く含む）
- 7：明赤褐色土（締まり・粘性あり。5mm前後の風化礫が散見）
- 8：にぶい黄灰褐色土（東西断面7層に似るが、やや灰色強い）
- 9：暗黄褐色土（灰黒色土ブロックが入る。3～5mmの黄色の小礫を疎らに含む）
- 10：黄褐灰色土（5～10mmの黄色の小礫をかなり多く含む。また、黒褐色土ブロックが入る。東西断面17層と対応）
- 11：暗赤褐色土（雲母を含み、地山土に似る。粘性あり。白色の小礫を疎らに含む。東西断面18層に似る）

東西断面（1A1-2）

- 1：黄褐色土（3～5mmの凝灰岩と思われる小礫を少量含む）
- 2：黄褐色土（1cm前後の凝灰岩小礫を少量含む。1層より暗い）
- 3：暗赤橙褐色土（礫少ない）
- 4：橙褐色土（雲母を含み、粘性あり。中心部は黒橙褐色土で3層に似た感じだが、本層の一部として扱う）
- 5：にぶい灰黄褐色土（5mm以下の小礫含み、締まりあり。黄色と灰色のブロックだが、それほど顕著でない）
- 6：にぶい黄灰褐色土（5層に似るが、灰色土卓越）
- 7：暗赤灰褐色土（礫は少ない。ブロック的でない。3層に似るが橙色が弱い）
- 8：明黄褐色土（小礫を多く含んで硬く、やや粘性あり）
- 9：明黄褐色土（8層と同組成。ただし8層よりやや軟らかい）
- 10：黄褐灰色土（灰色と褐色のブロックで灰色が卓越。硬く締まる）
- 11：明黄褐色土（9層と同じ）
- 12：黄褐色土（5層に似るが、やや黄色が強く、礫は少ない）
- 13：黒灰黄褐色土（黒灰褐色と濃黄褐色のブロック。黒灰褐色卓越。やや粘性あるが締まりに欠ける。礫あまりなし。やや赤茶色を帯びる）
- 14：明黄褐色土（9層と同じ）
- 15：にぶい黄灰褐色土（5層に似るが、やや灰色強い）
- 16：にぶい黄灰褐色土（15層と殆ど同じ。やや黄色強い）
- 17：暗黄灰褐色土（暗灰色・灰褐色・濃黄褐色・橙褐色のブロック土。前2者卓越。ブロックは1cm位が主体。南北断面10層と対応）
- 18：橙灰褐色土（やや暗い色調。雲母片含む。礫少なく、粘性あり）
- 19：明濃黄褐色土（8層の基調土である。粘性あり。硬く締まる）

(3) 遺物の出土状況 (図235)

墳丘斜面下端からテラス面にかけて埴輪片・土師器片が出土した。その分布は散在的であり、ある程度のまとまりを示すのは南東部と北西部の一部に限られる(図235)。数量的にも少ないが、1号墳は周溝をもたず、テラス下方の斜面も比較的急であるため、その大部分が流出した可能性は否定できない。北西と南東の集中部でもテラス面から浮いて出土したものが相当数あり、上方から転落してきた状況を示している。墳丘表面には埴輪を埋設した痕跡は認められないので、2号墳同様、墳頂部に置き並べてあったものと推測される。

注目すべきは、盛土下の旧地表面で円筒埴輪片が2点検出されたことである。その特徴は2号墳の埴輪に酷似しており、出自は2号墳以外は考えられない。前に、2基の選地状況・位置関係、築造に伴う地形改変の状況から、2号墳の築造が先行することを推定したが、それを裏付ける資料といえよう。

2 主体部

(1) 墓壇 (図236)

墳頂平坦面のほぼ中央に位置する。平面形状は、隅丸長方形に近く、北辺はほぼ直線的であるが、南辺は丸い形状を呈する。西辺北寄りはやや不整である。検出面での規模は長軸6.77m、短軸1.8mを測る。主軸(長軸)はN-32°-Eを向き、墳丘が占地する尾根筋に直交する。墓壇は盛土を掘り込んでつくられ、横断面形は逆台形を成す。検出面からの深さは約1mである。墓壇壁は、東西長壁(側壁)は底面から直線的に約80度に立ち上がるが、南短壁は40度と傾斜が緩く、北短壁は彎曲して立ち上がる。

(2) 棺と立石 (図236)

墓壇底の中央には木棺を設置する棺床部がさらに掘り込まれる。棺床部は、幅64cm、深さ26cm前後の断面U字形を呈し、長さは5.42mを測る。底面北端レベルは南端より15cm程高い。両端部は幅広く掘り込まれ、その部分には立石が設置される。

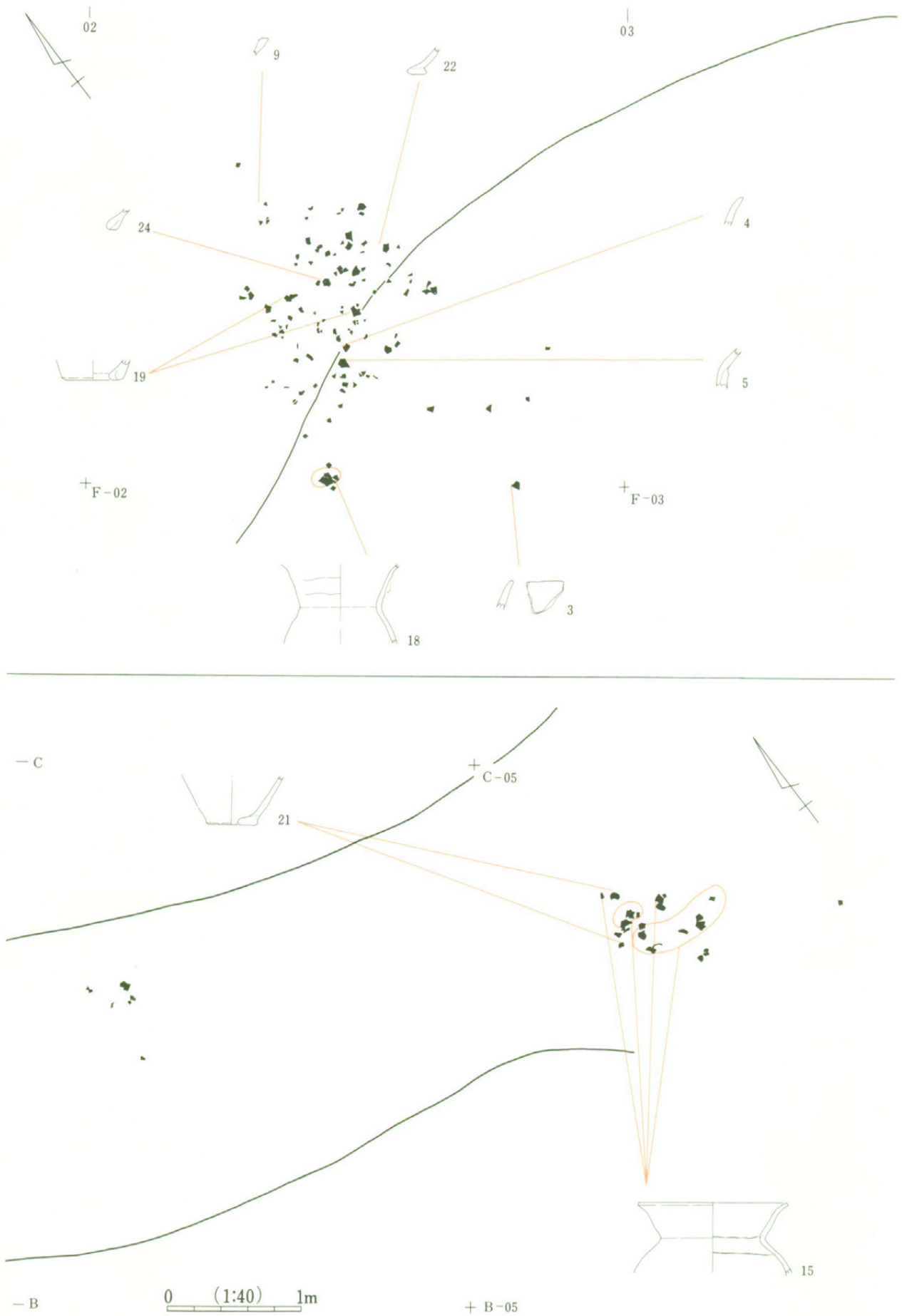


图 235 1号墳 遺物出土状況(北裾・南裾)

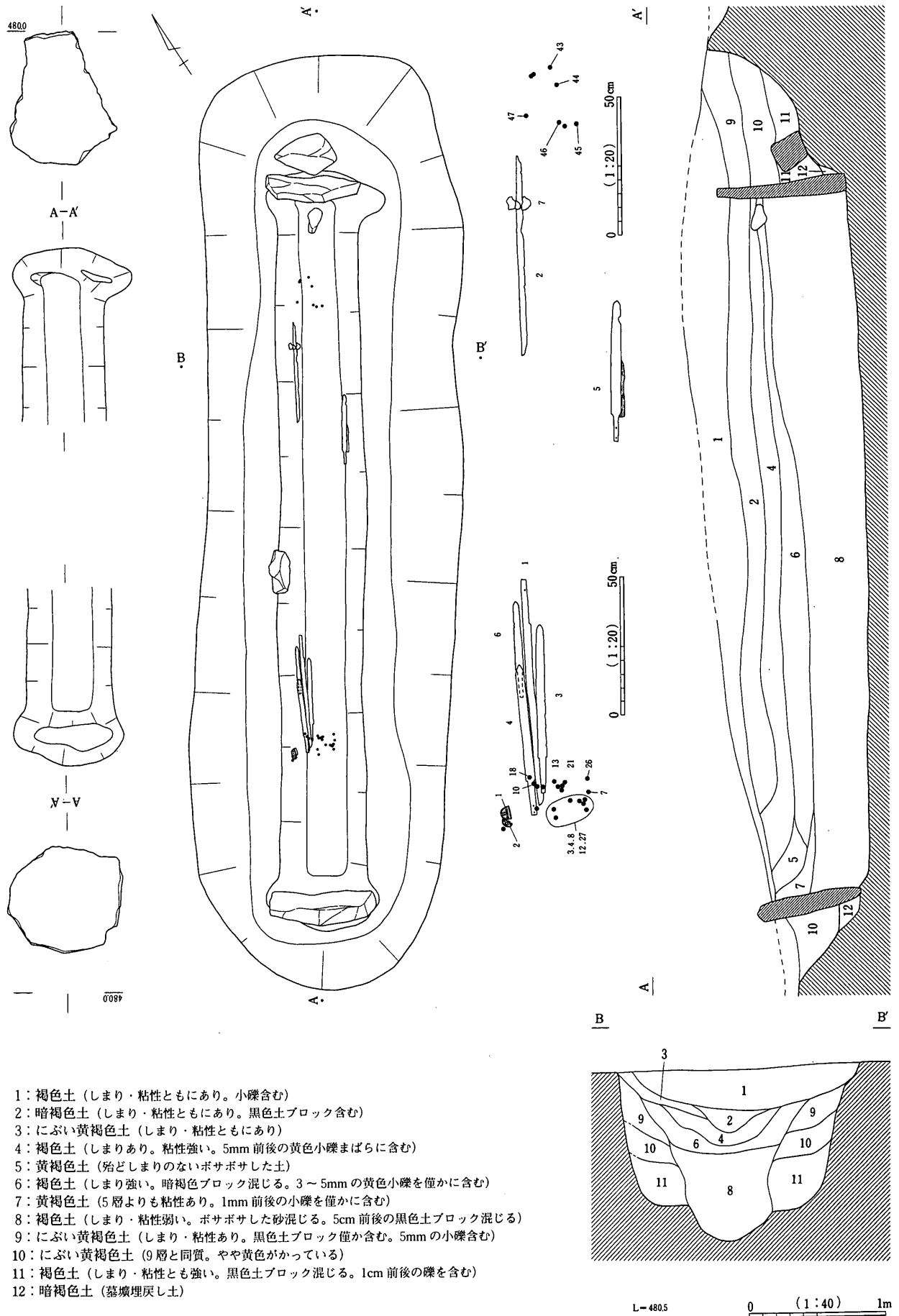


図 236 1号墳 主体部

立石は緑色凝灰岩の大形板状石を立てたものである。北立石は幅79cm、高さ98cm、厚さ7cmの大きさを持ち、外側に40×30cmの角礫を1個伴う。支えであろうか。南立石は幅85cm、高さ78cm、厚さ10cmと北立石に比べ厚く幅広だが低い。内面に幅2cm程の1方向の畝状を呈する工具痕が全面に観察される。

木棺は腐朽し、全く遺存していない。しかし、棺床の形状および土層断面に現れた痕跡から考えて、外径64cm程の割竹形木棺を想定するのが妥当と思われる。両立石間の距離5.07mが木棺の長さをほぼ示すと考えてよいだろう。棺小口の構造は明確ではない。

木棺設置後の墓壙内は黄褐色土・褐色土の埋め土が、2～4層に施され(9～12層)、墓壙を埋め尽くしている。なお、木棺の腐朽に伴って棺内に陥ち込んだ土層上部(1～4層)から土師器壺・高坏の破片が散在的に少量出土した。

(3) 副葬品の出土状況 (図236)

副葬品はほぼ副葬時の品目・位置を保つものと考えられる。副葬品は棺床底面から僅かに浮いた位置で検出された。その分布には2群のまとまりが認められる。一つは棺北寄りに配置された直刀1(2)・剣1(5)・および小形竖櫛8点(竖櫛43～47)から成る一群である。いま一つは棺床南寄りにまとまる直刀1(1)・剣3(3・4・6)・および大小40点以上の竖櫛から構成される一群である。なお、棺内覆土の篩別・水洗を実施したが、玉類等その他の種類の副葬品は検出されなかった。

北群は、棺北端部に向かって左側の棺側に、直弧文刀装具を伴う直刀1本が切先を南に向けた状態に置かれている。その北側には竖櫛のまとまりがあり、やや不整だが径20cm程の円周状に並ぶ様相をみせる。右側の棺側には、直刀からやや南にずれた位置に、切先を北に向けた剣が1本配される。

南群は、左側の棺側に4本の刀剣が寄り集まっている。配置は、1本の直刀を中央に、その右側に剣1本を置き、左側に剣2本を縦に連ねて配する。左側の剣2本は、北に位置する短剣の茎に、南側の剣の切先を重ねた状態である。北群同様、直刀は切先を南に向け、剣はいずれも北に向けている。さらに、刀剣群の南端からその右側の棺中央にかけて小形竖櫛が密集する。大形竖櫛2点は、小形竖櫛密集部から若干離れた棺側のやや上部に位置している。

その配置・内容から直刀が副葬品群の中核を成すことが理解されるため、直刀の切先方向を重視して、この棺の被葬者は頭位を北側に向けた埋葬状態を取っていたことを推定する。ただし、その棺内における位置については推定の材料が乏しい。北群の竖櫛集中の辺りに頭部を置いていたか、或いは、内北両群の間すなわち棺中央部に横たわっていたか、そのどちらかの可能性が高いと考えておきたい。

3 出土遺物

(1) 埴輪 (図237)

埴輪は円筒埴輪と壺形埴輪がある。全体器形が判明するものはなく、数量的にもさほど多くはないが、2号墳の埴輪に類似した特徴・内容を示している。胎土や焼成状態、赤色塗彩を施したものが目立つ点も共通する。

円筒埴輪 (1～14)

1～4は口縁部の破片である。いずれも端部をまるくおさめている。1は長くやや外傾度が大きいので、2号墳の1類の器形となるか。

5～12は突帯部の破片。5は上段突帯と推測されるもので、口縁部が大きく外反する形勢を示す。6～8は突帯に縦方向の穿孔または刻みを施したもの。これら5～8の特徴は2号墳の円筒埴輪にはみられないものである。突帯は断面三角形の貼り付け突帯が殆どであるが、不明確ながら、5・9は擬口縁突帯の技

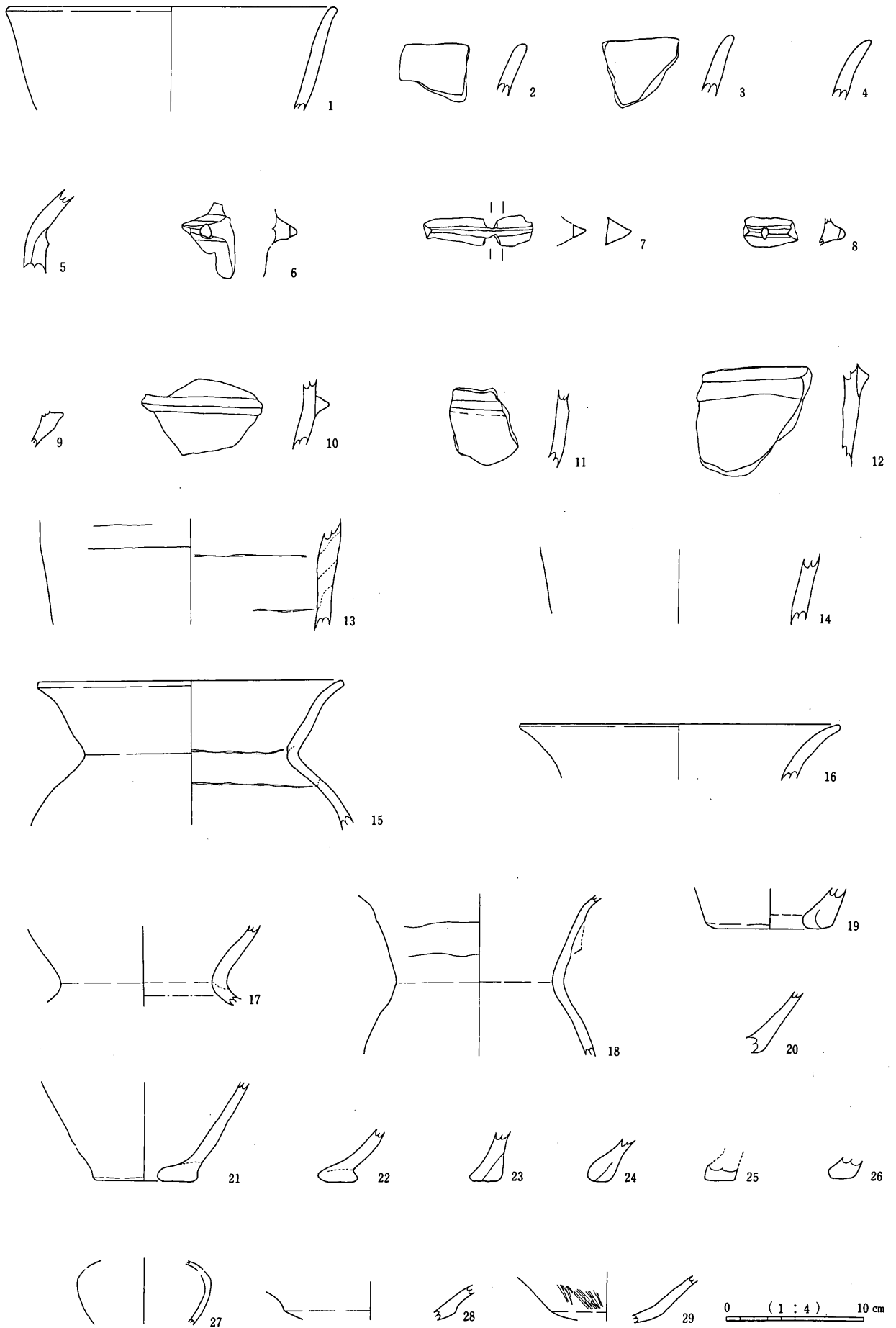


图 237 1号墳 埴輪・土器

法によることが想像されようか。

13・14は胴部破片で、旧表土上面で検出されたものである。

壺形埴輪 (15～18)

15は上部を外に屈曲させる口縁をもつ。口縁下部は微妙な膨らみをみせている。17は上部を欠くが、有段口縁を成すことが明白で、16もそうした形勢を示す。18は長く伸ばした単純外反の口縁部に突帯を貼り付けて段部を形成するもの。胴部は細身の長胴形態であろう。

底部破片 (19～26)

扁平な輪状粘土紐外縁部の上から底部を成形することで、底端部内縁部が突出するもの(21・22)、基底部内面ラインがすんなりと底端部に至るもの(19・20・23～26)がみられる。19・21は底径の小ささや基底部立ち上がりの形勢から、壺形埴輪あるいは円筒埴輪1類の底部であることが考えられよう。23は円筒埴輪の可能性が高い。

(2) 土器 (図237)

土器はすべて土師器で、主体部の陥没土層中から出土したものと、墳丘裾から出土したものがある。器種は壺・高坏があり、図示したのは墳丘裾から検出されたものである。

壺 (27・28)

27はやや肩が張る扁球形の胴部をもつ小形壺。28は有段口縁壺の段部である。

高坏 (29)

坏部は底部と口縁部の境に鈍い稜をもつ形態を呈する。口縁部は僅かに外反する。

(3) 刀剣 (図238)

総数6本が出土した。

直刀 (1・2)

1号刀 (1) 切先を僅かに欠損する。刀身は平棟平造で断面形三角形を呈し、刀身関寄りから茎尻にかけて僅かな内反りを示す。関は撫角に6mm切れ込む片関である。茎は関部から茎尻に向かって僅かに細まり、茎尻は隅切り尻か、直線的な尻(一文字尻)の角が欠損したものか判断がつかない。図238では、一文字尻として図化してある。茎尻付近に目釘穴が1孔観察される。銹化により塞がりかけているため、直径は明確でないが、3mm程と思われる。

2号刀 (2) 刃部をとところどころ欠損する。刀身は平棟平造で断面形三角形を成す。関は直角に3mm切れ込む片関である。茎は関部から茎尻に向かって僅かに細まり、茎尻は隅挟り尻となっている。目釘穴は観察されない。刀身の切先付近と中ほどに木質が付着している。

2号刀には鞘口装具と思われる漆塗りの木製品が伴う(7)。本体は腐朽しているが、漆膜が良好に残り、装具の側面に施された文様を知ることができる。実測図作成以前に、刀身の保存処理を行ったため、その過程で取り外してしまい、表裏がわからなくなってしまった。文様は、装具の両端からやや内側に、それぞれ1本の直線を引き、その平行2直線間に鋸歯状に斜線を配して、三角形の単位区画をつくる。頂点上向きの単位区画は4区画あり、垂直線文を充填する区画と、上弦の弧線文を充填する区画が交互に配列される。頂点下向きの単位区画も4区画あるが、弧線を組み合わせた左横向きV字状文を充填する区画と、右横向きV字状文を充填する区画が交互に並ぶ。いわゆる直弧文の範疇に入る文様といえるが、文様は各单位区画間で断絶があり、接続性ないし方向性を失っている。

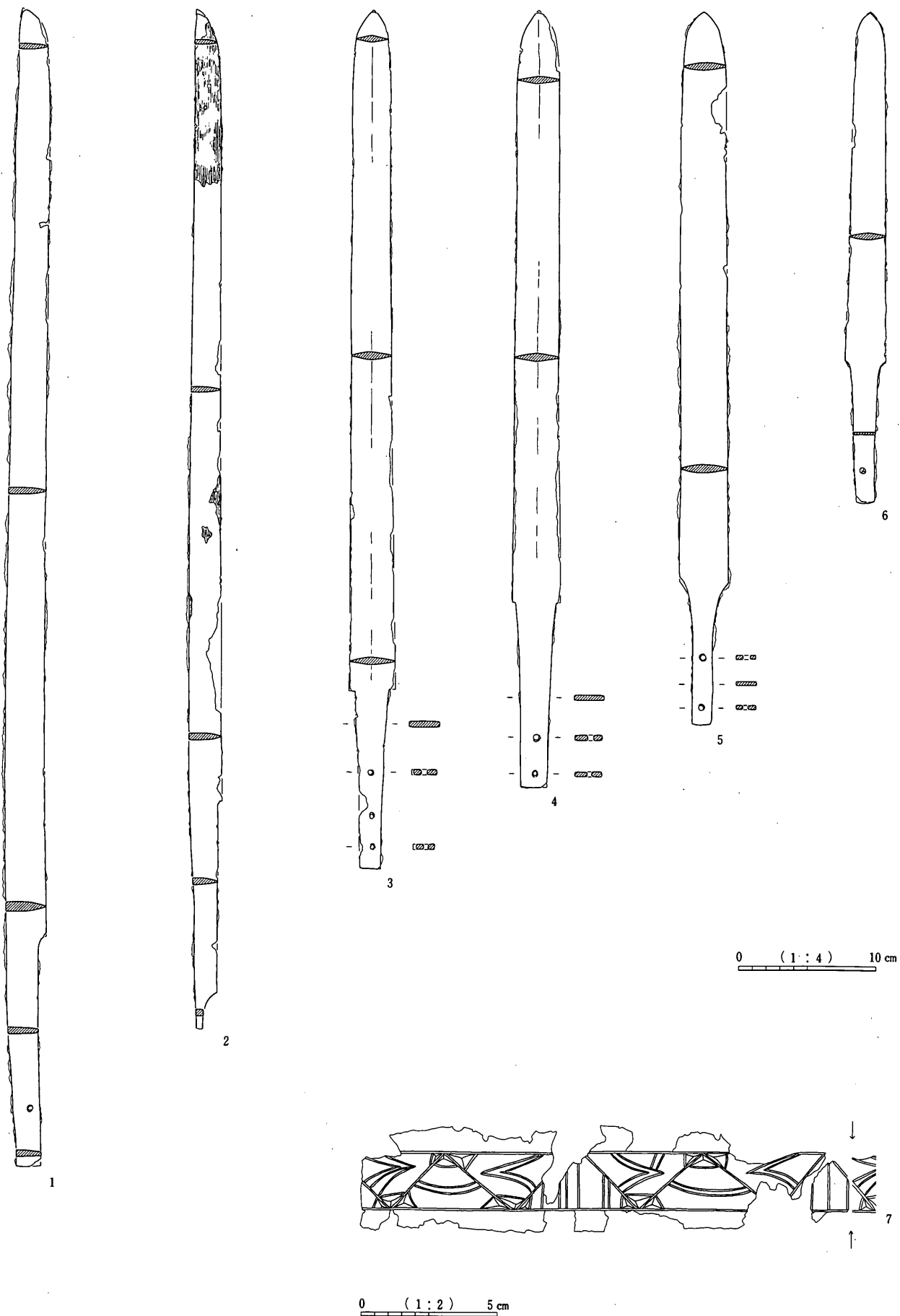


図238 1号墳 刀剣・刀飾具

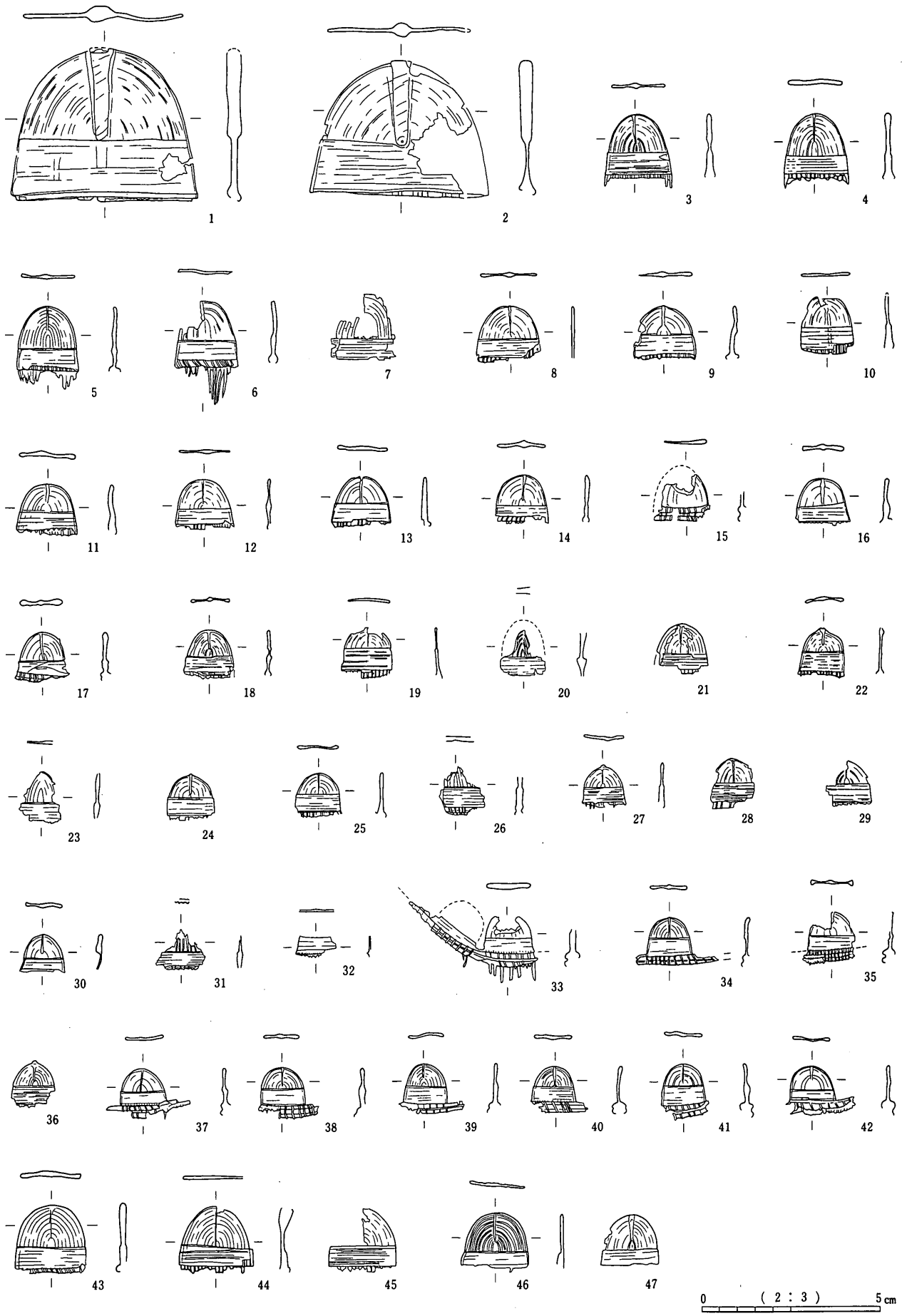


图 239 1号墳 竖櫛

剣 (3～6)

3号剣 (3) 茎側縁を一部欠損する。剣身断面菱形を呈するが、鑄は明瞭ではない。関は両側から直角に4mm切れ込む。茎は関部から茎尻に向かって細まり、茎尻は平坦である。茎中央から茎尻付近にかけて、直径4～3mmの目釘穴を3孔穿つ。

4号剣 (4) 片側の切先フクラ部を欠損する。剣身断面菱形を呈するが、鑄は明瞭ではない。関は両側から直角に4mm切れ込む。茎は関部から茎尻に向かって細まり、茎尻は平坦である。茎尻付近に直径4～3mmの目釘穴を2孔穿つ。

5号剣 (5) 刀身の切先付近を欠損する。剣身は両丸造である。関は両側から撫角に深く切れ込む。茎は、関部から茎中央へ向かって急激に細まり、以後幅を変えず茎尻に至る。茎尻は平坦である。茎中央と茎尻付近に直径4mm程の目釘穴を2孔穿つ。

6号剣 (6) 茎尻の片方の角を欠損する。剣身は関部幅と切先フクラ部幅の差が大きく、先細りの形状を成す。断面は菱形に近いが、鑄は認められない。関は両側から撫角に4mm程切れ込む。茎は、関部から茎尻へ向かって細まり、茎尻は平坦である。茎尻付近に直径4mm程の目釘穴が1孔穿たれ、鉄製の目釘が遺存している。

(4) 豎櫛 (図239)

50点程検出された。大形のもの(1・2)と小形のもの(3～47)がある。歯の部分が遺存するものは少なく、棟部も、櫛本体は腐朽しているが、漆膜に残された痕跡により、構造を窺うことができる。それについては巻末の遺物観察表に委ねる。小形のものには連結櫛がみられ(33～35・37～42)、33は3連以上であることは確実である。34は棟部の左側(図)に突き出した横木の端部が切り取られており、連結櫛の端側に位置するものといえる。大形の1・2は棺内南側の副葬品群、小形のもの南北両方の副葬品群中に含まれる。

(5) 古墳以外の出土遺物 (図240)

1は1号墳南側の表土(流土)中で出土した鉄斧である。基部は断面楕円形の袋状を呈する。2・3はやや扁平で細長い安山岩礫を素材とした磨石で、表採品である。

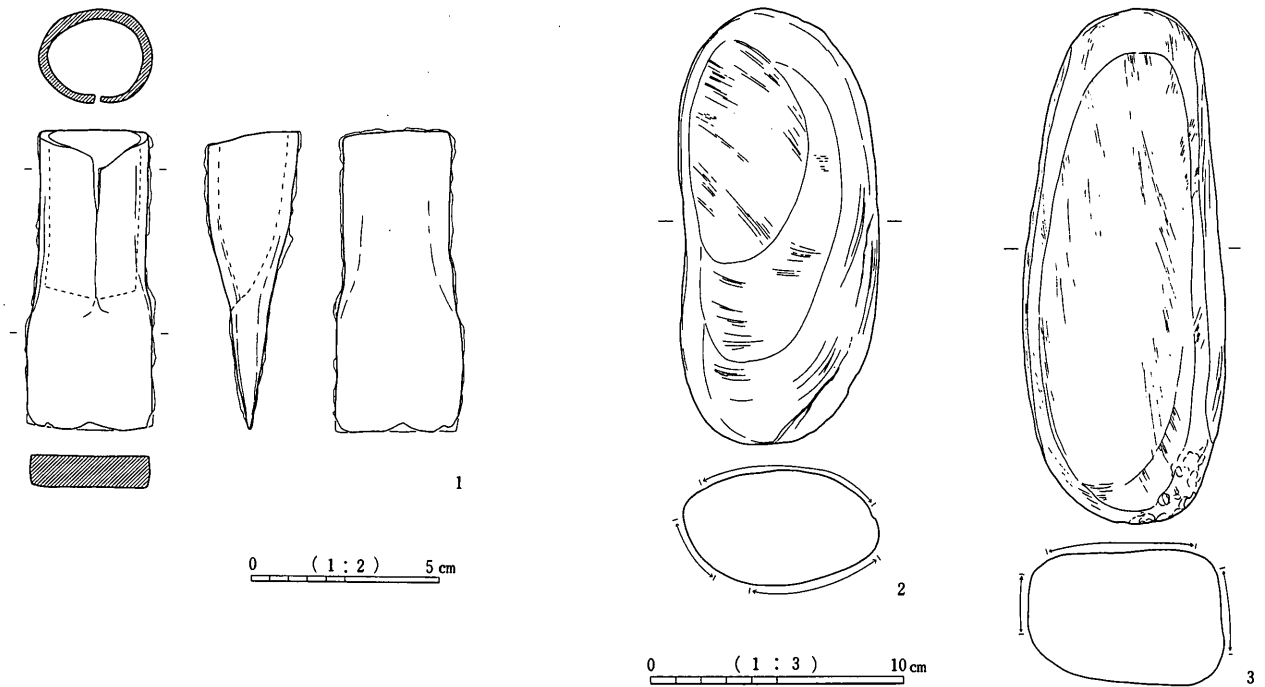


図 240 古墳以外の遺物

第4節 墳丘外遺物集中地点

1 位置と形態

2号墳の主軸を東方に延長した山脚斜面に位置し、ここに立つと2号墳および1号墳を見下ろす状態になる。遺構は、斜面を掘削して平面台形を呈する区画を造り出している(図218・241)。この台形区画は谷側に底辺を向けた形を取り、山側に直線的に約70度(水平から)に立ち上がる壁が形成されている。壁は中央の台形頂辺部は60cm程の高さをもつが、側辺部では次第に高さを減じ、約3.5m延びた地点で消失する。台形区画はこの壁の存在によって認識され、壁存在部分の規模は、底辺の長さ約8.5m、頂辺約5m、その間の距離3mを測る。区画内の底面は水平ではなく、約10度の下り勾配を成しており、下方の斜面すなわち2号墳の東切離し溝外側斜面へと漸移的に移行する。図241は傾斜変換点らしきものを表現しているが、これは断面図作成位置の局所的な状態に過ぎず、区画の西を限る施設ないし地形の変換は認められない。台形区画頂辺から2号墳の東裾までの距離は約15mである。

2 遺物の出土状況

遺物は土師器片と玉である。区画底面に、一定のまとまりをもちつつ散在している(図241)。東部壁寄りに2箇所、中央部に1箇所、北部に3箇所、西部に1箇所のまとまりが認められる。壁寄りのまとまりは小形壺と思われる破片である。中央部のまとまりは壺・甕・高坏片を含む。北部の3箇所は、北端に位置する玉類の集中と高坏(3)、その東側の完形に近い壺(1)、その南の小形甕の破片(2)である。西側のまとまりは、甕2個体(うち1個体が4)・壺1個体の破片である。北部の玉類の集中は大形の勾玉を要の位置にした分布をみせている。土器は、完形に近い壺(1)が底面から20cm程浮いて出土した他、各まとまりを超えて接合した例もあり、原位置を保つ可能性は低いと考えられる。本来、壁に近いところに配置されていたことを想定する。玉類は集中しており、単に流出した結果とは考えにくいので、原位置を保つことが考えられる。ただし、袋等に入れてあったと想定すると、移動の結果と理解できなくはない。

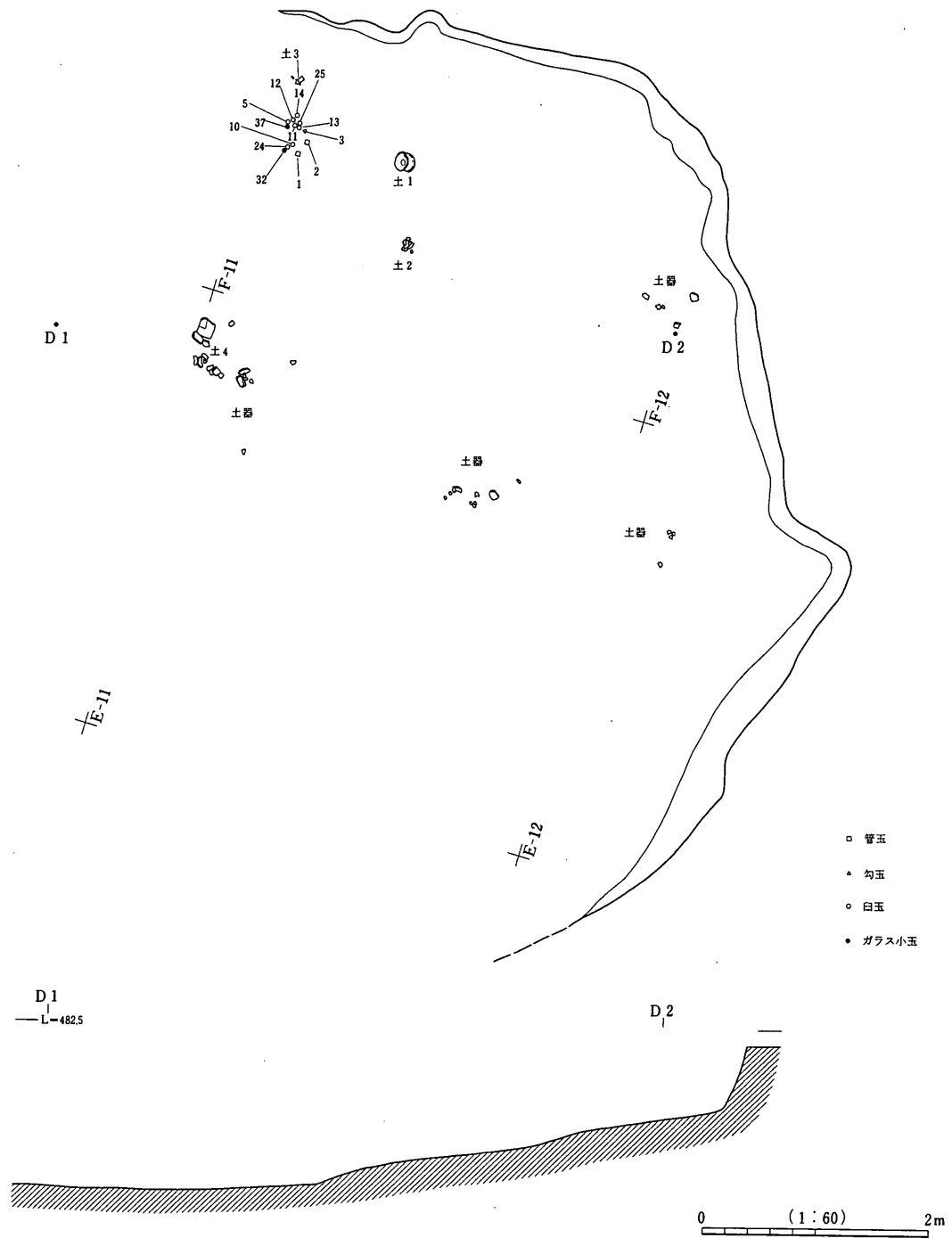


図 241 墳丘外遺物集中地点

3 出土遺物

(1) 土器 (図 242)

土器はすべて土師器である。図示可能なものはすべて図示したが、それでも4個体にとどまった。胎土や色調、部位形態の特徴からみると、壺5個体、甕2個体、小形甕1個体、高坏2個体は識別できる。

1は口縁部がやや内彎して斜め上方に伸びる丸底の壺。胴部は扁球形気味である。2は口縁く字状を呈する小形甕。3はやや下広がり柱状部から屈折して大きく開く裾部をもつ高坏。4は口縁く字状の甕で、胴部外面はハケ調整が施される。

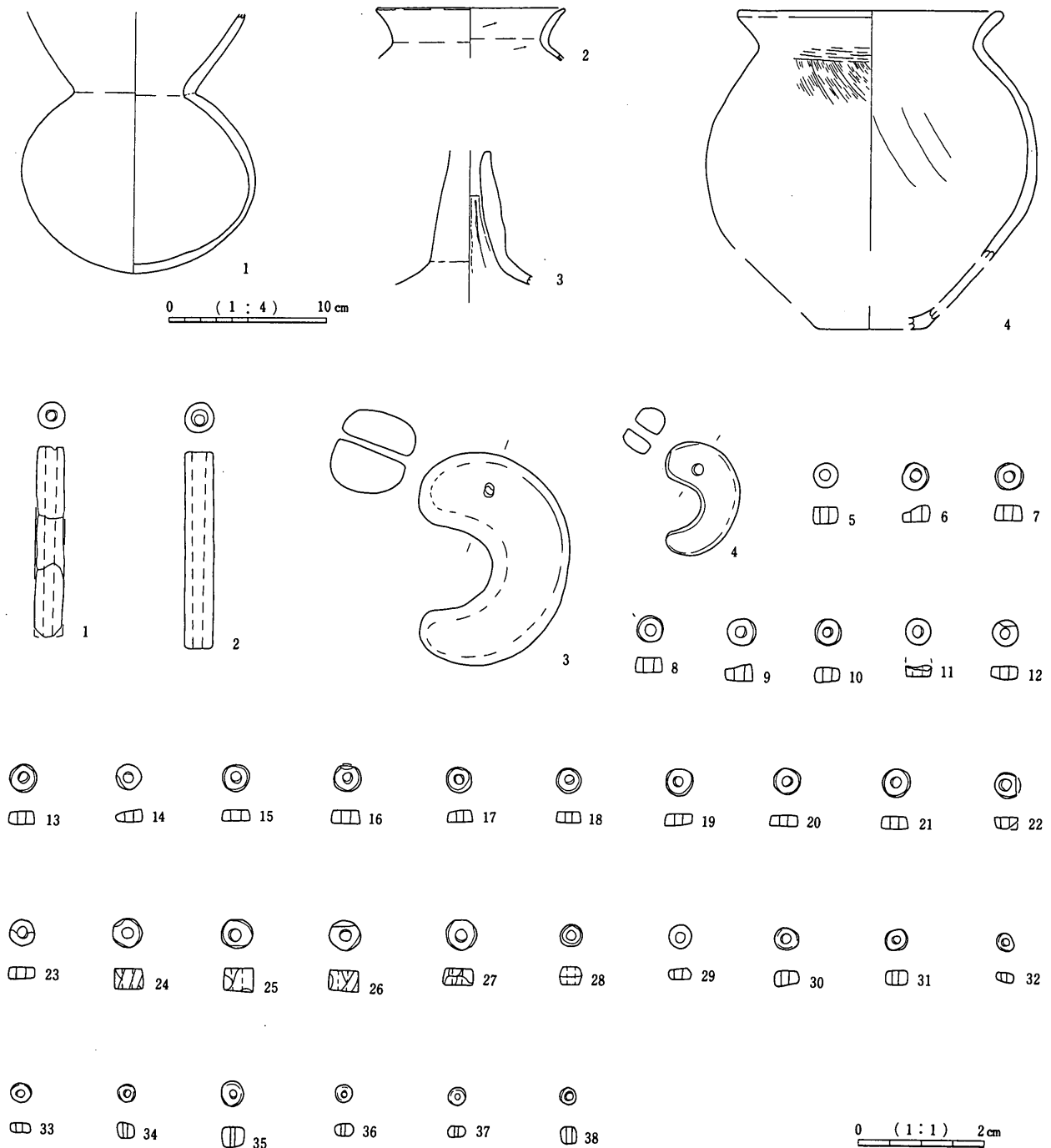


図 242 墳丘外遺物集中地点 土器・玉類

(2) 玉類 (図 242)

総数 40 点が出土した。内訳は、管玉 3、勾玉 2、白玉 26、ガラス小玉 9 点である。発掘時に検出したものと覆土の篩別・水洗で検出したものがある。巻末掲載の玉類計測表においては、種類を問わず、穿孔方向で「厚さ」を計測し、それに直交する方向で「長径」「短径」を計測している。

管玉 (1・2) いずれも緑色凝灰岩製である。風化が進行し、非常に脆くなっている。穿孔方法はどちらも片面穿孔である。

勾玉 (3・4) どちらも滑石製。3 は大形品で、背部腹部とも半円形を呈する。頭部と尾部の太さがあまり変わらない。2 は 3 に比べ小振りで、尾部は細くなっている。穿孔は両面穿孔。

白玉 (8～29) すべて滑石製である。厚みのあるもの、薄いもの、その中間的な厚さのものがある。穿孔はすべて片面穿孔で、孔面の研磨はすべて両面を研磨している。側面形状は、鈍い稜をもつ算盤玉状のA類 (28) と側面が角張り気味の棗玉状を呈するB類 (10) は各1点に過ぎず、側面が直線的な円筒状のC類が殆どを占める。側面の研磨方向は、穿孔軸に対して斜め方向に研磨するものが大部分で、他には、C類で横方向 (穿孔軸に平行) に研磨するものが少々みられるだけである。C類に属する24～27は他より大形で、側面の研磨があらく、幾つかの面を成している。

ガラス小玉 (30～38) 色調からコバルトブルー系 (30～35) とスカイブルー系 (36～38) のものに区別できる。殆どの資料に孔と平行に延びる気泡列が観察されることから、製作はガラス管を切断して作る管切り技法によると考えられる。

第5節 砥沢古墳

1 墳丘

(1) 築成

砥沢古墳は円墳である。墳丘の遺存状況は良好で、墳裾を取り巻いて山側では周溝、谷側ではテラス状平坦面が巡っている。墳丘規模は、南北長 (9ライン) 15.4 m、東西長 (1ライン) 14.5 mと、南北にやや長い。東に高い傾斜地に築かれているため、東側では高さ1.3 m足らずだが、西側では3.6 mを測り、堂々とした姿に見える。なお、挿図のグリッドラインは任意方向なので注意されたい (図244ほか)。

墳丘は上部を盛土、下部は地山を削り出すことによって築成している。墳丘構築以前の旧地形は、かなり緩やかだが、西方に延びる尾根状地形を成している。墳丘下では、尾根の頂部は墳丘南寄りを通り、従って、西と北に長い傾斜をもつことになる。盛土の構築はそれに対応した方法・工程を採っている。

盛土は厚さ最大120cmが残存する。断面の観察から、盛土の構築は、大きく3段階の工程を経て完成されたことが判る。第1段階は、地表面直上に墳丘全域にわたって盛土を施す段階で、いわば基礎構築の段階といえよう。各盛土層は広い範囲に施され、これによって、施工範囲も確定する。この段階では、盛土最終面は自然地形に対応した傾斜を残している (図245-12・17～20層)。第2工程は、長い傾斜面をもつ西部と北部に集中して盛土を施す段階である。この工程により、南北方向では水平が達成され、東西方向でも自然地形の傾斜はかなり解消される (8～11・14～16層)。第3工程は、最終的な盛土が施され、墳丘上部の形状が確定する段階である。前工程で水平が達成された南北方向では、各盛土層は南端から北端まで及ぶが、東西方向では、西側部分に集中する小範囲の盛土層を介在させている (2～7・13層)。

(2) 墳丘施設 (図244・246～248)

墳丘斜面には葺き石が施されている。現状では、葺石は墳丘中位を巡る最下位部分が石列状に残存するに過ぎない。墳丘上半部は盛土による築成だが、葺石最下段石は盛土施工範囲の外縁に据えられており、堅固な地山を削り出して成形した墳丘下半部には葺石はみられない。墳丘下半部から崩落した葺石が失われた可能性はないでもないが、しかし、比較的傾斜が緩い東斜面において原位置を保つものが存在しないこと、傾斜が急な北西斜面において下方にずり落ちつつもなお斜面にとどまっているものが相当数みられること、なにより墳丘裾に設置されたものが存在しないことから、本来、墳丘下半部には葺石が施されていなかったと考える方が合理的である。

葺石は付近の表土および地山中に含まれる緑色凝灰岩の角礫を用いている。北東部から南半にかけての遺存状況は比較的良い。最下段石の連なりは平面的には直径約11 mの円を描き、また、その側面観は、最

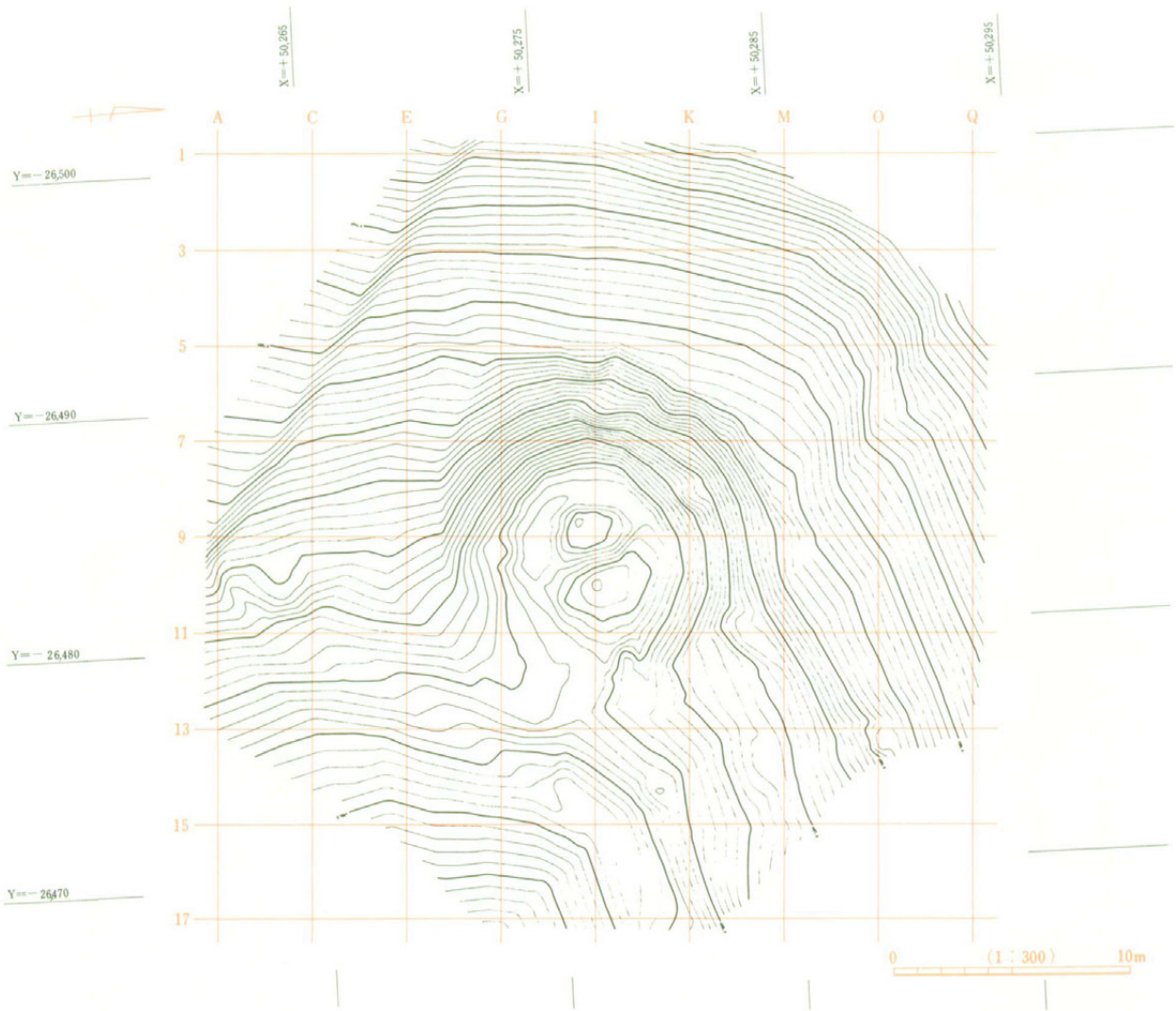


図243 砥沢古墳 調査前地形

も高い東端から最低位の西端まで1.5 mの高低差をもって直線的に並ぶ。南端部と東端部では部分的に2段ないし3段が残存する箇所がある。礫の形状はやや不揃いだが、概ね横長の礫を横積みにし、かつ、墳丘の傾斜に合わせ、用材の最も広い面を斜め上に向け揃えている。北部から北西部では、原位置をとどめるものはなく、斜面下方にずり落ちているが、その平面分布は円弧の形状を保っている。なお、崩落した礫を含めて考えると、最下段にはやや大振りの礫を用いた場合が多かったようである。

周溝は断面U字形に近い逆台形に掘り込まれている。周溝の内側の法面は、墳丘斜面下端部を兼ねており、そこに明瞭な傾斜変換点をもたないところが多く、溝の規模を表現しにくい。旧地表を掘削した範囲で示すと、上端幅は、北東部で3.5 m、東部で3.6 m、南部で2.3 mを測る。深さは、それぞれ60cm、60cm、50cmである。周溝の外側の法面は、北部では11ライン辺り、南部では7ライン付近から西へ向かって急速に高さを減じ、溝としての形状を呈さなくなる。そして、墳丘裾を取り巻くテラス状平坦面へと変化する。テラスはその下方斜面との傾斜度の差は少ないが、境に明瞭な変換点をもち、幅は約2 mを測る。

(3) 遺物の出土状況

墳丘頂部には攪乱坑が大きく開いており、盗掘を受けた状況が明白であった。遺物は、盗掘坑周囲に堆積する攪乱土層あるいは盗掘坑内流入土や墳丘斜面の流土層から、土師器片80点程と鉄器片数点が検出さ

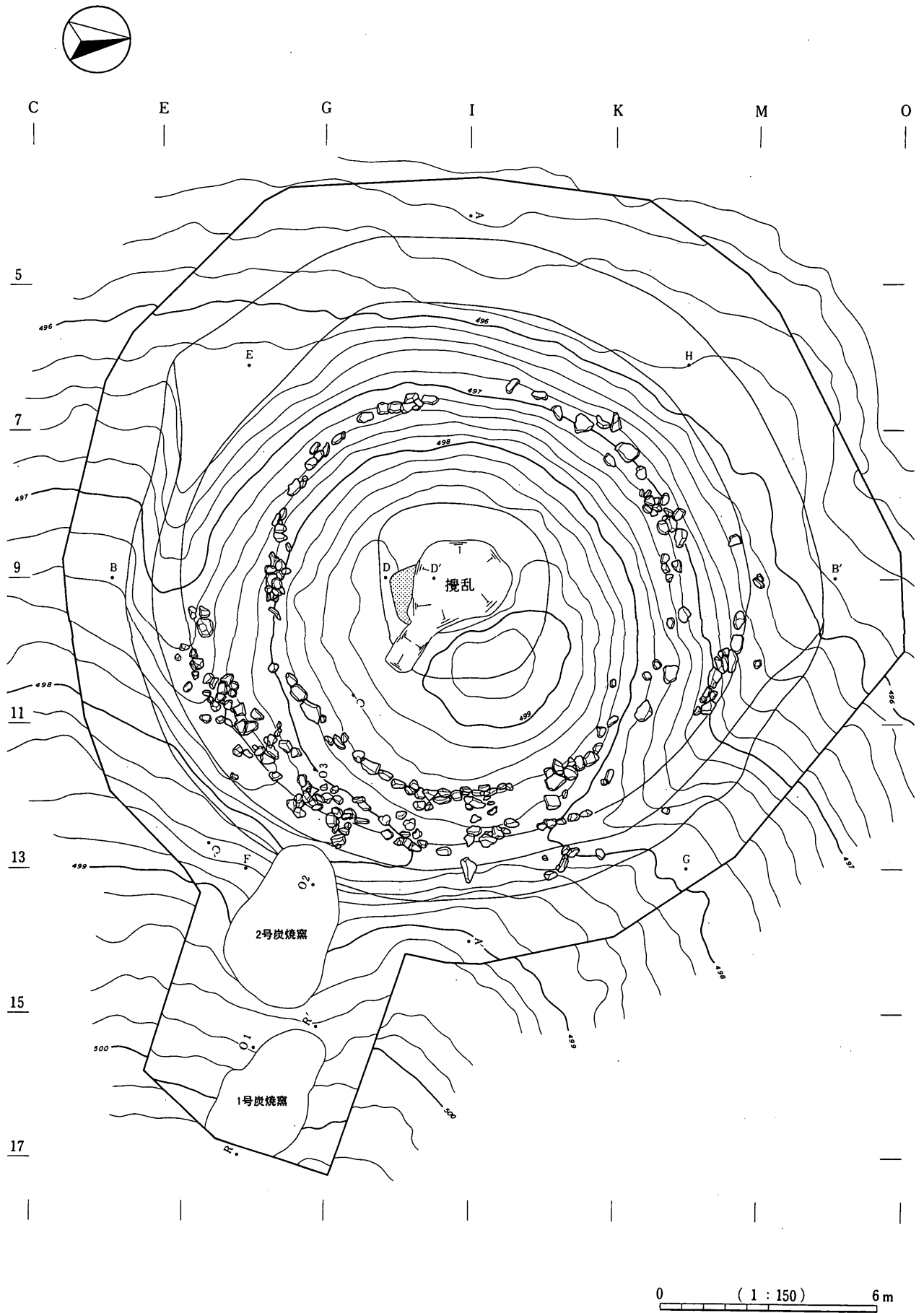


图 244 砥沢古墳 墳丘実測図

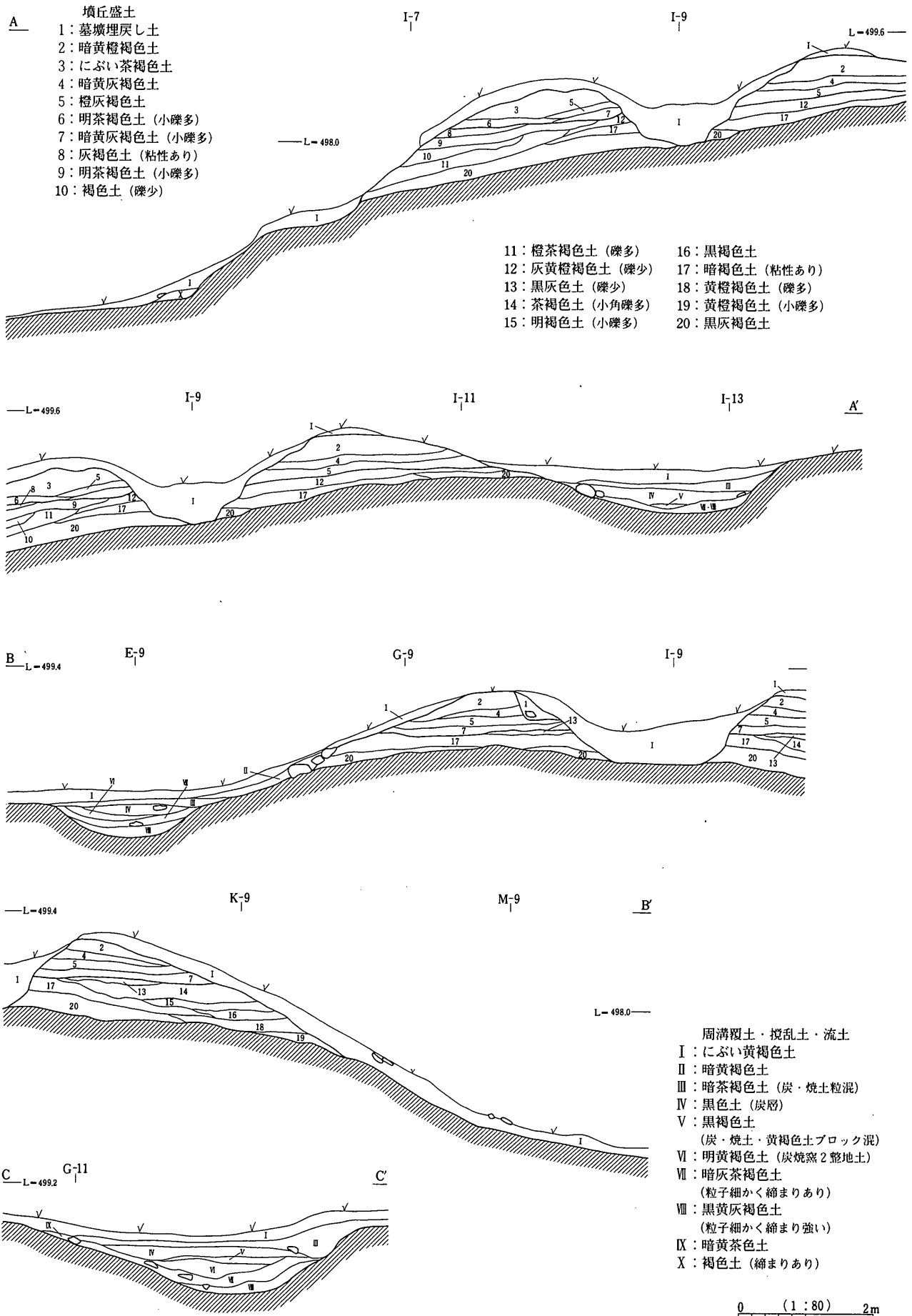


図245 砥沢古墳 断面図



图 246 砥沢古墳 葺石 (南半部)

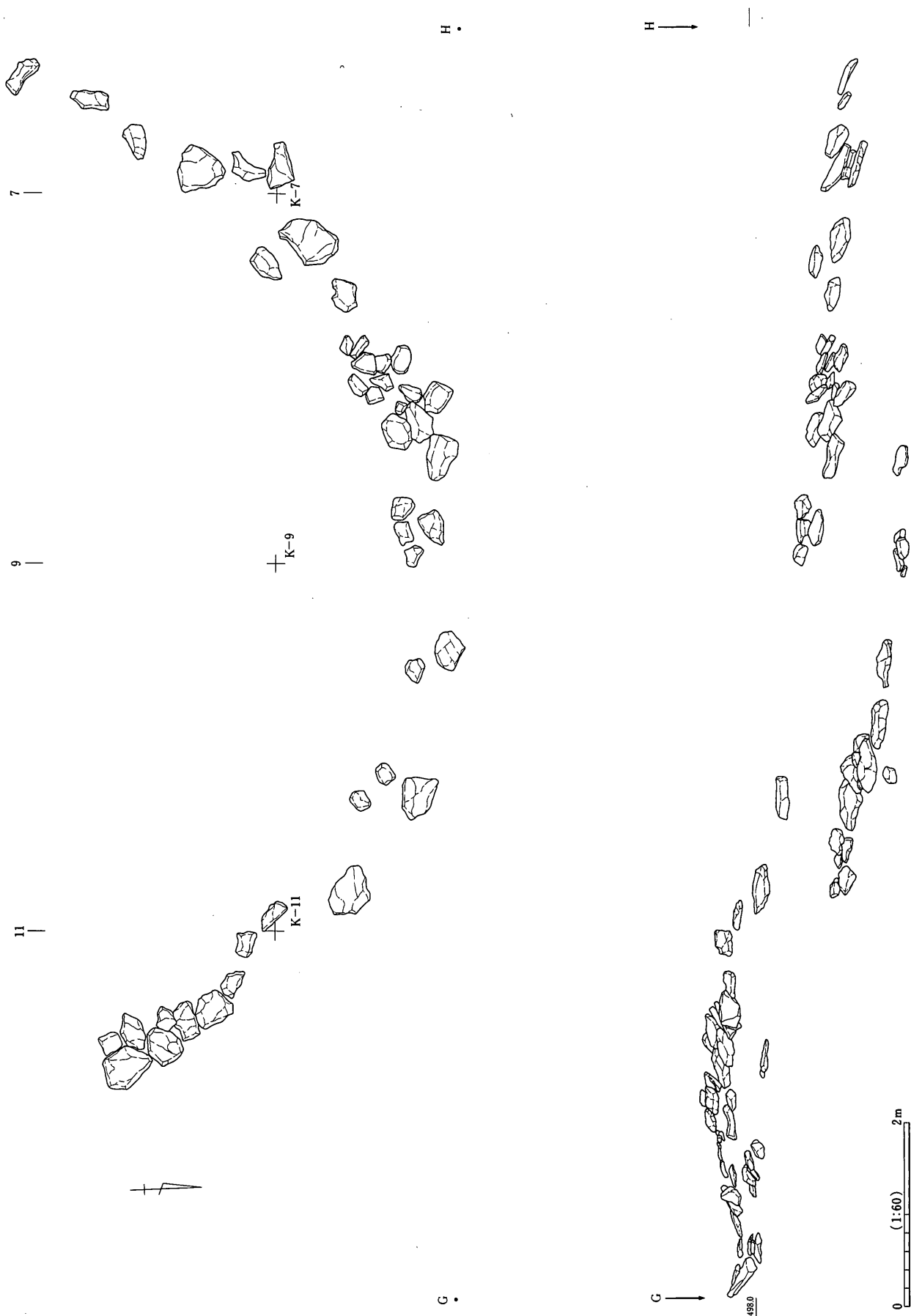


图 247 砥沢古墳 墓石 (北半部)

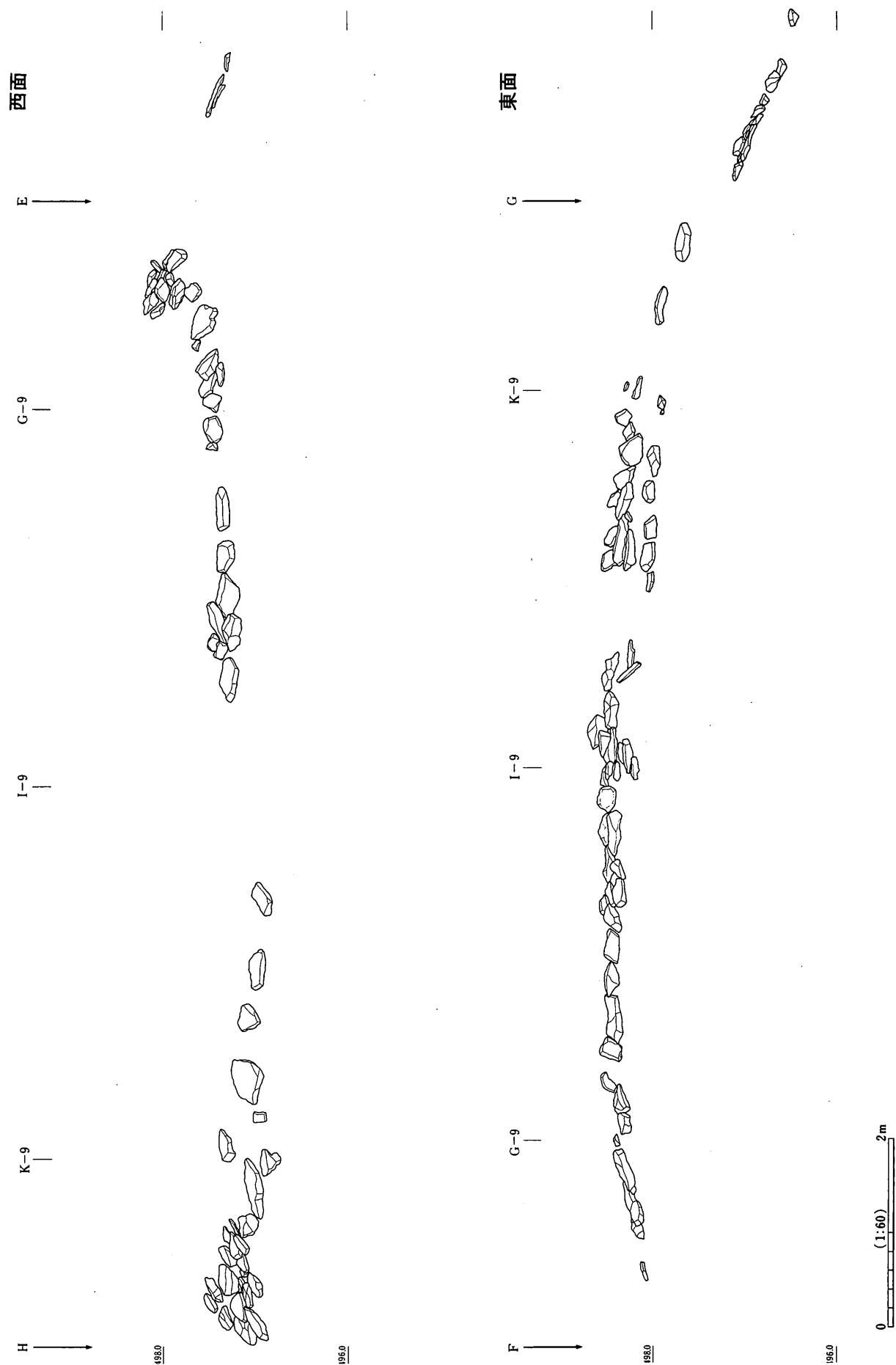


图 248 砥沢古墳 葺石立面图 (西面·北面)

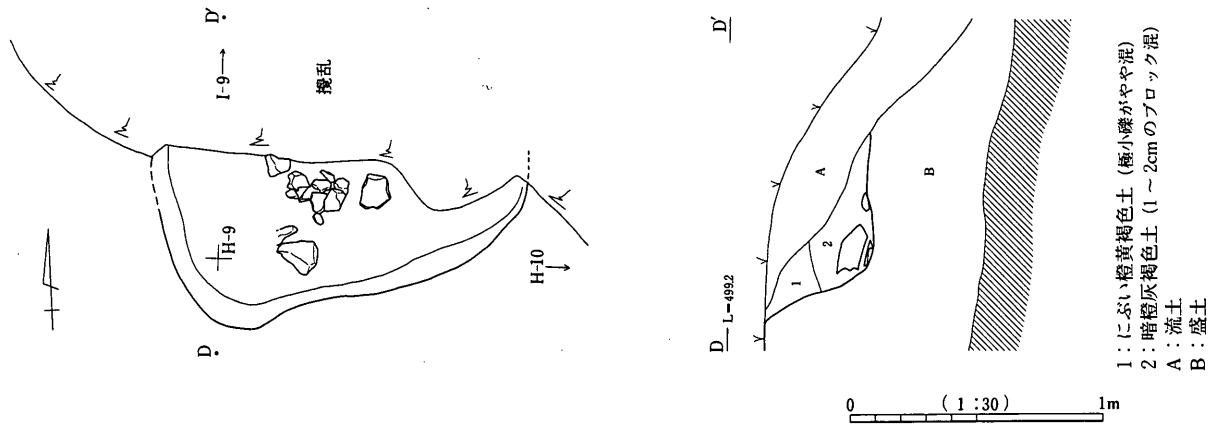


図 249 砥沢古墳 主体部

れた。発掘時に検出したものと、攪乱土および流土の篩別・水洗でみつかったものがある。鉄器は、刀子・鉄剣または鉄刀の破片・鉄鏃であり、これらは副葬品として主体部棺内に納められていたものと考えてよいだろう。土師器は壺と思われる破片で、本来の埋納ないし配置状態は明らかでない。

2 主体部

墳頂平坦面のほぼ中央に位置するが、盗掘による攪乱を大きく受け、殆どの部分が消失している。ただし、盗掘坑の南縁に、僅かに切られ残った墓壇南端部が検出された(図249)。これにより墓壇の形状・規模を推定すると、平面形は長方形を呈し、長軸3.5m以下、短軸1.4m程で、主軸はN-11°-W辺りを指すことが考えられる。墓壇は盛土を掘り込んでつくられ、検出面からの深さは約40cmを測る。墓壇底は残存部では平坦である。墓壇壁は南短壁では底面から屈折して直線的に約64度に立ち上がる。墓壇内は橙黄褐色・暗橙灰褐色土からなる埋め土が2層に施され、下層には10~20cmの角礫が混じっている。

中核部分が遺存していないため、主体部の詳しい構造や副葬品の内容は明らかでない。ただし、盗掘坑周囲に堆積する攪乱土層や盗掘坑内には、最大50×40cm、平均40×30cm程の板状礫が散見され、もしかすると、そうした礫を用いた構造をもっていたかもしれない。また、前述したように、副葬品は刀あるいは剣・鉄鏃・刀子を含み、供献された土師器壺を伴うことが指摘できる。

3 出土遺物

(1) 土器 (図250-1~5)

検出した土器は、すべて壺と思われる土師器の小・細片で、いずれも胎土・焼成・色調がよく似る。壺2個体分の口縁部、1個体分の頸部、2個体分の底部が確認された。その他は胴部破片である。従って、これらの破片から壺2個体を再構成しても矛盾はしないが、現実には各部位は接合せず全体形は判明しなかった。1・2は口縁部で、外面は頸部と口縁立ち上がりの境に明瞭な段を有するが、内面は屈折しない。1は2に比べ、頸部の外傾度が強い。3は頸部立ち上がりの外傾度と器壁の厚さからすれば、1の口縁部に組み合う可能性がより高いと思われる。4・5は底部である。どちらの口縁部と組み合うかはわからない。

(2) 鉄器 (図250-1~6)

1・3・4は長頸鏃。1は鏃身部外形が長三角形を呈し、鏃身関は直角である。鏃身断面形は片丸造と思われる。頸部は比較的太く、関は角関である。茎断面形は方形を呈する。3は頸部~茎の破片だが銹化のた

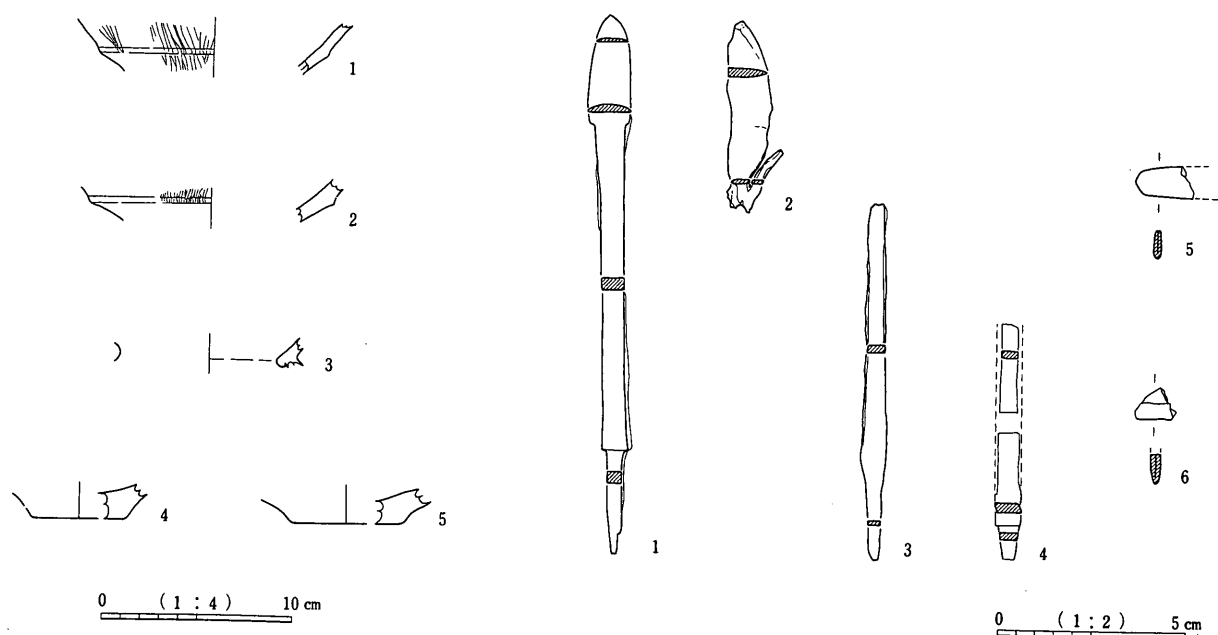


図 250 砥沢古墳 土器・鉄器

め形態的特徴がよく判らない。4は頸部～茎の破片で、関は角関。2は一応鉄鍬の鍬身部としたが、変形が著しく、形態は、果たして鉄鍬であるかどうかを含めて不明確である。5は刀子の茎尻と思われる破片、6は刀剣の刃部破片であろう。

4 古墳以外の遺構と遺物

(1) 炭焼窯

古墳周溝掘下げの過程で、周溝南東部の外側法面を切って構築した炭焼窯を確認した(2号炭焼窯)。この窯の東側にもう1基の炭焼窯を検出したが(1号炭焼窯)、焼成室は調査区外に存在し、前庭部と思われる部分を調査したにとどまった。

2号炭焼窯(図251)

平面形状は長方形を呈し、焚き口を古墳周溝の外側法面に開けている。規模は全長6.2m、最大幅1.6mである。焚き口部は、間口が下底面で、0.5mを測る。両側に礫を積み重ね粘土で固定した門状の施設を造っている。焼成室は長さ3.5m、最大幅1.6mで、主軸はN-111°-Eを指す。窯壁最大高は2.0mを測り、焚き口に近くなるにつれて低くなっている。窯底は、焼成室は平坦かつ水平だが、焚き口部付近から外に向かって緩く立上がっている。煙道は右奥隅に付設される。煙道下部の構築は、側壁に横断面方形の溝を窯底まで掘込んで、それに蓋をするように平石を並べ置き、土で目張りして焼成室との隔壁とする。上部は地山をトンネル状に掘り込んでいる。窯壁・窯底・煙道は火熱を受けた痕跡が顕著で、窯壁・煙道の内面にはタール状物質が厚く付着・浸透している。天井部はすべて崩壊し構造は判らない。焚き口部から焼成室前半にかけての底面には厚さ10～3cmの炭化物層が堆積している。

焚き口部前面には周囲より一段低くなった前庭部がみられる。その軸は焼成室の主軸より若干南に振っている。南西隅にはステップ状の小平坦面が造り出されており、階段の機能を果たしていたものと思われる。前庭部南縁から9ライン付近までの古墳周溝内には整地土が施されている(図245-BB'CC'断面IV層)。周溝を通路・搬路として整備したものであろう。整地層の直上に窯から掻き出された炭化物層が堆積

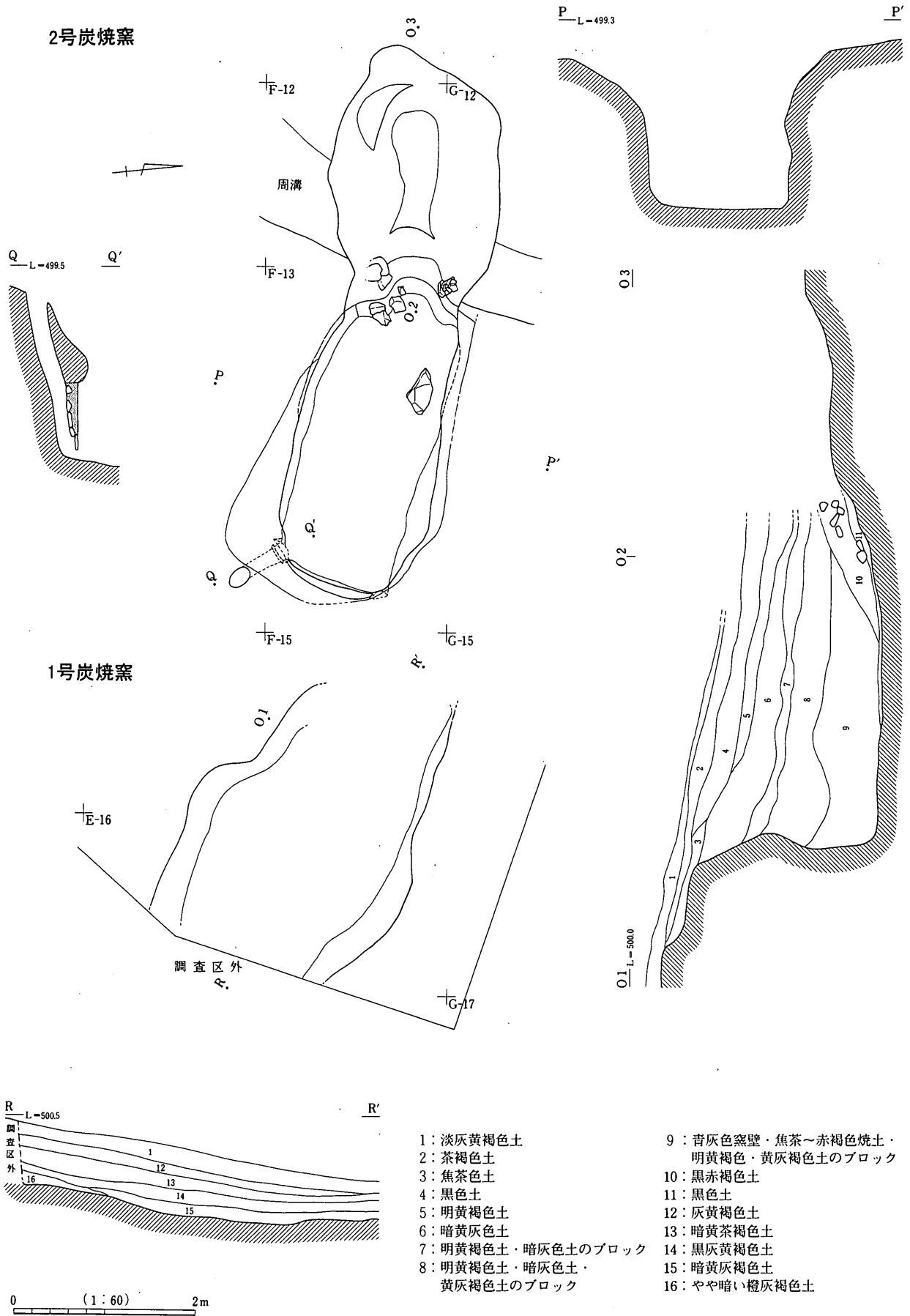


図 250 1号・2号炭烧窯

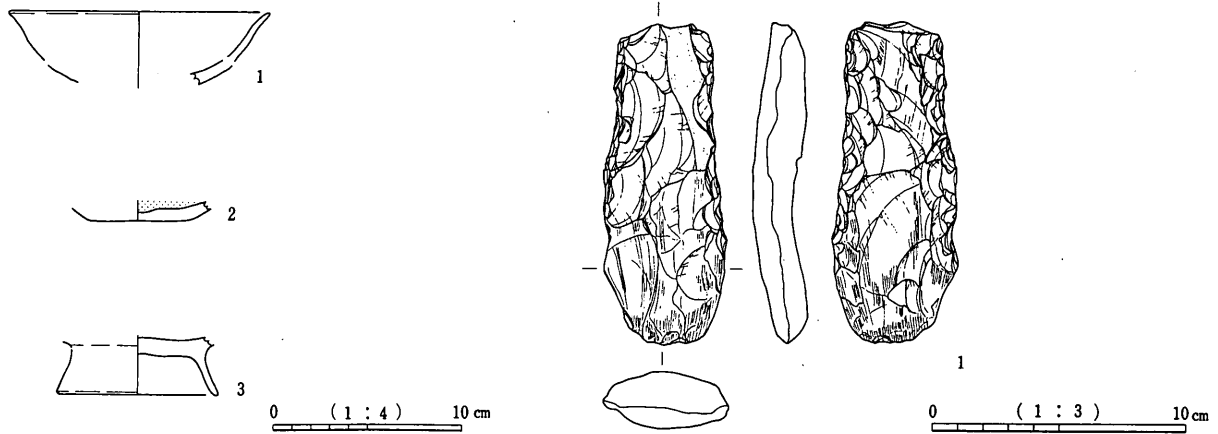


図 252 古墳以外の遺物

している。炭化物層からは土器片が出土した(図 252-1~3)。これにより、2号炭焼窯の操業時期は10世紀前葉を前後するあたりを考えておきたい。

1号炭焼窯(図 251)

焼成室は調査区外にあり、検出した部分は前庭部と考えられる。平面形は長さ3.5m、幅2.6m程の長方形ないし長U字形を呈する。主軸はN-125°-Eを指す。断面形はU字に近い逆台形で、深さは最大で40cmを測る。2号炭焼窯跡の凹地には整地土が施され、その部分はそれほど強くはないが被熱して酸化している。窯から取り出した炭を仮置きした痕跡と想定する。また、整地層直上には炭化物層が堆積している。遺物は出土せず、操業時期は2号炭焼窯の廃絶以降としかわからない。

(2) 遺物

土器(1~3) 2号炭焼窯に伴う炭化物層から出土した土器である。1は土師器坏ないし碗、2は回転糸切り不調整の内面黒色土器坏、3は土師器碗である。

打製石斧(1) 墳丘盛土中に含まれていた。凝灰岩製で、いわゆる短冊形を呈する。刃部平面形は円刃で、断面形は片刃形態をとる。刃部は強く摩耗しており、摩耗痕は凸面側に広く強く形成されている。

第6節 小結

ここでは、東平古墳群の築造年代について若干述べてみたい。

2号墳は土器資料に比較的恵まれているので、まず、2号墳出土土器群の年代的な位置付けを試みてみよう。2号墳の土器群は埋葬祭祀に伴って主体部上に置かれたものであり、その一括性は明確である。この土器群の組成の特徴は、脚部がハ字状に広がる高坏と、口縁部が短く外折する半球形体部の坏が代表する。千野浩による長野市本村東沖遺跡における編年(千野1993)では、こうした形態の高坏・坏はその第3段階に出現する。また、第4段階には高坏坏部の内彎傾向が顕著になる。2号墳の高坏の坏部口縁は外反ないし直線的に伸びるものであり、内彎する形態を含んでいないので、第4段階まで降らせる必要はない。従って、2号墳の土器は千野編年の第3段階に位置付くことが理解される。第3段階は5世紀第2四半期に比定(TK 73併行)されているが、初期須恵器の実年代比定如何によっては、この年代も変化することがあり得る。ただし、近年の研究動向を考えると、少なくともこれより降ることはあるまい。ここでは、千野の比定に従うこととする。その性格からして土器群の年代をもって2号墳の築造年代とすることはゆるされようから、2号墳の築造年代を5世紀第2四半期に位置付ける。

2号墳の主体部からは滑石製白玉がまとまって出土した。次に白玉の様相についてみてゆきたい。白玉の編年については篠原祐一の研究がある(篠原1995)。篠原によれば、白玉の形式変化を顕著にあらわす要素は側面形状と側面研磨状態であるという。そこで、この2要素について2号墳の白玉をみると、側面形状は、算盤玉状のA類が主体を占め、それに棗玉状のB類と円筒状のC類が少数伴う。ただし、A類の稜は鈍いもので、退化が進行している。側面研磨状態は、斜め方向に研磨するものが大部分で、A類で横方向、B類で縦方向に研磨するものが若干みられる。こうした組成を篠原編年に対比してみると、5世紀を初葉～末葉の5期に区分したうちの、5世紀前葉に最も適合するといえよう。もしかすると、実年代比定の根拠がそれぞれ異なるかもしれないが、この年代は、前の土器群の位置付けと整合的である。

1号墳の土器は、出土数が少ないうえに状態も不良であるが、高坏の坏部は、外反する口縁部のものと直線的に伸びるものがあり、また、内彎形態を取るものを含まない点で、2号墳と類似し、やはり千野編年第3段階に相当すると考えられる。埴輪も一部2号墳にはみられない形態があるものの、ほぼ似た組成・特徴を示している。第3節で述べたように、1号墳の築造は2号墳に遅れるが、土器・埴輪の様相は、その時間的隔たりが短いことを示唆する。従って、1号墳の築造は、同じく5世紀第2四半期のなかで、2号墳より遅れる時期と理解しておく。なお、1号墳の直刀は、5世紀代の形制(白杵1984)を示しており、1号墳自体の位置付けには重要であるが、2号墳との時期差をより限定する資料としては、現状では有効とはいえない。

砥沢古墳は遺物がごく少なく、主体部構造も明らかではないため、その位置付けが難しい。ただし、鉄鏃は、資料が少ないながら、典型的な長頸鏃であり、TK 73型式期を遡ることはなく(杉山1988による)、従って、2号墳・1号墳より遅れる築造時期が考えられる。年代としては5世紀第3四半期あたりを想定しておきたい。

さて、2号墳の東方に存在する遺物集中地点は、埋葬施設ではなく、2号墳・1号墳に係る一種の墓前祭祀の場を表す遺構と推定される。出土した白玉をみると、側面形状が円筒状をなすC類が殆どを占めており、算盤玉状のA類と棗玉状のB類(10)は各1点に過ぎず、2号墳の白玉より新しい特徴・組成を示している。また、側面の研磨状態は、斜め方向に研磨するものが大部分で、C類で横方向研磨のものが少々みられるだけである。白玉のこうした様相は、前の篠原編年では5世紀中葉に適合しよう。一方、図示した土器についていえば、2号墳のそれより新しく位置付けることはできない。従って、遺物には、古い一群

と新しい一群が存在することになり、それらは各々2号墳・1号墳に対応することが推定される。

以上、東平古墳群の年代については、東平2号墳を5世紀第2四半期の前半、東平1号墳をその後半、砥沢古墳を5世紀第3四半期と考える。これら3基は該期に相次いで築造された一連の首長墓系列として理解することができよう

以下、各古墳の内容を簡潔に列挙してまとめにかえたい。

東平古墳群においては、墳形は東平2号墳の方墳に始まり、1号墳の円墳に転換し、砥沢古墳に継続する。2号墳の墳丘には葺石が施されるが、1号墳は葺石をもたず、砥沢古墳では盛土で構築した墳丘上半部のみに葺石がなされる。

埋葬施設は、2号墳・1号墳では石槨等を伴わない割竹形木棺の直葬である。砥沢古墳では、構造は明確でないが相対的に短い形態を取っている。2号墳・1号墳主体部にみられる棺小口側の立石は、中野市山の神古墳・京塚古墳において確認されており、これらはどちらも5世紀中葉の割竹形木棺直葬の中小古墳である(土屋1996)。この時期の千曲川流域ないし善光寺平周辺地域の中小古墳に、こうした構造が通有なものであったことが推定される。また、長野市大星山古墳群では、竪穴式石槨の短壁前面に立石を伴う構造が明らかにされ、その簡略型として東平・山の神・京塚の構造を捉え得ること、短壁の立石が、石障などにも通ずる埋葬観念や儀礼にかかわるものであることが想定されている(土屋1996)。

副葬品は、2号墳は玉類と竪櫛、1号墳は刀剣と竪櫛の組み合わせであり、砥沢古墳では組成の全容はわからないが、前2古墳にみられなかった鉄鏃が加わっている。

2号墳・1号墳は埴輪を有し、2条突帯(3段構成)および1条突帯の円筒埴輪、壺形埴輪が認められる。円筒埴輪は特殊な形態の小形埴輪であるが、飯田市新井原2号墳等で類似した形態の埴輪が出土している(渋谷1996・風間1998)。また、近辺では、長野市塩崎城見山砦下層(河西ほか1994)、更埴市小島遺跡(更埴市教委1989・風間1998)から壺形埴輪に通ずる形態の、底部が開く土師器壺が出土している。特に塩崎城見山砦の壺は、胎土は土師器的であるが、長胴を呈する胴部をもち、口縁部は上部を外側に屈曲させており、2号墳・1号墳の壺形埴輪の一部と共通する形態を示している。

引用・参考文献

- 青木和明 1987 「Ⅳ 5 土口將軍塚古墳出土土師器の編年的位置」『長野県史跡 土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』
長野市教育委員会・更埴市教育委員会
- 泉森皎 1985 「刀剣の出土状態の検討—刀剣の呪術的性格の理解のために—」
『末永先生米寿記念獻呈論文集』乾 末永先生米寿記念会
- 伊藤玄三 1984 『直弧文』考古学ライブラリー28 ニュー・サイエンス社
- 稲村繁・藤川美和 1992 「第8章 第6節 埴輪論」『史跡 森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』
長野県更埴市教育委員会
- 今尾文昭 1984 「古墳祭祀の画一性と非画一性—前期古墳の副葬品配列から考える—」
『榎原考古学研究所論集』第6 榎原考古学研究所
- 白杵勲 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 小山田宏一 1996 「近畿地方暦年代の再整理」『考古学と実年代』第I分冊 埋蔵文化財研究会第40回記念集会発表要旨集
同会実行委員会
- 河西克造ほか 1994 「塩崎城見山砦遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13—更埴市内・長野市内その1—』
（財）長野県埋蔵文化財センター
- 風間栄一 1998 「4・5世紀の埴輪祭祀の系譜—長野県の様相について—」『埴輪が語る科野のクニ』

第2回シナノクニフォーラム発表要旨 更埴市森將軍塚古墳館

- 亀田博 1985 「豎櫛」『末永先生米寿記念獻呈論文集』乾 末永先生米寿記念会
- 篠原祐一 1995 「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 〔鈔栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター〕
- 渋谷恵美子 1996 「埴輪からみた伊那谷の古墳」『研究紀要』第6号 飯田市美術博物館
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鍬について」『橿原考古学研究所論集』第8号 橿原考古学研究所
- 助川朋広 1993 『中之条遺跡群 宮上遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会
- 助川朋広・森嶋稔 1994 『南条遺跡群 東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』坂城町教育委員会
- 助川朋広 1996 『中之条遺跡群 寺浦遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会
- 助川朋広 1997 「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」『祭祀考古』第8号
- 田坂仁ほか 1995 『日本の櫛—別れの御櫛に寄せて—』斎宮歴史博物館
- 伊達宗泰 1984 「古墳墳丘上祭祀の問題—新沢千塚古墳の事例を中心として—」『橿原考古学研究所論集』第6号 橿原考古学研究所
- 田中裕・吉沢悟 1993 「上田市新町王子塚古墳の測量調査」『千曲』第76号 東信史学会
- 千野浩・佐藤信之ほか 1987 『長野県史跡 土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』長野市教育委員会・更埴市教育委員会
- 千野浩 1993 「第5章 3 本村東沖遺跡出土の古墳時代中期以降の土師器編年について」
『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡—長野高等学校校舎改築事業に伴う発掘調査報告書—』長野市教育委員会
- 土屋積 1996 「第一部 大星山古墳群」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7—長野市内その5—』
〔鈔長野県埋蔵文化財センター〕
- 常木晃・望月保宏 1986 「上田市秋和八幡大蔵京古墳の実測調査」『信濃』第38巻 第4号信濃史学会
- 新納泉 1991 「2. 副葬品の種類と編年 1. 武器」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅲ 副葬品 雄山閣
- 西山克己 1990 「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No.316 ニュー・サイエンス社
- 土生田純之 1995 「古墳構築過程における儀礼—墳丘を中心として—」『古墳文化とその伝統』勉誠社
- 森嶋稔ほか 1981 『坂城町誌』中巻 歴史編(1) 坂城町誌刊行会
- 森泰通 1995 『京ヶ峰1号墳・谷下古墳』豊田市教育委員会
- 矢島宏雄 1987 「Ⅳ 3 善光寺平の埴輪」『長野県史跡 土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』
長野県教育委員会・更埴市教育委員会
- 矢島宏雄ほか 1992 『史跡 森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』長野県更埴市教育委員会
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物

第10章 土井ノ入窯跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の位置

土井ノ入窯跡は、坂城町の千曲川右岸地域、鳩ヶ峯西南の山麓斜面に立地する奈良時代末葉～平安時代の須恵器・瓦窯跡である。今回の発掘調査地は長野県埴科郡坂城町坂城字蓬平 5605 ほかに所在し、調査前は山林および畑地であった。標高は555～585 mを測る。

『坂城町誌』によると、土井ノ入窯跡には3窯が確認されており、そのうち、3号窯は8世紀末葉の須恵器焼成窯で、1号窯は9世紀の須恵器・瓦焼成窯である。1号窯については、1966年に調査が行われ、出土資料の検討から、生産した瓦を、同町込山の込山廃寺、更埴市雨宮の正法廃寺、上田市の信濃国分寺に供給したことが指摘されている（森嶋ほか1981）。

坂城町には、土井ノ入窯跡の他、8世紀末葉の須恵器窯である栗田窯跡があり、9世紀に操業した窯としては、岡の原窯跡、垣外窯跡、雷平窯跡、岨岨窯跡、小野沢窯跡が知られている。特に、土井ノ入3号窯に近接した位置に営まれた岡の原窯は、須恵器より瓦が多く採集されており、やはり、込山廃寺との関係が想定されている（森嶋ほか1981）。

2 調査の経過

遺跡の概況を把握するために、樹木伐採の進捗に応じて、平成4年11月に現地踏査を繰り返した。伐採木搬出路が用地内を数m～10mの間隔で縦横に走っており、その切開面の観察を行うことによって、窯跡の分布を把握することが可能な状況であった。しかし、須恵器・瓦窯跡は確認されず、遺物の散布も認め

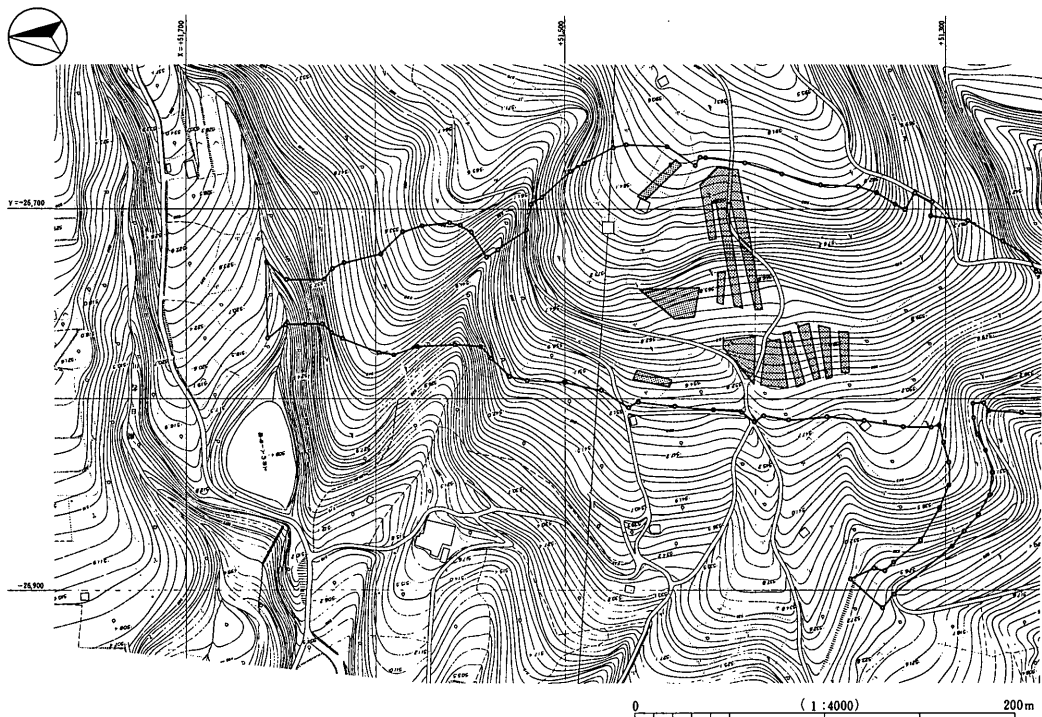
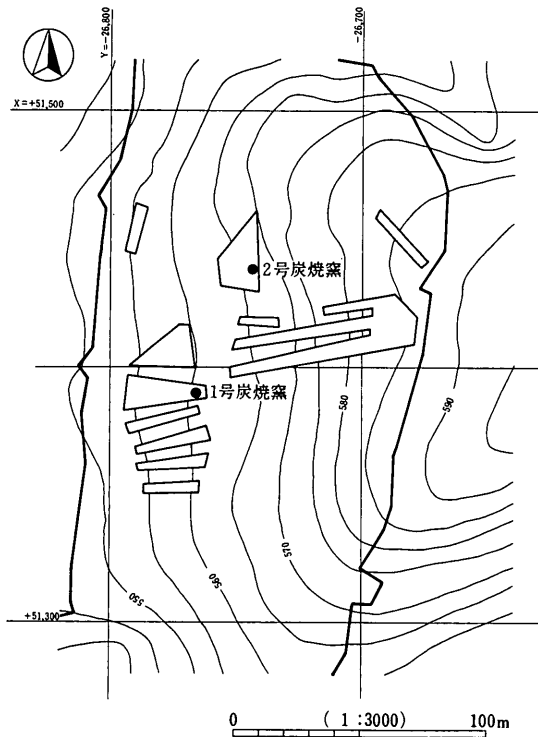
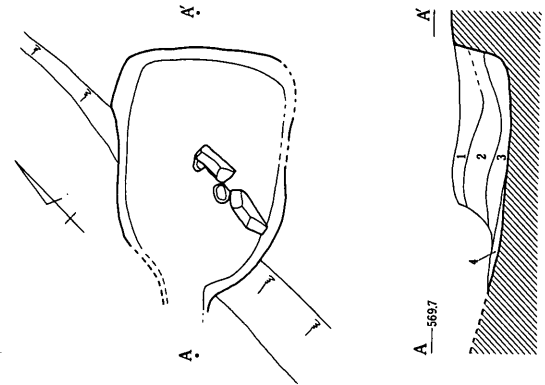


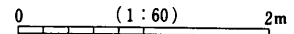
図253 調査範囲



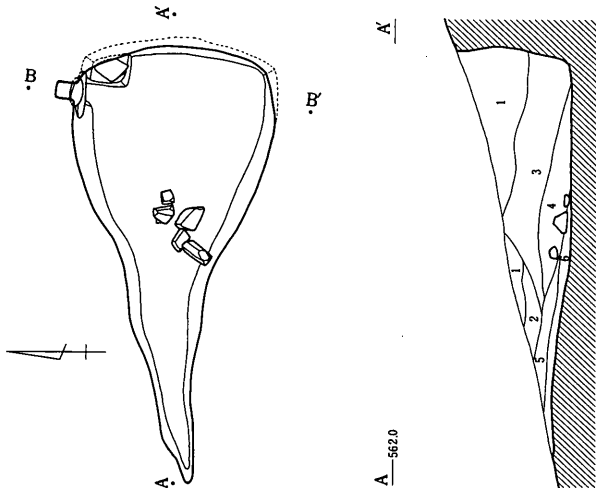
2号炭焼窯



- 1: にぶい黄褐色土 (暗橙褐～橙褐色の焼土塊を含む)
- 2: 暗橙褐～橙褐色土 (天井・壁の崩落。黒青灰色土塊少し含)
- 3: 暗橙褐～橙褐色土と黒青灰色土 (天井・壁の崩落)
- 4: 炭・灰



1号炭焼窯



- 1: 暗黄褐色土 (焼土粒・炭粒が僅かに混る)
- 2: 暗橙褐色土 (橙褐色焼土粒が多い)
- 3: 暗橙褐～焦茶色土、暗青灰色土 (天井・壁の崩落。塊大)
- 4: 暗橙褐～焦茶色土、青黒灰色土 (天井・壁の崩落)
- 5: 暗褐色土 (橙褐色焼土塊。炭粒混る)
- 6: 炭・灰

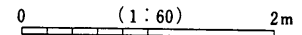


図 254 遺構の位置、1号・2号炭焼窯

られなかった。このように、濃密な遺構分布を想定し難い状況であったため、伐採木搬出路の及んでいない一角を中心にトレンチ調査を行い、必要に応じて、面的に拡げる調査方法を採用した。

基本層序は一様で、現地表層の下に暗黄褐色砂質土層が厚さ 20～30cm 堆積し、その下は黄褐色砂質の基盤層となる。ただし、層界はあまり明瞭でない。遺構は、踏査段階で確認していた 1 基を含め、2 基の炭焼窯が検出された。遺物は全く出土していない。

調査期間は平成 4 年 12 月 1 日～12 月 18 日、調査面積は 4000㎡である。

第2節 遺構

1号炭焼窯 (図254)

検出 現表土層直下で検出した。

構造 西向きの緩斜面に、地山を掘り込んで構築されている。平面形状はやや胴張りの台形を呈し、焚き口を斜面下方に向ける。規模は全長3.5 m、最大幅1.7 mで、主軸はN-91°-Eを指す。焚き口部は、間口が下底面で0.6 mを測る。焼成室は長さ1.6 m、最大幅1.4 mである。窯壁最大高は0.9 mを測り、焚き口に近くなるにつれて低くなっている。窯底は、焼成室は平坦かつ水平だが、焚き口部は外に向かって緩く立ち上がっている。煙道は左側壁最奥部に付設される。構築は、側壁に横断面方形の溝を窯底まで掘り込んで、それに蓋をするように平石を並べ置き、土で目張りして、焼成室との隔壁とする。窯壁・窯底・煙道は火熱を受けた痕跡が顕著で、窯壁・煙道の内面にはタール状物質が厚く付着・浸透している。天井部はすべて崩壊し構造は判らない。焚き口部から焼成室前半にかけての底面には、厚さ7~8cmの炭化物層が堆積しており、その上面に、焚き口の閉塞に使用されたとおぼしき角礫が散在していた。

時期 遺物皆無のため時期は不明である。

2号炭焼窯 (図254)

検出 伐採木搬出路の切開面に現れていた。その破壊を受け、遺存状況はあまりよくない。

構造 西向きの緩斜面に、地山を掘り込んで構築されている。平面形状はやや胴張りの台形を呈し、焚き口を斜面下方に向ける。主軸はN-48°-Eを指す。焚き口部は、間口は下底面で0.4 m程度と推定される。焼成室は長さ1.8 m、最大幅1.2 mである。窯壁は最大高0.4 mが残存する。焼成室底は平坦だが、焚き口部に向かって緩い上傾斜をなしている。煙道は検出されなかった。取り付き口が高い位置にあるのだろう。窯壁・窯底は火熱を受けた痕跡が顕著で、窯壁の内面にはタール状物質が付着・浸透している。天井部はすべて崩壊し構造は判らない。焚き口部から焼成室前半にかけての底面には、炭化物層が薄く堆積しており、その上面に、焚き口の閉塞に使用されたとと思われる角礫が散在していた。

時期 遺物皆無のため時期は不明である。

第3節 小結

今回の調査では、須恵器・瓦窯跡は確認されなかった。土井ノ入窯跡の分布範囲は、上信越自動車道用地には及んでいないと考えられる。炭焼窯については、前述のように出土遺物が皆無で、存続時期を明確にし難いため、窯底に残っていた炭化材を試料として放射性炭素年代測定を実施した。その結果、1号炭焼窯出土の炭化材が「1560 ± 80 y .B.P.」、2号炭焼窯出土の炭化材が「1440 ± 80 y .B.P.」という測定値が得られた。いずれも古墳時代に相当する年代値である。しかし、こうした形態の炭焼窯の出現が古墳時代まで遡り得るかどうか、いま、意義のある見解を示すことができない。今後の課題としておきたい。

引用・参考文献

森嶋稔ほか 1981『坂城町誌』中巻 歴史編 (一)

比田井克仁・竹田均 1981「No.588 遺跡3 近世以降 1) 炭焼窯」『多摩ニュータウン遺跡—昭和55年度—』第2分冊

（財）東京都埋蔵文化財センター

福田敏一 1982「No.759 遺跡3 近世以降 炭焼窯について」『多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—』第4分冊

（財）東京都埋蔵文化財センター

第11章 観音平経塚

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の位置

観音平経塚は、坂城町坂城字観音平 4355 に所在し、千曲川右岸地域の鏡台山南麓末端で、観音沢川右岸の山裾に立地する礫石経塚である。農道の開削に伴って発見され、1979年に発掘調査が行われたが、報告書は未刊である。上信越自動車道建設に先立って実施した今回の発掘調査では、経塚背後の斜面部についても調査を行ない、下部納骨施設を有する五輪塔群の存在を確認し、墓域としての性格も明らかになった。遺跡は、南西方向に下る小谷の開口部にあたり、前面にはなだらかな傾斜地が開け、水田および果樹畑として利用されている。標高は511～523 mを測る(図255)。

1979年の発掘調査の結果については『坂城町誌』中巻(米山1981)にその一端が報告されている。それによると、経塚の構造は、「山根を削平して平坦面を造成し、ここに粘板岩山石に墨書した数多くの経石を丁寧に積み重ね、この経石を覆う如く上に扁平河原石を以って葺き、これ等葺石の間に粘土を詰めて、河原石の間隙を塞ぎ上に土を盛ってあった如くである。この盛土の上には石造五輪塔の各輪が分解した状態で散在していた。従って、この経塚の上には当初五輪塔が建置されていたものと考えられる」という。また、「底面から永楽銭1枚、開元銭1枚が検出された」ことから、経塚の造営年代を1408年以降の室町時代とし、五輪塔については室町中期という年代観を示している。調査は途中で中断され、以後再開されることはなかった。なお、前もって述べておくと、坂城町教育委員会の御厚意で、その出土資料を実見したところ、この永楽銭とされた銭貨は皇宋通宝であった。

観音平経塚の南方1.1kmには、同じく中世の経塚である蓬平経塚が存在する。御所沢集落の北方には、中世において修善寺次いで満泉寺が存在したと伝えられる一帯の地がある。経石は、この修善寺・満泉寺旧地の傾斜地において、分解して埋没した五輪塔の下から検出された。総数80点を数え、経文は弥陀三部経と考えられている(米山1981)。同地からは五輪塔が多数発見されており、現在、その一部が出土地からやや離れた所に集積されている。五輪塔は形態変化・使用石材の組み合わせが観音平に類似し、両者の造営期間が近接・重複することや製作集団が共通する可能性を示している。

現在の満泉寺は、坂城を本拠地とする国人領主であった村上義清の子景国が、天正10年(1582年)に海津城主となった際、村上氏代々の居館であった所に旧満泉寺を移して再興したものであるという。また、坂城町には中世の山城跡が数多く存在する。いずれも村上氏関係の城と考えられており、その主城が居館北方の山稜上に築かれた葛尾城である。葛尾城を要として、南には和合城、西南には出浦城等が配置され、本拠たる坂城を取り囲む防衛線を形成している。

2 調査の経過

調査は平成4年9月14日～11月26日に実施した。調査面積は延べ3600㎡である。

遺跡の現況を確認するために現地踏査を行なったところ、遺跡発見のきっかけとなった農道法面に、経石の集積が厚さ20～30cm程の帯状に連なって露出していた。これにより経塚残存部の存在が判明し、この部分の発掘調査が必要となった。なお、西側部分には1979年出土と思われる五輪塔が再立されていた。

発掘調査は、まず、重機を用いて、経塚上に堆積している崩落土を除去することから始めた。開始時点では、五輪塔群の存在は予想されず、従って、調査範囲も経塚残存部に限定する予定であった。しかし、

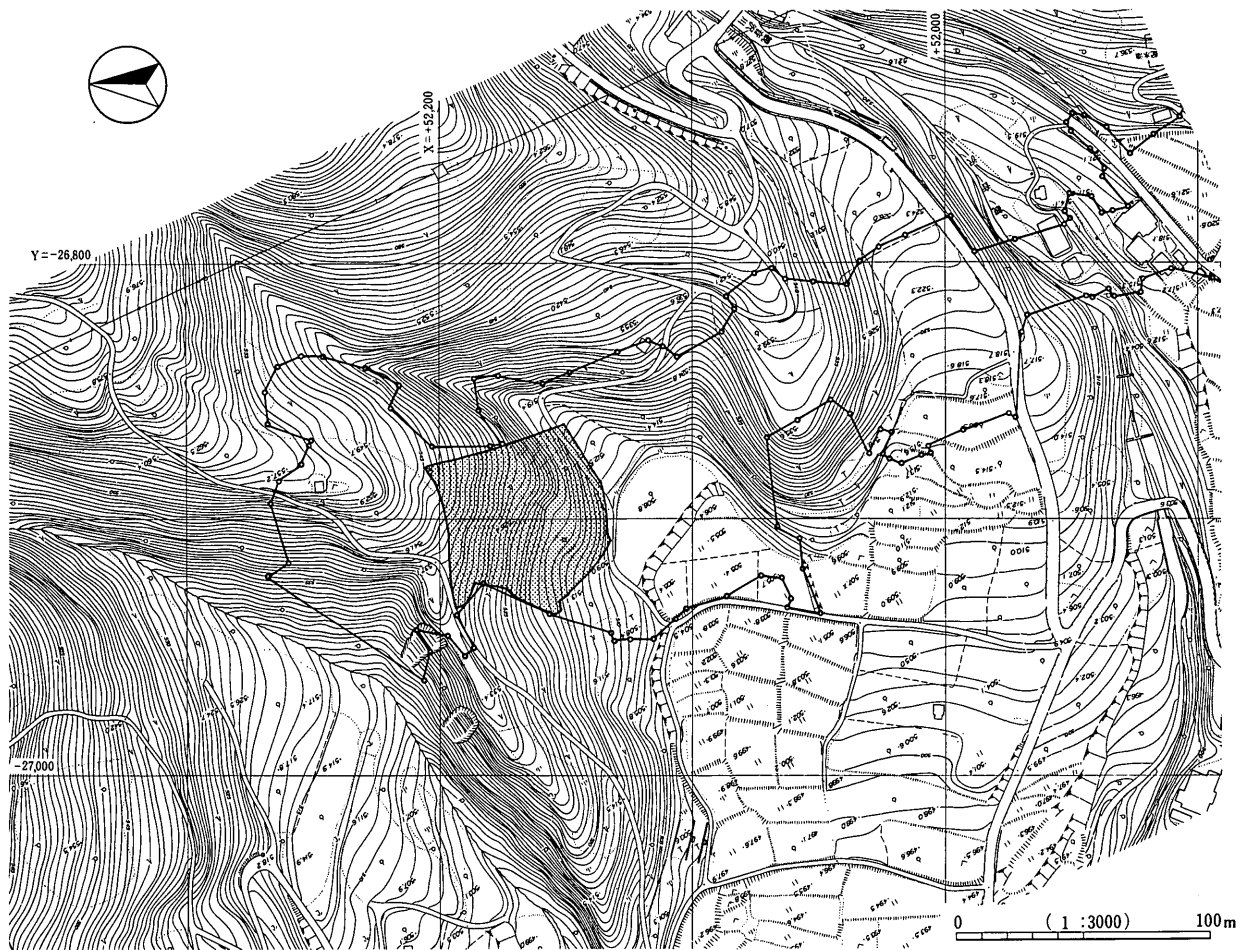


図 255 調査範囲

崩落土を除去する過程で、崩落土中から五輪塔各部が多数出土し、経塚背後の斜面に五輪塔群の存在が予想されるに至った。そこで、調査範囲を経塚背後の斜面全域に拡大することとした（図 255）。

表土・崩落土を除去した結果、7群からなる五輪塔群が把握された。五輪塔は大部分が分解した状態であったが、火輪以下が原位置をとどめ塔としての形態を保つものも存在した。五輪塔の状況を記録して取り上げた後、下部構造の調査に入り、7群のうち5群で火葬骨を納めた下部施設が検出された。

経塚についても、それを覆う崩落土を取り除き、斜面裾を縁どるように敷設された経塚残存部を検出した。経塚の東寄りにはその直上に五輪塔が造立された部分があり、五輪塔群は合計7群となった。西端から約6mの部分は、算用数字を注記した経石を含むため、1979年調査以後に復元した部分であることが判明した。経塚の経石敷設部の調査を終えた後、経石を取り上げ、その直下中央に1基、東寄りに1基、計2基の火葬墓を確認した。これにより、経塚の造営がこの火葬墓と密接に係わることが明らかになった。なお、測量基準杭の設定は、経塚および各五輪塔群に任意位置の杭を打設した（図 256・257）。



図 256 遺構全体図

第2節 遺構と遺物

1 経塚

(1) 経石集積 (図 258)

経塚は、南面する山裾斜面の末端部を削り出して造成したテラス状の平坦面に構築されている。テラスの平面形は東西に長い弧状を呈する。規模は東西 15 m、奥行きは最大 (中央) 2 m を測る。テラス面は前 (南) に向かって下り勾配を成し、高低差は最大で 50cm、最奥部の標高は約 511.3 m である。

経石はテラス面直上の全域に敷き詰められている。扁平な頁岩礫を用いた経石を、扁平面を上下にして敷き並べ、積み重ねて、厚さ平均 30cm 程に集積する。下部に大振りの経石を配し、上部には小振りの経石を積む傾向が看取される。経石自体の形状・大きさが一定していないため、積み重ねは総体的にはさほど整然としたものにならないが、下部の積み方は比較的整った様相をみせている。

経石の間隙には暗茶褐色土が詰まっている。比較的硬いが、意図的に充填し経石の固定を図った状況ではない。また、1979 年の調査所見では、経石集積の上を粘土とともに河原石で覆った状態が述べられているが、そうした二層構造は認められず、経石集積の上は直接崩落土が覆う。

経石集積部の東寄りには五輪塔が造立された個所がある。この五輪塔群 (B群) は経塚に供伴するものではなく、経塚が埋没した後に、再度掘削して小テラスを造り出したものである。

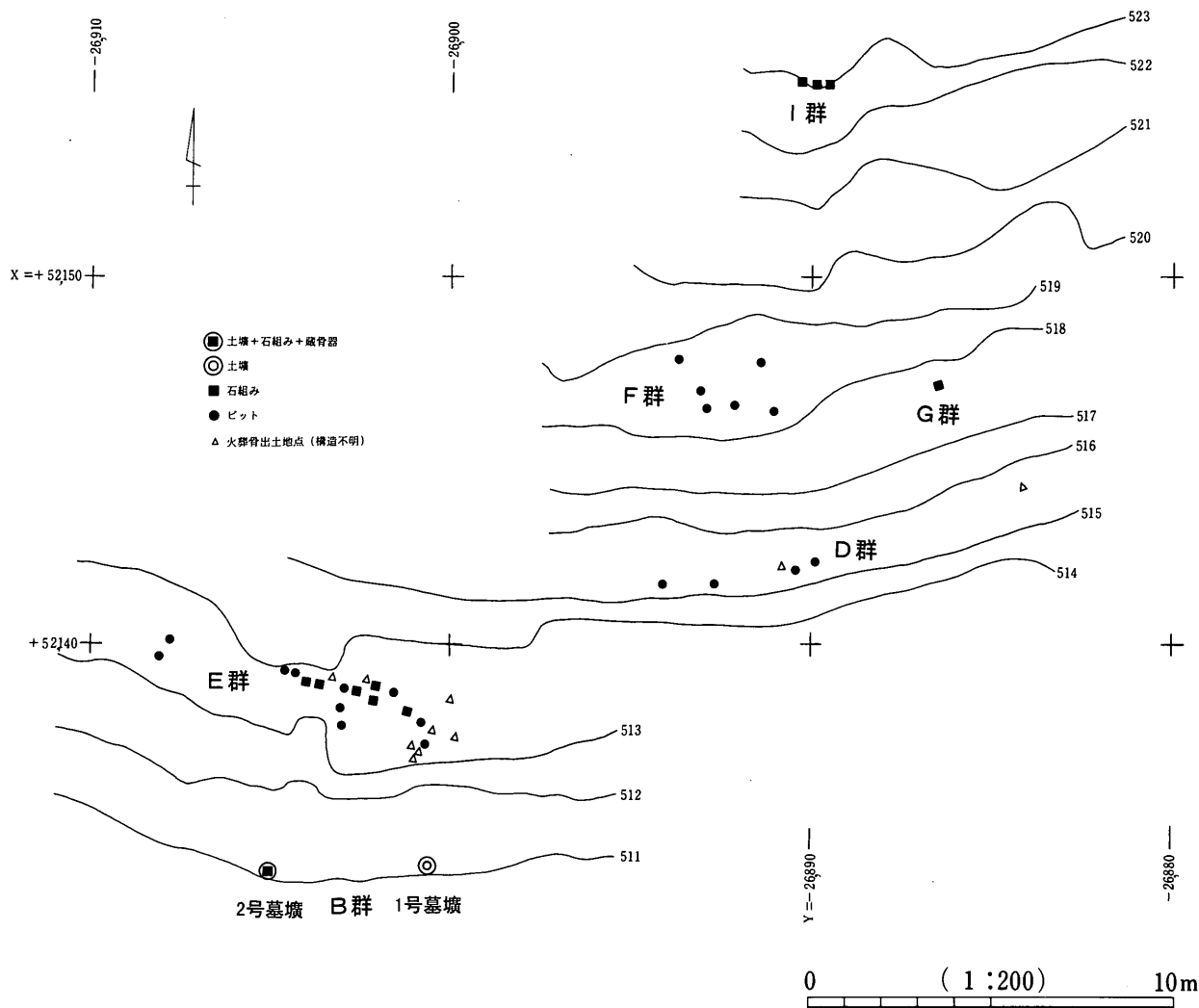


図 257 納骨施設等の分布

なお、前述したように、西端から約 6 m までの部分は、画然と分離できないが、算用数字を注記した経石を含むことから、1979 年以後に復元された部分と理解される。ただし、改変を受けていない東部との繋がりを見ると、旧状をほぼ忠実に復元したと考えてよいと思われる。

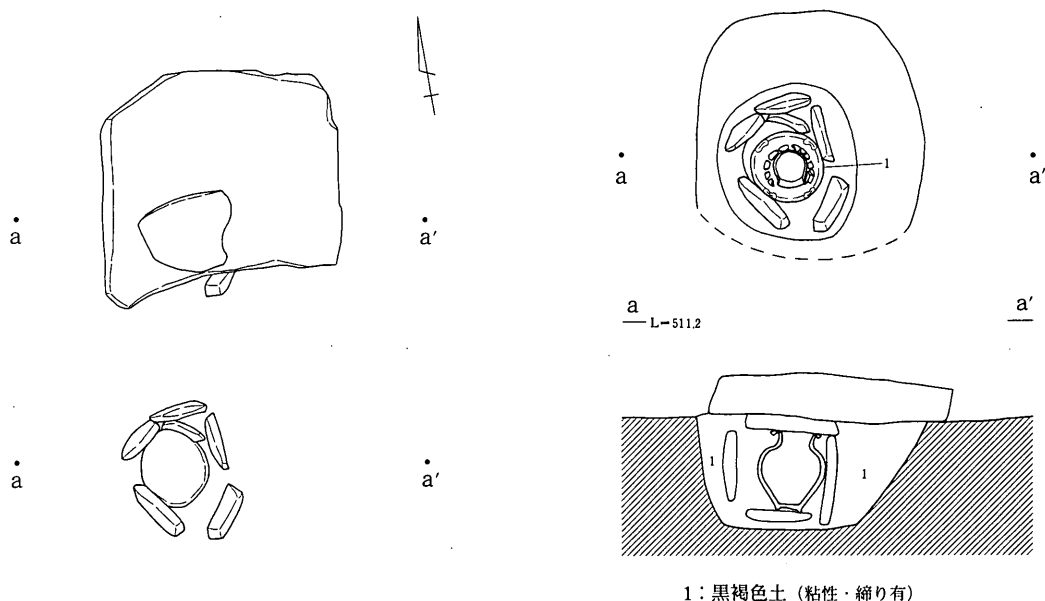
(2) 1号墓塚 (図 259)

経石集積の直下には火葬骨を納めた墓塚が存在する。1号墓塚は経石集積の東寄りに位置する。墓塚は、106 × 85cm 程の平面楕円形を呈し、断面形は逆台形に近いが、途中で傾斜がやや変換する。深さは 30cm を測る。なお、墓塚周縁にみられる石は地山の礫である。墓塚埋め土は炭粒と焼土を含み、3層に分層できる。火葬骨片は埋め土最上層から検出された。埋め土中に包含された状態で、量的にも多くない。副葬品は認められない。一応、墓塚としたが、上記の状況から考えて、単独の墓ではないだろう。恐らく、2号墓塚の蔵骨器に収まりきらなかった火葬骨片を、遺体を茶毘に付した際の炭・焼土ごと埋納した施設ではなかろうか。壁面または底面が被熱した痕跡はないので、火葬施設とは考えられない。



図 258 経塚・五輪塔 B 群

2号墓壙



1号墓壙

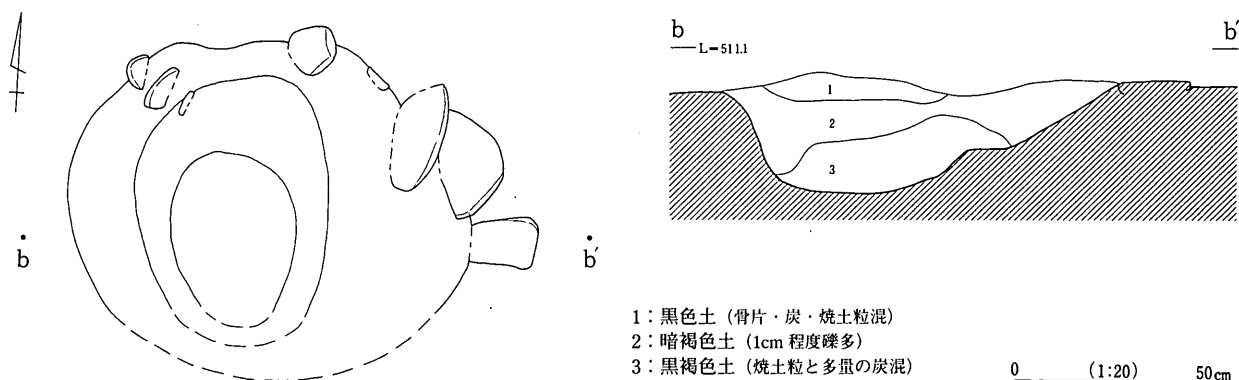


図 259 1号・2号墓壙

(3) 2号墓壙 (図 259)

2号墓壙は経石集積の中央に位置している。墓壙は、65×60cm程の隅丸方形に近い平面形状をもち、断面形は深さ30cmの逆台形を呈する。墓壙内に扁平な河原石を組み合わせた石椀状の施設をつくり、そのなかに蔵骨器を納めている。石組みと墓壙掘り方のは黒褐色土を充填し、さらに墓壙全体に蓋をするように60×50×10cmの大形板状石を置いている。石組みの構築は、墓壙底に薄く黒褐色土を敷いた上に円形の底板石を置く。底板石に蔵骨器を乗せ、それを楕円形の石を縦長に用いた側壁石6枚で囲み、さらに蓋石を被せる。蔵骨器の内部には口縁までいっばいに火葬骨片が満たされていた。副葬品はない。なお、経石集積と墓壙は一体の構造として捉えることができ、2号墓壙の構築位置と構造の入念さからみて、この被葬者の葬送儀礼に伴って礫石経が埋納されたと理解すべきである。蔵骨器はいわゆる古瀬戸草創期に位置付けられる四耳壺で、その比定年代の12世紀後葉は、経塚造営年代の上限を示している。ただし、あくまで上限であって、これを以て経塚の年代を直ちに12世紀後葉と断定することはできない。

なお、2号墓壙蔵骨器および1号墓壙検出の火葬骨については付章第5節を参照されたい。

2 五輪塔群

五輪塔群は合計7群が確認された。いずれも斜面を削り出して造成したテラス状平坦面に造立されている。B・H群を除く5群で、火葬骨を埋納した下部納骨施設が検出された(図256・257)。

納骨施設は、原位置をとどめる五輪塔と明確な対応関係をもって検出された例がごく少ない。ただし、納骨施設はその直上に板状石を伴う例が多く、また、五輪塔には台座として板状石を敷く塔がままあることから、納骨施設の直上に塔を立てた場合も多かったことは十分に考えられる。なお、C群は上方から転落した五輪塔各部がたまたま集中したものであり、A群は1979年以降に再立されたものである。

五輪塔は群ごとに番号を付した。番号は塔番号であるので、火輪・水輪・地輪各部のなかに同番号が存在する。下部納骨施設についても群ごとに番号をふった。本報告にあたって、五輪塔・納骨施設番号は調査時の番号をそのまま用いている。

各五輪塔群から検出された五輪塔と納骨施設の概要は、表4・5に示した通りである。なお、納骨施設に納められていた火葬骨については付章第5節を参照されたい。

(1) B群(図258)

経塚の東寄りに位置する。経塚を覆う崩落土層を掘返し、経塚上面を露呈させた上に建置されている。奥側に地輪2点(B2-1・6)が板状石の上に横に並び、東側の地輪は火輪を乗せたままの状態を保っている(B2-6)。中央には地輪2点(B5・8)が並ぶ。前側には地輪3点(B1・6・10)が等間隔で横に並ぶ。B1は出土した中で最大の地輪である。以上は原位置をほぼとどめていると考え得る。これらの間には倒落した地輪・水輪・火輪・空風輪が散乱するが、上方から転落してきたものも含むかもしれない。B2・3はB6と、B7・9はB5と、B12・4はB2-1と組み合うことが、石材およびプロポーシヨンのバランス、そして出土位置からみて明らかである。なお、B群では納骨施設は確認されなかった。

B群の背後には、経石を用いた石垣状の施設が構築されている(図258・260)。断ち割りトレンチを開掘する際に西端の一部を破壊してしまったが、幅2.4mが残存し、高さは約70cmを測る。掘削面の崩壊を防ぎ、B群を保護する目的で造られたことは間違いなからう。石垣の用材として経石が使用されていることは、B群が経塚を覆う土層を掘り込んで立てられた事実とともに、経塚造営と五輪塔群造立との間に時間的隔たりがあると見做す理解に一定の根拠を与える。

表4 出土地点別五輪塔数と納骨施設数

	空 風 輪 (点)	火 (点) 輪	水 (点) 輪	地 (点) 輪	五 輪 塔 合 計	納骨施設
A 群	10	11	9	11	41	
B 群	7	4	5	7	16	
C 群	5	6	0	1	12	
D 群	9	14	7	14	44	4 骨片出土2
E 群	23	36	33	37	129	16 骨片出土8
F 群	13	18	19	28	78	6
G 群	5	10	5	16	36	1
H 群	9	8	9	13	39	
I 群	0	5	1	5	11	3
合 計	81	112	88	132	413	30 骨片出土10

表5 五輪塔群納骨施設一覧表

番 号	構 造	規 模 (cm)			出 土 遺 物	備 考
		長 さ	幅	深 さ		
D-P1	ピット	56	28	16	焼骨片	
D-P2	ピット	41	34	24	焼骨片	
D-P3	不明	4	4	—	焼骨片	
D-P4	ピット	65	35	8	焼骨片	
D-P5	ピット	19	22	4		
D-P6	不明	12	11	—	焼骨片	
E-P1	不明	6	6	—	焼骨片	
E-P2	不明	8	8	—	焼骨片	
E-P3	不明	10	8	—	焼骨片	
E-P4	ピット	46	34	—	焼骨片 刀子	浅い皿状ピット
E-P5	不明	12	10	—	焼骨片	
E-P6	ピット	32	28	8	焼骨片	
E-P7	石組み	22	(16)	17	焼骨片	
E-P8	ピット	10	10	—	焼骨片	
E-P9	ピット	26	24	10	焼骨片	
E-P10	石組み	31	19	6	焼骨片	
E-P11	不明	4	4	—	焼骨片	
E-P12	石組み	14	18	10	焼骨片	
E-P13	石組み	24	18	8	焼骨片	
E-P14	ピット	30	24	20	焼骨片	
E-P15	ピット	28	24	20	焼骨片	
E-P16	不明	4	4	—	焼骨片	
E-P17	不明	7	7	—	焼骨片	
E-P20	ピット	30	22	14	焼骨片	
E-P21	石組み	56	(24)	15	焼骨片	
E-P22	ピット	20	16	4	焼骨片	
E-P23	ピット	26	25	15	焼骨片 銅銭3枚	
E-P24	石組み	24	24	16	焼骨片 刀子	
E-P25	ピット	28	22	10	焼骨片	
E-P26	ピット	21	18	9	焼骨片 銅銭1枚	
F-P1	ピット	12	13	6	焼骨片	
F-P2	ピット	13	16	4	焼骨片	
F-P3	ピット	14	13	4	焼骨片	
F-P4	ピット	21	17	3	焼骨片 小皿	
F-P5	ピット	15	15	8	焼骨片	
F-P6	ピット	16	16	5	焼骨片	
G-P1	石組み	30	28	16	焼骨片 銅銭2枚	石組み上に大形板石 底石下にも焼骨片
I-P1a	石組み	26	(24)	18	焼骨片	3連石組み(東)
I-P1b	石組み	33	28	18	焼骨片	3連石組み(中)
I-P1c	石組み	32	(26)	9	焼骨片	3連石組み(西)

(2) D群 (図262～264)

E群の東方、F・G群の下方に位置する。斜面を削り出したテラス上平坦面上に造立されている。テラスは現状で東西11m、奥行き1mの幅狭いもので、標高は515.5m、E群との比高2m弱である。

五輪塔は、テラスの奥側に配置される。中央部には地輪3点(D16・23・24)が直下に板状石を伴って横に並び、東側の2基は火輪を乗せたままの状態を保っている(D16・23)。その東側には2群のまとまりが認められる。地輪D11・2は板状石の上に乗せ、原位置をとどめる可能性がある。その他は各部が散乱した状態といえる。或いはF・G群さらにH群から転落してきたものを含むかもしれない。

納骨施設は4基検出された。いずれもテラス面をピット状に掘り込むもので、平面形は楕円形ないし長楕円形を呈する。他に焼骨の集中が2基みつかった。形態は不明確である。これらは原位置をとどめる五輪塔のまとまりから外れる位置で検出された。

(3) E群 (図260・261)

経塚の上方に位置する。五輪塔が造立されるテラスの範囲・形状は明確ではないが、現状で、奥行きが1.5m、東西13m程である。標高は513.5m前後で、経塚との比高は2m強を測る。

五輪塔は、西半部の遺存状況が良く、火輪まで原位置を保つ塔4基(E85・83・82・57)、水輪まで残る塔4基(E71・69・80・55)が存在する。一方、東半部の五輪塔は殆ど倒壊している。配列状況や板状石を伴うことから地輪4基(E34・28・12・4)が原位置をほぼとどめる可能性がある。五輪塔の配置は、西端近くのE82と東端のE4を通る直線上に、西部～中央部では、地輪E77・67および火輪まで残る塔E57・55が並び、東半部では、地輪E34・28・12のほか、下部納骨施設も一列に並ぶことから、これがE群の中軸線であることが理解される。西部では、中軸列の前面にE85・83・81・80が横に並び、背後にはE71・69・68が並ぶ。従って、3列構成であったと考えられる。東部では、納骨施設の配置からすると、中軸列の背後に1列、前面に2列の計4列構成を取っていた可能性がある。中央部に位置するE57・55のすぐ背後には石垣状の施設が高さ40cm程に残存し、その間に五輪塔を立てる余地はないため、この部分は中軸列のみか、または前列を加えた2列であったろう。また、E57・55およびE28は他の塔に比べて大形で、かつ両者の中間には入念な構造をもつ納骨施設E-P24が存在する。中央部がまさにE群の中核を成す部分であることが推定されよう。

納骨施設は16基検出された。その大部分が中央部から東部に集中する。構造は、石組みのもの6基、楕円形ないし円形のピット10基である。他に焼骨の集中が8基みつかったが、その形態は不明確である。石組みは、扁平な角礫を底板石にして、数枚の扁平礫を組合わせた側壁を立てる構造が主体である。礫を斜めに用いて揺り鉢状の形態をつくるもの(E-P10)、円礫を並べて底部を構成し二重の蓋石を伴う入念なづくりの構造(E-P24)が各1基ある。納骨施設の配置は、中央部から東部にE-P20を西端、E-P6を東端とする9基が中軸上に直線的に並んで主列を構成する。さらに、その背後に2基、前面に3基が検出されている。この集中部の他には、E-P20から西に3.5m程離れた西端部付近に2基が存在するが、その間では納骨施設は確認されなかった。石組みの納骨施設は中軸上に配列されたものにほぼ限られる。五輪塔と納骨施設の対応関係は、E-P23が五輪塔E85の真下に構築されていることから、その下部構造を成すことは明らかである。また、E-P13は五輪塔E28と、E-P22は五輪塔E34とそれぞれ対応することはほぼ間違いないだろう。

副葬品をもつ納骨施設は4基あり、E-P23は銅銭3枚、E-P26は被熱した銅銭1枚、E-P24は刀子1本、E-P4は刀子1本、をそれぞれ副葬している。



图 260 五輪塔 E 群

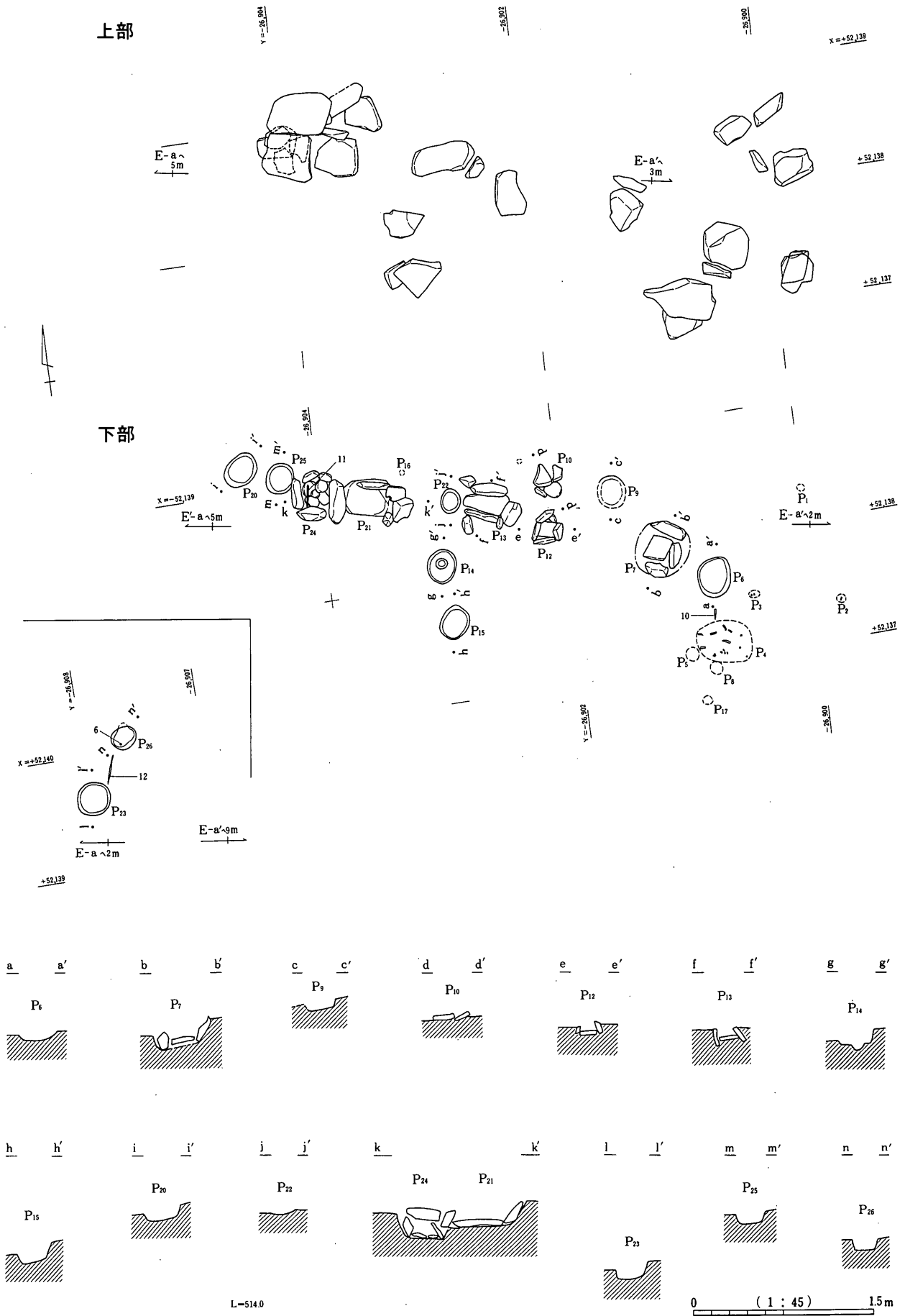


図 261 五輪塔 E 群納骨施設

(4) F群 (図262～264)

D群西部の上方に位置する。テラスは現状で奥行き1.5m強を測る。東西幅は明確ではないが、五輪塔の造立範囲は約5mである。標高は519m前後、D・G群との比高はそれぞれ3.5m・1m強である。

五輪塔は、西半部の遺存状況が良く、火輪まで原位置をほぼ保つ塔4基(F47・46・38・37)、水輪まで残る塔2基(F45・42)が存在する。一方、東半部の五輪塔は殆ど倒壊しているが、水輪まで残る塔が1基(F31および30)ある。五輪塔は、テラス奥の中央から東部にF38・37・34・31および30・27が横に並び、その前面には地輪F26・25・22・24がほぼ等間隔で並ぶ。西部では、東部の後列と前列の中間の位置に、F55・50・47・46・45の5基が列を成す。55はやや離れているが、50～45は肩を寄せ合うように並んでいる。また、その前面に接近して地輪F51がある。さらに、中央前側のやや離れた位置にF42が立つ。従って、五輪塔の配置は、東部・中央・西部でそれぞれ軸線を違えた2列構成として復原されようか。

以上の一群から若干下方に離れた小規模なまとまりがある。調査段階ではF群に含めて一括したが、本来、別個の五輪塔群として把握すべき一群であろう。記述の都合上、これをF-2群と呼ぶ。五輪塔はすべて倒壊しており、原位置をとどめたものは明確には認識できない。

納骨施設はF-2群を含めて6基検出された。むしろF-2群に近い位置の検出が多く、F群下で検出したものはF-P4だけである。五輪塔の空白域でも1基確認された(F-P5)。形態はいずれも平面円形を呈するピットである。F-P4の底面には土師質小皿が正位でおさめられ、火葬骨は小皿の上に埋納された状態であった。

(5) G群 (図262・264)

D群東部の上方に位置する。テラスは現状で奥行き約1.5mを測る。東西幅は明確ではないが、五輪塔の造立範囲は3.5m程と思われる。標高は517.7m前後、D群との比高は2m強である。

五輪塔は、すべて倒壊し、各部が散乱した状態である。僅かに、テラス奥にあって直下に板状石を伴う地輪G19が原位置をとどめる可能性が推測される。地輪G5も板状石の上に乗っているが、山側にずれた位置にあり、両者が共伴関係にあるとは思われない。

納骨施設は、地輪G5が乗る板状石の直下に1基検出された。扁平な角礫を組み合わせた石室状の形態である。蓋石の上には板状石が被せられ、二重に蓋をしたような構造となっている。掘り方は、その上部が板状石を設置する分広く掘り込まれ、2段掘り状の形態を成す。この施設には多量の火葬骨が埋納されていた。全重量は2110.6グラムあり、ほぼ1体分に相当する(付章第5節参照)。なお、底石の下にも少量の火葬骨が納められていた。

(6) H群 (図263)

F群の東北東に位置する。テラスは現状で、奥行き最大1.5m、東西幅4.4mを測る。標高は521.3m前後、F群との比高は2.3m程である。

13基の小形五輪塔が、やや弧状を呈しつつ等間隔で1列に並んでいる。火輪まで原位置を保つ塔が2基(H20・6)、水輪まで残る塔が6基(H19・18・14・10・9・4)存在する。各五輪塔は、若干のバリエーションはあるものの、ほぼ同様な形態・大きさを持ち、石材も同じである。五輪塔のこうした様相は、この群が一括造立されたものであることを示唆している。納骨施設を伴わないこと、対応する個別の埋葬遺構が認められないことを考え合わせると、H群については、墓標ではなく専ら供養塔としての性格を想定するのが妥当と思われる。なお、D群中央部の五輪塔は、やや大形だが、H群と同様な形態である。



图 262 五輪塔 D·F·G 群

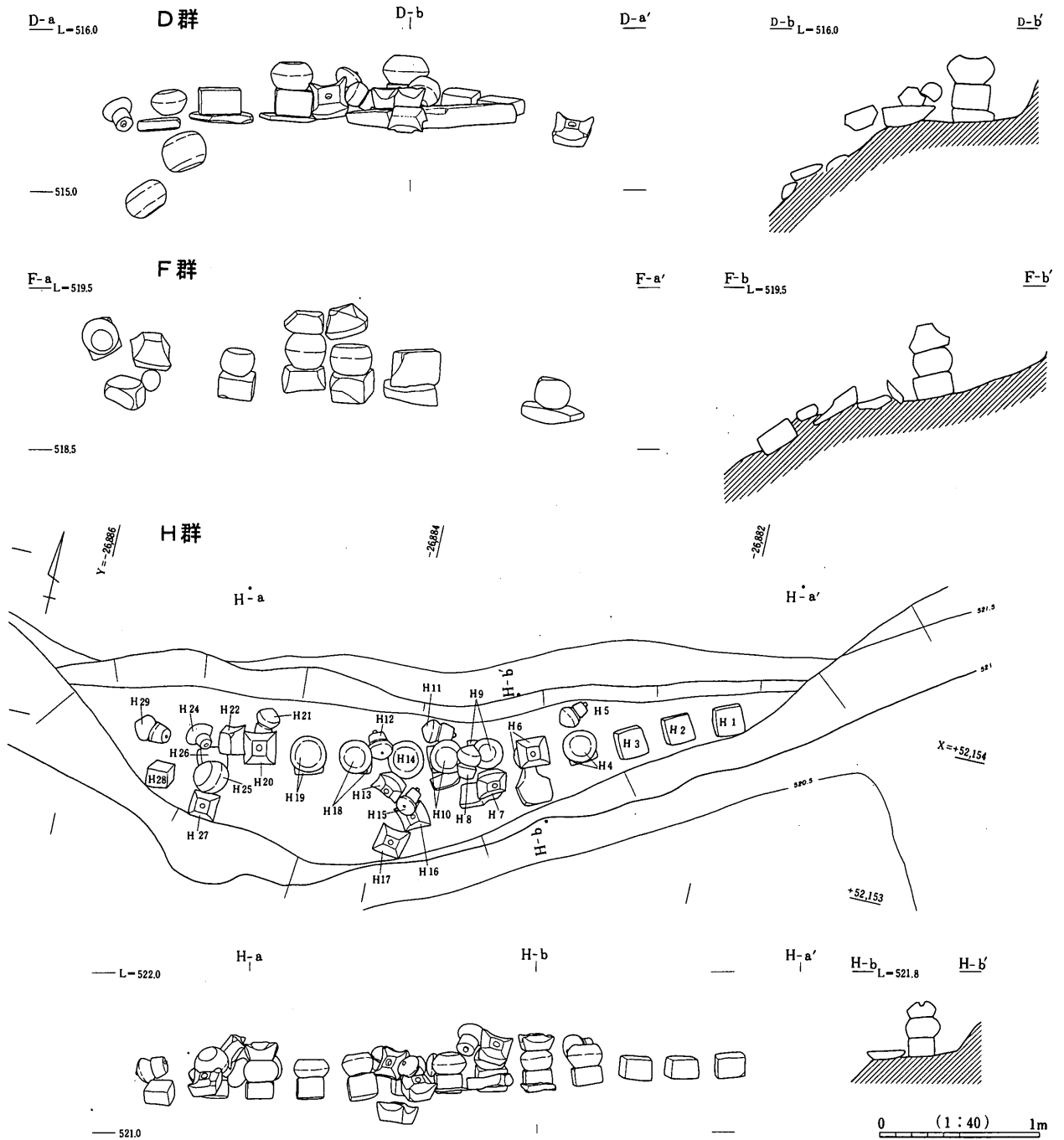


図263 五輪塔D・F・H群

(7) I群 (図256・264)

H群の北北西に位置する。標高523m、H群との比高は2m弱である。テラスは明確でない。

五輪塔はすべて倒壊し、殆ど下方に転落している。納骨施設は、扁平な角礫を組み合わせた石室状のもので、3室が隔壁を共有して縦列する構造である。ただし、西端の側壁を失っているため、西にさらに連続する可能性は否定できない。

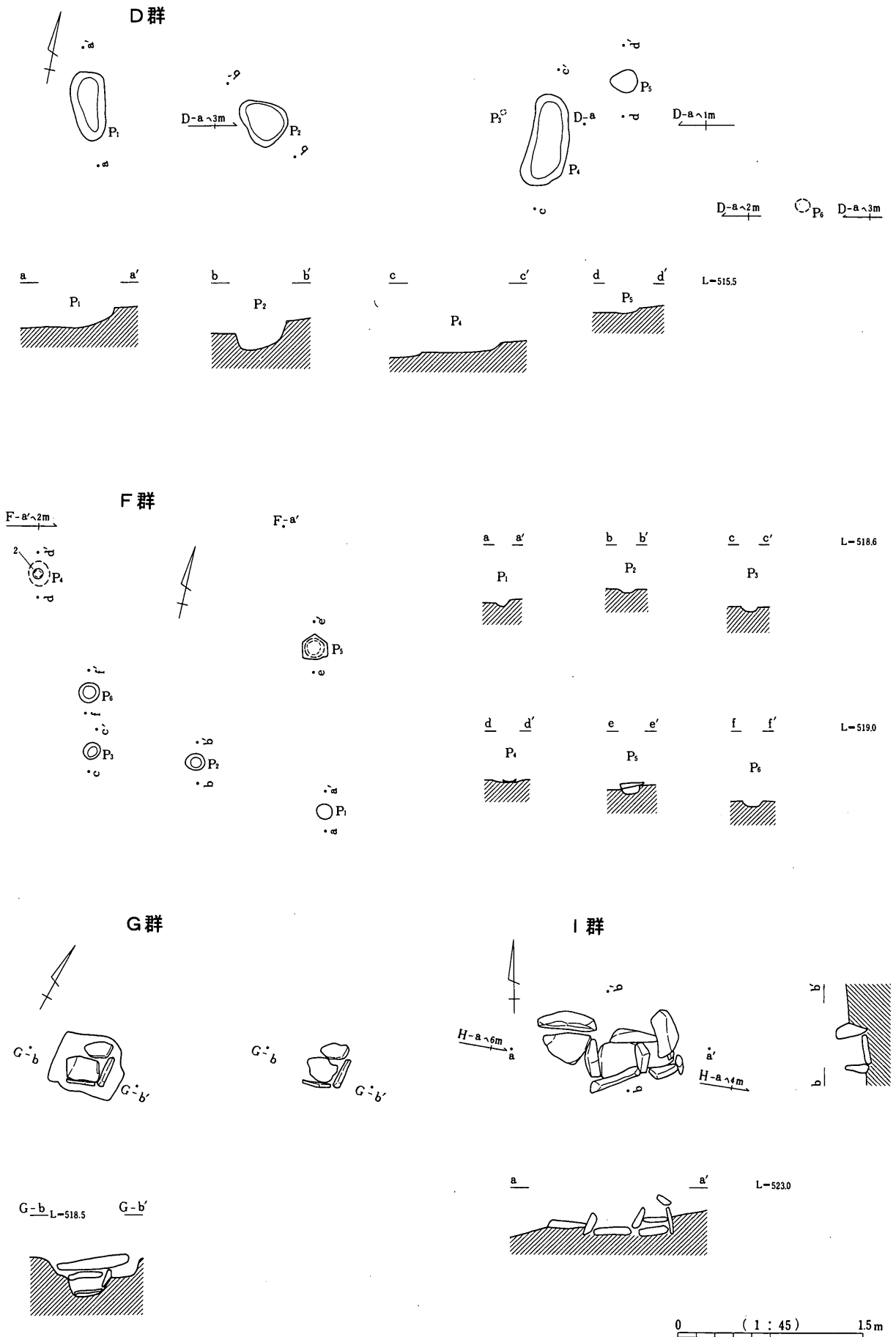


図264 五輪塔D・F・G・I群納骨施設

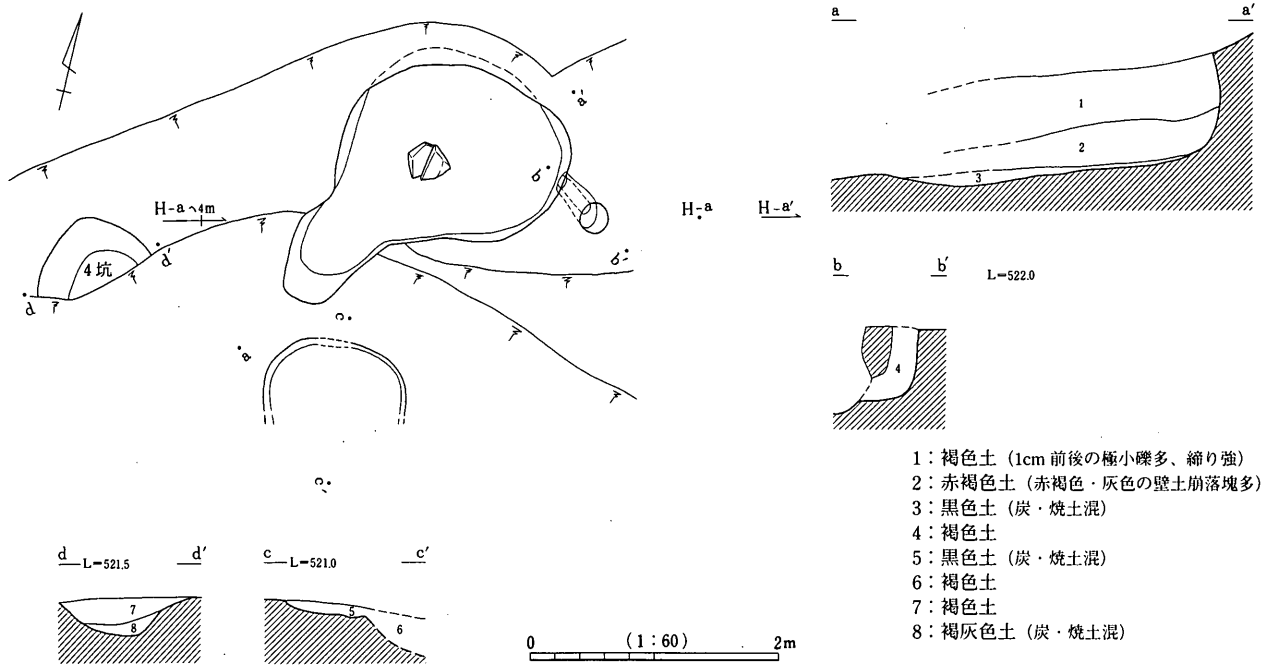


図 265 炭焼窯

3 炭焼窯 (図 265)

五輪塔H群とI群の間に位置する。平面形状はイチヂク形を呈し、焚き口を斜面の斜め下方に向ける。規模は全長 2.5 m、最大幅 1.6 m である。焚き口部は間口の下底面で 0.6 m を測る。焼成室は長さ 1.7 m、最大幅 1.6 m で、主軸は N-40°-E を指し、等高線の流れに対して斜行する。窯壁最大高は 0.8 m を測る。窯底は、焼成室奥壁から焚き口に向かってやや下り傾斜を成すが、焚き口部では緩く立上がっている。煙道は地山をトンネル状に掘り込んで右奥隅に付設される。窯壁・窯底・煙道は火熱を受けた痕跡が顕著であり、窯壁・煙道の内面にはタール状物質が厚く付着・浸透している。天井部はすべて崩壊し構造は判らない。焚き口部および焼成室の底面には厚さ 10~3cm の炭化物層が堆積している。前庭部の右側には一段低くなった掘り込みがあり、その軸は焼成室の主軸より東に振り、等高線に対して直交する。上面を覆って炭化物層が堆積している。また、左側には土坑が 1 基存在する (4 号土坑)。覆土下層には炭・焼土が含まれている。なお、焼成室の覆土上部には五輪塔 I 群から転落した地輪 (I 9) が含まれているが、これを以てこの炭焼窯を I 群より古いと断定することはできない。操業時期は不明である。

4 出土遺物

(1) 土器・陶器 (図 226)

古瀬戸四耳壺(1) 経塚 2 号墓壙の蔵骨器として用いられていたものである。頸部は太く全体にやや外反して開き、端部を折り返して密着させ幅狭い口縁帯をつくる。口縁帯外面はナデにより浅い凹面状をなす。胴部は肩の張りが比較的強く、その上に付けられた耳は 2 本の粘土紐を平行に並べ密着させた紐耳である。低い高台は断面台形に近い形状を呈し、外側面は直立するが、内側面は内彎して斜めに立ち上がる。しっかりした平坦面を成す高台端部は僅かに外向きで、その内側縁が接地する。胴部外面には、頸部直下・肩・最大径部やや下の 3 段に 2 本一組のヘラ描き沈線を巡らせる。耳は肩部沈線の上に貼り付けている。胴部内面は単位の短いカキメを施すが、輪積み痕を明瞭に残している。縦方向の搔き上げは認められない。外面下半にはロクロ調整以前の縦方向ヘラケズリないしヘラナデが僅かに観察できる。口縁部内面から外面

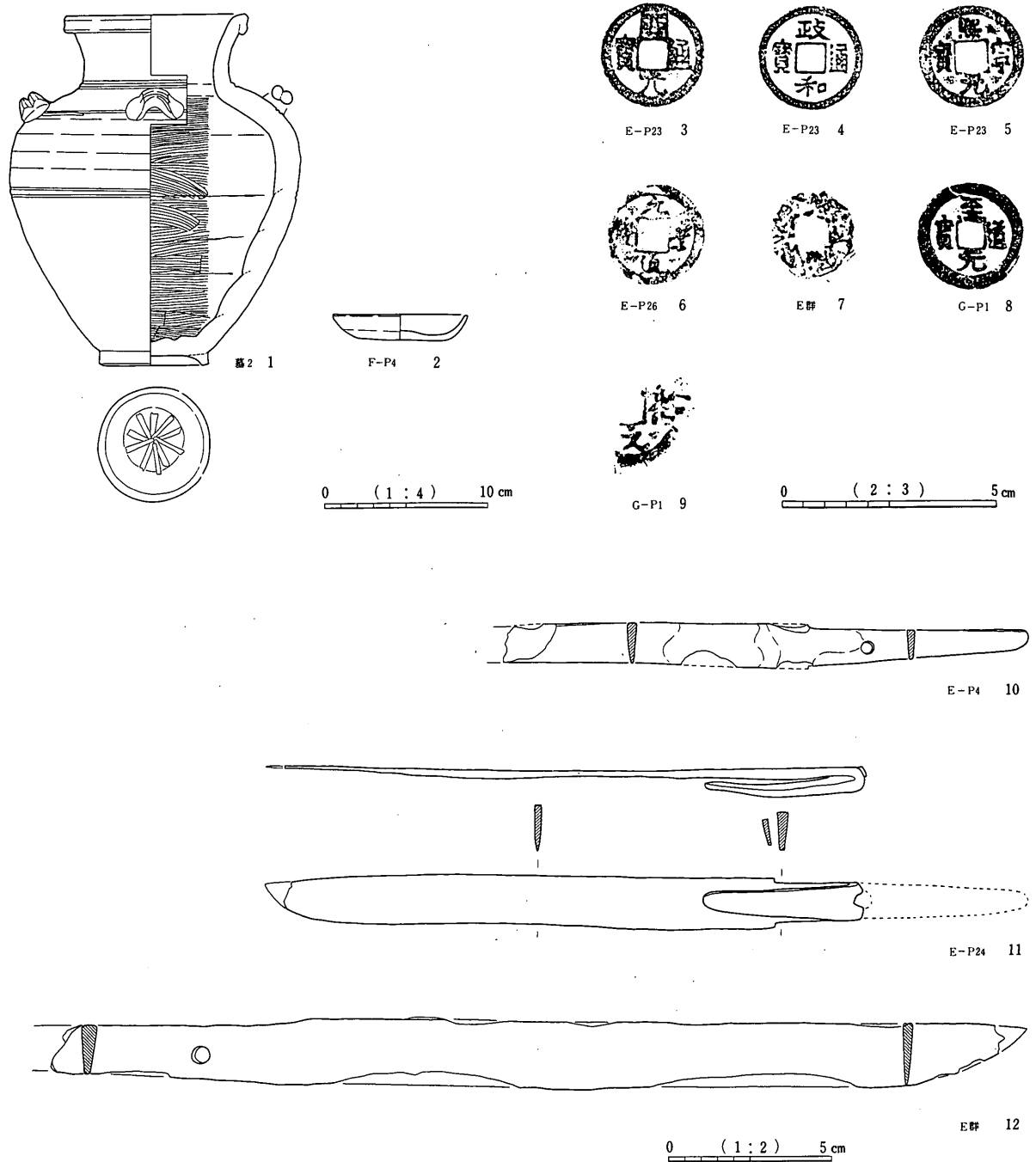


図 266 出土遺物(1) 土器・金属製品

肩部にかけて自然釉が付着しており、内面底部にも自然釉の付着がみられる。なお、胴部内面のカキメは10数条/1cmの非常に細かいものだが、実測図では簡略化した表現をとっている。

以上の特徴からみて、この四耳壺は、古瀬戸「(草創期)」に位置付く資料であろう。「(草創期)」の年代は12世紀後葉と考えられているようである(藤澤1997)。類似資料としては、耳と高台の形態・沈線の施文位置などが青森県市浦村山王坊遺跡出土例(飯村1997・藤澤1997)によく似る。

土師質小皿(2) 五輪塔F群の下部納骨施設F-P4内におさめられていたものである。ロクロ整形で、口縁部はやや内彎して立ち上がり、内面底は中央に向かってやや高まる。底部は回転糸切りの後、中央部に1回だけハケナデを施す。15世紀代に属するか。

(2) 金属製品 (図 266)

銭貨 (3~9) 3~5は五輪塔E群の下部納骨施設E-P 23に納められていた副葬品である。3は開元通宝、4は政和通宝、5は熙寧元宝。6は同じくE-P 26の副葬品で、元豊通宝。7は五輪塔E群のテラス面で検出したもので、開元通宝。8・9は五輪塔G群の下部納骨施設G-P 1の副葬品である。8は至道元宝、9は淳化元宝。6~9は被熱変形しており、遺体を茶毘に付する際に遺体に添えてあったものと推測される。

刀子・直刀 (10~12) 10は刀子で、E-P 4の副葬品である。刀身は平棟平造で、関は両関である。茎の関寄りに目釘穴を1孔開けている。11はE-P 24の副葬品の刀子。刀身は平棟平造で、関は直角に切れ込む両関である。茎の中央関寄りに目釘穴を1孔開けている。また、目釘穴の位置で茎を折り曲げている。12は、E-P 23とE-P 26の間に突き立った状態で検出された短刀である。刀身は平棟平造で、銹化欠落のため関の形状はよくわからない。茎の関寄りに目釘穴を1孔穿っている。

(3) 経石 (PL 74~79)

経石は総数1609点が出土した。そのうち経文が判読できたものは202点を数える。判読できた経文はすべて法華経である (PL 74~79-1~34)。また、文字列としては認識できるが、内容を判読することができなかったものが125点あり、そのうち31点については法華経でないことはわかっている (35~37)。埋経の趣意・目的・年代や関与した人物名を記したものは確認されなかった。

経石は、多字一石形式の礫石経である。殆どすべて頁岩の扁平な角礫を用いており、礫の全面に隙間なく墨書している。文字の大きさ、線の太さ、字画の癖などの違いにより、10類の筆跡を識別した。ただし、報告者は、筆跡鑑定や書体等に関する素養が皆無で、そのための事実誤認もあろう。また、同一人であっても、書写作业の進行に伴う疲労・筆先の状態の変化等により、筆体の雰囲気が変わってくることは十分に考えられる。従って、以下の筆跡分類とそれに基づく作業結果はそうした限界を含んでいる。以下に、分類した各筆跡の特徴を簡単に記す。

筆跡ア (PL 78-2・36) 細かく略文字・異体文字のない字だが、字画の長さや方向が揃っていない。

筆跡イ (PL 78-4) 略文字等のない字だが端整さに欠ける。アに比べ字画が太く文字全体も大きい。

筆跡ウ (PL 78-6・7) 字画は細い。略文字等のない端整な字といえる。

筆跡エ (PL 78-8) しばしば略文字・異体文字を用いる。字画が右下がりであるが、きれいで読みやすい。

筆跡オ (PL 78-18・17) 略文字等はあまり使わない。右下がりであるが、字画が細く、細かい字。

筆跡カ (PL 78-23, PL 79-19・30) 字画が直線的で、角張った形態の印象を受ける。細く長い横方向の字画に比べ縦方向の字画が太く短いため、文字全体が横長に見える。略文字等は用いない。

筆跡キ (PL 79-24・28・32) 右下に向かう字画を長く伸ばす傾向が顕著で、字の大きさが不揃いである。略文字等は用いない。

筆跡ク (PL 79-33・34) 字画が太く短く、かつ、小さくまとまっているため潰れて判読しづらい。

筆跡ケ (PL 79-37) 比較的流麗な字といえ、右上りの傾向を示す。

筆跡コ (PL 79-38) 右上りの傾向を示し、筆跡ケに似るが、やや字画の方向・長さが不揃いと思われる。あるいは筆跡ケと同一人かもしれない。

上記の筆跡分類に基づいて経石を区分けし、分類ごとの、すなわち、各筆記者の筆記内容の把握を試みた。方法は、筆記内容が法華経であると仮定して、その経石が法華経のどの箇所を書写しているかを検索した。書写箇所が判明しないものは、法華経ではなく他の教典を書写したものと判断し得るが、その教典を明らかにすることはできなかった。作業結果については表6に示した通りである。

表6からは以下の点が指摘できるであろう。

- ① 複数の人間が書作業に加わっている。
- ② 書作業の主体となったのは筆跡エ・オ・カ・キの4人である。
- ③ この4人は法華經の序品から第二十八品まで全部を写経した可能性が高い。
- ④ 法華經以外の教典も書写されている可能性が高い。
- ⑤ 筆跡ケ・コの人物は法華經を写経していない可能性がある。

経石は、一つの礫面が文字で埋まると、隣面や裏面へと書写面が移され、礫全面を書き尽くしている。従って、ひとつの経石には、法華經のある部分からある部分までが連続して記されていることになる。ま

表6 経石書写内容

内容	筆跡	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	計	
法華經	序品	1		2		5	3	2	3			16	クうち一点不確定
	第二品	1	1		2	1	5	3				13	
	第三品		1		10	4	3	3				21	
	第四品		2		3	2		2				9	
	第五品				1	4	1	1				7	
	第六品				2	2		2				6	
	第七品		2		3	3	5	5				18	
	第八品				1	2	2	3				8	
	第九品				2	1	1					4	
	第十品				1	2	2		1			6	
	第十一品				2		2					4	
	第十二品				2	2						4	
	第十三品				1	1			1			3	
	第十四品			1	3	2	3					9	
	第十五品				3	1	3	3				10	
	第十六品	1	1		4	2		2				10	
	第十七品			1	2			2				5	
	第十八品				1		1					2	
	第十九品				2	3	3	1				9	
	第二十品				1		3					4	
	第二十一品					2		1				3	
	第二十二品							2				2	
	第二十三品		1	1	2	2	1					7	
	第二十四品	1		1	1	2	2					7	
	第二十五品		1	1		2	3					7	
	第二十六品					1			1			2	
	第二十七品					1		1	1			3	
	第二十八品				1			1	1			3	
小	計	4	9	7	50	47	44	33	8			202	
非	法華經	4		2	7	9		3		4	2	31	
	計	8	9	9	57	56	44	36	8	4	2	233	
判	読不能											94	
総	計											327	

た、これに関連するが、ひとつの経石に二品にわたって書写された例が14点認められた。それらは1点を除いて、例えば第五品と第六品というように連続しており、1品が終了してなお当該経石に余地がある場合は引き続いて次品を書き進めている。

以上、その一端ではあるが、納経に際しての教典書写行為の実態を示すことができたと考える。なお、法華経の経文検索に当っては、松原典明氏に法華経全文を入力したフロッピーディスクを提供していただき、それを用いてはじめて検索作業が可能となった。松原氏に感謝申し上げる。

(4) 五輪塔 (図267～273、表4・7～10・30～34)

五輪塔は、空風輪81、火輪112、水輪88、地輪132点 総数413点を数える。このうち、1979年以後に再立されたA群の41点は、各部がコンクリートで固定されているため、分類の対象から外し、巻末の計測表には記載していない。ただし、他の群にはみられない形態の空風輪1点については、図示・記載した。

観音平経塚の五輪塔は、空輪と風輪が分離しているものが二対認められた。その他はすべて空風輪一体成形である。従って、五輪塔の殆どは4石五輪で造られている。紀年銘を有するものはない。

石材は凝灰岩・安山岩・砂岩を用いている。その質の差から以下のように分類した。巻末の五輪塔計測表における石材の種類はこの分類を表す。

凝灰岩A：細粒である。色調は淡緑黄灰色を呈する。安山岩Aとともに石材の主体を成す。

- 〃 B：異質の岩片を取り込んでおり、軽石は長く伸ばされている。いわゆる溶結凝灰岩である。色調は灰色を呈する。
- 〃 C：粗粒である。特に大きな鉱物がみられるわけではないが、雲母片が入っている。赤褐白色。
- 〃 D：大粒の石英・雲母斑晶が目立つ。灰色を呈する。
- 〃 E：石英斑晶が大きく目立つ。色調は浅黄橙色。
- 〃 F：気泡が多く、軽石様である。青色を帯びた灰色を呈する。

安山岩A：多孔質で、一般に軽い。黒色～黒灰色を呈する。凝灰岩Aとともに石材の主体を成す。

- 〃 B：角閃石・輝石斑晶が目立つ。緻密で重い。色調は灰色。
- 〃 C：Bに似るが異質の岩片を取り込んでおり、角閃石・輝石斑晶はBほど目立たない。紫灰色。

砂岩A：粒子は細かく均一。色調は灰褐色～灰色を呈する。

- 〃 B：粒子は粒径がばらつき、角が取れて丸くなった1～3mmの砂粒が目立つ。にぶい黄橙色。

なお、火輪以下が原位置をとどめる塔、および石材・プロポーシオン・出土位置から組み合わせが判明した塔については図267に示した。

形態分類は、五輪塔各部について、地輪を除き、複数項目の分類視点を設定した。そして、各項目について小分類し、その組み合わせによって個体を形態分類した。

空風輪 (図268・269、表7)

空風輪は、空輪幅と風輪幅の比率、空輪高と風輪高の比率、空輪の最大幅位置の3視点から分類する。

① 空輪幅と風輪幅の比率

- I 風輪幅が空輪幅より大きい (風：空=1：0.9程度以下)。
- II 風輪幅と空輪幅はほぼ同じ (風：空=1：0.9程度～1.1未満)。
- III 空輪幅が風輪幅よりやや大きい (風：空=1：1.1～1.2未満)。
- IV 空輪幅が風輪幅より大きい (風：空=1：1.2～1.4未満)。
- V 空輪幅が風輪幅よりかなり大きい (風：空=1：1.4以上)。

② 空輪高と風輪高の比率

- A 空輪と空輪の高さの差はさほど目立たない (風：空=1：1.6未満)。
- B 空輪は高く風輪との差は明確である (風：空=1：1.6～2.0未満)。
- C 空輪はさらに高く風輪との差もひろがる (風：空=1：2.0～2.7未満)。
- D 空輪が極端に高く風輪はごく低い (風：空=1：2.7以上)。

③ 空輪の最大幅位置

- a 空輪の最大幅は下位にある。
- b 空輪の最大幅は中位にある。
- c 空輪の最大幅は上位にある。
- d 空輪の最大幅はかなり上位で、稜を成す。

分類結果は、表7および巻末掲載の計測表(表30)に示した通りである。主体を成すのはⅡ・Ⅲ類であり、B・C・D類である。従って、風輪に比べて空輪が大きく、かつその差が顕著なものが主体を占めている。Ⅴ類は、図268-D19・図269-H5が代表する形態に限られ、きわめて類似性の強い規格的な形態である。造立位置もH・D群に限定される。各五輪塔群により構成の様相は異なるが、それについては後述する(火輪・水輪も同様)。なお、D7は風輪側面下部に十字形線刻がなされている。

表7 空風輪の形態分類と出土地点別点数

		A群		B群		C群		D群		E群		F群		G群		H群	
		分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数
I	IA			Aa Ab	1 1					Aa	1	Aa	1				
	IB											Bb	1				
II	IIA					Ad	1	Aa	1	Aa Ad	1 1	Aa	5				
	IIB			Ba	1	Ba	1			Ba Bd	2 3	Bb	1	Bb	1		
	IIC	Cb	1	Cb	1	Ca Cd	2 1	Cb	1	Cc Cd	1 1	Ca	1	Cd	1		
	IID											Db	1				
III	IIIA							Ad	1					Ad	1		
	IIIB									Ba Bc	1 1						
	IIIC							Ca	1	Ca Cb Cd	1 1 2						
	IIID									Db Dc	2 1	Da Db	1 2	Db	2		
IV	IVA							Ad	1							Ab	3
	IVB			Bb	1												
	IVC									Cc	1						
	IVD									Dc	2						
V	VA							Ab	3							Ab	2
	VB							Bb	1							Bb	4

火輪 (図269～271、表8)

火輪は、軒口上縁ラインの形状、軒口下縁ラインの形状および底面の形状、軒の外傾度(開き具合)の3視点から分類する。

表8 火輪の形態別分類と出土地点別点数

		A群		B群		C群		D群		E群		F群		G群		H群	
		分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数
I	IA	A ₂ b	1							Aa	1						
	IB	B ₃ a	1	B ₃ a	1					B ₃ a	1						
	IC																
II	IIA					A ₂ d	1	A ₁ c A ₂ c	4 2	A ₂ c A ₂ d	1 1	A ₁ b	1				
	IIB	B ₃ a	1					B ₁ b B ₁ c B ₂ c	1 1 2	B ₂ a B ₁ b	1 1					B ₃ a	1
	IIC			C ₁ a	2	C ₁ a C ₂ c	1 1	C ₁ b C ₁ d C ₂ b C ₂ c	1 2 1 1	C ₁ a C ₁ c C ₂ c	2 2 1	C ₁ a C ₁ b	1 1				
III	IIIA					A ₁ c	1	A ₂ c A ₁ b	1 1			A ₁ b A ₂ c	1 1				
	IIIB			B ₁ b	1			B ₁ b B ₁ c B ₂ b	1 1 2	B ₁ b	2	B ₁ b	1			B ₁ b B ₂ b	1 1
	IIIC			C ₁ b	1			C ₁ b	1	C ₁ c	1	C ₁ b	1				
IV	IVA					A ₁ b A ₁ c A ₂ b	1 1 1	A ₂ b	1					A ₁ c A ₂ c	3 1		
	IVB									B ₂ b	1						
	IVC					C ₂ d	1										
V	VA	A ₂ b	1					A ₂ d	1								
	VB					B ₂ c B ₃ a B ₃ c	1 1 1	B ₂ c	1							B ₃ a B ₃ b	1 1
	VC			C ₁ a	1					C ₂ c	1						
VI	VI A																
	VI B							B ₁ b B ₁ c B ₁ d B ₂ b	1 1 1 2	B ₂ b	1	B ₂ c	1				
	VI C									C ₁ a	1						
VII	VII A													A ₁ c	4		
	VII B							B ₂ b	2			B ₁ b	2				
	VII C																
VIII	VIII A					A ₂ b	2										
	VIII B							B ₁ a B ₂ b B ₁ c	1 1 1								
	VIII C							C ₁ b	1								

① 軒口上縁ラインの形状

- I 反りがなく水平
- II ほぼ全体が緩やかに反る。
- III IIとIVの間
- IV ほぼ全体が強い反りをもつ。
- V 中央水平で両端が少し反る。
- VI VとVIIの間
- VII 両端の反り上りが大きく中央水平部は短い。
- VIII 中央は緩やかな円弧で両端がさらに反る。

② 軒口下縁ラインの形状および底面の形状

- A 1 軒口下縁は反りがなく水平で底面から軒面への転換はシャープ。
- A 2 軒口下縁は反りがなくほぼ水平だが、底面から軒面への転換部は丸みを帯びる。
- B 1 底面四隅を小さく三角形に面取りするため、軒口下縁両端に若干の反りが生じる。中間部は水平。
- B 2 底面四隅の面取りがB 1より大きく、軒口下縁両端の反りもより大きい。中間部は水平。
- B 3 底面周縁に細い帯状の面取りを加える。そのため軒口下縁両端が若干反るが中間部は水平。
- B 4 底面四隅の面取りないし反上りが大きく長く、軒口下縁中央に若干の水平部を残すのみ。
- C 1 水輪と接する部分を除いて底面全体が曲面を成し、軒口下縁は緩い円弧を描く。
- C 2 C 1より程度が強いもの。従って、軒口下縁の円弧はより急である。

③ 軒中央部の外傾度（開き具合）

- a 軒の立ち上がりはほぼ90°
- b 軒の立ち上がりは100°前後まで。軒は外にやや傾く。
- c 軒の立ち上がりは110°前後まで。軒の外傾がbより大きい。
- d 軒の立ち上がりは110°強以上。軒の外傾はさらに大きい。

分類結果は、表8および巻末掲載の計測表（表31・32）に示した通りである。軒口上縁については、水平なⅠ類は少数であり、上反り形状のものが殆どを占めているが、反り上りが急激なⅣ・Ⅶ・Ⅷ類は、H群造立のものを除き、その割合は少ない。Ⅷ類はⅣ・Ⅶ類と区別しにくいものも多く、それらに含めた方がより実態に近い。軒口下縁については、水平なA類、両端が反るB類、全体に反るC類ともそれぞれ一定の割合を占めている。ただし、B類は上縁が全体に強く反るⅣ類とはあまり組み合わせず、C類は上縁が全体に緩く反るⅡ類と結び付きが強い。また、反り上りが急激なB 4・C 2類は少ない。軒の傾きについては、垂直なa類は少数派で、殆どが外傾の形態を取るが、外傾が非常に大きいd類はごく少ない。

水輪（図271・272、表9）

水輪は、側面形状、側面突出度、扁平度、最大幅位置の4視点から分類する。

① 側面形状

- Ⅰ 側面は球形を呈する。
- Ⅱ 側面はやや角ばる。
- Ⅲ 算盤玉状だが稜は不明瞭
- Ⅳ 明瞭な稜をもつ算盤玉状

② 側面突出度

- A 突出度が大きい（上面径：最大幅＝1：1.7以上）
- B 突出度は中程度（上面径：最大幅＝1：1.7未満1.5以上）
- C 突出度が小さい（上面径：最大幅＝1：1.49程度未満）

③ 扁平度

- a 扁平度は極小、つまり、高さが高い（全高：最大幅＝1：1程度以下）。資料なし。
- b 扁平度は小（全高：最大幅＝1：1程度以上1.34以下）
- c 扁平度は中程度（全高：最大幅＝1：1.35以上1.59以下）
- d 扁平度は大、つまり、高さが低く扁平な形となる（全高：最大幅＝1：1.60以上）。

④ 最大幅位置

- 1 最大幅位置は中位より上にある（全高：上端～最大幅位置＝1：0.46以下）

- 2 最大幅位置は中位にある (全高：上端～最大幅位置=1：0.47 以上 0.53 以下)
- 3 最大幅位置は中位より下にある (全高：上端～最大幅位置=1：0.54 以上)

分類結果は、表9および巻末掲載の計測表(表33)に示した通りである。側面球形を呈するI類、やや角張るII類、算盤玉状のIII類とも一定の割合を占めているが、数量的にはI類が多いといえよう。IV類はIII類のバリエーションとして把握できるものであろう。側面突出度については、突出が大きいA類が少ない傾向がある。扁平度は、A類は資料がなく、B類は僅か1点に過ぎず、やや扁平なC類が大部分を占めている。扁平度が大きいD類も少数派といえる。なお、D17の側面上部には十字形の線刻が刻まれており、空風輪D7と組み合うものであろう。

表9 水輪の形態分類と出土地点別点数

		B群		D群		E群		F群		G群		H群		I群	
		分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数
I	IA	Ac	1	Ad	1	Ac	2			Ac	1				
	IB	Bc	1	Bc	1	Bc	4	Bc	4	Bc	1				
	IC	Cc	1			Cc Cd	9 1	Cc Cd	5 2	Cd	1				
II	IIA	Ac	1			Ac	1			Ac	2	Ac	1		
	IIB											Bc Bd	1 1		
	IIC	Cd	1			Cb Cc Cd	1 3 3	Cc Cd	4 1						
III	IIIA			Ac Ad	1 1	Ac Ad	2 1								
	IIIB			Bc	1	Bc Bd	4 1					Bd	4	Bc	1
	IIIC							Cc	1			Cc Cd	1 1		
IV	IVA			Ad	1										
	IVB					Bc	1								
	IVC							Cd	2						

地輪 (図273、表10)

地輪は、高さとの比率によって分類する。

- I 幅と高さがほぼ等しい (高：幅=1：1以下)
- II 高：幅=1：1程度以上 1.34 以下
- III 高：幅=1：1.35 以上 1.59 以下
- IV 幅に対して高さがかかなり低い (高：幅=1：1.60 以上)

分類結果は、表10および巻末掲載の計測表(表34)に示した通りである。幅と高さがほぼ等しいI類は1点のみである。II～IV類はそれぞれ一定の割合を占めているが、資料数が多いE～H群ではいずれもIII類が最も多い。

表10 地輪の形態分類と出土地点別点数

	B群	C群	D群	E群	F群	G群	H群	I群
I	1							
II	3	1		10	5	3	2	2
III	1		6	15	14	7	9	1
IV	2		8	12	9	6	2	2

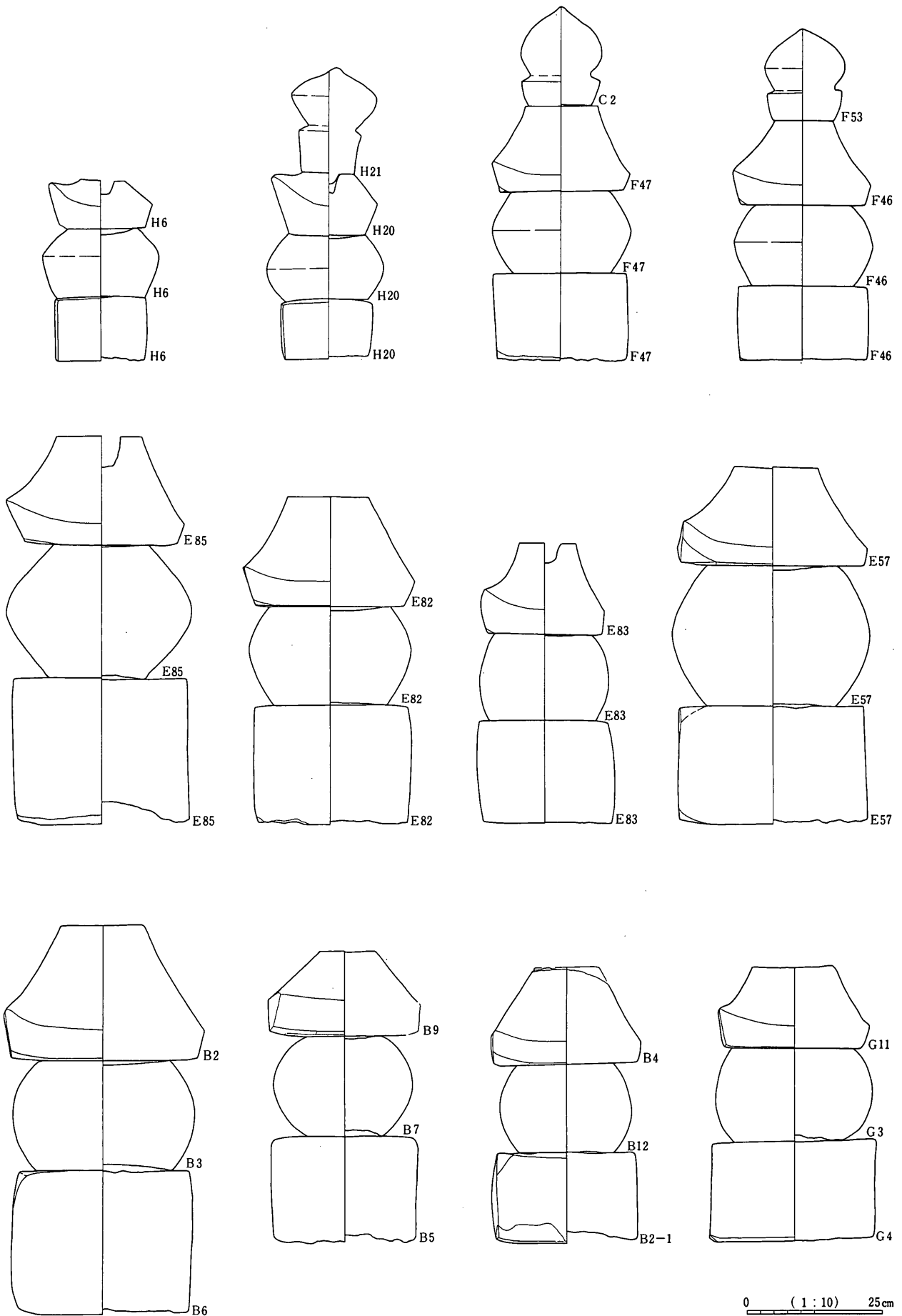


図 267 出土遺物(2) 五輪塔の組合せ

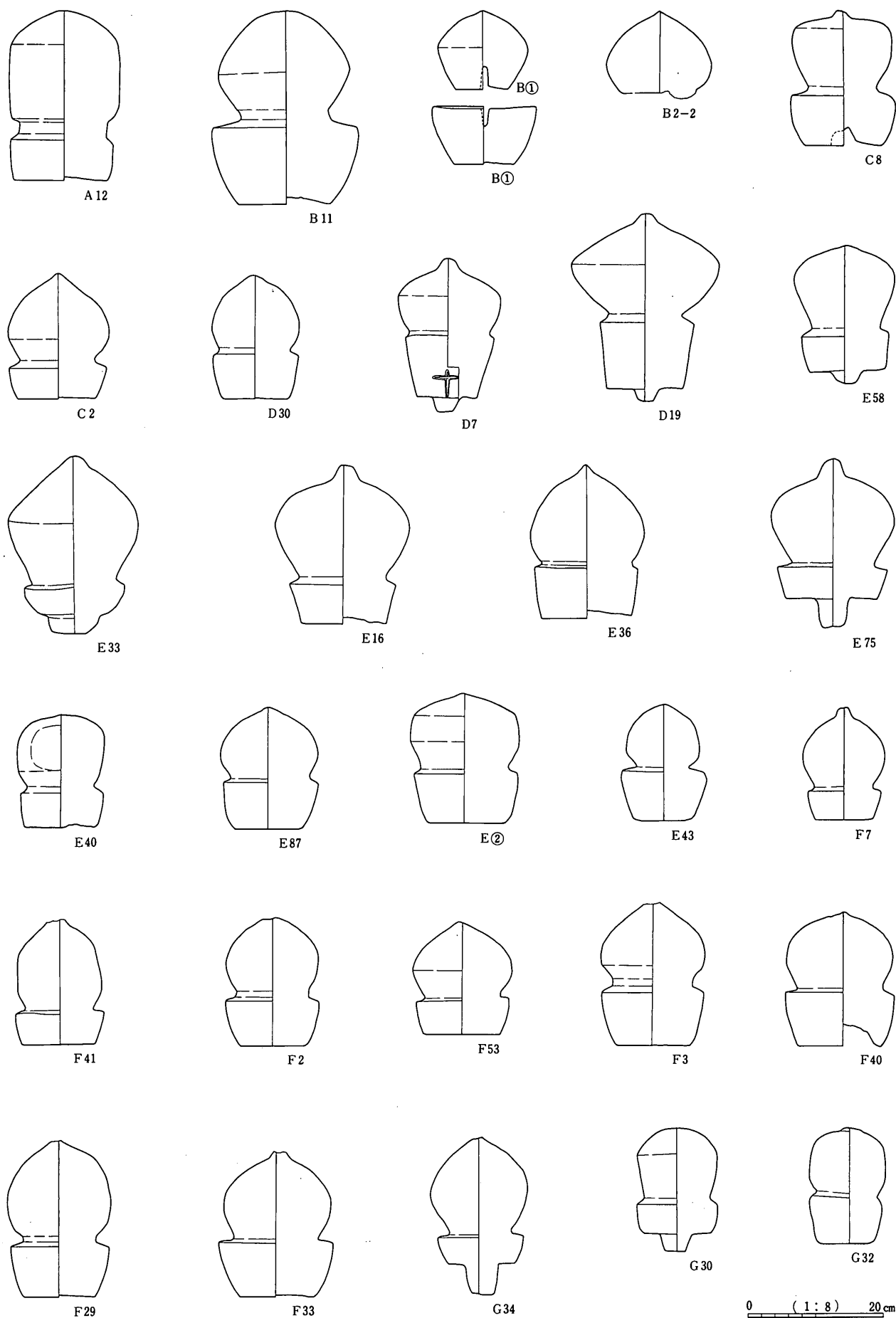


图 268 出土遺物(3) 五輪塔—空風輪—

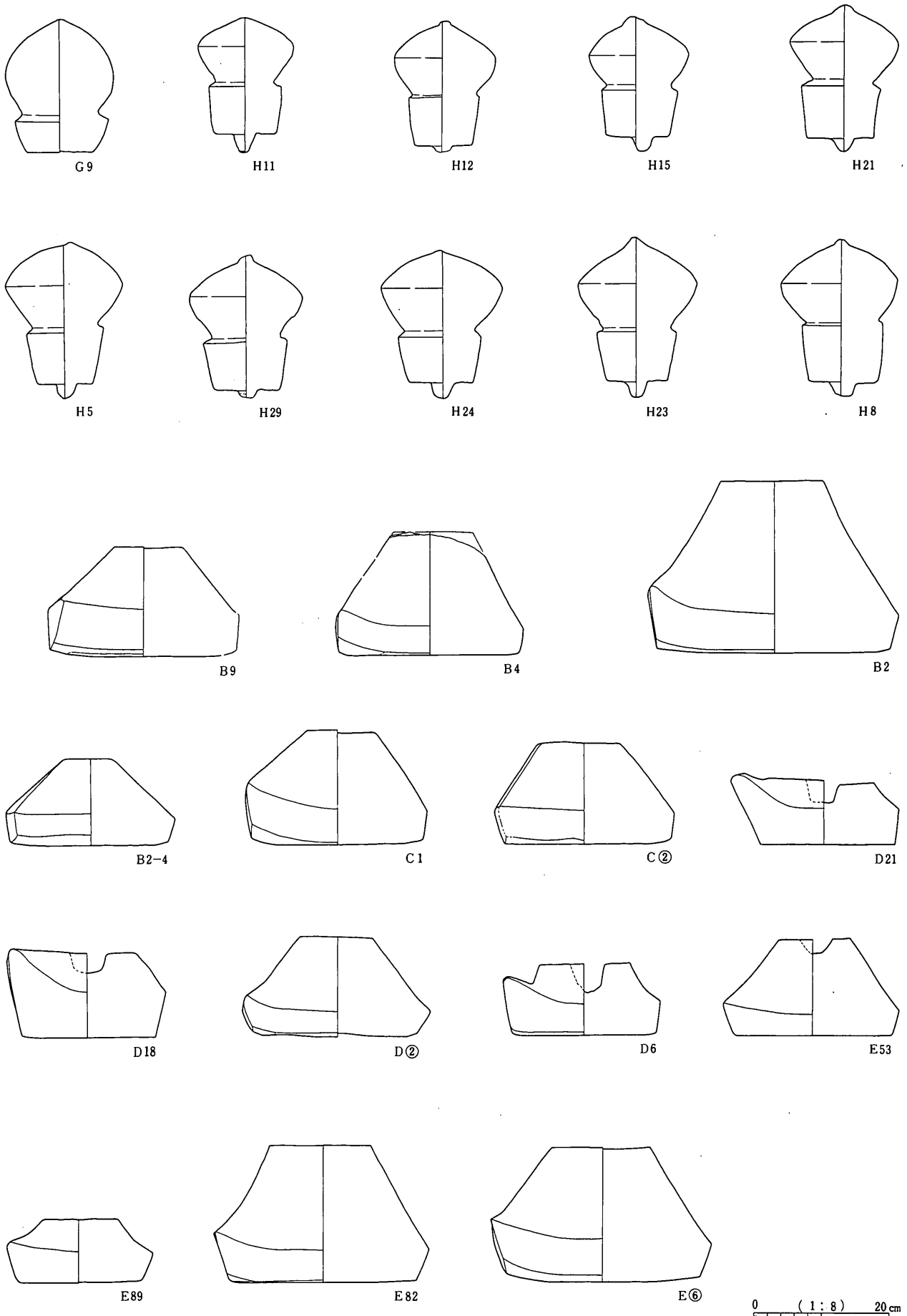


図 269 出土遺物(4) 五輪塔—空風輪・火輪—

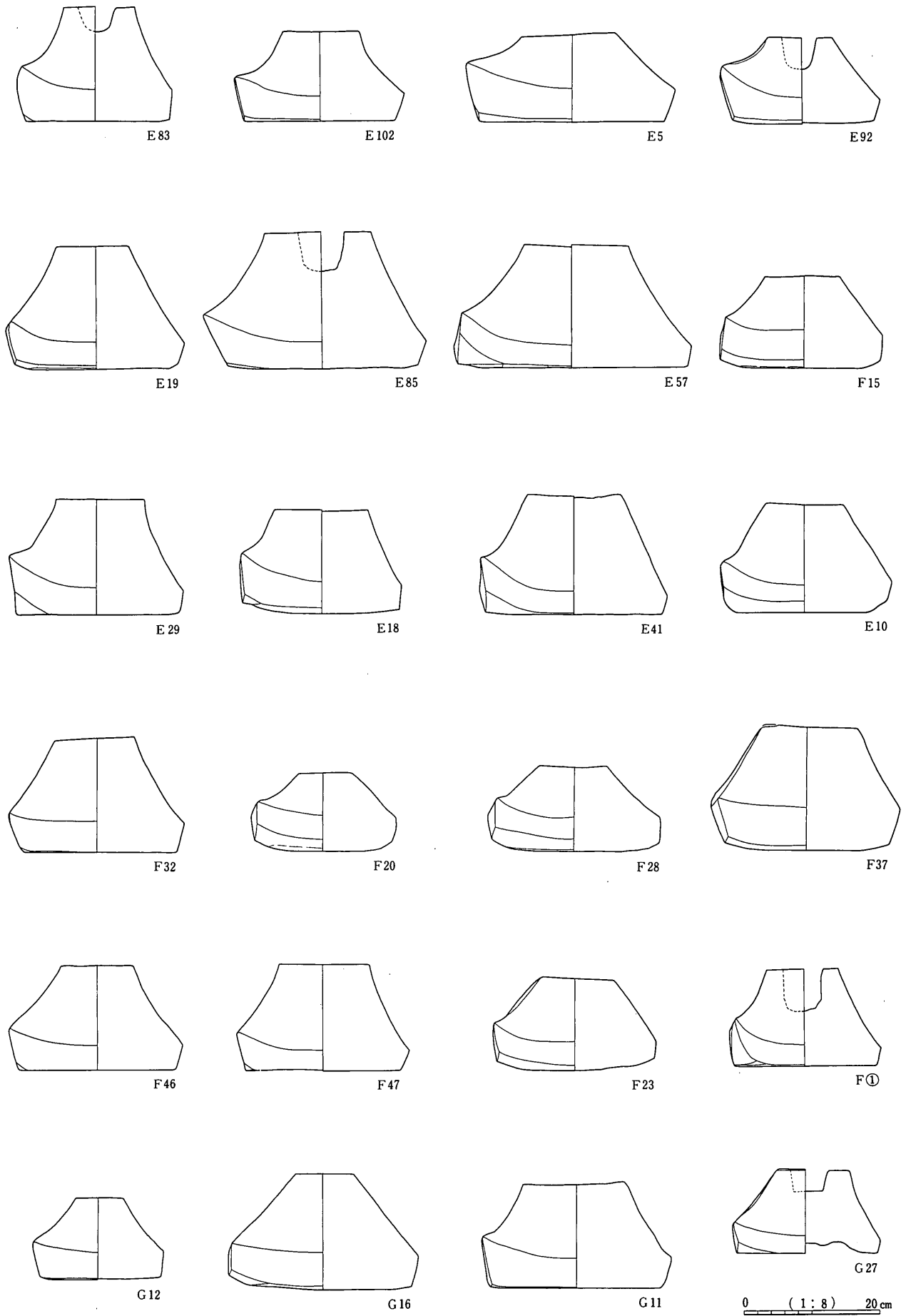


图 270 出土遺物(5) 五輪塔—火輪—

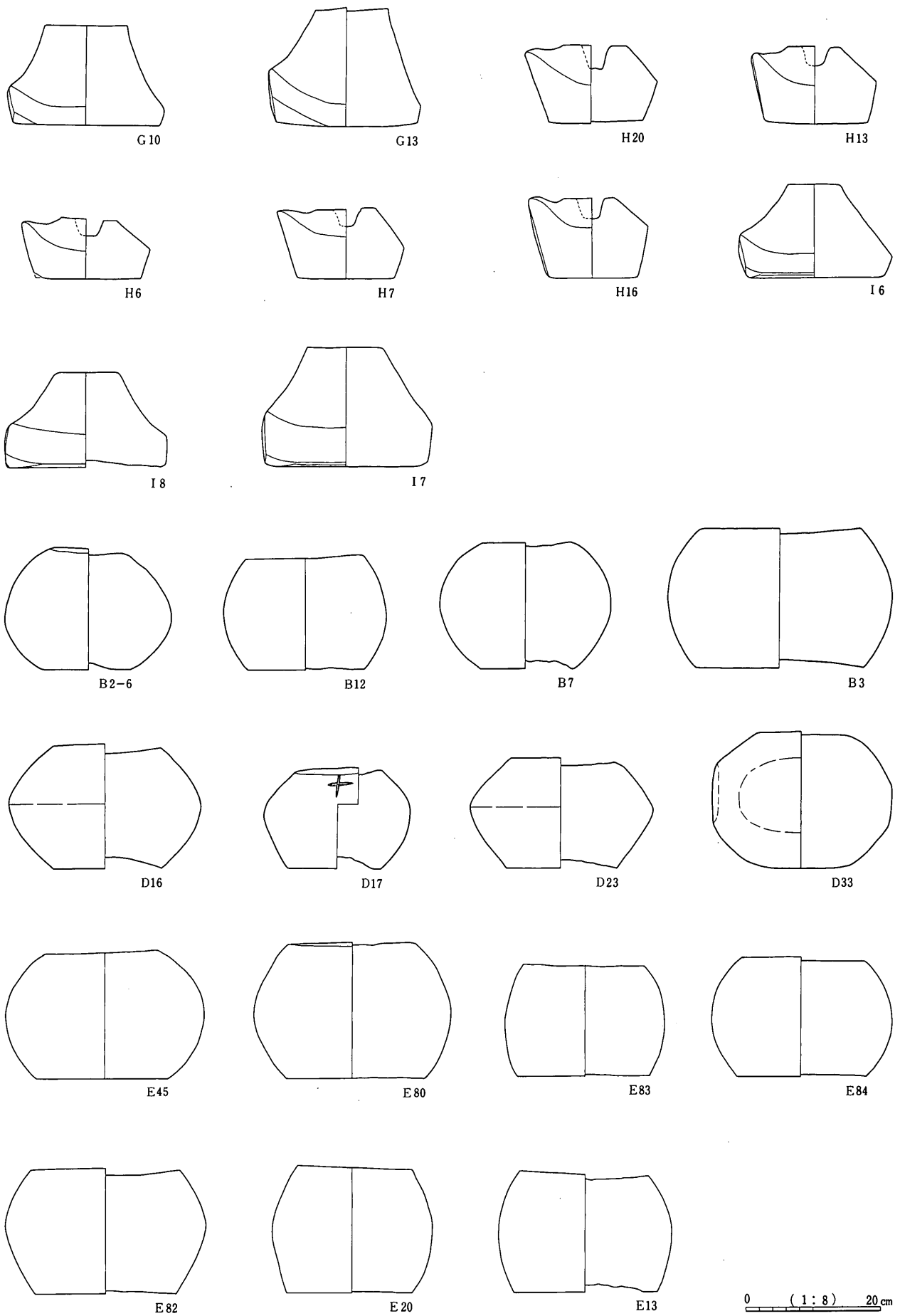


图 271 出土遺物(6) 五輪塔—火輪·水輪—

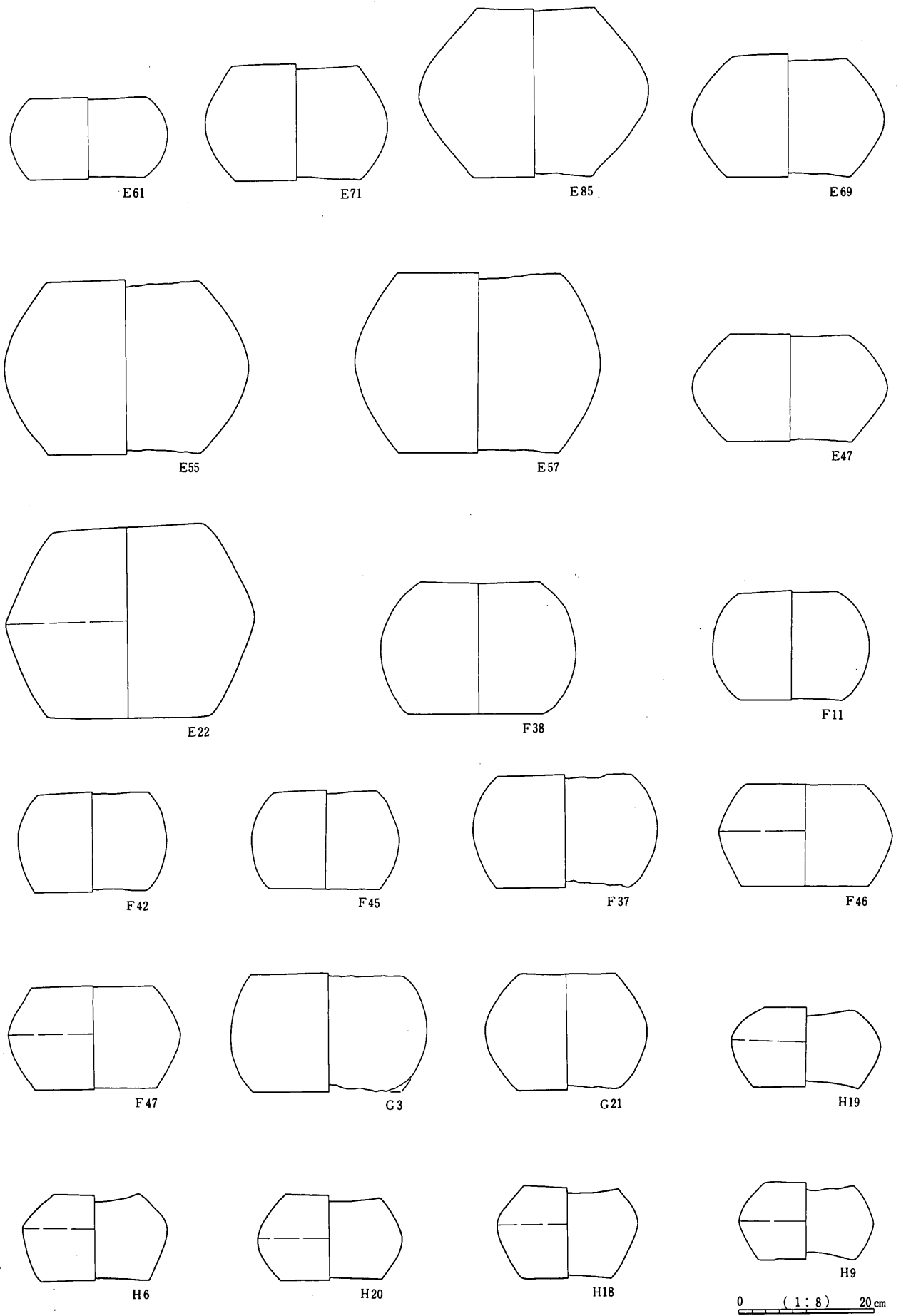
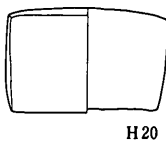
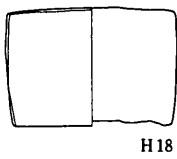
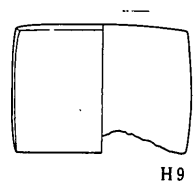
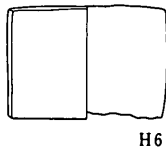
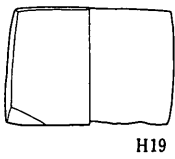
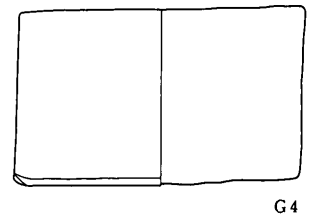
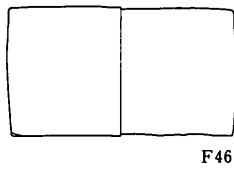
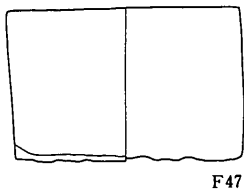
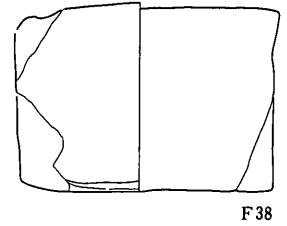
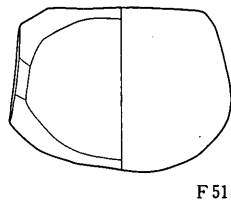
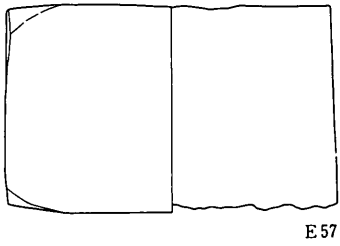
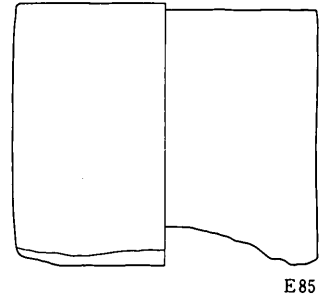
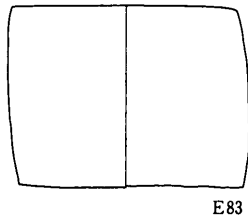
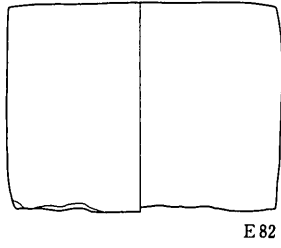
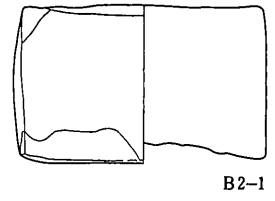
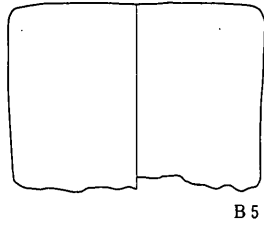
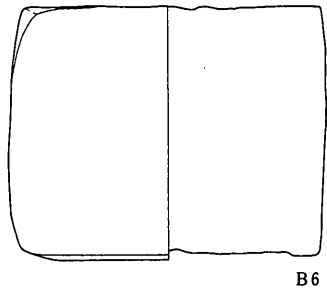


図 272 出土遺物(7) 五輪塔—水輪—



0 (1:8) 20cm

図 273 出土遺物(8) 五輪塔一地輪一

第3節 小結

1 経塚

1979年の調査者の米山一政によれば、経塚は経石集積の上を粘土とともに河原石で覆った構造であったという(米山1981)。また、森嶋稔による別の記述(森嶋1981)では、直径2m程のマウンドを築いていたとある。しかし、今回の調査ではそうした構造は確認されなかった。経塚の構造は、山裾斜面末端を削り出した細長いテラスに、多字一石形式の礫石経を平坦に敷き詰めて集積したものである。五輪塔B群の造立状況や2号墓壙との関係が示すように、今回の調査で検出された経石集積の東半部が本来の構造をとどめた部分と理解できる。1979年の調査範囲が経石集積の西半部に設定されたことはほぼ間違いないだろう。この時に出土した副納品ないし副葬品と考えられる遺物が、坂城町教育委員会に保管されている。同教育委員会の御厚意で、その資料を実見した。遺物の内容は、和鏡(竹垣双鳥鏡)1面、開元通宝・皇宋通宝各1枚、ドリル状鉄器1点である。米山の報文では、開元銭1枚・永楽銭1枚が検出されたとあり、永楽銭が経塚造営年代を想定する根拠の一つになっている。しかし、この銭が永楽銭ではなく皇宋通宝であることが判ったため、経塚の造営を1408年以降に限定することはできない。

経石集積の中央直下には蔵骨器を納めた火葬墓が構築されている。この2号墓壙はテラス面から掘り込まれていること、その直上を経石が覆っていることから、経石集積構築との同時性は明らかである。むしろ、経石集積は2号墓壙に伴う構造として捉えるべきで、その被葬者の葬送儀礼の一環として礫石経を納経したものと理解するのが妥当であろう。蔵骨器はいわゆる古瀬戸草創期に位置付けられる四耳壺で、その比定年代の12世紀後葉は、経塚造営年代の上限を示している。ただし、あくまで上限であって、これを以て経塚の年代を直ちに12世紀後葉と断定することはできない。五輪塔B群は経塚が埋没した後に、その覆土を開削して造立したもので、その背後には経石を用いた石垣が造られている。従って、経塚の造営はB群に先行することは確かである。B群の五輪塔は、全体のなかでも古い特徴を示しており、五輪塔群の形成開始は14世紀第2四半期頃と考えられることから、経塚の年代は12世紀後葉から14世紀第1四半期の間にその位置付けを想定することになる。

礫石経経塚は、従来、新しく考えられることが多かった。しかし、観音平経塚と同様に、「墓」に伴って多字一石形式の礫石経を埋納した事例のうちで、鎌倉市新善光寺跡内やぐら(原ほか1988)・多宝寺跡やぐら(松原1994)、長野県大町市山寺廃寺(篠崎1983・松原1994)など14世紀代と考え得る例が増加している。さらに、山形県天童市高野坊遺跡では応長元年(1311)銘の墨書礫と礫石経が共伴して検出された(川崎・村山1997)。これらの事例から類推して、観音平経塚の年代については、14世紀第1四半期を第一の候補と想定しておきたい。

2 五輪塔群

(1) 五輪塔の形態変遷

空風輪(図268・269、表7・30)

分類視点の①と②は、空輪の発達と風輪の退化という変化の方向を想定して設定したものである。③はその関連で、空輪の頭部が丸いものから平らに近いものへと変化する様相を捉えようとした設定である。従って、各小分類内の変化としては、I類からV類へ、A類からD類へ、a類からd類へという変化を想定することになる。表7をみると、I類はA・Bと、II類はA・B・Cと、III類はC・Dと組み合わせが多く、空輪幅が増大する変化と、空輪高が増大してゆく変化は、互いに絡み合いながら、ほぼ同じ流れの中で進行したことを捉え得る。I類からIII類へ、A類からD類へという変化の方向を認めることができ

よう。今回の分類視準とはしなかったが、Ⅰ類の風輪の側面形状は若干弧状に膨らんでいるが、Ⅱ類には側面が直線的に立ち上がるものが現れ、Ⅲ類以降ではほぼ全て直線的な形状を成している。Ⅳ類は資料が少ないが、こうした変化方向の延長上にあり、Ⅲ類に後出することは間違いないだろう。むしろ、資料の少なさは、Ⅳ類が主体となった時期には、五輪塔造立活動が終焉を迎えつつあったことを示唆すると思われる。Ⅴ類は最も後出的な形態であるが、風輪高が高いA類・B類と組み合わせることは一見矛盾する。しかし、小分類の組み合わせはA b・B b類に限定され、実際の資料はD 17・H 8・H 5 (図268・269) に代表される、本遺跡の中ではきわめて特異で規格的な形態である。これらは新たに出現した形態として理解される。a～d類は特定の組み合わせを指向する様相を読み取りにくい、a類はAと結び付く傾向が明確であり、c類はAとは結び付かないため、a類からc類の変遷も概ね同じ流れのなかで理解できると思われる。d類は多様な組み合わせをもつことから変化の主流から外れた形態と考えておきたい。

本遺跡の空風輪は、空輪幅が風輪幅より小さく高さの差も少ないもの (F 33・B 11 など) から、空輪幅が増大する変化と空輪高が増大する変化とが絡み合いながら、空輪が発達 (風輪の相対的退化) してゆき、その較差が非常に大きなもの (E 75・E 33 など) へと変遷したことが考えられる。そして、最終段階ないしその直後に、極端に幅が大きい空輪と高く細い風輪から成る新しい形態 (Ⅳ類の一部とⅤ類、D 19・H 5 など) が出現する (以後、H型空風輪と呼ぶ)。

火輪 (図269・270、表8・31・32)

火輪については、①軒口上縁の反りが緩やかなものから急激なものへの変化、②下縁は逆に緩やかな反りを示すものから水平なものへの変化、③軒面が垂直なものから外傾度を強めてゆく (外開きが強まる) 変化を想定した。Ⅱ・Ⅴ類にはa類が一定割合で組み合わせるのに対して、Ⅲ・Ⅳ類とⅥ・Ⅶ類にはa類は殆ど組み合わせないことから、上縁軒反りが緩やかで弱いものから軒反りが強くなってゆく変化と、軒面が垂直から外傾し始める変化とは連動しているようである。また、Ⅱ類はA・B・C類とそれぞれ一定の割合で組み合わせるが、Ⅲ類ではC類と組み合わせる例は少なくなっており、Ⅳ類はA類と組み合わせる場合がかなり多い。上縁の軒反りが強まってゆくに連れ、下縁の反りが失われ、水平なものに収斂してゆく傾向を窺うことができるとされる。Ⅴ～Ⅶ類とB類が組み合わせる場合が多いのは、それぞれ中央に平坦部をもち軒両端が反り上がるという形状に対応するものであろう。Ⅰ類については、組み合わせがA・B 3類に限定されており、軒口の形状がほぼ一定していることが判る。底面周縁を帯状に面取りするB 3類はⅠ・Ⅱ・Ⅴ類のみと組み合わせることから、上縁軒反りが強くない段階あるいは上縁が水平なものに特徴的な形態ないし手法と思われる、Ⅰ類はⅡ・Ⅴ類とほぼ同じ頃の古い段階の形態といえよう。

従って、本遺跡の火輪は、軒口上縁が水平なもの (B 2-4・B 9 など) および軒反りが弱いもの (E 6・G 16 など) から軒反りが大きく急激なもの (E 41・G 13 など) への変遷を辿ったことが推定される。軒面の外傾は、Ⅱ・Ⅴ類すなわち初期の段階で既に現れており、本遺跡の五輪塔群形成の始まりが、そうした段階にあることを示唆している。また、形態分類には示していないが、Ⅰ類は屋根の屋だるみがなく直線的だが、Ⅱ・Ⅴ類は緩やかなたるみをもつものが多く、Ⅳ・Ⅶ類では急激なものになっている。こうした変化も軒口形状に連動した変化であろう。軒反りが大きく屋根が極端に低い形態 (D 18・H 20 など) は空風輪H 5などと組み合わせるもので、新しく出現した形態 (以後、H型火輪と呼ぶ) として理解できる。

水輪 (図271・272、表9・33)

水輪については、①側面形状が球形のものから算盤玉状のものへの変化を想定した。それに伴って、②側面突出度、③扁平度、④最大幅位置に変化がみられるかどうかを追ってみた。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類ともA・B・C類と一定割合で組み合わせ、Ⅰ～Ⅲ・Ⅳ類への変化に連動して側面突出度が変化する様相はみられない。また、a類は資料が存在せず、b類は1点のみであり、c・d類はA・B・C類とそれぞれ組み合わせる

が、その割合は変化しない。Ⅰ～Ⅳ類との組み合わせについても特に目立った変化はみられない。表9には最大幅位置については記載していないが、ほぼ同様である。そこで、火輪との組み合わせをみてみると(図267)、水輪Ⅰ類は火輪の軒口上縁が水平もしくは反り上りが弱いものと組み合い、水輪Ⅲ・Ⅳ類は上縁の軒反りが強い火輪と組み合う傾向が窺える。従って、従来からいわれるように、算盤玉状の形態が球形の形態より後出的であることは確かであろう。

地輪 (図273、表10・34)

地輪については、変化の方向を想定したわけではなく、あくまで個体の形態としての分類である。火輪および水輪との組み合い方をみても、形態変化の方向は明確にすることができない。

(2) 各五輪塔群の五輪塔形態の構成

B群

B群は、空風輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類、火輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ類、水輪Ⅰ・Ⅱ類、地輪Ⅰ～Ⅳ類がみられる。形態の構成が古い段階の五輪塔に偏っており、五輪塔群全体の中で初期から前半期に形成されたことが判る。空風輪Ⅴ類1点については、上方からの転落或いは本遺跡五輪塔群の終末段階頃に再び造立が為されたのかもしれない。地輪Ⅰ類はこのB群の1点だけであり、全五輪塔群の中で最大の地輪である(B1)。

D群

D群は、空風輪Ⅱ～Ⅴ類、火輪Ⅱ～Ⅴ・Ⅷ類、水輪Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類、地輪Ⅲ・Ⅳ類が出土している。古い段階の形態を含むが、空風輪・火輪の半数はH型であり、中央部の原位置をとどめる3基はH型に対応する可能性が高い。従って、H群とともに、終末段階に立てられた塔があることはほぼ確実である。

E群

E群は、空風輪Ⅰ～Ⅳ類、火輪Ⅱ～Ⅷ類、水輪Ⅰ～Ⅳ類、地輪Ⅱ～Ⅳ類がみられる。火輪Ⅰ類は確認されないが、五輪塔は最も古い形態のものから、H型空風輪・火輪を除いた最も新しい形態までを安定して含んでおり、初期段階から終末段階頃まで一貫して造立が続けられた群といえる。造塔数の多さ・納骨施設数の多さは全群の中でも際立っている。

F群

F群は、空風輪Ⅰ～Ⅲ類、火輪Ⅰ～Ⅵ類、水輪Ⅰ～Ⅳ類、地輪Ⅱ～Ⅳ類がみられる。F群も、最も古い形態のものから、H型空風輪・火輪を除いた最も新しい形態までを含んでおり、初期段階から終末段階頃まで継続した群といえるが、新しい形態の五輪塔が少ない構成からみて、造立活動の最盛期は前半期と思われる。規模の大きさはE群に次ぐ。

G群

G群は、空風輪Ⅱ・Ⅲ類、火輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ・Ⅶ類、水輪Ⅰ～Ⅳ類、地輪Ⅱ～Ⅳ類が出土している。空風輪Ⅰ類・火輪Ⅰ類がみられないことから、形成の開始はやや遅れるかもしれない。G群も五輪塔造立のピークは前半期といえよう。

H群

前節で述べたように、H群は一括造立されたと思われる一群である。水輪以上の3割程度を失っているが、空風輪・火輪はすべてH型と考えて間違いはない。五輪塔群全体の中でも最も新しい群である。この群の造立を最後に本遺跡における五輪塔造立活動は終わりを告げたことが推定される。

I群

I群は、火輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ類、水輪Ⅲ類、地輪Ⅱ～Ⅳ類がみられる。空風輪はすべて転落して確認できない。形態の構成はあまり明確ではないが、比較的古い形態のものを含んでおり、形成の開始はさほど遅れ

ないことが考えられる。

(3) 五輪塔群の造営時期

長野県東信地方における中世石塔婆の様式変遷については宮下真澄の研究がある(宮下1967)。そこに提示された資料およびその位置付けとの対比を中心に、以下、本遺跡の五輪塔の年代を考えてみたい。

建武2年(1335)銘をもつ望月町天神林岩下清海氏塔は、火輪がⅡC1a類の形態で、空風輪はⅠBa類であり、風輪の側線は丸みを帯びている。本遺跡の古い段階のものに類似した様相といえる。

また、宮下が室町中期頃と考える東部町祇津長命寺の五輪塔は、空風輪がⅢCb類、火輪はⅥC1bないしⅥC1c類の形態を示しており、本遺跡の中頃から後半段階に相当しよう。

青木村夫神には、地輪に文明16年(1484)銘をもつ五輪塔2基が存在する(上田市博1984)。うち1基はH型の空風輪と火輪をもち、水輪はⅢ類である。全高は105cmを測り、H群の五輪塔よりかなり大きい、水輪幅が火輪・地輪より広く、塔全高における空風輪高の割合が大きいプロポーションも類似する。他の1基はH型火輪とⅡ類水輪をもち、空風輪は、空輪と風輪の大きさにさほど差はみられないが、空輪の頂部が平坦なd類である。上田市上室賀の前松寺は天文年間(1531～1555)開創で、その背後の山麓には開基のものと考えられる五輪塔がある(宮下1967)。この五輪塔は、全体、特に火輪以下が細長いプロポーションを有し、空風輪の形態も異なるが、火輪はH型の部類である。また、群馬県太田市細谷の教王寺にある享祿4年(1531)銘五輪塔の火輪(磯部1992)は、屋根が低いⅦ類であって、H型に類似した形態といえる。

青木村夫神塔は、後2者に比べて年代が古過ぎるように思われるが、現状ではその銘文が追刻であると断定することもできない。ここでは、H型火輪・空風輪すなわち五輪塔D群の一部とH群の年代を、16世紀前半を中心とした時間幅の中で捉えておくことにしたい。

なお、群馬県の五輪塔の編年については、磯部淳一による五輪塔各部分の比率の変化に基づいた編年研究がある(磯部1992)。それと対比してみると、本遺跡の五輪塔は南北朝期(1330年代～1380年代)から戦国期(16世紀)に相当する。

ごく簡単ではあるが、以上の検討により、本遺跡における五輪塔群の形成は、14世紀第2四半期頃から16世紀前半頃にかけて行われたと考える。そして、空風輪Ⅱ・Ⅲ類、火輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ類の割合が多いことから、造立活動の盛期は14世紀後半～15世紀にあったと推定する。

各五輪塔群は、それぞれ造立のピークを違えながらも、継続期間において重複する部分をもつ。特に前半期では、H群を除くすべての群で同時に五輪塔造立が進行していた可能性が高い。また、B・H群以外の各群は納骨施設を伴い、墓域の単位区画を成している。各区画で同時に埋葬が続けられていることは、一つの五輪塔群がそれぞれ一つの家系に対応することを推測させる。また、14世紀から16世紀前半は村上氏の勢力拡大期および最盛期である。本遺跡の五輪塔群の造営主体であり、同時にこの墓域に葬られた人々は村上氏配下の武士階層ないしそれに準ずる階層であったと考えておきたい。

引用・参考文献

飯村均 1997 「北海道・東北地方における古瀬戸流通」『研究紀要』第5輯

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

磯部淳一 1992 「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』第2号 高崎市史編さん専門委員会

井上喜久男 1992 『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社

上田市立博物館 1984 『郷土の文化財 石造塔』

川上元・小林幹男 1973 『真田町日向畑遺跡 発掘調査報告書』真田町教育委員会

第11章 観音平経塚

- 川崎利夫・村山正市 1997 「山形県天童市高野坊遺跡出土の墨書礫」『日本考古学協会第63回総会
研究発表要旨』日本考古学協会
- 河西克造 1996 「東日本における中世山城の検討」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 木村弘之 1997 「中世墓の種類と変遷」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
- 小林正春ほか 1987 『重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工事報告書』
重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存修理委員会
- 斉木勝 1996 「関東北西部における五輪塔造立の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 坂詰秀一 1991 『図録 歴史考古学入門事典』柏書房
- 静岡県考古学会 1997 『静岡県における中世墓』
- 篠崎健一郎 1983 「山寺廃寺跡出土遺物」『大町市指定文化財調査書』第2集 大町市教育委員会
- 関秀夫 1984 『経塚地名総覧』考古学ライブラリー24 ニュー・サイエンス社
- 関秀夫 1985 『経塚』考古学ライブラリー33 ニュー・サイエンス社
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～」
『研究紀要』第5輯
- 永井久美男 1994 『中世の出土銭—出土銭の調査と分類』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 1996 『中世の出土銭 補遺Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男ほか 1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会
- 中島英子 1994 『清水山古窯跡（古窯址群・中世墓址群）発掘調査報告書』中野市教育委員会
- 中島英子 1998 「第6章 対面所遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14
—中野市内その3・豊田村内—』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 中野市教育委員会 1994 『がまん淵遺跡（西山中世墓址）・上の山遺跡発掘調査報告書』
- 賀恵子 1997 「石塔の変遷—中遠地方を中心として—」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
- 野村一寿 1990 「第3章 第6節 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査
報告書4—松本市内その1—』総論編 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 原廣志ほか 1988 『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—』
新善光寺跡内やぐら発掘調査団
- 平野和男 1984 『大原墳墓群調査報告書』磐田市文化財保存顕彰会
- 藤澤典彦 1990 「墓地景観の変遷とその背景」『日本史研究』330
- 藤澤典彦・岡本広義 1992 『五輪塔の研究』(財)元興寺文化財研究所
- 藤澤典彦 1997 「中世墓地の成立と終焉」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
- 藤澤良佑 1979 「長野県出土の古瀬戸について—特に蔵骨器を中心として—」『信濃』第31巻 第11号
信濃史学会
- 藤澤良祐 1984 「古瀬戸概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ 土岐市美濃陶磁歴史館
- 藤澤良佑 1995 「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—」『研究紀要』第3輯
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良佑 1997 「古瀬戸編年表」『研究紀要』第5輯 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 佛教藝術学会 1989 『佛教藝術』182号
- 前原豊 1989 「赤城山麓の墓あと」『よみがえる中世5 浅間火山灰と中世の東国』平凡社
- 松原典明 1994 「礫石経研究序説」『考古学論究』第3号 立正大学考古学会
- 松原典明 1994 「礫石経の地域相 関東・甲信越」『考古学論究』第3号 立正大学考古学会

- 松原典明 1994 「礫石経地名表（稿）」『考古学論究』第3号 立正大学考古学会
- 松原典明 1995 「経典埋納と墳墓」『立正史学』第78号
- 松原典明 1996 「下野・五輪塔考」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会
- 桃崎祐介 1997 「中世墓の成立と終焉（関東以東の事例）」『静岡県における中世墓』
静岡県考古学会
- 宮崎県教育委員会 1984 『山内石塔群 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第1集』
- 宮下真澄 1965 「東信地方における中世石造塔婆の様式手法の推移について」『信濃』第17巻 第10号
信濃史学会
- 森嶋稔 1981 「信濃経塚資料にみる二・三の課題」『信濃』第33巻 第2号 信濃史学会
- 森嶋稔 1981 「考古」『坂城町誌』歴史編 中巻 歴史編 (1) 坂城町誌刊行会
- 米山一政 1981 「古代・中世」『坂城町誌』歴史編 中巻 歴史編 (1) 坂城町誌刊行会
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編 全1巻 (2) 主要遺跡（北・東信）
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 全1巻 (4) 遺構・遺物

第12章 小山製鉄遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の位置

小山製鉄遺跡は坂城町の千曲川右岸地域に在り、鏡台山南面に発して西南に流下する日名沢川右岸の傾斜地に立地する。平安時代の集中的な鍛冶操業が想定される遺跡である。調査地点は、坂城町坂城字2749ほかに所在し、南向きの崖錐地にあたり、調査前は、果樹畑地として利用後の荒れ地となっていた。調査範囲の標高は526～532 mを測る(図274)。

周辺遺跡の発掘調査例としては、奈良・平安時代の瓦・須恵器窯跡である土井ノ入窯跡(森嶋1981)、中世の経塚・墓域である観音平経塚(本書第11章)がある。また、小山製鉄遺跡の南、日名沢川の下流方向には丸山遺跡・日名沢遺跡・塩之原遺跡・南日名遺跡があり、いずれも弥生時代～平安時代の遺跡とされるが、それらを含め、千曲川右岸の北半地域では集落遺跡の発掘調査が殆ど行われておらず、その実態は明らかになっていない。

一方、南半地域では、種々の開発事業に伴う発掘調査が相次ぎ、豊饒堂遺跡(山崎北遺跡)・寺浦遺跡・上町遺跡(小平光一1996)、宮上遺跡(助川1993)等で平安時代の集落が調査されている。豊饒堂遺跡では鉄滓・鞆羽口、寺浦遺跡では鉄滓・金砒石が検出された。鍛冶関連遺物は、本書で報告した上原古墳群・山崎古墳群(どちらも古墳なし)・山崎北遺跡でも出土している。これらの遺跡では、専門的かつ恒常的な鍛冶操業の様相を窺うことはできないため、一般集落内における鍛冶業の痕跡として理解することになるが、そうした資料が増加してきていることは注意されてよい。

時代は大きく降るが、開畝製鉄遺跡は県下初の製鉄遺跡の学術調査が行われたことで著名である。この

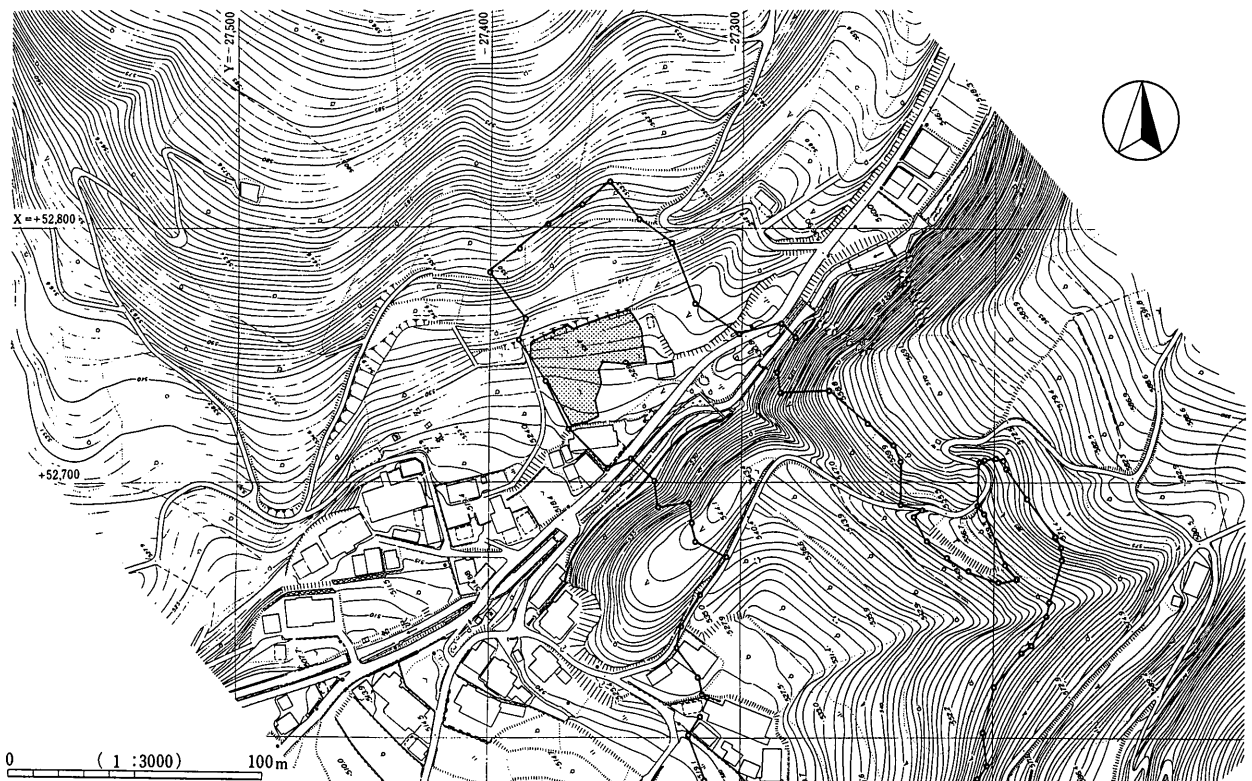


図274 調査範囲

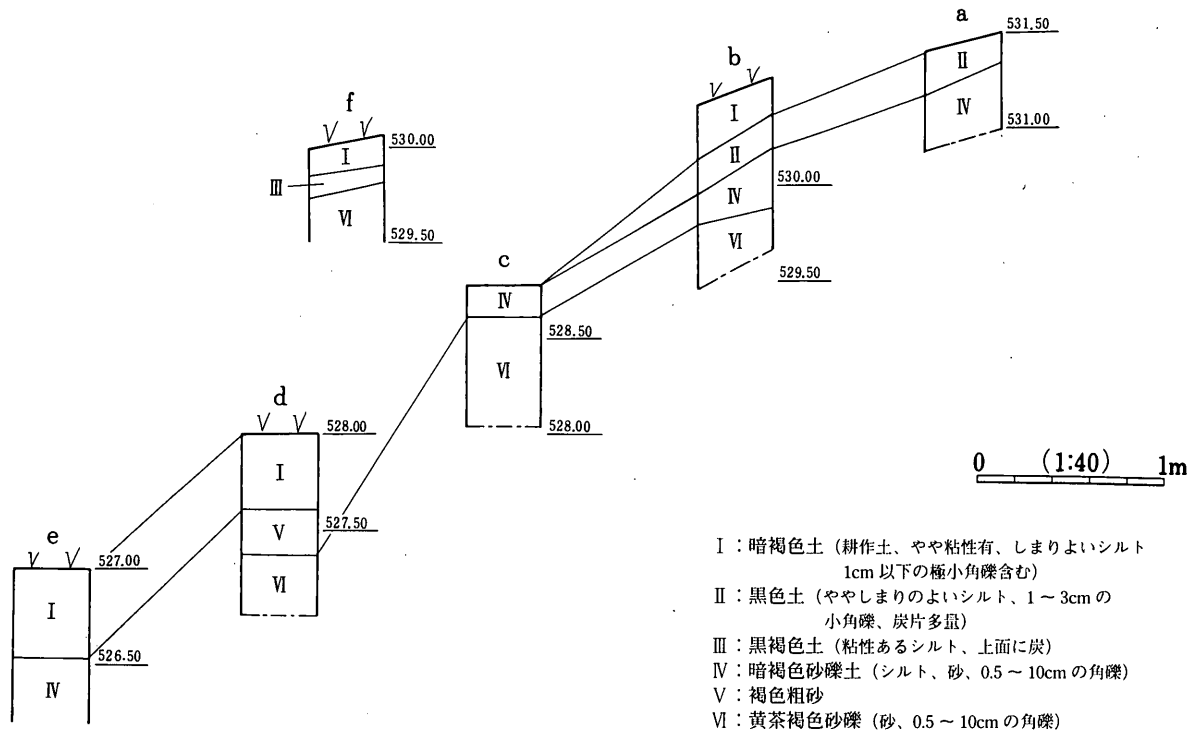


図 275 基本層序

遺跡は、1977・1978年の2回にわたる調査によって、製錬炉2基が検出されている。炉は上部構造が破壊されているものの、小型の円形縦形炉と考えられ、炉内の木炭をC14年代測定法で分析した結果、第一号炉が16・17世紀代、第二号炉が19・20世紀代となり、測定結果は大きく食い違ったが、遺物等の状況から、第一号炉のデータが操業年代とされた。また、鉄滓や砂鉄ピット内の砂鉄の化学分析から、原材料として千曲川起源の川砂鉄を利用したことが判明している(坂城町教委1978・1979)。

2 調査の経過

小山製鉄遺跡は、当初周知されておらず、坂城町遺跡分布図にも記載されていなかったが、地権者が信越自動車道建設用地内において遺物を発見したとの届け出を坂城町教育委員会に提出し、同教育委員会は平成5年4月、その対応方法について長野県教育委員会に照会した。平成5年5月27日、両教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団が現地踏査を行い、地権者が採集した遺物が土師器甕と鉄滓であることを確認し、合わせて、現地で土器片を採集した。これを受けて、平成5年6月2日および4日に県教委が遺跡確認のための試掘調査を実施した。その結果、炭化物を多量に含む土坑状の陥ち込み、平安時代の土師器・須恵器、鞆羽口、鉄滓等が検出され、平安時代の製鉄に関する遺跡の存在が明確になったため、当該地の発掘調査が必要となった。

発掘調査は平成5年7月12日～10月12日に行った。調査面積は1000㎡である(図274)。調査は、排土置き場等の関係で2区域に分けて実施した。まず、中央部から西部にかけての調査を行った。西南部は遺構密度が稀薄で、検出された遺構は竪穴住居1軒と土坑数基である。中央部は鍛冶炉、廃棄坑と思われる土坑、壁面が被熱して底に炭が溜まる土坑、ピット等が集中していた。遺構集中部の上方には底面が被熱した長方形ないし長楕円形の大形土坑が2基並んで検出された(51・52号土坑)。この2基も底面に木炭が残っていた。西南部の調査終了後、そこに排土を置き換え、東部の調査を行った。竪穴住居1軒のほか、調査

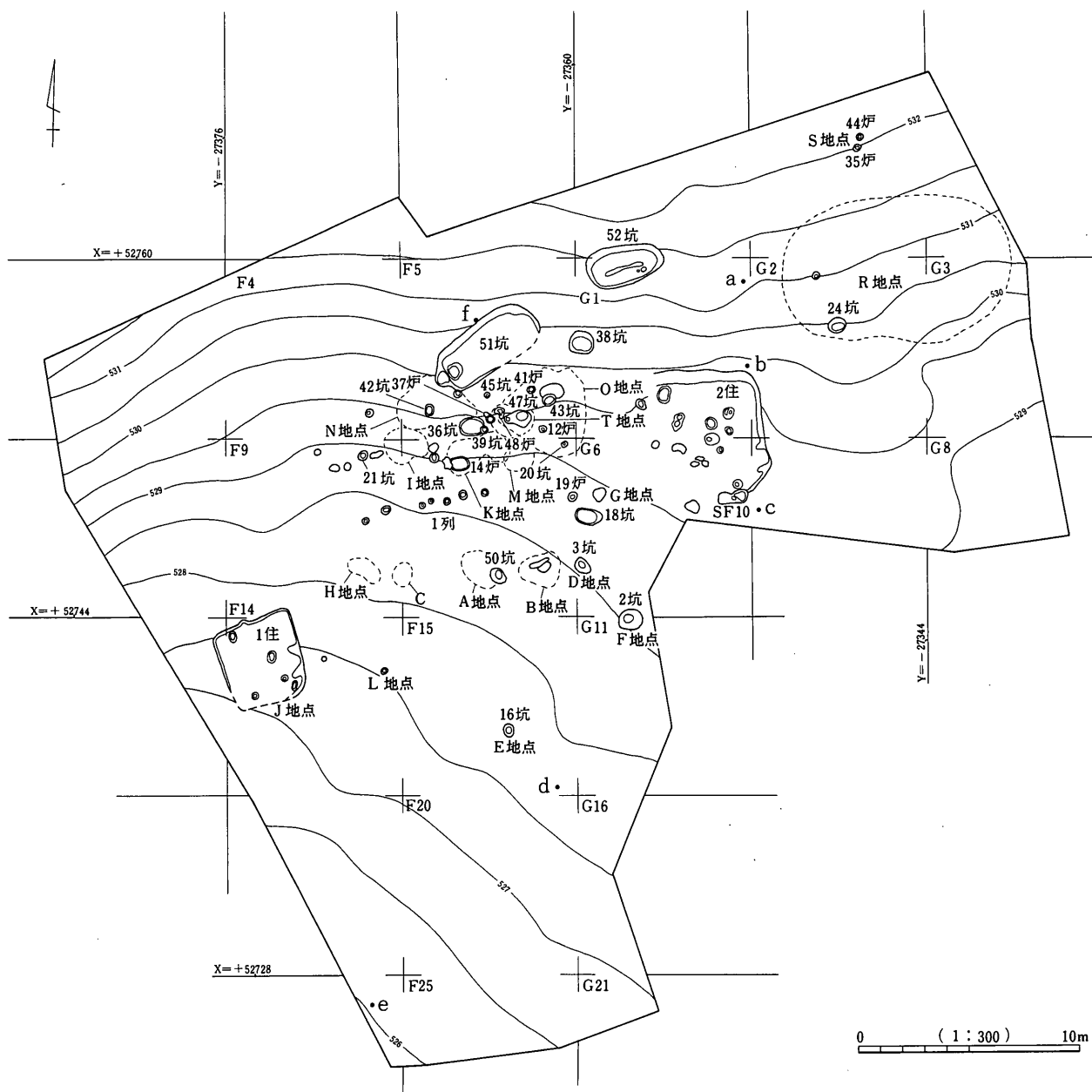


図 276 遺構全体図

区北西部で鍛冶炉が検出された。鍛冶炉下方（南方）は緩い谷状地形を成しており、そこには鉄滓類が大量に投げ棄てられていた。

3 基本層序

I層は耕作土である。II層は51・52号土坑由来の炭化物を多量に包含する黒色土である。調査区上方側の中央部から東部にかけて分布し、鍛冶炉や竪穴住居等の遺構を覆う。III層は粘性ある黒褐色土で、調査区中央の斜面上部のみ認められる。51・52号土坑は本層を切って掘り込まれている。IV層は暗褐色砂礫土で、遺構の殆どはこの層の上面で検出された。V層は褐色粗砂で、調査区下方側に部分的に分布する。IV層との堆積順序は明確でない。VI層は黄褐色砂礫で、調査範囲のほぼ全域で認められる（図275）。

第2節 遺構と遺物

検出された遺構は、竪穴住居2軒、鍛冶炉8基、土坑23基、柱穴列1基・地山被熱面5基などである。その他、炭・鍛冶関連遺物等の分布域が20箇所において確認された。鍛冶遺構は調査区中央のF-5・10グリッド辺りに集中がみられる(図276・279)。

1 平安時代以降の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡(図277・284) 位置 F-13・14・9

検出 IV層上面で検出した。覆土は大きく2層に分層され、下層はにぶい黄褐色土、上層は基本層序Ⅱ・Ⅲ層に対応する。覆土の様相から自然埋没と考えられる。切り合いはない。

構造 南西隅と南壁の大部分を失っているが、平面形状は方形を呈し、床面規模3.9×3.7mを測る。軸方向はN-20°-Wである。壁の立ち上がりは急で、東壁ではほぼ垂直に立ち上がる。高さは北壁で最大50cmが残存する。床は竪穴掘り方底を平坦に整形したもので、硬化しておらず、また、貼り床も認められない。中央部床直上には炭・焼土の薄い堆積が広がっている。柱穴は2基が検出された(P1・P2)。カマドは北壁と東壁の2箇所を確認された。北壁カマドは小さく外側に張り出す奥壁と火床が遺存するのみで、構築材はまったく残っていなかった。東壁カマドは角礫と粘性シルトで構築され、袖内面の幅が80～90cmと広い。火床は右袖寄りに位置する。煙道は認められない。カマド内および右袖外側に構築材と思われる角礫がまとめられている。中央やや東寄り・カマド右脇・右袖前面に浅い楕円形ピットが存在するが、性格は不明である。

遺物 1は浅い体部のロクロ整形の土師器坏、2～4は内面黒色処理を施したロクロ整形土師器(以下、内面黒色土器)坏・塊である。2は暗文状のヘラミガキが施され、底部はやや突出する。3・4の高台は外に開いている。5は灰釉陶器皿で、光ヶ丘1号窯式と思われる。6～10はロクロ整形の土師器甕・小形甕である。6の口縁部はやや受け口状を呈する。2～9は床面、1・5・10は覆土出土。2はカマド前面に置かれていた完形品である。土器以外の遺物は、床面で円盤形軽石製品(15)・磨石(22)、覆土から釘(8・9・15)、椀形鍛冶滓1点(19)・鍛造剥片・粒状滓が検出されている。

時期 9世紀末～10世紀前葉と考える。

所見 覆土から鍛造剥片が出土したため、本遺構自体が鍛冶関連遺構である可能性が想定された。そこで、鍛造剥片・粒状滓等の鍛冶関連微細遺物の回収を目的として、床面直上の覆土を50cmメッシュで採取した。しかし、全採取土195,585グラムのうち、鍛造剥片と認識できたものは1.35グラム、粒状滓は0.24グラムに過ぎない。鍛冶炉をもたないことから、本遺構を鍛冶工房と見做すには無理がある。やはり、居住を目的とした建物として理解すべきであろう。

2号竪穴住居跡(図278・284) 位置 G-1・2・6・7

検出 IV層上面で検出した。SF10が本住居の覆土上に存在する。覆土は2層に分層できたが、どちらも淘汰的な性状を示すことから、自然埋没と考えられる。

構造 南壁および北壁が失われているが、平面形状は方形を呈する。床残存部の規模4.8×5.4mを測る。軸方向はN-90°-Eを指す。壁は東壁では約75度に立ち上がるが、北壁では崩壊のため立ち上がりは緩い傾斜となっている。ただし、高さは約50cmある。床は貼り床ではないが、比較的堅固である。床面で多くのピットが検出されたが、柱穴と見做し得るのはP9のみである。カマドは東壁南寄りに付設され、黄

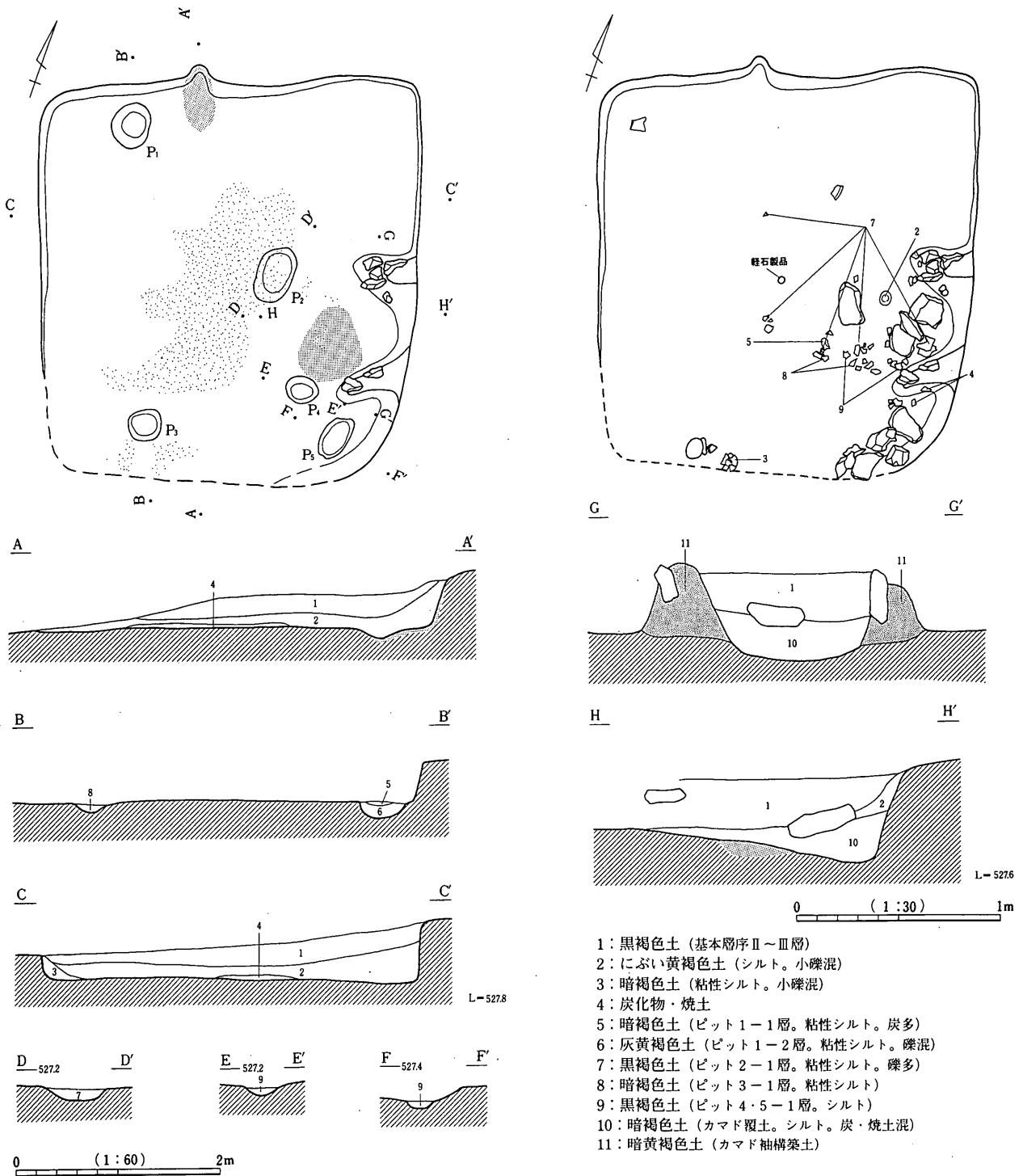


図 277 1号竪住居跡

褐色土で袖基底部をつくった上に褐灰色土を盛って構築されている。

遺物 1はロクロ整形土師器坏、2は内面黒色土器坏で、どちらも回転糸切り不調整。3は高い脚台が付いた内面黒色土器皿。4は須恵器四耳壺。5・6はロクロ整形の土師器小形甕・甕である。6の胴部は張りが弱い器形で口縁端部は面取り。7はロクロ整形の鍋で、体部は半球形を呈し、口縁の外傾度は弱い。5・6はカマド、3・7は床面、1・2・4は覆土出土。土器以外の遺物は鍛冶滓2点が出土した。

時期 9世紀後葉～10世紀初頭とする。

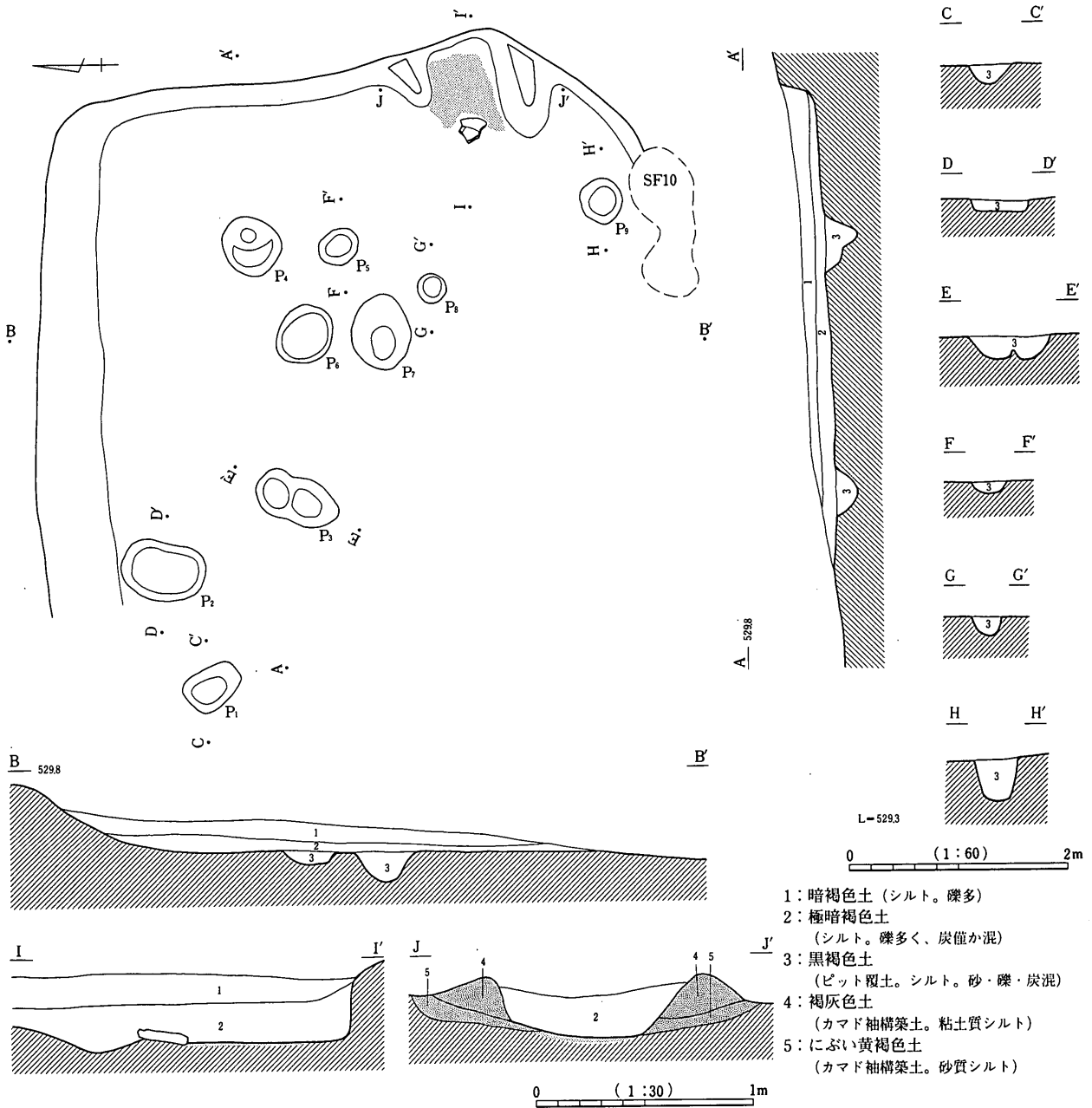


図 278 2号竪穴住居跡

(2) 鍛冶炉

鍛冶炉の認定に当たっては、鍛冶関連遺物が共伴すること（周囲および付随施設を含める）、明確な掘り込みをもつこと、強く被熱していること、を必要条件とした。従って、平坦な被熱面については、その可能性を含めつつもSFとして登録し、その項に記載した。以上の条件を満たす鍛冶炉は8基検出され、構造は、地山を掘り窪めた底面をそのまま炉床とするもの、掘り方底に粘土を貼って炉床を造るもの、掘り方を若干埋め戻した上に粘土床を構築するいわば下部構造をもつもの、の3類型が認められる。なお、以下に記述する鍛冶炉の形状・規模はすべて現状である。出土した鍛冶関連遺物については、表11、表37～42（巻末）を参照して頂きたい。羽口・鉄滓類の挿図番号との対照も表11に示した（土坑・SF・各地点についても同様）。実測図は図290～296に示した。

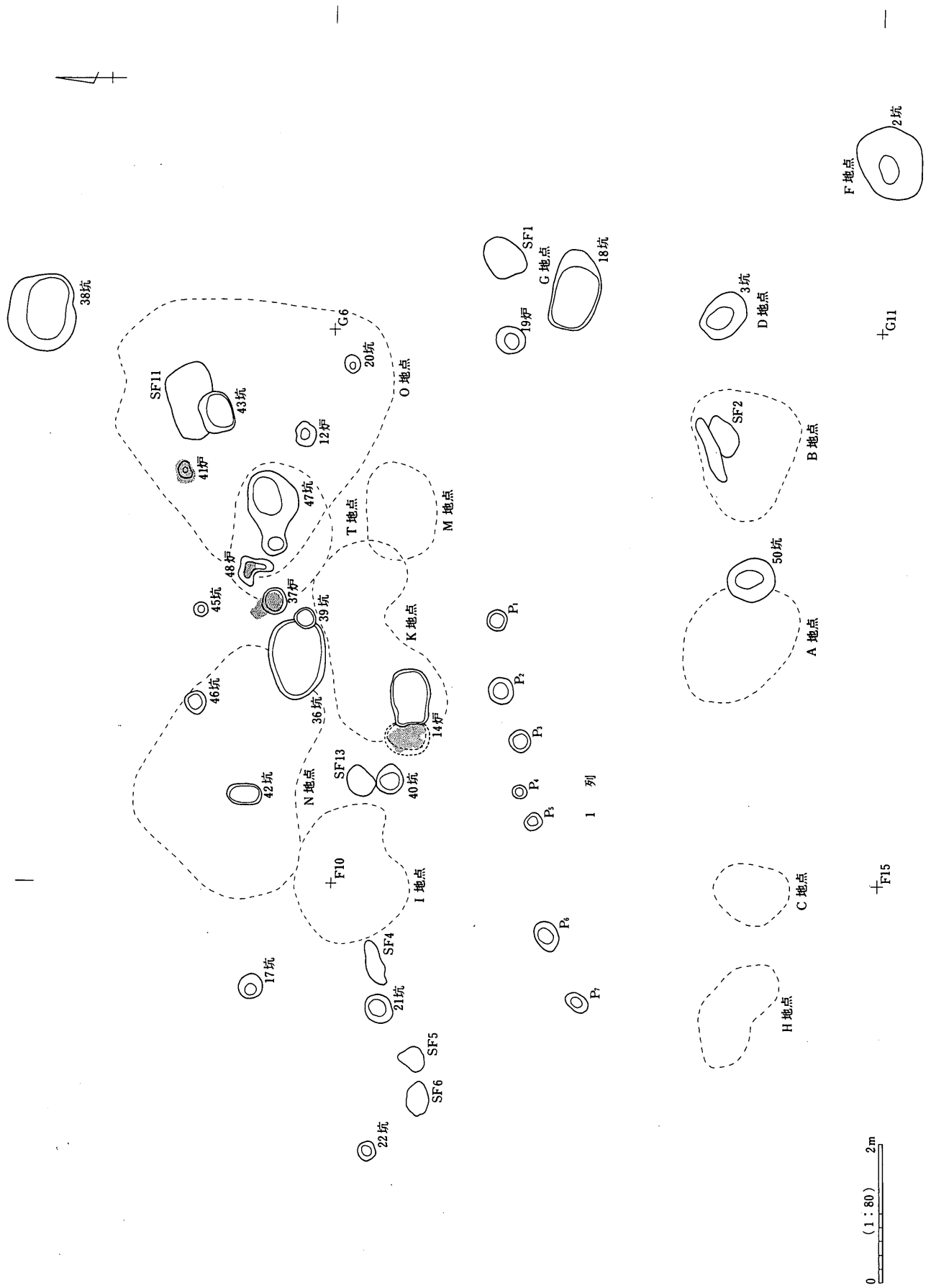


図 279 鍛冶遺構集中部

14号炉 (図280・281・285) 位置 F-10

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に位置する。Ⅳ層上面の検出である。

構造 本来、炉床立ち上がりを有していたと思われるが、削平あるいは流出により、炉底中央が最も高く残った状態になっている。構築は、地山を掘り窪め、厚さ13cm程に黒褐色土を敷き(下部構造)、その上にさらに粘土を厚く10cm程に貼って炉床をつくっている。炉掘り方は平面楕円形、断面は浅い半球形を呈し、規模は65×47cm、深さ24cmを測る。粘土床は55×43cmの不整形に残存する。炉床は強く被熱して赤褐色に酸化し、中央ではかなり下部まで赤変が及んでいる。下部構造は防湿を意図したものであろう。炉の東側に接して、80×57cm、深さ16cmの隅丸方形を呈する陥ち込みがある。ただし、陥ち込みの西壁が炉を切っているように見えることや、微細遺物の分布状況からすると、この陥ち込みが本炉に付随する施設ではなく、別個の土坑(別炉に伴う廃棄坑)である可能性も否定できない。

遺物 遺物は、微細遺物を除いて、下部構造および東隣の陥ち込みから出土した。従って、厳密には本炉を使用した鍛冶作業に伴わないかもしれない。土器は、内面黒色土器高台付皿(1)、灰釉陶器碗(2)が出土した。鍛冶関連遺物は、羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・粒状滓・鍛造剥片が検出された。下部構造の黒褐色土には鍛造剥片・粒状滓が多く含まれ、鍛冶滓も数点出土したことからすれば、或いは、既存の廃棄坑を利用した可能性も考えられようか。

図281は、本炉とその周辺の直上土から採取した微細遺物の数量(採取土比重量)を20cmメッシュの分布図に表したものである。これをみると、鍛造剥片・粒状滓・砂鉄滓粉いずれも炉の外周西側から南側に濃密な分布があり、東側には少ない。南側すなわち斜面下方への偏りは移動の結果として理解できよう。一方、西側への偏りは、東側へ飛散することを妨げる何らかの状況、例えば鞆設備の存在等、を想像させる。東隣の陥ち込みが鞆設備に関連したものである可能性は考えられないでもないが、炉に接近し過ぎていることや隔壁の痕跡が認められないことなど、その想定には不利な条件がある。また、陥ち込みが炉を切って掘り込まれた土坑であるなら、微細遺物の東側での少なさは、その掘り込みに伴う現象として理解することもできよう。どちらにしても推測の域を出ないので、ここでは事実の提示にとどめたい。

時期 土器は本炉に伴わない可能性があるが、周辺遺構との関係から、9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

41号炉 (図280) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に位置する。Ⅳ層上面検出である。

構造 平面やや不整な楕円形を呈し、規模24×20cmを測る。断面形は浅い皿状で、深さ2cmが残存するに過ぎない。炉の構築は地山を掘り窪め、粘土を厚さ3cm程に貼って炉床とする。炉掘り方は35×28cm、深さ5cmが残存する。断面形は浅い半球形である。炉床は被熱して硬化し、還元状態を呈している。還元部分の外側は赤く酸化している。南東側に隣接して43号土坑(廃棄坑)が存在する。

遺物 粒状滓・鍛造剥片が検出された。

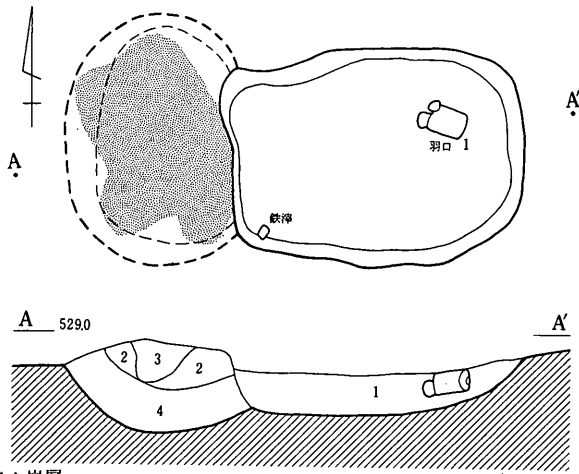
時期 本炉自体からは土器は出土していないが、周辺遺構との関係や、O地点(後述)として内面黒色土器碗が検出されていることを考慮して、9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

35号炉 (図280) 位置 B-22

検出 調査区北西部に、44号炉と隣り合って位置している。Ⅳ層上面で検出された。

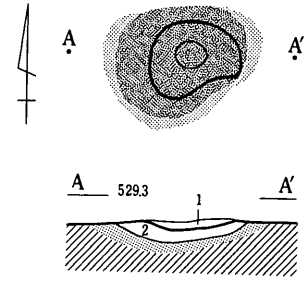
構造 平面ほぼ円形を呈し、規模32×30cm、深さ11cmを測る。断面形は浅い半球形である。炉の構築は地山を浅い半球形に掘り窪め、底面から山側の立ち上がり部分に薄く粘土を貼っている。炉床粘土部分

14炉



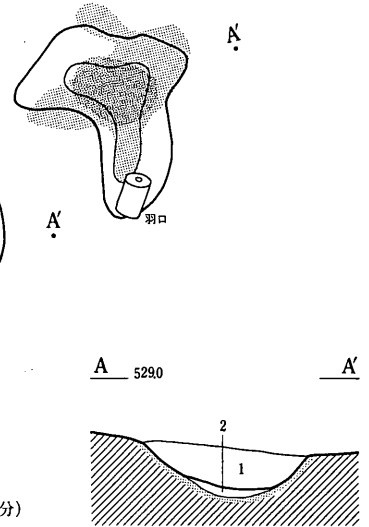
- 1: 炭層
- 2: にぶい黄橙色土 (炉構築土。粘土)
- 3: 赤褐色土 (2層土の被熱部分)
- 4: 黒褐色土 (粘土床下敷土。炭・焼土粒混)

41炉



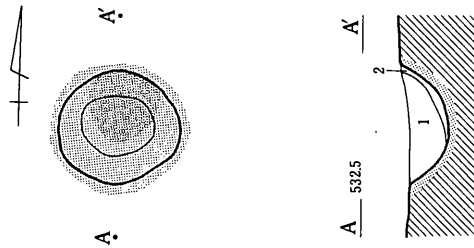
- 1: 黒色土 (シルト)
- 2: 暗オリーブ褐色土 (かたくしまる粘土。還元状態)

48炉



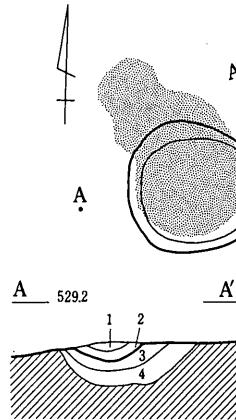
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト)
- 2: 暗オリーブ褐色土 (かたくしまる粘土。還元状態)

35炉



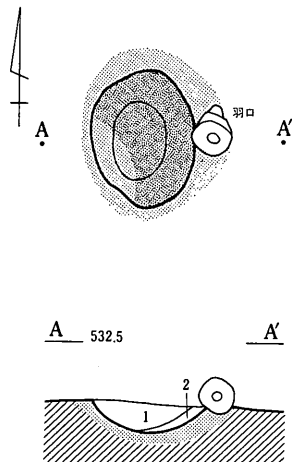
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。小礫・炭混)
- 2: 暗灰色土 (粘土。還元状態)

37炉



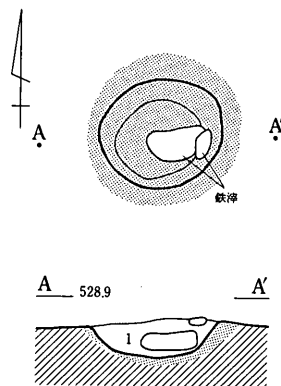
- 1: 暗オリーブ褐色土 (かたくしまる粘土。還元部分)
- 2: にぶい赤褐色土 (1層の酸化部分)
- 3: 暗オリーブ褐色土 (粘土。還元部分。炭混)
- 4: 暗褐色土 (シルト。焼土混)

44炉



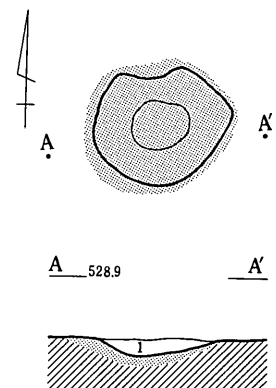
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。小礫・炭混)
- 2: 暗灰色土 (粘土。還元状態)

19炉



- 1: 黒色土 (もろいシルト)

12炉

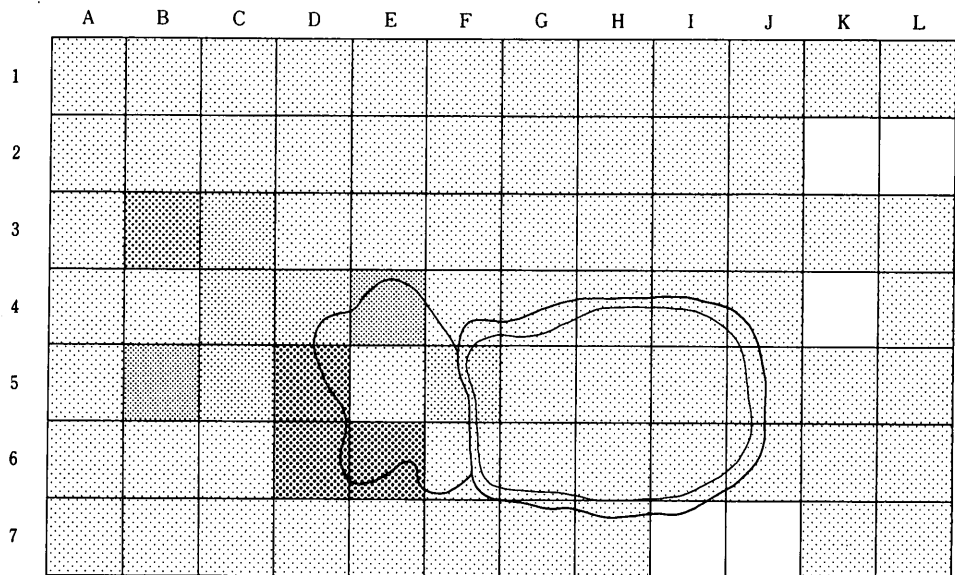
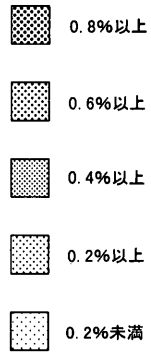


- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。礫混)

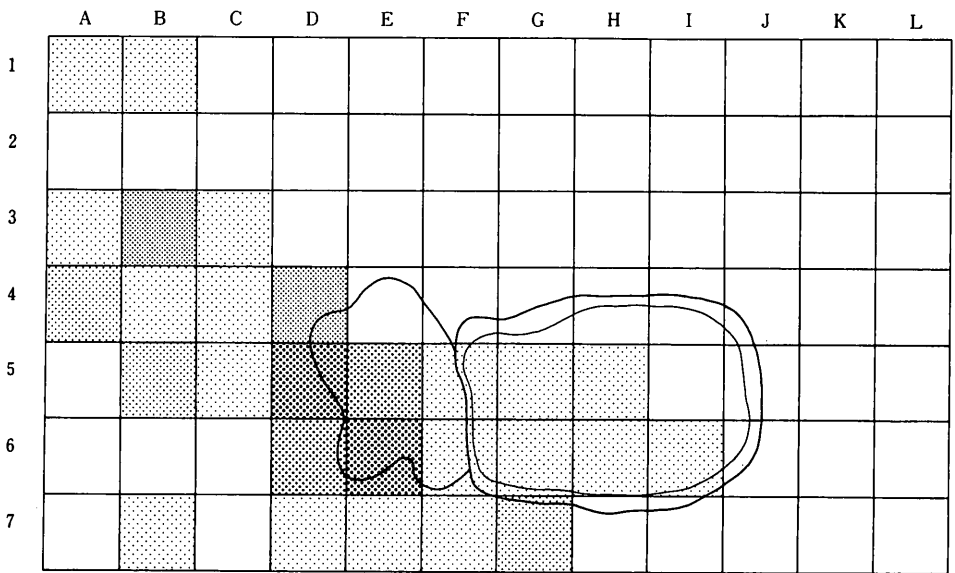
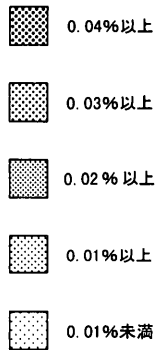
0 (1:20) 50cm

図280 鍛冶炉

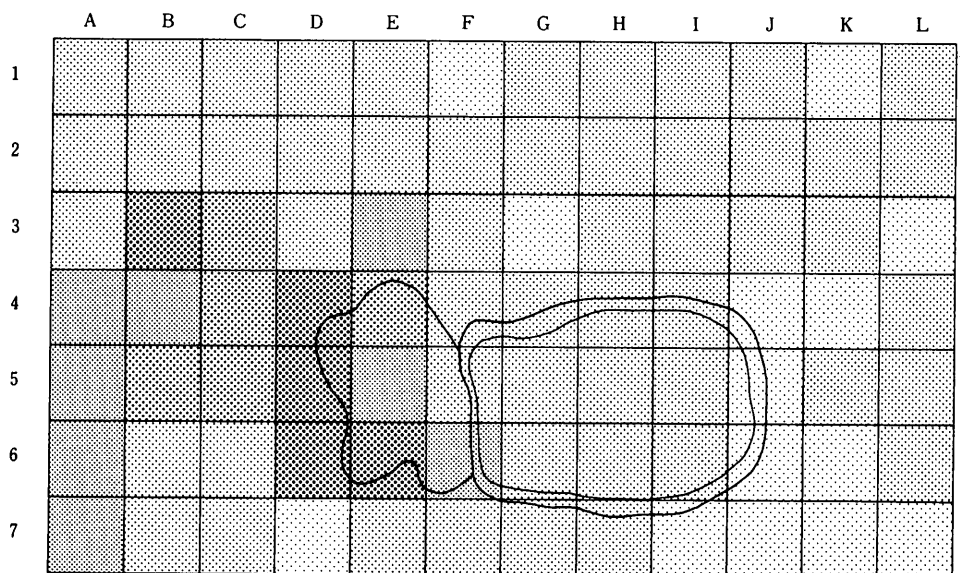
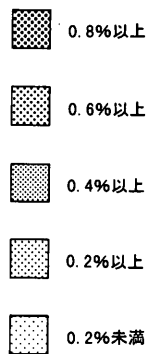
鍛造剥片



粒状滓



砂鉄滓粉



0 (1:120) 6m

図 281 14号鍛冶炉微細遺物分布 (採取土比)

は還元状態を呈し、その外側から上方にかけて赤く酸化している。

遺物 粒状滓・鍛造剥片が検出された。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前半あたりと推測する。

37号炉 (図280) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に位置し、48号炉に隣接する。IV層上面の検出である。

構造 削平ないし流出により炉の立ち上がり部分を失っている。炉の構築は、地山を掘鉢形に掘り窪め、暗褐色土を敷いた上に粘土を貼って炉床をつくっている。掘り方は36×35cmの円形を呈し、深さ12cmを測る。粘土床は2層に分かれ、その状況から、途中で貼り足したことが推定できる。第一次粘土床は炭を含んで還元状態を呈し、その直下の敷き土は酸化している。第二次粘土床は上部が還元して硬化し、下部が酸化状態となっている。西隣には36号土坑(廃棄坑)が存在する。

遺物 羽口・粒状滓・鍛造剥片が検出された。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

48号炉 (図280) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に位置し、37号炉に隣接する。IV層上面の検出である。

構造 地山を掘り窪めた炉掘り方は東・西・南が突出したT字様の平面形状を呈する。東西長46cm、南北長52cm、深さ13cmを測る。掘り方底中央に3cm程粘土を貼って炉床をつくっている。炉床粘土部分は還元して硬化し、その外側から上方にかけて赤く酸化している。東と西の突出部は鞆羽口の装着に関係するか。東隣には47号土坑(廃棄坑)が存在する。

遺物 羽口(T地点)・粒状滓・鍛造剥片が検出された。

時期 本炉自体からは土器は出土していないが、T地点(後述)として土師器坏・小形甕・灰釉陶器皿が検出されており、それを考慮すると、9世紀末～10世紀前葉と考えられよう。

44号炉 (図280) 位置 B-22

検出 調査区北西部に、35号炉と隣り合って位置している。IV層上面で検出された。

構造 炉の構築は地山を掘り窪め、粘土を貼って炉床とする。掘り方は35×27cmの楕円形を呈し、深さは7cmを測る。粘土を貼付する分、炉の機能面は幾分小形になっている。炉床粘土部分は還元状態を呈し、その外側は赤く酸化している。

遺物 羽口(S地点)が検出された。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前半あたりと推測する。

19号炉 (図280) 位置 F-10

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部から南東に3m程離れて位置する。IV層上面の検出である。

構造 平面形は33×28cmの楕円形で、断面は浅い半球形を呈し、深さ10cmを測る。地山を掘り窪めた底面をそのまま炉床とする。炉床は赤く酸化している。南東側に隣接して18号土坑(廃棄坑)が存在する。

遺物 鍛冶滓・鉄塊系遺物・粒状滓・鍛造剥片が検出された。

時期 本炉自体からは土器は出土していないが、G地点(後述)として土師器坏・埴・甕・羽釜が検出されており、それを考慮すると、10世紀前半頃と考えられよう。

12号炉 (図280) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に位置する。Ⅳ層上面の検出である。

構造 平面形は37×30cmのやや不整な楕円形で、断面形は浅い皿状を呈し、深さ5cmを測る。地山を掘り窪めた底面をそのまま炉床とする地床炉である。炉床は赤く酸化している。

遺物 鍛造剥片が検出された。

時期 本炉自体からは土器は出土していないが、周辺遺構との関係や、O地点(後述)として内面黒色土器塊が検出されていることを考慮して、9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

(3) 土坑

土坑は、その形態や出土遺物から、廃棄坑、炭焼成施設、柱穴等の性格が考えられる。廃棄坑は特定の鍛冶炉とセットとして捉え得る例がある。

38号土坑 (図282) 位置 F-5、G-1

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部の北東側に位置する。Ⅳ層上面の検出である。

構造 北半部は円形だが、南半部は隅丸方形のプランを呈する。断面はU字形に近い逆台形である。規模は110×100cm、深さ20cmを測る。壁面が被熱して酸化している。覆土は2層に分層され、下層は厚さ8cmのほぼ純粋な炭化物層である。上層は礫・炭が混じる黒褐色土。

遺物 木炭を除けば、ごく僅かな鍛造剥片・粒状滓が検出されたのみ。

性格 上記の状況から、炭焼成施設としての性格を想定する。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前半と考えておきたい。

18号土坑 (図282) 位置 G-6

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部の南東側に、19号炉の南東側(斜面下側)に隣接して位置する。検出はⅣ層上面である。

構造 東西に長い楕円形プランを呈する。平坦な底面から、北・西・南壁は急傾斜に立ち上がるが、東壁は比較的緩やかである。規模は120×70cm、深さ26cmを測る。覆土は3層に分層され、中層は薄い炭層で、上下層は小礫を含む黒褐色土である。

遺物 鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土した。鍛冶滓の出土量は多い。

性格 上記の状況から、19号炉とセットを成す廃棄坑と推定する。

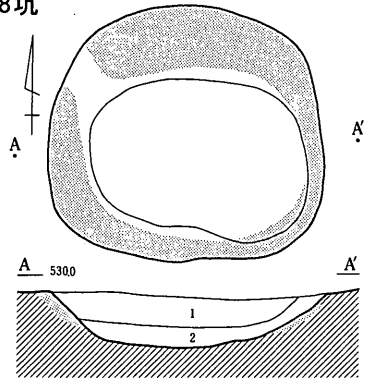
時期 本土坑自体からは土器は出土していないが、G地点(後述)として土師器坏・塊・甕・羽釜が検出されており、それを考慮すると、10世紀前半頃と考えられよう。

47号土坑 (図282) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に、48号炉の東側に隣接して位置する。Ⅳ層上面の検出。

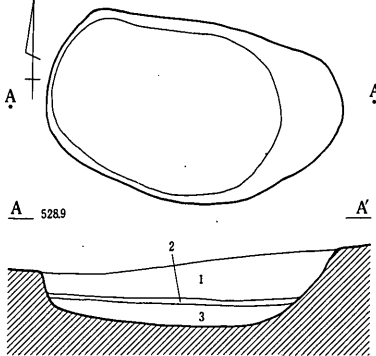
構造 ほぼ円形を呈する本体部の西側に突出部を有する形態である。突出部を含めた東西長120cmを測る。本体部は、平坦な底面から壁面が立ち上がり、規模は84×76cm、深さ30cmである。突出部は、幅36cmを測り、底部は円形に窪み、深さは17cmである。従って、大形と小形の円形土坑が繋がったような形態といえる。覆土は4層に分層される。最下層は薄い黒褐色土層で、突出部底面から本体部斜面にかけて広がり、その直上に本体部で黒褐色土が堆積した後、両者に炭を多く含む黒褐色土が溜まる。最上層は、全体を礫が混じる黒褐色土が埋積している。

38坑



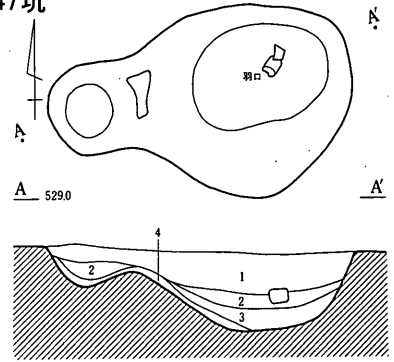
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。礫・炭混)
2: 炭層

18坑



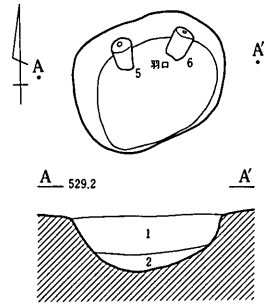
- 1: 黒褐色土 (シルト。小礫多)
2: 炭層
3: 暗褐色土 (シルト。小礫混)

47坑



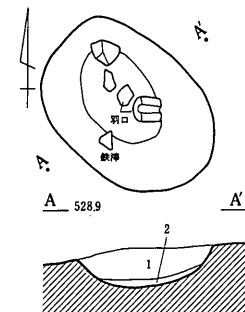
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。礫混)
2: 黒色土 (粘性シルト。炭多)
3: 黒褐色土 (シルト)
4: 黒褐色土 (シルト)

43坑



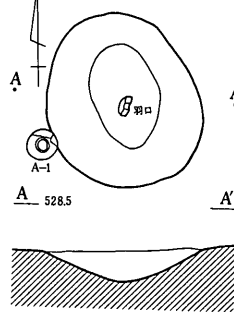
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。礫混)
2: 黒色土 (1層に炭混)

3坑

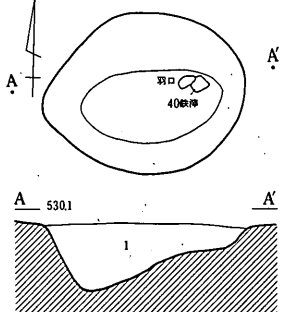


- 1: にぶい黄褐色土 (シルト。礫・炭混)
2: 黒色土 (炭層)

50坑

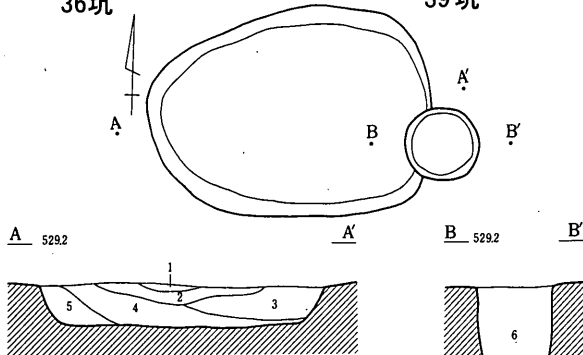


24坑



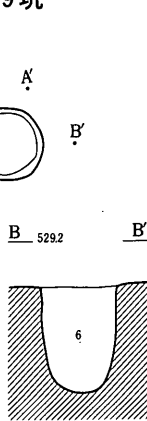
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。小礫多)

36坑

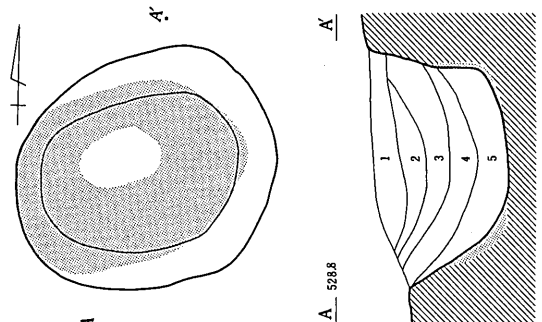


- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。極小礫混)
2: 炭層
3: 黒褐色土 (粘性シルト。礫混)
4: 黒色土 (シルト。炭混)
5: 暗褐色土 (シルト。焼土混)
6: 黒褐色土 (39坑覆土。粘性シルト)

39坑

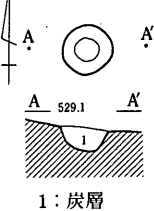


2坑



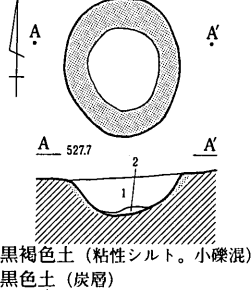
- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。小礫混。基本層序II~III)
2: 黒褐色土 (粘性シルト。炭多)
3: にぶい黄褐色土 (粘性シルト)
4: 暗褐色土 (拳大の礫混入)
5: 炭層

45坑



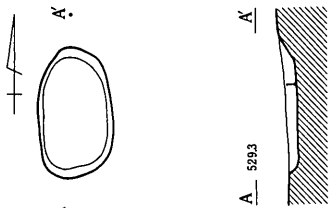
- 1: 炭層

16坑



- 1: 黒褐色土 (粘性シルト。小礫混)
2: 黒色土 (炭層)

42坑



- 1: 炭層

0 (1:30) 1m

図282 土坑

遺物 羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土している。鍛造剥片・粒状滓とも出土量・含有割合は全遺構の中で最高の部類である。

性格 上記の状況から、48号炉とセットになる廃棄坑と推定する。

時期 本炉自体からは土器は出土していないが、T地点（後述）として土師器坏・小形甕・灰釉陶器皿が検出されており、それを考慮すると、9世紀末～10世紀前葉と考えられよう。

43号土坑 (図282) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に、41号炉の南東側に隣接して位置する。IV層上面の検出。

構造 平面形は隅丸方形に近い楕円形を呈し、やや平坦な底面から比較的急に壁面が立ち上がる。規模は61×50cm、深さ22cmを測る。覆土は2層に分層される。下層は炭を含む黒色土で、上層は礫が混じる黒褐色土が堆積している。

遺物 羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土している。羽口・椀形鍛冶滓の出土数が際立って多い。

性格 上記の状況から、41号炉とセットになる廃棄坑と推定する。

時期 本炉自体からは土器は出土していないが、周辺遺構との関係や、O地点（後述）として内面黒色土器碗が検出されていることを考慮して、9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

3号土坑 (図282・285) 位置 G-6

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部から南に6m程離れて、単独で位置する。IV層上面の検出。

構造 平面形は楕円形を呈する、断面形は逆台形に近いU字形である。規模は74×53cm、深さ15cmを測る。底部に炭が溜まり、その上に礫・炭が混じるにぶい黄褐色土が堆積している。

遺物 土器は、覆土から内面黒色土器碗(1・2)が出土している。鍛冶関連遺物は、羽口(D地点)・鍛冶滓・ごく僅かの鍛造剥片・粒状滓が検出された。

性格 上記の状況から、廃棄坑としての性格を想定するが、セットになる鍛冶炉は見当たらない。西側に位置するSF2は焼土の集中であるため、鍛冶炉とは認められない。

時期 9世紀後葉～10世紀前葉と考える。

50号土坑 (図282) 位置 F-10

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部から南に6m程離れて、単独で位置する。IV層上面の検出。

構造 平面形は楕円形を呈し、断面形は浅い播鉢状である。規模は70×60cm、深さ12cmを測る。覆土は黒褐色土の単層である。

遺物 羽口(A地点)が出土した。

性格 遺物は少ないが、廃棄坑としての性格を想定したい。セットになる鍛冶炉は見当たらない。東側に位置するSF2は焼土の集中であるため、鍛冶炉とは認められない。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

24号土坑 (図282) 位置 G-2

検出 調査区東部に単独で位置する。IV層上面の検出。

構造 平面形は楕円形を呈する。西側底面が低くなっているため、東西断面形はL字状を呈するが、南北方向では逆台形である。規模は80×63cm、深さは最大で27cmを測る。覆土は小礫を多く含んだ黒褐

色土の単層である。

遺物 羽口・鍛冶滓・鍛造剥片が出土している。

性格 上記の様相から、廃棄坑としての性格を想定する。セットになる鍛冶炉は見当たらない。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前半と考えておきたい。

36号土坑 (図282) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に、37号炉の西側に隣接して位置する。Ⅳ層上面の検出である。39号土坑に東壁を切られる。

構造 平面形は隅丸方形に近い楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、平坦な底面から比較的急傾斜で壁面が立ち上がる。規模は113×82cm、深さ17cmを測る。壁面から底面にかけて被熱している。覆土は5層に分層される。焼土・炭・礫を含む暗褐色～黒褐色土が堆積した後、炭層が溜まり、さらに極小礫が混じる黒褐色土が堆積している。

遺物 鍛造剥片が出土している。

性格 上記の様相から、炭焼成施設を廃棄坑に転用したものとする。37号炉とセットになる廃棄坑と推定する。48・41・19号炉は東ないし南東側に廃棄坑を伴うが、本坑の場合、鍛冶炉の西側にある。特異な位置設定といえるが、転用故のことであろう。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

39号土坑 (図282) 位置 F-5

検出 Ⅳ層上面検出である。36号土坑を切って掘り込まれている。

構造 平面形は直径30cmの円形を呈する。断面形はU字形で、深さ41cmを測る。

遺物 遺物は出土していない。

性格 形態からみて、柱穴と考えられる。

時期 土器は出土していないが、鍛冶施設の覆い屋の柱穴である可能性が考えられることから、9世紀後葉～10世紀前葉と考えておきたい。

2号土坑 (図282・285) 位置 G-6・11

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部から南東に離れて単独で存在する。Ⅳ層上面の検出である。

構造 平面形はほぼ円形である。断面形は逆台形を呈し、やや平坦な底面から急傾斜で壁面が立ち上がる。規模は105×90cm、深さ54cmを測る。壁面から底面にかけて被熱している。覆土は5層に分層される。最下層は純粋な炭層が厚さ13cmに堆積したものである。その直上の暗褐色土層は遺物とともに拳大の礫を包含する。礫は投げ込まれたものと推測される。それより上位は炭や小礫を含む鈍い黄褐色～黒褐色土が埋積する。

遺物 土器は内面黒色土器碗(1)、鉄製品は刀子(4・5)・鉄棒を折り曲げて輪状頭部をつくり出した製品(19)が出土している。鍛冶関連遺物は羽口・椀形滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が検出されている。

性格 上記の様相から、炭焼成施設を廃棄坑に転用したものとする。セットになる鍛冶炉は不明。

時期 9世紀後葉～10世紀前葉と考える。

45号土坑 (図282) 位置 F-5

検出 調査区中央の、51号土坑の南1mに位置する。Ⅲ層上面検出である。

構造 平面形は直径20cmの円形を呈する。断面形はU字形で、深さ10cmを測る。覆土はほぼ純粋な炭層の単層である。

遺物 遺物は出土していない。

性格 形態からみて、柱穴と考えられる。覆土の炭は51号土坑由来であろう。

時期 覆土の様相から、鍛冶施設群の廃絶以降に掘り込まれたものと考えられる。

16号土坑 (図282) 位置 F-15

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部の南方に離れて単独で存在する。Ⅳ層上面の検出である。

構造 平面形は楕円形を呈し、断面形は楕円形である。規模は55×46cm、深さ15cmを測る。壁面が被熱している。底面直上には炭層が薄く堆積し、その上を小礫を含む黒褐色土が埋積する。

遺物 羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物(以上E地点)・鍛造剥片・粒状滓が検出されている。

性格 上記の様相から、炭焼成施設を廃棄坑に転用したものとする。セットになる鍛冶炉は不明。

時期 土器は出土していないが、周辺遺構との関係から9世紀後葉～10世紀前半と考えておきたい。

42号土坑 (図282) 位置 F-4

検出 調査区中央の、51号土坑の南西1mに位置する。Ⅳ層上面検出である。

構造 平面形は長楕円形を呈し、底面は平坦である。規模は51×30cm、深さ5cmを測る。覆土はほぼ純粋な炭層の単層である。

遺物 遺物は出土していない。

性格 性格は不明である。覆土の炭は51号土坑由来と考えられる。

時期 覆土の様相から、鍛冶施設群の廃絶以降に掘り込まれたものと考えられる。

51号土坑 (図283) 位置 F-5

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部の北側(斜面上方)に位置する。Ⅲ層上面検出である。

構造 平面形状は長楕円形に近い形状で、長軸はN-56°-Eを指す。西端部はほぼ方形を呈し、長軸線上に張出し部が付く。張出し部を除いた長軸長468cm、短軸長224cm、深さ40cmを測る。底面は平坦だが、南および西に向かって下り勾配を成しており、中央部を中心として部分的に被熱している。底面西端部には、張出し部と相対する位置に直径70cm・深さ10cm強の台形に近い円形の窪みがある。壁は底面から比較的急角度で立ち上がる。張出し部は、底辺を内側に向けた三角形ないし台形状の窪みを成しており、規模は66×54cm、深さ30cmを測る。底面には残りの良い木炭片が多量に堆積しており、その木炭片は本遺構下方の斜面にも流れ出している。

遺物 木炭以外に殆ど遺物は出土していない。

性格 上述した特徴から、炭焼成施設としての性格を推定できる。ただし、天井部の存在は想定し難い状況である。

時期 流れ出した木炭が斜面下方の鍛冶炉・廃棄坑等(の覆土)を覆うことから(基本層序Ⅱ層)、構築・使用時期は、それらの廃絶以後であることは確かだが、それ以上の限定は難しい。

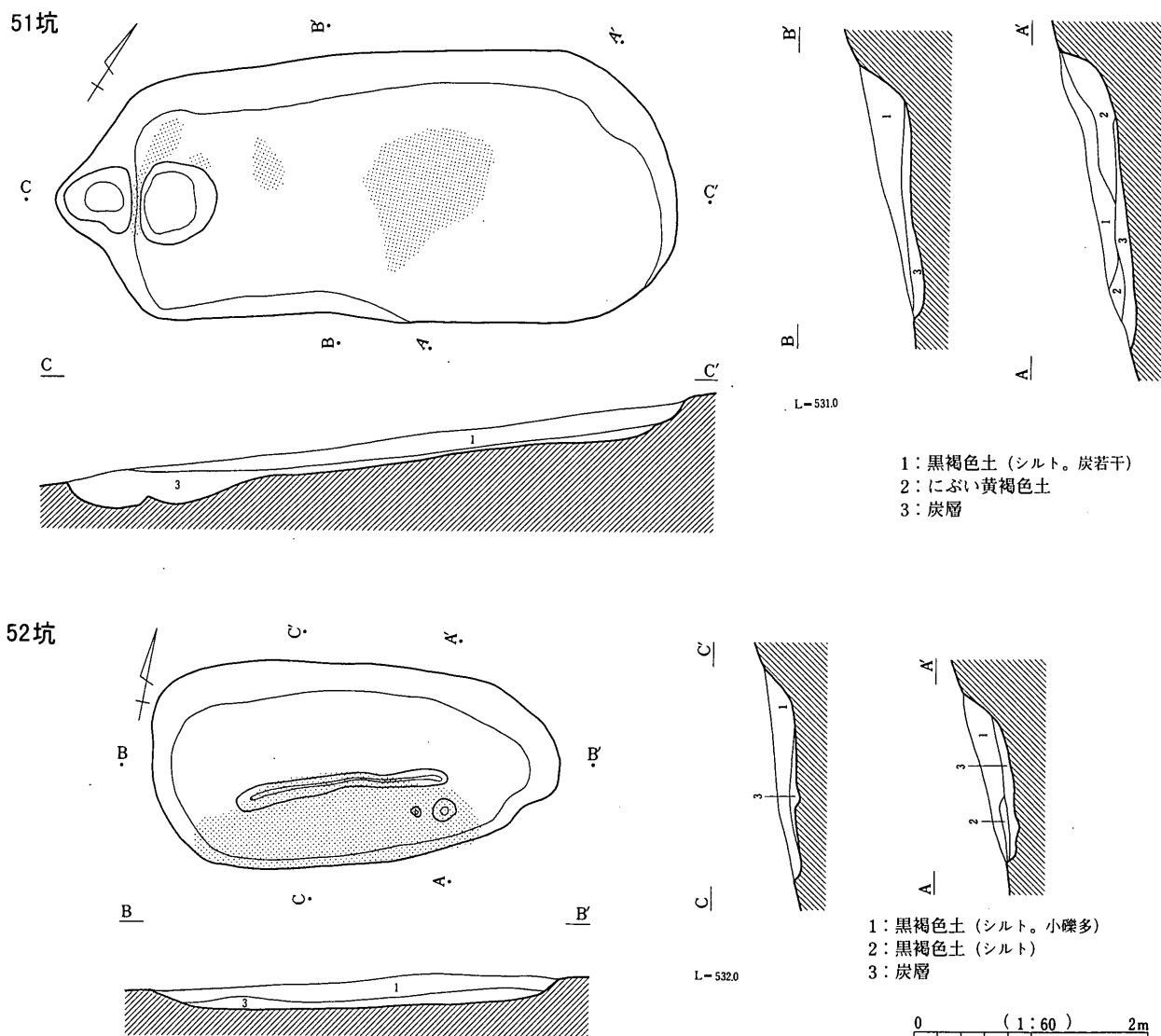


図 283 51号・52号土坑

52号土坑 (図 283) 位置 B-21、G-1

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部から北東に離れて(斜面上方)位置する。Ⅲ層上面検出である。

構造 平面形状は長楕円形に近い形状だが、51号土坑に似て、西端部がやや直線的になる状況を示している。長軸はN-75°-Eを指す。規模は長軸長350cm、短軸長174cm、深さ24cmを測る。張り出し部は有していない。底面は平坦だが、東西方向は水平、南北方向では南に向かって若干の下り勾配を成す。底面は被熱し、特に南半が良く焼けている。底面中央には長軸に平行に、長さ186cm、幅10cm、深さ5cm程の溝が切られている。溝の東端南側にピット状の窪みが2基ある。東側のものは直径10cm、深さ5cmで、西側のものはそれより小形である。壁の立ち上がりは直線的だが傾斜は比較的緩やかである。底面には残りの良い木炭片が多量に堆積しており、その木炭片は本遺構下方の斜面にも流れ出している。

遺物 木炭以外に殆ど遺物は出土していない。

性格 上述した特徴から、炭焼成施設としての性格を推定できる。ただし、天井部の存在は想定し難い状況である。

時期 流れ出した木炭が斜面下方の2号住居・鍛冶炉・廃棄坑等(の覆土)を覆うことから(基本層序Ⅱ層)、構築・使用時期は、それらの廃絶以後であることは確かだが、それ以上の限定は難しい。

(4) 柱穴列

1号柱穴列 (図 279・285) 位置 F-9・10

検出 調査区中央の鍛冶遺構集中部に、14号炉の南1.5mに位置する。IV層上面検出である。

構造 平面円形を呈する7基の柱穴がほぼ1列に並ぶ。東端のP1から西端のP7までの距離は、芯々、5.7mを測り、軸方向はN-86°-Eである。ただし、すべての柱穴が一直線上に乗るわけではなく、各柱穴の形態や規模には差があり、またその間隔も不揃いであるため、これらすべてが同一建物の柱穴とは限らず、複数建物の累積の可能性がある。以下、各柱穴の形態を列挙する。

P1：断面深いU字状で、深さ30cm P2：断面浅いU字状で、深さ12cm

P3：断面深いU字状で、深さ20cm P4：断面深いU字状で、深さ17cm

P5：断面深いU字状で、深さ40cm P6：断面浅いU字状で、深さ10cm

P7：断面浅いU字状で、深さ12cm

遺物 遺物は検出されなかった。

性格 1号柱穴列の北側から東側(斜面上方)には柱穴と見做し得る形態のピットが分布する。軸線の延長上に近い位置には20号坑があり、また、1号柱穴列および20号坑と、鍛冶炉・廃棄坑を挟んで対するような位置に22・17・46・45号坑が分布する。さらに、両者の中間に21・40・39・41号坑が位置する。これらは1号柱穴列とともに、集中部の鍛冶施設を覆う上屋の柱穴を構成すると推定される。ただし、鍛冶施設がすべて同時に操業していたとする確証がないため、その上屋も複数存在した可能性がある。とはいえ、これらの柱穴から整合的な組み合わせを抽出することができなかつたため、上屋数とその構造を明確にすることは難しい。

時期 集中部の鍛冶施設と同時期、9世紀後葉～10世紀前葉と推定する。

(5) その他

ア SF (図 276・279・285)

単純に地山被熱部分が平坦に広がるもの、および、焼土集中については、明確に鍛冶炉とは認定し難いため、SFとして登録した。ただし、前者については、鍛冶炉を含む可能性がある。時期は隣接する鍛冶炉・廃棄坑と同時期と考えておきたい。

SF 1

G-6グリッドに位置し、19号炉・18号土坑に隣接する。地山の平坦な被熱部分で、70×52cmの楕円形を呈する。遺物は鍛造剥片・粒状滓が検出された。ただし、G地点出土としたものと区別はできない。

SF 2

F-10グリッドに位置し、3号土坑・50号土坑に近接する。100×20cmおよび64×33cmの2部分に焼土が集中する。遺物は鍛造剥片・粒状滓が検出されたが、B地点出土としたものと区別はできない。

SF 4

調査区中央の鍛冶遺構集中部のF-9グリッドに位置し、I地点の西に隣接する。地山の平坦な被熱部分で、68×28cmのやや不整な楕円形を呈する。遺物は鍛造剥片・粒状滓が検出された。なお、SF 4・5・6は近接して一列に並ぶ状態である。

SF 5

F-9グリッドに位置し、SF 6の東に隣接する。地山の平坦な被熱部分で、40×40cmの三角形に近い楕円形を呈する。若干の白色粘土粒が散る。遺物は鍛造剥片・粒状滓が検出された。

S F 6

F-9グリッドに位置し、S F 5の西に隣接する。地山の平坦な被熱部分で、50×33cmの楕円形を呈する。若干の白色粘土粒が散る。遺物は鍛造剥片・粒状滓が検出された。

S F 10

F-10グリッドに位置し、2号住居の南辺上に、140×55cm程度の不整形に焼土が集中する。遺物は鍛造剥片・粒状滓・土器・鉄製品が検出された。土器は口縁部に最大径をもつロクロ整形土師器甕(1)、金属製品は板状を呈する鉄製品(20)が出土している。

S F 11

F-5グリッドに位置する。一部、43号土坑の上面を覆って、110×68cm程度の楕円形に焼土が集中する。遺物は鍛造剥片・粒状滓が検出されたが、T地点出土のものと区別はできない。

S F 13

F-10グリッドに位置し、I地点の東に隣接する。地山の平坦な被熱部分で、48×40cmのやや不整な楕円形を呈する。

イ 炭・焼土・鉄滓・羽口・土器片の分布する範囲(図276・279・285)

調査当初の平面精査において、上記の遺物の分布する範囲を20箇所確認し、それぞれA～T地点として登録し、必要な地点については図化した。調査の進展により、その地点の下位および周辺から遺構が確認された場合と、なんら遺構が検出されなかった場合がある。前者の場合においても、明確に遺構として認識されるまでは、或いは複数の遺構が存在しその帰属が明らかでない場合には、遺物はこの「地点」を単位として取り上げた。各地点の範囲は、炭の分布範囲をその外形として図化記録されている。以下、各地点の概略を記述する。なお、P地点は51号土坑に、Q地点は52号土坑にそれぞれ振り替えた。

A地点

F-10グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。50号土坑がその下位に存在する。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓・土器が出土した。土器は内面黒色土器高台付皿(1)がある。

B地点

F-10グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。A地点の東に隣接する。S F 20(焼土分布)がその下位に存在する。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓・土器が出土した。土器はロクロ整形土師器甕(1)がある。

C地点

F-9・10グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。H地点の東に隣接する。下位には遺構は存在しなかった。遺物は羽口・鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓が出土した。なお、表11のC・H地点出土とした遺物は、C・H一括で取り上げたものである。

D地点

G-6グリッドに位置し、B地点の東に隣接する炭の分布である。その範囲の記録は残されていないが、その後の調査により、3号土坑の覆土に相当することが判明した。遺物は羽口・鍛造剥片・粒状滓・土器が出土した。土器はロクロ整形小形甕(1)がある。

E地点

F-15グリッドに位置する炭の分布である。その範囲は記録されていないが、その後、16号土坑の覆土に相当することが判明した。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土した。

F地点

G-11グリッドに位置する炭の分布である。その範囲は記録されていないが、その後の調査により、2号土坑の覆土に相当することが判明した。遺物は2号土坑出土として取り上げられている。

G地点

F-10、G-6グリッドに位置する炭の広がりである。その範囲は記録されていないが、調査の進展により、19号炉および18号土坑、SF1に対応することが判明した。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓・土器・鉄製品が出土した。土器は、ロクロ整形土師器坏(1~3)、内面黒色土器坏・小碗(4・5)、羽釜(6)、ロクロ整形甕(7)がある。鉄製品は鎌(6)がある。

H地点

F-9グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。C地点の西に隣接する。その下位に遺構は存在しなかった。遺物は羽口・鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓が出土した。

I地点

F-4・5・9・10グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。K地点の西に隣接する。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓・鉄製品が出土した。鉄製品は釘(16)がある。

J地点

F-14グリッドに位置する炭の分布である。その範囲は記録されていないが、その後、1号竪穴住居の覆土に相当することが判明した。遺物は1号竪穴住居出土として取り上げられている。

K地点

F-5・10グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。M・T・N・I地点に囲まれる。南西部には14号炉がその下位に存在する。遺物は羽口・鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓が出土した。

L地点

F-14グリッドに位置する炭の広がりである。その範囲は記録されていないが、その下位には12号土坑(小ピット)が存在する。遺物は用途不明の土製品(図285-1)が検出された。

M地点

F-10グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。K地点・O地点に隣接する。その下位に遺構は存在しなかった。遺物は鍛冶滓・鉄塊系遺物・鉄鋌状遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土した。

N地点

F-4・5グリッドに位置する不整形な炭の広がりであり、焼土分布も3箇所認められた。51号土坑およびI・K・T地点に隣接している。その下位に42号土坑、46号土坑(柱穴)が存在する。炭・焼土は51号土坑から流れ出したものと考えてよい。遺物は木炭以外には検出されていない。

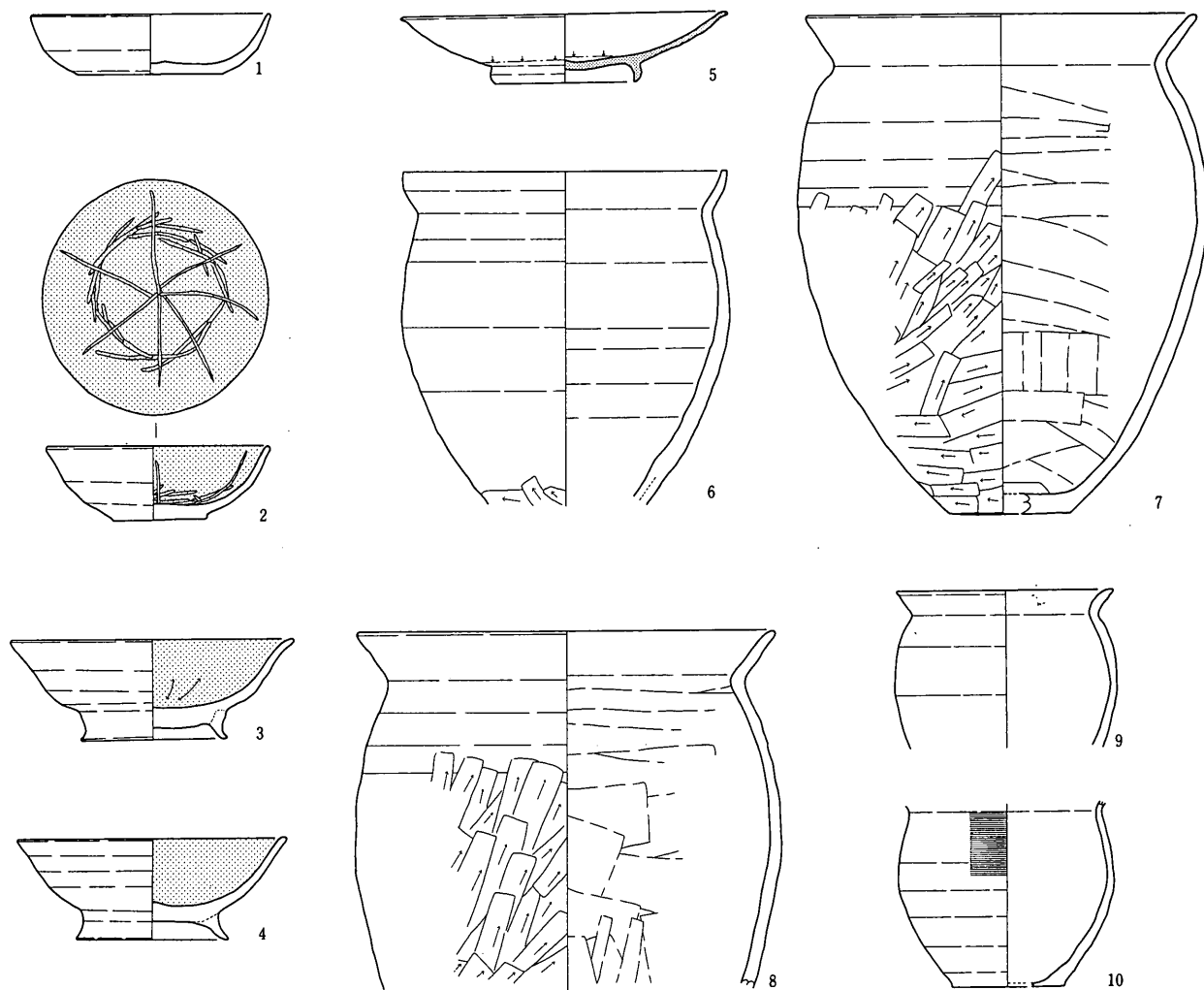
O地点

F-5・10、G-1・6グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。38号土坑(炭焼成施設)・K・M地点に隣接し、T地点と重複する。41号炉・43号土坑、SF11(焼土分布)、48号炉・47号土坑、12号炉、20号土坑(柱穴)がその下位に存在する。遺物は羽口・鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓・土器が出土した。土器は内面黒色土器碗(1)がある。

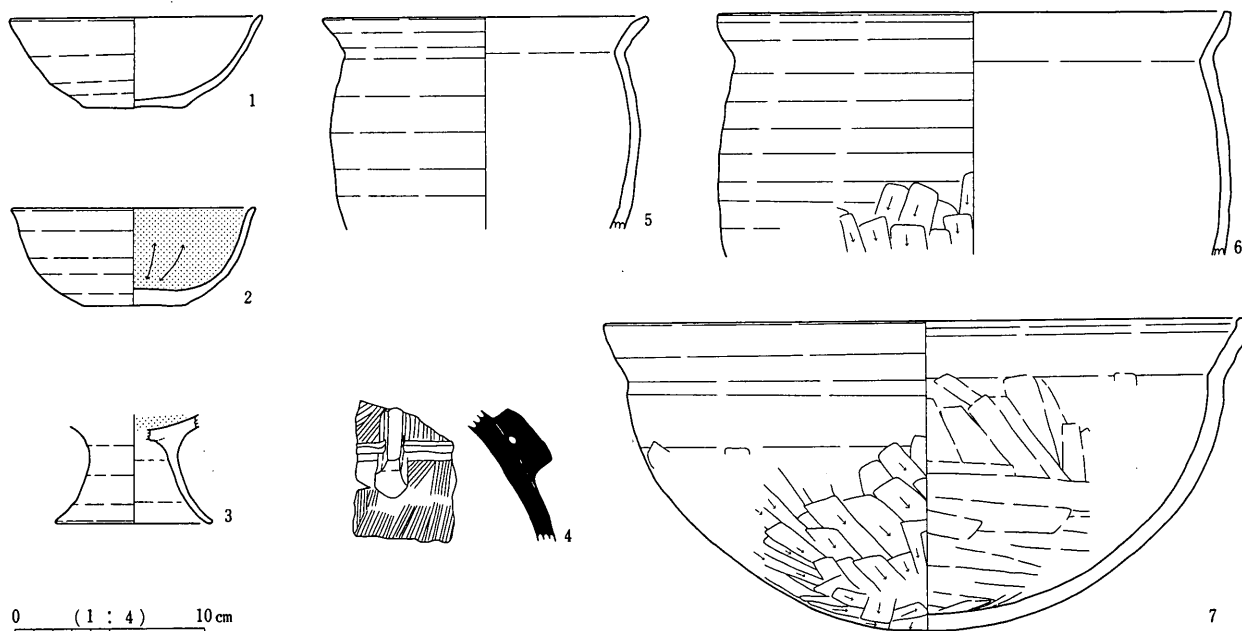
R地点

B-22・23、G-2・3グリッドに位置し、鉄滓類の廃棄範囲として捉えられる。調査区東部の谷状地形部分に広がっており、斜面上方(北側)には35号・44号炉が存在する。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土した。鉄滓類は出土総重量28.5kgに及ぶ。R地点は調査区中央の鍛冶遺構集中部(41・14号炉等)より高い位置に広がるため、これらの鍛冶遺物は35号・44号炉から排出されたこと

1住



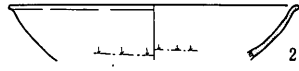
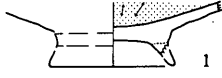
2住



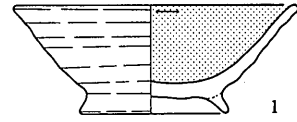
0 (1 : 4) 10 cm

図284 土器(1)

14 炉



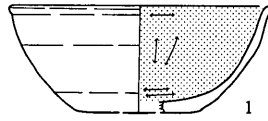
2 坑



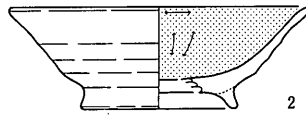
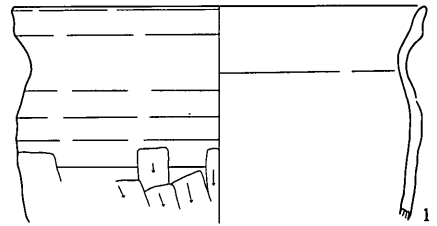
3 坑



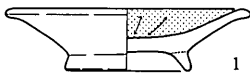
21 坑



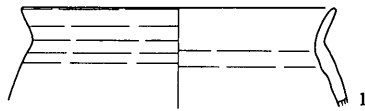
S F 10



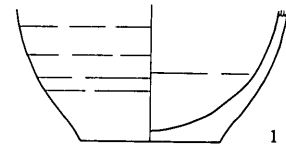
A 地点



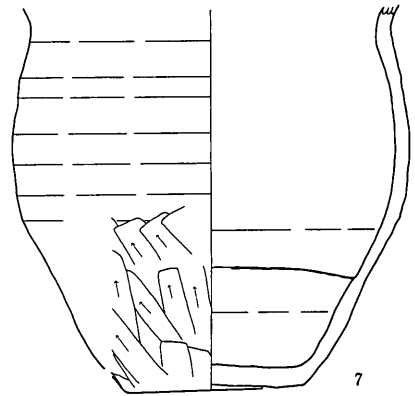
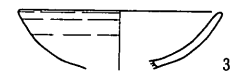
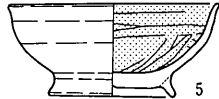
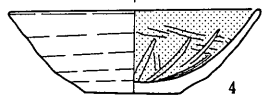
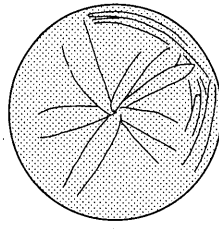
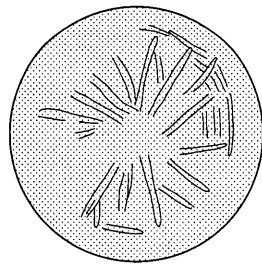
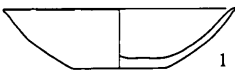
B 地点



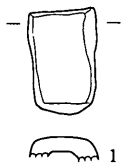
D 地点



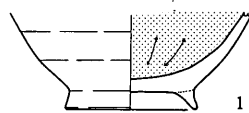
G 地点



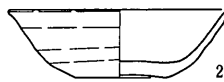
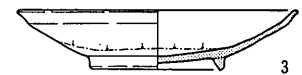
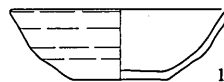
L 地点



O 地点



T 地点



0 (1:4) 10 cm

图 285 土器 (2)

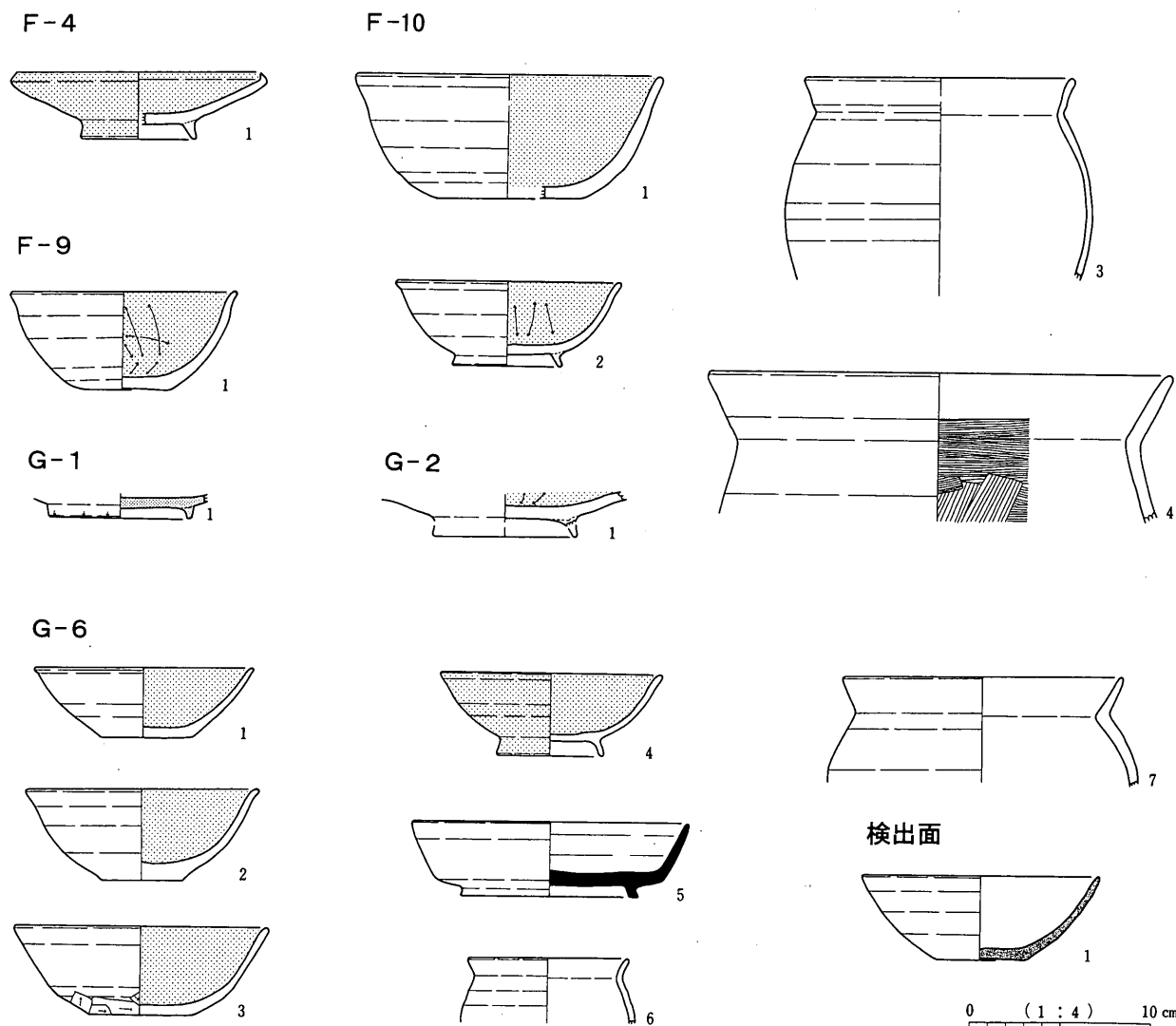


図 286 土器 (3)

が推測される。また、調査区外北西にも鍛冶施設が存在する可能性も考えられる。

S地点

B-22 グリッドに位置する炭の分布である。範囲は記録されていないが、35号・44号炉に対応する。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓が出土した。

T地点

F-5 グリッドに位置する不整形な炭の広がりである。N・K・M地点に隣接し、O地点西部と重複する。37号炉・48号炉・47号土坑がその下位に存在する。遺物は羽口・鍛冶滓・鉄塊系遺物・鍛造剥片・粒状滓・土器類が出土した。土器類は、ロクロ整形土師器坏 (1・2)、ロクロ整形小形甕 (4)、灰釉陶器皿 (3) がある。3は光ヶ丘1号窯式と思われる。なお、表11のO・T地点出土とした遺物は、O・T一括で取り上げたものである。

2 出土遺物

(1) 土器 (図 286)

ここでは、各遺構およびA～T地点以外から出土した土器について記す。

F-4 グリッドでは口縁端部を斜め内側につまみ出した両面黒色土器高台付皿 (1)、F-9 グリッドで

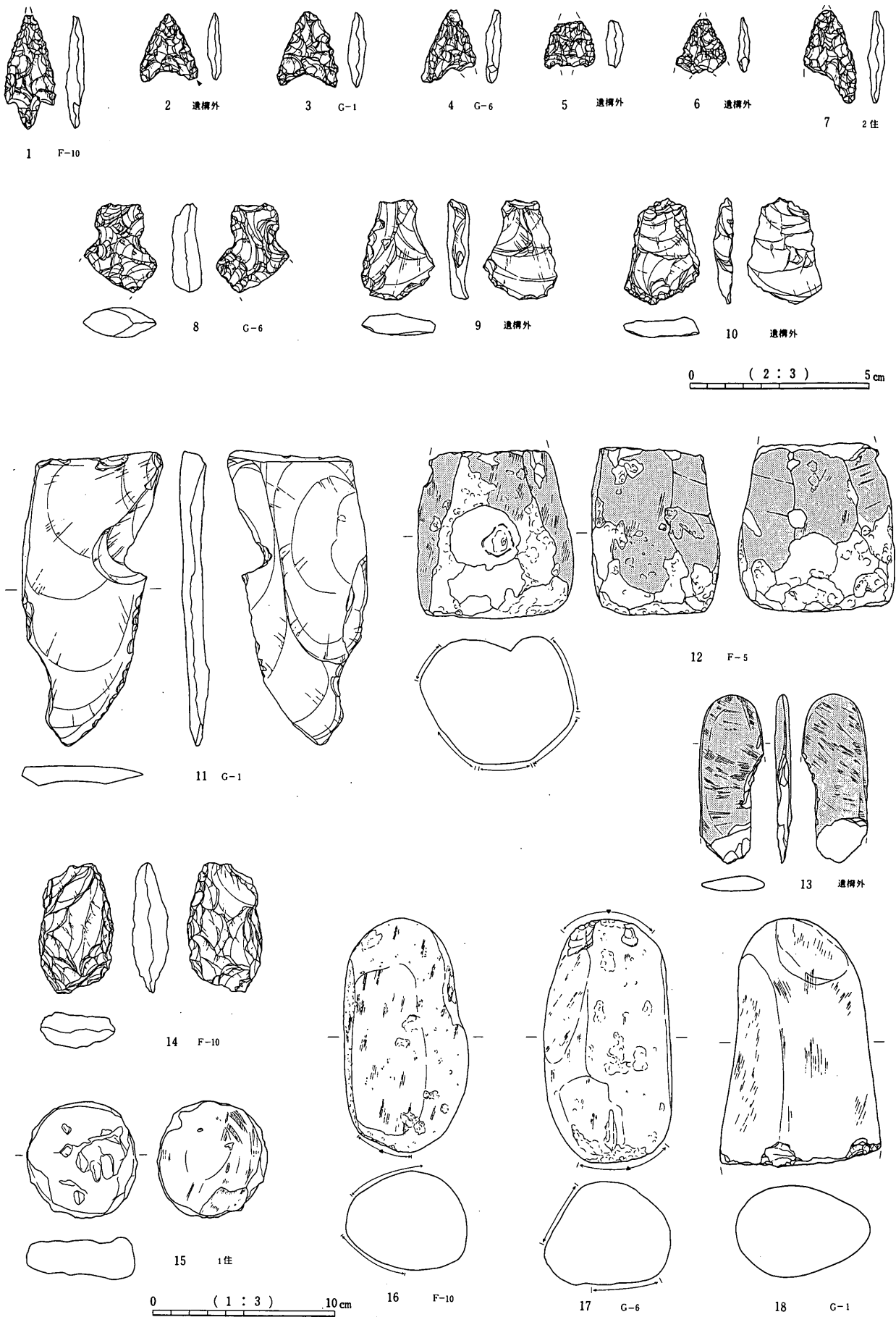


图 287 石器・石製品 (1)

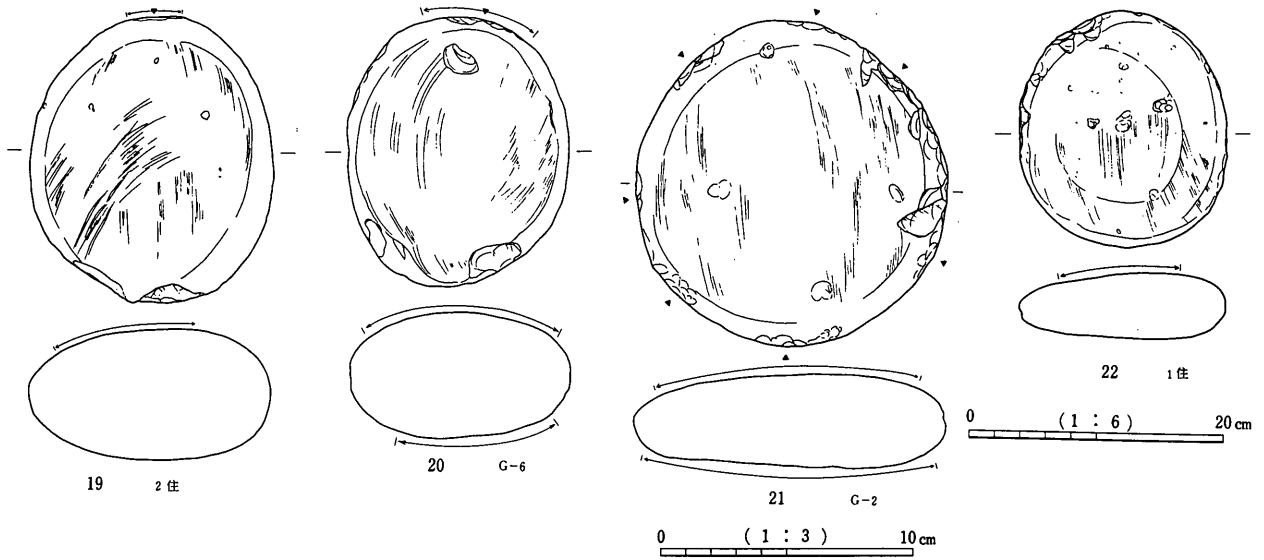


図288 石器・石製品(2)

は深い体部の内面黒色土器坏(1)が出土している。F-10グリッドでは、大形の内面黒色土器坏(1)・僅かに腰が張る内面黒色土器碗(1・2)、ロクロ整形小形甕・甕(3・4)がある。G-1グリッドでは緑釉陶器高台付皿(1)、G-2グリッドでは内面黒色土器高台付皿(1)が出土している。G-6グリッドでは内面黒色土器坏(1・2・3)、両面黒色土器碗(4)、須恵器高台付坏(5)、ロクロ整形の小形甕(6・7)がある。その他、検出面出土として軟質須恵器坏(1)が出土している。

(2) 石器・石製品 (図287・288)

石鏃 (1~7) 無茎凹基鏃 (2~4・6・7)、有茎凹基鏃 (1・5) がある。石材は1がチャート。他は黒曜石。

石匙 (8) つまみ部が刃縁に対して斜行する形態であろう。石材は黒曜石。

スクレイパー (9・10・11) 9は剥片の先端部と側縁に調整を加えて刃部を作出したもの。10は剥片先端部に調整を加える。11は大形の剥片を素材とし、先端付近の側縁に調整を加える。石材は、9は黒曜石、10はチャート、11は緻密な凝灰岩である。

砥石 (12・13) 12は折損しているが、柱状の形態といえる。側面の一部に、砥面が形成されない部分があり、そこには凹部がつけられている。13は細長く薄い礫を素材とした小形品で、残存部は全面が砥面となっている。石材は、12が凝灰岩、13が粘板岩。

打製石斧 (14) 平面形は長方形を呈し、いわゆる短冊形の形態である。両面加工により刃部を作り出している。摩耗痕は観察されない。石材は千枚岩質粘板岩と思われる。

軽石製品 (15) 円盤形を呈する形態である。

磨石 (16~22) 形態面では、柱状の礫を素材とするもの(16~18)と、丸く扁平な礫を素材とするもの(19~22)に区別できる。機能面では、磨面のみなもの(18・22)と、磨面と敲痕を合わせもつもの(16・17・19~22)を認識できる。石材は18のみ砂岩、その他は安山岩。

(3) 金属器・金属製品 (図289)

1~5は刀子の破片である。1は刀の切先部分、2は刀子の刀身、3~5は刀子の茎。6は鉄鎌の刃部破片である。7~17は鉄釘で、銹化により形状を損ねているものもあるが、すべて断面は方形。10は頭部、13~15・17は先端部、他は軸部の破片である。18は鍵形ないし環状の鉄製品。19は細い鉄棒を折り曲げ

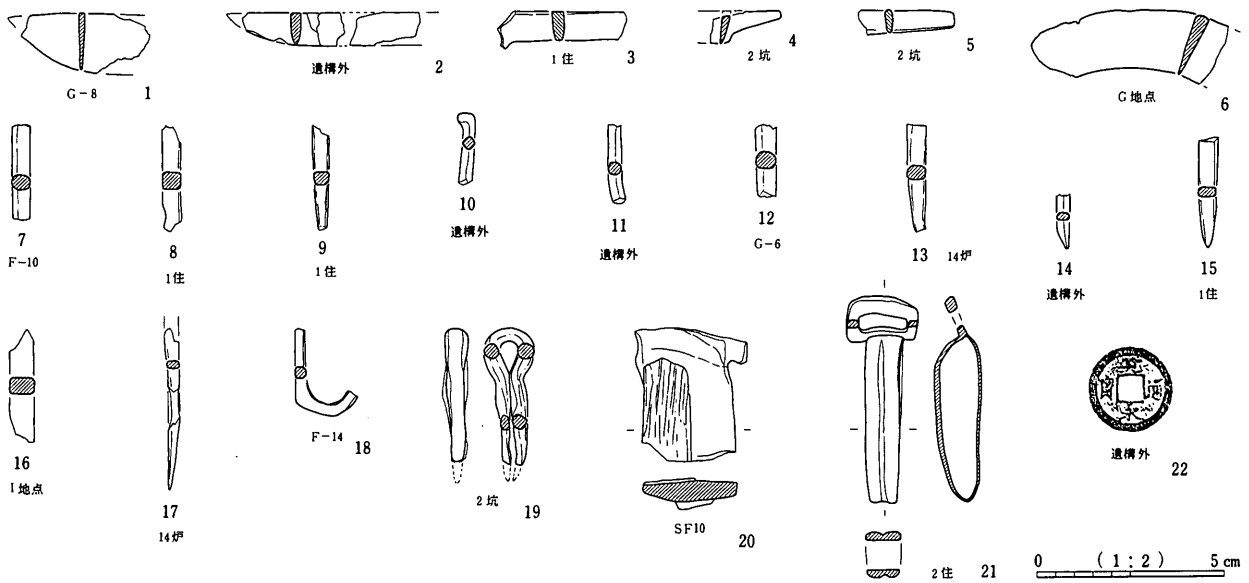


図 289 金属器・金属製品

て環状の頭部を作り出したもので、環状頭部は紐掛け穴の機能を果たすものであろう。20は形態・用途不明の鉄製品。片面に木質が附着している。21は刀の足金物に似た形態の鉄製品で、環状部と吊手部の軸は直交する。22は寛永通宝。

(4) 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物は、韃羽口、鍛冶滓類、鉄塊系遺物、鍛造剥片・粒状滓等の微細遺物、鉄器などが検出されている。これらの化学分析結果については、付章第6節にその概略を掲載した。

羽口 (図 290・291、表 37・39)

遺跡全体で 254 点 (14,846 g) が出土した。いずれも酸化炎焼成でつくられ、破片で出土している。

胎土は一般に粗く、25mm 以下のスサを含むものが大部分を占める。外面調整はナデが基本で、指圧痕・指ナデが観察できる資料もある。9の外面はハケナデ調整が施され、6は外面に長軸方向の面取りが認められる。内面調整も、観察可能なものからするとナデ調整のようである。10・11は身部～基部の資料で、端部は面状に仕上げられている。体部は基部から先端部へ向かって徐々に細くなる形状で、各資料の外径は、先端部 5.9～8.5cm、身部 6.8～9.5cm と個体差がある。孔部は、先端から基部まで径の差異は殆どなく、口径は復元計測できるもので、1.8～2.9cm を測る。口径サイズから、形態は、口径 1.8～2.2cm の細いもの (1・3・4・6・8・10・16・18)、2.4cm 前後のやや細いもの (2・5・7・9・11～14・17)、2.8cm 前後の太いもの (15) の 3 形態に分けられそうである。ただし、太い形態の例はごく少ない。先端部を残す資料は、先端部が使用による二次被熱を強く受けて溶解している様子が観察でき、滓化した溶解部分が下方に垂れた状態のものが相当数認められる。14は下面に椀形鍛冶滓が附着している。使用回数は被熱の状況から 1 回と判断されるものが殆どである。使用角度は、10 度台のものが多いが、ばらつきがあり、40 度を超すものも認められる。2・6・9・13 については化学分析を行い、耐火度はいずれも 1140℃ 以上の高い数値が出ている。

鍛冶滓 (図 292 ~ 296、表 38・39)

鍛冶滓は、遺跡全体で、1374点 (51,233 g) が出土した。そのうち、426点 (42,983 g) が腕形鍛冶滓で、明確に形状分類できないその他鍛冶滓が 948点 (8,250 g) を数える。ただし、化学分析を実施した資料 20点のうち、製錬滓と判断されたものが 2点ある。

腕形鍛冶滓は大振りのもの (27・46・48・51・66・67・68 など) と小振りのもの (23・31・37・40・44・63) があり、二段形成のもの (27)、三段形成のもの (49) もみられる。さらに、腕形鍛冶滓は、完形の状態よりも割れて接合できる滓 (48) や破面をもつ滓が多い。30・52・57・58 は側面を小割りされた状態で、64 は全面に近く小割りされている。このことは、鍛冶滓中に半溶解して落ち込んだ金属鉄を、もう一度鉄素材として利用するために、滓を打ち割るという作業を想定させる。

腕形鍛冶滓は磁着反応 (磁着度) や金属探知機の反応 (メタル度) から含鉄と非含鉄に分類できる。今回は、メタルチェッカーで H (○) 反応以上の高反応を示したものを含鉄腕形鍛冶滓として抽出した。外見上は他の腕形鍛冶滓と区別しにくい、内部に金属鉄を含有しているため重量感があり、部分的にメタル度が高い状況を示している。腕形鍛冶滓のうち 6割が含鉄である。

試料 20点について行った化学分析では、27・41・44・50・51・55・59・65・69・71 が精練鍛冶滓とされ、42・49・52・63・64・76 が鍛錬鍛冶滓と判断されている。また、89 は鉄滓等が炉外で再結合した再結合滓として登録していたが、化学分析では銹化鉄塊との結果を得ている。製錬滓と判断された 25・30 は、鉄素材として製錬遺跡から搬入された可能性が考えられ、どちらも打ち割られた状態を示している。なお、20点とも鉄源に砂鉄が使用された可能性が高いという結果が得られた。

鉄塊系遺物 (図 296、表 38・39)

遺跡全体で、197点 (2,505 g) が出土している。鍛冶滓としてまとめられた資料からメタルチェッカーに高反応を示し、腕形鍛冶滓とは明らかに異なる形状をもつ小形品を「鉄塊系遺物」として抽出した。非常に重量感があり、内部には金属鉄の小塊を包含している。内部の鉄の銹化膨張に伴う放射割れや黒錆の吹き出しといった外見的特徴も有している。

化学分析の結果では、試料 3点のうち、91 は精練鍛冶過程の鉄塊系遺物、92 が精練鍛冶過程の鉄塊と考えられ、93 は鍛冶加工を受けておらず、炭素量の非常に高い製錬時に凝固・生成した鉄塊と考えられている。また、いずれも鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い結果が得られている。93 については、鉄素材として外部から持ち込まれたことを推定し得る。

鍛造剥片 (表 40・41)

鍛造剥片は、選別ふるいを用いて大きさ数段階に分けた。その形態的特徴については、14号鍛冶炉および 19号鍛冶炉出土のものから抽出した化学分析試料に代表させて述べる。

14号鍛冶炉出土の鍛造剥片は、大きさを 4段階に分け、各段階 20点ずつ試料を抽出した。形態は、ふるいのメッシュ 2.0mm 以上では、表面はほぼ平坦だが、剥離面は凹凸が目立ち、厚さは平均 0.34mm を測る。色調は黒色～鉛色を呈し、暗紫色に酸化したものもある。メッシュ 1.5mm では厚さ平均 0.25mm、剥離面はやや光沢をもって波打っている。メッシュ 1.0mm では厚さ平均 0.175mm とさらに薄くなり、両面ともほぼ平坦で、黒色～鉛色を呈して光沢を帯びるものが目立つ。最小のメッシュ 1.0mm 以下では厚さも平均 0.125mm と最小となる。形状は両面とも平滑で、色調は光沢をもつ鉛色を呈する。

19号鍛冶炉出土の鍛造剥片は、大きさを 4段階に分け、各段階 4点ずつ試料を抽出した。ふるいのメッシュ 2.0mm 以上では、厚さは平均 0.223mm を測り、表面はほぼ平坦だが剥離面には不整に細かな凹凸が認められる。色調は黒褐色であるが、暗紫色に酸化したものが目立つ。メッシュ 1.5mm では厚さ平均 0.12mm とかなり薄くなり、光沢を帯びるものが認められるが、表面および剥離面の形態はほぼ同様であ

る。メッシュ1.0mmでは厚さ・色調・両面形態ともほぼ変わらないが、光沢をもつ銀色のものが1点ある。最小のメッシュ1.0mm以下では両面ともほぼ平滑となり、光沢をもつ鉛色を呈するものが2点ある。ただし、厚さは変化していない。

化学分析結果によると、いずれも鍛冶加工の過程で生成した鍛造剥片である。

粒状滓 (表40・42)

鍛造剥片と同様に、選別ふるいを用いて大きさ数段階に分けた。その形態的特徴については、14号鍛冶炉および19号鍛冶炉出土遺物から抽出した化学分析試料で代表させる。

14号鍛冶炉出土の粒状滓は、大きさを3段階に分け、合計46点の試料を抽出した。形態は、ふるいのメッシュ1.5mm以上では、光沢のない黒色を呈し、完全な球形をしたものはなく、気孔がみられるものがある。直径は平均2.1mmを測る。メッシュ1.0mmでは、ほぼ球形をしたものと不整な球形のものがあり、直径平均1.4mmである。最小のメッシュ1mm以下では、全体にほぼ球形を呈し、直径平均0.86mm。色調は鉛色を呈するが、やや光沢をもつものがある。

19号鍛冶炉出土の粒状滓は、大きさを3段階に分け、各段階4点ずつ試料を抽出した。メッシュ1.5mm以上では、色調は光沢のない鉛色を呈し、完全な球形をしたものはなく、平坦面をもつものがある。メッシュ1.0mmでは、あまり光沢のない鉛色で、ほぼ球形をしたものが1点、他はやや潰れたものと涙滴状のものである。最小のメッシュ1.0mm以下ではほぼ球形を呈するもの2点、やや潰れたものと涙滴状のものが各1点である。

化学分析結果によると、いずれも鍛冶加工の過程で生成した粒状滓である。

鉄錠状遺物 (図296-94、表38・39)

平面長方形を呈する小形で扁平な遺物である。鍛冶工程で鍛打された半成品と想定したが、化学分析の結果では、鉄錠を含む鉄器や鍛冶加工品ではなく、金属鉄とその酸化銹化鉄を含む製錬・鉄塊系遺物と推定された。これも、鉄素材として持ち込まれた可能性がある。

鉄製品 (図289、表36・39)

鉄製品は、釘16点、その他が10点出土した。図示可能なものは全て図示し、その形態については前項において既に記述した。これらは、その出土状況からは、素材として持ち込まれたものとも、本遺跡で生産・加工されたものとも俄かには判断できない。釘1点(17)については、化学分析を行った。その結果によると、17は鍛冶加工されており、鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

銅溶解物 (図296-95、表38・39)

遺構外の出土であるが、銅溶解物が1点出土している。椀形滓様の形態で、薄い重量感がある。化学分析の結果によると、金属銅の溶解物で、銅の純度は比較的高く、青銅用の合金成分は含まれていない。僅か1点ではあるが、本遺跡において、銅製品の製作に関連する作業が行われたことを推定し得る資料といえよう。

羽口

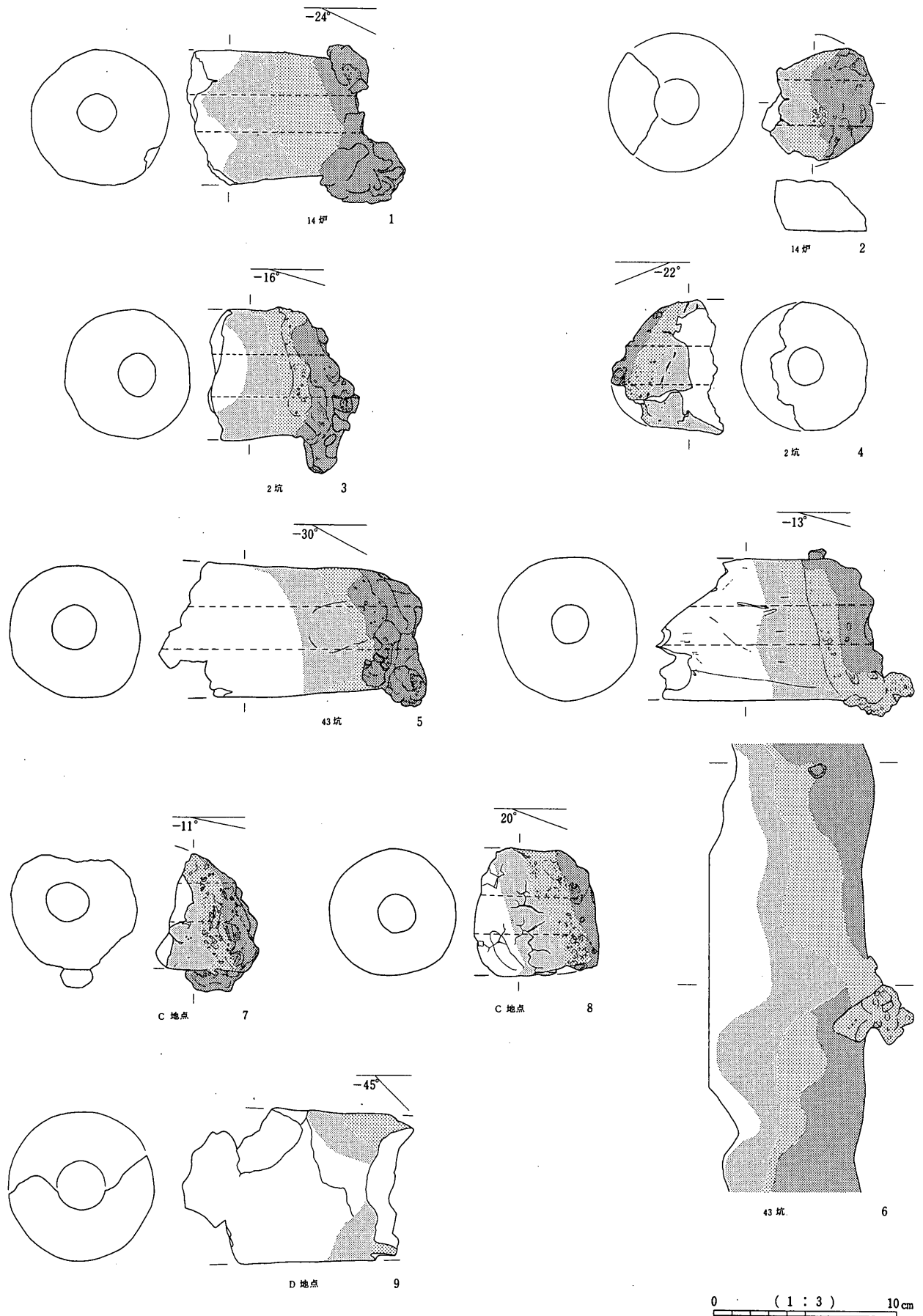


図 290 鍛冶関連遺物 (1)

羽口

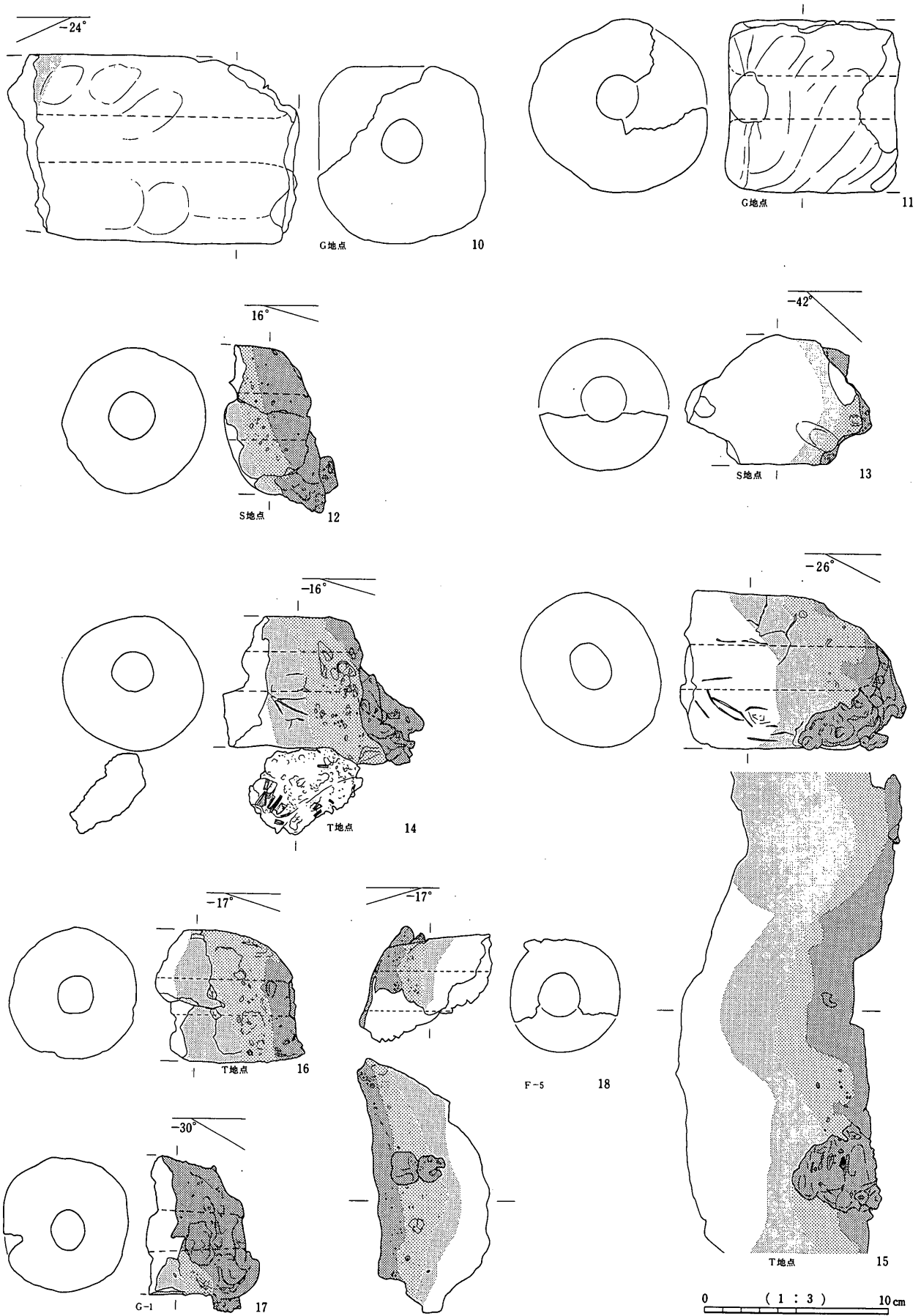


図 291 鍛冶関連遺物 (2)

鍛冶滓

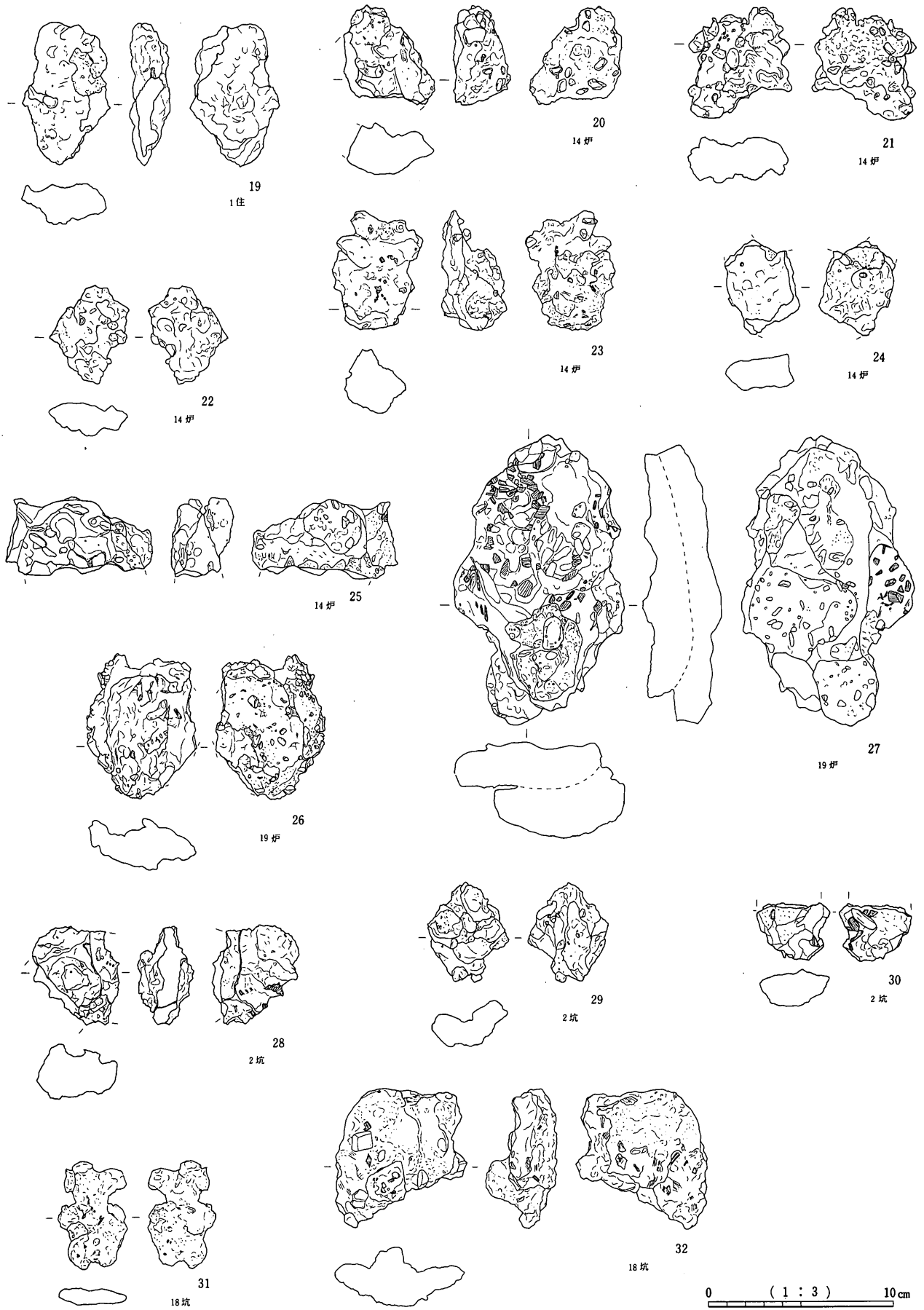


図 292 鍛冶関連遺物 (3)

鍛冶津

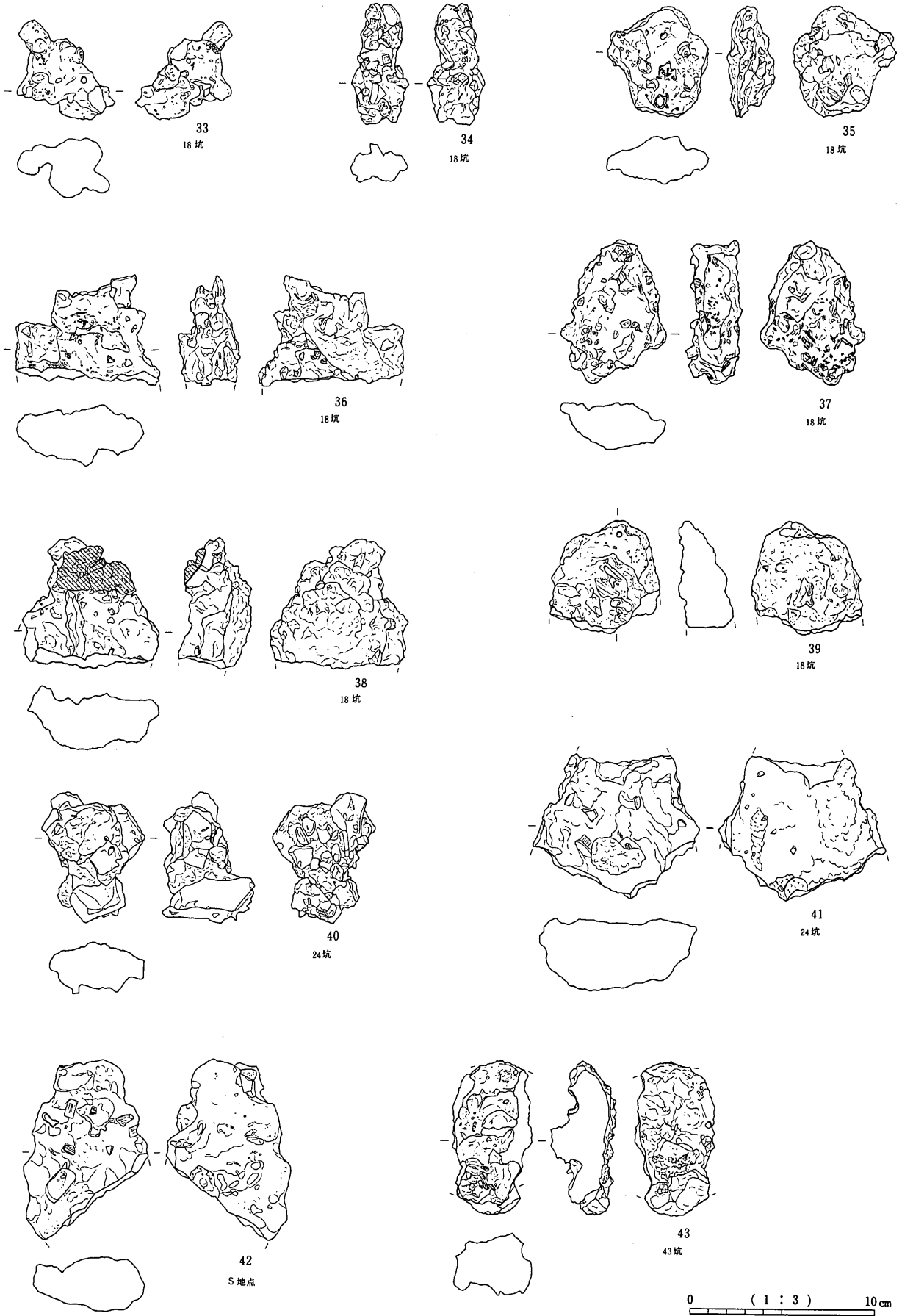


図 293 鍛冶関連遺物 (4)

鍛冶滓

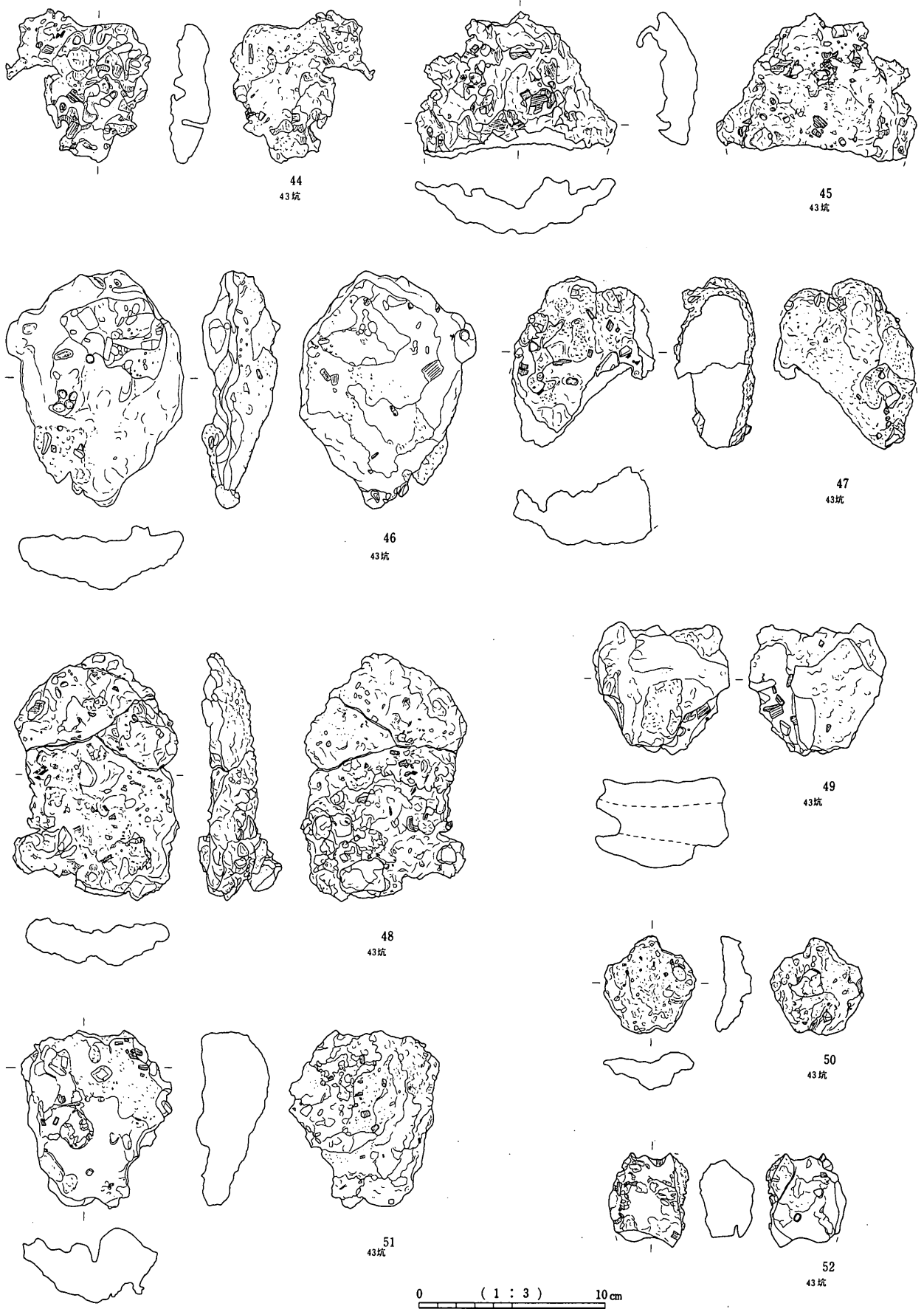


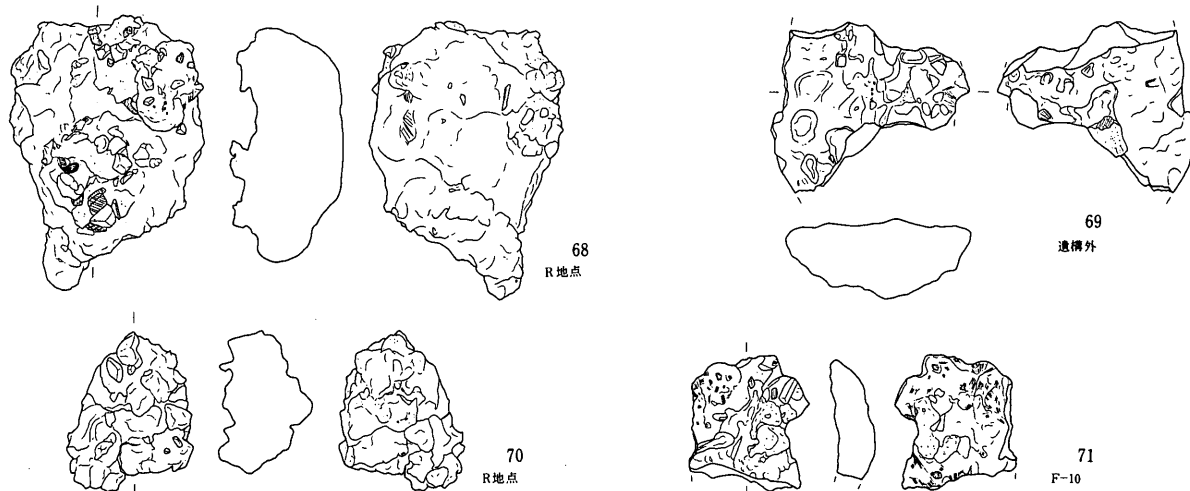
図 294 鍛冶関連遺物 (5)

鍛冶滓

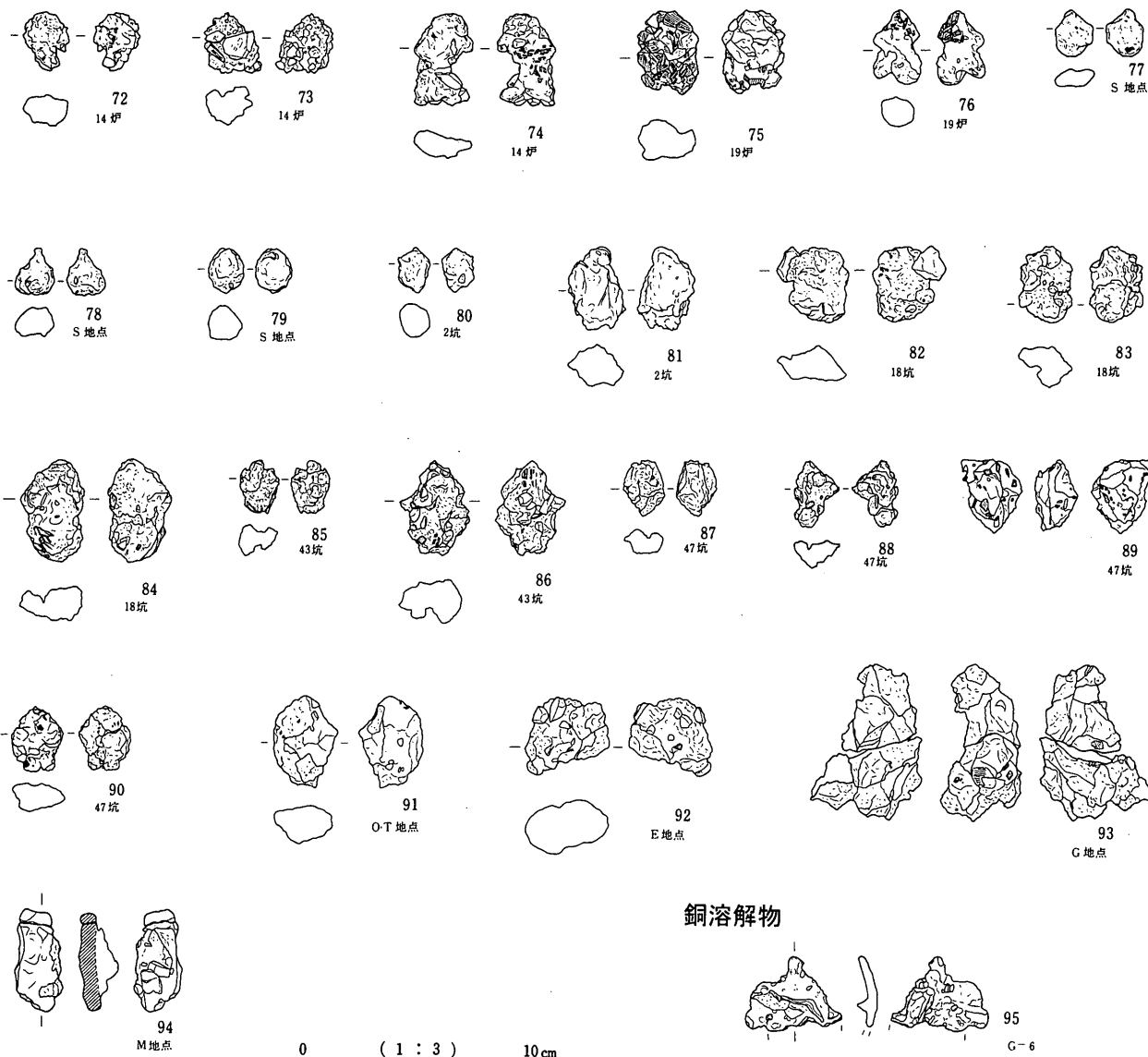


図 295 鍛冶関連遺物 (6)

鍛冶滓



鉄塊系遺物



銅溶解物



0 (1 : 3) 10 cm

図 296 鍛冶関連遺物 (7)

表11 遺構別鍛冶関連遺物一覧

遺構名 (地点名)	羽 口			鉄滓類 (鍛冶剥片・粒状滓を除く)			鉄塊系遺物			鉄 器				
	点数	総重量(g)	図示遺物	種 類	点数	総重量(g)	図示遺物	種 類	点数	総重量(g)	図示遺物	器種	点数	図示遺物
1住				腕形鍛冶滓	2	91.98	図292-19	鉄塊系遺物	1	12.69		釘	4	図289-3.8.9.15
				鍛冶滓	1	5.61								
2住	2	49		含鉄腕形鍛冶滓	1	23.48						鉄製品	1	図289-21
14炉	4	584	図290-1.2	含鉄腕形鍛冶滓	2	188.67	図292-23.25	鉄塊系遺物	4	31.00	図296-72.73.74	釘	2	図289-13.17
				腕形鍛冶滓	2	131.41	図292-20.24							
				腕形鍛冶滓(粘土質)	2	44.24	図292-21.22							
37炉	2	15												
19炉				含鉄腕形鍛冶滓	1	605.30	図292-27	鍛冶鉄塊系遺物	2	32.35	図296-75.76			
				腕形鍛冶滓	3	155.36	図292-26							
				鍛冶滓	14	59.26								
18坑				腕形鍛冶滓	10	847.24	図292-31.32 図293-35.36. 37.38.39	鉄塊系遺物	20	233.14	図296-82.83.84			
				腕形鍛冶滓(粘土質)	2	38.43	図293-33.34							
				鍛冶滓	119	663.20								
				ガラス質滓	7	93.77								
47坑	2	23		含鉄腕形鍛冶滓	4	210.69	図295-58.60. 61.62	鉄塊系遺物	12	108.29	図296-87.88 89.90			
				腕形鍛冶滓	10	460.60	図295-55.56. 57.59							
43坑	19	1394	図290-5.6	含鉄腕形鍛冶滓	5	1115.46	図294-46.49. 51.52	鉄塊系遺物	3	19.75	図296-85.86			
				腕形鍛冶滓	22	2124.53	図295-54 図293-43 図294-44.45. 47.48.50							
				腕形鍛冶滓(粘土質)	1	23.68	図295-53							
				鍛冶滓	23	192.04								
				ガラス質滓	80	590.72								
3坑				含鉄腕形鍛冶滓	1	115.50								
24坑	2	60		含鉄腕形鍛冶滓	2	462.36	図293-40.41							
2坑	3	523	図290-3.4	含鉄腕形鍛冶滓	3	228.95	図292-28	鉄塊系遺物	2	21.49	図296-80.81	刀子 鉄製品	2	図289-4.5
				腕形鍛冶滓	1	29.24	図292-30						1	図289-19
				鍛冶滓	71	271.20								
				鍛冶滓(粘土質)	1	20.03	図292-29							
12坑周辺	6	217		含鉄腕形鍛冶滓	1	252.43								
21坑				腕形鍛冶滓	1	189.29								
14炉 下部構造				腕形鍛冶滓	3	46.37								
				鍛冶滓	2	13.35								
S F 1	1	10		鍛冶滓	2	6.37								
S F 7				腕形鍛冶滓	2	92.01								
				鍛冶滓	2	14.26								
S F 8				含鉄腕形鍛冶滓	2	637.30								
S F 10												板状品	1	図289-20
A地点	12	418		含鉄腕形鍛冶滓	11	1250.96		鉄塊系遺物	6	41.75				
				腕形鍛冶滓	8	585.09								
				鍛冶滓	13	113.83								
				ガラス質滓	10	95.70								
B地点	2	125		含鉄腕形鍛冶滓	6	816.23		鉄塊系遺物	1	4.97				
				腕形鍛冶滓	2	130.42								
				鍛冶滓	2	13.45								
C地点	12	812	図290-7.8	含鉄腕形鍛冶滓	4	549.97								
				腕形鍛冶滓	7	294.25								
				鍛冶滓	1	14.50								
CH地点	1	68		含鉄腕形鍛冶滓	2	92.31								
				腕形鍛冶滓	3	227.49								
				鍛冶滓	1	8.36								
				ガラス質滓	2	10.35								
D地点	1	346	図290-9											
E地点	7	199		含鉄腕形鍛冶滓	5	308.52	図295-63	製(精)錬鉄塊系 遺物	1	40.37	図296-92			
				腕形鍛冶滓	2	80.00								
				ガラス質滓	1	15.16								
G地点	4	2391	図291-10.11	含鉄腕形鍛冶滓	4	412.68		製(精)錬鉄塊系 遺物	1	105.94	図296-93	鎌	1	図289-6
				腕形鍛冶滓	1	64.39								
				鍛冶滓	11	112.26								
				ガラス質滓	3	4.28								
H地点	7	423		含鉄腕形鍛冶滓	3	1186.56								
				腕形鍛冶滓	1	44.51								
				ガラス質滓	1	15.47								
I地点	8	101		鍛冶滓	5	60.06		鉄塊系遺物	14	84.55		釘	1	図289-16
K地点	2	42		含鉄腕形鍛冶滓	1	136.76								
M地点				腕形鍛冶滓	2	131.26		鉄塊系遺物 鉄錠状遺物	1 1	24.67 17.42	図296-94			
O地点	1	102		腕形鍛冶滓	1	139.08								
				ガラス質滓	1	8.29								
R地点	46	1091		含鉄腕形鍛冶滓	209	20456.18	図295-64.65. 66.67 図296-68.70	鉄塊系遺物	98	1298.65				
				腕形鍛冶滓	59	2460.02								
				鍛冶滓	331	4226.82								
				ガラス質滓	8	85.59								

遺構名 (地点名)	羽 口			鉄滓類 (鍛冶剥片・粒状滓を除く)			鉄塊系遺物			鉄 器				
	点数	総重量(g)	図示遺物	種 類	点数	総重量(g)	図示遺物	種 類	点数	総重量(g)	図示遺物	器種	点数	図示遺物
S地点	24	1135	図291—12.13	含鉄碗形鍛冶滓 鍛冶滓 ガラス質滓	2 1 1	596.40 24.1 5.16	図293—42	鉄塊系遺物	3	11.06	図296—77.78. 79			
T地点	8	1763	図291—14.15 16	含鉄碗形鍛冶滓 碗形鍛冶滓 鍛冶滓 ガラス質滓	8 5 17 8	758.81 250.47 96.30 66.34		鉄塊系遺物	4	38.54				
O・T 地点	1	31		含鉄碗形鍛冶滓 碗形鍛冶滓 碗形鍛冶滓(粘土質) 鍛冶滓 ガラス質滓	15 6 1 12 27	2686.11 305.63 50.01 211.53 255.94		鉄塊系遺物	6	81.42	図296—91			
F—5	33	876	図291—18											
F—9	2	66												
F—10	1	72		含鉄碗形鍛冶滓	1	51.52	図296—71					釘	1	図289—7
F—14												鉄製品	1	図289—18
G—1	1	235	図291—17											
G—6	6	352		銅溶解物	1	15.53	図296—95					釘	1	図289—12
G—7	4	168												
G—8												刀子	1	図289—1
遺構外	28	635		含鉄碗形鍛冶滓 碗形鍛冶滓 鍛冶滓 ガラス質滓	23 9 22 8	2581.41 389.59 286.77 144.49	図296—69	製(精)錬鉄塊 系遺物 鍛冶鉄塊系遺物 鉄塊系遺物	2 1 3	11.74 10.26 105.22		刀子 釘	1 3	図289—2 図289—10.11. 14

第3節 小結

本遺跡は、平安時代において集中的な鍛冶業を営んだ遺跡として理解される。製錬業を行った形跡は認められない。操業時期については、鍛冶炉および廃棄坑はその性格上、土器等の年代を明確に示す遺物を出土することがごく少なく、各鍛冶施設の操業期間の限定は難しいが、竪穴住居を含めた遺跡全体の土器相が示す、9世紀後葉から10世紀前半にかけての時間幅のなかで考えておく。

1 鍛冶関連遺物の構成と鍛冶業の形態

鍛冶関連遺物とその出土状況から、本遺跡における鍛冶業の形態を推定してみたい。

羽口は、口径が2.4cm以下の細いものが殆どを占めており、小規模な炉に対応した形態と考えられる。更埴市清水製鉄遺跡の製錬炉に伴う羽口(上田1997)と比べるとかなり細く、鍛冶炉専用といえよう。口径の大きさに類型化し得るバリエーションがあることは、鍛冶過程の段階に応じて鞴の規模や炉の規模が変わっていたことを推測させるが、現実には、鉄滓類との共伴を含めた出土状況に偏在性を読み取ることはできず、口径の大きさによる羽口形態の違いと操業段階との対応関係は明瞭ではない。

鍛冶滓は、化学分析によって、精練鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の二者が確認され、粗鉄の純度を高める精練鍛冶と製品の加工や修理を中心とした鍛錬鍛冶を合わせて操業していたことが判った。精練滓と鍛錬滓は、各鍛冶炉およびそれに付随する廃棄坑・廃棄場において混在する傾向が明らかである。精練過程と鍛錬過程が同一の炉を使用して行われたことが考えられ、精練炉と鍛錬炉が明確に分化していたわけではないことを示している。

鍛造剥片・粒状滓は、量の多寡を問わなければ、ほぼすべての鍛冶施設から検出されている。まとまった量が検出された遺構では、大形から非常に小形のものまでを含むと同時に、割合の大半を小形のもの占めている。このことは、前の鍛冶滓の様相と併せて考えると、その施設において、素材の粗精練の段階から、より精練に近い鍛錬鍛冶、そして製品を作り出す最終段階まで一貫した操業が為されていたことを示唆しよう。なお、検出量の少ない遺構においては、鍛造剥片・粒状滓の大きさ分布に偏りがみられるが、それは採取土量の少なさに対応しており、分布に偏りを示す遺構と鍛冶工程の特定の段階とを直接的に結

び付けることはできない。

鉄塊系遺物は、化学分析により性格の異なる2種類の鉄塊系遺物が検出された。一つは精練鍛冶過程で発生した精練鉄塊系遺物であり、精練鍛冶滓とともに本遺跡において集中的な精練業が行われたことを示す資料といえる。他の一つは、製錬で生成した鉄塊および鉄塊系遺物で、鉄源は砂鉄と考えられるものである。当時、鍛冶業に必要不可欠な鉄素材については、製錬業によって産み出された「鉄塊系遺物」が流通していたと考えられており（穴澤1991 a）、本遺跡にも、そうした鉄素材としての鉄塊系遺物が供給されていたことが判明した。なお、鉄滓類のなかに製錬滓と判断されるものが含まれており、これも製錬鉄塊系遺物と同様に素材として持ち込まれたものと考えてよい。

鍛冶遺構・遺跡の場合、そこに遺された鉄製品は、工人達が作業・生活において使用したものの他に、生產品と鉄素材としての性格が考えられる。しかし、本遺跡においては、出土した鉄製品は僅かで、かつ備蓄された状態にはない。また、半製品・未製品等、鍛冶工程の進行を具体的に表す資料もないため、鉄製品の性格付けを行うことは難しい。

2 鍛冶関連遺構の構成

2軒の竪穴住居は、鍛冶炉が認められないこと、鍛冶滓・鍛造剥片・粒状滓等の関連遺物もごく少量であることから、鍛冶工房ではなく、工人の居住・生活施設であったと考えるのが妥当である。従って、本遺跡においては、生活に係わる空間と、実際に鍛冶作業を行う場とは分離されていたことが推定される。

鍛冶作業場は、言うまでもなく鍛冶炉を中心とした諸施設とその相互関係として認識される。調査区中央のF-5からF-10グリッド辺りにかけて、鍛冶施設が集中する範囲があり、そこには、41・48・37・14・12号の5基の鍛冶炉が存在し、また、その可能性をもつSF4・5・6を含めると、合計8基の鍛冶炉が築かれている。そして、鍛冶炉の幾つかには、排出された鉄滓類や使用に耐えなくなった羽口等を投げ込む廃棄坑が付随する。鍛冶炉はその性格上、風雨に晒される状態にあったとは考えられないので、それを覆う上屋を伴っていたことはまず間違いない。1号柱穴列をはじめ周囲に群在するピットがその遺構と推定される。ただし、5基ないし8基の鍛冶炉がすべて同時に操業していた証拠はなく、むしろ、複数時期の鍛冶炉がほぼ同一の位置で継続して営まれた結果、この集中部が形成された蓋然性が高いため、それに伴う上屋も複数棟存在したと考える。鍛冶炉は、この集中部の他にも、19・35・44号の3基が廃棄坑・廃棄場とともに検出されている。これらも、遺構としては確認できないが何らかの上屋をもっていたことが想定される。原材料の備蓄や製品を保管する別個の建物が検出されないことからすれば、上屋は、作業空間であると同時に、倉庫・保管施設としての機能も合わせもっていたかもしれない。勿論、それは竪穴住居についても同様に推定し得るであろう。

前述したように、鍛冶炉の構造には、地床炉・粘土床炉・下部構造をもつ粘土床炉の3類型が認められ、平面規模・形状においてもバリエーションがある。しかし、炉の形態・構造と操業段階の関連性を掴むことはできなかった。今後、そうした視点に立って、化学分析試料の選択方法を含めた調査・整理方法の検討も必要であろう。

鍛冶炉とそれに付随する廃棄坑の他に、炭を焼成したと推定される施設が確認されている。鉄素材とともに鍛冶作業に必要な木炭が、すべてではないかもしれないが、集落内において自給されていたといえる。当然のことながら、炭焼成施設は、鍛冶炉から離れた位置に築くべきもので、38号・2号・16号坑はそうした配置を取っている。36号坑が鍛冶施設集中部の中央に存在することは、集中部が複数時期の形成になることを示す一つの根拠となる。なお、51号・52号坑は、鍛冶施設群の廃絶後に築かれたものである。

以上、本遺跡においては、外部（製錬遺跡）から供給された製錬鉄塊系遺物を主な素材として、精練過程から鍛錬過程の最終段階に至る鍛冶業全般を営んでおり、併せて木炭の生産も行っていたことが推定される。集中的な操業ではあるが、その規模は大きくなく、小集団の家内工業的な操業状態を想定する。製錬鉄塊系遺物の供給源となった同時期の製錬遺跡は、本遺跡に比較的近いところでは、更埴市清水製鉄遺跡があるが（上田 1997）、坂城町内では未確認である。しかし、9世紀後半から10世紀にかけて、一般集落遺跡でも鍛冶遺構・遺物を検出した調査例が増加しているため、今後、各地の山麓斜面に製錬遺跡が発見されることが予想される。

引用・参考文献

- 穴澤義功 1991 a 「各地域の製錬・鍛冶遺構と鉄研究の現状 関東地方」『日本古代の鉄生産』たたら研究会
- 穴澤義功 1991 b 「V. 製鉄遺跡から実験炉へ」『千葉県房総風土記の丘年報』15 シンポジウム「古代製鉄研究の現状」[記録集]
- 市川隆之 1994 「長野県内の古代集落内における手工業生産予察」『信濃』第46巻 第4号 信濃史学会
- 上田真 1997 「第2章 清水製鉄遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22-更埴市内その1-』
（財）長野県埋蔵文化財センター
- 小平和夫 1990 「第3章 第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4-松本市内その1-』総論編
（財）長野県埋蔵文化財センター
- 小平光一 1996 『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』坂城町教育委員会
- 坂城町教育委員会 1978 『開畝製鉄遺跡-第1次調査報告-』
- 坂城町教育委員会 1979 『開畝製鉄遺跡-第2次調査報告-』
- 助川朋広 1993 『宮上遺跡Ⅱ』坂城町教育委員会
- 佐藤正好 1983 「3 鍛冶工房について」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡-遺構・遺物編（下）-』
（財）茨城県教育財団
- 栃木県教育委員会 1995 『金山遺跡Ⅰ』
- 原明芳 1989 「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
（財）長野県埋蔵文化財センター
- 安間拓巳 1995 「古代の鍛冶炉-その形態および鍛冶工程との関連について-」『考古学研究』第42巻 第2号 考古学研究会
- 柳澤亮 1998 「第3章 第1節 国分寺周辺遺跡群 遺物（x）鍛冶関連遺物」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2
-上田市内・坂城町内-』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤亮 1998 「第3章 第4節 弥勒堂遺跡遺跡 4 遺構と遺物（1）」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2
-上田市内・坂城町内-』財長野県埋蔵文化財センター
- 森嶋稔 1981 「考古」『坂城町誌』中巻 歴史編（1）坂城町誌刊行会
- 長野県史刊行会 1982 『長野県史』考古資料編 全1巻（2）主要遺跡（北・東信）
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史』考古資料編 全1巻（4）遺構・遺物

付章 分析と鑑定

第1節 大日ノ木遺跡出土の骨片

京都大学霊長類研究所
茂原信生

26号竪穴住居、23号竪穴住居のカマドあるいは覆土から骨片が出土している。これらのごく細片で同定できるようなものはない。

26号竪穴住居のカマド内から3点ほどやや大きめのものが出土しているが、これらは完全には灰化しておらず、獣骨であることはわかるが種は不明である。

第2節 陣馬塚古墳出土の人骨

京都大学霊長類研究所

茂原信生

I) はじめに

陣馬塚古墳は長野県上田市住吉字横山にある古墳で、上信越自動車道の工事にともない平成5年に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本報告はその際に出土した人骨に関するものである。この古墳は古墳時代後期の円墳で、発掘時に玄室の内部には3体分の人骨があることが確認されている。

II) 人骨の出土状況と特徴

玄室は奥行き3.8m、幅1.8m弱であり、人骨はいくつかのまとまりを持って玄室に散乱していた。人骨は玄室を中央で4区に区切って取り上げられた。それぞれにあった人骨について記載する。奥の右側を1区、左側を2区、入り口に近い左側を3区、右側を4区とした。残存する人骨は1区に最も多く、次いで3区である。

1) 玄室1区

①頭蓋骨 (B 4)

破損して細片化している。鼻根部はややくびれており、眉弓はよく発達している。乳様突起は大きく、内外的にも厚く男性的である。耳道上稜はよく発達している。外耳道は前後にやや膨らみがあり内腔が狭まっている。外耳道骨腫の初期的なものの可能性がある。外後頭隆起は比較的発達しており、プロカのⅢ型程度である。右眼窩部が残っている。眼窩は低く横長である。頭蓋骨の縫合は人字縫合部が出土していて縫合が観察可能である。内板はほぼ癒合を完了しているが、外板は部分的に癒合し縫合が消え始めている場所がある。縫合骨が観察される。

この頭蓋骨は、男性のものと思われ、年齢はさほど若くはなく壮年から熟年程度であろう。

なお、この1区からは右の側頭骨錐体が上記の個体のものを含めて2つ出土している。

②下顎骨 (B 42)

この下顎骨は、B 4人骨のすぐ横にあったもので後述のような形質から、この個体の下顎と考えて矛盾はない。下顎骨正中部で左第1小臼歯は生前に脱落していたと思われ歯槽が閉鎖している。他の左右の犬歯の間の歯槽が確認され、そこには抜歯はない。下顎骨が厚くて頑丈である。内側の棘もよく発達している。オトガイ隆起、オトガイ結節もよく発達している。男性的な下顎骨である。

③椎骨 (B 28 ⑤)

腰骨ならびに仙椎である。これらの体部には骨棘のような加齢変化がみられる。

④以下主な骨について記載する。

左脛骨 (B 13) の太さは普通である。後面の鉛直線は発達していない。左寛骨 (B 27) は頑丈そうである。寛骨 (B 16) に妊娠痕はない。左大腿骨 (B 19) は太く頑丈で、後面の粗線の発達は良いが稜状ではない。右大腿骨 (B 12) の後面の粗線は稜状ではない。左上腕骨 (B 9) は太くて頑丈である。三角筋粗面はさほど発達していないようである。右脛骨近位半 (B 6) は太くて頑丈で、中央付近の断面はヘリチカのV型である。扁平脛骨であるが後面の鉛直線は発達していない。左大腿骨骨幹 (B 3) の骨質は厚く頑丈であるが太さは普通である。左脛骨 (B 5) はB 6の脛骨と同一個体である。他に右尺骨近位部 (B 38) がある。

出土した歯（表1）で判断すると、玄室1区からは上顎歯が13本出土しており、右の第1小臼歯や左の第2小臼歯、右第3大臼歯が2本残っていて、少なくとも2個体が確認できる。左第2小臼歯には齧蝕（虫歯）が見られる。上顎歯のうち1本は左の第2乳臼歯でこの歯に咬耗はない。したがって、生後1年～1年半程度の乳児と考えられるが他の歯は永久歯である。

下顎歯は11本出土している。下顎右の第1大臼歯あるいは第2大臼歯が重複している可能性があるが歯種は明瞭ではない。下顎歯にも第2乳臼歯がある。

2) 玄室2区

玄室2区からは2本の歯しか出土していない。出土したのは下顎の右第1大臼歯と歯種不明の歯片である。したがって実質的には咬耗のあまりしていない第1大臼歯1本である。

3) 玄室3区

ここから出土している頭蓋骨（3-B1）は細片化しており、復元はできない。同一個体のもと思われる左右の側頭骨錐体が出土している。頭蓋の縫合は鋸歯状が明瞭であるが、頭蓋冠の骨は薄くはなく、少なくとも成人には達していると思われる個体である。

左上腕骨片（3-B4）の太さはやや太い。

玄室3区からは4本の歯が出土している。上顎の3本と歯種不明の歯片である。上顎歯は左右不明の小臼歯と右の第1・第3大臼歯である。重複するものはない。

4) 玄室4区

頭蓋骨（4-B3）の一部が玄室の右側中程の壁面に接していた。頭頂骨片と思われる10cmほどの骨と他の頭蓋骨細片、ならびに左側頭骨錐体が確認できる。頭蓋冠の骨は薄い。

玄室4区からは8本の歯が出土しており、上顎歯が3本、下顎歯が5本である。この上顎歯には左の第1乳臼歯が含まれている。この歯は全く咬耗しておらず、玄室1区から出てきた第2臼歯と同一個体と考えても矛盾はない。また、ここから出土した左第1小臼歯と第3大臼歯と思われる歯にはやはり咬耗がなく、若い個体が埋葬されていたことが推測される。

Ⅲ) まとめ

玄室の1区に最も多くの骨が散在しており、右側頭骨の錐体が3つ確認できるので、少なくとも3体の人骨が埋葬されていたと考えられる。玄室の1区でみられた乳臼歯を持つ個体がこれらの側頭骨の錐体を持つ個体のものであるかどうかは保存状態が悪い錐体があるので明らかではない。また、乳臼歯の存在と第3大臼歯の共存は普通には考えられないので、この玄室には、第3大臼歯を持った2個体と、乳歯を持った1個体の合計3個体が埋葬されていたことになる。この永久歯を持った個体は頑丈な男性である。

3体のうち、1体は頑丈な男性で、もう1体は成人には達していたと思われるものである。1体は1歳～1歳半程度と考えられる。これらの3個体は主に玄室の1区と3・4区に散在している。近くに同一個体と考えられる骨が散在する出土状況であるが、どちらも自然位の埋葬状態とは考えられず、動かされている可能性がある。

貴重な資料を観察する機会を与えて下さった長野県埋蔵文化財センターの方々から感謝いたします。

表1：陣馬塚古墳玄室内出土のヒトの歯

遺跡名	区	取り上げ番号	台帳番号	上下	左右	歯種	備考
CTB	玄1区	フルイ	5	上	左	d p 4	咬耗なし
CTB	玄1区	フルイ	5	上	左	I 1	
CTB	玄1区	B 4	2	上	左	P 2	齧歯
CTB	玄1区	フルイ	7	上	左	P 2	
CTB	玄1区	フルイ	5	上	左	M 2 ?	
CTB	玄1区	B 4	2	上	左	P 1	
CTB	玄1区	B 4 アゴ	2	上	右	C	Pと同一下顎
CTB	玄1区	B 4 アゴ	2	上	右	P 1	Cと同一下顎
CTB	玄1区	フルイ	15	上	右	P 1	
CTB	玄1区	B 4	2	上	右	M 1	
CTB	玄1区	フルイ	15	上	右	M 2	
CTB	玄1区	フルイ	7	上	右	M 3	
CTB	玄1区	フルイ	5	上	右	M 3	
CTB	玄1区	B45	1④	下	左	I 1	下顎片あり
CTB	玄1区	フルイ	5	下	左	I 2	
CTB	玄1区	フルイ	5	下	左	P 2	
CTB	玄1区	フルイ	5	下	左	M 1	
CTB	玄1区	フルイ	5	下	左	M 1 or M 2	
CTB	玄1区	フルイ	7	下	右	d p 4	
CTB	玄1区	B45	1④	下	右	I 1	下顎片あり
CTB	玄1区	フルイ	5	下	右	P 1	
CTB	玄1区	フルイ	15	下	右	M 1 or M 2	
CTB	玄1区	フルイ	5	下	右	M 1 or M 2	
CTB	玄1区	フルイ	15	下	右	M 3 ?	
CTB	玄2区	フルイ	9	下	右	M 1	
CTB	玄2区	フルイ	8	不明	不明	不明	破片のみ
CTB	玄3区	B 6	3⑤	上	不明	P	
CTB	玄3区	B 1	3①	上	右	M 1	
CTB	玄3区	B 1	3①	上	右	M 3	
CTB	玄3区	フルイ	10	不明	不明	不明	破片のみ
CTB	玄4区	歯1	4⑤	上	左	M 1	
CTB	玄4区	フルイ	14	上	左	d p 3	咬耗なし
CTB	玄4区	フルイ	12	上	右	P 1	
CTB	玄4区	B 3	1①	下	左	M 1	
CTB	玄4区	フルイ	12	下	左	P 1	咬耗なし
CTB	玄4区	フルイ	12	下	左	M 3 ?	咬耗なし
CTB	玄4区	骨	4⑦	下	右	M 2	
CTB	玄4区	清掃中	4⑧	下	右	M 3	

第3節 宮平遺跡出土の人骨と獣骨

京都大学霊長類研究所
茂原信生

I) はじめに

宮平遺跡は長野県上田市住吉字宮平にある遺跡で、上信越自動車道の工事に伴って平成6年に、長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本報告はその際出土した人骨ならびに獣骨に関するものである。宮平遺跡は縄文時代後期から中世以降にまたがる複合遺跡である。今回出土した人骨は中世以降に属する可能性が高いと考えられている。

人骨の計測はマルチン（馬場；1991）にしたがい、歯の計測は藤田（1949）にしたがっている。

II) 人骨の出土状況と形態的特徴

出土した人骨を墓壙別に記載する

1) S-17 グリッド出土人骨

大腿骨骨幹が出土している。太さは普通だが、骨質は厚い。後面の粗線は比較的発達していて稜状だが低い。他は不明である。

2) 293 号墓出土人骨

上顎右の第2乳臼歯である。象牙質の露出はないが咬耗が観察されるのですでに萌出したものであり、生後1歳～2歳程度であろう。性別は不明である。

3) 392 号墓出土人骨

大腿骨骨幹が出土しているが、かなり細い。上部外側の殿筋隆起は良く発達しており扁平大腿骨である。後面の粗線はあまり発達しておらず稜状も低い。このような形態をとるものは一般に女性であることが多い。

4) 507 号墓出土人骨

歯が1本出土している。上顎左の第1乳臼歯である。歯冠は完成しているが咬耗はなく萌出以前のものであろう。したがって、新生児～1歳程度の年齢と考えられる。

5) 686 号墓出土人骨

左上肢、左右の下肢骨と頭蓋骨が出土している。

頭蓋骨

頭蓋骨の保存状態は比較的よいが、一部を除いて細片化している。顔面や頭蓋底は保存状態が悪い。眉弓はよく発達しているが、左右が連続するほどではない。前頭洞は大きい。額はかなり傾斜している。乳様突起はさほど大きくないが内外的に厚い。耳道上稜は非常に発達しており側頭線に向かって延びている。頭蓋最大長が188mmである。

下顎骨は厚く頑丈である。下顎枝角は大きい。筋突起はさほど大きくないが内側の内突起稜はよく発達している。顎舌骨筋線も明瞭である。

歯

上顎歯は上顎骨に植立した右の第1小臼歯から第1大臼歯と、右犬歯、左第2小臼歯、第1大臼歯の6本、下顎歯は右の犬歯から第2大臼歯までと左の第1小臼歯から第2大臼歯までの9本と、歯根だけの第3大臼歯が残っている。歯根だけになった第3大臼歯は齶触に侵されたものであろう。咬耗は比較的進んでおり、象牙質の露出とともに第1大臼歯では咬合面の平坦化も見られる。上顎の大臼歯の隣接面摩耗は顕著である。さほど若い個体ではなかろう。下顎の右第3大臼歯は生前に失われている。下顎の小臼歯や大臼歯の舌側（内側）歯頸部には歯石の沈着が見られる。

エナメル質減形成は見られない。

四肢骨

上腕骨は細く、三角筋粗面も発達していない。脛骨骨幹、尺骨骨幹は細い。大腿骨の骨幹は細い。後面の粗線もさほど発達しておらず稜状はごく低い。左膝蓋骨には外表面に骨棘がみられる。これは加齢変化であろう。

この個体の頭蓋骨は、眉弓の発達、下顎の頑丈さなど男性的であるが、四肢骨は細くきゃしゃで女性的である。骨盤が出土していないので正確さは低下するが、きゃしゃな男性の可能性が高いと考える。成人には達しており、少なくとも壮年にはなっていたと考えられる。

6) 945号墓出土人骨

墓壙は長径100cm、短径80cmの楕円形である。座位で埋葬されたと考えられている。永楽通宝を伴っているので15世紀以降の人骨と推測されている。骨の保存状態は比較的よいが細片化している。四肢骨も比較的良く残っているがもろくなっており、観察できるものは多くない。

頭蓋骨

頭蓋冠が残っているが顔面や頭蓋底部は残っていない。乳様突起は小さく、耳道上稜も発達していない。額は前頭結節が発達してかなり垂直に近く女性的である。外後頭隆起は目立たず、プロカのⅡ型程度である。頭蓋冠の骨は薄めである。

頭蓋最大長は推定で178mm、頭蓋幅は128mmである。頭蓋長幅示数は71.9でかなりの長頭である。

体幹骨

椎骨、肋骨の一部が残っている。残っている椎骨には骨棘のような加齢変化は見られない。

四肢骨

上腕骨近位部、指骨、橈骨、尺骨骨幹、下肢骨などが残っている。上腕骨は細く、三角筋粗面は発達していない。橈骨や尺骨は骨間縁が発達しているが太くはない。大腿骨は細く、後面の粗線はさほど発達していないが、中央付近では稜状である。上部の殿筋突起は発達しておらず扁平ではない。脛骨は骨間縁が鋭く発達しているが細い。後面の鉛直線は発達していない。大腿骨最大長は推定で大きくても400mmは越えないと思われる。この長さで身長を推定すると153.7cmとなる。この値は平本（1977）の報告している江戸時代（前期）の男性の平均値155.09cmよりやや小さく、女性の平均値は143.30cmより大きい。

この個体は、きゃしゃな四肢骨を持ち、身長は大きくても153.70cm程度である。女性と考えられる。骨端は癒合しており、成人には達していたと考えられる。

7) 968号墓出土人骨

保存状態は非常に悪く、残っている部分は少ない。残っている部分でも表面が剥離・脱落している部分が多い。

上腕骨、尺骨、大腿骨、脛骨などの一部が残っている。上腕骨は太さは普通であるが三角筋粗面はやや発達している。尺骨はさほど太くない。大腿骨は後面の粗線がよく発達しており、中央付近では付け柱状に張り出している。上部はさほど扁平ではない。

この個体は保存状態が悪く、四肢骨の一部しか残っていない。四肢骨は筋が比較発達していたようである。性別は不明である。

8) 969号墓出土人骨

屈葬で埋葬されていた。伴出するものが大観通宝であるので古くても12世紀初頭である。頭蓋骨と四肢骨の一部が残っている。保存状態は非常に悪い。

頭蓋骨

前頭部から頭蓋冠、ならびに左右側頭骨錐体部が残っている。前頭部は後方に傾斜している。眉弓はよく発達している。乳様突起は基部しか残っていないが発達していたようである。

下顎骨は正中部が出土している。オトガイ隆起は大きく発達している。

歯

歯では、下顎右第3大臼歯歯冠が出土している。咬耗はすすんでおり、咬合面は平坦化し象牙質の露出がみられる。さほど若い個体ではなからう。

四肢骨

大腿骨は太く頑丈である。後面の粗線はよく発達しており中央付近では稜状に張り出している。上部外側の殿筋隆起はやや張り出している。上部矢状径は24.8mm、上部横径は32.3mm、扁平示数は76.8で扁平大腿骨に属している。脛骨も太く頑丈である。他に踵骨片、脛骨片、鎖骨片などが確認できる。

この個体は頭蓋骨の特徴や四肢骨の頑丈さから、男性と考えられる。成人に達していると思われる。

Ⅲ) 出土した人骨についてのまとめ

宮平遺跡の7つの墓壙から人骨が発掘された。保存状態はあまりよくないものが多い。男性が2個体、女性が1個体で他の性別は不明である。945号墓から出土した女性の推定身長は153.7cmであった。齶歯を持つものもある。

Ⅳ) 出土獣骨の特徴

出土したものは少なく、同定されたものは哺乳類だけである。出土した獣骨はニホンジカ、イノシシ、ウシ、ウマの2目4科4種である。

哺乳綱 Mammalia

偶蹄目 Artiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

ウシ科 Bovidae

ウシ *Bos taurus*

奇蹄目 Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

出土した量はごく少ない。焼かれた骨はない。全体では26点が同定された。うち1点はウマかウシの鑑別はできなかった。もっとも多く出土したのはシカで、13点、ついでウマの8点、ウシ3点と続きイノシシ（あるいはブタ）は1点（上顎骨+歯）だけであった。シカは歯が多いが、四肢骨も8点出土している。ウマは歯だけが出土している。重複するものはないが同一個体とは限らない。

V) 宮平遺跡から出土した獣骨のまとめ

出土量は少なく、出土したのは哺乳類だけでニホンジカ、ウシ、イノシシ、ウマの4種であった。焼かれた骨はない。

参考文献

馬場悠男 1991「人骨計測法」『人類学講座』別巻1,「人体計測法」雄山閣,江藤盛治編集;p159-358.

藤田恒太郎 1949「歯の計測規準について」『人類学雑誌』,61;p1-6.

平本嘉助 1977「日本人身長の時代的变化」『自然科学と博物館』,44(4);P169-172

表1：宮平遺跡出土の人骨概要

遺跡名	性別	年齢	備考
S-17グリッド	不明	不明	大腿骨のみ
293号墓	不明	1～2歳	上顎右第2乳臼歯のみ
507号墓	不明	1歳以下	新生児程度
686号墓	男性	壮年以上	齶歯、四肢骨がきゃしゃ
945号墓	女性	成人	身長153.7cm以下
968号墓	不明	不明	頑丈？
969号墓	男性		頑丈？

表2：宮平遺跡（CMD）出土の獣骨リスト（遺構別）（f：破損，c：完形）

遺構番号	台帳	層位	年月日	種名	骨名	部位	左右	上下	歯種	状態	c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	備考	
Q3グリッド			941201	ウマカシカ	大腿骨？	骨幹	不明			f						1				
12住	106	覆土上層	931012	ウマ	歯		右	上	M2かM3	f									咬耗なし(若)	
12住	104		931021	シカ	大腿骨	遠位部	左			f							1	1	未化骨(若)	
38住	126	覆土	930530	シカ	歯		左	下	M3	f										
46住	128	覆土	940607	シカ	歯		不明	不明	不明	f										
74住	116		940922	ウシ	歯		不明	上	不明	f										
74住		カマド付近	941007	シカ	距骨	遠位部	右			f										
74住		No.1	941014	シカ	脛骨		右			f							1	1		
74住		カマド付近	941007	シカ	踵骨		右			f										
74住	118	覆土	940909	シカ	歯		不明	不明	下	不明	f									
74住	117		940922	シカ	歯		不明	不明	不明	f										
79住	109		941007	ウマ	歯		右	上	P2,P3	c										
79住	108		941007	ウマ	歯		不明	上？		f										
79住	107		941007	ウマ	歯		不明	上？		f										
79住	110		941007	シカ	歯		不明	不明	歯片	f										
80住	123		940914	シカ	中足骨	骨幹	不明			f						1				
83住	113		941109	ウマ	歯		左	下	M2？	c									歯冠がまだ長い	
83住	114		941109	ウマ	歯		右	上	P2	c										
83住	115		941031	ウマ	歯		左	下	不明	f										
16住	125	覆土上層	931013	ウシ	下脛骨十歯		右	下	M1,M2	f,c										
3溝	132	底直	940826	ウマ	歯		右	下	不明	f									咬耗なし	
35坑	131	床直	940828	ウシ	歯		不明	不明		f										
391坑	130		940713	イノシシ	上脛骨十歯		右	上	M1,M2,M3	f,c									咬耗顕著	
391坑	130		940713	シカ	大腿骨	近位後面	右			f					1					
391坑	130		940713	シカ	中手骨	骨幹	不明			f						1				
391坑	130		940713	シカ	中足骨	近位半	右			f		1								

表3：宮平遺跡（CMD）出土の獣骨リスト（種別）（f：破損，c：完形）

遺構番号	台帳	層位	年月日	種名	骨名	部位	左右	上下	歯種	状態	c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de	備考
391坑	125		940713	イノシシ	上顎骨十歯		右	上	M1,M2,M3	f,c									咬耗顕著
16住	125	覆土上層	931013	ウシ	下顎骨十歯		右	下	M1,M2	f,c									
74住	116		931021	ウシ	歯		不明	上	不明	f									
35住	128	床直	931028	ウシ	歯		不明	不明		f									
38住	126	覆土	940530	シカ	歯		左	下	M3	f									
46住	128	覆土	940607	シカ	歯		不明	不明	不明	f									
74住	118	覆土	940909	シカ	歯		不明	下	不明	f									
74住	117		940922	シカ	歯		不明	不明	不明	f									
79住	110		941007	シカ	歯		不明	不明	歯片	f									
12住	104		931021	シカ	大腿骨	遠位部	左			f							1	1	未化骨(若)
391住	130		940713	シカ	大腿骨	近位後面	右			f									
74住		No.1	941014	シカ	脛骨	遠位部	右			f							1	1	
74住		カマド付近	941007	シカ	踵骨		右			f									
74住		カマド付近	941007	シカ	距骨		右			f									
391住	130		940713	シカ	中手骨	骨幹	不明			f						1			
80住	123		940914	シカ	中足骨	骨幹	不明			f							1		
391住	130		940713	シカ	中足骨	近位半	右			f		1							
12住	106	覆土上層	931012	ウマ	歯		右	上	M2かM3	f									咬耗なし(若)
79住	109		941007	ウマ	歯		右	上	P2,P3	c									
79住	108		941007	ウマ	歯		不明	上？		f									
79住	107		941007	ウマ	歯		不明	上？		f									
83住	113		941109	ウマ	歯		左	下	M2？	c									歯冠がまだ長い
83住	114		941109	ウマ	歯		右	上	P2	c									
83住	115		941031	ウマ	歯		左	下	不明	f									
3溝	132	底直	940826	ウマ	歯		右	下	不明	f									咬耗なし
Q-3グリッド			941201	ウマカウシ	大腿骨？	骨幹	不明			f									

第4節 山崎北遺跡出土の人骨

京都大学霊長類研究所
茂原信生

I) はじめに

山崎北遺跡は長野県埴科郡坂城町中之条字山崎にある遺跡で、上越自動車道の工事にもなって、平成5年に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本報告はその際出土した人骨に関するものである。これらの人骨の年代は出土遺物から中世と考えられている。

II) 人骨の出土状況と形態的特徴

出土骨の保存状態がよくなく、形態的な観察に耐えるものは少ない。一部で歯がよく残っている。出土遺構別に記載する。発掘時に9基の土壙墓・火葬墓が確認され6基に人骨が確認されたが、4号墓の骨は保存状態が悪く記載するのは5体分である。

1) 4号墓

発掘時にはごくわずかな骨片が確認されている。火葬骨らしいが詳細は不明である。

2) 7号墓出土人骨

歯だけが残っている。乳歯と永久歯の混合歯列である。乳歯は上顎の左第1・第2乳臼歯、右の第2乳臼歯が、下顎の左第1・第2乳臼歯と右の第2乳臼歯の合計6本が出土している。永久歯は歯冠が形成中と考えられるものも含めて上顎が6本、下顎が13本の合計19本が出土している。永久歯の第1大臼歯は萌出しているが咬耗がほとんどないこと、第2大臼歯は萌出しておらず歯冠が形成中であること、切歯はすでに萌出していることなどを考えると、この個体の年齢は7～8歳と考えられる。上顎の第2切歯は顕著なシャベル型である。下顎第1大臼歯の咬頭と溝の型はY5型で、第2大臼歯は+5型である。

この個体は、歯の大きさから考えると男性の可能性が高く、年齢は7～8歳の幼児と推測される。

3) 8号墓出土人骨

墓壙は長径が100cmほどの楕円形である。右を向いた横臥屈葬で膝ならびに股関節を強く屈して膝を抱くような姿勢である。中世に属する人骨と考えられている。骨の保存状態は悪い。

頭蓋骨

頭蓋骨は側面の一部と上顎骨、下顎骨右下顎角部、側頭骨の錐体、後頭骨などが確認される。外後頭隆起はよく発達しており、プロカのIV型である。乳様突起は不明であるが、下顎窩付近はきゃしゃである。

歯

上顎歯は、右は中切歯から第1大臼歯まで、左は中切歯から第2小臼歯までの計11本が残っている。咬耗は比較的進んでいる。下顎歯は、右は第2切歯(側切歯)から第3大臼歯まで、左は犬歯から第1大臼歯の計11本が残っている。大臼歯の咬耗は顕著である。咬耗により計測はできないが、全体に小さい歯である。下顎第1大臼歯の遠心の隣接面に大きな齧触がある。

四肢骨

四肢骨は断片的であり観察に耐えるものは少ない。その中では大腿骨は比較的保存がよい。太さは普通だが頑丈である。後面の粗線は良く発達しており、幅を持った稜状に突出している。殿筋隆起は発達していない。右脛骨は細いが骨質は厚く頑丈である。中央付近の断面は三角形でヘリチカのI型である。この個体は保存されている部分が少ない。性別は不明であるが、歯の大きさから判断すると女性の可能性が高い。大腿骨の形態から考えると成人には達していたと思われる。

4) 12号墓出土人骨

頭蓋骨、歯、およびわずかな体幹骨と四肢骨片が出土している。頭蓋底が残っているが頭蓋冠は細片化しており観察に耐えない。歯は、上顎左右の中切歯（第1切歯）、右側切歯（第2切歯）、右犬歯、左第2小臼歯、左第2大臼歯および下顎の左第1・第2小臼歯が残っている。いずれも非常に小さな歯である。上顎の中切歯はシャベル型切歯である。咬耗はあまり進んでおらず象牙質の露出は少ない。さほど高齢ではなからう。

椎骨では第2頸椎の歯突起（いわゆる喉仏とされる部分）が残っているが他は細片化しているか失われている。

この個体は、歯が非常に小さいことから女性の可能性が高い。年齢は成人には達しているがさほど高齢ではない。

5) 13号墓出土人骨

頭部を北に向けて埋葬されていた。股関節や膝関節を強く折り曲げた屈葬である。

頭蓋骨

左右の側頭骨、後頭骨、右上顎骨が確認できる。右の側頭骨の乳様突起は小さい。右上顎骨には大臼歯が植立しているが、第3大臼歯は萌出直前であり、第2大臼歯の咬耗はごく少ない。下顎骨には右は第2小臼歯から遠心の4本が、左は第3大臼歯が植立している。第3大臼歯にはほとんど咬耗はなく萌出直後であろう。したがって、歯の萌出状態から考えるとこの個体は18歳前後であろう。下顎歯の抜歯はない。歯は小さく女性的である。

四肢骨

侵食が進んでいるうえ多くの四肢骨は細片化しており観察に耐えない。右上腕骨は非常に細い。大腿骨も細く後面の粗線はさほど発達しておらずわずかに稜状になっている程度である。しかし上部外側の殿筋隆起は良く発達しており、殿筋下溝も明瞭である。扁平大腿骨である。距骨では内側の蹲踞面が大きく前方に発達しており、森本（1981）のC型である。女性的な四肢骨である。

他に第2頸椎（軸椎）、下位頸椎、指骨もある。

この個体の乳様突起が小さいのは年齢が若く、まだ第二次性徴が十分出ていないことによる可能性も考えられるが、歯の大きさなどの他の形質をあわせ考えると女性である可能性が高い。年齢は18歳前後であろう。

6) 20号墓出土人骨

墓坑は長径75cm、短径60cmの楕円形である。頭を北に向けている。骨の保存状態は悪いが、これは後述のように年齢が非常に若い個体であるからと思われる。

頭蓋骨の縫合は癒合しておらず、形態はどれも幼児形である。歯はよく残っており、上顎ではすべての乳歯が残っており、形成中の永久歯の一部である第1大臼歯、中切歯が見られる。下顎はきゃしゃな切歯の残りが悪いが、犬歯から第2乳臼歯まで残っており、右は永久歯の第1大臼歯の歯冠がある。

この個体は、歯冠の形成状態から判断して、生後1年ほどの乳児である。性別は不明である。

Ⅲ) 山崎北遺跡出土人骨のまとめ

山崎北遺跡からは、中世と思われる土壙墓が発掘されている。発掘時に9基の土壙墓が確認されそのうち6基で人骨が確認されたが保存状態が悪く、確認できたのは、5体分の人骨あるいは人骨片と歯である。これらは、生後1年ほどの乳児、7～8歳ほどの幼児、18歳前後の女性、成人女性2体と不明個体1体である。保存状態は悪く、形態的な特徴は不明のことが多い。

参考文献

権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』43(1);151-163

森本岩太郎 1981 「日本古人骨の形態学的変異—扁平脛骨と踵跡面—」『人類学講座』5「日本人（I）」、雄山閣；p157-188

表1：山崎北遺跡出土の人骨の概略

遺跡名	性別	年齢	備考
4号墓	不明	不明	焼骨？ごく少量
7号墓	男性	7～8歳	混合歯列
8号墓	女性	成人	齲歯
12号墓	女性	成人	歯が小さい
13号墓	女性	18歳前後	扁平大腿骨
20号墓	不明	1歳前後	乳歯列

第5節 観音平経塚出土の焼骨

京都大学霊長類研究所
茂原信生

I) 出土状態

観音平経塚は長野県埴科郡坂城町坂城字観音平にある中世の経塚で、平成4年に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。今回報告するのはその際に出土した蔵骨器を納めた2号墓壙と五輪塔群の火葬骨である。出土した骨は灰化するまで焼かれているものが多い。いずれも細片化しており形態的な観察は難しいが、獣骨ではなく、ヒトの骨である。四肢骨に波型の亀裂が入っているので、軟組織がついているとき、すなわち死後すぐに火葬されたものである。ただし、ごく一部の骨は黒化しており高熱で焼かれたとは思われない部分もある。

II) 出土骨の特徴

蔵骨器だけでなく、それ以外の場所から出土した全火葬骨を集めると全重量は10839.09グラム(約11kg)であった(表1)。この重さは茂原・松島(1996)が報告している室町人骨の1体分の火葬骨重量推定値(男性2204.5グラム、女性1802.4グラム)から計算すると、すべての骨があったとした場合で男性で5.0体分、女性で6.1体分ということになる。したがって、少なくとも5体分以上のヒトの火葬骨が埋葬されていたことになる。

蔵骨器内の火葬骨の重量は1111.28グラムであり、1体分の火葬骨重量には足りないが、かなりの部分の骨を集めてあることになる。

以下に各遺構から出土した主な骨の特徴を記載する。

- 1) E-P20: 頭蓋骨片。表面に亀裂が入っている。眉弓付近はやや発達している。
- 2) E-P23: 頭蓋骨片の鋸歯状の縫合は明瞭である。さほど高齢ではなからう。
- 3) E-P25: 右下顎骨体部が残っている。第3大臼歯まで萌出している。歯槽の状態から判断して歯は小さいと思われる。

E-P25: 歯根と一部の歯冠が残っている。歯冠は上顎左第3大臼歯のもので咬耗はごく軽微である。まだ20歳代であろう。

- 4) 2号墓壙: 蔵骨器の中の骨の焼骨は、上部、胴部の最大径以下などの位置での骨の特徴を調査したが、おさめられ方の配列に特に規則性は認められなかった。

III) まとめ

この観音平経塚遺跡からはヒトの火葬骨が出土しており、遺跡全体では全骨が収集されたとして少なくとも5体分以上の火葬骨が出土している。蔵骨器内の骨は1体分には足りないが、かなりの部分を集めて埋葬してある。蔵骨器内の骨の置き方に規則性は見られなかった。

参考文献

茂原信生・松島和己 1996「中村中平遺跡(長野県飯田市)から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片」『飯田市美術館研究紀要』6:P137-151.

表1：観音平経塚出土の焼骨の重量

遺構番号	重量(g)	備考
D-P 1	197.28	
D-P 2	579	
D-P 3	7.11	
D-P 4	0.35	
D-P 6	2.4	
E-P 1	0.37	
E-P 2	2.12	
E-P 3	0.14	
E-P 4	97	
E-P 5	11.68	
E-P 6	232	
E-P 7	662	
E-P 8	22.92	
E-P 9	260	
E-P 9	0.39	
E-P 1 0	5.85	
E-P 1 1	1.22	
E-P 1 2	83	
E-P 1 3	21.03	
E-P 1 4	877	
E-P 1 5	1023	
E-P 1 6	1	
E-P 1 7	3.55	
E-P 1 8	0.32	
E-P 1 9	1.43	
E-P 2 0	571.2	
E-P 2 1	76.9	
E-P 2 2	7.93	
E-P 2 3	662.9	
E-P 2 4	206	
E-P 2 5	392	
E-P 2 5	431.1	
E-P 2 6	226.7	
F-P 1	158.16	
F-P 2	68	
F-P 3	472	
F-P 4	8	
F-P 5	174	
F-P 6	33.16	
G-P 1	565.2	
G-P 1	1510.4	
G-P 1	35	底石下出土
I-P 1	37	
経塚1号墓壙	191	1層
経塚1号墓壙	180.12	1層
経塚1号墓壙	0.69	2層
経塚2号墓壙	80.98	蔵骨器 口頸部
経塚2号墓壙	269.33	蔵骨器 胴部最大径以下の上半
経塚2号墓壙	265.16	蔵骨器 胴部最大径以上
	124	蔵骨器 胴部最大径以下の上半
合計	10839.09	蔵骨器内骨重量=1111.28g

第6節 小山製鉄遺跡出土の鍛冶関連遺物の分析・調査

㈸長野県埋蔵文化財センターでは、小山製鉄遺跡出土の鍛冶関連遺物の分析・調査を、川鉄テクニカ株式会社 分析・評価センターに依頼した。そして、同センターの岡原正明・伊藤俊治氏による報告書が提出された。本節に収録するに当たり、紙幅の関係で、写真類・グラフ類を一切省いたため、若干の語句の改変を行ったが、元報告の論旨を歪めないように配慮したつもりである。また、表題も変更した。なお、元報告は長野県埋蔵文化財センターが保管している。

1. はじめに

㈸長野県埋蔵文化財センター・上田調査事務所殿が発掘調査されました、小山製鉄遺跡から出土した鉄滓、鉄製品と羽口および遺跡上流の日名沢川他で採取されました砂鉄について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査のご依頼がありました。

調査の観点として、鉄滓や砂鉄については、①製鉄原料の推定、②製鉄工程上の位置付け、③観察上の特記事項など、鉄製品については、①残存金属の確認、②金属鉄成分の分析、③加工状況や観察上の特記事項など、また、羽口については、①耐火度、②粘土成分、③観察上の特記事項など、を中心に調査しました。その結果についてご報告いたします。

2. 調査項目および試験・検査方法

(1) 調査項目

試料 No.	総 番号	出 土 位 置	試料 の 性 格	重 量 g	磁 着 度	メ タ ル 度	外 観 写 真	成 分 分 析	組 織 写 真	X 線 解 析	E P M A	X 線 透 過	そ の 他
1	95-1	日名沢川 上流	現代砂鉄 ①	6.56	—	なし	○	○	○				
2	95-2	千曲川 左岸	現代砂鉄 ②	61.42	—	—	○	○	○				
3	95-3	千曲川 右岸	現代砂鉄 ③	26.78	—	—	○	○	○				
4	95-4	19号鍛冶炉 覆土	砂鉄、湯 玉と 鍛造剥片	24.42	—	—	○	○	○				
5	95-5	43号土坑 覆土	含鉄碗形 鍛冶滓	393.60	8	H	○						

試料 No.	総 番号	出 土 位 置	試料 の 性 格	重 量 g	磁 着 度	メ タ ル 度	外 観 写 真	成 分 分 析	組 織 写 真	X 線 解 析	E P M A	X 線 透 過	そ の 他
6	95-6	43号土坑 覆土	含銹化鉄 椀形精錬 鍛冶滓	248.20	8	H	○	○	○	○			
7	95-7	43号土坑 覆土	椀形精錬 鍛冶滓	101.30	3	なし	○	○	○	○			
8	95-8	43号土坑 覆土	椀形精錬 鍛冶滓	38.70	4	なし	○	○	○	○			
9	95-9	47号土坑 覆土	椀形精錬 鍛冶滓	70.90	3	なし	○	○	○	○			
10	95-10	47号土坑 覆土	椀形精錬 鍛冶滓	52.40	4	なし	○	○	○	○			
11	95-11	47号土坑 覆土3層	銹化鉄塊 (滓、礫包含)	10.80	7	なし	○	○	○	○			
12	95-12	14号鍛冶炉 覆土2層	製錬滓	107.67	7	H	○	○	○	○			
13	95-13	19号鍛冶炉 覆土	椀形精錬 鍛冶滓	605.30	8	H	○	○	○	○	○		
14	95-14	S地点	椀形鍛錬 鍛冶滓	184.70	8	H	○	○	○	○			
15	95-15	24号土坑	椀形精錬 鍛冶滓	350.54	8	H	○	○	○	○	○		
16	95-16	2号土坑 覆土	製錬滓	29.24	2	なし	○	○	○	○			

試料 No.	総 番号	出土 位置	試料 の 性格	重 量 g	磁 着 度	メ タ ル 度	外 観 写 真	成 分 分 析	組 織 写 真	X 線 解 析	E P M A	X 線 透 過	そ の 他
17	95-17	R地点 大トレ東3m	含鉄腕形 鍛錬鍛冶滓	86.90	8	L	○	○	○	○			
18	95-18	43号土坑	含鉄腕形 鍛錬鍛冶滓	305.90	8	L	○	○	○	○	○		
19	95-19	43号土坑	含鉄腕形 鍛錬鍛冶滓	93.00	8	L	○	○	○	○			
20	95-20	E地点 黒褐色土	含鉄腕形 鍛錬鍛冶滓	115.20	8	L	○	○	○	○			
21	95-21	Ⅱ-G-07西 黄褐色土	腕形精錬 鍛冶滓	126.90	8	L	○	○	○	○			
22	95-22	黒褐色土	腕形精錬 鍛冶滓	186.90	8	L	○	○	○	○			
23	95-23	Ⅱ-F-10	含鉄腕形 精錬鍛冶滓	51.52	8	L	○	○	○	○			
24	95-24	Ⅱ-G-06 G地点テッサイ2	製錬鉄塊 系遺物	105.94	8	L	○	○	○		○	○	
25	95-25	E地点付近 東 黒褐色土	精錬鉄塊 系遺物	40.37	8	L	○	○	○		○	○	
26	95-26	51号土坑 1.5m黒褐色土	精錬鉄塊 系遺物	26.42	8	L	○	○	○		○	○	
27	95-27	19号鍛冶炉 黒色土	含鉄 鍛錬鍛冶滓	12.57	8	L	○	○	○			○	

試料 No.	総 番号	出土 位置	試料 の 性格	重 量 g	磁 着 度	メ タ ル 度	外 観 写 真	成 分 分 析	組 織 写 真	X 線 解 析	E P M A	X 線 透 過	そ の 他
28	95-28	M地点南 テッサ12	製錬鉄塊 系遺物	17.42	8	L	○	○	○		○	○	
29	95-29	19号鍛冶炉 覆土	粒状滓 (湯玉)				○		○				
30	95-30	14号鍛冶炉 覆土1層	粒状滓 (湯玉)				○		○				
31	95-31	19号鍛冶炉 覆土	鍛造剥片				○		○				
32	95-32	14号鍛冶炉 覆土1層	鍛造剥片				○		○				
33	95-33	14号鍛冶炉 東	鉄製品 (釘)	2.60	7	L	○		○		○ ◎	○	○ 硬度
34	95-34	II-G-06 黒褐色地山上	銅溶解物	15.53	2	L	○	○	○			○	
35	95-35	43号鍛冶炉	羽口	613.80	5	なし	○	○	○				○ 耐火度
36	95-36	14号鍛冶炉 覆土2層	羽口	83.21	4	なし	○	○	○				○ 耐火度
37	95-37	S地点	羽口	193.50	6	なし	○	○	○				○ 耐火度
38	95-38	D地点	羽口	346.00	2	なし	○	○	○				○ 耐火度

試料 No.	総 番号	出土 位置	試料 の 性格	重 量 g	磁 着 度	メ タ ル 度	外 観 写 真	成 分 分 析	組 織 写 真	X 線 解 析	E P M A	X 線 透 過	そ の 他
39	95-39	開畝製鉄遺跡 表採	含銹化鉄製錬滓	26.92	8	L	○	○	○		○	○	
40	95-40	開畝製鉄遺跡 表採	含銹化鉄製錬滓	28.72	7	M	○	○	○		○	○	
41	95-41	開畝製鉄遺跡 表採	含銹化鉄製錬滓	103.93	8	銹化	○	○	○	○			
42	95-42	開畝製鉄遺跡 表採	含銹化鉄製錬滓	31.64	8	銹化	○	○	○	○			
43	95-43	BUH 上原 2号竪穴状遺構	椀形精錬鍛冶滓	301.10	8	L	○	○	○	○			
44	95-44	BHD 東平 表土	含銹化鉄製錬滓	31.00	8	L	○	○	○	○		○	
45	95-45	BHD 東平 表土	銹化鉄塊系遺物	8.65	8	なし	○					○	
46	95-46	BYK 山崎北 2号土坑	銹化鉄塊系遺物	3.46	5	L	○		○		○	○	
47	95-47	BYK 山崎北 20号墓	銹化鉄塊系遺物	4.46	5	H	○					○	
48	95-48	BYK 山崎北 1号土坑 1層	精錬鉄塊系遺物	22.28	7	L	○		○			○	
49	95-49	BYK 山崎北 1号土坑 1層	椀形鍛錬鍛冶滓	186.70	5	H	○	○	○	○			

註：① 重量、磁着度およびメタル度は貴センター測定の結果によります。

② 試料の性格は分析・調査の結果に基づいて記載しました。

③ EPMAの項の◎印はEPMA-EDXによる元素分析を表しています。

(2) 外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面を mm 単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行っております。

(3) 化学成分分析

化学成分分析は J I S の分析法に準じて行いました。分析方法は以下の通りです。

粘土関係 SiO_2 , MnO , Al_2O_3 , CaO , MgO , TiO_2 , Na_2O , K_2O , T.Fe: ガラスビード蛍光 X 線分析法

C: 燃焼-赤外線吸収法

C・W: カールフィッシャー法

Igloss: 重量法 (1000°C 恒量)

砂鉄関係 SiO_2 , Al_2O_3 , CaO , MgO , TiO_2 , MnO , P_2O_5 , K_2O : ガラスビード蛍光 X 線分析法

T.Fe: 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

C・W: カールフィッシャー法

Na_2O , V: 原子吸光法

鉄滓関係 T.Fe: 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法

M.Fe: 臭素メタノール分解-EDTA 滴定法

FeO: ニクロム酸カリウム滴定法

Fe_2O_3 : 計算

C・W: カールフィッシャー法

C: 燃焼-赤外線吸収法

CaO , MgO , MnO , Cr_2O_3 , Na_2O , V, Cu: ICP 発光分光分析法

SiO_2 , Al_2O_3 , CaO , MgO , TiO_2 , MnO , P_2O_5 , K_2O : ガラスビード蛍光 X 線分析法

※: CaO , MgO , MnO は含有率に応じ、ICP 法または X 線法で分析しています。

鉄器関係 C, S: 燃焼-赤外線吸収法

Ca, Mg: 原子吸光法

Si, Mn, P, V, Cu, Al, Ni, Ti, Cr: ICP 発光分光分析法

非鉄金属 (銅) 関係 Cu: 重量法

Sn, Pb, Zn, Sb, Fe, Ni: 原子吸光法

Nb, Ti, Au, Ag: ICP 発光分光分析法

S: 燃焼-赤外線吸収法

As, Cl: 吸光光度法

この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行いました。また、羽口に使用されている粘土も特別に選択使用していたのかの判断用に分析しました。

分析項目は、砂鉄 12 成分、鉄滓と鍛造剥片 18 成分、鉄器、鉄塊などは 14 成分、羽口は 12 成分です。

(4) 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨 (鏡面仕上) します。その後、顕微鏡

で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、熔融状況や介在物（鉍物質の不純物）の存在状態等から加工状況や材質を判断します。鉄滓の場合にも同様に処理・観察を行い、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。必要に応じ実体顕微鏡による10倍視野での観察も行いました。

(5) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射（回折）されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定するものです。

多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定されます。

(6) EPMA（X線マイクロアナライザー）による観察

高速電子線を $200\mu\text{m}\phi$ 程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するために、二次元の面分析を行いました。

また、EPMAに付属する特性X線分光分析装置（EDX）を用いて、元素の高速定性分析を行いました。

(7) 耐火度試験

製鉄に使用された炉壁や羽口について、どの程度の耐火性のある粘土を使用していたのかを判断するために試験しました。この調査もJIS規格『耐火れんがの耐火度の試験方法』に準じて実施しました。

(8) X線（放射線）透過試験

X線発生装置を用い最適のX線強度を選択して、写真撮影を行います。同一のX線強度と照射時間の場合には、照射される物質の質量が重い程、また寸法が厚い程X線が吸収され写真上では黒くなり、その反対ではX線が簡単に透過する関係上白く写ります。したがって、凹凸や異種金属が共用されているとか錆で金属部分が薄くなっている場合でも状況が濃淡で判別できます。

3. 調査および考察結果

次に調査および考察結果を個別試料ごとに述べます。なお、各資料の形状や外観等についての調査・観察は既に貴センターで調査済なのでここでは特に記載しませんでした。

試料No.1. 総番号95-1 現代砂鉄①

日名沢川上流で砂鉄と土砂との混合物を採取し、水流と樋の傾斜を調整し幾度か選鉱を繰り返し回収された砂鉄試料である。磁石による選鉱は行われていない。

化学成分分析の結果、全鉄(T.Fe)は53.4%とやや多く反対にシリカ(石英:SiO₂)は7.03%と少ない。水洗によって比重の大きい砂鉄以外の軽い鉍物質が十分に除去されたためと考えられる。砂鉄に含まれているチタニウム(酸化チタニウムで表示:TiO₂)が11.6%と試料No.2～4の砂鉄試料に比べ非常に多い。しかし、バナジウム(V)は0.28%の値で他の試料と同程度である。この他、マンガン(酸化マンガンで表示:MnO)が0.56%、燐(五酸化燐で表示:P₂O₅)が0.171%含まれる。

10倍の実体顕微鏡による観察では、黒い砂鉄に混ざって鉍物質が散在している状況が観察される。砂鉄断面を観察すると、粒子の大きさは $150\mu\text{m}$ 程度で、粒子の角はやや丸い。灰白色でエッチング(5%硝酸アルコール液で軽く腐食)により点状のマダラ模様が出来ている粒子が砂鉄であり、変化のない平滑な断面の粒子は鉍物質である。

試料No. 2. 総番号 95- 2 現代砂鉄②

千曲川左岸で砂鉄と土砂との混合物を採取し、水流と樋の傾斜を調整し幾度か選鉱を繰り返し回収された砂鉄試料である。磁石による選鉱は行われていない。

化学成分分析の結果によると、T.Feは39.4%とやや少なく反対にSiO₂は21.0%と多い。水洗によって比重の大きい砂鉄以外の鉱物質が十分に除去されなかったためであろう。しかし、砂鉄に含まれているTiO₂の値は8.64%と試料No.1の砂鉄試料に比べ少ない。一方、鉱物質がまだ残存しているにもかかわらず、Vは0.25%、MnOは0.54%、P₂O₅が0.185%と試料No.1と同程度含まれている。

10倍の実体顕微鏡による観察では、黒い砂鉄に混ざって鉱物質が多く散在している状況が観察される。砂鉄断面を観察すると、粒子の大きさには幅があり350 μ m程度のものも存在する。水流によって研磨されたためか粒子の角はやや丸い。エッチングにより腐食されない平滑な断面の鉱物質粒子が多い。

試料No. 3. 総番号 95- 3 現代砂鉄③

千曲川左岸で砂鉄と土砂との混合物を採取し、洗浄と樋の傾斜を調整し幾度か選鉱を繰り返し回収された砂鉄試料である。磁石による選鉱は行われていない。

化学成分分析の結果によると、T.Feは44.6%とやや少なく反対にSiO₂は16.0%とやや多い。水洗によって鉱物質がそれぞれ除去されたためであろう。砂鉄に含まれているTiO₂の値は9.72%と試料No.1の砂鉄試料に比べて少ない。一方、鉱物質がまだ残存しているにもかかわらず、Vは0.27% MnOは0.54%、P₂O₅が0.196%と同程度の含量であった。

10倍の実体顕微鏡による観察では、黒い砂鉄に混ざって礫状の鉱物質が多く散在している状況が観察される。砂鉄断面を観察すると、粒子の大きさには幅があり200 μ m程度のもものが多く存在する。粒子の角はやや丸い。エッチングされない平滑な断面の鉱物質粒子が観察される。

試料No. 4. 総番号 95- 4 砂鉄、湯玉と鍛造剥片

やや褐色の粒子を多量に含む試料である。磁石による選鉱は行われていない。

化学成分分析の結果によると、T.Feは57.6%と多く、SiO₂は8.91%と少ない。試料に含まれているTiO₂の値は3.56%と他の砂鉄試料に比べて非常に少ない。同様にVは0.15% MnOは0.33%と少ない。しかし、P₂O₅は0.512%とやや多い。

10倍の実体顕微鏡による観察では、黒い砂鉄に混ざって礫状の鉱物質が多く散在している状況が観察される。試料断面を観察すると、灰白色でエッチングにより点状のマダラ模様が出来ている粒子が砂鉄であり、中央に見える丸い粒子は鍛造の際に発生した湯玉(粒状滓)、丸い粒子の右に扁平に見えるのが鍛造剥片と推定される。これらの混合物のため化学成分分析値の鉄分が高く、TiO₂やVなどの不純物の値が低かったものと思われる。

試料No. 5. 総番号 95- 5 (図 294-46) 含鉄椀形鍛冶滓

典型的な形の整った椀形鍛冶滓なので、このままの保存が望ましいと考え、外観写真撮影に止めた。

試料No. 6. 総番号 95- 6 (図 294-51) 含錆化鉄椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Feの値は52.8%で、酸化第一鉄(ウスタイト:FeO)も46.4%と多く、酸化第二鉄(ヘマタイト:Fe₂O₃)は23.5%と少ない。また、金属鉄(M.Fe)が0.31%と僅かながら含まれて

いる。後述する顕微鏡観察でも金属鉄の存在は直接確認出来なかった。滓中の成分の指標となる所謂造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は 25.1% とやや少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 が 1.18%、V が 0.066% 存在する。鉱石に含有される指標成分の一つである銅 (Cu) の値は 0.003% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。結合水 (C.W.) の値が 1.77% なので、 Fe_2O_3 とこの水との化合物で鉄錆の一種であるゲーサイト等のオキシ水酸化鉄 (α 、 γ - FeOOH 等) の存在が推定される。なお、炭素 (C) 量の値は 0.18% であった。

滓断面の 10 倍の視野での実体顕微鏡による観察では、滓の中に多くの空孔が認められる。滓部分の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の不定型な流れ模様のオキシ水酸化鉄と推定される部分が観察される。オキシ水酸化鉄は金属鉄が長年月の間に徐々に酸化、銹化していく過程で生成する化合物なので、滓の生成時には金属鉄が存在していた可能性が高い。

X線回折チャートからは、ウスタイトとマグネタイト (四三酸化鉄: Fe_3O_4) のピークが検出され、この他ファイヤライト (珪素と鉄の酸化化合物: Fe_2SiO_4) の強いピークが存在する。同時にオキシ水酸化鉄であるゲーサイト (α - FeOOH) とレピッドクロサイト (γ - FeOOH) と少量の鉱物質の化合物の存在が認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し含銹化鉄椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源は砂鉄であった可能性が高い。

試料No. 7. 総番号 95- 7 (図 294-44) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Fe の値は 52.2% で、FeO も 47.5% と多く、 Fe_2O_3 は 21.1% と少ない。また、M.Fe が 0.52% と僅かながら検出される。後述する顕微鏡観察では金属鉄の存在は直接確認出来なかった。造滓成分は 26.7% でやや少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 が 0.54%、V が 0.031% 存在する。鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.001% で非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 1.66% なので、 Fe_2O_3 の存在量はやや少ないがこの水との化合物で鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄の存在が推定される。なお、C 量の値は 0.11% であった。

滓の 100 倍の顕微鏡組織には、灰白色の樹枝状のマグネタイトおよび繭状を呈するウスタイトと短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶とが観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられた。

X線回折チャートから、ウスタイトとファイヤライトの強いピークが検出され、この他中程度のマグネタイトと少量の鉱物質の化合物の存在が認められる。さらに、オキシ水酸化鉄のゲーサイトとレピッドクロサイトの存在が認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたものと推定される。

試料No. 8. 総番号 95- 8 (図 294-50) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Fe の値は 51.0% で、FeO は 49.0% と多く、 Fe_2O_3 は 18.1% と少ない。造滓成分は 29.5% でやや多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 が 1.15%、V が 0.067% 存在する。鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.001% で、非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 1.26% なので、 Fe_2O_3 の存在量はやや少ないがこの水との化合物で鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄の存在が推定される。なお、C 量の値は 0.16% であった。

滓を 100・400 倍で観た顕微鏡組織には、少量の灰白色繭状のウスタイトと短冊がやや崩れた形状のフ

イヤライト結晶とが観察される。他の領域は不定型の鉱物質で埋められている。

X線回折チャートの主たるピークはファイヤライトで、この他に少量のウスタイトと鉱物質の存在が認められるのみである。顕微鏡組織観察とX線回折結果からは、ウスタイトやマグネタイトのピーク高さが低く、存在量が化学成分分析結果に比べて少ないように思われるが、サンプリング場所の違いによる影響と考えられる。

以上の結果を総合すると、この試料は滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたものと推定される

試料No. 9. 総番号 95- 9 (図 295-55) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Feの値は52.4%で、FeOは54.4%と多く、Fe₂O₃は14.2%と少ない。造滓成分は22.1%であった。砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂が5.05%、Vが0.29%も存在する。鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.001%で、非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が0.98%で、Fe₂O₃の存在量も少なくオキシ水酸化鉄の存在量は少ないと推定される。なお、C量の値は0.10%であった。

滓を100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶とファイヤライトの結晶が観察される。さらに、やや褐色を帯びた角が角張った不定型のウルボスピネル(チタニウムと鉄の酸化化合物:Fe₂TiO₄)の結晶が数多く存在している。化学成分分析の結果でTiO₂が多量に含まれていた結果と符合する。

X線回折チャートから、ウスタイト、マグネタイトとファイヤライトの強いピークが検出されている。理由は不明であるがウルボスピネルは検出されなかった。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと推定される。

試料No. 10. 総番号 95-10 (図 295-59) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Feの値は52.7%で、FeOも50.3%と多く、Fe₂O₃は19.2%と少ない。造滓成分は22.5%と少ない。砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂が3.63%、Vが0.29%存在する。一般に鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.001%で、非常に少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が1.57%なので、Fe₂O₃の存在量はやや少ないがこの水との化合物で鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄の存在が推定される。なお、C量の値は0.22%であった。

滓を100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶とファイヤライトの結晶が観察される。さらに、やや褐色を帯びた角が角張った不定型のウルボスピネルの結晶も数多く存在している。化学成分分析の結果でTiO₂が多く含まれていた結果と符合する。

X線回折チャートから、ウスタイトとファイヤライトの強いピークが検出され、この他中程度のマグネタイトと少量の鉱物質の存在が認められる。また、レピッドクロサイトの弱いピークも認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源には砂鉄が使用されたと推定される。

試料No. 11. 総番号 95-11 (図 296-89) 錆化鉄塊(滓、礫に包含)

化学成分分析の結果では、T.Feの値は39.8%で、FeOは14.2%と非常に少なく、Fe₂O₃は40.9%と相対的に多い。造滓成分は36.3%と多い。しかし、砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂は0.51%、Vは0.018%

とその存在量は非常に低い。一般に鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.008% であった。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 4.70%、 Fe_2O_3 の存在量が 40.9% と非常に多いことから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄の多量の存在が推定される。なお、C 量の値は 0.22% であった。

滓試料断面の 10 倍の視野での実体顕微鏡による観察で、滓と共に多くの礫状の鉱物質の存在が認められる。写真中央部には、金属鉄が酸化銹化したオキシ水酸化鉄の固まりが層状に観察される。一方、滓部を 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色のオキシ水酸化鉄が層状になった不定型（結晶）物質が一面に存在する。なお、鉄の製錬の滓に生成するファイヤライト結晶は認められない。

X線回折チャートでは、ウスタイト、マグネタイトとヘマタイトの弱いピークが検出されている。また、ゲーサイトとレピッドクロサイトの存在が認められる。なお、ファイヤライトのピークは検出されていない。

以上の結果を総合すると、この試料は鉄塊が長年月を経て酸化銹化し、その表面に粘土が付着した銹化鉄塊と判定される。したがって、化学成分分析のチタニウムやバナジウムの含有量が低い（粘土にも含まれる）ものと考えられる。鉄源には砂鉄が使用された可能性が大である。

試料No. 12. 総番号 95-12 (図 292-25) 製錬滓

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 48.5% で、FeO は 51.2% と多く、 Fe_2O_3 は 12.2% と相対的に少ない。造滓成分は 31.3% とやや多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は 2.45%、V は 0.15% であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.001% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 1.08%、また Fe_2O_3 の量が少ないことから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄が少量存在するものと推定される。なお、C 量は 0.08% であった。

滓断面を 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰色のズングリした形状のファイヤライトと灰白色不定型のウルボスピネルの小粒結晶が観察される。これら結晶の間をガラス状の物質が埋めている。

X線回折チャートから、ファイヤライトの強いピークが数多く検出され、ウスタイトとマグネタイトの弱いピークの存在が認められる。この他レピッドクロサイトや少量の鉱物質の化合物のピークも存在する。

以上の結果を総合すると、この試料は T.Fe の値が比較的高いけれども、ファイヤライトの量も非常に多く FeO 結晶の存在が殆ど観察されないことからして製錬滓と推定される。鉄源には砂鉄が使用されたものと思われる。

試料No. 13. 総番号 95-13 (図 292-27) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 50.8% で、FeO は 40.5%、 Fe_2O_3 は 27.2% とやや多い。造滓成分は 25.7% である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は 1.37%、V は 0.10% であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.002% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 2.50%、 Fe_2O_3 の量がやや多いことから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄が少量存在するものと推定される。なお、M.Fe は 0.22%、C 量は 0.26% であった。

滓断面の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められない。

X線回折チャートから、ウスタイトとマグネタイトのピークが検出され、この他にファイヤライトと少量の鉱物質の化合物の存在が認められる。また、ゲーサイトとレピッドクロサイトの存在が認められる。金属鉄のピークは認められない。

滓断面の E P M A による観察では、S E (走査電子顕微鏡写真と同じ) 像から明らかなように繭状の鉄

酸化物のウスタイト、Fe、珪素 (Si) と酸素 (O) の化合物結晶のやや平面的に見えるファイヤライトが観察される。この他カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg) やアルミニウム (Al) の複合酸化物 (鉱物質) の存在が確認される。Ti はウスタイトと共存しているが V は一様に分布している。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 14. 総番号 95-14 (図 293-42) 椀形鍛錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 57.6%、FeO も 57.7% と多く Fe_2O_3 は 17.9% とやや少ない。滓中の造滓成分は 18.3% で少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は 1.96%、V は 0.16% であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.002% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値は 1.22% で Fe_2O_3 の量も少ないことから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄の存在量は少ないものと推定される。なお、M.Fe は 0.22% であった。

滓断面の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊状のファイヤライト結晶が観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められず酸化鉄主体の滓と考えられる。金属鉄の存在は明らかでない。

X線回折チャートから、ウスタイトとファイヤライトの強いピークが検出され、この他中程度のマグネタイトと少量のゲーサイトやレピッドクロサイトの存在が認められる。金属鉄のピークは認められない。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形鍛錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No. 15. 総番号 95-15 (図 293-41) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 55.8% で、FeO は 50.8%、 Fe_2O_3 は 23.0% とやや多い。造滓成分は 21.4% である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は 0.73%、V は 0.14% であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.003% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 1.63%、 Fe_2O_3 の量がやや多いことから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄が少量存在するものと推定される。

滓断面の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と、短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。灰白色の海綿状に見える部分はオキシ水酸化鉄と推定される。他の鉱物質の結晶は特に認められない。また、金属鉄の存在は検知できなかった。

X線回折チャートから、ウスタイトの強いピークが検出され、この他にファイヤライトとマグネタイトの存在が認められる。少量の鉱物質の化合物の他、ゲーサイトの存在が認められる。

滓断面の EPMA による観察では、SE 像から明らかなように繭状のウスタイトやファイヤライト結晶が観察される。この他 Ca、Mg や Al の複合酸化物 (鉱物質) の存在が確認される。チタニウムとバナジウムとがウスタイトと共存している状況が観察される。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 16. 総番号 95-16 (図 292-30) 製錬滓

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 14.7% で、FeO は 8.02%、 Fe_2O_3 は 11.5% と殆ど鉄分を含有しない。これと対比的に造滓成分は 64.8% と非常に高い値であった。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2

は10.7%、Vは0.32%と非常に多い。一般に鉍石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.001%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が1.03%、 Fe_2O_3 の量も少ないことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄は殆ど存在しないものと推定される。なお、C量は0.20%、M.Feは0.42%であった。

滓断面の100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶や樹枝状のマグネタイト結晶は存在せず、短冊がやや崩れた形状のファイヤライトが少々観察される。製錬初期に多い針状のイルメナイト（鉄とチタニウムの酸化化合物： FeTiO_3 ）結晶と灰褐色で不定型のウルボスピネルの結晶が認められる。写真中央上部には幾つかの金属鉄の小粒が存在している。

X線回折チャートでも金属鉄の存在を示すピークがある。化学成分分析でチタニウムの含有量が多いことが示されているが、ここでもイルメナイトやウルボスピネルのチタニウム化合物の存在が確認される。少量の存在を示すマグネタイトの弱いピークがあるが、オキシ水酸化鉄のピークは観察されない。一方、多種の鉍物質化合物の存在が認められる。

以上の結果を総合すると、試料は製錬滓と考えられる。鉄源として砂鉄が使用されたと言える。

試料No.17. 総番号 95-17 (図 295-64) 含鉄椀形鍛錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Feの値は56.0%、FeOは52.2%とやや多く、 Fe_2O_3 は15.2%であった。造滓成分は22.7%である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は1.33%、Vは0.10%であった。鉍石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.005%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が0.91%、 Fe_2O_3 の量がやや少ないのでオキシ水酸化鉄の存在量は少ないものと推定される。なお、M.Feは4.80%と多く含まれており、Cは0.20%であった。

滓断面の100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。他の鉍物質の結晶は特に認められない。写真中央と右端の白い粒は金属鉄である。

X線回折チャートでは金属鉄の存在の確認は出来なかった。ウスタイトとマグネタイトのピークが検出され、この他にファイヤライトと少量の鉍物質の化合物の存在が認められる。また、オキシ水酸化鉄であるゲーサイトとレピッドクロサイトの存在が認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し含鉄椀形鍛錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No.18. 総番号 95-18 (図 294-49) 含鉄椀形鍛錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Feの値は57.5%、FeOは47.2%と高く、 Fe_2O_3 も28.1%とやや多い。滓中の造滓成分は16.1%である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は1.44%、Vは0.074%であった。一般に鉍石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.003%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が2.22%、 Fe_2O_3 の量がやや多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が存在するものと推定される。なお、M.Feは4.80%と多く含まれており、C量は0.29%であった。

滓断面の100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と上部には半楕円状のオキシ水酸化鉄が観察される。他の鉍物質の結晶は特に認められない。

X線回折チャートから、ウスタイトとマグネタイトの強いピークと共に金属鉄が検出された。この他にファイヤライトと鉍物質の化合物の存在が認められる。また、ゲーサイトとレピッドクロサイトの存在が認められる。

滓断面のEPMAによる観察では、SE像や元素分布の写真から明らかなように繭状の鉄酸化物のウスタイトとそれに共存するチタニウムが観察される。その他の領域にはSi、Ca、MgやAlの複合酸化物（鉱物質）の存在が確認される。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し含鉄椀形鍛錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 19. 総番号 95-19 (図 294-52) 含鉄椀形鍛錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Feの値は55.2%で、FeOは44.6%、 Fe_2O_3 は17.7%とやや少ない。造滓成分は25.7%である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は1.07%、Vは0.12%であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.002%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が1.52%であることから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が少量存在するものと推定される。なお、M.Feは8.15%と多く含まれており、C量は0.18%であった。

滓断面の100倍で顕頭微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊が崩れた大きな形状のファイヤライトの結晶が観察される。また、多角形の灰褐色のウルボスピネル様の鉱物質結晶も存在する。左側に幾つかの金属鉄粒が白く見えるが、この断面では金属塊として観察できなかった。

X線回折チャートから、主としてファイヤライトの強いピークが検出され、この他にウスタイトとマグネタイトおよびゲーサイトの弱いピークが検出される。同時に金属鉄の存在を示すピークも明らかに認められる。

滓中の化学成分、鉄化合物量に滓の形状を加味すると、この試料は含鉄椀形鍛錬鍛冶滓と推定される。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 20. 総番号 95-20 (図 295-63) 含鉄椀形鍛錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Feの値は55.6%で、FeOは18.6%と相対的に少なく、 Fe_2O_3 は47.6%と非常に多い。造滓成分は14.7%で少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は0.85%と少なく、Vは0.051%であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.010%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が4.17%、 Fe_2O_3 の量が多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多量に存在するものと推定される。なお、M.Feが7.83%と多く含まれており、C量は0.79%であった。

100倍で見た滓断面の顕頭微鏡組織では金属鉄は観察できなかった。灰白色樹枝状のマグネタイト結晶と短冊状のファイヤライトの結晶が観察される。さらに多角板状のウルボスピネルが数多く存在している。右上部には金属鉄が酸化錆化したと推定される丸い灰白色のオキシ水酸化鉄が認められる。

X線回折チャートから、金属鉄と共にマグネタイトの強いピークが検出され、この他にファイヤライトと少量の鉱物質の存在が認められる。また、3種類のオキシ水酸化鉄のゲーサイト、レピッドクロサイトおよびアカゴナイト($\beta\text{-FeOOH}$)の存在が認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し含鉄椀形鍛錬鍛冶滓と言える。鉄源には砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 21. 総番号 95-21 (図 295-65) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Feの値は50.9%で、FeOは45.7%、 Fe_2O_3 は21.5%であった。造滓成分は27.8%である。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は2.35%、Vは0.11%でやや多い。一般に鉱石

に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.001% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 0.93% であることからオキシ水酸化鉄の量は少ないものと推定される。なお、M.Fe は 0.33%、C は 0.10% であった。

滓断面の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。他に多角形灰褐色のウルボスピネル結晶が存在する。

X線回折チャートから、ウスタイトとマグネタイトのピークが検出され、この他にファイヤライトと少量の鉍物質の化合物の存在が認められる。X線回折では、金属鉄やウルボスピネルのピークは認められなかった。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 22. 総番号 95-22 (図 296-69) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Fe の値は 50.6% で、FeO は 50.4%、Fe₂O₃ は 15.3% と相対的に少ない。造滓成分は 30.9% と多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ は 0.82%、V は 0.035% であった。一般に鉍石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.006% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 0.79%、Fe₂O₃ の量が少ないことからオキシ水酸化鉄の存在量も少ないと推定される。なお、M.Fe は 0.73%、C 量は 0.10% であった。

滓断面の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト、樹枝状のマグネタイトおよび短冊がやや崩れた形状のファイヤライト結晶が観察される。少量ながら、微少のウルボスピネルの結晶も認められる。

X線回折チャートから、ウスタイトとマグネタイトのピークが検出され、この他にファイヤライトと少量の鉍物質の化合物の存在が認められる。また、ゲーサイトも少量存在する。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 23. 総番号 95-23 (図 296-71) 含鉄椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 49.6%、FeO は 34.8%、Fe₂O₃ は 24.7% であった。造滓成分は 29.3% でやや多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ は 1.17%、V は 0.062% であった。一般に鉍石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.005% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 2.32% であることからオキシ水酸化鉄が存在するものと推定される。なお、M.Fe は 5.30% と多く含まれており、C 量は 0.29% であった。

滓断面の 100 倍で観た顕微鏡組織には、灰白色の繭状のウスタイト結晶と短冊がやや崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。金属鉄を含め他の鉍物質の結晶は特に認められない。

X線回折チャートから、ファイヤライトとマグネタイトのピークが検出され、この他にゲーサイトと少量の鉍物質の化合物の存在が認められる。また、X線回折では金属鉄の存在が認められる。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し含鉄椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 24. 総番号 95-24 (図 296-93) 製錬・鉄塊系遺物

金属鉄の化学成分分析の結果では、珪素 (Si) やマンガン (Mn) など他の元素の含有量が少なく純度の高

い鉄と言える。Cの値が4.13%と非常に高い。通常砂鉄に多く含まれ鉄中の不純物として移行してくるチタニウム (Ti) は 0.007% と低いが、Vの量は 0.19% とやや高かった。一般に、鉄原料が鉱石の場合に多く含まれてくるとされる Cu、ニッケル (Ni) の値は 0.02%、0.01% と低い。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。

試料断面の 100 倍と 400 倍で観た顕微鏡組織から、炭素量の少ない部分はフェライト (純鉄)、炭素量の多い部分は鑄物組織になっていて、灰色の小粒状に数多く分散する領域は燐化鉄〔化学成分分析の結果、燐 (P) が 0.259% 含まれている〕やセメンタイト (鉄と炭素の化合物) で構成されていると推定される。

前述の顕微鏡組織観察結果や化学成分分析で得られた C の値が鑄物相当の高い値を示すことから、溶鉄が凝固し生成された鉄塊である公算が高い。このような高 C での鍛冶加工は鉄塊に割れが生じ不可能である。

灰黒色の筋状部分を含む炭素量の少ない金属組織断面の E P M A による観察では、S E (走査電子顕微鏡写真と同じ) 像に見える介在物 (不純物) は Fe や Al の酸化化合物または硫化マンガであり、筋状部分には燐化鉄が濃縮して存在していることが判る。V が一様に分散して組織のなかに存在している。なお、介在物の存在形状から見て、鉄塊は鍛冶加工を受けた形跡は認められない。

以上の結果を総合すると、試料は炭素量の非常に高い製鍊時に凝固、生成した鉄塊と考えられる。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No. 25. 総番号 95-25 (図 296-92) 精鍊・鉄塊系遺物

試料断面の実態顕微鏡写真による観察では、写真中央部に黒く見える部分は、元の金属鉄が酸化銹化したオキシ水酸化鉄と推定される。この断面では直接金属部分は観察されていない。

金属鉄の化学成分分析の結果では、Si が 0.13% とやや含まれるが Mn、Cu や Ni など他の元素の含有量が少なく純度の高い鉄と言える。C の値は 0.80% であった。通常砂鉄に多く含まれ鉄中の不純物として移行してくる Ti は 0.007%、V の量は 0.005% と低い。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。

100 倍と 400 倍で観た顕微鏡組織による観察では、少量のフェライトの白い結晶とセメンタイト量が多いため黒く見えるパーライト (フェライトとセメンタイトとが層状に並んだ結晶) で構成される組織を呈している。この写真の組織から C 量は約 0.80% と推定でき、化学成分分析で得られた C の値に相当する。しかし、試料No. 24. と同様、鉄塊が製鍊後のものか精鍊過程で滲炭されたものかは明らかにならなかった。ただし、この程度の C 含有量では鍛冶加工は可能である。

金属組織断面の E P M A 写真による観察では、S E 像の中の介在物は鍛冶加工によって幾分か延伸しているように観察される。介在物のうち黒みを帯びた 2 つの部分は Ti と V とを含む Si、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg) や Al の酸化化合物で、灰色の部分は Fe と酸素の化合物である。

以上の結果を総合すると、試料は炭素量のやや高い、介在物の形状から精鍊鍛冶過程の鉄塊であると考えられる。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No. 26. 総番号 95-26 (図 296-91) 精鍊・鉄塊系遺物

試料断面の実態顕微鏡写真による観察では、写真中央部に黒く見える部分は、元の金属鉄が酸化銹化したオキシ水酸化鉄でその中の不定形状の褐色を帯びた部分が金属鉄である。

化学成分分析は鉄滓を、組織の検討は鉄滓と金属鉄の部分について行った。

鉄滓の化学成分分析の結果、T.Fe の値は 55.1% と高く、FeO は 12.0% であったが酸化銹化が進行しているためか Fe₂O₃ は 55.6% と非常に多い。造滓成分は 16.9% と少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂

は0.48%、Vは0.015%であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.006%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が4.94%でしかも Fe_2O_3 の量が多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多量存在するものと推定される。なお、M.Feは6.88%と多く含まれており、C量は0.62%であった。

金属断面の100倍と400倍で観た顕微鏡組織には、少量のフェライトの白い結晶と黒く見え多量に存在するパーライト結晶の混合組織を呈している。この写真組織からC量は0.80%程度と推定される。この試料も試料No.24と同様、金属鉄が製錬後のものか精錬過程で滲炭されたものかは明らかにならなかったが、鉄滓の化学成分分析結果からは精錬鍛冶滓の可能性が高いので、この過程で生成したものと推定される。

金属組織断面のEPM A写真による観察では、SE像の左側部分は主としてFeと酸素からなる酸化鉄で、さらにその左側には硫黄(S)分が多く存在している。写真中央の突起部分の介在物はSi、Ca、MgやAlの酸化化合物からなり、同時にTiが多く含まれている。

以上の結果を総合すると、試料は炭素量のやや高い、介在物の形状から精錬鍛冶過程の鉄塊系遺物と考えられる。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No.27. 総番号95-27 (図296-76) 含鉄鍛錬鍛冶滓

試料断面の実態顕微鏡写真による観察では、写真中央部に黒く見える部分は、元の金属鉄が酸化錆化したオキシ水酸化鉄でその中の円弧状の褐色を帯びた部分が金属鉄である。

鉄滓の化学成分分析の結果によると、T.Feの値は60.4%と非常に多いが、FeOは19.2%と相対的に低い。 Fe_2O_3 は酸化錆化が進行したためか47.4%と高い値を示す。造滓成分は14.1%と非常に低い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は0.20%、Vは0.013%であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.055%で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が3.31%、 Fe_2O_3 の量が多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多量存在するものと推定される。M.Feが12.3%と多く存在しており、C量は0.33%であった。

滓断面の100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色不定型のオキシ水酸化鉄と短冊が崩れた形状のファイヤライトの結晶が観察される。他の鉱物質の結晶は特に認められない。

以上の結果を総合すると、金属鉄を含む鍛錬鍛冶滓と推定される。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No.28. 総番号95-28 (図296-94) 製錬・鉄塊系遺物

試料断面の実態顕微鏡写真による観察では、写真中央部に黒く見える部分は、元の金属鉄が酸化錆化したオキシ水酸化鉄でその中の不定形状の淡赤～青色を帯びた部分が金属鉄である。

試料の化学成分分析の結果、T.Feの値は61.5%と非常に高く、また、M.Feも35.4%と多く含まれている。FeOは3.41%であるが、試料の酸化錆化が進行しており Fe_2O_3 は33.5%と多い。試料中の造滓成分は、16.1%と少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は0.26%、Vは0.099%であった。鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.007%と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が4.30%、 Fe_2O_3 の量が多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多量に存在するものと推定される。C量は2.74%と多く、金属鉄には炭素が多量に含まれていたと推定される。

滓断面の100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色のオキシ水酸化鉄と注意して観るとその中に短い紐状の桃灰色の組織が観察されるが、これは鉄中に析出していた黒鉛(炭素)と推定される。また、写真で白く見える部分に酸化錆化を免れた金属鉄が認められる。残念ながら、金属鉄の部分が少量で組織観察はでき

なかった。

滓断面のEPMA写真による観察では、SE像から明らかなようにC量の多い鋳物組織が酸化銹化し、もとの組織の状態を引き継いでオキシ水酸化鉄になっている。この中にはCa、MgやAlの複合酸化物がほぼ一様に分布している。また、VとSが全体に、Pが偏析（偏って）して存在している。

C量が非常に高いことや顕微鏡およびEPMAのSE像で見た組織から、この試料は鍛冶加工を受けたとは認められず、したがって鉄銼を含む鉄器や鍛冶加工品ではなく、C量の高い製錬後の溶鉄が凝固して生成、酸化銹化した試料と判定できる。以上の結果を総合すると、金属鉄とその酸化銹化鉄を含む製錬・鉄塊系遺物と推定される。なお、鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No. 29. 総番号 95-29 粒状滓（湯玉）

外観は寸法にかかわらず相似形のほぼ球状を呈しており、表面の開孔は観察されない。

粒状滓断面の顕微鏡および組織観察から、粒状滓の中心には丸い大きな空孔が開いており、周りの殻には多くの気孔が存在し、溶融体が球状に凝固して出来たものと認められる。顕微鏡組織写真から殻部分は主にウスタイトで構成されていると推定される。

以上の考察から、鍛冶加工の過程で生成した粒状滓（湯玉）と言える。

試料No. 30. 総番号 95-30 粒状滓（湯玉）

外観は一部のものを除いて寸法にかかわらずほぼ球状であり、表面には空孔が開孔したのも観察される。

粒状滓断面の顕微鏡および組織観察から、粒状滓の中心には丸い大きな空孔が存在し、周りの殻には多くの気孔があり、溶融体が球状に凝固して出来たものと認められる。一般に試料No. 29. の粒状滓（湯玉）より殻の厚さが薄いので、別の作業手順または別の鍛冶場で生成したものと推定できる。

顕微鏡組織写真から殻部分の成分は主にウスタイトで一部にマグネタイトと混在し構成されていることが判る。

以上の考察から、鍛冶加工の過程で生成した粒状滓（湯玉）と言える。

試料No. 31. 総番号 95-31 鍛造剥片

形状は寸法にかかわらず割り欠いたほぼ偏平な形を呈している。

鍛造剥片の10倍の実体顕微鏡、平面の100倍、400倍の顕微鏡写真とその組織観察から、鍛造剥片は主にウスタイトで構成されていると推定される。

以上の考察から、鍛冶加工の過程で生成した鍛造剥片と言える。

試料No. 32. 総番号 95-32 鍛造剥片

形状は寸法にかかわらず割り欠いたほぼ偏平な形を呈している。

鍛造剥片の10倍の実体顕微鏡、平面または断面の100倍、400倍の顕微鏡写真とその組織観察から、鍛造剥片は主にウスタイトで構成されており、その厚さは0.20～0.25mmであった。

以上の考察から、鍛冶加工の過程で生成した鍛造剥片と言える。

試料No. 33. 総番号 95-33（図 289-17）鉄製品（釘）

寸法が64×7×2mmで重量が約2.60gの釘状の遺物である。残存する金属部分が少ないため化学成分

分析は不可能であり、物理的測定に止めた。

10倍の長手方向の顕微鏡写真で一様に細かい金属結晶と所々に長く延伸された介在物（不純物）とが観察される。100倍の介在物の拡大写真による観察で、試料が鍛冶加工されたことが示唆される。組織写真から、粒度の揃った白いフェライトと灰黒色のパーライトの結晶が観察され、この鉄製品に含まれるC量は0.2～0.3%と推定される。173頁に微小硬度計による金属部分の硬さ試験の結果を示した。硬さ（HV）の平均値は139で前述のC量に相当する軟鋼の硬さであった。

金属組織断面のEPM A写真による観察では、SE像の中の介在物は鍛冶加工によって延伸している様子が観察される。介在物はSi、Ca、MgやAlの酸化化合物で、この他にTiとPとが含まれていることが判る。一方、SE像の灰色の金属鉄はEPM A-EDXによる元素分析の結果、Fe以外の元素（Cは分析していない）は検出されず、非常に純度の高い鉄であると認められた。

以上の結果を総合すると、試料は炭素量が0.2～0.3%程度の軟鋼で、介在物の形状から鍛冶加工された釘状の鉄製品である。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No. 34. 総番号 95-34 (図 296-95) 銅溶解物

長径42、短径31、厚さ4mmの重量が約15.53gの表面に緑青が吹き出した遺物である。残存する金属部分がまだらに固まって分布し存在している。

試料断面の10倍の顕微鏡写真から、透過写真と同様白く見えまだらに分布する金属部分が観察される。100倍と400倍の顕微鏡写真では、一様な金属銅の組織が認められる。

試料の化学成分分析の結果によると、Cuの値は95.0%と非常に高い。錫(Sn)が0.09%鉛(Pb)は0.28%と少量しか含まれておらず、青銅のような銅合金ではなく若干の不純物を含むが銅金属そのものであると認められる。不純物元素として砒素(As)が1.88%、アンチモン(Sb)が0.17%存在する。また、銅鉱石に随伴する金(Au)や銀(Ag)がそれぞれ0.032%と0.203%存在する。この試料が製錬中か再溶解中に生成したのか否かは明らかではない。この他の元素として塩素(Cl)が0.327%検出されているが、緑青〔アタカマイト等： $\text{CuCl}_2 \cdot 3\text{Cu}(\text{OH})_2$ 〕と一緒に存在しているものと考えられる。

以上の結果から、この試料は金属銅の溶解物と言える。

試料No. 35. 総番号 95-35 (図 290-6) 羽口

全体が熱影響を受け赤褐色に変色し、先端部は溶融し黒褐色を呈している。赤褐色部の羽口断面の10倍の実体顕微鏡写真から、粘土の中の石英などの鉱物粒子が観察される。化学成分分析と耐火度試験の試料は溶融していない箇所から採取した。

羽口の化学成分分析の結果によると、 SiO_2 が70.2%と多く Al_2O_3 が15.1%と比較的少ない。T.Feの値は4.37%と一般の胎土に比べやや少なく、鉄滓に汚染されていないと考えられる。

耐火度試験の結果、 SiO_2 の量がやや多いにもかかわらず、通常の粘土よりかなり高い（約100～200℃）1,230℃強の耐火度を示した。

試料No. 36. 総番号 95-36 (図 290-2) 羽口

羽口外面は熱影響を受け赤褐色に変色し、内面の通気孔は溶融している。外面粘土部断面の10倍の実体顕微鏡写真をよると、粘土の中の鉱物粒子が観察される。化学成分分析と耐火度試験試料は溶融していない箇所から採取した。

羽口の化学成分分析の結果によると、 SiO_2 が67.0%と多く Al_2O_3 が16.0%と比較的少ない。T.Feの値は

6.20%と一般の胎土に比べやや多い。

耐火度試験の結果、通常の粘土より高い 1,200°C の耐火度を示した。

試料No. 37. 総番号 95-37 (図 291-13) 羽口

羽口は熱影響を受け赤褐色に変色し、先端部は溶融し黒色を呈している。熱影響部断面の10倍の実体顕微鏡写真を159頁に示した。粘土の中に鉍物粒子が観察される他、淡褐色の大きな礫状の鉍物が存在する。化学成分分析と耐火度試験試料は溶融していない箇所から採取した。

羽口の化学成分分析の結果によると、 SiO_2 が60.7%とやや少なく Al_2O_3 は18.9%とやや多い。T.Feの値は6.28%と一般の胎土に比べやや多い。

耐火度試験の結果、通常の粘土より高い 1,200°C 強の耐火度を示した。

試料No. 38. 総番号 95-38 (図 290-9) 羽口

羽口は熱影響を受け赤褐色に変色している。断面の10倍の実体顕微鏡写真を160頁に示した。粘土の中には鉍物粒子が観察される。

羽口の化学成分分析の結果によると、 SiO_2 が66.8%とやや多く Al_2O_3 は15.3%とやや少ない。T.Feの値は4.83%と一般の胎土に比べやや少ない。

耐火度試験の結果、通常の粘土より高い 1,140°C の耐火度を示した。

試料No. 39. 総番号 95-39 含銹化鉄製鍊滓

試料の化学成分分析の結果によると、T.Feの値は32.9%と非常に少ない。M.Feが5.06%と少々含まれている。FeOは5.27%と少なく、試料の酸化銹化が進行しており Fe_2O_3 は相対的に33.9%と多い。また、造滓成分は46.2%と非常に多く、特に SiO_2 が34.6%、 Al_2O_3 が8.09%と鉄滓の場合に比べ非常に多いので粘土が多く付着混在していると推定される。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は3.57%、Vは0.12%であった。鉍石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.005%と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が2.99%、 Fe_2O_3 の量が多いことから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄が多く存在するものと推定される。

試料断面の100倍で観た顕微鏡組織には、鉄が酸化銹化した纏まった灰白色のオキシ水酸化鉄と不定形状の桃灰色の鉍物質と推定される組織が観察される。残念ながら、少量残存していると思われた金属鉄は観察することが出来なかった。

試料断面のEPMA写真による観察では、SE像の最上部は酸化鉄またはオキシ水酸化鉄、その他の多孔質の部分は鉄滓で、Si、Ca、MgやAlの複合酸化物(鉍物質)の存在が確認される。この他チタニウムが偏析した状態で存在する。

以上の結果を総合すると、金属鉄が少量残存し酸化銹化した鉄を含む、含銹化鉄製鍊滓と言える。鉄源に砂鉄が使用された可能性が高い。

試料No. 40. 総番号 95-40 含銹化鉄製鍊滓

試料の化学成分分析の結果によると、T.Feの値は41.8%と少ない。M.Feが3.58%と少々含まれている。FeOは15.8%と少なく、試料の酸化銹化が進行しており Fe_2O_3 は37.1%と多い。造滓成分は29.1%であった。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO_2 は7.21%と非常に多く、Vは0.24%であった。鉍石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.002%と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が4.05%、

Fe₂O₃の量が多いことから、鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多く存在するものと推定される。C量は0.45%検出されたが、金属鉄に含まれていた炭素と推定される。

試料断面の100倍で観た顕微鏡組織には、灰白色のオキシ水酸化鉄と多角形灰褐色のウルボスピネルの結晶がそのまま観察される。また、写真で白く見える部分は酸化錆化を免れた金属鉄である。残念ながら、金属鉄の部分が少量で組織観察はできなかった。

滓断面のE P M A写真による観察では、S E像の大きな楕円状をした部分は酸化鉄またはオキシ水酸化鉄で、この中にはCa、MgやAlの複合酸化物が点在して分布している。また、多量のTiとVとがFeや酸素と共に偏析して存在している状況が観察される。

化学成分分析でTiO₂の含有量が高いこと、顕微鏡およびE P M AのS E像で見た組織から、試料は鍛冶加工を受けたとは認められず、したがって鉄滓を巻き込みながら凝固した鉄が酸化錆化した試料と判断できる。

以上の結果を総合すると、金属鉄とその酸化錆化物を含む製錬滓と推定される。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 41. 総番号 95-41 含錆化鉄製錬滓

試料の化学成分分析の結果によると、T.Feの値は39.9%と少ない。FeOも11.2%と少なく、試料の酸化錆化が進行しておりFe₂O₃は44.3%と多い。滓中の成分の指標となる造滓成分は30.0%であった。砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂は7.63%と非常に多く、Vは0.22%であった。鉱石に含有される成分の一つであるCuの値は0.002%と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が3.53%、Fe₂O₃の量が多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多く存在するものと推定される。M.Feは0.24%と殆ど含まれていない。C量は0.75%検出されたが、金属鉄に含まれていた炭素と推定される。

滓断面の100倍で観た顕微鏡組織には灰白色のオキシ水酸化鉄、400倍の滓部の写真には針状のイルメナイトと不定形状のウルボスピネルの結晶とが観察される。金属鉄の存在は認められなかった。

X線回折チャートから、強いマグネタイトのピークが検出され、この他にファイヤライト、ウルボスピネルやイルメナイトや少量の鉱物質の化合物の存在が認められる。また、オキシ水酸化鉄のゲーサイトとレピッドクロサイトのピークも検出されている。

以上の結果を総合すると、この試料は鉄の酸化錆化物を含む製錬滓と推定される。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 42. 総番号 95-42 含錆化鉄製錬滓

試料の化学成分分析の結果によると、T.Feの値は40.0% FeOは7.83%と少なく、試料の酸化錆化が進行しておりFe₂O₃は48.2%と多い。滓中の造滓成分は31.5%と多い。砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂は3.95%と多く、Vは0.12%であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.004%と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が5.43%、Fe₂O₃の量が多いことから鉄錆の一種であるオキシ水酸化鉄が多く存在するものと推定される。M.Feは0.21%と殆ど含まれていない。C量は1.15%も検出されたが、もともと金属鉄に含まれていた炭素と推定される。

滓断面の顕微鏡組織には灰白色のオキシ水酸化鉄が存在し、その中に片状の黒鉛（炭素）が数多く認められる。金属鉄の存在は認められなかったが、化学成分分析のC量から考えて鑄物組織を呈していたものと推定できる。

X線回折チャートから、強いマグネタイトのピークが検出され、この他にウルボスピネルのピークとオ

キシ水酸化鉄のゲーサイトのピークも検出されている。金属鉄のピークは検出されなかった。

以上の結果を総合すると、この試料は鉄の酸化銹化物を含む製錬滓と推定される。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 43. 総番号 95-43 (図 197-4) 椀形精錬鍛冶滓

化学成分分析の結果、T.Fe の値は 55.5% で、FeO は 51.3% と多い。これに対し、Fe₂O₃ は 21.1% と非常に少ない。造滓成分も 20.5% で少ない。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ は 1.84%、V は 0.21% であった。鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.002% で少ない。したがって、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 1.29%、Fe₂O₃ の量も共に少ないが鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄が存在するものと推定される。なお、M.Fe は 0.89% と殆ど含まれていない。

滓断面の顕微鏡組織には繭状のウスタイトと短冊状のファイヤライトの結晶が観察される。写真上ではオキシ水酸化鉄は認められない。

X線回折チャートから、ウスタイトと共にマグネタイトのピークが検出され、この他にファイヤライトと少量の鉱物質の存在が認められる。測定の結果、少量のゲーサイトが検出されている。金属鉄のピークは検出されなかった。

以上の結果を総合すると、滓の形状を加味し椀形精錬鍛冶滓と言える。鉄源には砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 44. 総番号 95-44 含銹化鉄製錬滓

試料の化学成分分析の結果によると、T.Fe の値は 33.8% で、M.Fe が 7.53% も含まれている。FeO は 14.6% と少なく、また Fe₂O₃ も 21.6% と少ない。滓中の造滓成分は 48.9% と非常に多い。砂鉄に含まれていたと考えられる TiO₂ は 2.82% と多く、V は 0.10% であった。一般に鉱石に含有される指標成分の一つである Cu の値は 0.005% と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W. の値が 1.28% であることから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄も存在するものと推定される。

滓断面の顕微鏡組織の中央右下の白い部分は金属鉄である。金属鉄はもともと海綿鉄(スポンジ状の鉄)状に存在していたらしく、点状の灰白色のオキシ水酸化鉄が観察される。

X線回折チャートから、マグネタイト、ファイヤライトやウルボスピネルのピークが検出され、この他に金属鉄の存在を示す強いピークが認められる。

以上の結果を総合すると、この試料は金属鉄とその酸化銹化物を含む製錬滓と推定される。鉄源に砂鉄が使用されたと考えられる。

試料No. 45. 総番号 95-45 銹化鉄塊系遺物

残っている金属が少ないためか試料の厚さが薄いために黒い影像是認められない。ここでは当初の外観観察結果に基づいて銹化鉄塊系遺物に位置付けることとした。

試料No. 46. 総番号 95-46 (図 212-11) 銹化鉄塊系遺物

滓断面の実体顕微鏡写真による観察では、緻密な黒いオキシ水酸化鉄が全面にみとめられる。また、滓断面の顕微鏡組織には一面に灰白色のオキシ水酸化鉄が観察される。

滓断面のEPMA写真による観察では、SE像の灰白色をした部分は純度の高い酸化鉄またはオキシ水酸化鉄で、Ca、MgやAlの複合酸化物などの不純物は認められない。僅かにCaやAlの存在が他の場所に

ある程度である。SE像の中央右に介在物らしき物があり、ここにSが偏析している。なお、TiやVの顕著な分布は認められない。したがって、鉄源が砂鉄か否かは明らかに出来なかった。

以上の結果から、この試料は銹化鉄塊系遺物であると推定される。

試料No. 47. 総番号 95-47 (図 212-10) 銹化鉄塊系遺物

残っている金属が少ないためか試料の厚さが薄いためか黒い影像是認められない。当初の外観観察結果に基づいて銹化鉄塊系遺物に位置付けることとした。

試料No. 48. 総番号 95-48 (図 212-8) 精錬・鉄塊系遺物

透過写真は陰影が濃く金属部分が残っている可能性を示唆した。

試料断面の10倍の金属顕微鏡写真による観察では、白い部分は金属鉄で鉄滓の詰まった穴が数多く存在する。下方の濃灰色部分は鉄滓である。滓断面の顕微鏡組織には繭状のウスタイト、樹枝状のマグネタイトと灰色の形状が一定しないファイヤライトの結晶が観察される。金属組織は鉄滓が多量に進入したC量の少ない純鉄の凝固組織であり、鍛冶加工を受けた形跡は認められない。

以上の結果を総合すると、この試料は精錬鉄滓の付着した金属鉄塊である。

試料No. 49. 総番号 95-49 (図 212-9) 椀形鍛錬鍛冶滓

化学成分分析の結果によると、T.Feの値は59.5%、FeOも53.0%と非常に多い。Fe₂O₃は26.0%であった。造滓成分は14.7%と非常に少ない。砂鉄に含まれていたと考えられるTiO₂は1.16%で、Vは0.096%であった。鉱石に含有される指標成分の一つであるCuの値は0.002%と少ないので、鉄源は砂鉄の可能性が高い。C.W.の値が2.05%であることから鉄銹の一種であるオキシ水酸化鉄も存在するものと推定される。M.Feは含まれていない。

滓断面の顕微鏡組織にはウスタイトの綺麗な灰白色繭状結晶が認められ、その間にファイヤライトの結晶が存在する。

X線回折チャートから、ウスタイトの強いピークとマグネタイトやファイヤライトのピークが検出され、この他にオキシ水酸化鉄のゲーサイトとレピッドクロサイトや鉱物質物質の存在を示すピークが認められる。金属鉄のピークは検出されなかった。

以上の結果を総合すると、この試料はその形状を加味し椀形鍛錬鍛冶滓と推定される。鉄源には砂鉄が使用されたと考えられる。

4. まとめ

4-1. 砂鉄 (4 試料) について

4-1-1. 現代砂鉄 (試料No. 1～3)

採取場所あるいは水洗による選礫程度の違いによって考えられるが、主成分等の含有範囲は次のとおりであった。なお、鉄 (T.Fe) 含有量の最も高いものは試料No. 1 の日名川上流の砂鉄であった。

T.Fe	39.4 ～ 53.4%
TiO ₂	8.6 ～ 11.6%
V	0.25 ～ 0.28%

4-1-2. 砂鉄と鉄滓の混合物

試料No. 4 は砂鉄、鍛錬鍛冶の際に生成する湯玉 (粒状滓) と鍛造剥片の混合物であった。

4-2. 鉄滓について

4-2-1. 鉄滓分類の基準

鉄滓の種類については後述の項(5. 参考)に従い、分類の基準は化学成分分析値、組織観察結果、X線回折やEPMAの結果を総合して行った。滓の形状については初期(試料に添付されていた調査票)のデータに準じた。

分類のための化学成分分析値の範囲は原則として次の範囲とした。

製錬滓	T.Fe $\geq 14.7\% \sim \leq 48.5\%$	造滓成分 $\geq 29.1\% \sim \leq 64.8\%$
精錬滓	T.Fe $\geq 49.6\% \sim \leq 55.8\%$	造滓成分 $\geq 14.7\% \sim \leq 30.9\%$
鍛錬滓	T.Fe $\geq 55.1\% \sim \leq 60.4\%$	造滓成分 $\geq 14.1\% \sim \leq 23.8\%$

4-2-2. 鉄滓の鉄源

鉄滓には砂鉄に多く含まれるチタニウムとバナジウムとが存在し、鉄鉱石に含まれ指標成分となる銅元素が非常に少ないことから、鉄源は砂鉄であったと推定できる。

4-2-3. 製錬滓 (7 試料)

- (1) 製錬滓は試料No. 12 と 16 の 2 試料であった。
- (2) 錆化鉄を含む製錬滓は試料No. 39 ~ 42、44 の 5 試料であった。
- (3) なお、試料No. 39、40、44 には金属鉄が残存していた。

4-2-4. 精錬滓 (12 試料)

- (1) 精錬滓の形状は椀形を呈した椀形精錬鍛冶滓であり、試料No. 7 ~ 10、13、15、21、22、43 の 9 試料であった。
- (2) 錆化鉄を含む椀形精錬鍛冶滓は試料No. 6 の 1 試料であった。
- (3) 金属鉄を含む椀形精錬鍛冶滓は試料No. 5 と 23 の 2 試料であった。

4-2-5. 鍛錬滓 (11 試料)

- (1) 椀形鍛錬鍛冶滓は試料No. 14 と 49 の 2 試料であった。
- (2) 金属鉄を含む椀形鍛錬鍛冶滓は試料No. 17 ~ 20、27 の 5 試料であった。
- (3) 湯玉(粒状滓)は試料No. 29 と 30 の 2 試料であった。
- (4) 鍛造剥片は試料No. 31 と 32 の 2 試料であった。

4-3. 鉄塊系遺物 (9 試料) について

- (1) 錆化鉄塊は試料No. 11 (滓と礫に包含)、45 ~ 47 の 4 試料であった。
- (2) 金属鉄や共存する鉄滓と鉄錆の組織観察、炭素量の検討から、鉄塊系遺物は、
 - ①製錬過程で生成したと考えられるものが試料No. 24 と 28 の 2 試料
 - ②精錬過程で生成したと考えられるものが試料No. 25、26 と 48 の 3 試料であり
 - ③鍛冶過程で生成したと考えられる試料はなかった。

4-4. 鉄製品 (1 試料) について

- (1) 試料No. 33 は釘状をし、金属鉄が残存するが錆化が著しい鉄製品である。
- (2) 長手方向に鍛造加工された軟鋼で鉄の純度は高い。なお、鉄源は砂鉄と推定される。

4-5. 銅溶解物 (1 試料) について

- (1) 試料No. 34 は銅の溶解・凝固物であるが、緻密な塊にはなっていない。
- (2) 銅の純度は比較的高く、青銅用の合金成分は含まれていない。

4-6. 羽口（4 試料）について

- (1) 試料No. 35 ～ 38 は羽口で熱影響のため一部赤褐色に変色し、また溶融している。
- (2) 羽口胎土の耐火度は通常の粘土のそれより約 100 ～ 200 °C 高い 1,140 ～ 1,230 °C の温度を示した。良く選択された粘土を使用していたと考えられる。

5. 参 考

- (1) 鉄滓の発生を鉄の生産工程から大きく分類すると、

- ①精錬滓 砂鉄や鉄鉱石を木炭等の炭素で還元して、酸素を取り除き、金属鉄を取り出す時に発生するもので、炉内滓や炉底低滓および炉外流出滓などがある。
- ②精錬鍛冶滓 ①で出来た鉄塊から、さらに不純物を取り出して加工しやすい状態の鉄素材（鉄塊（大鍛冶滓）にする時に生成するもので、成分的には①の製錬滓に近い。
- ③鍛錬鍛冶滓 ②で出来た鉄素材や製品の鉄を加熱・鍛打して、鉄製品を作っていく過程で生成する（小鍛冶滓）鉄滓で、その生成過程により碗型鍛冶滓、鍛造剥片や粒状鉄滓（通称湯玉）等の形となる。
- ④鋳物滓 鉄を溶解し、鋳型に流し込んで鋳物を作る時に生成するもの。

等があります。

鉄は再加工（いわゆるリサイクル）の可能な素材として利用できるの、鍛冶場には各所で新規に生産された鉄と同時にリサイクル品が持ち込まれてきた可能性もあると、考えるのが妥当であります。

素材である鉄や鉄塊がどこで生産されたものか、製鉄技術の進歩の状況はどうであったか等については、特定製鉄遺跡に付随する鍛冶工房や、製品としての鉄器類の追跡調査研究を進めて行く過程で更に解明出来るものと思います。

- (2) 鉄の分析結果について

分析結果表に記載されている全鉄分（Total Fe=T.Fe と表示）の量と、その後に記載されている金属鉄（Metalic Fe=M.Fe）、酸化第一鉄（FeO）および酸化第二鉄（Fe₂O₃）との関係を簡単に述べると、後者の二つは酸化鉄（鉄と酸素の化合物）を示しており、それらの中の鉄（Fe）の量と M.Fe の量とを合計したものが前者の T.Fe となります。

したがって、分析値を合計する場合には全鉄分を除外して集計する必要があります。

また、酸化鉄にはこの他にもいろいろな形態をしたものがあり、鉄滓中の鉄の成分量を見る場合には、全鉄分（T.Fe）が重要になります。

なお、酸化鉄の他の化合物としては四三酸化鉄（FeO・Fe₂O₃=Fe₃O₄）がありますが、化学成分分析から直接含有量は求められません。

また、水分との接触が多い鉄器や鉄滓の場合、水分（C.W.）と酸化第二鉄とが結合したオキシ水酸化鉄（Fe₂O₃・H₂O=2FeOOH）が一般的に認められます。その時の鉄錆の形態は、ゲーサイト [Goethite: α-FeOOH]、アカゴナイト [Akagonite: β-FeOOH]、レピッドクロサイト [Lepidocrocite: γ-FeOOH] の3種であり、生成環境や条件により変化します。

(3) 鉄滓の化合物について

鉄滓を構成する化合物は一般に次のようなものであり、顕微鏡写真およびX線回折の結果によると、原則としてこれらの存在がいずれかの組み合わせで認められます。なお、このほかにガラス質の化合物も存在します。

ウスタイト	: Wustite(FeO)	白色の繭玉又は葡萄の房状の結晶
ファイヤライト	: Fayalite(2FeO · SiO ₂)	短冊状やレース状の長い結晶
マグネタイト	: Magnetite(Fe ₃ O ₄)	白色、多角盤状または樹枝状の結晶
ヘマタイト	: Hematite (α-Fe ₂ O ₃)	赤褐色～赤紫色
マグヘマイト	: Maghemite(γ-Fe ₂ O ₃)	赤紫色～黒紫色
ウルボスピネル	: Ulvospinel(2FeO · TiO ₂)	淡褐色、角尖状～六角形状結晶
イルメナイト	: Ilmenite (FeO · TiO ₂)	褐色針状の長い結晶
シュードブルックライト	: Pseudobrookite (Fe ₂ O ₃ · TiO ₂)	針状または板状結晶
ゲーサイト	: Goethite (α-FeOOH)	黄赤色、不定型
アカゴナイト	: Akagonite (β-FeOOH)	黄色、不定型
レピッドクロサイト	: Lepidocrocite (γ-FeOOH)	橙赤色、不定型
ヘーシナイト	: Hercynite(FeO · Al ₂ O ₃)	ウスタイト中に多く析出。胡麻粒状

この他、石英＝クオーツ (Quartz:SiO₂)、ルーサイト (Leucite:KAlSi₂O₆)、プラギオレーゼ [Plagioclase:(Na,Ca)(Al,Si)₄O₈]、ドロマイト [Dolomite:CaMg(CO₃)₂] 等の鉱物やガラス質のものがあります。なお、色調は前記したものと若干異なる場合もあります。

表12 第3章 大日ノ木遺跡 土器観察表 (縄文時代)

図版番号	土器番号	器種	時期	遺構グリッド	部位	色調	胎土	焼成	調整施文技法	備考
31	1	深鉢	早期中葉	2流路	胴	橙	中 石英、長石、角閃石、褐色粒子	軟	外：縦位帯状山形押型文	異方向帯状、樋状式
31	2	深鉢	早期中葉	2流路	胴	橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並	外：縦位帯状山形押型文	異方向帯状、樋状式
31	3	深鉢	早期中葉	—	胴	暗褐	粗 雲母	やや軟	外：縦位山形文	擬口縁？、細久保式？
31	4	深鉢	早期中葉	2流路	胴	褐	中 石英、長石、角閃石	やや軟	外：横位密接楕円押型文	細久保式
31	5	深鉢	早期中葉	2流路	胴	橙	粗 長石、石英、角閃石	並	外：横位密接楕円押型文	細久保式
31	6	深鉢	早期中葉	2流路	胴	明赤褐	中 長石、石英	軟	外：横位格子目？押型文	
31	7	深鉢	早期後葉	7住付近	口縁	黄褐	中 雲母、褐色粒子	良	口唇：貝殻腹縁刺突 外：貝殻条痕→沈線文 内：横位貝殻条痕	
31	8	深鉢	早期後葉	1流路東	口縁	黒褐	粗 石英、褐色粒子	良	外：貝殻腹縁刺突、沈線文	
31	9	深鉢	早期後葉	17住	口縁	橙	中子 長石、石英、雲母、褐色粒	並	外：貝殻腹縁？刺突、沈線文	
31	10	深鉢	早期後葉	1流路	口縁	にぶい橙	中 石英、角閃石	並	口唇：刺突 外：沈線文	
31	11	深鉢	早期後葉	池東	口縁	明赤褐	粗 石英、雲母	やや軟	口唇：斜め刻み 外：斜格子沈線文	
31	12	深鉢	早期後葉	3住	口縁	にぶい赤褐	中 石英、繊維	やや軟	外：押引沈線文	
31	13	深鉢	早期後葉	7住	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、雲母	並	口唇：交互に刻み 外：連続刺突 内：貝殻条痕	
31	14	深鉢	早期後葉	3住	胴	にぶい赤褐	中 石英、繊維	やや軟	外：貝殻腹縁押引文	
31	15	深鉢	早期後葉	2流路	胴	橙	中 石英、雲母、角閃石、長石	並	外：爪形の連続刺突	
31	16	深鉢	早期後葉	1流路東	胴	明赤褐	粗 石英、雲母、長石	並	外：貝殻腹縁による連続刺突ならびに並行沈線	
31	17	深鉢	早期後葉	1流路東	胴	にぶい橙	粗 僅 石英、雲母、長石、繊維	並	外：半竹？押引 縄文RL横位	
31	18	深鉢	早期後葉	2流路	胴	橙	粗 長石、角閃石、石英、岩片	軟	外：爪形の連続刺突	
31	19	深鉢	早期後葉	28住	胴	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石	並	外：ヘラ？連続刺突	
31	20	深鉢	早期後葉	Ⅲ—B—12	胴	褐灰	粗 長石、石英、繊維	やや軟	外：ヘラ刻み 内：浅い斜位条痕	
31	21	深鉢	早期後葉	27住	胴	褐	中 石英、雲母	やや軟	外：沈線文	
31	22	深鉢	早期後葉	1流路東	胴	にぶい褐	粗 長石、石英、繊維極僅	並	外：地文縄文RL横位、貝殻腹縁連続刺突	
31	23	深鉢	早期後葉	2流路	胴	にぶい橙	中 長石、雲母、角閃石	やや軟	外：貝殻腹縁による沈線？	
31	24	深鉢	早期後葉	2流路	胴	明褐	中 長石、雲母、繊維極僅	並	外：連続押引文	
31	25	深鉢	早期後葉	2流路	胴	にぶい赤褐	中 石英、雲母、褐色粒子	並	外：半竹？連続刺突	
31	26	深鉢	早期後葉	Ⅲ—B—17	胴	明赤褐	粗 石英	やや軟	外：鋸歯状、貝殻腹縁押圧	
31	27	深鉢	早期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 長石、石英、褐色粒子、繊維	軟	外：幅広低隆帯貼付、横位絡条体条痕→横位絡条体圧痕	
31	28	深鉢	早期末	Ⅲ—C—5	口縁	明赤褐	粗 長石、石英、褐色粒子、繊維	軟	外：横位絡条体圧痕、幅広低隆帯上を鋸歯状に絡条体圧痕	
31	29	深鉢	早期末	9住	胴	にぶい黄橙	細 石英、長石、繊維	並	口唇：絡条体による刻み 外：絡条体圧痕文 内：横位絡条体条痕	
31	30	深鉢	早期末	Ⅲ—B—6	口縁	にぶい赤褐	粗 僅 石英、長石、褐色粒子、繊維	やや軟	外：絡条体圧痕	
31	31	深鉢	早期末	2流路	口縁	浅黄橙	中 褐色粒子、繊維	軟	外：絡条体圧痕	
31	32	深鉢	早期末	27住	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色粒子、繊維	軟	外：絡条体圧痕	
31	33	深鉢	早期末	27住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子、繊維	やや軟	外：縦位絡条体圧痕 内：横位絡条体条痕	
31	34	深鉢	早期末	2流路	胴	にぶい橙	粗 長石、褐色粒子、繊維	軟	外：幅広低隆帯貼付、絡条体圧痕	
31	35	深鉢	早期末	1流路	胴	にぶい橙	粗 石英、褐色粒子、長石、繊維	軟	外：絡条体圧痕 内：横位絡条体条痕	
31	36	深鉢	早期末	1流路	胴	にぶい黄橙	粗 長石、褐色粒子、繊維	軟	外：幅広低隆帯貼付、絡条体圧痕	
31	37	深鉢	早期末	18住	胴	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子、角閃石、繊維	並	外：横位条痕→絡条体圧痕	擬口縁
31	38	深鉢	早期末	4住付近	口縁	明赤褐	粗 雲母、石英、繊維	軟	外：隆帯上、横位絡条体圧痕	
31	39	深鉢	早期末	2流路	胴	橙	中 長石、石英、角閃石、繊維	軟	外：横位絡条体圧痕 内：条痕	
31	40	深鉢	早期末	1流路西	胴	橙	粗 長石、黒色円形粒子、繊維	軟	外：絡条体圧痕	
31	41	深鉢	早期末	1流路西	胴	浅黄橙	粗 石英、褐色粒子、繊維	やや軟	外：幅広低隆帯貼付→横位絡条体圧痕	
31	42	深鉢	早期末	Ⅲ—B—6	胴	にぶい橙	粗 石英、褐色粒子、繊維	軟	外：横位絡条体圧痕 内：浅い条痕	
32	43	深鉢	早期末	Ⅲ—A—25	胴	にぶい橙	中 長石、石英、角閃石、褐色粒子、繊維	やや軟	外：斜位交差絡条体条痕→絡条体圧痕 内：斜位絡条体条痕	
32	44	深鉢	早期末	Ⅲ—A—25	口縁	にぶい橙	細 長石、褐色粒子、繊維	軟	外：絡条体条痕 内：絡条体条痕	焼成前穿孔
32	45	深鉢	早期末	1流路西	胴	橙	粗 石英、長石、褐色粒子、繊維	やや軟	外：横位絡条体条痕 内：横位絡条体条痕	
32	46	深鉢	早期末	17住	胴	橙	中 長石、石英、褐色粒子、繊維	並	外：斜位絡条体条痕 内：横位絡条体条痕	
32	47	深鉢	早期末	2流路	胴	暗赤褐	中 石英、褐色粒子、雲母、繊維極僅	良	外：斜位条痕→ナデ 内：横位条痕→ナデ	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	土器 番号	器 種	時 期	遺構グリップ	部 位	色 調	胎 土	焼 成	調整施文技法	備 考
32	48	深鉢	早期末	1 流路	胴	橙	細 長石、褐色粒子、角閃石、 繊維	軟	外：絡条体？条痕→ナデ 内： 斜位絡条体条痕	
32	49	深鉢	早期末	2 流路	胴	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子、織 維	やや軟	外・内：斜位絡条体条痕	
32	50	深鉢	早期末	池東	胴	橙	中 石英、長石、繊維	並	外：絡条体？条痕	
32	51	深鉢	早期末	24住	胴	橙	細 石英、角閃石、繊維	並	外・内：斜位絡条体条痕	
32	52	深鉢	早期末	2 流路	胴	橙	中 長石、石英、褐色粒子、織 維	軟	外：絡条体条痕、表面少し剥離	
32	53	深鉢	早期末	27住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、繊維	やや軟	口唇：連続刻み 外：貝殻条痕 →連続刺突	
32	54	深鉢	早期末	9 住	口縁	にぶい黄橙	粗 長石、石英	並	口唇内：刻み 外：連続刺突	
32	55	深鉢	早期末	池東	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石	良	外：貝殻？条痕、へら刻み 内：貝殻？条痕、へら刻み	ゆるい波状口縁
32	56	深鉢	早期末	Ⅲ—B—12	胴	にぶい橙	中 石英	軟	外：へら刻み、斜位貝殻条痕 内：浅い斜位条痕	
32	57	深鉢	早期末	Ⅲ—B—12	胴	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石	良	外：斜位貝殻条痕 内：横位貝 殻条痕	
32	58	深鉢	早期末	21住	胴	にぶい橙	細 石英、長石	やや軟	外：貝殻条痕刺突 内：浅い貝 殻？条痕	
32	59	深鉢	早期末	不明	胴	にぶい橙	細 石英、長石、褐色粒子	並	外：斜位貝殻条痕 内：斜位貝 殻条痕	
32	60	深鉢	早期末	1 流路東	胴	にぶい赤褐	粗 石英	並	外：貝殻？条痕	
32	61	深鉢	前期後葉	2 流路	口縁	暗褐	中 長石、石英、雲母、角閃石	軟		
32	62	深鉢	前期後葉	Ⅲ—B—5	口縁	浅黄橙	粗 長石、角閃石、石英	並	外：縄文RL横位	接合痕が見える
32	63	深鉢	前期後葉	2 流路	胴	赤褐	細 石英、長石	軟	外：櫛歯状工具による条線	
32	64	深鉢	中期	Ⅲ—B—5	胴	明赤褐	粗 長石、角閃石、石英	並	連環状突起？	
32	65	深鉢	中期	1 流路付近	胴	明褐	中 石英、長石、雲母	並	外：縦位沈線 内：器面が剥離	
32	66	深鉢	中期	2 流路	胴	橙	粗 石英、雲母、褐色粒子	並	外：渦巻文施文突起貼付	
32	67	深鉢	中期後葉	2 流路	口縁	明褐	中 長石、石英、褐色粒子	並	外：区画隆帯貼付、縦位縄文L R	
32	68	深鉢	中期	1 流路	胴	にぶい橙	粗 石英、褐色粒子、角閃石	良	外：斜位縄文RL	
32	69	深鉢	中期	1 流路	胴	にぶい橙	粗 長石、石英、雲母、角閃石	並	外：斜位縄文RL	
33	70	鉢	後期前葉	2 流路	胴	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並	外：縄文LR→沈線文	擬口縁
33	71	鉢	後期前葉	2 流路	胴	褐	中 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	やや軟	外：8字状浮文貼付	
33	72	?	後期	1 流路西	胴	褐	粗 石英、長石	並	外：横位縄文LR→沈線など	
33	73	深鉢	後期前葉	2 流路	胴	灰黄褐	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：横位縄文LR→区画沈線	
33	74	深鉢	後期	2 流路	胴	浅黄橙	粗 長石、石英、褐色粒子	並	外：横位縄文LR→区画沈線	
33	75	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい黄褐	粗 長石、石英、褐色粒子	並	外：頸部ミガキ、胴部斜位ケズ リ	
33	76	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
33	77	深鉢	晚期末	3・4住	口縁	にぶい褐	中 石英、長石、褐色粒子	良	外：ケズリ→丁寧なナデ 内： 横位ケズリ→横位ミガキ	
33	78	深鉢	晚期末	Ⅲ—G—2	口縁	褐	中 石英、長石、角閃石	並		
33	79	深鉢	晚期末	13住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	80	深鉢	晚期末	7 住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外・内：ミガキ	
33	81	深鉢	晚期末	29住	口縁	灰褐	粗 長石、石英、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
33	82	深鉢	晚期末	表採	口縁	にぶい褐	粗 長石、長石	良	外：沈線内細かいミガキ 内： 横位ケズリ	
33	83	深鉢	晚期末	Ⅲ—G—5	口縁	にぶい黄褐	粗 長石、石英	並		
33	84	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英	並		
33	85	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石	並	外：ミガキ 内：横位ミガキ	
33	86	深鉢	晚期末	Ⅲ—B—8	口縁	にぶい黄褐	中 石英、長石、角閃石、雲母	良	外：半竹沈線？沈線内に細条線 見られる 内：部分的にミガキ	
33	87	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石	並		
33	88	深鉢	晚期末	Ⅲ—B—8	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：横位ミガキ、凹線内ミガキ 内： ミガキとくに口唇内面強い横位ミガキ	
33	89	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並	内：口縁直下に沈線	補修孔あり
33	90	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石	並		
33	91	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい黄褐	細 石英、長石、角閃石	並		
33	92	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	黒褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	93	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外：ミガキ 内：横位ミガキ	
33	94	深鉢	晚期末	2 流路	口縁	灰白	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	土器 番号	器 種	時 期	遺構グリッド	部 位	色 調	胎 土	焼 成	調整施文技法	備 考
33	95	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	橙	粗 長石、石英、褐色粒子	軟		口唇外面に刻み
33	96	深鉢	晩期末	1 流路西	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並		
33	97	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石、角閃石	良		
33	98	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：凹線内ミガキ 内：ミガキ	
33	99	深鉢	晩期末	Ⅲ-B-18	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：口唇外面が若干肥厚し、刻 む	
33	100	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	明褐	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	軟		
33	101	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟	外：部分的に口唇外面を肥厚	
33	102	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、褐色粒子	やや軟		
33	103	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	細 石英、長石	並		
33	104	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい褐	中 石英、褐色粒子	並	内：横位ミガキ	
33	105	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい褐	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	106	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、褐色粒子	良		
33	107	深鉢	晩期末	1 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石	良	外：部分的に口唇外面を肥厚	
33	108	深鉢	晩期末	6 住	口縁	褐	細 石英、長石、角閃石	良	外：横位ミガキ、部分的に口唇 外面を肥厚	
33	109	深鉢	晩期末	8 住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石	良	外：口唇外面を部分的に肥厚 し、刻む	
33	110	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	良	外：横位ミガキ 内：横位ケズ リ→横位ミガキ	
33	111	深鉢	晩期末	27 住	口縁	にぶい褐	細 石英、長石、褐色粒子	良	外：ミガキ 内：ミガキ	
33	112	深鉢	晩期末	13 住	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	113	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	灰黄褐	中 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	並		
33	114	深鉢	晩期末	27 住	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：ミガキ 内：ミガキ	
33	115	深鉢	晩期末	15 住	口縁	橙	中 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	良		
33	116	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	浅黄橙	粗 長石、褐色粒子、角閃石	並		
33	117	深鉢	晩期末	5 住	口縁	明褐	中 石英、長石、角閃石	並		
33	118	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、褐色粒子	並		
33	119	深鉢	晩期末	1 流路	口縁	にぶい黄褐	細 長石、石英、褐色粒子	良	外：ミガキ	
33	120	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	中 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	並		部分的に肥厚
33	121	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良		
33	122	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	123	深鉢	晩期末	5 住	口縁	橙	細 長石、角閃石、黒色粒子	並		
33	124	深鉢	晩期末	1 流路	口縁	橙	中 長石、石英、角閃石	並		
33	125	深鉢	晩期末	27 住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟		
33	126	深鉢	晩期末	21 住	口縁	橙	細 石英、角閃石、褐色粒子、 長石	並		
33	127	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	128	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-18	口縁	にぶい橙	粗 石英、褐色粒子、長石	並		
33	129	深鉢	晩期末	4 住	口縁	にぶい黄橙	粗 長石	良		
33	130	深鉢	晩期末	I-U-25 I-V-21	口縁	明黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
33	131	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英、褐色粒子	並		
34	132	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並		
34	133	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄褐	粗 石英、長石、褐色粒子	並		
34	134	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-18	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良		
34	135	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟		
34	136	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	橙	中 長石、石英	やや軟		
34	137	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	細 石英、褐色粒子	並	内：横位ミガキ	
34	138	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	浅黄橙	中 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	並		
34	139	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石	並		部分的に肥厚
34	140	深鉢	晩期末	1 流路西	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並		肥厚して刻む
34	141	深鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、角閃石、長石	やや軟		

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	土器 番号	器 種	時 期	遺構グリッド	部 位	色 調	胎 土	焼 成	調整施文技法	備 考
34	142	深鉢	晩期末	6住	口縁	浅黄橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		波頂部に刻み
34	143	深鉢	晩期末	2流路	口縁	明黄褐	粗 長石、石英、褐色粒子	並	外：ミガキ?刻み	
34	144	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい赤褐	粗 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	並	外：ミガキ	
34	145	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	粗 長石、石英、角閃石	軟		肥厚して刻み
34	146	深鉢	晩期末	4住	口縁	橙	中 長石	並		
34	147	深鉢	晩期末	2流路	口縁	橙	粗 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	並		
34	148	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英	並		部分的に肥厚
34	149	深鉢	晩期末	2流路	口縁	浅黄橙	中 長石、角閃石、石英、褐色 粒子	並	外：斜位ケズリ 内：横位ナデ だが、凹線内ミガキ	
34	150	深鉢	晩期末	21住-1	口縁	褐灰	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
34	151	深鉢	晩期末	2流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、角閃石	やや軟		
34	152	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-5	口縁	浅黄橙	粗 長石、石英、角閃石	並		肥厚して刻み
34	153	深鉢	晩期末	1流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、角閃石	並		
34	154	深鉢	晩期末	8住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石	良		肥厚して刻み
34	155	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石	並		
34	156	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
34	157	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英	やや軟		
34	158	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟		
34	159	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子、角 閃石	並		肥厚して面取り する
34	160	深鉢	晩期末	2流路	口縁	浅黄橙	粗 長石、石英	並		
34	161	深鉢	晩期末	2流路	口縁	褐	粗 長石、石英、褐色粒子	並		
34	162	深鉢	晩期末	18住	口縁	にぶい黄褐	中 石英、長石、角閃石	良	外・内：横位ミガキ	
34	163	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英	軟	内：植物の茎の圧痕?	
34	164	深鉢	晩期末	3住	口縁	黒褐	細 石英、長石、角閃石	良	外：ミガキ スス付着 内：ミ ガキ	
34	165	深鉢	晩期末	13住付近	口縁	黄褐	細 石英、長石、角閃石	並		
34	166	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子	やや軟		
34	167	深鉢	晩期末	Ⅲ-C-11	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、褐色粒子	並		
34	168	深鉢	晩期末	34住	口縁	浅黄橙	中 長石、石英、雲母、角閃石、 褐色粒子	やや軟		
34	169	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英、褐色粒子	並		
34	170	深鉢	晩期末	2流路	口縁	褐	中 石英、長石、褐色粒子	並		
34	171	深鉢	晩期末	2流路	口縁	黄橙	中 長石、石英、褐色粒子、角 閃石	やや軟		波状口縁
34	172	深鉢	晩期末	2流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、角閃石	並		
34	173	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並		
34	174	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	中 石英、長石、角閃石	並		
34	175	深鉢	晩期末	I-U-19	口縁	にぶい黄褐	細 石英、角閃石、褐色粒子	良		
34	176	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-16	口縁	浅黄橙	中 長石、石英、褐色粒子	軟		口唇刻み
34	177	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子、角 閃石	並		口唇刻み
34	178	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、褐色粒子、角 閃石	やや軟		
34	179	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、褐色粒子	並	外：ミガキ 内：ミガキ	口唇刻み
34	180	深鉢	晩期末	2流路	口縁	灰黄褐	中 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	並		
34	181	深鉢	晩期末	1住	口縁	浅黄橙	細 石英、長石、角閃石	並		
34	182	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並		
34	183	深鉢	晩期末	2流路	口縁	黄橙	粗 石英、長石、褐色粒子	やや軟		
34	184	深鉢	晩期末	9住	口縁	橙	細 雲母、石英、長石、角閃石	並		
34	185	深鉢	晩期末	1流路西	口縁	にぶい褐	中 長石、石英	並		ゆるい波状口 縁?
34	186	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-5	口縁	橙	粗 長石、石英、角閃石	並		
34	187	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	粗 石英、角閃石、長石	並		
34	188	深鉢	晩期末	1流路東	口縁	浅黄橙	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		肥厚して刻み

図版 番号	土器 番号	器 種	時 期	遺構グリッド	部 位	色 調	胎 土	焼 成	調整施文技法	備 考
35	189	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、角閃石、褐色粒子	並	外：沈線→細密条痕	
35	190	深鉢	晩期末	2流路	口縁	黒褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：条痕 内：ミガキ	
35	191	深鉢	晩期末	2流路	口縁	橙	中 長石、褐色粒子	並	外：細密条痕 内：ケズリーナ デ→横位ミガキ	
35	192	深鉢	晩期末	Ⅲ-B-6	口縁	にぶい黄橙	細 石英、褐色粒子、角閃石	並		
35	193	深鉢	晩期末	2流路	口縁	橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟	外：細密条痕	
35	194	深鉢	晩期末	Ⅲ-A-25	口縁	黒褐	中 石英、長石、角閃石	並	外：条痕 内：横位ミガキ 口 唇：横位ミガキ	
35	195	深鉢	晩期末	1流路西	口縁	橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並	外：細密条痕、凹線	
35	196	深鉢	晩期末	2流路	口縁	褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：ミガキ、粗い条痕 内：ミ ガキ	
35	197	深鉢	晩期末	9住	口縁	明黄褐	細 長石、石英、角閃石	良	外：ミガキ、条痕 内：ミガキ	口縁肥厚
35	198	深鉢	晩期末	1流路西	口縁	橙	中 石英、長石、褐色粒子	並	外：沈線、細密条痕	
35	199	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	粗 長石、雲母、褐色粒子	並	外：斜位の細密条痕	
35	200	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	中 長石、石英、角閃石	軟	外：縦位細密条痕	
35	201	深鉢	晩期末	2流路	口縁	橙	粗 長石、石英、角閃石、褐色 粒子	並	外：縦位条痕	
35	202	深鉢	晩期末	2流路	口縁	褐	中 石英、長石	並	外：斜位の浅い条痕	僅かに口唇部に 粘土貼付肥厚
35	203	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟	外：粗い条痕	
35	204	深鉢	晩期末	5住	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、褐色粒子	良	外：細密条痕か？	
35	205	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟	外：粗い条痕	
35	206	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-5	口縁	褐	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟	外：やや粗い条痕 内：ミガキ	
35	207	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	粗 長石、角閃石、褐色粒子	良	外：縦位粗い条痕	
35	208	深鉢	晩期末	Ⅲ-B-17	口縁	にぶい橙	粗 石英、角閃石	並	外：櫛歯状工具による縦位条線	
35	209	深鉢	晩期末	27住-9	口縁	にぶい黄褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：細密条痕 内：ミガキ	
35	210	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、雲母、褐色粒 子	並	外：ミガキ？ 内：ケズリーミ ガキ	
35	211	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟		
35	212	深鉢	晩期末	2流路	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石	並	内：横位ケズリーナデ	
35	213	深鉢	晩期末	26住-3	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：ケズリーない条痕	
35	214	深鉢	晩期末	1流路東	口縁	橙	中 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	良	口唇：ミガキ	
35	215	深鉢	晩期末	Ⅲ-G-5	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石	並		
35	216	深鉢	晩期末	2流路	口縁	灰黄褐	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	内：ナデだが少し光沢あり	
35	217	深鉢	晩期末	1流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	良	外：ミガキ 内：横位ケズリー 横位ミガキ 口唇：ミガキ	
35	218	深鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	粗 長石、石英、角閃石	やや軟		ゆるい波状口縁
35	219	深鉢	晩期末	1流路	胴	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子	並	外：斜位細密条痕	
35	220	深鉢	晩期末	1流路	胴	明褐	粗 石英、長石	やや軟	外：凹線、斜位条痕 内：ミガ キ	
35	221	深鉢	晩期末	Ⅲ-B-17	胴	にぶい黄橙	粗 長石	良	外：縦位櫛歯状工具による条線 文→沈線文	
35	222	深鉢	晩期末	Ⅲ-B-21	胴	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：縦位櫛歯状工具による条線 文→横位ないしは斜位の平行沈線 文	
35	223	深鉢	晩期末	2流路	胴	にぶい黄橙	粗 石英、長石、角閃石	良	外：平行沈線文 内：横位ミガ キ	
35	224	深鉢	晩期末	2流路	胴	にぶい橙	中 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	並	外：条痕→半竹沈線	
35	225	深鉢	晩期末	1流路	胴	にぶい黄橙	粗 長石、石英、角閃石	並	外：縦位細密条痕→平行沈線	
35	226	深鉢	晩期末	11住-1	胴	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石	軟	外：細密条痕→沈線	
35	227	深鉢	晩期末	2流路	胴	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並	外：斜位細密条痕→蛇行平行沈 線	
35	228	深鉢	晩期末	2流路	胴	にぶい褐	細 石英、長石	並	外：櫛歯状工具による縦位細密 条線→平行沈線	
35	229	深鉢	晩期末	2流路	胴	橙	細 石英、長石、角閃石	軟	外：縦位細密条痕→3条ないし 4条の平行沈線	僅かに外面に赤 彩がこのる
35	230	深鉢	晩期末	1流路	胴	にぶい黄橙	粗 石英、雲母、褐色粒子	並	外：条痕→蛇行沈線	
35	231	深鉢	晩期末	1流路	胴	にぶい黄褐	細 石英、角閃石	並	外：縦位細密条痕→平行沈線文	僅かに外面に赤 彩がこのる
35	232	深鉢	晩期末	Ⅲ-B-17	胴	にぶい黄橙	粗 長石	並	外：縦位細密条痕を地文？とし 矢羽状の沈線文	
35	233	深鉢	晩期末	2流路	胴	にぶい橙	粗 長石、石英、褐色粒子	軟	外：斜位細密条痕	
35	234	深鉢	晩期末	1流路西	胴	暗赤褐	粗 長石、石英	良	外：斜位条痕→横位ミガキ	
35	235	深鉢	晩期末	2流路	胴	にぶい赤褐	中 石英、角閃石、黒色粒子	並	外：条線	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	土器 番号	器 種	時 期	遺構グリッド	部 位	色 調	胎 土	焼 成	調整施文技法	備 考
35	236	深鉢	晩期末	—	胴	明褐	中 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	並	外：5条の粗い楕円状工具ない し簾状工具	
35	237	深鉢	晩期末	Ⅲ—A—25	胴	にぶい黄橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並	外：細密条痕→沈線	
36	238	深鉢	晩期末	池東	胴	淡黄	中 石英、長石	良	外：貝殻条痕 内：器面剥離	
36	239	深鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい黄橙	粗 長石、石英	良	外：粗い条痕（二枚貝条痕？）	
36	240	深鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい黄橙	粗 石英、長石	並	外：斜位粗い条痕（二枚貝条 痕？）	
36	241	深鉢	晩期末	1 流路	胴	浅黄橙	中 石英、長石、褐色粒子、赤 黒色砂粒	良	外：斜位粗い条痕→縦位粗い条 痕	
36	242	深鉢	晩期末	Ⅲ—B—2・3	胴	淡黄	中 長石、石英	良	外：斜位二枚貝条痕	
36	243	深鉢	晩期末	Ⅲ—B—22	胴	にぶい橙	中 石英、長石	並		
36	244	深鉢	晩期末	2 流路	胴	灰黄褐	粗 長石、石英、褐色粒子	良	外：沈線内ミガキ、斜位縄文L R	
36	245	深鉢	晩期末	26住—1	胴	褐	細 石英、角閃石、褐色粒子、 雲母	並	外：縦位縄文LR？ 内：ミガ キ	
36	246	深鉢	晩期末	Ⅲ—B—11	胴	にぶい黄橙	中 石英、長石	並	外：横位縄文LR	
36	247	深鉢	晩期末		胴	にぶい黄橙	粗 長石、石英、褐色粒子	やや軟	外：横位縄文LR	
36	248	深鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石	並	外：ナデ、浮文 内：ミガキに 近いナデ	
36	249	壺	晩期末	5トレ	口縁	にぶい褐	中 石英、角閃石	良	外・内：横位ミガキ	
36	250	壺	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
36	251	壺	晩期末	5トレ	口縁	にぶい褐	中 石英、角閃石	良	外：少しミガキ 内：ミガキ	
36	252	壺	晩期末	2 住	口縁	にぶい黄橙	中 長石、褐色粒子、石英、角 閃石	並		
36	253	壺	晩期末	13住—1	口縁	橙	粗 石英、長石、褐色粒子、角 閃石	軟	外：浅い刻み	
36	254	壺	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	細 長石、石英、褐色粒子	軟		口唇少しくぼむ
36	255	壺	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子	やや軟		
36	256	壺	晩期末	1 流路西	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：浅い細密条痕	
36	257	壺	晩期末	26住—2	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟		
36	258	壺	晩期末	Ⅲ—B—17	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、褐色粒子	並		
36	259	壺？	晩期末	—	口縁	浅黄橙	粗 石英、長石、褐色粒子	良		
36	260	壺？	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	細 石英、角閃石	軟		
36	261	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄褐	粗 石英、長石	軟		
36	262	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 長石、石英、褐色粒子	良		
36	263	浅鉢1類	晩期末	Ⅲ—B—18	口縁	にぶい褐	細 角閃石、長石	良		
36	264	浅鉢1類	晩期末	6 住	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石	並		
36	265	浅鉢1類	晩期末	10住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石	並		
36	266	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：ミガキに近いナデ	
36	267	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	明赤褐	粗 長石、石英、角閃石	良		
36	268	浅鉢1類	晩期末	池西トレンチ	口縁	にぶい褐	粗 角閃石、石英、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
36	269	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄褐	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
36	270	浅鉢1類	晩期末	1 流路西	口縁	浅黄橙	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	口縁肥厚して刻 み
36	271	浅鉢1類	晩期末	18住	口縁	褐	細 石英、長石、角閃石	良	外・内：ミガキ	
36	272	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石	並	外・内：横位ミガキ	
36	273	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	粗 石英、長石	並	内：ミガキ	
36	274	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	灰褐	粗 石英、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	口縁赤彩付着
36	275	浅鉢1類	晩期末	Ⅲ—F—5	口縁	にぶい黄褐	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外：沈線内ミガキ 内：ミガキ	口縁肥厚して刻 み
36	276	浅鉢1類	晩期末	—	口縁	黒褐	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
36	277	浅鉢1類	晩期末	1 流路東	口縁	明黄褐	細 長石、石英	並	外：ミガキ	口縁肥厚する
36	278	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並		口縁浅く刻む
36	279	浅鉢1類	晩期末	1 流路	口縁	黒褐	細 石英	良		
36	280	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	赤褐	中 石英、長石、角閃石	並		口縁肥厚して面 取り
36	281	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい褐	粗 石英、長石、褐色粒子	並		
36	282	浅鉢1類	晩期末	2 流路	口縁	にぶい褐	粗 長石、角閃石、褐色粒子	良	外：横位ミガキ 内：器面が剥 離する	

図版番号	土器番号	器種	時期	遺構グリッド	部位	色調	胎土	焼成	調整施文技法	備考
36	283	浅鉢1類	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	細 石英、長石、角閃石	並	内：ミガキに近いナデ	
36	284	浅鉢1類	晩期末	13住—6	口縁	にぶい褐	中 石英、長石、褐色粒子	並		
36	285	浅鉢1類	晩期末	34住	口縁	明黄褐	粗 長石	やや軟		波頂部に刻み
36	286	浅鉢1類	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、褐色粒子	やや軟		焼成後穿孔、口縁部分的に肥厚
36	287	浅鉢1類	晩期末	池西トレンチ	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英、角閃石	並	外：横位ミガキ	
36	288	浅鉢1類	晩期末	9住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石	軟		
36	289	浅鉢1類	晩期末	—	口縁	橙	粗 長石、石英、角閃石	並		
37	290	浅鉢1類	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並		
37	291	浅鉢1類	晩期末	26住—8	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良	外：ミガキ	
37	292	浅鉢1類	晩期末	1流路	口縁	橙	中 長石、石英、角閃石	並		
37	293	浅鉢1類	晩期末	1住	口縁	にぶい褐	中 石英、長石、角閃石	並		
37	294	浅鉢1類	晩期末	ハタ	口縁	浅黄橙	中 長石、石英、角閃石	軟		
37	295	浅鉢1類	晩期末	27住—12	口縁	暗褐	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良		
37	296	浅鉢1類	晩期末	5住	口縁	橙	中 褐色粒子、石英、長石	良	外・内：ミガキ	
37	297	浅鉢1類	晩期末	2流路	口縁	灰黄褐	中 石英、長石、褐色粒子	並	外：隆帯上を刻む	
37	298	浅鉢2類	晩期末	1流路	口縁	にぶい褐	中 長石、角閃石、石英	良	外・内：ミガキ 低隆帯上を刻む。	赤彩のこる。種子圧痕
37	299	浅鉢2類	晩期末	6住	口縁	灰黄褐	細 石英、長石、角閃石	良	外・内：横位ミガキ、沈線内も磨く	
37	300	浅鉢2類	晩期末	13住—3	口縁	にぶい黄褐	粗 石英、長石、角閃石、褐色粒子	並	外：器面があげている 内：ミガキ	口縁肥厚する
37	301	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	灰白	粗 石英、長石、角閃石	良		
37	302	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	中 長石、石英、角閃石、黒色粒子	良	外：ミガキ	補修孔あり(焼成後穿孔)
37	303	浅鉢2類	晩期末	1流路西	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英	並		
37	304	浅鉢2類	晩期末	S F 01	口縁	灰褐	中 石英、長石、角閃石	並		
37	305	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	褐	粗 石英、角閃石、褐色粒子	並	外・内：横位ミガキ	口唇に浅い刻み
37	306	浅鉢2類	晩期末	1流路西	口縁	灰褐	中 長石、石英、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	口縁肥厚して刻む
37	307	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄褐	中 石英、長石	軟		
37	308	浅鉢2類	晩期末	1流路	口縁	灰褐	粗 石英、長石	良	外・内：ミガキ	
37	309	浅鉢2類	晩期末	1流路西	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英	並		
37	310	浅鉢2類	晩期末	1流路	口縁	にぶい黄褐	中 石英、長石	やや軟	外・内：ミガキ	
37	311	浅鉢2類	晩期末	Ⅲ—G—5	口縁	にぶい橙	粗 長石、石英、褐色粒子	並		
37	312	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄褐	粗 長石、石英、褐色粒子	並	外・内：ミガキ	
37	313	浅鉢2類	晩期末	Ⅲ—B—18	口縁	橙	中 石英	並		
37	314	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	細 長石、褐色粒子、石英、角閃石	並		一部肥厚
37	315	浅鉢2類	晩期末	—	口縁	にぶい黄橙	粗 石英	やや軟	外：横位ミガキ、沈線内も内：横位ミガキ	
37	316	浅鉢2類	晩期末	1流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、褐色粒子、角閃石	並		
37	317	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	褐	中 長石、石英、角閃石	良	外：横位ミガキ	
37	318	浅鉢2類	晩期末	Ⅲ—F—5	口縁	黒褐	中 石英、長石	並		
37	319	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、角閃石	並		
37	320	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	灰黄褐	中 長石、褐色粒子、石英	良	外・内：横位ミガキ	
37	321	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	橙	細 長石、石英、角閃石	並	口唇：刻み	赤彩が内外に残る
37	322	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄褐	中 長石、石英、褐色粒子、角閃石、黒色粒子	並		
37	323	浅鉢2類	晩期末	1流路	口縁	橙	中 石英、角閃石	並		
37	324	浅鉢2類	晩期末	1住付近	口縁	明褐	中 石英、長石、角閃石	並		
37	325	浅鉢2類	晩期末	7住	口縁	暗褐	細 石英、長石、褐色粒子、角閃石	良	外・内：ミガキ 口唇：刻み	焼成前穿孔
37	326	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	灰黄橙	粗 石英、長石	並		
37	327	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	灰白	中 長石、石英、褐色粒子	並		
37	328	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	粗 長石、石英	並		
37	329	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	灰黄橙	細 長石、石英、角閃石	並		

図版番号	土器番号	器種	時期	遺構グリッド	部位	色調	胎土	焼成	調整施文技法	備考
37	330	浅鉢2類	晩期末	13住	口縁	灰黄橙	中 長石、石英、褐色粒子、角閃石	良		
37	331	浅鉢2類	晩期末	26住—6	口縁	にぶい褐	細 長石、石英、角閃石、褐色粒子	良	外：ミガキ 内：ミガキに近いナデ	
37	332	浅鉢2類	晩期末	28住—2	口縁	にぶい褐	細 石英、長石、褐色粒子	並	外・内：ミガキ	
37	333	浅鉢2類	晩期末	1住付近	口縁	褐	細 長石、石英、角閃石	並	外・内：ミガキ	
37	334	浅鉢2類	晩期末	26住—10	口縁	極暗赤褐	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	並		
37	335	浅鉢2類	晩期末	7住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
37	336	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	橙	中 長石、石英、角閃石、	並	外・内：横位ミガキ	
37	337	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石	並	外・内：横位ミガキ	
37	338	浅鉢2類	晩期末	1流路西	口縁	にぶい褐	細 長石、石英、角閃石	良	口唇：ミガキ	
37	339	浅鉢2類	晩期末	28住—3	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、褐色粒子	良	外：ミガキ 内：ミガキに近いナデ	
37	340	浅鉢2類	晩期末	18住	口縁	橙	中 石英、長石、角閃石、褐色粒子	並	外・内：ミガキ	
37	341	浅鉢2類	晩期末	24住	口縁	橙	粗 褐色粒子	良	外：横位ミガキ	
37	342	浅鉢2類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子	やや軟		
37	343	浅鉢2類	晩期末	21住—2	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良	外：ミガキ	
37	344	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英	並	外：ミガキに近いナデ 内：ケズリー→ミガキに近いナデ	
37	345	浅鉢3類	晩期末	13住—2	口縁	にぶい褐	粗 長石、褐色粒子、角閃石、石英	並	外：ミガキ	
37	346	浅鉢3類	晩期末	8住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石	良	外：ミガキ	
37	347	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	良	やや軟	外：器面が剥離する	
37	348	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石	やや軟		
37	349	浅鉢3類	晩期末	13住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石	良		
37	350	浅鉢3類	晩期末	1住	口縁	暗赤褐	細 石英、長石、角閃石	良		
37	351	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	黒褐	細 石英、長石、角閃石	並		
37	352	浅鉢3類	晩期末	Ⅲ—G—23	口縁	浅黄橙	細 長石、石英	並		
37	353	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子	並		
37	354	浅鉢3類	晩期末	23住	口縁	褐灰	細 石英、長石、角閃石	良	外・内：横位ミガキ	
37	355	浅鉢3類	晩期末	18住	口縁	橙	中 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
38	356	浅鉢3類	晩期末	19住—2	口縁	にぶい黄褐	細 石英、長石、角閃石	良	外・内：ミガキ	
38	357	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	にぶい橙	中 長石、石英	やや軟		
38	358	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	褐	細 石英、長石	良		
38	359	浅鉢3類	晩期末	18住	口縁	黒褐	中 石英、長石、褐色粒子	並	外：横位ケズリー→ミガキ	
38	360	浅鉢3類	晩期末	3住	口縁	にぶい黄橙	粗 褐色粒子、石英、長石	良		
38	361	浅鉢3類	晩期末	8住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	口縁肥厚して刻み
38	362	浅鉢3類	晩期末	3住	口縁	にぶい黄橙	中 石英、角閃石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	363	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、角閃石、褐色粒子	軟		
38	364	浅鉢3類	晩期末	19住	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	365	浅鉢3類	晩期末	13住	口縁	褐	細 石英、長石、角閃石	良		
38	366	浅鉢3類	晩期末	5住	口縁	明褐	細 長石、石英、角閃石	並	外・内：横位ミガキ	
38	367	浅鉢3類	晩期末	24住	口縁	橙	細 石英、角閃石、褐色粒子	並		
38	368	浅鉢3類	晩期末	5住	口縁	にぶい黄褐	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	やや軟	外：ミガキ	
38	369	浅鉢3類	晩期末	5住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	やや軟		波頂に刻み
38	370	浅鉢3類	晩期末	5住	口縁	橙	細 長石、石英	良	外・内：横位ミガキ	
38	371	浅鉢3類	晩期末	ハタ	口縁	明赤褐	中 長石、石英、角閃石	やや軟		
38	372	浅鉢3類	晩期末	26住—9	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	373	浅鉢3類	晩期末	21住—5	口縁	橙	細 石英、角閃石、長石、褐色粒子	良	外：ミガキ 内：ミガキ	
38	374	浅鉢3類	晩期末	2流路	口縁	灰黄褐	細 石英、長石	良	外：縦位細密条痕	
38	375	浅鉢3類	晩期末	5住	口縁	橙	細 石英、長石、褐色粒子、角閃石	良	外：ミガキ	
38	376	浅鉢3類	晩期末	34住	口縁	橙	中 長石、石英	やや軟		

図版 番号	土器 番号	器種	時期	遺構グリッド	部位	色調	胎土	焼成	調整施文技法	備考
38	377	浅鉢3類	晩期末	22住	口縁	橙	細 石英、角閃石、褐色粒子	軟		
38	378	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい褐	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	379	有文浅鉢	晩期末	20住-1	胴	にぶい黄橙	細 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	良		
38	380	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい橙	粗 石英、長石、褐色粒子	並		
38	381	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	橙	細 石英	良	外・内：横位ミガキ	
38	382	有文浅鉢	晩期末	27住-2	胴	にぶい黄褐	中 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	383	有文浅鉢	晩期末	6 住-1	胴	にぶい黄橙	中 石英、角閃石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	384	有文浅鉢	晩期末	Ⅲ-G-23	胴	にぶい赤褐	粗 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
38	385	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい橙	粗 長石、石英	良	外：横位ミガキ、ヘラ刻み 内：横位ミガキ	
38	386	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい橙	細 長石、石英、角閃石、黒色 粒子	良		
38	387	有文浅鉢	晩期末	15住	胴	橙	細 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	沈線内に赤彩残 る
38	388	有文浅鉢	晩期末	18住	胴	赤褐	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良		
38	389	有文浅鉢	晩期末	22住	胴	黒褐	中 石英、角閃石	良	外：区画沈線文 内：横位ミガ キ	
38	390	有文浅鉢	晩期末	Ⅲ-B-12	胴	暗褐	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外・内：横位ミガキ	焼成後穿孔
38	391	有文浅鉢	晩期末	3 住	胴	にぶい褐	細 石英、角閃石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	焼成後穿孔、内 面にスス付着
38	392	有文浅鉢	晩期末	6 住-2	胴	にぶい黄橙	細 石英、褐色粒子、角閃石	良	外・内：ミガキ	
38	393	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子	良	外：櫛歯状工具による条線	
38	394	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	灰黄褐	中 長石、石英、褐色粒子	良	外：横位ミガキ 内：ミガキ	
38	395	有文浅鉢	晩期末	3 住	胴	にぶい黄橙	細 石英、角閃石、褐色粒子	良		
38	396	有文浅鉢	晩期末	22住	胴	暗赤褐	細 石英、角閃石	良	外：沈線内に条線あり 内：横 位ミガキ	
38	397	有文浅鉢	晩期末	—	胴	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
38	398	有文浅鉢	晩期末	34住	胴	にぶい橙	細 石英、角閃石	良	外・内：横位ミガキ	
38	399	有文浅鉢	晩期末	—	胴	浅黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	良	内：横位ミガキ	
38	400	有文浅鉢	晩期末	Ⅲ-B-7	胴	にぶい黄橙	中 石英、長石	良	外・内：ミガキ	
38	401	有文浅鉢	晩期末	21住-7	胴	橙	中 石英、角閃石、褐色粒子	良	外・内：ミガキ	
38	402	有文浅鉢	晩期末	22住	胴	橙	中 石英、褐色粒子	良	外：横位ミガキ	
38	403	有文浅鉢	晩期末	26住-7	胴	褐灰	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：ミガキ、半竹による連続刺 突	
38	404	有文浅鉢	晩期末	2 流路	胴	灰褐	細 石英、長石、角閃石	並	外・内：ミガキ	
38	405	浅鉢4類	晩期末	8 住	口縁	橙	細 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良	外・内：ミガキ	
38	406	浅鉢4類	晩期末	2 流路	口縁	明褐	粗 石英、長石	並	外：横位縄文LR 内：浅い沈 線	
38	407	浅鉢4類	晩期末	2 流路	口縁	灰黄褐	細 長石、褐色粒子、石英	良	内：ミガキ	
38	408	浅鉢4類	晩期末	表採	口縁	オリーブ黒	中 長石、石英、褐色粒子	良	外：横位縄文LR	
38	409	浅鉢4類	晩期末	Ⅲ-F-5	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英	並	内：ミガキ	
38	410	浅鉢4類	晩期末	1 流路西	口縁	にぶい褐	中 石英、長石	軟	口縁：横位縄文LR	
38	411	浅鉢4類	晩期末	1 流路西	口縁	黒褐	中 石英、長石	良	外：ミガキ 内：沈線、ミガキ	
38	412	浅鉢4類	晩期末	Ⅲ-B-16	口縁	黒褐	中 長石、石英、褐色粒子	良	外：ミガキ、横位縄文LR 内：ミガキ	
38	413	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい橙	中 長石、石英、褐色粒子、黒 色粒子	軟		
38	414	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	軟		外面に赤彩残る
38	415	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、角閃石	並		焼成後穿孔
38	416	無文浅鉢	晩期末	1 流路	口縁	にぶい黄	粗 石英、長石、角閃石	軟		
38	417	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	浅黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟		
38	418	無文浅鉢	晩期末	Ⅲ-B-17	口縁	灰褐	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外・内：ミガキ	
38	419	無文浅鉢	晩期末	Ⅲ-B-11	口縁	にぶい黄褐	中 石英、長石、褐色粒子、角 閃石	並		
38	420	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
38	421	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子、黒 色粒子	軟		
38	422	無文浅鉢	晩期末	1 流路	口縁	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	良		
38	423	無文浅鉢	晩期末	2 流路	口縁	にぶい黄橙	細 石英、長石、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	

図版 番号	土器 番号	器種	時期	遺構グリッド	部位	色調	胎土	焼成	調整施文技法	備考
38	424	無文浅鉢	晩期末	30住	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石、黒色 粒子	良		
38	425	無文浅鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	細 長石、石英、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
38	426	無文浅鉢	晩期末	Ⅲ-B-5	口縁	にぶい橙	細 石英、長石、角閃石	並		焼成前穿孔
38	427	無文浅鉢	晩期末	3・4住	口縁	にぶい橙	細 石英、角閃石、褐色粒子	やや軟		
38	428	無文浅鉢	晩期末	2流路	口縁	にぶい褐	粗 石英、長石	良	外・内：ミガキ	焼成前穿孔
38	429	無文浅鉢	晩期末	1流路	口縁	にぶい橙	中 長石	並		瘤状に肥厚
38	430	無文浅鉢	晩期末	—	口縁	にぶい橙	中 石英、角閃石	良	外・内：横位ミガキ	
38	431	無文浅鉢	晩期末	Ⅲ-G-17	口縁	にぶい褐	中 長石、石英	良		
38	432	無文浅鉢	晩期末	2流路	口縁	灰白	細 石英、長石、褐色粒子	並	外：横位ミガキ	口縁端部肥厚し、刻む
38	433	無文浅鉢	晩期末	21住-8	口縁	にぶい黄橙	中 石英、長石	良		
38	434	無文浅鉢	晩期末	29住	口縁	にぶい黄橙	細 長石、石英、褐色粒子	良	外・内：横位ミガキ	
39	435		晩期末	1流路東	底	橙	粗 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：条痕	
39	436		晩期末	1流路西	底	橙	中 石英、長石、角閃石	並	外：ヘラ？沈線	
39	437		晩期末	2流路	底	橙	中 長石、石英、褐色粒子	並	外：櫛園状工具による条線 内：ケズリ	
39	438		晩期末	Ⅲ-G-5	底	褐灰	細 石英、長石	良	外：ミガキ	
39	439		晩期末	2流路	底	にぶい黄橙	粗 石英、長石	並	外：縦位細文LR	
39	440		晩期末	1流路西	底	褐灰	中 長石、角閃石、石英	良	外・内：ミガキ	
39	441		晩期末	Ⅲ-G-5	底	にぶい褐	中 石英、長石、褐色粒子	軟	かすかに網代痕の痕跡？	
39	442		晩期末	Ⅲ-B-6	底	にぶい黄橙	中 長石、石英、褐色粒子、黒 色粒子	並	外：横位ケズリー横位ナデ	
39	443		晩期末	2流路	底	にぶい黄橙	細 長石、石英、褐色粒子	軟		
39	444		晩期末	Ⅲ-B-13	底	にぶい黄橙	粗 長石、石英	良	底：網代痕	
39	445		晩期末	2流路	底	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並	外：細密条痕	
39	446		晩期末	29住	底	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	やや軟	底：網代痕	
39	447		晩期末	2流路	底	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並		
39	448		晩期末	1流路東	底	橙	中 石英、長石、褐色粒子	軟		
39	449		晩期末	Ⅲ-G-17	底	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	やや軟	底：網代痕	
39	450		晩期末	2流路	底	黒	細 石英、長石	並	底：網代痕	
39	451		晩期末	1流路西	底	にぶい褐	中 石英、長石	並	外・内：ミガキ	
39	452		晩期末	2流路	底	橙	中 長石、石英	軟	外：縦位細密条痕	
39	453		晩期末	2流路	底	にぶい橙	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並	外：細密条痕	
39	454		晩期末	1流路	底	にぶい黄橙	細 長石、石英、角閃石、黒色 粒子	並	外：縦位細密条痕→平行沈線 底：網代痕	
39	455		晩期末	27住-8	底	にぶい黄橙	中 石英、長石、角閃石	並		
39	456		晩期末	2流路	底	明褐	細 長石、石英、褐色粒子	やや軟	底：網代底	
40	457		晩期末	2流路	底	淡黄	粗 長石、褐色粒子	やや軟	底：広葉樹の葉痕	
40	458		晩期末	2流路	底	橙	中 石英、長石、黒色粒子	軟		
40	459		晩期末	2流路	底	明褐	細 石英、長石、褐色粒子	並		
40	460		晩期末	1流路	底	にぶい橙	中 長石、石英、褐色粒子、角 閃石	やや軟	底：広葉樹の葉痕	
40	461		晩期末	流路	底	にぶい黄橙	粗 長石、石英、褐色粒子、角 閃石	軟		
40	462		晩期末	Ⅲ-A-25	底	にぶい黄橙	中 石英、長石、褐色粒子	並	底：広葉樹の葉痕	
40	463	土偶	晩期末	2流路	顔	灰黄褐	細 石英、長石、角閃石	並	外：半竹？による刺突 内：剥離	
40	464	土偶	晩期末	2流路	顔	灰黄褐	細 長石、石英、角閃石、砂粒	良	外：ヘラ刻み、赤彩が残る 内：剥離	
40	465	土偶	晩期末	2流路	顔	にぶい橙	細 石英、角閃石、長石、褐色 粒子	並		焼成前穿孔
40	466	土偶	晩期末	2流路	肩	にぶい黄橙	中 石英、角閃石、長石	並		
40	467	土偶	晩期末	2流路	足	にぶい赤褐	細 長石、石英、角閃石、砂粒	やや軟	外：刺突	
40	468	土偶	晩期末	7住	胴・足	明黄褐	中 石英、長石、角閃石、褐色 粒子	並		
40	469	小型土器	晩期末	I-U-19	底	にぶい橙	細 長石、石英、角閃石	良	外：横位ミガキ	

表13 第3章 大日ノ木遺跡 土器観察表 (弥生後期～古墳前期)

図版番号	地点名	土器番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
41	1住	1	壺	口頸	24.8				黄褐	口縁部ヘラミガキ、頸部ハケ	口縁部ヨコハケ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、頸部ヘラミガキ	
41	〃	2	壺	口縁	14				明赤褐	ハケ	ヘラナデ	
41	〃	3	高坏	ほぼ完形	16.9	11.1	13.8		橙	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、坏部放射状ヘラミガキ、脚部ナデ	
41	3住	1	甕	口頸1/5	(25.2)				赤褐	施文	ヘラミガキ	折返し口縁
41	4住	1	壺	口縁1/4	(15.8)				赤褐	口頸部ハケ→口端部ヨコミガキ	口縁部ヨコミガキ	
41	〃	2	甕	底	8.6				にぶい黄褐	タテミガキ		
41	〃	3	有孔鉢	底2/5	(5.2)				赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
41	〃	4	高坏	脚2/5					明赤褐	ヘラケズリ	ハケ	外面赤彩、円形四方二段透し
41	5住	1	蓋	つまみ～天井	つまみ4.9				明赤褐	ハケ	ハケ	つまみに1孔
41	〃	2	小形甕	口縁～胴	9.1				にぶい黄褐	施文	口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラナデ	
41	〃	3	小形甕	口縁～胴	12				黒褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
41	〃	4	小形甕	口縁～胴2/3	(13.4)				褐	施文→胴下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	
41	〃	5	甕	胴1/4					橙	施文	ヘラケズリ→頸部ヘラミガキ	
41	〃	6	甕	底1/2		(9.8)			明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
41	〃	7	高坏	坏1/4		(21.2)			暗赤褐	口縁部ヨコ、ナナメミガキ、坏部体部ナナメミガキ	ヨコミガキ	両面赤彩、口縁4突起
42	〃	8	高坏	坏1/4		(20.0)			赤	ヨコ、ナナメミガキ	ヨコミガキ	両面赤彩
42	〃	9	高坏	坏1/6					赤褐	口縁部ヨコミガキ、坏部体部ナナメミガキ	ヨコミガキ	両面赤彩
42	7住	1	直口壺	口頸1/4 胴1/4	(5.4)				にぶい赤褐	口頸部タテミガキ、胴部ヘラミガキ	口頸部ヨコミガキ、胴部ハケ→ヨコナデ	口頸両面赤彩、胴外面赤彩
42	〃	2	壺	底3/4		(8.4)			明褐～褐灰	ヘラミガキ	ハケ	
42	〃	3	小形甕	胴1/2					黄褐	施文→胴下部～底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
42	〃	4	小形台付甕	口～台下1/2	(10.4)	(8.4)	14.7		赤褐	施文→胴下部～台部ヘラミガキ	体部ヘラミガキ、台部ハケ→ヘラミガキ	
42	〃	5	甕	口縁～胴1/3	(14.4)				赤褐	施文	ヘラミガキ	口唇刻目
42	〃	6	甕	口頸1/2	(19.6)				赤褐	施文	ヘラミガキ	
42	〃	7	片口鉢	完形	11.6	8.1	12.3		明赤褐	ハケナデ	ハケナデ	
42	〃	8	高坏	坏1/4					赤褐	口縁部ヨコミガキ、坏部体部タテミガキ	ヨコミガキ	両面赤彩
42	〃	9	高坏	坏1/4	(17.2)				赤褐	ヨコ・ナナメミガキ	ヨコミガキ	両面赤彩
42	8住	1	壺	口縁～肩1/3	(25.1)				明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	T字文4単位
42	〃	2	甕	口縁～胴2/3	(19.5)				明褐	施文	ヘラミガキ	
42	〃	3	高坏	坏底～脚					赤褐	坏部ヨコミガキ、脚部タテミガキ	坏底部ヨコミガキ、脚部ナデ	坏両面・脚外面赤彩
42	〃	4	高坏	坏底～脚					赤	タテミガキ	ナデ	坏両面・脚外面赤彩
42	〃	5	高坏	坏底～脚					暗赤	脚上部タテ・ヨコ・ナナメミガキ、脚中部～脚裾タテミガキ	坏底部ヘラミガキ、脚部ナデ	坏両面・脚外面赤彩
42	12住	1	小形甕	口縁～胴					赤褐	ハケ→ナデ	ナデ	
42	13住	1	甕	口頸	14.6				オリーブ褐	口縁部ヨコナデ・胴部ハケ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	
42	〃	2	甕	口頸	15.8				黄褐	ヨコナデ、口縁外面に刻文?	ヘラミガキ	
42	〃	3	甕	口頸1/4	(12.5)				黄褐	ハケ、口縁端部ヨコナデ	ハケ、口縁端部ヨコナデ	
42	〃	4	甕(S字)	口縁～胴1/6	(13.2)				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ、頸部屈曲部に一条の沈線状ヘラ調整がめぐる、胴部ハケ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ→ヘラナデ	胎土：細かい窯母
42	〃	5	高坏	脚5/6		11.4			にぶい赤褐	ヘラナデ	ヘラナデ	
42	〃	6	小型器台	受部1/2					明赤褐	口縁ヨコナデ	放射ミガキ	
42	〃	7	鉢	口～底1/3	(12.8)	4.3	6.0		明赤褐	ハケ	ハケ	
42	〃	8	鉢	胴2/3	(16.3)				明赤褐	ハケ	ハケ	口縁折返し、口縁端部面取り
42	〃	9	ミニチュア	完形					明褐			手捏ね
42	15住	1	小型器台	受部					褐	ナデ	ヘラミガキ	
42	18住	1	片口鉢	口～体部1/8					暗赤	ヘラミガキ	ヘラミガキ	両面赤彩
42	〃	2	有孔鉢	底		4.1			明赤褐	ヘラナデ	ナデ	
42	〃	3	ミニチュア	完形	5.3	3.0	5.3					手捏ね
42	23住	1	壺	口頸1/3					明赤褐	施文→ヘラミガキ	口頸部ヘラミガキ、胴部ハケ→ヨコナデ	T字文5単位
42	〃	2	壺	口～肩	9.8				明赤褐	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ→タテミガキ→頸部ヨコミガキ→胴部ナナメミガキ	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ→タテミガキ→頸部ヨコミガキ→胴部ヨコヘラナデ	口唇刻目、胎土：石英

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器 種	残 存	法 量 (cm)				色 調	外 面 整 形	内 面 整 形	備 考
					口径	底径	器高	内底				
42	23住	3	(瓢) 壺	胴~底1/2		4.4			にぶい褐	胴部タテミガキ、底部ヨコミガキ、胴部上位にネガティブ楕円文1	底部~胴下半ハケ→胴上半ナデ	わずかな凹み底
43	〃	4	小形台付甕	胴~台		6.9			橙	ヘラミガキ	胴部ヘラミガキ、台部ナデ	
43	〃	5	小形台付甕	完形	8.4	6.7	13.7		橙	口縁部ヨコナデ→頸部~台部ハケ	口~胴部ヘラミガキ、台部ハケ	
43	〃	6	甕	ほぼ完形	32.5	8.0	(53.4)		赤褐	口縁部ヨコハケ、胴~胴ナメハケ→胴下部ヘラミガキ、頸部襷状文は15条一組で一周10単位	口縁部ヨコハケ→ヘラミガキ、胴部ナメハケ→粗いヘラミガキ	底部接合せず
43	〃	7	甕	口~胴	22.2				黄橙~赤褐	口縁部ヘラミガキ、胴部ナメハケ、頸部襷状文13条一組で一周8単位	ハケ→口頸部ヘラミガキ、胴部粗いヘラミガキ	
43	〃	8	甕	ほぼ完形	21.7	7.9	31.2		赤褐	口縁部ヨコハケ、胴部ナメハケ→胴下半ヘラミガキ	口縁部ヨコハケ→口頸部ヘラミガキ、胴部ナメハケ→粗いヘラミガキ	
43	〃	9	甕	口縁1/3	(25.2)				橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁上方に拡張、胎土：金雲母
43	〃	10	底部穿孔甕	ほぼ完形	25.3	11.0	33.1		赤褐	ナメハケ→施文→胴下部ヘラミガキ	ヘラミガキ	焼成前穿孔
43	〃	11	小形甕	ほぼ完形	14.4	7.0	18.3		橙	口縁折返し肥厚→ユビオサエ、胴部施文→胴下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	胎土：石英・雲母
43	〃	12	小形甕	ほぼ完形	12.2	5.6	15.1		黒褐	ハケ→施文→胴下半~底面ヘラミガキ、口唇部襷状文、頸部襷状文一周4単位	ハケ→ヘラミガキ	胎土：雲母
43	〃	13	小形甕	口頸	15.7				明黄褐	口縁部ヨコナデ、頸部襷状文2単位	ヘラミガキ	
43	〃	14	小形甕	口~胴1/3	(14.0)				赤褐	胴部ナメハケ→胴下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	
44	〃	15	小形甕	上半1/2 下半完形	(11.8)	4.9	14.6		橙	口縁部ヨコナデ、胴下半ヘラミガキ	口縁ヨコナデ→ヘラミガキ	
44	〃	16	小形甕	上半4/5 下半完形	(12.2)	5.4	12.5		橙	口唇ヘラミガキ、ハケ→胴下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	
44	〃	17	小形甕	口1/6胴底2/3	(13.1)	5.8	17.3		橙	口縁部ヨコナデ→施文→胴下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	
44	〃	18	小形甕	口~底3/4	11.6	5.7	13.2		橙	施文→胴下半ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ	
44	〃	19	小形甕	ほぼ完形	12.0	5.4	13.7		橙	口縁部ヨコナデ→施文→胴下半ヘラミガキ、底面静止ヘラケズリ	ヘラミガキ、底面指頭圧底	
44	〃	20	高坏	ほぼ完形	22.8	14.1	16.8		赤褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚下部ヘラミガキ	口唇4突起
44	〃	21	高坏	脚端部欠	16.8				にぶい褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚ハケ→ナデ	円形六方透し、胎土：石英
44	〃	22	高坏	ほぼ完形	17.3	13.3	15.3		橙	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	円形四方透し
44	〃	23	高坏	坏1/3脚完形	(18.1)	10.5	13.0		明赤褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ハケ→ナデ	円形四方二段透し、胎土：石英
44	〃	24	高坏	ほぼ完形	18.2	13.2	13.4		にぶい赤褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ヨコケズリ→ナデ	
44	〃	25	高坏	坏	17.1				にぶい黄褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ	胎土：石英・雲母
44	〃	26	高坏	脚端欠	11.9				褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ハケ	円形四方二段透し、胎土：石英
44	〃	27	高坏	ほぼ完形	12.2	8.5	10.1		黒褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ヘラナデ	脚端部面取り
44	〃	28	高坏	坏1/2	16.0				黄褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	坏部両面赤彩、胎土：石英・雲母
44	〃	29	高坏	脚		19.5			にぶい褐	ハケ→ヘラミガキ	ハケ→下半部ヘラミガキ	円形四方二段透し、胎土：石英・雲母
44	〃	30	小型器台	受1/3 脚ほぼ完形	(9.9)	11.1	9.9		にぶい褐	ヘラミガキ	受部ヘラミガキ、脚部ヨコ方向ナデ	円形四方二段透し
44	〃	31	蓋	ほぼ完形	11.0		2.9		にぶい赤褐	つまみ部ヘラナデ、体部ヘラミガキ、端部ヘラケズリ	つまみ部ヘラナデ、体部ヘラナデ→ヘラミガキ	
44	〃	32	有孔鉢	口~底4/5	22.3	5.1	13.6		赤褐	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ヘラミガキ、口唇面取り状ヘラナデ	ヘラミガキ	
44	〃	33	鉢	口~底1/2	(17.0)	(5.0)	7.8		橙	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ	ヘラミガキ	
44	〃	34	鉢	口~底1/2	(15.8)	4.5	6.9		明赤褐	体部ヘラケズリ→ハケ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ハケ→ヘラミガキ	
44	〃	35	片口鉢	ほぼ完形	17.1	4.8	8.2		明赤褐	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
45	〃	36	片口鉢	完形	16.0	5.3	7.4		明赤褐	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ	ヘラミガキ	
45	〃	37	片口鉢	ほぼ完形	15.6	4.4	6.8		橙	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	内面全面黒色
45	〃	38	片口鉢	口~底1/2	(17.8)	5.1	7.2		にぶい赤褐	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
45	〃	39	片口鉢	ほぼ完形	13.3	4.1	6.9		橙	体部ヘラミガキ、底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
45	〃	40	片口鉢	口~体2/3	(13.6)				にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
45	〃	41	ミニチュア	完形	3.2	2.4	4.3		にぶい橙	ヘラナデ	ヘラナデ	
45	〃	42	ミニチュア	底		2.0			橙	ヘラミガキ	ナデ	
45	〃	43	ミニチュア	底					橙	ナデ	ナデ	
45	27住	1	甕	口~胴1/4	(20.6)				暗赤褐	施文	ヘラミガキ	
45	〃	2	小形甕	口~胴1/4	(10.4)				暗褐	施文	口~胴上部ヨコ方向ナデ、胴下部ヘラナデ	
45	〃	3	鉢	口~底1/8			7.1		暗褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
45	28住	1	壺	胴~底1/3		5.9			赤褐	ヘラミガキ	ハケ	
45	〃	2	甕	口~底1/3	(21.6)	(7.6)			暗赤褐	胴部ハケ→施文→胴下半ヘラミガキ	ヘラミガキ	
45	〃	3	小形甕	頸~底2/3		4.5			褐	胴下部ヘラミガキ	ヘラナデ	胎土：石英
45	30住	1	片口鉢	ほぼ完形	18.1	4.9	7.1		赤橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	

図版番号	地点名	土器番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
45	35住	1	小形甕	口~底1/3	(6.6)	(3.2)			赤褐	胴部ハケ	ハケ	
45	〃	2	蓋	完形	5.4		1.6		明黄褐	ナデ	ナデ	孔4
45	〃	3	器台	口~底2/3	15.4	11.4	10.1		橙褐	口縁部ヨコナデ→坏部ヘラミガキ→胴部ハケ→脚端部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ→坏部ヘラミガキ→脚端部ヨコナデ	有段口縁高环形、穿孔径は大きい
45	〃	4	小型器台	ほぼ完形	10.6	10.5	11.4		にぶい赤褐	坏部ヘラミガキ、胴上部ヨコナデ→脚中下部ハケ→脚端部粗いヨコミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ハケ	円形三方1段透し
45	〃	5	高坏	坏	19.3				赤褐	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ	口縁端4突起
45	〃	6	片口鉢	完形	21.1	6.0	10.1		赤	ヘラミガキ、底面ヘラケズリ	ヘラミガキ	両面赤彩
45	38住	1	小形鉢	ほぼ完形	10.0	3.6	5.1		明褐	底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
46	53坑	1	台付甕	口~台2/5	(15.9)	(8.9)			にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、台端部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ、台端部ヨコナデ	口、胴、台は接合しない
46	〃	2	高坏	脚		13.8			橙	ヘラミガキ	脚上部ヘラケズリ・中部ナデ・下部ヘラミガキ	外面赤彩
46	〃	3	高坏	脚		13.7			橙	ヘラミガキ	脚上部ヘラケズリ・中部ヘラナデ・下部ヘラケズリ	
46	SF1	1	台付甕	口縁~胴1/4	(16.9)				にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ハケナデ	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラケズリ→胴部ヘラナデ(ごく弱いハケ状痕跡もある)	胎土：石英
46	〃	2	ミニチュア	頸~底2/3		2.6			橙		胴部ヘラケズリ→胴下部ナデ、底部ナデ	甕形
46	2流路	1	壺	頸~底1/2		8.6			にぶい褐	ヘラミガキ、底面ナデ	ヘラミガキ	胎土：石英・金雲母
46	〃	2	壺	口縁~底5/6	19.4				橙	口縁部ナデ→頸部ヘラミガキ、胴部ナデ→胴中・下部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	
46	〃	3	壺	口縁~胴1/3	22.8				橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	口縁部ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、胴部ハケ	頸部直下T字文4単位、胎土：石英
46	〃	4	甕	口縁~底2/3	24.4	11.4	36.9		明赤褐	胴下部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ→ナデ	口縁部ヘラミガキ、胴上部ヘラミガキ→胴部ナデ	頸部彫文刻止部(2回止)9箇所11状線
46	〃	5	甕	口縁~底2/3	19.8	7.1	26.2		明赤褐	胴中・下部ハケ、胴端部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	口縁部ヨコハケ→ヘラミガキ、胴部ハケ	頸文横走文9状
46	〃	6	甕	ほぼ完形	21.4	7.7	29.0		橙	施文→胴下部ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ、胴部ナデ→ヘラミガキ	胎土：金雲母
46	〃	7	甕	口縁~底4/5	18.1	6.3	27.3		橙	口縁部ハケ→ヘラミガキ、胴上・中部ハケ、胴下部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ→ナデ	口縁部ハケ→ヘラミガキ、胴上部ハケ、胴中・下部ナデ、底部ナデ	
47	〃	8	小形甕	口縁~底2/3	(9.4)	5.9	13.3		橙	ヘラミガキ、底部ナデ	ヘラミガキ	外面赤彩、胎土：石英
47	〃	9	小形甕	口縁~底2/3	(7.4)	5.6	11.8		にぶい黄橙	ハケ、底部ヘラケズリ	口縁ヨコナデ→頸部ヘラケズリ→胴部ハケ	
47	〃	10	台付甕	口縁~胴1/6					にぶい黄橙	口縁ヨコナデ→胴上ハケ	口縁ヨコナデ、胴上ヘラナデ	口端部凹状にくぼむ(ハケ状工具で回転調整)
47	〃	11	台付甕	口縁~胴1/3	(14.4)				明褐	ハケ	ハケ	全体的に仕上げがあら、胎土：石英・金雲母
47	〃	12	台付甕	甕底~台1/4		(10.4)			明黄褐	台部ハケ、台下部ナデ	底部ナデ、台部ハケ	
47	〃	13	高坏	坏3/4	24.2				明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	両面赤彩
47	〃	14	高坏	坏2/3	(20.0)				明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	両面赤彩
47	〃	15	高坏	坏2/3	24.2				明赤褐	ヘラミガキ(不明瞭)	ヘラミガキ	両面赤彩
47	〃	16	高坏	坏底~脚3/4		(12.5)			橙	ヘラミガキ	坏底部ナデ、脚部ヘラケズリ→ナデ	外面赤彩
47	〃	17	高坏	脚1/3		(14.8)			橙	ヘラミガキ	脚部ヘラケズリ、脚端部ナデ	外面赤彩
47	〃	18	高坏	坏底~脚					橙	ヘラミガキ	坏底部ナデ、脚部ハケ	脚外面、坏両面赤彩
47	〃	19	高坏	脚		11.2			明褐	ナデ	脚上部ユビケズリ?→脚ナデ	円形スカシ3、胎土：石英・金雲母
47	〃	20	高坏	脚1/2					明赤褐	ヘラケズリ→ナデ	ヘラケズリ	
47	〃	21	高坏	脚~裾					明褐	ヘラミガキ	脚ヘラケズリ、裾ナデ	
47	〃	22	小形器台	坏~脚	8.4				橙	脚部ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	脚端部残存わずかな為糖部不明
47	〃	23	有孔鉢	完形	22.1	5.3	11.3		赤褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ、下部ハケ→ヘラミガキ	口唇沈線状の凹み
47	〃	24	片口鉢	ほぼ完形	14.4	4.0	6.8		明褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	両面赤彩、胎土：石英
47	〃	25	鉢	口縁~底1/2	16.0		5.6		明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
47	〃	26	ミニチュア	ほぼ完形	6.4	3.4	7.5		橙	口頸部ヨコナデ、胴上・中部ナデ→胴下部ヘラケズリ、底部ナデ	口頸部ヨコナデ、胴部ナデ	ミニチュア甕
47	〃	27	ミニチュア	口縁~底1/2	(4.0)	(4.1)	3.3		にぶい黄橙			摩滅
47	遺構外	1	甕	口1/胴1/8	14.4				橙	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、口縁端部面取り	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	北陸系
47	〃	2	甕	口縁~胴1/4	(14.8)				明赤褐	口頸ハケ→頸ナデ→胴上部ハケ	ヘラミガキ	外面胴上部爪形文あり
47	〃	3	蓋	ほぼ完形	17.8		6.0		赤褐	天井部ヘラケズリ、体部ヘラミガキ	ハケ	造りは甕底部
47	〃	4	片口鉢	ほぼ完形	15.2	6.8	4.7		明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	両面赤彩
47	〃	5	ミニチュア	口~底2/3	7.8	2.2	5.2		橙	ハケ	ナデ	

表14 第3章 大日ノ木遺跡 土器観察表（古墳時代後期～平安時代）

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
48	2住	1	須惠高台杯	完形	14.6	10.1	4.2		浅黄	口ロナデ、底部回転ヘラケズリ	口ロナデ	軟質の須惠器
〃	6住	1	須惠杯	ほぼ完形	11.9	7.4	4.4	7.0	灰	口ロナデ、底部回転ヘラケズリ→一部静止ヘラケズリ	口ロナデ	
〃	〃	2	須惠杯	口～底1/3	(12.6)	(7.8)	3.5	8.0	灰オリーブ	口ロナデ、底部ヘラナデ	口ロナデ	
〃	〃	3	須惠鉢	口1/6底完 存	(18.5)	11.3	16.1		青灰	体部口ロナデ、底部側面タ タキ・下面ナデ	口ロナデ	底部棒状工具による 刺突
〃	9住	1	甕	口～胴1/4	(19.2)				橙	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ・ ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	
〃	11住	1	須惠杯	完形	11.9		3.2		灰オリーブ	口ロナデ、底部回転ヘラケ ズリ	口ロナデ	底部外面ヘラ記号
〃	〃	2	須惠杯	口～底1/3	(12.4)	(6.2)	3.6		灰	口ロナデ、底部回転ヘラケ ズリ→中心部静止ヘラケズリ	口ロナデ	
〃	〃	3	須惠短頸壺	口～底3/4	(7.4)	5.0	7.9		灰	口ロナデ、底部ヘラナデ	口ロナデ	
〃	17住	1	須惠盤	口～底1/8					明黄褐	口ロナデ	口ロナデ	実測図の器形信頼 度低い
〃	19住	1	杯	口～底2/3	12.6	4.8	4.2		黄褐	ヨコ方向ナデ→ヘラミガキ	ヨコ方向ナデ→ヘラミガキ	
〃	〃	2	内黒杯	ほぼ完形	14.4	5.0	4.3		褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	3	甕	口～胴1/3	14.4				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ→口～胴部ヘ ラミガキ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ、 胴部ナデ	
〃	〃	4	甕	口～胴3/4	16.8				明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナ デ	
〃	〃	5	鉢	ほぼ完形	12.0	6.6	11.0		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナ デ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	
〃	〃	6	甕	ほぼ完形	16.9	5.9	11.5		黄褐	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	
49	20住	1	両黒塊	底部		8.4			褐灰	ヘラミガキ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	
〃	21住	1	須惠杯	口～底3/4	14.2		4.9		暗青灰	口ロナデ、底部回転ヘラケ ズリ	口ロナデ	
〃	〃	2	須惠杯	口～底3/4	12.0	7.9	2.9		暗青灰	口ロナデ、底部回転ヘラケ ズリ	口ロナデ	底面ヘラ記号
〃	〃	3	須惠杯	ほぼ完形	12.0	5.8	5.2		明オリーブ灰	口ロナデ、底部回転ヘラ切 り→静止ヘラケズリ	口ロナデ	
〃	〃	4	須惠杯	口～底4/5	2.9		4.0		灰白	口ロナデ、回転ヘラ切り ナデ	口ロナデ	
〃	〃	5	内黒杯	口～底2/3	13.2		3.9		赤褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	6	内黒杯	口～底1/3	(13.6)		4.2		褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	7	内黒杯	ほぼ完形	13.1		4.5		褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	8	内黒杯	口～底1/2	15.2		5.1		褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	9	内黒杯	口～底1/2	13.7		3.9		赤褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	10	内黒杯	口～底1/4	(13.8)				明褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	11	内黒杯	ほぼ完形	13.7		4.3		にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ、体上部かるい ユビナデ、体下部～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	12	内黒高杯	杯1/4	(15.8)				橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケ ズリ→粗いヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	13	鉢	ほぼ完形	6.8	6.3	5.8		にぶい褐	口縁部ヨコナデ、体部幅広い ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部粗いヘ ラミガキ	
〃	〃	14	須惠鉢	底部		9.0			青灰	口ロナデ	口ロナデ	底に半截竹管状工 具による刺突多数
〃	〃	15	須惠長頸壺	胴～底1/4		(8.1)			灰	口ロナデ→胴下部回転ヘラケズ リ、肩部棒状工具による刺突	口ロナデ	
〃	〃	16	須惠長頸壺	胴～底1/3					暗灰	口ロナデ→胴下部回転ヘラ ケズリ	口ロナデ	
〃	〃	17	甕	ほぼ完形	18.8	5.2	28.4		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナ デ	
〃	〃	18	甕	ほぼ完形	18.3	4.6	32.6		暗赤褐	口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘ ラケズリ	ハケ→口縁部ヨコナデ	
〃	〃	19	甕	ほぼ完形	20.1	7.8	39.4		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	
〃	〃	20	甕	ほぼ完形	20.9	6.7	33.3		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘ ラケズリ	ハケ	
50	〃	21	小形甕	口～底3/4	16.4	7.1	10.4		橙	口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	
〃	〃	22	小形甕	ほぼ完形	12.7	4.5	11.0		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナ デ	
〃	〃	23	鉢	ほぼ完形	10.9	6.1	10.3		明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘ ラケズリ→粗いヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナ デ	
〃	〃	24	鉢	口～底1/3	(10.2)	5.2	11.7		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴～底部ヘ ラケズリ	ヘラナデ→口縁部ヨコナデ	
〃	22住	1	内黒杯	口～底1/4	(15.4)	6.0	4.9		にぶい黄褐	口ロナデ、底部ヘラケズリ	口ロナデ→口縁部ヘラミガ キ、底部暗文風ヘラミガキ	
〃	〃	2	内黒杯	ほぼ完形	13.0	5.7	4.5		明褐	口ロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	3	甕	口頸1/3	(21.8)				明赤褐	口ロナデ	口ロナデ	口縁端面取り
〃	〃	4	甕	口～底1/2	21.2	3.6	26.0		明赤褐	胴部タテハケ→口ロナデ→ 胴下部ヘラケズリ	口ロナデ→胴下部ユビナデ	口縁端面取り
〃	24住	1	須惠杯	口～底1/2	13.0	6.4	4.1		灰	口ロナデ→体下部回転ヘラ ケズリ→底部静止ヘラケズリ	口ロナデ	
〃	〃	2	須惠杯	ほぼ完形	13.6	5.9	4.6		灰黄	口ロナデ→体下～底部回転 ヘラケズリ	口ロナデ	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
50	"	3	須恵平瓶	天井1/2					黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
50	24住	4	小形須恵器	口~体1/4	(9.0)				灰	ロクロナデ→体下部ヘラケズリ	ロクロナデ	縦長の透しあり
"	"	5	甕	口~胴1/5	(17.6)				にぶい橙褐	ロクロナデ→粗いヘラミガキ	ロクロナデ	
"	"	6	須恵高坏	口~脚端 4/5	15.6	11.6	11.9		灰	ロクロナデ→坏部底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	26住	1	須恵坏蓋	天~口1/3	(12.0)	(5.4)			暗青灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	完形	11.0	6.5	3.9		灰	ロクロナデ、底面回転ヘラ切り	ロクロナデ	
"	"	3	内黒坏	ほぼ完形	11.6		4.5		黄褐	底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/3	(13.2)	(4.0)	(4.6)		黒褐	体下半~底部ヘラケズリ→上半部ヨコナデ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒坏	口~底1/2	(14.0)				黄褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒坏	口~底1/3	(12.6)		(4.2)		明褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	7	内黒坏	口~底1/3	(14.0)				明赤褐	ヘラケズリ→丁寧なナデ	ヘラミガキ	
"	"	8	内黒鉢	体~底1/2					にぶい黄褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	9	小形甕	口~底1/2	12.8	5.6	13.0		赤褐	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラケズリ→胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴~底ヘラナデ→底部ヘラミガキ	
"	"	10	小形甕	口~底2/3	13.3	5.7	12.4		暗赤褐	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ハケ	
"	"	11	小形甕	口~底2/3	12.2	5.4	9.9		赤褐	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
51	"	12	甕	口~底1/2	(17.8)	(10.2)	20.4		明赤褐	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ	
"	"	13	甕	口~胴2/3	19.9				明赤褐	ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラナデ	
"	"	14	甕	底部		5.9			褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	15	須恵提瓶	口頸欠					明青灰	口頸部ロクロナデ→体部回転ヘラケズリ・カキメ	ロクロナデ	
"	31堅	1	須恵坏	口~底1/3	(12.3)	(6.2)	4.3		灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	32住	1	須恵坏	口~底4/5	(14.0)	6.8	5.1	8.7	暗灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵高台坏	口~底4/5	14.8	11.0	4.4		灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	3	須恵甕	口~底1/6					褐	タタキ→ロクロナデ→下部ヘラケズリ	ロクロナデ、下端部ヘラケズリ	
"	"	4	甕	口~底2/3	21.2	8.0	33.5		明褐	口縁部ヨコナデ→胴上半ハケ→胴下半ヘラケズリ	口縁部ハケ、胴部ヘラナデ	
"	"	5	甕	ほぼ完形	24.0	7.6	35.9		褐	口縁部ヨコナデ→胴部ハケ→胴中部タタキ後ナデ→胴下部ヘラナデ、底部ヘラナデ	口縁部ハケ、胴部ヘラナデ	上下別成形か
52	34住	1	須恵坏蓋	天~口1/2	(14.9)		(2.4)		黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	口~底1/3	(13.1)	10.5	4.6	8.3	灰黄褐	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	一部明赤褐色
"	"	3	須恵坏	ほぼ完形	11.8	9.0	4.3	7.9	黄灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	一部橙色
"	"	4	須恵甕	口~底1/4	(15.9)		(24.6)		暗灰黄	口縁部ヨコナデ、胴~底部タタキ	口縁部ヘラナデ・ユビオサエ、胴部ヘラナデ	一部赤褐色
"	"	5	甕	口~底3/4	20.5	5.8	39.1		明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土：石英
"	37住	1	須恵坏	口~体1/4	(11.6)				暗青灰	ロクロナデ→下半部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	鉢	体~底1/2		(6.0)			明赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	3	須恵甕	口頸1/5					灰	口頸部ロクロナデ、胴部タタキ	ロクロナデ	
"	39住	1	須恵坏蓋	天~口1/2	14.0		1.5		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底2/3	15.4		5.1		明黄褐	口縁部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	高坏の転用
"	1流路	1	坏	口~底4/5	12.4		4.4		橙	口縁~体部ヘラミガキ、体~底部ヘラケズリ→ナデ	ナデ	
"	"	2	坏	口~底1/2	(12.8)		4.5		にぶい褐	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	
"	"	3	内黒坏	口~底3/5	12.3		3.8		橙	口縁部ヘラミガキ→体~底部ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/3	(10.4)		4.2		橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	高坏	脚4/5		19.0			橙	ヘラケズリ(ケズリ下げ)→ヘラミガキ	脚上部棒状工具でナデツケ→脚部ヘラケズリ→脚裾部ヨコナデ	
"	"	6	甕	口縁~底 7/8	16.5		12.2		橙	口~体上部ヨコナデ、体中~下部ヘラケズリ→体下部棒状工具によるミガキ状のあらいナデ、底部ヘラケズリ	ヘラナデ	

表15 第3章 大日ノ木遺跡 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
53	1	17住	異形土製品	両端欠	酸化炎焼成	長さ<8.3> 幅3.7 厚さ1.4	表面：タタキ→ナデ、裏面：ヘラナデ →ナデ→ユビケズリ、左側：ヘラナデ →ナデ、右側：ヘラナデ	胎土・長石
〃	2	39住	異形土製品	一部欠	酸化炎焼成	長さ6.0 短径5.4 厚さ1.1	中央に突起、全面に指頭痕	手捏ね
〃	3	29住	異形土製品	一部欠	酸化炎焼成	長さ<5.0> 幅9.5 厚さ1.1	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ、 二重の圏線を伴う円形透し	胎土：石英、雲母
〃	4	2 流路	匙形土製品	両端欠	酸化炎焼成	長さ<5.3> 柄幅1.9 厚さ0.8	全面ヘラミガキ	胎土：石英
〃	5	21住	匙形土製品	両端欠	酸化炎焼成	長さ<4.3> 匙幅<3.6> 厚さ1.0 柄幅0.9 厚さ1.5	ナデ調整	
〃	6	12住	匙形土製品	柄	酸化炎焼成	長さ<5.5> 幅1.0 厚さ1.0		
〃	7	23住	匙形土製品	匙部完形	酸化炎焼成	長さ<9.7> 幅5.9 匙厚さ0.5 柄厚さ1.2	全面ヘラミガキ	
〃	8	35住	碁石形土製品	完形	酸化炎焼成	長径2.0 短径1.8 厚さ0.6	指オサエ、指紋が残る	
〃	9	2 流路	土製紡錘車	ほぼ完形	酸化炎焼成	長径3.1 短径3.0 厚さ3.3		
〃	10	5 住	土器片板	ほぼ完存	酸化炎焼成	長径5.1 短径4.7 厚さ0.9 重さ25.4		
〃	11	13住	土器片板	完存	酸化炎焼成	長径4.8 短径4.2 厚さ0.9 重さ21.2		
〃	12	5 住	土器片板	ほぼ完存	酸化炎焼成	長径5.0 短径<4.5> 厚さ0.8 重さ25.0	側辺全周研磨	
〃	13	31堅	土器片板	完存	酸化炎焼成	長径3.0 短径2.7 厚さ0.7 重さ8.2		
〃	14	30住	土器片板	完存	酸化炎焼成	長径3.4 短径3.2 厚さ0.8 重さ10.3		
〃	1	1 流路	皇宋通宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径2.0×1.95 重さ2.7	北宋、初鑄年1038、真書	
〃	2	2 流路	聖宋元宝	完形	銅	銭径2.45×2.4 内径1.95×1.95 重さ1.6	北宋、初鑄年1101、篆書	
〃	3	2 流路	聖宋元宝	ほぼ完形	銅	銭径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ2.5	北宋、初鑄年1101、篆書	
〃	4	Ⅲ-B-6	寛永通宝	完形	銅	銭径2.45×2.45 内径2.0×2.0 重さ2.7	江戸、初鑄年1636	
〃	5	1 流路	寛永通宝	完形	銅	銭径2.4×2.4 内径2.0×2.0 重さ3.0	江戸、初鑄年1636	
〃	6	1 流路	寛永通宝	文字摩滅	銅	銭径2.25×2.25 内径1.75×1.7 重さ1.6	江戸、初鑄年1636	
〃	7	Ⅲ-B-7	寛永通宝	文字摩滅	銅	銭径2.2×2.2 内径1.9×1.85 重さ1.6	江戸、初鑄年1636	
〃	8	Ⅲ-A-15	銅鏃	刀毀れ多い	青銅	身部長<2.3> 刃部長<2.5> 関部幅1.4 茎長1.25	有茎腸扶柳葉式、両鑄造	重さ4.2
〃	9	Ⅲ-A-25	鉄鏃	両端部欠	鉄	身部長<4.6> 刃部長<3.6> 関部幅2.0 茎長<0.75>	有茎柳葉式、両鑄造?	重さ<9.7>
〃	10	18住	不明鉄器		鉄	縦3.4 横7.0 径0.8		
〃	1	18住	紡輪	4/5(接合)	木質	長径4.7 短径4.6 厚さ1.1		炭化遺物
〃	2	18住	杵	先端欠	木質	長さ9.7 幅3.0 厚さ2.4	ホゾ中央に孔1	炭化遺物
54	1	2 流路	石鏃	片隅欠損	黒曜石	長さ1.8 幅<1.1> 厚さ0.46 重さ<0.64>	平基(A)、先端角41°	
〃	2	19住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.2 幅1.2 厚さ0.29 重さ0.33	平基(A)、先端角67°	
〃	3	1 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<1.8> 幅1.5 厚さ0.45 重さ<1.00>	平基(A)、先端角56°	
〃	4	21住	石鏃	片隅欠損	黒曜石	長さ<2.1> 幅<1.3> 厚さ0.40 重さ<0.98>	平基(A)、先端角42°	
〃	5	35住	石鏃	両脚欠損	黒曜石	長さ<1.8> 幅<1.1> 厚さ<0.31> 重さ<0.50>	凹基(B1)、先端角44°	
〃	6	21住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅1.5 厚さ0.42 重さ1.59	平基(A) 未製品	
〃	7	1 流路	石鏃	完形	ガラス質 安山岩	長さ2.3 幅1.9 厚さ0.51 重さ2.37	平基(A)、先端角63° 未製品?	灰色
〃	8	Ⅲ-B-1	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.1> 幅1.9 厚さ0.41 重さ<1.38>	平基(A)、先端角58°	
〃	9	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.0 幅2.0 厚さ0.50 重さ2.49	平基(A)、先端角40°	
〃	10	Ⅲ-B-1	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.2 厚さ0.37 重さ0.63	平基(A)、先端角30° 未製品	
〃	11	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.3 厚さ0.35 重さ0.81	平基(A)、先端角50° 未製品	
〃	12	Ⅲ-A-10	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅<1.4> 厚さ0.55 重さ<1.42>	平基(A)、先端角61° 未製品?	
〃	13	18住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅<1.6> 厚さ0.68 重さ<1.57>	平基(A)、先端角58° 未製品	
〃	14	Ⅲ-A-20	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.1 幅1.7 厚さ0.47 重さ2.23	平基(A)、先端角48° 未製品?	
〃	15	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.5> 幅1.6 厚さ0.34 重さ<1.50>	平基(A)、先端角50°	
〃	16	Ⅲ-B-12	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.3 幅2.2 厚さ0.72 重さ2.85	平基(A)、先端角62° 未製品	
〃	17	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅2.1 厚さ0.82 重さ3.02	平基(A)、先端角73° 未製品	
〃	18	Ⅲ-C-6	石鏃	完形	チャート	長さ3.6 幅2.2 厚さ0.89 重さ6.67	平基(A)、先端角50° 未製品?	オリーブ灰、 暗緑灰の2色
〃	19	17住	石鏃	片隅欠損	黒曜石	長さ<2.8> 幅<1.8> 厚さ0.89 重さ<3.88>	平基(A)、先端角55° 未製品	
〃	20	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<1.4> 幅1.5 厚さ<0.40> 重さ<0.94>	平基(A) 未製品(失敗品)	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
54	21	18住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.5 厚さ0.60 重さ1.56	平基(A) 先端角60°、未製品	
54	22	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.3 厚さ0.30 重さ0.58	凹基(B1)、先端角47°	
54	23	23住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.0 幅1.2 厚さ0.40 重さ0.68	凹基(B1)、先端角40°	
54	24	Ⅲ-F-25	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅1.2 厚さ0.35 重さ0.64	凹基(B1)、先端角34°	
54	25	Ⅲ-B-1	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.0 幅1.4 厚さ0.38 重さ0.80	凹基(B2)、先端角45°	
54	26	Ⅲ-G-5	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.1 幅1.4 厚さ0.20 重さ0.24	凹基(B1)、先端角88°	
54	27	1 住	石鏃	完形	黒曜石	長さ0.7 幅0.9 厚さ0.09 重さ0.06	凹基(B1)、先端角77°	
54	28	18住	石鏃	両脚欠損	黒曜石	長さ<1.8> 幅<1.2> 厚さ0.38 重さ<0.61>	凹基(B1)、先端角42°	
54	29	35住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.3 厚さ0.45 重さ0.76	凹基(B1)、先端角44°	
54	30	Ⅲ-B-3	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.2 厚さ0.30 重さ0.51	凹基(B1)、先端角42°	
54	31	Ⅲ-B-1	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.2 厚さ0.40 重さ0.63	凹基(B1)、先端角40°	
54	32	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.4 厚さ0.54 重さ0.84	凹基(B1)、先端角57°	
54	33	7 住	石鏃	完形	チャート	長さ2.2 幅1.4 厚さ0.33 重さ0.96	凹基(B1)、先端角43°	緑灰と明オリブ灰
54	34	Ⅲ-F-15	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.0> 幅<1.4> 厚さ0.34 重さ<0.70>	凹基(B1)、先端角40°	
54	35	Ⅲ-H-1	石鏃	先端、 片脚欠損	黒曜石	長さ<2.1> 幅<1.8> 厚さ0.24 重さ<0.84>	凹基(B1)、先端角43°	
54	36	19住	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ2.7 幅1.6 厚さ0.54 重さ1.72	凹基(B1)、先端角40° 未製品	
54	37	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.2 厚さ0.38 重さ0.47	凹基(B1)、先端角35°	
54	38	Ⅲ-A-9	石鏃	完形	チャート	長さ2.2 幅1.2 厚さ0.4 重さ0.78	凹基(B1)、先端角34°	オリブ灰、 暗青灰の縞状
54	39	Ⅲ-B-12	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅1.3 厚さ0.45 重さ0.72	凹基(B1)、先端角30°	
54	40	5 住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.3 幅1.4 厚さ0.59 重さ1.38	凹基(B1)、先端角50°	
54	41	2 流路	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.6> 幅<1.7> 厚さ0.30 重さ<0.98>	凹基(B1)、先端角55°	
54	42	Ⅲ-B-11	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.7> 幅<1.8> 厚さ0.50 重さ<1.53>	凹基(B1)、先端角43°	
54	43	Ⅲ-A-20	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<3.2> 幅<2.2> 厚さ0.78 重さ<4.03>	凹基(B1)、先端角48°	
54	44	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.4 幅1.1 厚さ0.21 重さ0.23	凹基(B1)、先端角61°	
54	45	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.3 厚さ0.29 重さ0.46	凹基(B1)、先端角47°	
54	46	3・4住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.1 厚さ0.19 重さ0.28	凹基(B1)、先端角55°	
54	47	19・22住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅<1.2> 厚さ0.25 重さ<0.31>	凹基(B1)、先端角45°	
54	48	Ⅲ-B-11	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.0 厚さ0.27 重さ0.35	凹基(B1)、先端角58°	
54	49	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅1.3 厚さ0.29 重さ0.47	凹基(B1)、先端角37°	
54	50	Ⅲ-B-18	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅1.4 厚さ0.37 重さ0.82	凹基(B1)、先端角38°	
54	51	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅1.6 厚さ0.53 重さ0.83	凹基(B1)、先端角45°	
54	52	遺構外	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.2> 幅1.5 厚さ0.30 重さ<0.77>	凹基(B1)、先端角31°	
54	53	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.2> 幅1.4 厚さ0.32 重さ<0.68>	凹基(B1)、先端角40°	
54	54	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.1 幅1.7 厚さ0.60 重さ2.31	凹基(B1)、先端角44°	
54	55	Ⅲ-C-1	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.5 幅1.1 厚さ0.38 重さ0.54	凹基(B1)、先端角55°	
54	56	Ⅲ-B-17	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.3 厚さ0.23 重さ0.45	凹基(B1)、先端角45°	
54	57	24住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.4 厚さ0.29 重さ0.43	凹基(B1)、先端角50°	
54	58	Ⅲ-B-17	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.3 厚さ0.30 重さ0.49	凹基(B1)、先端角50°	
54	59	Ⅲ-A-25	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.3 厚さ0.24 重さ0.43	凹基(B1)、先端角52°	
54	60	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.0 幅1.6 厚さ0.50 重さ1.02	凹基(B1)、先端角54°	
54	61	1 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<1.7> 幅1.6 厚さ<0.33> 重さ<0.95>	凹基(B1) 未製品(失敗品)	
54	62	21住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.5 幅1.5 厚さ0.42 重さ1.02	凹基(B1)、先端角34°	
54	63	1 流路	石鏃	完形	チャート	長さ2.1 幅1.6 厚さ0.35 重さ1.05	凹基(B1)、先端角56°	灰に灰白と黒が散在
54	64	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.3 厚さ0.21 重さ0.21	凹基(B1)、先端角37°	
54	65	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ0.9 幅1.0 厚さ0.18 重さ0.14	凹基(B1)、先端角72°	
54	66	Ⅲ-A-25	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.3> 幅<2.3> 厚さ0.29 重さ<0.90>	凹基(B1)、先端角45° 未製品?	
54	67	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.4 幅1.2 厚さ0.42 重さ0.86	凹基(LB1)、先端角35°	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
54	68	26住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.5 幅1.3 厚さ0.48 重さ0.90	凹基(LB1)、先端角32°	
〃	69	Ⅲ-B-1	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.7 幅1.3 厚さ0.35 重さ1.00	凹基(LB1)、先端角41°	
〃	70	Ⅲ-A-25	石鏃	完形	硬質頁岩	長さ3.2 幅1.4 厚さ0.27 重さ0.94	凹基(LB1)、先端角29°	緑黒
〃	71	Ⅲ-B-18	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.9> 幅<1.2> 厚さ0.46 重さ<1.22>	凹基(LB1)、先端角28°	
〃	72	42坑	石鏃	両脚欠損	硬質頁岩	長さ<3.2> 幅<1.5> 厚さ0.38 重さ<1.49>	凹基(LB1)、先端角35°	灰
55	73	18住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.3 幅1.5 厚さ0.34 重さ0.44	凹基(B2)、先端角89°	
〃	74	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.3 幅1.2 厚さ0.29 重さ0.28	凹基(B2)、先端角60°	
〃	75	2 流路	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.3> 幅<1.4> 厚さ0.33 重さ<0.57>	凹基(B2)、先端角50°	
〃	76	21住	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<1.6> 幅<1.2> 厚さ0.31 重さ<0.44>	凹基(B2)、先端角65°	
〃	77	2 流路	石鏃	完形	チャート	長さ1.7 幅1.6 厚さ0.34 重さ0.58	凹基(B2)、先端角57°	青黒
〃	78	2 流路	石鏃	完形	チャート	長さ2.2 幅1.5 厚さ0.37 重さ0.75	凹基(B2)、先端角47°	灰に黒が縋
〃	79	遺構外	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<1.9> 幅<0.6> 厚さ<0.2> 重さ<0.31>	凹基(B2)、先端角73°	
〃	80	34住	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.4> 幅<1.1> 厚さ<0.16> 重さ<0.47>	凹基(B2)、先端角65°	
〃	81	Ⅲ-F-15	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.2 厚さ0.23 重さ0.46	凸基(C1) 未製品	
〃	82	8 住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.1 厚さ0.40 重さ0.47	凸基(C1)、先端角60°	
〃	83	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅1.6 厚さ0.55 重さ1.61	凸基(C1)、先端角55° 未製品?	
〃	84	2 流路	石鏃	片隅欠損	チャート	長さ<2.1> 幅<1.7> 厚さ0.60 重さ<1.86>	凸基(C1)、先端角60°	暗青灰に黒褐が数本入っ ている
〃	85	遺構外	石鏃	片隅欠損	黒曜石	長さ<2.6> 幅<1.5> 厚さ0.46 重さ<1.68>	凸基(C1)、先端角47°	
〃	86	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ2.5 幅1.9 厚さ0.44 重さ1.72	凸基(C1)、先端角57°	
〃	87	2 流路	石鏃	片隅欠損	チャート	長さ<2.6> 幅<1.1> 厚さ<0.34> 重さ<0.96>	凸基(C1)、先端角40°	
〃	88	Ⅲ-F-25	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.5 幅1.3 厚さ0.72 重さ2.32	凸基(C1)、先端角51° 未製品	
〃	89	15住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.7 幅1.8 厚さ0.69 重さ2.77	凸基(C1)、先端角60°	
〃	90	Ⅲ-A-5	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.5 幅1.8 厚さ0.64 重さ3.07	凸基(C1)、先端角68° 未製品?	
〃	91	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.0> 幅2.1 厚さ<0.65> 重さ<2.95>	凸基(C1) 未製品(失敗品)	
〃	92	Ⅲ-G-13	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<1.7> 幅1.2 厚さ<0.41> 重さ<0.85>	凸基(C1) 未製品(失敗品)	
〃	93	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<1.8> 幅1.6 厚さ<0.53> 重さ<1.45>	凸基(C1) 未成製(失敗品)	
〃	94	Ⅲ-F-25	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.0 幅1.5 厚さ0.73 重さ2.90	凸基(C1)、先端角49° 未製品?	
〃	95	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.1 幅1.8 厚さ0.82 重さ3.94	凸基(C1)、先端角55° 未製品	
〃	96	6 住	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.7> 幅1.7 厚さ0.79 重さ<2.84>	凸基(C2)、先端角65° 未製品?	
〃	97	Ⅲ-A-5	石鏃	完形	千枚岩質粘 板岩	長さ3.2 幅2.0 厚さ0.78 重さ4.54	凸基(C2)、先端角59° 未製品?	灰、風化
〃	98	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.0 厚さ0.49 重さ0.73	有茎凸基(D2)、先端角47° 未製品	
〃	99	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅0.9 厚さ0.43 重さ0.84	凸基(C2)、石鏃以外か?	
〃	100	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.0 幅1.4 厚さ0.78 重さ2.79	凸基(C2)、先端角48° 未製品	
〃	101	26住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.0 幅1.4 厚さ0.62 重さ1.17	凸基(C1)、先端角47° 未製品?	
〃	102	Ⅲ-A-3	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.4 厚さ0.36 重さ0.52	有茎凹基(D1)、先端角74°	
〃	103	23住	石鏃	茎端欠損	チャート	長さ<1.0> 幅1.1 厚さ0.40 重さ<0.35>	有茎凹基(D1)、先端角80°	緑灰
〃	104	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.5 厚さ0.31 重さ0.50	有茎凹基(D1)、先端角70°	
〃	105	2 流路	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ1.5 幅<1.4> 厚さ0.20 重さ<0.33>	有茎凹基(D1)、先端角75°	
〃	106	34住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.2 厚さ0.37 重さ0.41	有茎凹基(D1)、先端角59°	
〃	107	Ⅲ-A-20	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.7 幅1.2 厚さ0.30 重さ0.31	有茎凹基(D1)、先端角45°	
〃	108	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.0 幅1.5 厚さ0.32 重さ0.56	有茎凹基(D1)、先端角53°	
〃	109	2 流路	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ1.7 幅<1.2> 厚さ0.25 重さ<0.37>	有茎凹基(D1)、先端角62°	
〃	110	遺構外	石鏃	完形	チャート	長さ2.0 幅1.5 厚さ0.30 重さ0.70	有茎凹基(D1)、先端角72°	黒
〃	111	Ⅲ-B-12	石鏃	茎端欠損	黒曜石	長さ<1.9> 幅1.3 厚さ0.31 重さ<0.42>	有茎凹基(D1)、先端角48°	
〃	112	2 流路	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<1.6> 幅1.0 厚さ0.29 重さ<0.32>	有茎凹基(D2)、先端角60° 未製品?	
〃	113	6 住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅1.1 厚さ0.34 重さ0.40	有茎凹基(D1)、先端角38°	
〃	114	1 流路	石鏃	茎端欠損	黒曜石	長さ<1.6> 幅1.1 厚さ0.26 重さ<0.35>	有茎凹基(D1)、先端角53°	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	素材	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
55	115	1 流路	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ1.8 幅<1.3> 厚さ0.34 重さ<0.49>	有茎凹基(D1)、先端角57°	
〃	116	2 流路	石鏃	完形	硬質頁岩	長さ2.7 幅1.4 厚さ0.39 重さ1.10	有茎凹基(D1)、先端角45°	青黒
〃	117	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.6 幅1.5 厚さ0.34 重さ0.86	有茎凹基(D1)、先端角38°	
〃	118	1 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.5 幅1.1 厚さ0.24 重さ0.58	有茎凹基(LD1)、先端角35°	
〃	119	遺構外	石鏃	完形	チャート	長さ2.6 幅1.2 厚さ0.31 重さ0.67	有茎凹基(LD1)、先端角30°	暗青灰
〃	120	27住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.3 幅1.3 厚さ0.28 重さ0.51	有茎凹基(D1)、先端角37°	
〃	121	3 住	石鏃	茎欠損	黒曜石	長さ<2.5> 幅1.5 厚さ0.31 重さ<0.73>	有茎凹基(D1)、先端角38°	
〃	122	1 流路	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ1.9 幅<1.6> 厚さ0.32 重さ<0.80>	有茎凹基(D1)、先端角60° 未製品	
〃	123	2 流路	石鏃	茎端欠損	黒曜石	長さ<2.0> 幅1.1 厚さ0.40 重さ<0.73>	有茎凹基(D1)、先端角52° 未製品?	
〃	124	2 流路	石鏃	完形	チャート	長さ2.4 幅1.7 厚さ0.43 重さ1.44	有茎凹基(D1)、先端角57° 未製品?	灰
〃	125	18住	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅1.5 厚さ0.35 重さ0.85	有茎凹基(D1)、先端角50° 未製品?	
〃	126	26住	石鏃	先端・ 茎欠損	粘板岩	長さ<2.8> 幅1.6 厚さ0.43 重さ<1.55>	有茎凹基(LD1)、先端角35°	暗青灰
〃	127	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.5 幅1.2 厚さ0.29 重さ0.33	有茎平基(D1)、先端角65°	
〃	128	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.4 幅1.2 厚さ0.30 重さ0.37	有茎平基(D1)、先端角45°	
〃	129	Ⅲ-G-5	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.0 厚さ0.22 重さ0.33	有茎平基(D1)、先端角43°	
〃	130	I-U-20	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.1 幅0.9 厚さ0.26 重さ0.32	有茎平基(LD1)、先端角30°	
〃	131	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.7 幅1.5 厚さ0.42 重さ0.90	有茎平基(D1)、先端角42°	
〃	132	23住	石鏃	片隅・ 茎端欠損	黒曜石	長さ<2.1> 幅<1.3> 厚さ0.50 重さ<1.03>	有茎平基(D1)、先端角72°	
〃	133	SF 1	石鏃	完形	チャート	長さ2.0 幅1.2 厚さ0.35 重さ0.84	有茎平基(A)、先端角49°	にぶい赤に明赤灰が縞状に散在
〃	134	2 流路	石鏃	片隅・ 茎欠損	黒曜石	長さ<2.8> 幅<1.2> 厚さ<0.30> 重さ<0.92>	有茎平基(LD1)、先端角31°	
〃	135	Ⅲ-B-11	石鏃	茎欠損	黒曜石	長さ<2.5> 幅1.5 厚さ0.31 重さ<0.80>	有茎平基(D1)、先端角35°	
〃	136	15住	石鏃	茎端欠損	粘板岩	長さ<2.5> 幅1.8 厚さ0.40 重さ<1.34>	有茎凸基(D1)、先端角45°	明オリブ灰
〃	137	Ⅲ-B-1	石鏃	先・ 茎端欠損	粘板岩	長さ<2.3> 幅1.8 厚さ0.43 重さ<1.58>	有茎凸基(D1)	灰
〃	138	2 流路	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.5 幅1.5 厚さ0.30 重さ0.51	有茎凹基(D2)、先端角110°	
〃	139	2 流路	石鏃	完形	粘板岩	長さ2.4 幅0.9 厚さ0.36 重さ0.66	有茎凸基(D2)、先端角36° 未製品?	灰
〃	140	18住	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.4> 幅1.1 厚さ0.36 重さ<0.94>	有茎凸基(D2)、先端角35°	
〃	141	遺構外	石鏃	完形	チャート	長さ2.1 幅1.3 厚さ0.32 重さ0.78	凹基(D1)、五角形、先端角43°	灰赤に灰白が粒状に散在
〃	142	遺構外	石鏃	完形	チャート	長さ2.1 幅1.5 厚さ0.35 重さ1.12	凹基(D1)、雁股状石鏃	緑灰に明緑灰が散在
〃	143	2 流路	石鏃	完形	ガラス質 安山岩	長さ4.0 幅2.3 厚さ0.98 重さ7.83	先端角57° 両側面に抉り	黒
56	144	2 流路	石匙	完形	千枚岩質 粘板岩	長さ4.9 幅<5.6> 厚さ0.8 重さ<17.3>	刃部幅<5.2>、つまみ部側縁・ 刃部に摩耗痕	風化した千枚岩質粘板岩
〃	145	2 流路	石匙	完形?	ガラス質 安山岩	長さ3.6 幅<5.1> 厚さ0.6 重さ<9.5>	刃部幅<5.1>	
〃	146	1 流路	石匙	右側部欠損	ガラス質 安山岩	長さ4.3 幅5.5 厚さ1.2 重さ25.2	刃部幅<5.4>	
〃	147	1 流路	石匙	左側部欠損	ガラス質 安山岩	長さ3.8 幅<4.7> 厚さ1.0 重さ<12.4>	刃部幅<4.5>	
〃	148	7 住	石匙	完形	ガラス質 安山岩	長さ3.2 幅4.8 厚さ1.2 重さ16.8	刃部幅4.6	
〃	149	5 住	石匙	ほぼ完形	チャート	長さ1.9 幅4.0 厚さ0.7 重さ4.6	刃部幅3.0	
〃	150	27住	石匙	完形	黒曜石	長さ2.4 幅4.2 厚さ0.6 重さ4.2	刃部幅3.3	
〃	151	2 流路	石匙	ほぼ完形	ガラス質 安山岩	長さ2.9 幅<4.5> 厚さ0.8 重さ<4.7>	刃部幅<4.5>	
〃	152	1 流路	石匙	完形	粘板岩	長さ3.4 幅3.2 厚さ0.8 重さ6.1	刃部幅3.2	
〃	153	1 流路	石匙	完形	ガラス質 安山岩	長さ3.1 幅2.8 厚さ0.7 重さ4.6	刃部幅2.8	
〃	154	Ⅲ-B-7	石匙	刃部欠損	千枚岩質 粘板岩	長さ<3.1> 幅2.8 厚さ0.5 重さ<3.7>	刃部幅<2.4>	
〃	155	5 住ピット	石錐	完形	黒曜石	長さ3.0 幅1.2 厚さ0.7 重さ2.0		
〃	156	SF 1	石錐	完形	黒曜石	長さ2.7 幅1.0 厚さ0.6 重さ1.5		
〃	157	1 流路	石錐	完形	黒曜石	長さ2.6 幅1.4 厚さ0.8 重さ2.1		
〃	158	2 流路	石錐	上部欠損	黒曜石	長さ<2.5> 幅<1.0> 厚さ<0.6> 重さ<1.5>	両側縁に潰れ。	
〃	159	2 流路	石錐	ほぼ完形	チャート	長さ2.0 幅1.1 厚さ0.7 重さ1.3		
〃	160	Ⅲ-B-12	石錐	完形	チャート	長さ3.3 幅0.9 厚さ0.4 重さ1.7		
〃	161	2 流路	石錐	完形	黒曜石	長さ2.9 幅0.9 厚さ0.4 重さ0.8		

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
56	162	2 流路	石錐	完形	黒曜石	長さ3.1 幅1.2 厚さ0.9 重さ2.4	先端部に破れ。	
〃	163	遺構外	石錐	完形	黒曜石	長さ3.2 幅1.1 厚さ0.7 重さ1.9		
〃	164	Ⅲ-B-8	石錐	先端部欠損	黒曜石	長さ<3.2> 幅1.0 厚さ0.8 重さ<2.5>		
〃	165	2 流路	石錐	ほぼ完形	黒曜石	長さ2.4 幅0.8 厚さ0.6 重さ1.1	先端部破れ。	
〃	166	2 流路	石錐	完形	黒曜石	長さ2.7 幅1.0 厚さ0.7 重さ1.4		
〃	167	I-U-18	石錐	一部欠損	黒曜石	長さ3.2 幅2.0 厚さ0.9 重さ3.4		
57	168	SF 1	スクレイパー	完形	粘板岩	長さ6.4 幅9.4 厚さ2.4 重さ100.0	素材は横広の剥片。下辺に刃部。	
〃	169	3・4 住	スクレイパー	完形	黒曜石	長さ2.0 幅2.5 厚さ1.1 重さ3.9		
〃	170	2 流路	スクレイパー	2/3残	黒曜石	長さ<2.1> 幅<2.2> 厚さ<1.0> 重さ<2.9>	下辺に刃部	
〃	171	1 流路	スクレイパー	完形	黒曜石	長さ3.7 幅3.1 厚さ0.9 重さ7.9	素材は縦広の剥片。上部を除く周縁が刃部。	
〃	172	2 流路	スクレイパー	一部欠損	黒曜石	長さ2.3 幅1.9 厚さ0.6 重さ2.6	下辺に刃部。	
〃	173	2 流路	スクレイパー	完形?	黒曜石	長さ2.0 幅3.0 厚さ0.8 重さ5.8	下辺に刃部。	
〃	174	1 流路	スクレイパー	完形?	黒曜石	長さ2.0 幅3.0 厚さ0.7 重さ3.7	下辺に刃部。	
〃	175	遺構外	スクレイパー	完形	チャート	長さ2.5 幅4.3 厚さ0.9 重さ7.6	素材は横広の剥片。左側～下辺に刃部。	
〃	176	1 流路	スクレイパー	完形?	黒曜石	長さ1.7 幅4.2 厚さ1.0 重さ6.0	下辺に刃部。	
〃	177	3・4 住	スクレイパー	完形	チャート	長さ2.1 幅3.0 厚さ0.4 重さ2.8	下辺に刃部。	
〃	178	遺構外	打製石斧	完形	硬砂岩	長さ15.2 幅5.1 厚さ2.6 重さ230.0	刃部に摩耗痕	
〃	179	2 流路	打製石斧	完形	粘板岩	長さ11.9 幅4.2 厚さ1.5 重さ68.0		
〃	180	2 流路	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ<11.5> 幅5.3 厚さ2.3 重さ<178.0>	正面の刃部に摩耗痕	
〃	181	2 流路	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ9.1 厚さ5.0 厚さ2.1 重さ98.0	正面・裏面の基部に装着痕と思われる摩耗、刃部摩耗痕	
〃	182	2 流路	打製石斧	完形	粘板岩?	長さ9.0 幅5.3 厚さ1.5 重さ78.0	刃部に摩耗痕、基部側縁に装着痕と思われる摩耗	
〃	183	遺構外	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ8.6 幅3.8 厚さ1.0 重さ36.0	素材は横長剥片か? 刃部にわずかな摩耗痕	風化著しい千枚岩質粘板岩
58	184	2 流路	打製石斧	完形	硬砂岩	長さ11.2 幅5.2 厚さ2.8 重さ195.0	正面の下部1/3程と裏面の刃部に摩耗痕	
〃	185	2 流路	打製石斧	ほぼ完形	頁岩?	長さ<11.2> 幅<4.7> 厚さ<2.1> 重さ<101.0>	基部両側に装着痕と思われる摩耗痕 正面刃部に使用による摩耗痕	
〃	186	2 流路	打製石斧	基部一部欠	千枚岩質粘板岩	長さ10.6 幅7.4 厚さ2.0 重さ155.0	左側に擦痕。正面刃部に摩耗痕	
〃	187	2 流路	打製石斧	刃部一部欠損	千枚岩質粘板岩	長さ9.3 幅6.7 厚さ1.3 重さ101.0	刃部に摩耗痕	
〃	188	2 流路	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ11.0 幅5.3 厚さ2.0 重さ110.0	正面・裏面の刃部に摩耗痕、裏面基部・基部両側縁に装着痕と思われる摩耗	
〃	189	遺構外	打製石斧	基部一部欠	千枚岩質粘板岩	長さ10.4 幅5.5 厚さ1.2 重さ75.0	正面・裏面の刃部に摩耗痕、正面胴部は剥落	風化著しい千枚岩質燧灰岩
〃	190	遺構外	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ6.3 幅4.3 厚さ1.2 重さ32.0	刃部縁に摩耗痕、基部側縁に装着痕と思われる摩耗	風化した千枚岩質粘板岩
〃	191	2 流路	打製石斧	完形	粘板岩?	長さ6.9 幅3.7 厚さ1.1 重さ32.0		
〃	192	Ⅲ-B-11	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ8.1 幅4.5 厚さ1.6 重さ63.0		風化著しい千枚岩質粘板岩
〃	193	2 流路	打製石斧	ほぼ完形	千枚岩質粘板岩	長さ10.4 幅3.8 厚さ2.1 重さ91.0	正面・裏面の刃部に摩耗痕	
〃	194	17住	磨製石斧	基部一部欠損	石黒片岩	長さ<13.9> 幅6.2 厚さ3.6 重さ<521.0>	研磨は刃部のみ顕著、刃先に使用による潰れ。	
〃	195	1 流路	磨製石斧	基部一部欠損	石黒片岩	長さ<11.4> 幅5.3 厚さ<3.0> 重さ<323.0>	側辺と裏面基部を除き研磨。刃先にわずかに使用による潰れ。	
〃	196	1 流路	磨製石斧	基部欠損	石黒片岩	長さ<8.7> 幅5.5 厚さ<3.0> 重さ<242.0>	側辺を除き研磨。刃先に使用による潰れ。	
〃	197	1 流路	磨製石斧	刃部欠損	緑泥片岩	長さ<13.1> 幅<4.9> 厚さ<3.6> 重さ<308.0>	裏面の一部を除き、全体に研磨は少ない。	
〃	198	2 流路	磨製石斧	刃部欠損	石黒片岩	長さ<13.4> 幅<5.2> 厚さ<3.4> 重さ<338.0>	基部に磨かれた平坦な面あり。全体に研磨は少ない。	
〃	199	7 住	磨製石斧	基部欠損	緑泥片岩	長さ<7.7> 幅<6.5> 厚さ<2.6> 重さ<196.0>	全体に研磨。刃先にわずかに使用による潰れ。	
〃	200	13住	磨製石斧	基部欠損	粘板岩	長さ<3.4> 幅<3.5> 厚さ<1.1> 重さ<20.0>	全体に研磨。	
59	201	5 住	磨石	完形	安山岩	長さ8.6 幅8.2 厚さ4.9 重さ502.0	正・裏面及び下側面に磨面。左側に敲痕。	
〃	202	27住	磨石	欠損	安山岩	長さ<8.4> 幅<9.6> 厚さ<4.6> 重さ<538.0>	正・右側・裏面に磨面。上側面に敲痕。	
〃	203	26住	磨石	完形	安山岩	長さ12.4 幅10.4 厚さ3.3 重さ568.0	正・裏面に磨面。	
〃	204	26住	磨石	完形	安山岩	長さ11.8 幅11.1 厚さ4.6 重さ792.0	正・裏面、及び左側に磨面。	
〃	205	2 流路	磨石	完形	安山岩	長さ11.2 幅9.5 厚さ4.9 重さ783.0	正・裏面に磨面。	
〃	206	1 流路	磨石	完形	安山岩	長さ10.2 幅8.5 厚さ4.3 重さ566.0	正面に磨面。	
〃	207	26住	磨石	ほぼ完形	安山岩	長さ11.6 幅11.1 厚さ5.5 重さ942.0	正・右側・裏面に磨面。	
〃	208	1 流路	磨石	完形	安山岩	長さ9.6 幅7.4 厚さ5.5 重さ575.0	正面に磨面。正面中央と上側面に敲痕。	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
59	209	1 流路	磨石	一部欠損	安山岩	長さ11.2 幅<10.2> 厚さ4.7 重さ<746.0>	正・裏面に磨面。右側面に敲痕。欠損は使用によるものか？	
〃	210	2 流路	磨石	完形	安山岩	長さ9.5 幅8.0 厚さ4.4 重さ460.0	正・裏に磨面。上部周縁にわずかな敲痕。	
〃	211	1 流路	磨石	欠損	安山岩	長さ<12.1> 幅<7.3> 厚さ<6.1> 重さ<716.0>	四面に磨面。上・下側面に浅い敲痕。	
〃	212	2 流路	磨石	完形	安山岩	長さ9.9 幅8.6 厚さ4.4 重さ520.0	正面と裏面の一部に磨面。両面の中央部に敲痕。	
〃	213	8 住	磨石	欠損	安山岩	長さ<10.8> 幅<5.9> 厚さ<4.7> 重さ<426.0>	正面と左側面に磨面。	
〃	214	1 流路	磨石	完形	安山岩	長さ6.5 幅5.4 厚さ4.5 重さ234.0	三面に磨面。	
〃	215	5 住	研磨円礫	完形	頁岩	長さ3.4 幅3.1 厚さ1.5 重さ24.0	全体に磨いてある。	
〃	216	17住	研磨円礫	裏面一部欠損	頁岩	長さ3.7 幅3.4 厚さ2.7 重さ<55.0>	全体に磨いてある。	
〃	217	28住	研磨円礫	完形	チャート	長さ4.8 幅3.5 厚さ2.0 重さ48.0	全体に磨いてある。	
60	218	1 流路	磨石	一部欠損	安山岩	長さ17.1 幅9.2 厚さ4.3 重さ<948.0>	正・裏面と右側下部に磨面。上・下側面に敲痕。右側中央にも浅い敲痕。	
〃	219	2 流路	磨石	欠損	安山岩	長さ<11.7> 幅<7.6> 厚さ<4.5> 重さ<585.0>	正・右側・裏面に磨面。その磨面にそれぞれ2ヶ所ずつ凹み。	
〃	220	2 流路	磨石	欠損	安山岩	長さ<12.6> 幅<7.4> 厚さ<6.0> 重さ<678.0>	裏面を除く、ほぼ全面に磨面。上・下側面に敲痕。	
〃	221	2 流路	磨石	完形	安山岩	長さ17.2 幅5.8 厚さ4.9 重さ608.0	ほぼ全面に磨面。上・下側面に敲痕。	
〃	222	13住	磨石	欠損	安山岩	長さ<10.8> 幅<6.6> 厚さ<5.6> 重さ<550.0>	三面に磨面。上側面に敲痕。	
〃	223	8 住	磨石	欠損	安山岩	長さ<8.2> 幅<6.9> 厚さ<6.5> 重さ<562.0>	ほぼ全面に磨面。上側面に敲痕。	
〃	224	34住	磨石	欠損	安山岩	長さ<12.0> 幅<7.0> 厚さ<9.1> 重さ<998.0>	四面に磨面。上側面に敲痕。	
〃	225	I-U-21	磨石	欠損	安山岩	長さ<10.8> 幅<5.9> 厚さ<8.3> 重さ<728.0>	三面に磨面。上側面に敲痕。正面中央に凹み。	
〃	226	1 流路	磨石	欠損	安山岩	長さ<11.6> 幅<6.3> 厚さ<6.2> 重さ<756.0>	三面に磨面。上側面に敲痕。	
〃	227	3 住	磨石	欠損	安山岩	長さ<7.6> 幅<7.0> 厚さ<5.2> 重さ<470.0>	四面と上側面に磨面。裏面一部剥落。	
〃	228	27住	磨石	完形	安山岩	長さ7.3 幅6.1 厚さ2.1 重さ153.0	正・裏面に磨面。上・下側面に敲痕。	
〃	229	24住	磨石	欠損	安山岩	長さ<9.0> 幅<7.0> 厚さ<5.0> 重さ<492.0>	正・裏面と両側面に磨面。	
61	230	1 流路	磨石	欠損	安山岩	長さ<9.3> 幅<7.4> 厚さ<6.2> 重さ<637.0>	正面と左側面に磨面。正面中央に敲痕。	
〃	231	18住	磨石	完形	安山岩	長さ10.4 幅4.9 厚さ3.4 重さ300.0	正面・右側・裏面に磨面。	
〃	232	1 流路	磨石	完形	安山岩	長さ6.4 幅5.6 厚さ3.5 重さ180.0	正・裏面に磨面。上・下側面に浅い敲痕。	
〃	233	27住	凹石	完形	安山岩	長さ6.5 幅6.0 厚さ4.0 重さ178.0	正面に凹み。裏面に敲痕。	
〃	234	5 住	台石	欠損	安山岩	長さ25.2 幅<27.4> 厚さ17.0 重さ<18200.0>	磨面3 (正面・裏面・右側面の一部) 裏面一部剥落。	
〃	235	1 流路	台石	欠損	安山岩	長さ23.7 幅<15.5> 厚さ7.5 重さ<3600.0>	磨面4 (正面・裏面・右側面)	
〃	236	1 流路	台石	欠損	安山岩	長さ<19.1> 幅<14.7> 厚さ<9.6> 重さ<3500.0>	磨面1 (正面)。左側面被熱。	
〃	237	21住	台石	欠損	輝石安山岩	長さ31.8 幅<21.3> 厚さ6.4 重さ<6450.0>	磨面1 (正面)	
〃	238	32住	台石	完形?	安山岩	長さ35.8 幅23.0 厚さ9.4 重さ<11400.0>	磨面2 (正面・裏面の一部)	
〃	239	26住	台石	完形?	安山岩	長さ22.8 幅20.8 厚さ4.6 重さ3650.0	磨面1 (正)	
〃	240	11住	台石	欠損	安山岩	長さ<21.3> 幅<17.9> 厚さ7.2 重さ<4200.0>	磨面3 (正面・裏面)	
〃	241	3 住	台石	欠損	安山岩	長さ<17.5> 幅<19.2> 厚さ<11.5> 重さ<5600.0>	磨面2 (正面・裏面の一部)	
〃	242	35住	台石	欠損	輝石安山岩	長さ<14.1> 幅<23.1> 厚さ5.6 重さ<3200.0>	磨面3 (正面・裏面)	
〃	243	4 住	台石	欠損	安山岩	長さ24.5 幅<8.7> 厚さ1.6 重さ<450.0>	磨面2 (正面・裏面)。裏面一部剥落	
〃	244	5 住	台石	欠損	安山岩	長さ21.7 幅<9.1> 厚さ3.6 重さ<1050.0>	磨面1 (正面)	
〃	245	23住	台石	欠損	安山岩	長さ<17.6> 幅<7.7> 厚さ3.3 重さ<660.0>	磨面2 (正面・裏面)	
〃	246	2 流路	台石	欠損	砂岩	長さ<16.9> 幅<9.5> 厚さ2.0 重さ<400.0>	磨面2 (正面・裏面)	
〃	247	5 住	台石	欠損	安山岩	長さ<9.8> 幅12.3 厚さ4.1 重さ<765.0>	磨面2 (正面・裏面)。上側面に敲痕	
〃	248	23住	台石	欠損	安山岩	長さ<14.7> 幅<13.7> 厚さ3.1 重さ<1250.0>	磨面2 (正面・裏面)。裏面一部剥落	
〃	249	5 住	多孔石	完形	浮石	長さ11.7 幅11.6 厚さ14.4 重さ<950.0>	正面に円形の回転穿孔6 (孔底中央突出)	
〃	250	1 流路	凹石	欠損	安山岩	長さ<15.5> 幅10.8 厚さ9.8 重さ<1370.0>	正面中央に凹み	
〃	251	遺構外	五輪塔水輪	欠損	安山岩	高さ15.0 幅22.3	上面納骨穴	
62	252	26住	有溝砥石	左側欠損	砂岩	長さ<11.4> 幅<11.5> 厚さ<2.6> 重さ<450.0>	砥面2 (正面・裏面)、正面中央部断面半円形の溝	玉砥石か。
〃	253	4 住	砥石	側面欠損	砂岩	長さ<16.3> 幅<13.2> 厚さ<2.8> 重さ<610.0>	砥面3 (正面・裏面・左側一部)	
〃	254	23住	砥石	右側欠損	砂岩	長さ<14.4> 幅<4.5> 厚さ<2.3> 重さ<190.0>	砥面2 (正面・裏面)	
〃	255	3 住	砥石	左上・下部欠損	硅藻土	長さ<8.1> 幅<5.5> 厚さ<3.5> 重さ<188.0>	砥面6 (正面・裏面・側面)	

第3章 大日ノ木遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
62	256	2 流路	砥石	上部欠損	凝灰岩	長さ13.2 幅3.6 厚さ3.3 重さ<210.0>	砥面5(正面・裏面・側面)櫛状の単位を 持った使用痕。縁に切り込み状の使用痕。	
〃	257	21住	砥石	完形	粘板岩	長さ6.0 幅5.1 厚さ3.4 重さ160.0	砥面3(正面・裏面・上部)	
〃	258	26住	砥石	完形	角閃石輝石 安山岩	長さ6.9 幅4.7 厚さ3.5 重さ174.0	砥面8(全面)	
〃	259	3・4住	砥石	上部・右側・ 下部欠損	砂岩	長さ<8.5> 幅<6.2> 厚さ<1.9> 重さ165.0	砥面3(正面・裏面・左側)	
〃	260	2 流路	砥石	下部欠損	角閃石輝石 安山岩	長さ<12.2> 幅<7.9> 厚さ<3.8> 重さ<575.0>	砥面1(正面)	
〃	261	2 流路	石剣類	下部欠損	緑泥片岩	長さ<21.1> 幅<3.6> 厚さ<2.4> 重さ<290.0>	頭部に刻線が廻る。	
〃	262	2 流路	石剣類	下部欠損	緑泥片岩	長さ<17.7> 幅<2.9> 厚さ<1.8> 重さ<145.0>		
〃	263	7住	石剣類	上部欠損	緑泥片岩	長さ<10.5> 幅<3.1> 厚さ<2.1> 重さ<120.0>	やや鈍いが刃縁の稜有	
〃	264	2 流路	石剣類	上部・下部 欠損	硬砂岩	長さ<3.7> 幅<2.5> 厚さ<1.8> 重さ<30.0>		
〃	265	Ⅲ-B-12	石剣類	上部・下部・ 右側・裏面欠損	絹雲母片岩	長さ<6.5> 幅<2.8> 厚さ<1.4> 重さ<34.0>	明瞭な刃縁の稜有	
〃	266	遺構外	ガラス小玉	上部欠損	スカイブルー	長さ<0.4> 幅0.5 厚さ0.3	両穿孔面研磨。	
〃	267	19住	白玉	正面一部欠 損	滑石	長さ1.3 幅1.4 厚さ1.1 重さ<3.0>	両穿孔面研磨せず。	
〃	268	19住	白玉	正面・周縁 部一部欠損	滑石	長さ1.3 幅1.4 厚さ0.6 重さ<1.7>	両穿孔面研磨せず。	
〃	269	21住	白玉	正面・裏面 一部欠損	滑石	長さ1.4 幅1.4 厚さ0.7 重さ<2.1>	両穿孔面研磨せず(一部有)	
〃	270	2 流路	勾玉	先端部欠損	滑石	長さ<5.2> 幅<2.5> 厚さ1.3 厚さ<21.0>	頭端に三条の線。	丁字頭勾玉

第5章 陣馬塚古墳

表16 第5章 陣馬塚古墳 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器 種	残 存	法量 (cm)				色 調	外 面 整 形	内 面 整 形	備 考
					口径	底径	器高	内底				
72	玄1区床	1	須恵長頸壺	完形	8.2	6.3	19.9		灰	櫛歯刺突文←ロクロナデ→底 部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	玄1区床	2	須恵提瓶	ほぼ完形	4.7		17.2		灰	口縁部ヨコナデ←胴部表面カキ 目・胴部裏面回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	玄1区床	3	須恵平瓶	ほぼ完形	6.7	8.5	16.9		灰	ロクロナデ→底部回転ヘラケ ズリ	ロクロナデ	
"	丘2層他	4	須恵壺	口頸1/2	12.6				灰	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラケズリ	
"	丘2層	5	須恵壺	胴~底1/8		4.2			灰	底部回転ヘラケズリ→ヘラナ デ		東測図の信頼度低 い
"	墳丘外	6	須恵大甕	口~肩2/5	38.9				灰	口頸部櫛歯波状文←頸部ロク ロナデ←胴部タタキ	頸部ロクロヨコナデ←胴部タ タキ	
"	玄3・4区床	7	内黒环	口~底3/4	(14.4)	(7.6)	4.5		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ	
"	玄2区床	8	环	体部~ 底1/2		4.6			橙			摩滅の為調整不明

表17 第5章 陣馬塚古墳 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種 類	残 存	材 質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備 考
73	1	玄1区床	直刀	茎端部欠	鉄	刀身長68.1 幅3.0~2.4 背幅0.6 茎長<9.3>	平造、両関、フクラ切先、目釘孔2、 茎折修理	無窓鉚、鉚、柄縁金具
"	2	玄1区床	直刀	切先欠	鉄	刀身長<92.5> 幅(4.1)~3.3 背幅0.8 茎長22.7	平造、両関、フクラ切先?目釘孔3、 鉚本孔1	刀身に木質
"	3	玄3区床	直刀	完形	鉄	刀身長75.9 幅3.4~2.2 背幅0.7 茎長16.9	平造、両関、フクラ切先、目釘孔2、 茎元扶	銀象嵌八窓鉚、鉚、柄縁 金具
"	4	玄3区床	直刀	切先端欠	鉄	刀身長<72.2> 幅3.6~2.3 背幅0.8 茎長16.0	平造、両関、フクラ切先、目釘孔4、 鉚本孔1	八窓鉚、鉚
"	5	玄4区床	直刀		鉄	刀身長56.4 幅2.8~2.3 背幅0.7 茎長15.3	平造、両関、フクラ切先、目釘孔1	無窓鉚、鉚 刀身に布痕、鉚下に木質
"	6	玄2区床	直刀	茎一部欠	鉄	刀身長39.5 幅2.8~2.2 背幅0.8 茎長<5.5>	平造、両関、フクラ切先	鉚
74	7	玄1区床	直刀		鉄	刀身長25.3 幅3.1~1.9 背幅0.6 茎長8.2	平造、両関、フクラ切先、目釘孔1	鉚(銅製) 巻糸の上に鹿角製柄
"	8	玄1区床	直刀		鉄	刀身長22.3 幅1.8~1.3 背幅0.5 茎長8.8	平造、片関?フクラ切先、 目釘孔1	茎巻糸の上に木質
"	9	玄1区床	直刀	関部一部欠	鉄	刀身長20.9 幅(1.7)~1.6 背幅0.4 茎長8.5	平造、片関?フクラ切先、 目釘孔1	茎に木質
"	10	玄2区床	鐔	一部欠	鉄	長径7.9 短径6.9 厚さ0.5	無窓	
"	3	玄3区床	3号柄縁金具		鉄	長径4.7 短径3.7 厚さ0.3 長さ0.6	銀象嵌波状C字状文	
"	3	玄3区床	3号刀鐔		鉄	長径7.4 短径6.3 厚さ0.5	銀象嵌平;二重圏線C字状文、耳; 波状C字状文	倒卵形八窓鉚
"	3	玄3区床	3号刀鉚		鉄	長径3.6 短径2.6 厚さ0.2 長さ1.6	銀象嵌区画線3本、C字状文2列	
"	11	玄2区床	円頭柄頭		鉄	長さ4.4 幅3.4 厚さ2.6		
"	12	玄3区床	鞘尻金具	一部欠	鉄	長さ4.1 幅3.2 厚さ1.7		
"	13	丘2区3層	鞘尻金具		鉄	長さ1.9 幅2.4 厚さ1.7		内部に木質
"	14	玄2区フルイ	刀茎		鉄		目釘	破片
"	15	玄2区床	刀茎		鉄			破片
"	16	玄1・2区フルイ	鞘金具		鉄			破片
"	17	玄2区フルイ	鞘金具		鉄			破片
"	18	玄1区フルイ	鞘金具		鉄			破片
"	19	玄2区フルイ	鞘金具		鉄			破片
75	20	玄4区床	鉄鏃	完形	鉄	身部長3.4 幅2.4 頸部長2.5 茎長3.4	三角形鏃	
"	21	玄2区床隙間	鉄鏃	鏃身部・茎	鉄	身部長2.4 幅1.8 頸部長<1.0>	無頸三角形鏃	茎木質の上に巻糸
"	22	玄3区フルイ	鉄鏃	茎端部欠	鉄	身部長2.2 幅3.5 頸部長3.2 茎長<1.5>	三角形鏃	
"	23	玄1・2区フルイ	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<1.9> 幅1.3 頸部長<4.3>	長頸三角形鏃	
"	24	玄2区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長2.2 幅1.4 頸部長<3.4>	長頸三角形鏃	
"	25	玄2区床	鉄鏃	茎端部欠	鉄	身部長2.2 幅1.3 頸部長6.7 茎長<3.0>	長頸三角形鏃	
"	26	玄2区床	鉄鏃	両端部欠	鉄	身部長<2.7> 幅<1.3> 頸部長5.2 茎長<2.8>	長頸長三角形鏃	
"	27	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長2.7 幅1.2 頸部長<8.0>	長頸長三角形鏃	
"	28	玄1区床	鉄鏃	両端部欠	鉄	身部長<2.6> 幅1.2 頸部長7.0 茎長<2.1>	長頸長三角形鏃	
"	29	玄1区床	鉄鏃	完形	鉄	身部長3.1 幅1.0 頸部長8.2 茎長3.3	長頸長三角形鏃	茎に巻糸
"	30	玄1区床	鉄鏃	完形	鉄	身部長3.7 幅1.0 頸部長7.1 茎長4.2	長頸長三角形鏃	茎に巻糸・木質
"	31	玄2区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<2.8> 幅1.3 頸部長<1.8>	長頸長三角形鏃	

第5章 陣馬塚古墳

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種 類	残 存	材 質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備 考
75	32	玄全区フルイ	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<2.8> 幅1.2 頸部長<1.6>	長頸長三角形鏃	
〃	33	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長3.1 幅0.9 頸部長<4.6>	長頸長三角形鏃	
〃	34	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長2.2 幅0.9 頸部長<1.9>	長頸長三角形鏃	
〃	35	玄1区床	鉄鏃	茎端部欠	鉄	身部長2.4 幅0.8 頸部長8.7 茎長<1.8>	長頸長三角形鏃	
〃	36	玄1区床	鉄鏃	茎端部欠	鉄	身部長2.3 幅1.0 頸部長10.4 茎長<3.6>	長頸長三角形鏃	茎に巻糸
〃	37	玄1区床	鉄鏃	完形	鉄	身部長2.5 幅1.0 頸部長9.4 茎長5.3	長頸長三角形鏃	
〃	38	玄1区床	鉄鏃	ほぼ完形	鉄	身部長<2.2> 幅1.0 頸部長9.7 茎長4.9	長頸長三角形鏃	
〃	39	玄4区フルイ	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長2.3 幅0.9 頸部長<9.0>	長頸長三角形鏃	
〃	40	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<1.8> 幅1.0 頸部長<6.5>	長頸長三角形鏃	
〃	41	玄2区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<2.4> 幅0.9 頸部長<5.9>	長頸長三角形鏃	
〃	42	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長3.0 幅1.0 頸部長<3.9>	長頸長三角形鏃	
〃	43	玄全区フルイ	鉄鏃	鏃身部	鉄	身部長<2.1> 幅<0.9>	長頸長三角形鏃	
〃	44	玄2区床	鉄鏃	鏃身部	鉄	身部長<3.1> 幅1.0	長頸長三角形鏃	
〃	45	玄全区フルイ	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<1.2> 幅0.9 頸部長<1.8>	長頸長三角形鏃	
〃	46	玄2区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<0.5> 幅0.6 頸部長<3.3>	長頸長三角形鏃	
〃	47	玄全区フルイ	鉄鏃	頸部・頸部	鉄	頸部長<2.5> 茎長<1.9>		茎・木質の上に巻糸
〃	48	玄1区床	鉄鏃	両端部・頸一部欠	鉄	身部長<2.1> 幅<0.9> 茎長<2.2>	長頸長三角形鏃	茎に巻糸
〃	49	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<0.8> 幅<0.8> 頸部長<8.8>	長頸長三角形鏃	
〃	50	玄2区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<1.9> 幅<1.0> 頸部長<3.8>	長頸長三角形鏃	
〃	51	玄1・2区フルイ	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長2.2 幅1.2 頸部長<2.4>	長頸長三角形鏃	
〃	52	玄1区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<2.6> 幅<0.7> 頸部長7.9	長頸長三角形鏃	
〃	53	玄2区床	鉄鏃	鏃身部・頸部	鉄	身部長<3.3> 幅1.0 頸部長<7.9>	長頸長三角形鏃	
〃	54	玄全区フルイ	鉄鏃	鏃身部	鉄	身部長1.7 幅0.9 頸部長<1.1>	長頸長三角形鏃	
〃	55	玄1区床	鉄鏃	茎端部欠	鉄	身部長2.1 幅1.0 頸部長10.3 茎長<3.1>	長頸長三角形鏃	
〃	56	玄1区床	鉄鏃	茎端部欠	鉄	身部長3.4 幅0.8 頸部長8.1 茎長<1.3>	長頸片刃鏃	
〃	57	玄1区床	鉄鏃	ほぼ完形	鉄	身部長<2.9> 幅0.8 頸部長9.7 茎長3.9	長頸片刃鏃	
76	58	玄1区床	刀子	茎端部欠	鉄	刀身部長16.7 幅1.6~1.1 背幅0.4 茎長<5.5>	平造、片関、フクラ切先	茎に巻糸
〃	59	玄1区床	刀子	茎端部欠	鉄	刀身部長<9.8> 幅1.6~1.0 背幅0.4 茎長<4.0>	平造、両関、フクラ切先	
〃	60	玄3区床	刀子	刀身部・茎一部欠	鉄	刀身部長<6.5> 幅2.1~背幅0.5 茎長<7.2>	平造、両関	茎に木質
〃	61	玄4区床	刀子	刀身部	鉄	刀身部<11.2> 幅 ~1.3	平造	
〃	62	玄1区床	刀子	刀身部先端欠	鉄	刀身部<4.8> 幅1.2~0.7 背幅0.3 茎長3.8	平造、両関、フクラ切先	
〃	63	玄2区床	刀子	茎部	鉄	茎長6.2	平造、両関	
〃	64	玄2区床	刀子	茎端部欠	鉄	刀身部<10.3> 幅1.7~1.2 背幅0.4 茎長<2.7>	平造、両関	柄縁金具(銅製)、茎に木質
〃	65	玄1・2区フルイ	刀子	刀身部	鉄		平造	
〃	66	玄全区フルイ	刀子	刀身部	鉄	刀身部<5.3>	平造	
〃	67	玄1区床	半球形飾り金具	完形	鉄地金銅張	直径3.2 高さ0.8	縁部鐫状、縁に孔1対	
〃	68	玄1区床	半球形飾り金具	完形	鉄地金銅張	直径3.1 高さ0.9	縁部鐫状、縁に孔1対	
〃	69	玄1区床	半球形飾り金具	完形	鉄地金銅張	直径3.2 高さ0.8	縁部鐫状 縁に孔1対	
〃	70	玄1区フルイ	半球形飾り金具	完形	鉄地金銅張	直径3.0 高さ0.8	縁部鐫状、縁に孔1対	
〃	71	玄2区床	半球形飾り金具	ほぼ完形	鉄地金銅張	直径3.2 高さ0.9	縁部鐫状、縁に孔1対	
〃	72	玄2区床隙間	半球形飾り金具	4/5	鉄地金銅張	直径3.1 高さ0.9	縁部鐫状、縁に孔1対	
〃	73	玄2区フルイ	半球形飾り金具	2/3	鉄地金銅張	直径3.1 高さ0.9	縁部鐫状、縁に孔1対?	
〃	74	玄1区フルイ	耳環	完形	銅・金	径3.4×3.0 断面0.8×0.8 開き部0.2 重さ30.8		
〃	75	玄4区床	耳環	完形	銅・金	径3.2×3.0 断面0.8×0.8 開き部0.2 重さ28.5		
〃	76	玄4区床	耳環	完形	銅・金	径2.6×2.5 断面0.7×0.5 開き部0.2 重さ15.1		
〃	77	玄4区床	耳環	完形	銅・金	径3.4×3.1 断面0.8×0.8 開き部0.3 重さ28.9		
〃	78	玄4区床	耳環	完形	銅・金	径3.1×2.7 断面0.7×0.5 開き部0.2 重さ13.0		

第5章 陣馬塚古墳

図版番号	遺物番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm)・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
75	79	玄4区フルイ	耳環	完形	銅・金	径3.1×2.7 断面0.7×0.7 開き部0.1 重さ22.9		
76	80	玄4区フルイ	耳環	完形	銅・金	径3.2×2.8 断面0.7×0.7 開き部0.2 重さ25.4		
77	81	玄3区フルイ	小形銅製品	完形	銅	上径0.4 下径0.8 高さ0.7	截頂円錐形	
78	82	玄3区フルイ	小形銅製品	完形	銅	上径0.5 下径0.7 高さ0.7	截頂円錐形	
79	1	玄2区床	垂飾り?	ほぼ完形	粘板岩?	長さ4.7 幅3.7 厚さ0.7 重さ17.28	上端部に孔1	

表18 第5章 陣馬塚古墳 玉類計測表

図版番号	遺物番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土位置	備考
77	1	碧玉管玉	2.4	0.7	0.7	2.13	丘1区3層	暗灰緑
78	2	碧玉管玉	2.3	0.8	0.8	2.26	玄2区床隙間	暗灰緑
79	3	碧玉管玉	2.3	0.7	0.7	<2.23>	玄2区床	暗灰緑
80	4	土製管玉	2.2	0.8	0.8	1.59	玄2区床隙間	紫黒
81	5	碧玉管玉	3.3	1.5	1.4	<12.67>	丘2区3層	暗灰緑
82	6	滑石勾玉	0.5	1.4	0.8	<0.58>	玄2区	明オリーブ灰
83	7	滑石棗玉	1.15	1.2	1.15	2.44	玄1区フルイ	灰白
84	8	水晶切子玉	1.3	1.2	1.0	1.90	玄3区	
85	9	滑石白玉	0.6	1.0	0.9	0.83	玄3区フルイ	灰白
86	10	土製丸玉	0.55	0.8	0.75	<0.23>	玄1区床隙間	黒褐
87	11	土製丸玉	0.55	0.75	0.7	0.24	玄1区フルイ	黒
88	12	土製丸玉	<0.5>	<0.8>	<0.7>	<0.20>	玄1区フルイ	黒褐
89	13	土製丸玉	0.55	0.8	0.75	0.27	玄2区フルイ	黒褐
90	14	土製丸玉	0.5	0.75	0.7	<0.24>	玄3区フルイ	黒
91	15	土製丸玉	0.6	0.8	0.8	0.20	玄1区フルイ	黒
92	16	土製丸玉	0.4	0.75	0.7	0.15	玄2区床隙間	黒褐
93	17	土製丸玉	0.5	0.8	0.8	0.26	玄3区床隙間	黒褐
94	18	土製丸玉	0.6	0.8	0.75	0.29	玄4区フルイ	黒褐
95	19	土製丸玉	0.4	0.7	0.7	0.10	玄全区フルイ	黒褐
96	20	土製丸玉	0.55	0.8	0.75	0.27	玄1区床隙間	黒
97	21	土製丸玉	0.55	0.75	0.7	0.23	玄1区床隙間	黒
98	22	土製丸玉	0.55	0.8	0.75	0.27	玄3区フルイ	黒
99	23	土製丸玉	0.6	0.75	0.75	0.28	玄3区フルイ	黒
100	24	土製丸玉	0.6	0.75	0.7	0.26	玄3区フルイ	黒
101	25	土製丸玉	0.55	0.8	0.8	0.26	玄1区フルイ	黒
102	26	土製丸玉	0.55	0.8	0.8	0.24	玄3区床隙間	黒褐
103	27	土製丸玉	0.55	0.75	0.75	0.23	玄3区床隙間	黒
104	28	土製丸玉	0.55	0.75	0.75	0.26	玄3区フルイ	黒
105	29	土製丸玉	0.6	0.8	0.7	0.24	玄3区フルイ	黒
106	30	土製丸玉	<0.55>	0.8	0.7	<0.33>	玄3区	黒
107	31	土製丸玉	<0.5>	<0.75>	<0.75>	<0.27>	玄3区	黒
108	32	土製丸玉	0.5	0.7	0.7	0.27	玄4区床隙間	黒
109	33	土製丸玉	0.5	0.7	0.7	0.31	玄全区床隙間	黒
110	34	土製丸玉	0.5	0.75	<0.75>	<0.26>	玄全区床隙間	黒
111	35	土製丸玉	0.4	0.8	0.7	0.29	玄2区床隙間	黒
112	36	土製丸玉	<0.4>	<0.75>	<0.7>	<0.21>	玄2区床隙間	黒
113	37	土製丸玉	0.6	0.85	0.8	0.46	玄2区床隙間	黒
114	38	土製丸玉	0.55	0.8	0.8	0.36	玄3区	黒
115	39	土製丸玉	<0.4>	<0.7>	<0.7>	<0.17>	玄4区床隙間	黒
116	40	土製丸玉	<0.5>	0.85	<0.75>	<0.35>	玄1区	黒
117	41	土製丸玉	0.6	0.85	0.8	0.34	玄1区床隙間	黒
118	42	土製丸玉	0.5	0.8	0.8	0.33	玄2区床隙間	黒
119	43	土製丸玉	0.6	0.8	0.7	0.38	玄3区フルイ	黒
120	44	土製丸玉	0.6	0.8	0.75	0.38	玄全区床隙間	黒
121	45	土製丸玉	1.0	1.2	1.2	1.43	玄1区フルイ	黒
122	46	土製丸玉	0.7	0.9	0.9	0.64	玄全区フルイ	黒
123	47	土製丸玉	0.4	0.8	<0.7>	0.21	玄全区フルイ	黒
124	48	土製丸玉	0.6	0.8	0.7	0.42	玄3区床	黒
125	49	土製丸玉	0.5	0.8	0.8	0.38	玄全区フルイ	黒
126	50	土製丸玉	0.6	0.7	0.7	0.32	玄全区フルイ	黒
127	51	土製丸玉	0.5	0.8	0.8	0.35	玄1区フルイ	黒
128	52	土製丸玉	0.5	0.8	0.8	0.30	玄4区床隙間	黒褐
129	53	土製丸玉	0.5	0.8	0.8	0.28	玄2区フルイ	黒褐
130	54	土製丸玉	0.6	0.8	0.7	0.28	玄3区床	黒
131	55	土製丸玉	0.4	0.7	0.6	<0.18>	玄1区床隙間	黒褐
132	56	土製丸玉	0.4	0.8	0.6	0.19	玄3区フルイ	黒褐
133	57	土製丸玉	0.5	0.8	0.7	0.23	玄4区床隙間	黒
134	58	土製丸玉	0.5	0.6	0.6	0.20	玄4区床隙間	黒
135	59	土製丸玉	0.5	0.7	0.7	0.18	玄全区フルイ	黒
136	60	土製丸玉	0.6	0.8	0.8	0.33	玄3区床隙間	黒
137	61	土製丸玉	0.6	0.8	0.8	0.35	玄3区床	黒
138	62	土製丸玉	0.6	0.75	0.75	0.28	玄3区床	黒
139	63	土製丸玉	0.55	0.75	0.75	0.28	玄3区床隙間	黒
140	64	土製丸玉	0.5	0.75	0.7	<0.25>	玄全区フルイ	黒褐
141	65	土製丸玉	0.5	0.7	0.6	0.26	玄4区床隙間	黒
142	66	土製小玉	0.3	0.5	0.45	0.08	玄2区床隙間	黒
143	67	土製小玉	0.3	0.5	0.5	<0.1>	玄2区床隙間	黒
144	68	土製小玉	0.3	0.5	0.5	0.1	玄1区床隙間	黒
145	69	土製小玉	<0.3>	<0.6>	<0.4>	<0.09>	玄1区床隙間	黒
146	70	土製小玉	<0.3>	0.5	0.4	<0.08>	玄2区	黒
147	71	土製小玉	0.3	0.5	0.5	<0.11>	玄2区床隙間	黒
148	72	土製小玉	0.3	0.5	0.5	0.1	玄2区床隙間	黒
149	73	土製小玉	0.3	0.5	0.5	0.09	玄2区床隙間	黒
150	74	土製小玉	0.4	0.5	0.5	0.09	玄2区床隙間	黒
151	75	土製小玉	0.3	0.5	0.5	0.1	玄全区床隙間	黒
152	76	土製小玉	0.3	0.6	0.55	0.11	玄2区床隙間	黒

第5章 陣馬塚古墳

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考	
	78	77	土製小玉	<0.3>	0.5	0.5	<0.1>	玄2区床隙間	黒
	78	78	土製小玉	0.3	0.5	0.5	0.08	玄2区床隙間	黒
	79	79	土製小玉	0.35	0.5	0.5	0.1	玄3区床隙間	黒
	80	80	ガラス小玉	0.25	0.3	0.3	0.03	玄1区床	濃灰紺
	81	81	ガラス小玉	0.65	0.8	0.7	0.57	丘2区2層	濃紺
	82	82	ガラス小玉	0.6	0.7	0.7	0.49	玄3区床隙間	濃紺
	83	83	ガラス小玉	0.55	0.7	0.6	0.36	側壁外	濃紺
	84	84	ガラス小玉	0.4	0.5	0.5	0.17	玄2区床	濃紺
	85	85	ガラス小玉	0.35	0.55	0.5	0.16	玄2区床隙間	濃紺
	86	86	ガラス小玉	<0.2>	<0.6>	<0.45>	<0.07>	玄2区床	濃紺
	87	87	ガラス小玉	0.3	0.35	0.3	0.06	玄3区床	濃紺
	88	88	ガラス小玉	0.2	0.4	0.4	0.06	玄全区床隙間	濃紺
	89	89	ガラス小玉	0.25	0.4	0.4	0.06	玄3区	濃紺
	90	90	ガラス小玉	0.2	0.35	0.35	0.05	玄3区	濃紺
	91	91	ガラス小玉	0.2	0.4	0.4	0.06	玄全区床隙間	濃紺
	92	92	ガラス小玉	0.15	0.35	0.35	0.04	玄全区床隙間	濃紺
	93	93	ガラス小玉	0.15	0.3	0.25	0.02	玄4区床隙間	濃紺
	94	94	ガラス小玉	0.25	0.4	0.4	0.07	玄3区床	紺
	95	95	ガラス小玉	0.3	0.3	0.3	0.05	玄3区床隙間	紺
	96	96	ガラス小玉	0.3	0.4	0.35	0.06	玄3区床隙間	紺
	97	97	ガラス小玉	0.3	0.3	0.3	0.03	玄3区	紺
	98	98	ガラス小玉	0.25	0.3	0.25	0.03	玄4区床隙間	紺
	99	99	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	100	100	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.04	玄4区床隙間	紺
	101	101	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	102	102	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	103	103	ガラス小玉	0.15	0.35	0.3	0.04	玄4区床隙間	紺
	104	104	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	105	105	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	106	106	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	107	107	ガラス小玉	0.2	0.35	0.3	0.04	玄4区床隙間	紺
	108	108	ガラス小玉	0.2	0.4	0.35	0.05	玄4区床隙間	紺
	109	109	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	玄3区床	紺
	110	110	ガラス小玉	0.2	0.35	0.3	0.04	玄3区床隙間	紺
	111	111	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	玄3区床隙間	紺
	112	112	ガラス小玉	0.2	0.35	0.3	0.03	玄4区床	紺
	113	113	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	<0.03>	玄4区床	紺
	114	114	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	115	115	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	116	116	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.02	玄4区床隙間	紺
	117	117	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.02	玄4区床隙間	紺
	118	118	ガラス小玉	0.15	0.35	0.3	0.03	玄4区床隙間	紺
	119	119	ガラス小玉	0.15	0.3	0.25	0.03	玄4区	紺
	120	120	ガラス小玉	0.15	0.35	0.3	0.03	玄全区フルイ	紺
	121	121	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.02	玄全区フルイ	紺
	122	122	ガラス小玉	0.55	0.65	0.55	0.26	玄2区床	青
	123	123	ガラス小玉	0.3	0.6	0.5	0.14	玄2区フルイ	青

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考	
	78	125	ガラス小玉	0.3	0.4	0.35	0.05	玄3区フルイ	青
	126	126	ガラス小玉	0.3	0.4	0.4	0.06	玄3区フルイ	青
	127	127	ガラス小玉	0.3	0.4	0.4	0.07	玄4区床	青
	128	128	ガラス小玉	0.25	0.4	0.4	0.05	玄4区床	青
	129	129	ガラス小玉	0.4	0.4	0.3	0.06	玄3区フルイ	青
	130	130	ガラス小玉	0.4	0.4	0.35	0.08	玄3区床	青
	131	131	ガラス小玉	0.25	0.4	0.4	0.04	玄1区床隙間	青
	132	132	ガラス小玉	0.4	0.5	0.5	0.11	玄2区フルイ	青
	133	133	ガラス小玉	0.25	0.45	0.45	0.05	玄3区床	青
	134	134	ガラス小玉	0.3	0.5	0.45	0.08	玄4区床	青
	135	135	ガラス小玉	0.3	0.4	0.4	0.06	玄4区床隙間	青
	136	136	ガラス小玉	0.35	0.5	0.45	0.09	玄全区フルイ	青
	137	137	ガラス小玉	0.2	0.4	0.4	0.05	玄2区床	青
	138	138	ガラス小玉	0.2	0.4	0.4	0.03	玄3区床	青
	139	139	ガラス小玉	0.2	0.4	0.4	0.03	玄3区床隙間	青
	140	140	ガラス小玉	0.2	0.35	0.35	0.02	玄4区床	青
	141	141	ガラス小玉	0.25	0.4	0.4	0.04	玄4区床	青
	142	142	ガラス小玉	0.2	0.4	0.35	0.02	玄4区フルイ	青
	143	143	ガラス小玉	0.2	0.4	0.4	0.02	玄全区フルイ	青
	144	144	ガラス小玉	0.25	0.3	0.3	0.02	玄3区床	青
	145	145	ガラス小玉	0.25	0.35	0.3	0.02	玄3区床隙間	青
	146	146	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.02	玄4区床	青
	147	147	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	玄4区床	青
	148	148	ガラス小玉	0.2	0.35	0.3	0.03	玄4区床	青
	149	149	ガラス小玉	0.4	0.6	0.5	0.14	玄2区床	濃青
	150	150	ガラス小玉	0.3	0.3	0.3	0.04	玄3区フルイ	濃青
	151	151	ガラス小玉	0.3	0.3	0.25	0.03	玄4区床隙間	濃青
	152	152	ガラス小玉	0.4	0.7	0.6	0.21	玄2区床隙間	灰濃青
	153	153	ガラス小玉	0.15	0.3	0.25	0.01	玄4区床	濃黒紺
	154	154	ガラス小玉	0.3	0.5	0.4	0.06	玄3区フルイ	青緑
	155	155	ガラス小玉	0.3	0.55	0.5	0.10	玄2区フルイ	青緑
	156	156	ガラス小玉	0.2	0.6	0.5	0.06	玄全区フルイ	青緑
	157	157	ガラス小玉	0.3	0.5	0.5	0.08	丘2区2層	青緑
	158	158	ガラス小玉	0.35	0.3	0.3	0.02	玄1区フルイ	青緑
	159	159	ガラス小玉	0.3	0.3	0.25	0.01	玄3区床隙間	青緑
	160	160	ガラス小玉	0.3	0.5	0.45	0.07	玄1区床隙間	黄
	161	161	ガラス小玉	0.3	0.4	0.4	0.08	玄1区床隙間	黄
	162	162	ガラス小玉	0.4	0.45	0.4	0.10	玄2区床	黄
	163	163	ガラス小玉	0.3	0.45	0.4	0.08	玄2区床隙間	黄
	164	164	ガラス小玉	0.3	<0.3>	0.3	<0.02>	玄4区床隙間	黄
	165	165	ガラス小玉	0.3	0.4	0.35	0.03	玄4区床	黄
	166	166	ガラス小玉	0.3	0.4	0.4	<0.07>	玄4区床隙間	黄
	167	167	ガラス小玉	0.35	0.4	0.35	0.06	玄全区フルイ	黄
	168	168	ガラス小玉	0.2	0.4	0.3	0.05	玄1区フルイ	黄
	169	169	ガラス小玉	0.25	0.5	0.4	0.05	玄2区床	黄
	170	170	ガラス小玉	0.3	0.4	0.35	0.09	玄2区床	黄
	171	171	ガラス小玉	0.25	0.4	0.3	0.03	玄2区床	黄

第5章 陣馬塚古墳

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考
78	172	ガラス小玉	0.3	0.45	0.4	0.07	玄2区床	黄
〃	173	ガラス小玉	0.3	0.55	0.5	0.1	玄2区	黄

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考
78	174	ガラス小玉	0.25	0.4	0.4	<0.05>	玄3区床隙間	黄
〃	175	ガラス小玉	0.3	0.45	0.4	0.05	玄4区床隙間	黄

表19 第6章 宮平遺跡 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	底部				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
147	1住	1	須恵坏	口~底1/4	(12.9)	(5.6)	4.7	(6.6)	灰白	ロクロナデ、底部ヘラナデ	ロクロナデ	
"	"	2	軟須恵坏	口~底1/3	(13.5)	(8.0)	3.2	(8.0)	灰白	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→ヘラナデ	ロクロナデ	焼成：還元不足
"	"	3	須恵坏	底部		(6.4)			灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	4	坏	底部		4.6			にぶい橙	ロクロナデ、底部回転離し糸切り不調整	ロクロナデ	胎土：石英
"	"	5	内黒坏	口~底1/3	(14.0)	5.6	4.5		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転離し糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	6	内黒塊	底部		7.4			にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	7	内黒塊	底部1/4		(7.8)			淡橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ→放射状ヘラミガキ	
"	"	8	灰釉塊	底部		7.4			灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土：長石、石英
"	"	9	須恵鉢	ほぼ完形	17.5	10.3	17.1		灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り→ヘラナデ	ロクロナデ	口縁端面取り
"	2住	1	内黒坏	口縁~ 体部1/6	(12.4)		4.0		にぶい橙	口縁部ヘラミガキ、体部~ 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ←底部ヘラオサエ	
"	"	2	須恵高台坏	底部1/4		(8.6)			青灰	ロクロナデ←底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	3住	1	内黒坏	体部~底 1/4		(8.4)			にぶい黄橙	ロクロナデ←底部外周ヘラケズリ、 底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラミガキ	胎土：石英
"	"	2	内黒坏	口~体部 1/3	(12.0)				明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ→放射状ヘラミガキ →ヨコミガキ	
"	"	3	内黒高台坏	底部1/4		(11.8)			橙	ロクロナデ	ロクロナデ→体部ヨコミガキ、 底部ヘラミガキ	
"	4住	1	内黒坏	口~底1/8	(16.0)	(6.6)	4.8		明赤褐	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ→口縁部ヨコミガキ →放射状ヘラミガキ	
"	"	2	須恵坏	口~底1/3	(13.2)	(5.6)	4.1	(6.0)	灰黄褐	ロクロナデ、底部回転離し糸切り不調整	ロクロナデ	焼成：還元不足
"	"	3	内黒小形鉢	口~底1/3	11.6		7.2		浅黄橙	口縁部ヨコナデ←体部ヘラナデ →ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、口縁部下指頭圧 痕をめぐらせる、体部ヘラミガキ	内部底面付着物あり
"	"	4	須恵耳付長頸壺	頸~胴1/3	頸 (12.0)	体 (29.8)			オリーブ灰	ロクロナデ←胴部タタキ	ロクロナデ	耳の詳しい形状、 数は不明(4耳以下)
"	5住	1	須恵坏	底部1/2		(6.0)		(6.7)	青灰	ロクロナデ←底部外周ヘラケズリ、 底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	体部1/4	(16.1)				青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁端面取り、 金属器模倣
"	"	3	須恵高台坏	底部1/3		(10.8)			赤灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	4	内黒坏	口縁1/3	(13.0)				橙	口縁部ヨコナデ、体部下ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部タタミガキ	
"	"	5	内黒坏	口縁1/3	(13.0)				橙	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ、 体部ヘラケズリ	ヨコミガキ	
"	"	6	内黒坏	口~底1/6	(10.6)		(5.0)		明赤褐	口縁部ヨコナデ←体部ヘラケズリ	多角状ヘラミガキ	
"	"	7	坏	底部		(8.0)			にぶい橙	底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ←底部ヘラオサエ	
"	"	8	小形鉢	口~底1/2	(10.0)		7.3		にぶい橙	口縁部ヨコナデ←ヘラケズリ →ヘラナデ	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ →体部ヘラミガキ	
"	"	9	甕	口~胴1/3	(25.6)				淡橙	口縁部ヨコナデ←胴上部ヘラケズリ →ヘラナデ	口縁部ヨコナデ	
"	7住	1	須恵坏	底部1/4		(7.2)			灰白	体部ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	体部~底 1/5	(5.6)		(7.0)		明緑灰	体部ロクロナデ←底部外周ヘラケズリ、 底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	内黒坏	底部1/3		(7.2)			橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、 底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
148	9住	1	坏	口~底4/5	12.7	5.3	4.2		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転離し糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底1/3	(13.2)	(5.2)	3.8		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	内黒坏	口~底3/5	(11.9)	4.5	3.9		にぶい赤褐	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ(一部)、 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	放射状ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底2/5	(12.2)	4.8	4.1		にぶい橙	ロクロナデ、体部下ヘラケズリ、 底部回転糸切り	ロクロナデ	
"	"	5	内黒坏	口~底1/2	(12.4)	(5.6)	3.3		にぶい橙	ロクロナデ←ナデオサエ、底部 回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヨコミガキ→放射状暗文	
"	"	6	内黒坏	口~底1/2	(12.6)	5.0	5.5		橙	ロクロナデ←底部外周ヘラケズリ、 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	7	塊	口~底1/2	(15.2)	(6.6)	5.2		にぶい赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラミガキ	
"	"	8	内黒塊	口~底1/3	(16.2)	(7.6)	(6.7)		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ→口縁部ヨコミガキ→体部 ナメミガキ→放射状ヘラミガキ	内部底周囲にキワ ドリミガキ
"	"	9	内黒塊	口~底1/3	(15.0)				橙	ロクロナデ、底部回転糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ→口縁部ヨコミガキ →放射状ヘラミガキ	
"	"	10	塊	底部		7.3			にぶい橙	ロクロナデ、底部回転離し糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ→十字暗文	
"	"	11	両黒塊	底部		7.5			黒	ロクロナデ、底部回転糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ→放射状ヘラミガキ	胎土：石英
"	"	12	内黒塊	底部		7.0			にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ→十字暗文	
"	"	13	内黒塊	口~体部 1/3	(16.4)				にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ→口縁部ヨコミガキ →放射状ヘラミガキ	胎土：長石
"	"	14	内黒塊	口~体部 1/3	(15.8)				にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコヘラナデ→ 放射状ヘラミガキ	
"	"	15	内黒塊	口~体部 1/4	(13.2)				橙	ロクロナデ	ロクロナデ→口縁部ヘラミガキ →体部放射状ヘラミガキ	
"	"	16	内黒塊	底部		(6.0)			にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ	
"	"	17	内黒塊	底部		(6.1)			浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り →ヘラナデ	ロクロナデ→放射状ヘラミガキ	胎土：石英

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考	
					口径	底径	器高	内底					
148	9住	18	灰釉碗	底部		6.8			灰オリーブ	ロクロナデ、底部回転糸切り →回転ヘラナデ		釉ハケ塗り	
"	"	19	内黒高台皿	口～底1/3	(13.7)				にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ→口縁部ヨコミガキ→放射状ヘラミガキ		
"	"	20	内黒高台皿	口～底1/2	(12.7)				灰褐	ロクロナデ、底部回転糸切り →回転ナデ	ロクロナデ→粗い暗文風放射 状ヘラミガキ		
"	"	21	内黒高台皿	ほぼ完形	11.4	6.1	3.1		にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ→ヨコナデ→放射 状ヘラミガキ		
"	"	22	内黒高台皿	口～底2/3	11.8				にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ→口縁部ヨコミガ キ→放射状ヘラミガキ		
"	"	23	内黒高台皿	口～底2/3	(15.4)	(9.6)	5.3		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ→口縁部ヨコミガ キ→放射状ヘラミガキ		
"	"	24	灰釉高台皿	口～底1/4	(14.5)	(6.3)	3.0		灰白	ロクロナデ←体中部回転ヘラ ケズリ	ロクロナデ		釉ハケ塗り
"	"	25	甕	口～底2/3	22.8	5.0	28.2		橙	体部上半ロクロナデ、体部下 半ヘラケズリ	体部上半ロクロナデ、体部下 半ヘラケズリ		胎土：石英
"	"	26	小形甕	口～胴上 1/6	(14.2)				灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
"	"	27	甕	口～胴上 2/5	(21.6)				明黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ		
"	"	28	須恵大甕	胴下～底 1/4		18.8			青黒	格子状タタキ	胴部ヨコナデ→粗いタテナデ、 底部回転ナデ		
"	"	29	両黒鉢	口～体部 1/4	(20.6)				にぶい赤褐	口縁部ロクロナデ→体部ヘラ ケズリ→ヨコミガキ	ロクロナデ→ヨコミガキ→体 部粗いタテミガキ		
"	"	30	内黒片口鉢	口～体部 1/4	(18.8)				にぶい黄橙	ロクロナデ、体下部ヘラケズ リ	ロクロナデ→ヨコミガキ		口縁端面取り、 胎土：石英
"	"	31	台付鉢	口～底1/3	(25.8)	(15.3)	14.6		灰褐	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		脚部に方形三方透 し
"	"	32	両黒小壺	頸～胴1/4		体 6.0			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		
149	10住	1	内黒坏	ほぼ完形	12.4	2.3	3.8		浅黄	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘ ラケズリ	体部ヨコナデ、底部ヘラオサ エ→ヘラナデ		
"	"	2	内黒坏	完形	12.4	1.5	4.0		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体下部～底 部ヘラケズリ→ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラオ サエ→ヘラミガキ		
"	"	3	小形鉢	完形	8.6	4.4	6.8		明赤褐	口縁部ヨコナデ→体部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナ デ、底部指頭圧痕		
"	"	4	小形甕	口縁部1/4	(12.8)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラ ミガキ	口縁部ヨコナデ→口縁～胴上 部ヘラミガキ		
"	"	5	土製支脚	脚部完形	3.9	10.0	7.8		橙	脚部タテ方向のナデ→脚裾部 ヨコナデ	脚部ヘラナデ、脚裾部ヨコナ デ		焼成：片側二次被 熱
"	"	6	甕	ほぼ完形	22.0				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヘラナデ		
"	12住	1	須恵坏蓋	天～口1/4	(17.0)				灰	ロクロナデ	ロクロナデ		
"	"	2	須恵坏蓋	天～口1/4	(14.1)				灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラ ケズリ	ロクロナデ		
"	"	3	須恵坏蓋	天～口1/4	(13.5)				灰	ロクロナデ、天井部回転ヘラ ケズリ	ロクロナデ		
"	"	4	須恵坏	ほぼ完形	10.2		3.3		灰	体部ロクロナデ、底部静止ヘ ラケズリ	口縁部ロクロナデ		
"	"	5	須恵坏	口～底2/3	(13.8)	(6.0)	4.4 (8.8)		灰	体部ロクロナデ、底部外周静止ヘラケズリ、 底部回転糸切り(ヘラ除去)静止ヘラケズリ	ロクロナデ		
"	"	6	内黒坏	ほぼ完形	16.4		6.3		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘ ラケズリ	体部ヘラミガキ		
"	"	7	内黒坏	ほぼ完形	13.0		4.9		灰褐	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘ ラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ		
"	"	8	内黒坏	ほぼ完形	13.7		5.5		にぶい褐	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、ヘラナデ→ ヘラミガキ		
"	"	9	内黒小形土器	口～底1/3	(6.6)	(3.5)	3.8		にぶい橙	ヘラミガキ	ヘラナデ		
"	"	10	小形鉢	完形	8.8		3.8		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ→体部ヘラナ デ		
"	"	11	須恵短頸壺	口～胴1/4	7.0				灰	胴上部ロクロナデ、胴下部ヘ ラケズリ	ロクロナデ		
"	"	12	内黒高坏	坏部1/2	12.7				灰白	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ →坏部体部ヘラケズリ	坏部ヘラミガキ		
"	"	13	須恵提瓶	口頸欠		体部 16.6/13.3	(15.9)		灰	肩部ヨコナデ→体部カキ目→ タタキ	肩部ヘラナデ→体部ヘラナデ ←同心円タタキ		
"	"	14	須恵鉢	口～底4/5	17.0		7.7		灰	体部ロクロナデ、底部外周回転ヘ ラケズリ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ、底部打欠き、剥 取り		
"	"	15	内黒鉢	完形	15.4		10.3		にぶい褐	口縁部ヨコナデ→体部ヘラミ ガキ	ヘラミガキ		
150	"	16	甕	ほぼ完形	23.9	7.5	21.7		にぶい褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ		
"	"	17	甕	口～胴2/3	18.6				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ、 胴部ヘラナデ		
"	"	18	小形甕	口～底4/5	15.2		19.1		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナ デ		
"	"	19	甕	口～底4/5	20.3	3.4	34.3		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナ デ		
"	"	20	甕	口～胴1/4	(19.3)				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナ デ		
"	"	21	甕	口～胴4/5	19.8				にぶい橙	ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナ デ		
"	15住	1	内黒坏	口～体1/8	(13.7)				明赤褐	ヘラケズリ	ヘラミガキ		実測図の器形信頼 度低い
"	"	2	内黒坏	口～底1/6	(15.0)		4.1		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ		
"	"	3	内黒小形鉢	口～体1/3	(9.0)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラミ ガキ	ヘラミガキ		
"	17住	1	須恵坏蓋	天～口1/4	(13.6)				褐灰	天井部回転ヘラケズリ、天井 →口縁ロクロナデ	ロクロナデ		
"	"	2	須恵坏蓋	つまみ～ 口1/2	15.7		2.7		青灰	天井部回転ヘラケズリ、口縁 部ロクロナデ	ロクロナデ		

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
150	17住	3	須恵坏	口~底1/3	(13.2)	9.0	4.4		灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	4	坏	口~底4/5	16.7	11.4	4.8		にぶい橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	口縁端面取り状
"	"	5	坏	口~底1/2	15.6	8.0	3.9		橙	ヨコナデ	ヘラミガキ	
"	"	6	坏	ほぼ完形	12.9		4.0		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	7	内黒坏	ほぼ完形	14.6		4.8		橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
151	"	8	内黒坏	ほぼ完形	12.0	6.6	4.2		橙	口縁部ヘラミガキ←体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	9	内黒坏	口~底1/3	(14.0)	(9.0)	3.6		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	10	内黒坏	口~底4/5	13.0		4.4		橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	11	内黒坏	口~底1/2	(13.5)	(9.5)	4.0		明黄褐	口縁部ヨコナデ→体部ヘラナデ←体~底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	12	内黒坏	口~底1/2	(14.0)	(7.6)	4.8		にぶい橙	口縁部ヨコナデ←体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	13	内黒坏	口~体部1/4	(13.9)	(9.5)	(4.5)		にぶい褐	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコミガキ、体部格子状ヘラミガキ	
"	"	14	内黒坏	口~体部1/3	(13.0)	(8.6)	(3.9)		明褐灰	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	15	内黒坏	口~底1/3	(13.4)	(8.2)	4.2		橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラナデ←底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	16	内黒坏	口~底4/5	12.2		4.6		橙	体部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	17	内黒坏	ほぼ完形	12.3	8.4	3.9		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	18	内黒坏	口~体部1/4	(14.4)	(7.4)	3.8		橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	19	内黒坏	口~体部1/2	(16.0)	(6.0)	5.0		明赤褐	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	20	内黒坏	口~底1/2	(12.0)	10.1	5.2		黄橙	口縁~体部ヨコナデ←底部ヘラケズリ→口縁~底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	21	内黒坏	口~底1/2	12.0	10.4	4.7		にぶい黄橙	体部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	胎土：雲母
"	"	22	内黒鉢	口~底2/3	14.0	9.0	7.7		橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	23	壺	ほぼ完形	(18.2)	6.9	26.2		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ、頸部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	口頸部ヨコミガキ、胴部ハケ	
"	"	24	壺	口~胴上	21.6				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ→タテミガキ、胴上ヨコハケ→ヨコミガキ、胴上部ハケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコハケ→ヨコナデ、胴上部ヘラナデ	
"	"	25	小形甕	口~胴上1/2	(14.6)				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ←胴上部ハケ	口縁部ヨコナデ←胴上部ハケ	
"	"	26	小形甕	口~胴1/4	(16.2)				橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁にふきこぼれ痕あり
"	"	27	小形甕	口~胴上2/3	16.9				橙	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ、胴下部ヘラケズリ	
"	"	28	小形甕	口~底1/2	15.0	6.8	12.8		明赤褐	口縁部ヨコナデ←胴上部ハケ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコハケ→ヨコナデ→胴部ヘラナデ	焼成：外面外側二次被熱
"	"	29	小形甕	口~底4/5	13.9	5.3	7.3		赤褐	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラミガキヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ←底部ヘラナデ、頸部指頭尻痕	
"	"	30	小形甕	ほぼ完形	12.0	5.3	7.3		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	"	31	小形甕	口~底2/3	11.4	4.1	7.5		黒褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	32	小形甕	口~底2/3	12.1	5.0	10.5		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	33	小形甕	口~胴1/2	(11.4)				橙	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラミガキ←ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ→ヘラミガキ	
"	"	34	鉢	口~底1/3	20.3	6.5	15.6		にぶい褐	口縁部ヨコナデ←頸下部ハケ→体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←体部ハケ	
152	"	35	内黒小形甕	口~底2/3	14.2	7.0	17.0		暗褐	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	36	甕	口~胴2/3	17.1				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	"	37	甕	口~胴3/4	18.6				にぶい褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ヨコミガキ	口縁部ヨコナデ→胴部ヨコミガキ	
"	"	38	甕	口~胴1/2	19.5				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→タテミガキ、胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ、胴部ヘラケズリ→ヨコミガキ	
"	"	39	甕	ほぼ完形	22.0		38.8		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	40	須恵高坏	坏1/3、脚完形	(11.0)	8.2	(12.6)		暗灰	ロクロナデ	坏部ロクロナデ	長脚一段三方透し
"	"	41	高坏	坏部3/4					にぶい褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	脚内面黒色処理
"	"	42	高坏	脚部ほぼ完形		12.2			明赤褐	ヨコナデ→ヘラミガキ	脚上部ヘラオサエ→ヨコナデ、脚下部ヨコナデ	
"	"	43	高坏	坏部1/3	(19.5)				にぶい黄橙	ヨコミガキ	口縁部ヨコナデ→坏体部放射状ヘラミガキ	
"	"	44	甌	ほぼ完形	25.7		27.0		橙	口縁部ヨコナデ←頸部ハケ→胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラミガキ	
"	"	45	内黒鉢	口~底2/3	(17.8)		11.8		橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ→ヘラミガキ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	
"	"	46	内黒鉢	口~底1/4	(21.4)	(8.4)			橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ→体中部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	47	両黒鉢	口~底1/3	(24.2)		(13.6)		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、体下部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	口縁部ヨコミガキ、体部ナメミガキ	
"	"	48	内黒鉢	口~底1/2	(19.7)	9.1	10.5		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→体部ナメミガキ	
"	"	49	小形無頸壺	完形	5.4		5.6		橙	胴上部ヨコナデ、胴下部ヘラケズリ	ヨコナデ	円形透し2

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
152	17住	50	手握ね	完形	6.3	5.0	5.0		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラナデ	
"	"	51	手握ね	底部		3.0			にぶい橙	底面木葉圧痕		
153	18住	1	須恵坏蓋	天～口1/6	(17.2)				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	口～底3/4	14.4	7.5	4.1	9.4	暗灰	ロクロナデ、底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	3	坏	口～底1/4	(13.3)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	内面黒色処理?
"	"	4	内黒坏	口～体部1/2	(15.2)				にぶい褐	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	須恵小形鉢	口～胴1/6	(13.3)				にぶい黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	焼成：還元不足
"	"	6	甗	口～胴上1/2	22.0				橙	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	7	須恵鉢	口～胴3/4	20.8				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	8	内黒鉢	ほぼ完形	12.5	8.0	8.2		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	19住	1	須恵高台坏	口～底1/2	(12.0)	(7.1)	4.1		黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏蓋	つまみ～口1/2	18.4		4.8		明赤褐	つまみ～口縁部ロクロナデ→天井上部回転ヘラケズリ→天井～口縁部ヨコミガキ	天井～口縁部ロクロナデ→天井上部タテミガキ、天井～口縁部ヨコミガキ	
"	"	3	内黒坏	口～底1/2	(12.0)		4.7		にぶい橙	口縁～底部ヘラミガキ→体下～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	20住	1	内黒坏	口～底1/3	(8.6)	(5.0)	3.0		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ→ヘラミガキ	
"	21住	1	内黒坏	口～体1/3	(13.6)				にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	2	内黒坏	口～底1/4	(13.0)	(8.0)			褐灰	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒鉢	口～体部1/4	(16.0)				にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	22住	1	須恵高台坏	底部1/2		(9.8)			灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口～底1/2	(16.9)	(7.0)	5.2		明赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切り→ヘラナデ	ヘラミガキ	胎土：長石
"	23住	1	内黒坏	口～底3/4	13.3	3.0	4.7		明黄褐	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	2	内黒坏	口～底1/4	(9.6)	(2.0)	4.4		にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒碗	底部1/3		6.2			淡黄	ロクロナデ→底部回転糸切り	ヘラナデ	
"	"	4	甗	口～胴上1/4	(22.7)				明赤褐	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラナデ	
"	26住	1	須恵坏	体下～底部		6.7		7.3	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口～底1/4	(14.9)	(9.0)	4.4		赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	内黒坏	口～底3/5	14.8	8.2	4.5		にぶい橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
154	"	4	甗	口～胴1/4	(21.5)				明赤灰	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ヘラナデ	
"	"	5	須恵甗	胴～底2/3		13.4			暗紫灰	胴部タタキ、底部タタキ→ヘラナデ	胴部タタキ→ナデ消し、胴下～底部指ナデ	
"	27住	1	須恵坏	ほぼ完形	13.9	8.5	4.5	7.6	黄灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	口～底2/3	14.4	7.7	4.1	7.0	黄灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	3	須恵坏	口～底1/2	14.8	7.7	4.8	8.1	明褐灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：わずか還元不足
"	"	4	須恵坏	口～底2/3	13.8	8.0	4.0	7.7	灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ→ヘラナデ	ロクロナデ	
"	"	5	須恵坏	口～底1/4	12.4	6.4	4.7	6.5	黄灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ?→ヘラナデ	ロクロナデ	焼成：やや還元不足
"	"	6	須恵坏	口～底1/3	14.2	(8.1)	4.7	(8.1)	明褐灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：やや還元不足
"	"	7	須恵坏	口～底4/5	14.9	8.0	4.6	8.8	赤灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	焼成：還元不足
"	"	8	須恵坏	口～底4/5	13.0	7.3	3.5	7.4	灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	9	須恵坏	口～底4/5	13.9	7.5	3.6	7.5	灰白	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	10	須恵坏	ほぼ完形	13.0	7.7	3.5	8.2	灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	11	須恵高台坏	口～底1/2	13.2	10.0	3.5	10.5	褐灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土：石英
"	"	12	須恵高台坏	口～底4/5	13.5	9.5	3.7	10.7	灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	13	須恵高台坏	口～底1/2	14.4	9.8	4.4		浅黄橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：還元不足
"	"	14	須恵高台坏	口～底4/5	14.9	10.6	4.0	12.5	にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	焼成：還元不足
"	"	15	内黒坏	口～底1/2	(15.2)	(8.2)	5.3		にぶい赤褐	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	口縁部一部面取り状
"	"	16	内黒坏	口～底4/5	13.0	7.8	4.1		橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	17	内黒坏	口～底2/3	(13.0)	7.6	4.1		橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	18	内黒坏	口～底1/3	(13.0)	7.2	4.8		にぶい褐	口縁～体部ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	口縁は、残りが悪く、底径は外周ケズリのため傾度低い。
"	"	19	内黒坏	口～底1/3	(12.0)	(7.6)	4.1		にぶい橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ→ヘラナデ	ヘラミガキ	胎土：石英

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
154	27住	20	内黒環	口～底3/5	(15.2)	7.8	5.7		にぶい橙	口縁～体部ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	21	内黒環	口～底1/2	(16.2)	6.4	5.9		灰褐	口縁～体部ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	22	内黒環	口～底2/3	16.2	7.1	5.9		浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	〃	23	須恵甕	口～胴1/8	(27.0)				橙	口縁部ヨコナデ、胴部タタキ	口縁部ヨコナデ、胴部タタキ	焼成：還元不足
〃	〃	24	甕	口～胴1/5	(14.5)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土：金雲母
〃	〃	25	甕	胴～底1/4		9.6			明赤褐	胴部静止ヘラケズリ	ヘラナデ	
155	〃	26	小形甕	口～底1/3	(8.9)		8.5		黒褐	口縁～胴部ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	27	須恵鉢	口～底1/4	(22.9)	(12.1)	14.0		にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	軟質の須恵器、焼成：還元不足
〃	28住	1	須恵杯蓋	天～口1/4	(16.5)				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	内黒鉢	口～体部1/4	(17.0)				明赤褐	ロクロナデ	ヘラミガキ	胎土：長石
〃	〃	3	甕	口～肩1/6	(14.6)				明赤褐	口縁部ヨコナデ→肩部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	
〃	〃	4	甕	口～底1/3	(20.0)		(21.6)		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ	
〃	〃	5	甕	口～肩1/4	(22.5)				褐	口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ		
〃	〃	6	甕	口～胴上1/6	(18.0)				橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラケズリ	胴上部ヘラナデ	
〃	29住	1	須恵杯	口～底1/2	(13.0)	(9.2)	3.2	(9.4)	灰白	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	30住	1	須恵杯	ほぼ完形	13.8	7.4	3.6	7.1	にぶい黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	焼成：還元不足
〃	〃	2	須恵杯	口～底1/2	13.0	7.0	3.8	6.6	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
〃	〃	3	須恵杯	口～底1/2	(12.6)	(6.4)	(3.4)	(7.7)	赤灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	胎土：長石
〃	〃	4	内黒環	口～底1/2	(15.0)	(7.2)	(3.7)		にぶい褐	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	5	内黒環	ほぼ完形	17.3	9.2	4.9		明赤褐	口縁～体部ロクロナデ→体下部ヘラケズリ、底部回転糸切り→ヘラケズリ	ロクロナデ→ヘラミガキ	
〃	32住	1	須恵杯	口～底1/6	(14.8)		(3.8)	(9.0)	黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	
〃	〃	2	内黒環	口～底1/2	15.1	8.3	4.6		明赤褐	ロクロナデ、底部ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	3	甕	口～底1/2	(21.0)	(4.2)	30.2		橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ→ナデ消し	
〃	〃	4	甕	口～胴1/4	(24.5)				明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ→胴下部ハケ	
〃	33住	1	須恵杯	口～底1/2	(10.7)		3.2		灰	口縁～体部ロクロナデ→体下～底部ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵杯	口～底1/3	(10.9)		2.8		灰	口縁～体部ロクロナデ→体下～底部ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土：長石
〃	〃	3	不明						橙			
〃	34住	1	須恵杯	口～体1/4	(12.6)				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土：砂粒殆ど無し
〃	35住	1	須恵杯	口～底1/4	(13.4)	6.0	3.7	6.0	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	2	内黒環	ほぼ完形	11.8	6.4	3.5		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	3	内黒環	口～底2/3	(14.5)	7.9	4.2		にぶい橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
156	36住	1	須恵杯蓋	完形	10.7		3.2		灰	天井部回転ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵杯蓋	天～口2/3	(16.4)		(1.7)		暗赤灰	天井部回転ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	3	須恵杯蓋	天～口1/4	(13.2)		(2.1)		灰	天井部回転ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	4	須恵杯	口～底3/5	14.6	7.6	3.8	9.0	緑灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：やや還元不足
〃	〃	5	須恵杯	口～底3/5	(12.6)	7.4	3.8	8.6	浅黄	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ→ヘラナデ	ロクロナデ	焼成：やや還元不足
〃	〃	6	須恵杯	口～底2/5	(13.4)	8.0	4.0	8.2	青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	7	須恵杯	口～底2/5	(14.0)	8.5	3.9	9.2	緑灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	8	須恵杯	ほぼ完形	12.7	6.2	3.5	7.8	暗青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：やや還元不足
〃	〃	9	須恵杯	ほぼ完形	14.0	7.6	3.9	8.8	灰	ロクロナデ、底部外周静止ヘラケズリ、底部静止強引き糸切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	10	須恵杯	ほぼ完形	9.5	7.8	2.7		青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ、底部ヘラナデ	
〃	〃	11	須恵杯	口～底1/8	(11.2)	(9.8)	(2.9)	(9.0)	灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	突刺箇の信頼度低い
〃	〃	12	須恵高台杯	口～底1/2	12.0	7.8	3.8		青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ→ヘラナデ	ロクロナデ	
〃	〃	13	須恵高台杯	体～底1/4		(11.1)			灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：やや還元不足
〃	〃	14	須恵高台杯	底部1/4		(12.6)			灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	15	須恵高台杯	底部1/2		7.1			灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土：砂粒殆ど無し
〃	〃	16	須恵高台杯	ほぼ完形	18.7	13.8	6.6		暗赤灰	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	焼成：還元不足

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
156	36住	17	内黒坏	口~底1/4	(15.6)	7.4	5.0		橙	口クロナデ、底縁周面静止ヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	18	坏	ほぼ完形	12.9		4.2		橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	19	内黒坏	ほぼ完形	12.4		4.7		橙	体上部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	体上部ヨコナデ、体下部ヨコミガキ	
"	"	20	内黒坏	ほぼ完形	12.4	10.1	4.4		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	体部ヨコナデ←底部ヘラナデ←ヘラオサエ	
"	"	21	坏	ほぼ完形	11.9	8.7	4.0		橙	口縁部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	22	内黒坏	口~底2/3	(12.2)	9.9	4.3		明褐	口縁部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	23	内黒坏	口~底1/2	(12.0)	7.8	3.8		褐	口縁部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←口縁~底部ヨコナデ←底部ヘラオサエ	
"	"	24	内黒坏	口~底3/5	(12.6)	7.2	4.1		明黄褐	口クロナデ、底部ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	25	坏	ほぼ完形	11.2		4.1		橙	口縁部ヨコナデ、体下~底部静止ヘラケズリ	口縁~体部ヨコナデ、底部ヘラミガキ	
"	"	26	坏	口~底1/3	(10.6)		3.4		橙	口縁部ヨコナデ、体部ヨコオサエ、底部静止ヘラケズリ	ヘラナデ	胎土：長石
"	"	27	内黒坏	ほぼ完形	11.0	6.6	3.8		明赤褐	口クロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヨコミガキ	
"	"	28	内黒坏	口~底1/4	(12.0)	(10.6)	(3.0)		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラオサエ→放射状ヘラミガキ	
"	"	29	内黒坏	口~底1/2	(10.4)	(9.4)	(2.8)		明赤褐	口縁部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラオサエ→ナデ	
"	"	30	坏	口~底1/3	(12.2)	(10.0)	(2.9)		橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	
"	"	31	高坏	坏~脚上1/2	(15.0)				明赤褐	口縁~体上部ヘラナデ、体下~脚上部ヘラケズリ	坏部ヘラミガキ	
"	"	32	内黒高坏	坏部完形	16.8				橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	胎土：長石
"	"	33	甕	口~底2/3	21.0	6.2	35.1		明褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ←胴上半、底部粗いヘラナデ	焼成：二次被熱
"	"	34	甕	口~胴上1/8	(20.6)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ←胴上部ハケ	口縁部ヨコナデ←胴上部ヘラナデ	実測図の信頼度低い 胎土：石英
"	"	35	甕	口~胴上部	19.0				赤褐	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ→ヨコナデ	胎土：長石 焼成：片側外面二次被熱
"	"	36	甕	ほぼ完形	15.6	3.3	25.1		赤褐	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
157	"	37	甕	胴~底部		3.4			橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	ヘラナデ	焼成：二次被熱
"	"	38	須恵甕	口~肩1/4	(30.4)				灰白	口縁部ロクロナデ、肩部タタキ	ロクロナデ	
"	"	39	甕	口~肩1/4	(13.8)				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	
"	"	40	小形甕	口~胴1/4	(13.6)				明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	"	41	小形甕	口~胴上1/4	(12.4)				にぶい褐	口頸部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口頸部ヨコナデ	
"	"	42	甕	胴~底1/8		9.3			橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ←胴下部ハケ	実測図の信頼度低い
"	"	43	須恵長頸壺	口~頸2/3	(7.3)				青灰			焼成：表面のみ還元不足
"	"	44	小形甕	胴~底1/2	(13.4)	5.5			明赤褐	口クロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	45	鉢	完形	10.6	3.4	9.3		赤褐	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ	
"	"	46	内黒鉢	完形	11.0	2.8	10.0		明褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	胎土：長石
"	"	47	甗	ほぼ完形	20.5	7.0	9.7		にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	口縁~体上部ヨコナデ、体下~底部ヘラナデ	
"	"	48	内黒甗	ほぼ完形	10.8	5.4	13.9		橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	37住	1	須恵坏	口~底2/3	10.1	6.0	4.5	5.3	灰	口クロナデ、底部静止ヘラケズリ→ヘラナデ	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底2/3	13.8		4.5		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ、体~底部ヘラオサエ→放射状ヘラミガキ	
"	"	3	内黒坏	口~底2/3	13.0		4.9		橙	口縁部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/2	(12.4)		4.3		橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヨコミガキ←底部ヘラオサエ	
"	"	5	須恵円面硯	完形	13.4	14.6	5.0		灰	口縁~脚台上部ロクロナデ→脚台部ヘラケズリ→脚台上部ユビナデ	口縁部ロクロナデ→脚台部ヘラケズリ→脚台裾部ロクロナデ	円形四方透し、墨面半分割落、巻状の強い盛り面あり
"	"	6	甕	ほぼ完形	16.2	2.3	23.4		橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	7	内黒高坏	坏1/4、脚1/2		9.5			橙	坏口縁部ヨコナデ、坏体部ヘラケズリ→ヨコミガキ、脚部ヘラケズリ→ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚下部ヘラケズリ	
"	"	8	内黒高坏	坏部5/6	15.6		4.3		橙	口縁部ヨコナデ、体下部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←坏上部ヨコミガキ、坏下部放射状ヘラミガキ	
158	38住	1	須恵大甕	口~胴2/3	(21.1)				灰	口縁部櫛波状文←口縁~胴部ロクロナデ←平行タタキ	口縁部ロクロナデ、肩部同心円タタキ←胴部平行タタキ	
"	"	2	甕	口~胴1/4	(24.4)				にぶい褐	胴部ハケケズリ	胴部ハケナデ	
"	"	3	鉢	完形	8.3		6.8		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴~底部ヘラナデ	
"	"	4	鉢	完形	9.5		10.6		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	41住	1	須恵环蓋	つまみ~口1/2		9.8	2.9		灰	天井部回転ヘラナデ←天井~口縁部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底1/2	(12.0)		5.0		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体下部~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	須恵高坏?	脚部1/2		7.4			褐灰	ロクロナデ	坏底部ハケ、脚部ロクロナデ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
158	41住	4	甕	頸部以下 ほぼ完形	20.0		23.5		赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部タテミガキ→ヨコミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヨコミガキ	
"	"	5	甕	口~胴1/4	(17.6)				褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	6	甕	口~胴3/4	(16.2)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	7	台付鉢	口~台1/2	(12.4)	8.0	10.3		明赤褐	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、台上部ユビナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、台部ヘラナデ	
"	"	8	須恵鉢	口~底1/2	(26.0)		10.6		灰	口縁~底部ロクロナデ←体~底部平行タタキ	口縁~底部ハケ←底部同心円タタキ	
"	42住	1	甕	完形	25.2	8.1	29.1		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁~胴部ヘラミガキ←胴下部ヘラケズリ	
"	"	2	坏	口~底3/4	13.5	7.0	4.1		明赤褐	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒坏	口~底1/3	(10.0)	(5.2)	3.5		にぶい褐	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/3	12.9	(7.7)	(6.2)		にぶい褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	5	小形甕	口~底1/2	(10.0)	(6.0)	(7.9)		灰褐	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラケズリ	口縁~底部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	"	6	小形甕	口~底4/5	13.7	(7.0)	(16.8)		にぶい褐	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラケズリ	口縁~底部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
159	"	7	甕	口頸部1/4	(15.6)				明赤褐	口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	8	甕	胴~底1/3		(5.0)			明赤褐	胴~底部ヘラケズリ	胴下部ヘラナデ	
"	43住	1	須恵坏	口~底1/2	(13.8)	6.7	3.6	5.4	灰	口縁~体部ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底1/5	(17.0)		6.3		明赤褐	ヨコナデ、ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒坏	底部1/2		(7.0)			橙	ロクロナデ	坏部ヘラミガキ、高台部回転ヘラケズリ	
"	"	4	甕	口頸部1/7	(22.8)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ	ヨコナデ	実測図の信頼度低い
"	44住	1	須恵坏蓋	天~口3/4	15.5		2.8		にぶい黄	天井部回転ヘラケズリ、天井下~口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	軟質的須恵器
"	"	2	須恵坏蓋	天~口1/2	(7.6)		1.4		暗青灰	天井部静止ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	須恵坏蓋	天~口1/2	(8.2)		1.8		青灰	天井部回転ヘラケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	4	須恵坏	口~底3/4	8.8	5.4	3.6		灰	口縁~体部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	5	須恵坏	ほぼ完形	(9.5)	(8.2)	(2.9)		暗オリーブ灰	口縁~体部ヨコナデ→体下~底部ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	6	須恵坏	口~底4/5	9.5	8.7	2.9		暗緑灰	口縁~体部ヨコナデ←底部ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	7	須恵坏	口~底1/5	(13.6)	(7.6)	4.2	(7.0)	青灰	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ	実測図の信頼度低い
"	"	8	軟須恵坏	口~底3/4	14.4	6.4	4.3	6.4	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	黒斑
"	"	9	須恵坏	口~底1/3	(14.8)	(7.0)	4.1	(8.0)	オリーブ灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	墨書「主」
"	"	10	須恵坏	口~底4/5	14.5	7.9	3.8	8.0	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	軟質的須恵器 墨書「主」
"	"	11	内黒坏	口~底1/2	12.8		5.4		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	12	内黒坏	口~底3/4	13.8		5.5		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ→口縁~底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	13	内黒坏	ほぼ完形	(13.6)		5.0		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	14	坏	ほぼ完形	11.0		3.6		橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヨコナデ	
"	"	15	坏	口~底7/8	8.7		2.6		橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヨコ方向のナデ	
"	"	16	内黒坏	口~底1/2	(12.7)	(6.2)	6.2		黒	口縁~体部ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	17	内黒坏	口~底1/2	(16.6)	(9.1)	5.3		明赤褐	ロクロナデ→底縁周囲静止ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	18	内黒坏	口~底1/2	(13.4)	(7.5)	3.4	(8.1)	暗赤褐	ロクロナデ、底縁周囲ヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	19	内黒坏	口~底1/2	15.3	6.3	4.2		赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	20	内黒坏	口~底1/3	(14.4)	(5.8)	3.5		明赤褐	ロクロナデ→底縁周囲ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	21	内黒坏	ほぼ完形	12.4		7.3		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	22	内黒坏	口縁部1/6					橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラ描き「卒」
"	"	23	甕	口~胴 ほぼ完形	23.7				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→口縁~胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ←口縁~胴部ヘラミガキ	
"	"	24	甕	ほぼ完形	(18.0)		24.6		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	
"	"	25	甕	ほぼ完形	20.0	5.9	31.0		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
160	"	26	甕	ほぼ完形	16.0	(4.8)	(27.5)		橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ、胴端部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラナデ	
"	"	27	甕	ほぼ完形	19.6	5.0	(34.5)		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	"	28	甕	ほぼ完形	19.0	5.5	32.2		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴部ヘラナデ	
"	"	29	甕	口~胴1/4	(7.1)				にぶい黄褐	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	30	小形甕	口~底1/2	(13.1)	(5.9)	13.8		明赤褐	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ←胴上半部ヘラナデ→ヨコ方向のナデ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
160	44住	31	小形甕	ほぼ完形	15.0	5.6	15.6		橙	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴～底部ナデ→胴下～底部ヘラナデ	
〃	〃	32	小形甕	口～底1/4	(9.9)	5.0	9.5		にぶい褐	口縁～胴部ロクロナデ→胴下部ヘラケズリ 底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	33	小形甕	口～底1/2	(8.6)	3.0	7.8		にぶい赤褐	口縁～胴部ロクロナデ→胴下部ヘラケズリ 底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	34	須恵高盤	口～底1/4	(24.0)	(12.8)	8.0		灰	盤体部回転ケズリ→ロクロナデ 脚台部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	35	内黒高坏	坏部完形	14.7				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、坏体部→脚上部ヘラケズリ→口縁→脚上部ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ	
〃	〃	36	内黒高坏	坏1/8、脚部1/2		(10.0)			にぶい橙	坏体部→脚部ヘラケズリ→脚部裾部ヨコナデ	坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ、脚部裾部ヨコナデ	
〃	〃	37	甕	ほぼ完形					にぶい橙	ヘラミガキ	口縁ヘラミガキ→頸部ハケ、底部ヘラミガキ	胎土：長石
〃	〃	38	須恵小形鉢	口～底1/3	(10.4)				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	39	須恵鉢	口～体1/4	(16.0)				暗青灰	口～体中部ロクロナデ、体下部平行タタキ	口～体中部ロクロナデ、体下部同心円タタキ	
〃	〃	40	須恵鉢	口～体1/4	(15.6)				灰	ロクロナデ、体部ヘラガキ文	ロクロナデ	
〃	〃	41	須恵台付鉢	口～底4/5	(12.6)	(8.2)	8.4		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	42	内黒鉢	口～体1/2	(18.0)				にぶい黄橙	ヘラミガキ→口縁部ハケ、体上部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	43	内黒鉢	ほぼ完形	15.6		8.2		にぶい橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	44	内黒鉢	口～底1/2	14.6		9.1		にぶい黄橙	ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ→体上～体中部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
161	〃	45	甕	ほぼ完形	19.6		10.6		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体～底ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	46	内黒甕	ほぼ完形	19.0		11.3		橙	ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
〃	45住	1	須恵壺蓋	天井～口縁1/4	(8.2)				灰	天井～体部回転ケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵坏	口～底3/4	(10.0)		3.3		灰	口～体中部ロクロナデ→体下～底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土：長石
〃	〃	3	坏	口～底3/4	13.4		5.0		にぶい褐	口～体上半部ヨコナデ→体下半～底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	4	内黒坏	ほぼ完形	11.8		3.8		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ→体～底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	5	坏	口～底1/2	11.2		4.0		橙	口縁部ヨコナデ→体～底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	6	内黒鉢	口～胴1/6	(19.9)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	7	甕	口～胴1/8	(23.1)				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ハケ	口縁部ヨコナデ→胴部ハケ	
〃	46住	1	須恵环蓋	ほぼ完形	(16.2)		2.4		灰	天井部回転ヘラ切り→ナデ、天井～口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	胎土：長石
〃	〃	2	須恵坏	口～底3/5	(11.4)		3.0		灰	口～体中部ロクロナデ、体下～底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	3	須恵坏	口～底3/4	9.1	4.6	4.9		紫灰	口～体中部ロクロナデ、体下部静止ヘラケズリ 底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ→ナデ	ロクロナデ	胎土：長石
〃	〃	4	内黒坏	口～底1/3	(14.0)				明黄褐	口～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	5	内黒坏	ほぼ完形	14.1	2.5	4.6		明黄褐	口～体上部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	6	内黒坏	口～底3/4	12.3	2.0	3.7		橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	7	内黒坏	口～底1/2	(13.2)	(3.0)	4.6		明黄褐	口～体上部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	8	内黒坏	完形	12.0		5.0		橙	口～体上半部ヨコナデ→体下半～底部ヘラケズリ→	ヘラミガキ	
〃	〃	9	内黒坏	口～底1/3	(15.6)	(7.7)	5.2		橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	10	内黒坏	口～底1/2	(8.6)				にぶい橙	ヘラミガキ→体下～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	11	坏	口～底2/3	11.2		4.3		橙	口縁部ヨコナデ、体部ナデ→体下～底部ヘラケズリ	ナデ→底部ヘラオサエ	
〃	〃	12	内黒坏	口～底1/2	13.6		5.3		橙	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、体下～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	13	坏	口～体1/4	(14.0)				橙	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	ナデ	
〃	〃	14	内黒坏	口～底3/4	14.9	5.7	5.7		にぶい黄橙	ヘラミガキ→体下部ヘラケズリ、底部回転糸切り→ナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	15	内黒坏	口～底1/3	(14.0)	6.0	6.1		にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	16	内黒坏	口～底1/4	(14.9)	4.0	5.9		にぶい黄橙	ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	17	内黒坏	口～底1/2	(13.4)		4.1		にぶい黄褐	ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	18	坏	口～底1/3	(10.0)	5.2	4.3		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体部手によるオサエ	ヨコナデ	内面器壁途中までの穿孔一ヶ所
〃	〃	19	坏	口～底1/2	(7.1)	3.6	2.7		明黄褐	手によるオサエ	口縁部ヨコナデ	
〃	〃	20	有孔小形甕	ほぼ完形	10.4		10.8		黒褐	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラナデ	底部穿孔壺 甕成後内面より打欠穿孔、略円形
〃	〃	21	小形甕	完形	13.0	9.7	12.5		にぶい橙	ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヘラナデ	
162	〃	22	甕	口～底1/3	(17.4)	(6.7)	26.0		橙	口縁～胴中部ヘラミガキ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヘラミガキ、胴～底部ヘラナデ	
〃	〃	23	甕	口～肩1/4	19.2				橙	口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	24	須恵甕	口～胴1/2	(17.3)				オリーブ黒	口～頸部ロクロナデ、胴部タタキ→カキ目	口～頸部ロクロナデ、胴部タタキ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
162	46住	25	須恵高盤	脚1/2		(13.4)			灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	26	高杯	脚1/3		(10.6)			橙	脚部ヘラケズリ←脚裾部ヨコナデ	脚部ヘラケズリ←脚裾部ヨコナデ	
"	"	27	高杯	脚3/4		(8.5)			橙	脚部ヘラケズリ←脚裾部ヨコナデ	脚上部指オサエ、脚部ヘラケズリ←脚裾部ヨコナデ	
"	"	28	内黒高杯	脚完存		(9.0)			橙	ヘラケズリ←脚裾部ヨコナデ	脚上部指オサエ、脚部ヘラケズリ←脚裾部ヨコナデ	
"	"	29	須恵フラスコ	体1/4					暗赤灰	頸~体上部ロクロナデ、体中部切り離し後ナデ 体下~底部ロクロナデ	頸部ヘラケズリ←ロクロナデ	フラスコ型瓶
"	"	30	長頸壺	頸~底3/5	2.0				橙	頸部タテミガキ、胴~底部ヨコミガキ	頸上部ヨコミガキ、頸部タテミガキ←ヘラナデ、胴~底部ナデ	
"	"	31	内黒甌	口~底3/5	(14.9)	8.1	8.6		にぶい黄褐	ヘラケズリ→ヘラミガキ、底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラナデ→ヘラミガキ	
"	"	32	台付鉢	口~台1/3	(15.4)	(8.5)	13.9		橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコミガキ、体部タテミガキ	
"	"	33	内黒鉢	口~底1/2	(25.2)		16.5		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	34	内黒鉢	口~底5/6	(16.2)	12.7	20.0		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ→ヘラミガキ	
"	"	35	内黒鉢	口~底2/3	11.0	12.1	14.9		にぶい橙	ヘラミガキ←体~底部ヘラケズリ	ヘラナデ→ヘラミガキ	
"	47住	1	須恵鉢	口~頸1/10					暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	48住	1	須恵杯蓋	天井~口縁1/2	16.7				灰	天井部回転ヘラケズリ、天井~口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵杯蓋	天井~口縁1/3	(15.6)				灰	天井部回転ヘラケズリ、天井~口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	須恵杯	口~底1/2	(14.0)	8.7	3.3	9.5	赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	4	須恵杯	口~底1/2	(13.2)	(7.7)	3.5	7.5	灰オリーブ	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	5	須恵杯	口~底3/4	13.2	7.2	3.7	7.3	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	6	須恵杯	口~底1/3	(12.9)	7.2	3.7	6.2	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	7	軟須恵杯	口~底2/3	14.4	6.2	4.4	6.4	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	8	須恵杯	口~底3/5	(13.2)	5.8	3.8	5.9	灰オリーブ	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
163	"	9	内黒杯	口~底1/8	(17.0)	(7.4)	4.7		にぶい赤褐	ロクロナデ→体中~体下部静止ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	10	内黒杯	口~底2/3	15.2	5.9	4.0		にぶい褐	ロクロナデ→体下部静止ヘラケズリ 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	11	内黒杯	口~底4/5	14.3	5.8	3.8		にぶい橙	ロクロナデ→体下部静止ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	12	内黒杯	口~底2/3	14.9	6.1	3.8		にぶい褐	口縁部ヨコナデ、体部静止ヘラケズリ、底部回転糸切り→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	13	内黒杯	口~底2/3	15.4	6.6	3.9		褐	ロクロナデ、体下部回転糸切り、底部回転糸切り→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	14	内黒杯	ほぼ完形	18.2	7.3	5.2		にぶい黄橙	ロクロナデ→体下部静止ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	墨書「足」
"	"	15	内黒杯	口~底3/4	13.2	5.4	3.5		にぶい黄橙	ロクロナデ、体下部静止ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	墨書「酒杯」「足」
"	"	16	内黒杯	口縁					にぶい赤褐	ロクロナデ	ヘラミガキ	墨書
"	"	17	内黒杯	口縁					にぶい橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	墨書
"	"	18	内黒杯	体~底1/8	(6.6)				橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラ記号
"	"	19	須恵小壺	肩~底1/2	4.8				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	20	小皿	口~底1/2	(8.8)	6.0	1.6		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	21	甕	口~肩2/3	(19.3)				灰褐	口~頸部ヨコナデ、肩部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	49住	1	須恵杯蓋	天井~口縁1/5	(21.0)				暗青灰	天井部ロクロナデ、口縁部ヨコナデ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵杯	体~底1/4	7.2		7.4		灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	甕	口~胴1/6	(17.1)				橙	ロクロナデ→胴中部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	51住	1	須恵杯	口~底1/2	(13.5)	(6.5)	4.0	7.1	橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	軟質的須恵器
"	"	2	内黒杯	口~底1/2	(13.0)	(6.0)	3.6		橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒杯	口~底3/4	(15.4)	(7.0)	5.2		にぶい褐	ロクロナデ、底部回転糸切り→内外周ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒高台皿	口~底1/3	(13.4)	(7.4)	2.3		灰	ロクロナデ	ナデ	
"	"	5	高台皿	口~底1/3	(13.4)	(7.0)	2.8		橙	ロクロナデ→ナデ	摩滅の為不明瞭	
"	"	6	須恵四耳壺	口~頸1/3	(25.0)				暗褐	タタキ→ロクロナデ消し	タタキ→ロクロナデ消し	
"	"	7	須恵四耳壺	口頸~肩1/3					灰	口頸部ロクロナデ、肩部タタキ→ナデ	口頸部ロクロナデ、肩部タタキ痕ナデ消し	
"	54住	1	須恵杯	口~底1/2	(13.8)	6.1	4.3	8.0	灰	ロクロナデ→底部外周静止ヘラケズリ、底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵杯	口~底1/2	(13.8)	6.7	4.0	7.6	にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	須恵杯	口~底1/2	(13.7)	6.5	4.2	7.4	オリーブ灰	ロクロナデ、底部静止糸切り?	ロクロナデ	
"	"	4	軟須恵杯	口~底2/3	13.6	6.1	4.2	7.2	暗黄灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	黒斑あり

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
163	54住	5	須恵坏	口~底1/2	(14.6)	7.4	4.1		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	胎土：石英
〃	〃	6	須恵坏	口~底1/2	13.0	7.4	4.1	7.4	黒	ロクロナデ、底部回転糸切り→軽いナデ	ロクロナデ	
〃	〃	7	須恵坏	口~底1/2	(12.6)	(6.7)	3.4	7.4	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整		
〃	〃	8	内黒坏	口~底3/4	14.6	6.7	4.2		にぶい赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ、十字の暗文	
〃	〃	9	内黒坏	口~底1/3	12.4	6.4	3.9		にぶい橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	10	内黒坏	口~底2/3	(13.2)	5.8	5.0		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	11	内黒坏	口~底1/2	(13.0)	6.3	4.6		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→内周静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	12	内黒坏	口~底1/3	(12.6)	(6.0)	4.7		灰黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	〃	13	須恵高台坏	体~底1/3		6.5			にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	14	内黒坏	底ほぼ完存		6.8			にぶい褐	ロクロナデ、底部回転糸切り→軽いナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	15	内黒坏	底2/3		(6.6)			橙	ロクロナデ、底部開店糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	〃	16	灰釉坏	体下~底1/4		(8.0)			褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	釉ハケ塗り灰白
164	〃	17	甕	口~底1/3	(20.0)	4.2	28.4		にぶい橙	口~胴上部ロクロナデ→胴部ヘラケズリ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ	
〃	〃	18	甕	口~胴4/5	21.5				にぶい橙	口~胴中部ロクロナデ→胴下半部ヘラケズリ	口~胴中部ロクロナデ、胴下部ヘラナデ	口縁端面取り
〃	〃	19	須恵壺	胴下~底1/2		(8.8)			暗赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	20	須恵四耳壺	耳部1/8					黒褐	タタキ痕	回転ナデ	
〃	〃	21	須恵短頸壺	口~胴1/4	(11.4)				暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	55住	1	須恵坏蓋	天井~口縁1/10	(17.2)				紫灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵坏蓋	天井~口縁1/3	(15.6)				灰白	天井部回転ケズリ、天井下半~口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	3	須恵坏	口~底1/2	12.5	8.0	4.2	8.6	青灰	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	
〃	〃	4	須恵坏	口~底1/2	(14.8)	6.6	4.2	8.0	灰白	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り→ナデ消し	ロクロナデ	
〃	〃	5	須恵坏	口~底1/3	(14.4)	6.6	3.8	8.0	橙	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	
〃	〃	6	須恵坏	口~底2/3	(13.2)	7.4	4.0	8.1	灰白	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→方向ケズリとナデ	ロクロナデ	
〃	〃	7	須恵坏	口~底1/3					灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り→回転ケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	8	須恵高台坏	口~底1/4	(14.2)		3.9		灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ→ナデ	ロクロナデ	
〃	〃	9	内黒坏	口~底3/4	15.5	6.4	4.8		明赤褐	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	〃	10	内黒坏	口~底1/3	(15.5)	(6.8)	4.5		赤褐	ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	〃	11	内黒坏	ほぼ完形	12.9	6.0	4.0		橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部静止ヘラケズリ并拵状	ヘラミガキ	
〃	〃	12	内黒坏	ほぼ完形	13.0	6.1	3.9		橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部静止ハケケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	13	内黒坏	口~底3/4	(16.0)	6.0	6.1		橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	14	内黒高台皿	口~底1/2	(13.4)	(5.0)			橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	15	小形甕	口~肩1/4	(13.0)				浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	56住	1	須恵坏	口~底1/2	(14.0)	6.8	3.5	7.6	オリーブ灰	ロクロナデ、底部回転糸切り→内周ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵高台坏	体~底3/5		10.3			青灰	体部ロクロナデ、体下部回転ヘラケズリ 底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	3	内黒坏	口~底2/5	(17.0)	7.2	4.0		暗褐	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り→内周ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	4	内黒皿	体下~底1/2		6.4			明赤褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	58住	1	須恵坏蓋	完形	17.7		2.0		灰	天井部回転ケズリ、口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵坏	完形	14.0	7.6	4.3	7.7	青灰	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	3	小形甕	口頸~底1/2		(5.4)			褐灰	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	4	甕	口~胴2/3	(22.2)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→頸部弧状を呈する断続的なケズリ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	
165	〃	5	甕	ほぼ完形	21.8	5.6	28.4		灰黄褐	口縁部ヨコナデ→頸~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	
〃	〃	6	甕	口~胴1/3	(21.2)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→頸~胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→頸~胴部ヘラナデ	
〃	〃	7	甕	ほぼ完形	21.8	7.6	28.7		にぶい橙	口縁部ロクロナデ→胴部ヘラケズリ→胴下部タタキ、底部タタキ→ナデ消し	ロクロナデ	
〃	〃	8	甕	口~胴1/4	(23.0)				にぶい橙	口縁部ロクロナデ、胴部タタキ→ヨコ方向ナデ	胴部ヘラケズリ	
〃	〃	9	甕	ほぼ完形	35.6		25.6		にぶい黄橙	口縁部ロクロナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ロクロナデ、胴上部ナデケズリ 胴下半~底部ヘラケズリ	胎土：石英 外面下半二次被熱で黒っぽく変色
〃	59住	1	須恵坏	口~底1/4	(15.2)	(8.5)	3.6	9.8	灰	ロクロナデ、底部ヘラナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵坏	口~底1/4	(14.2)	(7.5)	4.2	7.8	橙	ロクロナデ、底部ヘラ切り→ヘラケズリ	ロクロナデ	

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
165	59住	3	須恵坏	口~底1/4	(14.6)	(7.8)	3.7	8.0	にぶい黄橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ →ナデ	口クロナデ	
"	"	4	須恵坏	ほぼ完形	13.5	7.0	4.1	8.0	灰	口クロナデ、底部ヘラ切り ヘラケズリ	口クロナデ	
"	"	5	須恵坏	口~底2/3	(15.8)	6.0	4.1	8.4	灰白	口クロナデ、底部外周ヘラケズ リ 底部ヘラ切り→ヘラケズリ	口クロナデ	
"	"	6	須恵高台坏	ほぼ完形	12.4	7.6	4.2	8.5	褐灰	口クロナデ、底部回転糸切り →ヘラケズリ	口クロナデ	
"	"	7	須恵高台坏	口~体1/3	(13.4)				灰	口クロナデ	口クロナデ	
"	"	8	須恵高台坏	口~体1/3	(15.6)				灰赤	口クロナデ	口クロナデ	
"	"	9	内黒坏	口~底3/4	13.4		4.7		橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	10	内黒坏	ほぼ完形	13.0	7.6	4.3		にぶい橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	11	内黒坏	口~底1/2	(12.5)	7.2	3.9		橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ →ナデ	ヘラミガキ	
"	"	12	内黒坏	口~底3/4	15.8	5.7	5.5		橙	口クロナデ、底部外周ヘラケ ズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	13	甕	口~胴1/4	(22.5)				にぶい橙	口~肩部ヨコナデ→肩~胴部 ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナ デ	
166	"	14	鉢	口~体1/4	(20.9)				浅黄橙	口縁部ヨコナデ→体部ヘラケ ズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	60住	1	須恵坏	口~底1/2	(13.4)	6.2	4.1	6.3	灰	口クロナデ、底部回転糸切り 不調整	口クロナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底7/8	16.0	5.5	4.5		にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ→体部ヘラケ ズリ 底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	墨書「山」
"	"	3	内黒坏	完形	13.6	5.8	4.4		にぶい橙	口クロナデ、底部外周手ナデ 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/4	(14.5)	5.8	4.7		にぶい橙	口クロナデ、底部外周ヘラケズ リ 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒坏	口~底3/4	13.4	5.3	4.0		にぶい橙	口クロナデ、底部回転糸切り 不調整	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒坏	口~底2/3	13.4	5.6	4.2		明褐	口クロナデ、底部回転糸切り 不調整	ヘラミガキ	
"	"	7	内黒坏	口~底1/2	(13.8)	6.3	4.1		にぶい橙	口クロナデ、底部回転糸切り →内周軽いナデ	ヘラミガキ	
"	"	8	小形甕	口~底1/4	(16.7)	7.0	15.8		橙	口クロナデ→胴下部静止ヘラケズ リ 底部回転糸切り→中心部ナデ	口クロナデ	
"	"	9	小形甕	口~胴1/3	(14.6)				にぶい橙	口縁部口クロナデ、胴部カキ 目	口縁部口クロナデ、胴部 口クロナデ	外面カキ目 7条/1cm
"	"	10	甕	口~胴1/8	(23.5)				橙	口縁部ヨコナデ、胴部静止ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ目	内面ハケ目2mm幅
"	"	11	鍋	口~体1/3	(37.4)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体部静止ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナ デ	
"	61住	1	内黒坏	口~底1/3	(13.2)		4.5		橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	62住	1	須恵坏蓋	天井~ 口縁1/6	(18.6)		3.1		オリーブ黒	天井部回転ヘラケズリ、天井 ~口縁部口クロナデ	口クロナデ	
"	"	2	須恵坏蓋	天井~ 口縁1/3	(13.4)				灰	天井部回転ヘラケズリ、天井~口縁部 ヨコナデ 裏面ヘラケズリ、ヘラケズ リしない	口クロナデ	
"	"	3	須恵坏	口~底3/4	13.2	7.4	3.7	7.8	灰白	口クロナデ、底部回転糸切り →部分的に板ナデ	口クロナデ	
"	"	4	内黒坏	ほぼ完形	12.9	6.7	4.1		にぶい橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ →ナデ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒坏	口~底1/3	(16.0)	7.6	4.5		にぶい橙	口クロナデ、底部ヘラケズリ →ナデ	ヘラミガキ	
"	"	6	甕	口~底1/4	(14.0)		16.9		にぶい橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	7	鉢	口~体1/3	(22.0)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ→体部静止ヘ ラケズリ	ヘラミガキ→体中部静止ヘ ラケズリ	
"	"	8	甕	口~底1/2	(19.5)				にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、体~底部静 止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘ ラナデ→ナデ	
"	"	9	須恵壺	口頸~ 肩1/4					暗灰	口頸部タタキ→ナデ、肩部タ タキ	口頸部口クロナデ、肩部ナ デ	
"	"	10	小形甕	口~底1/4	(13.4)	(6.1)	12.0		褐	口縁部口クロナデ、胴~底部 静止ヘラケズリ	口クロナデ	
167	63住	1	内黒坏	口~体1/3	10.9				橙	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	2	甕	口~胴1/3	24.1				橙	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	3	高坏	口~底2/3	15.1	10.6	13.0		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、杯~脚部弱い ヘラケズリ→脚部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、杯部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ→脚部ヨコナデ	脚、ノリ先端を指で内面に 押しつけて一周させてナデケ
"	65住	1	須恵壺	頸~底4/5		(4.4)			青灰	口クロナデ→胴部刺突文、底 部回転ケズリ	口クロナデ	
"	"	2	甕	口~胴1/2	(23.0)				にぶい黄橙	口縁~頸部ヨコミガキ、頸~ 胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコミガキ、頸~胴部 ヘラケズリ	胎土：長石
"	"	3	甕	口~胴	(21.0)				灰黄	口縁部ヨコナデ→頸~胴部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ	
"	"	4	甕	口~底3/5	23.6	5.2	33.4		明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ	口縁~胴上部ヨコナデ、胴上~胴中部 タテナデ、胴中~底部タテユビナ デ	
"	66住	1	須恵坏	口~底1/2	13.2	6.8	3.7		灰	口クロナデ、底部回転糸切り 不調整	口クロナデ	
"	"	2	須恵坏	口~体1/3	14.0	7.3	3.5		黄灰	口クロナデ	口クロナデ	
"	"	3	内黒坏	口~底1/2	17.2	9.5	6.6		にぶい褐	口クロナデ、底部外周ヘラケ ズリ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/3	15.2	8.5	4.9		にぶい褐	口クロナデ、底部静止ヘラケ ズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	小形甕	胴~底2/3		5.6			褐灰	胴上半部口クロナデ、胴下半部ヘ ラケズリ、底部回転糸切り不調整	口クロナデ	
"	"	6	甕	口~胴1/4	21.2				にぶい褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナ デ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
167	66住	7	甕	口~胴1/4	25.9				にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部ハケナデ→胴下部ヘラケズリ	口縁部ヨコハケナデ、胴部ナデ	胎土：石英
168	67住	1	須恵坏	口~底3/5	(14.2)	7.5	4.1		灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	軟質の須恵器、胎土：石英
"	"	2	内黒坏	ほぼ完形	13.5	5.7	4.0		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	胎土：石英
"	"	3	内黒坏	完形	14.0	6.0	4.3		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒高台皿	完形	12.1	6.7	2.1		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒高台皿	完形	16.8	5.9	2.9		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→軽いナデ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒塊	完形	16.1	8.5	5.6		橙	ロクロナデ→体下部回転ケズリ 底部回転糸切り→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	胎土：石英
"	"	7	甕	胴~底2/3		3.6			にぶい橙	ヘラケズリ	胴下部ナデ	
"	"	8	甕	口~胴	19.4				灰褐	ロクロナデ→頸~胴部ヘラケズリ	ロクロナデ→頸~胴ナデ	
"	"	9	内黒鉢	ほぼ完形	16.8	6.5			橙	ロクロナデ→体下~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	68住	1	内黒坏	口~底2/3	(14.1)	(6.7)	4.1		浅黄橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	69住	1	須恵坏	ほぼ完形	13.2	6.0	3.5	6.0	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	2	須恵坏	口~底3/4	13.3	5.2	3.8	6.2	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	須恵坏	口~底1/2	13.0	6.5	3.5	6.4	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/3	(13.8)	(6.2)	4.2		にぶい橙	ロクロナデ→体下部ヘラケズリ 底部回転糸切り→ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒坏	口~底1/3	(14.0)	(6.0)	4.7		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒坏	口~底1/3	(16.0)	(6.0)	4.1		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部外周~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	胎土：石英
"	"	7	内黒坏	口~底1/8	(14.0)	(7.0)	3.8		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	8	内黒高台皿	口~底1/3	(15.0)	(6.3)	2.1		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	9	内黒鉢	口~胴1/8	(17.2)				灰黄褐	口~胴上半部ロクロナデ、胴下半部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	71住	1	須恵坏蓋	つまみ~口縁1/3	(16.3)		3.9		灰オリーブ	天井部回転ケズリ、天井~口縁ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	口~底1/2	(13.0)	(5.4)	3.8	6.0	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	須恵坏	口~底1/3	(13.1)	(6.0)	3.2	6.3	オリーブ灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	4	内黒坏	ほぼ完形	13.4	5.8	4.1		橙	ロクロナデ、体下部ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒坏	口~底1/3	(17.3)	(8.4)	6.6		橙	ロクロナデ、底部外周軽いヘラケズリ 底部回転糸切り→内周静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	6	小形甕	胴~底1/2		(5.6)			にぶい橙	カキ目→胴下部ナデ、底部回転糸切り不調整	ナデ	
"	72住	1	須恵坏蓋	天井~口縁1/2	10.7				灰	天井上部ロクロナデ、天井部回転ケズリ、天井~口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	ほぼ完形	11.2	5.7	2.8	7.6	灰	ロクロナデ、体下部回転ケズリ 底部ヘラ切り→回転ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	3	須恵坏	口~底1/4	11.5		3.4	8.1	青灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	4	内黒坏	ほぼ完形	(12.5)		4.7		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒坏	口~底3/4	12.2		3.9		浅黄橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒坏	口~底1/3	11.9		3.8		橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ→体上半部軽いナデ	ヘラミガキ	
"	"	7	内黒坏	口~体1/4	(11.7)		4.9		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	8	内黒坏	口~底1/3	(11.5)				灰黄褐	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	9	内黒坏	口~底1/2	(13.6)		5.3		灰黄	口縁部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	10	坏	口~底1/2	(10.3)		3.8		橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	11	須恵甕	頸~肩1/2					灰	肩部タタキ→カキ目	肩部タタキ	
169	"	12	壺	口~胴1/3	22.1				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、頸~胴部ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	
"	"	13	甕	口~胴3/4	26.5				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	14	甕	口~胴1/2	26.5				橙	口縁部ヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	口~胴上半部ヘラミガキ、胴下半部やや右上りのヨコ方向ナデ	
"	"	15	甕	口~胴1/4	(21.0)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヨコヘラナデ	
"	"	16	甕	口~胴3/4	(22.1)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコヘラナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	17	甕	口~胴1/3	(19.2)				明褐灰	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ→胴下半部ヘラケズリ	
"	"	18	甕	胴~底3/4		3.2			黒	ヘラケズリ	ヘラナデ	
"	"	19	台付甕	胴~底3/4		(8.3)			橙	ヘラケズリ	ヘラナデ	
"	"	20	高坏	坏部完存	15.8				にぶい黄	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ→ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	21	内黒高坏	口~底1/2	13.6	8.7	10.3		浅黄橙	口縁部ヨコナデ→体~底部ヘラケズリ	坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
169	72住	22	内黒高坏	坏部ほぼ完存	10.4				にぶい褐	口～体中部ヨコナデ、体下部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	23	高坏	脚部完存		10.7			橙	ヘラミガキ←脚部ヨコナデ	脚部上部棒状工具による放射状ナデツケ→脚部ヘラケズリ→脚部ヨコナデ	
〃	〃	24	須恵壺	胴～底1/3		6.5			灰	カキ目、底部回転ヘラ切り→カキ目	ロクロナデ	胎土：長石
170	73住	1	内黒坏	体下～底1/3		(6.8)			橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	〃	2	甕	口～頸1/6					橙	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	胎土：石英
〃	74住	1	須恵坏蓋	天井～口縁2/3	11.6		3.1		オリーブ灰	天井上部回転ヘラ切り→ロクロナデ	ロクロナデ	胎土：長石
〃	〃	2	須恵坏蓋	天井～口縁1/6	(14.3)				灰	回転ケズリ→ナデ	ロクロナデ	
〃	〃	3	須恵坏	口～底4/5	(12.0)	7.8	3.6		灰	ロクロナデ、底部ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	
〃	〃	4	須恵坏	口～底1/2	(10.0)	8.8	3.5		灰	ロクロナデ、底部ヘラ切り→ナデ	ロクロナデ	
〃	〃	5	須恵坏	口～底1/3	(9.6)	(6.2)	2.6		灰	ロクロナデ→底部外周ケズリ 底部ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
〃	〃	6	須恵高台坏	口～底1/3	(9.7)	(6.2)	3.4		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	7	内黒坏	口～底1/3	(15.9)				褐灰	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	8	内黒坏	口～底1/3	(14.9)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	9	両黒坏	口～体1/4	(13.2)				黒	口縁部ヨコナデ→体部ヘラケズリ	ヨコミガキ	
〃	〃	10	内黒坏	口～底3/4	9.2		3.3		橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	11	内黒坏	口～底1/3	(14.4)	(6.0)	4.2		にぶい橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	12	内黒坏	口～底1/2	(11.0)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	13	内黒坏	口～底1/4	(14.1)				橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	14	内黒坏	口～底1/3	(11.0)	(13.0)	7.0		橙	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	15	須恵壺蓋	天井～口縁1/4	(8.7)		(1.7)		明紫灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	16	甕	ほぼ完形	21.3	3.8	34.7		灰褐	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
〃	〃	17	甕	口～胴1/2	(18.5)				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
〃	〃	18	甕	ほぼ完形	18.8		29.4		灰褐	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラナデ	
〃	〃	19	甕	口～底5/6	(21.0)				褐灰	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
〃	〃	20	甕	ほぼ完形	19.6		36.3		にぶい褐	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	
〃	〃	21	鉢	口～体2/3	(12.3)				橙	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ 体部ヘラナデ	
171	〃	22	内黒鉢	口～底1/6	(21.6)		10.8		灰褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
〃	〃	23	内黒高坏	脚ほぼ完存					にぶい橙	ヘラミガキ	脚上部棒状工具によるナデツケ、脚中部ヘラケズリ、脚部ヨコナデ→ヘラミガキ	
〃	〃	24	内黒高坏	脚ほぼ完存		10.5			にぶい褐	ヘラミガキ←脚部ヨコナデ	杯底部ヘラミガキ、脚部上部棒状工具によるナデツケ、脚部ヘラケズリ、脚部ヨコミガキ	
〃	〃	25	須恵鉢	胴～底1/6					灰	ロクロナデ	ロクロナデ	底部扁平な棒状工具で刺突
〃	76住	1	須恵坏	口～底2/3	13.9	5.2	4.0	5.5	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵坏	口～底1/4	(13.7)	(6.5)	4.1	(6.0)	にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	3	内黒坏	口～底1/2	(16.9)	(6.5)	6.0		にぶい橙	ロクロナデ、底部外周～底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ摩滅の為方向不明	
〃	〃	4	内黒坏	口～底1/3	(15.9)	(7.3)	5.0		橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	5	内黒坏	口～底2/3	14.4	6.6	3.8		にぶい橙	ロクロナデ、体下半部ヘラケズリ 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ摩滅の為方向不明	
〃	〃	6	内黒坏	口～底1/4	(17.0)	(6.8)	4.8		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	摩滅の為不明瞭	胎土：石英
〃	〃	7	内黒坏	口～体3/5	(14.7)				橙	ロクロナデ	摩滅の為不明瞭	
〃	〃	8	内黒坏	ほぼ完形	8.7	3.4	3.0		橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、底部回転糸切り→ナデ	摩滅の為不明瞭	
〃	〃	9	甕	ほぼ完形	20.1	4.3	27.8		橙	口～頸部ヨコナデ→頸～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴～底ヘラナデ 胴中接合部強いヨコ方向ヘラナデ	
〃	77住	1	須恵坏蓋	つまみ～口縁3/4	(16.3)		3.7		オリーブ灰	つまみ～天井上部回転ケズリ、天井下半～口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	2	須恵坏	口～底3/4	13.0	6.8	4.3	7.3	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	3	須恵坏	口～底2/3	13.8	6.2	4.1	6.7	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	4	須恵坏	ほぼ完形	14.0	6.5	3.4	6.6	灰オリーブ	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	5	須恵坏	口～底1/2	(13.8)	(5.9)	3.9	(6.4)	灰褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
〃	〃	6	内黒坏	ほぼ完形	14.8	5.9	4.3		にぶい赤褐	ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ、底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	7	内黒坏	口～底5/6	14.0	7.4	4.0		にぶい黄橙	ロクロナデ→底部外周ヘラケズリ、底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
〃	〃	8	須恵甕	口～胴1/4	(18.5)				灰褐	ロクロナデ→頸～胴部タタキ	ロクロナデ	内面胴中部当て具痕？

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形		備考
					口径	底径	器高	内底				
171	78住	1	須恵环蓋	天井～ 口縁1/4	(10.5)		3.0		灰	天井部静止ヘラケズリ→ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	内黒环	口～底1/4	(11.2)		4.7		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒环	口～底1/5	(13.5)		7.1		にぶい黄橙	口～体上部ナデ、体中～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	4	环	口～底1/4	(11.6)				橙	口～体上半部ヨコナデ、体下半～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ	
"	"	5	环	ほぼ完形	10.2		3.4		橙	口～体上半部ヨコナデ、体下半～底部ヘラケズリ→ナデ	暗文風放射ミガキ	
"	"	6	内黒高环	ほぼ完形	13.5		11.2		橙	口縁部ヨコナデ、环～脚部ヘラケズリ→环部ヘラミガキ	环部ヘラミガキ(単位、方向不明)脚部ヘラケズリ	
172	"	7	蓋?	体～口縁 1/2	(8.2)				にぶい橙	ヨコナデ	体上部ヘラケズリ、体部ヘラ押え→ヨコナデ	
"	"	8	須恵短頸壺	口～肩2/5	(9.2)				灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	9	内黒鉢	口～底3/5	18.8		11.5		にぶい橙	ヘラケズリ→体中部ヘラナデ	ヘラミガキ	
"	"	10	鉢	口～底4/5	13.0		10.8		にぶい橙	口～頸部ヨコナデ→頸～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ→体下部ヘラミガキ	
"	"	11	甕	胴～底1/2					にぶい褐	ヘラケズリ	ハケ	
"	79住	1	須恵环	体～底1/2	10.1				灰	体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵环	口～底1/6	(9.4)		2.6		灰	口～体部ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	3	内黒环	ほぼ完形	15.2	10.8	4.7		浅黄橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ→体中部ナデオサエ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒环	口～底3/5	12.5		4.5		橙	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒环	ほぼ完形	13.8		4.4		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒环	体～底4/5					橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	7	环	口～底1/5	(12.0)		3.6		橙	口縁部ヨコナデ、胴下～底部ヘラケズリ	口～胴部ヨコナデ→胴～底部ヘラナデ	
"	"	8	甕	口～胴上 5/6	24.0				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	
"	"	9	甕	完形	20.9	4.5	41.2		にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラナデ	
"	"	10	甕	口～胴2/5	(20.4)				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヨコ方向ナデ→ヘラナデ	
"	"	11	甕	完形	15.0	5.0	25.6		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ→胴～底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴～底部タテ方向ヘラケズリ→ヨコヘラナデ	支脚として使用された
"	"	12	甕	口～胴上 1/3	(21.2)				橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラケズリ	口縁部ヨコヘラ→胴上部ヨコ方向ヘラナデ→ヨコナデ	
"	"	13	小形甕	口～肩1/3	(12.4)				橙	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ←肩部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	14	小形甕	口～肩1/4	(12.5)				橙	ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヘラミガキ、肩部ヘラナデ	
173	"	15	鉢	口～体1/3	(21.4)				橙	口縁部ヨコナデ→体部ヘラミガキ	口～体上半部ヘラミガキ←体下半部ヘラナデ	
"	"	16	内黒鉢	口～底1/2	(13.2)		12.0		橙	口縁部ヨコナデ、体～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコミガキ、体～底部タテヘラナデ	
"	"	17	内黒鉢	口～体上 1/4	(19.6)				にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	18	内黒鉢	口～体1/3	(10.8)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	19	内黒鉢	口～底1/2	(12.9)				にぶい黄橙	ヘラケズリ→ナデ	体下部ハケ又はヘラナデ、底部ハケナデ	
"	"	20	鉢	口～底3/4	(16.7)		8.4		橙	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ←体下～底部ハケ	
"	"	21	鉢	口～体2/5	(16.3)				浅黄橙	口縁部ヨコナデ→体上部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ、体下部ヘラナデ	
"	"	22	甕	口～体上1/5 底完存	(23.5)				褐	口縁部ヨコナデ→体上部タテヘラナデ	口縁部ヨコナデ→体上部ヘラナデ	
"	"	23	高环	环1/3	(9.7)				橙	口縁部ヨコナデ、环体下部ナデ?	口縁部ヨコナデ、环底部ヘラナデ	
"	"	24	高环	脚3/5			(12.9)		橙	ヘラケズリ→脚下～脚裾部ヘラミガキ	ヘラケズリ	
"	"	25	小形土器	体～底1/4			(3.9)		橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	80住	1	須恵环蓋	天井～ 口縁1/2	(10.0)				灰	天井部回転ヘラケズリ、天井～口縁部ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	环	口～底1/3	(9.8)		(3.2)		橙	ナデ←底部軽イケズリ	ヘラミガキ、放射状暗文	
"	"	3	环	口～体2/3	(12.6)				にぶい橙	ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ	ヘラナデ→ナデ	
"	"	4	内黒环	口～底3/4	11.8	7.0	4.3		にぶい赤褐	ヘラケズリ→口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
"	"	5	内黒环	口～底1/6	(12.8)	(5.0)	4.4		灰褐	ヘラケズリ→体上部ヘラミガキ→口縁部ヨコナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒环	口～底2/3	9.4	7.3	4.0		橙	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ←体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	7	内黒环	口～底1/3	(12.8)	(5.0)	5.9		にぶい褐	口縁部ヨコナデ→体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ←体下部ヘラナデ	
"	"	8	甕	口～胴上 1/2	(22.2)				橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→頸部ヨコ方向ケズリ、胴上部ハケ	
"	"	9	甕	口～胴上 1/4	(22.4)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラナデ	
"	"	10	甕	口～胴1/3	(17.6)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	
"	"	11	甕	口～肩1/3	(23.8)				暗灰	口縁部ヨコナデ、頸～肩部ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、肩部ヘラミガキ→ヘラナデ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
173	80住	12	台付甕	ほぼ完形	11.5	8.5	15.8		褐灰	口縁部ヨコナデ、胴へ下部ヘラケズリ →胴下半部ヘラミガキ、台底部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラミガキ→胴上半部ヘラ ナデ又はヘラケズリ、台部ヘラナデ→ヨコナデ	
174	"	13	内黒高坏	坏部完存	14.3				にぶい赤褐	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	14	内黒高坏	坏1/2	(18.1)				にぶい橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	"	15	内黒高坏	坏1/2	(8.1)				にぶい橙	ヘラケズリ→接合部ヘラミガ キ	ヘラナデ	
"	"	16	内黒高坏	口~ 脚柱部1/2	(12.0)				橙	ヨコナデ→ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケ ズリ→脚下部ヨコナデ	
"	"	17	内黒鉢	ほぼ完形	13.7				橙	口縁部ヨコナデ→体→底部ヘ ラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	18	鉢	ほぼ完形	12.4		13.0		橙	口縁部ヨコナデ→体→底部ヘ ラミガキ	口縁部ヘラミガキ、体→底部 ヘラナデ	
"	"	19	内黒鉢	口~底1/2	22.2		11.5		橙	口縁部ヨコナデ→体→底部ヘ ラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ→体→底部ヘ ラミガキ	
"	"	20	鉢	口~体1/4	(20.0)				橙	口縁部ヨコナデ→ヘラミガキ ←体部かるいケズリ	ヘラミガキ←体下部ヨコ方向 ヘラナデ	
"	"	21	鉢	口~体上 1/2	(17.2)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ←体上部ヘラ ミガキ	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ、 体上部ヨコ方向ヘラナデ→ナデ	
"	"	22	両黒蓋	つまみ部					にぶい褐	ヘラナデ	つまみ部縁ないしヘラ状工具に よる成形痕、天井部ヘラナデ	
"	82住	1	須恵坏	口~底1/3	(12.9)	(6.5)	4.3	(6.4)	灰黄	口ヨコナデ、底部回転ヘラ切 り→ナデ	口ヨコナデ	
"	"	2	須恵坏	口~底2/3	(13.8)	8.3	3.9	8.4	灰	口ヨコナデ、底部回転糸切り 不調整	口ヨコナデ	
"	"	3	須恵坏	口~底1/3	(12.4)	(7.0)	4.2	7.5	オリーブ灰	口ヨコナデ、底部回転糸切り 不調整	口ヨコナデ	
"	"	4	内黒坏	口~体1/3	(15.0)				にぶい赤褐	口ヨコナデ	放射状ミガキ	
"	83住	1	須恵坏	口~底2/3	(10.4)	9.5	3.3	8.6	黄灰	口ヨコナデ	口ヨコナデ	多量の黒滓が付着 ゆがみが大きい
"	"	2	内黒坏	口~底4/5	(11.4)		4.9		橙	ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	内黒坏	口~底1/4	(11.1)		4.1		にぶい褐	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒坏	口~底1/5	(10.8)				橙	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
"	"	5	須恵盤	口~底1/5	(25.0)	(19.2)	3.9		灰黄	口ヨコナデ→底部外周、底部 ヘラナデ	口ヨコナデ	明確な黒斑はなし
"	"	6	甕	口~胴4/5	21.0				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナ デ	外部胴下縁、胴部のみと1cm程度の の縁を多く認められる
"	"	7	甕	口~胴上 1/4	(16.2)				橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラ ケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ハケ	
"	"	8	甕	口~底1/4	(20.6)	(6.2)	(30.1)		橙	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ハ ケ	
"	"	9	ミニチュア壺	胴下~底		3.6			橙	ヘラミガキ、底部ヘラミガキ	ヘラナデ	
175	84住	1	甕	口~肩1/4	(25.5)				橙	口縁部ヨコナデ→肩部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ→ハケ	
"	"	2	小形甕	口~肩1/4	(15.0)				明赤褐	口ヨコナデ	口ヨコナデ	
"	85住	1	甕	口~胴上 1/2	(15.8)				明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラ ケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラ ナデ	
"	"	2	甕	口~肩1/6	(17.6)				にぶい赤褐	口縁部ヨコナデ、肩部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ→肩部ヘラナ デ	胎土：金雲母
"	"	3	甕	口~胴2/3	21.8				橙	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケ ズリ	口縁部ヨコナデ、胴上半部タテ方 向ヘラナデ、胴下半部ヘラナデ	胎土：石英
"	86住	1	須恵坏	口~底2/3	13.7	6.5	4.5	5.6	灰オリーブ	口ヨコナデ、底部回転糸切り 不調整	口ヨコナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底1/3	(17.0)	(6.7)	8.1		橙	口ヨコナデ、底部静止ヘラケ ズリ	放射状ミガキ	
"	"	3	内黒坏	口~底1/3	(14.4)	(5.8)	3.8		橙	口ヨコナデ、底部回転糸切り 不調整	ヘラミガキ摩滅の為方向不明	胎土：石英
"	"	4	内黒坏	体下~底		(6.5)			橙	口ヨコナデ、底部外周静止ヘラケ ズリ、底部回転糸切り→かるいナデ	ヘラミガキ摩滅の為方向不明	
"	"	5	両黒高台皿	口~底1/3	(12.5)				にぶい黄褐	口ヨコナデ、底部回転糸切り 不調整	体部ナメミガキ、底部放射 状ミガキ	
"	"	6	甕	口~胴上 1/3	(24.6)				黒褐	口~胴上部ヨコナデ→胴上 部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部カ キ目	
"	"	7	小形甕	頸~底1/2	10.0				明赤褐	口ヨコナデ、底部回転糸切り 不調整	口ヨコナデ	
"	"	8	小形甕	口~肩1/4	(13.8)				褐灰	口ヨコナデ、口縁部ややカキ 目状	口ヨコナデ	
"	"	9	小形甕	口~胴1/5	(16.2)				灰褐	口ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部カキ目	
"	"	10	内黒鉢	ほぼ完形	17.9	8.7	12.7		にぶい黄橙	口ヨコナデ、底部外周・底部 回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	胎土：石英
"	87住	1	須恵坏	ほぼ完形	14.0	8.5	3.8	9.3	灰	口ヨコナデ、底部回転ヘラ切 り→ナデ	口ヨコナデ	
"	"	2	甕	口~底	(23.4)		(32.8)		橙	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘ ラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘ ラナデ	
176	89住	1	内黒坏	ほぼ完形	13.6		3.9		橙	口~体上部ヨコナデ、体中部 ナデ 体下~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	2	内黒坏	ほぼ完形	13.7		4.3		橙	口~体上半部ヨコナデ、体下半 部タテヘラナデ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	坏	ほぼ完形	13.8		3.8		にぶい赤褐	口~体上半部ヨコナデ、体下半 部ナデ、底部静止ヘラケズリ	ヨコ方向のヘラナデ	内面黒色処理の可 能性有
"	"	4	坏	ほぼ完形	13.8		4.4		灰褐	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方 向のヘラナデ	内面黒色処理の可 能性有
"	"	5	内黒片口坏	完形	14.2		4.0		灰褐	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケ ズリ→ナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	6	内黒坏	完形	13.1		3.5		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケ ズリ→ナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
176	89住	7	内黒坏	完形	14.7		4.4		にぶい橙	口~体上半部ヨコナデ→体部ヘラミガキ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	8	内黒坏	ほぼ完形	15.3		4.5		にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、体部ナデ 底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	9	内黒坏	ほぼ完形	13.9		3.5		にぶい橙	ヘラケズリ←口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ	
"	"	10	内黒坏	ほぼ完形	13.7		3.7		にぶい橙	ヘラケズリ←口縁部ヨコナデ	ヘラミガキ摩擦の為方向不明	
"	"	11	内黒坏	ほぼ完形	13.4		3.6		にぶい橙	口縁部ヨコナデ、体部タテ方向ケズリ、底部ヘラケズリ	ヘラミガキ摩擦の為方向不明	両面黒色処理の可能性有
"	"	12	甕	ほぼ完形	24.9		23.7		赤褐	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラナデ	
"	"	13	甕	口~胴4/5	23.2				灰褐	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴上部ヘラナデ	外面胴下部、焼成後粘土が付着して再度被熱、焼上り
"	"	14	甕	ほぼ完形	21.5		36.2		橙	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラナデ	外面胴中部、焼成後粘土が付着して再度被熱、焼上り
"	"	15	甕	口~胴1/2	(23.2)				明赤褐	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	
"	"	16	小形甕	完形	16.3	6.5	20.4		明赤褐	口縁部ヨコナデ→頸~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラナデ	
"	"	17	小形甕	頸~底7/8		3.0			明赤褐	口縁部ヨコナデ、胴部摩擦の為不明瞭	ヘラナデ	
"	"	18	小形甕	完形	12.9	6.2	12.5		赤褐	口縁部ヨコナデ→頸~底部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラナデ	
177	"	19	内黒鉢	ほぼ完形	21.6		16.1		橙	口縁部ヨコナデ→胴上部ヘラミガキ、胴中~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	20	内黒鉢	ほぼ完形	22.3	9.0	15.5		橙	口縁部ヨコナデ、胴下半~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	21	甕	ほぼ完形	28.1	9.3	24.4		明赤褐	口縁部ヨコナデ→胴~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ←底部ヘラケズリ	孔 2
"	90住	1	内黒坏	口~底7/8	15.3		4.8		橙	口縁部ヨコナデ→体~底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	2	小形甕	ほぼ完形	12.7		11.7		橙	ヘラミガキ←口縁部ヨコナデ、胴~底部ヘラケズリ	口縁部ヘラミガキ、胴~底部ヘラナデ	
"	"	3	甕	口~胴1/2	17.8				暗赤灰	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラナデ	
"	91住	1	須恵坏	口~底2/3	(12.8)	6.0	3.6	6.6	灰オリーブ	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	口~底1/2	(12.5)	6.0	3.2	6.7	青灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	須恵坏	口~底1/5	(12.0)	(6.2)	3.7		灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	4	須恵坏	口~底1/2	(13.0)	(7.0)	3.3	7.4	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	5	須恵坏	口~底2/5	(12.0)	(6.0)	3.7	(6.4)	青灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	6	須恵坏	口~底1/2	(13.2)	(6.8)	3.6	6.2	灰	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	7	内黒坏	口~底3/5	14.4	5.6	3.3		にぶい赤褐	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ 底部回転糸切り→一部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコミガキ、体~底部放射状ミガキ	
"	"	8	内黒坏	体下~底ほぼ完形		7.5			褐灰	体下部ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	放射状ミガキ	
"	"	9	甕	口~胴1/5	(19.6)				橙	口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	
"	"	10	小形甕	口~肩4/5	13.4				にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	11	小形甕	胴下~底底完形		6.3			にぶい橙	ロクロナデ、底部外周静止ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	12	鉢	口~体部1/6					橙	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヨコ方向のナデ	
178	1坑	1	坏	口~底1/2	(12.2)		3.6		橙	口縁部ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヨコ方向のナデ	
"	"	2	内黒坏	口~底1/4	(8.4)		4.6		にぶい黄橙	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
"	5坑	1	灰釉壺	体~底1/4	(7.2)				灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	釉ハケ塗り
"	"	2	須恵長頸壺	頸~底1/3		7.6			灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	灰釉小瓶	頸~底		7.3			灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	灰緑色の厚い釉、取手付
"	7坑	1	須恵高台坏	口~底2/3	(13.8)	(9.2)	6.0	10.0	青灰	ロクロナデ、底部回転糸切り→内弧状に静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	2	内黒坏	ほぼ完形	16.3	8.2	4.7		にぶい橙	ロクロナデ、底部外周静止ヘラケズリ 底部回転糸切り→静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	30坑	1	須恵坏	口~底1/4	(13.8)	8.2	4.2	7.8	青灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	37坑	1	内黒坏	口~底3/4	13.9	6.0	4.3		橙	ロクロナデ、底部外周静止ヘラケズリ、底部回転糸切り→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	2	両黒坏	口~底1/2	(11.2)	(4.6)	4.0		黒	ヘラミガキ、底部多角形状ミガキ	ヘラミガキ	
"	680坑	1	坏	口~体1/4	(14.2)				灰	口縁部ヨコナデ、体上部成形時のナデ、体下部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	695坑	1	須恵坏	口~底1/5	(13.8)	(6.5)	3.4		灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	883坑	1	内黒坏	口~底2/3	16.8	6.1	5.1		橙	ロクロナデ、底部外周ヘラケズリ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	420坑	1	内黒坏	口~底1/3	(14.2)	(6.6)	5.4		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→かるいナデ	暗文風ミガキ	
"	"	2	坏	口~体1/3	(12.3)				灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	391墓	1	内黒鉢	口~底2/3	(19.8)		9.6		灰黄	ヘラミガキ←体中部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	1203坑	1	内黒坏	口~底1/3	12.0		5.3		橙	口縁部ヨコナデ、体下~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
178	1203坑	2	須恵長頸壺	口頸部 ほぼ完存	7.3				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	2溝	1	須恵坏	口~底1/2	(14.3)	(7.1)	3.7	(7.2)	灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り 不調整	ロクロナデ	軟質の須恵器
"	"	2	小形甕	口~胴上 3/5	12.8				にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	1溝	1	小形甕	口~胴上 1/5	(12.8)				橙	カキ目	ロクロナデ	
"	3溝	1	須恵坏蓋	つまみ~ 天井1/4					灰	ロクロナデ→天井上部回転ケ ズリ	ロクロナデ	
"	"	2	須恵坏	体~底1/3					灰	ロクロナデ、底部静止ヘラケ ズリ	ロクロナデ	刻書
"	"	3	坏	口~底1/5					橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケ ズリ	ロクロナデ	
"	"	4	灰釉壺	体~底1/3	(5.5)				灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	遺構外	1	両黒高台坏	口~底1/3	(10.4)	(6.3)	5.2		にぶい橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	2	小壺	底 ほぼ完存	4.0				橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	小皿	口~底1/2	(7.3)	(4.3)	1.8		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り 不調整	ロクロナデ	
"	"	4	小皿	口~底4/5	10.4	6.1	2.6		にぶい黄	ロクロナデ、底部回転糸切り 不調整	ロクロナデ	
"	"	5	小皿	口~底1/2	(9.8)	(6.3)	2.2		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り 不調整	ロクロナデ	
"	"	6	須恵壺蓋	つまみ~ 口縁3/5	4.4		2.0		灰褐	ロクロナデ→天井上部回転ケ ズリ	ロクロナデ	
"	"	7	須恵小形壺	口~肩1/4	(3.6)				灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	8	甕	口~肩1/5	(22.0)				橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	9	須恵壺	胴~底2/3		7.2			灰褐	ロクロナデ、底部回転糸切り 軽いナデ	ロクロナデ	
179	遺構外	1	壺	口~底1/3	(12.2)	(5.0)	(20.5)		橙	口縁部ヘラミガキ、頸~肩部 施文+肩~底部ヘラミガキ	口~頸ヘラミガキ、頸~底ヘ ラナデ	不連続
"	"	2	小型器台	口~底2/3	(8.2)	10.2	8.2		橙	ヘラミガキ	坏部ヘラナデ、台部ヘラナデ	円形四方透し
"	3墓	1	須恵質搦鉢	完形	25.0	15.5	9.4		灰褐	口~体上半部ヨコナデ、体下半部 ヘラナデ、底部ヨコ方向のナデ	ヨコ方向のナデ→体下半部搦 目8本(一単位10条)	
"	"	2	青磁盤	口~体1/7	(22.2)				灰白	連弁文		釉淡い青緑、厚い 龍泉窯
"	35坑	1	須恵質搦鉢	口~体1/5	(26.7)				灰白	口縁部回転ナデ、体部ヘラナ デ	回転ナデ→体部搦目(一単位 8条)	
"	236坑	1	須恵質搦鉢	体~底	(9.3)				灰	タテ方向のヘラナデ→体下部 ロクロナデ	搦目(一単位6条?)	
"	40坑	1	須恵質搦鉢	口~体1/8					灰	口縁部回転ナデ、体部ヘラナ デ	口縁部回転ナデ、体部搦目	
"	44坑	1	須恵質搦鉢	口~体1/7					橙	口縁部ロクロナデ、体部タテ ナデ	ロクロナデ→体部搦目	
"	48坑	1	内耳鍋	口~体1/9					黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土:長石
"	10坑	1	内耳鍋	口縁1/8	(50.0)				暗赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	内耳鍋	底1/8	(22.0)				灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土:角閃石
"	"	3	内耳鍋	底1/8	(25.0)				褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土:角閃石

表20 第6章 宮平遺跡 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
180	1	1住	平瓦	端面~側面	にぶい黄橙	長さ<10.6> 幅<9.4> 厚さ2.4	凹面布目、凸面タタキ→ナデ、端面ケズリ、側面ケズリ、凹面側縁面取り	布目10×9/1cm
"	2	"	平瓦	端面~体部	灰黄	長さ<17.8> 幅<10.7> 厚さ2.0	凹面布目、凸面平行タタキ→あらい ナデ、端面ケズリ	布目10×10
"	3	9住	平瓦	体部	浅黄	長さ<11.4> 幅<13.7> 厚さ2.4	凹面布目→軽いナデ、凸面タタキ具の縁痕と 思われる段状の痕跡→布目→疎なナデ	凹面布目10×10 凸面布目 10×10、布の縫じ目痕あり
"	4	"	平瓦	端面~体部	浅黄橙	長さ<17.7> 幅<12.5> 厚さ2.4	凹面布目、凸面平行タタキ→ヨコ、ナ メのナデ、端面ケズリ、凹面側縁面取り	布目10×11
"	5	"	平瓦	端面~体部	にぶい黄橙	長さ<14.2> 幅<14.1> 厚さ1.9	凹面布目(水切り痕残る)、凸面平行タタキ(タタキ具側縁 残る)一部分に軽いナデ、端面ケズリ、凹面側縁面取り	布目11×10
"	6	"	平瓦	端面~側面	にぶい黄橙	長さ<13.1> 幅<11.3> 厚さ2.1	凹面布目、凸面平行タタキ(タタキ具側縁残る)→ 部分的なナデ、端・側面ケズリ、凹面側縁面取り	布目10×10
"	7	"	平瓦	側面~体部	にぶい黄橙	長さ<14.6> 幅<16.4> 厚さ2.3	凹面布目、凸面タタキ→ナデ、側面 ケズリ、凹面側縁面取り	布目10×10
"	8	"	丸瓦	玉縁部~ 体部	灰褐	長さ<6.5> 幅<8.6> 厚さ1.7	凸面平行タタキ→ナデ、凹面ヨコナ デ	須恵質(自然釉)、筒部玉 縁部一体成形
"	9	"	丸瓦	端面~側面	暗灰	長さ<5.6> 幅<6.7> 厚さ1.5	凸面平行タタキ→ナデ、凹面ヨコ方向のナデ 端・側面ケズリ、凹面端縁・側縁面取り	須恵質
"	10	"	丸瓦	端面~側面	浅黄	長さ<15.7> 幅<8.5> 厚さ2.7	凸面平行タタキ→軽いナデ(タタキ具外 縁痕残る)、凹面布目、端・側面ケズリ	布目9×9
"	11	"	丸瓦	端面~側面	灰	長さ<14.2> 幅<8.6> 厚さ1.7	凸面平行タタキ→軽いナデ、凹面ヨコ方向の ナデ 端・側面ケズリ、凹面端縁面取り	須恵質
181	1	20坑	土器片板	完存	にぶい褐	長さ3.2 幅3.4 厚さ0.8 重さ11.0		内耳鍋破片を利用
"	2	80住	土製紡錘車	3/4	橙	上外径(7.5) 下外径(7.7) 孔径0.9 厚さ1.2 重さ(64.0以上)	扁平な円盤状、全面ヘラミガキ	
"	3	44住	土製紡錘車	完形	橙	上外径3.5 下外径4.4 孔径0.6 厚さ3.1 重さ65.0		

第6章 宮平遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
181	4	12住	土製紡錘車	ほぼ完形	にぶい橙	上外径5.1 下外径7.3 孔径1.2 厚さ3.6 重さ<169.0>	上面・側面ケズリ、下面焼成後のえぐり	
〃	1	17住	石製紡錘車	完形	滑石	上外径2.0 下外径4.4 孔径0.6 厚さ2.0 重さ49.1		
〃	2	42住	石製紡錘車	完形	滑石	上外径2.5 下外径4.2 孔径0.6 厚さ2.0 重さ50.0	上面周縁の稜はにぶい	
〃	3	79住	石製紡錘車	4/9	滑石	上外径(2.6) 下外径(4.3) 孔径(0.7) 厚さ1.7 重さ<18.0>		
〃	4	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.2 幅1.7 厚さ0.4 重さ1.4	凹基(B1)、先端角38'	
〃	5	遺構外	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ2.9 幅<1.6> 厚さ0.4 重さ<1.1>	凹基(B1)、先端角44'	
〃	6	502坑	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.2 幅1.4 厚さ0.4 重さ0.9	凹基(B1)、先端角45'	
〃	7	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ3.2 幅1.8 厚さ0.4 重さ1.7	凹基(B1)、先端角41'	
〃	8	遺構外	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ2.2 幅<1.6> 厚さ0.4 重さ<1.1>	凹基(B1)、先端角50'	
〃	9	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ2.3 幅1.7 厚さ0.4 重さ1.0	凹基(B1)、先端角52'	
〃	10	遺構外	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ<2.3> 幅<1.2> 厚さ<0.3> 重さ<0.6>	先端角41'	
〃	11	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.9 幅1.3 厚さ0.3 重さ0.4	凹基(B1)、先端角42'	
〃	12	32住	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.6 幅1.4 厚さ0.5 重さ0.6	凹基(B1)、先端角52'	
〃	13	76住	石鏃	先端・片脚欠損	黒曜石	長さ<1.6> 幅<1.3> 厚さ0.3 重さ<0.4>	凹基(B1)、先端角50'	
〃	14	25住	石鏃	片脚欠損	黒曜石	長さ1.5 幅<1.1> 厚さ0.3 重さ<0.3>	凹基(B1)、先端角62'	
〃	15	遺構外	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.3> 幅1.2 厚さ<0.3> 重さ<0.4>	凹基(B1)	
〃	16	28住	石鏃	完形	硬質頁岩	長さ2.8 幅1.4 厚さ0.4 重さ1.2	有茎平基(D1)、先端角38'	
〃	17	17住	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.4> 幅1.3 厚さ0.4 重さ<0.6>	有茎凹基(D1)、先端角38'	
〃	18	74住	石鏃	片脚・茎端欠損	黒曜石	長さ<2.5> 幅<1.1> 厚さ0.5 重さ<0.9>	有茎凹基(D1)、先端角38'	
〃	19	74住	スクレイパー	完形	頁岩	長さ4.2 幅6.2 厚さ1.1 重さ23.0	素材は横長剥片、下辺に刃部	未成品の可能性あり
〃	20	80住	スクレイパー	左側欠損	黒曜石	長さ3.0 幅<5.3> 厚さ1.4 重さ<18.0>	素材は横長剥片、下辺に刃部	
182	21	44住	敲石	完形	安山岩	長さ17.0 幅20.0 厚さ10.5 重さ4670.0	正・裏面に敲打痕的な凹み、上・下・右側面敲痕	
〃	22	17住	磨石	完形	安山岩	長さ10.3 幅5.7 厚さ4.0 重さ373.0	全面に均一な磨り。	
〃	23	55住	磨石	完形	安山岩	長さ12.0 幅7.4 厚さ3.4 重さ434.0	周縁に敲痕、正・裏面に磨面。	
〃	24	79住	磨石	完形	安山岩	長さ11.4 幅7.3 厚さ3.3 重さ<444.0>	正・裏面に磨面、上側面敲痕	
〃	25	74住	磨石	完形	安山岩	長さ10.0 幅7.7 厚さ2.9 重さ333.0	正・裏面に磨面、上側面敲痕	
〃	26	遺構外	磨石	完形	安山岩	長さ13.5 幅12.7 厚さ7.0 重さ1730.0	正・裏面に磨面、周縁に断続的な敲痕	
〃	27	89住	磨石	完形	安山岩	長さ9.6 幅7.1 厚さ3.0 重さ328.0	正・裏面に磨面	
〃	28	74住	磨石	完形	安山岩	長さ8.2 幅7.5 厚さ5.7 重さ520.0	正・裏面に磨面、上・下側面に敲痕	
〃	29	79住	磨石	完形	安山岩	長さ10.6 幅8.4 厚さ4.2 重さ518.0	正・裏面に磨面、右・左側面に敲痕	
〃	30	遺構外	磨石	完形	安山岩	長さ4.3 幅4.5 厚さ4.3 重さ124.0	全面に磨り、上・下面に敲痕	
〃	31	74住	磨石	完形	安山岩	長さ5.8 幅5.3 厚さ4.7 重さ190.0	四面に磨面	
〃	32	17住	磨石	完形	安山岩	長さ4.6 幅4.2 厚さ2.7 重さ75.0	正・裏面に磨面	
〃	33	17住	磨石	完形	安山岩	長さ6.2 幅4.1 厚さ2.2 重さ95.7	正・裏面に磨面	
〃	34	2溝	円盤形石製品	完形	砂岩	長さ6.8 幅7.1 厚さ2.0 重さ145.0	正・裏面に磨面、正面中央に円錐形の小孔	
〃	35	9住	石皿?		安山岩	長さ16.3 幅14.2 厚さ4.6 重さ1220.0	正面中央に半円形の凹み	
〃	36	38住	台石		砂岩	長さ16.5 幅16.7 厚さ4.1 重さ1850.0	磨面2(正面・右側面)	
〃	37	18住	石鉢	完形	安山岩	最大径15.8 高さ8.9 凹部径10.0 凹部深さ6.8 重さ1820.0	裏面に小さな凹み7ヶ所以上、径1.5~2.5 深さ0.5~1.0	
〃	38	36住	石鉢	一部欠損	安山岩	最大径20.0 高さ10.5 凹部径11.0 凹部深さ3.8 重さ<4670.0>		
183	39	12住	砥石	下・両側欠損	砂岩	長さ<14.8> 幅<10.9> 厚さ<3.5> 重さ<968.0>	砥面3(正面・裏面)	
〃	40	28住	砥石	上・下・右側欠損	砂岩	長さ<13.8> 幅<13.4> 厚さ<2.8> 重さ<675.0>	砥面2(正面・裏面)	
〃	41	44住	砥石	完形	凝灰岩	長さ17.4 幅5.8 厚さ5.7 重さ720.0	砥面4(正面・裏面・側面)	
〃	42	遺構外	砥石	下部欠損	砂岩	長さ<15.8> 幅<10.4> 厚さ<2.0> 重さ<570.0>	砥面3(正面・裏面・左側) 断面V字形溝状の深い擦痕	
〃	43	遺構外	砥石	上部欠損	凝灰岩	長さ<9.0> 幅<4.0> 厚さ<3.7> 重さ<142.0>	砥面4(正面・裏面・側面)	
〃	44	82住	砥石	完形	凝灰岩	長さ6.0 幅2.5 厚さ1.9 重さ<46.0>	砥面6(全面)側面に貫通孔	
〃	45	83住	砥石	上・下部欠損	凝灰岩	長さ<6.5> 幅<4.0> 厚さ<1.8> 重さ<58.0>	砥面4(正面・裏面・側面)	
〃	46	遺構外	砥石	下部欠損	砂岩	長さ<3.7> 幅<2.8> 厚さ<1.8> 重さ<32.0>	砥面5(正面・裏面・側面・上部)	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
183	47	遺構外	砥石	上部欠損	凝灰岩	長さ<6.7> 幅<4.0> 厚さ<2.6> 重さ<96.0>	砥面5 (正面・裏面・側面・下部)	
〃	48	遺構外	砥石	下部欠損	凝灰岩	長さ<6.6> 幅<3.3> 厚さ<2.4> 重さ<96.0>	砥面5 (正面・裏面・上部) 上側面に面取り状の砥面5、敲痕3?	
〃	49	9住	砥石	完形	凝灰岩	長さ8.1 幅3.0 厚さ1.4 重さ38.8	砥面6 (全面)	
〃	50	遺構外	磨製石斧	完形	凝灰岩	長さ4.0 幅3.6 厚さ0.8 重さ22.0	全面に研磨	
〃	51	遺構外	打製石斧	完形	千枚岩質 粘板岩	長さ12.9 幅5.9 厚さ1.6 重さ156.0		
〃	52	25住	有孔石製品?	完形	砂岩	長さ4.5 幅3.1 厚さ2.0 重さ22.5	正面上部に穿孔	擬石器?
〃	53	16住	滑石製品	上・下・ 右側欠損	滑石	長さ<6.1> 幅<5.8> 厚さ<2.0> 重さ<89.1>	正面中央に穿孔	
184	1	N-20	鉄鏃	基端部欠	鉄	身部長2.6 幅(2.8) 頸部長2.6 茎長<0.4> 重さ8.4	脇扶三角形鏃	
〃	2	Q-20	鉄鏃	両端部欠	鉄	身部長<2.5> 幅<2.3> 頸部長1.7 茎長<1.7> 重さ8.0	脇扶三角形鏃	
〃	3	27住	刀子	刀身部・ 茎一部欠	鉄	刀身部長<7.6> 幅1.5~1.3 背幅0.5 茎長<3.7>	平造、片関	
〃	4	83住	刀子	刀身部	鉄	刀身部長<4.9> 幅1.1~背幅0.3	平造	
〃	5	9住	刀	刀身部欠	鉄	茎長<10.6> 背幅0.4	平造、両関	
〃	6	72住	刀子	刀身先端欠	鉄	刀身部長<7.2> 幅1.3~0.8 背幅0.5 茎長<1.8>	平造、両関	
〃	7	43住	刀子	刀身部欠	鉄	刀身部長<5.6> 幅1.1~1.0 背幅0.5 茎長4.8	平造、両関	
〃	8	51住	刀子	刀身部欠	鉄	刀身部長<2.4> 幅1.2~背幅0.4 茎長<4.9>	平造、両関	
〃	9	72住	鉄斧	ほぼ完形	鉄	全長8.0 刀幅(4.2) 基部径3.3×2.5 重さ102.4	有袋鉄斧、基部断面楕円形	袋部内部に木質遺存
〃	10	56住	鉄斧	ほぼ完形	鉄	全長7.0 刀幅3.4 基部幅3.1 奥行1.3 重さ56.2	有袋鉄斧、基部断面長方形	
〃	11	72住	鑿	完形	鉄	長さ12.8 刀幅1.4 重さ53.3		
〃	12	44住	釘	完形	鉄	長さ5.4 幅0.4 厚さ0.3		
〃	13	54住	釘	基部~軸部	鉄	長さ<7.8> 幅0.7~厚さ0.7~		
〃	14	R-2	釘	基部~軸部	鉄	長さ<5.2> 幅0.7~厚さ0.6~		
〃	15	23建	釘	基部~軸部	鉄	長さ<3.8> 基部径1.1×1.0 軸部幅0.4~厚さ0.4~		基部サビで太くなっているのか不明
〃	16	51住	棒状鉄製品	不明	鉄	長さ<14.3> 幅<0.6> 厚さ<0.5>		
〃	17	72住	棒状鉄製品	不明	鉄	長さ<8.9> 幅<0.7~0.4> 厚さ<0.7~0.4>		
〃	18	72住	棒状鉄製品	不明	鉄	長さ<7.5> 幅<0.7~0.6> 厚さ<0.6~0.5>		
〃	19	72住	弯曲鉄製品	取手?	鉄	長さ<10.2> 幅<1.3~0.6> 厚さ<0.8~0.7>		
〃	20	19住	板状鉄製品	不明	鉄	長さ<6.7> 幅<3.1~2.7> 厚さ0.4	端部折り曲げている	
〃	21	74住	板状鉄製品	不明	鉄	長さ<6.4> 幅<3.0~2.2> 厚さ0.3~0.28	端部折り曲げている	
〃	22	17住	耳環	完形	銅・銀?	径2.7×2.5 断面0.5×0.6 開き部0.0 重さ13.0	銀箔が剥落?	
〃	23	79住	耳環	完形	銅・金	径2.5×2.3 断面0.8×0.5 開き部0.2 重さ13.0		
〃	24	80住	耳環	完形	銅・金	径1.7×1.5 断面0.6×0.4 開き部0.2 重さ4.2	開き部端面も金箔有り	
〃	25	89住	耳環	完形	銅・金	径3.0×2.8 断面0.8×0.7 開き部0.2 重さ19.2	巻糸遺存、開き部端面も金箔有り・ 放射状の紋目	
〃	26a	55住	帯金具(丸柄)	完形	青銅	横2.9 縦1.8 厚さ0.45 垂孔0.3×1.7	表金具、脚錠式	
〃	26b	55住	帯金具(丸柄)	完形	青銅	横2.8 縦1.8 厚さ0.12 垂孔0.4×1.6	裏金具	釘が折れて裏金具に錆着
〃	27	56住	帯金具	ほぼ完形	銅	横3.6 縦1.8 厚さ0.1	円孔2	
〃	28	1住	帯金具		銅	横<2.7> 縦1.7 厚さ0.1	方形透し孔	
〃	29	H-22	斧?		銅	長さ<4.6> 幅1.35 厚さ0.2	薄い銅板を巻くように折り曲げて接 着、成形	
〃	30	遺構外	筒状銅製品	完形	銅	長さ1.2~0.8 径1.2×1.2 厚さ0.08		
185	31	16住	元豊通宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径1.95×1.9 重さ2.5	北宋、初鑄年1078、行書	
〃	32	16住	景德元宝	ほぼ完形	銅	銭径2.55×2.5 内径1.8×1.8 重さ3.3	北宋、初鑄年1004、真書	
〃	33	18住	熙寧元宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径1.9×1.8 重さ4.3	北宋、初鑄年1068、篆書	
〃	34	18住	天禧通宝	完形	銅	銭径2.6×2.6 内径2.0×1.95 重さ4.0	北宋、初鑄年1017、真書	
〃	35	43住	天聖元宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径1.8×1.8 重さ3.0	北宋、初鑄年1023、篆書	
〃	36	43住	至和通宝	完形	銅	銭径2.35×2.35 内径1.7×1.7 重さ2.7	北宋、初鑄年1054、真書	
〃	37	53堅	政和通宝?	文字摩滅	銅	銭径2.65×2.6 内径2.0×1.9 重さ2.4	北宋、初鑄年1111、摩滅	
〃	38	56住	祥符元宝	ほぼ完形	銅	銭径2.6×2.6 内径1.9×1.8 重さ3.4	北宋、初鑄年1009、真書	
〃	39	56住	政和通宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径2.15×2.1 重さ2.7	北宋、初鑄年1111、篆書	

第6章 宮平遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
185	40	10坑	皇宋通宝	文字摩滅	銅	錢径2.5×2.45 内径1.75×1.7 重さ3.9	北宋、初鑄年1038、摩滅	
〃	41	10坑	咸平元宝	完形	銅	錢径2.45×2.45 内径1.8×1.8 重さ3.0	北宋、初鑄年998、真書	
〃	42	13坑	政和通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.1×2.1 重さ3.6	北宋、初鑄年1111、篆書	
〃	43	20坑	景德元宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径1.8×1.8 重さ3.1	北宋、初鑄年1004、真書	
〃	44	W-9	元豊通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径1.95×1.95 重さ3.2	北宋、初鑄年1078、行書	20坑付近出土
〃	45	W-9	嘉祐通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.0×2.0 重さ3.2	北宋、初鑄年1056、真書	20坑付近出土
〃	46	25坑	皇宋通宝	完形	銅	錢径2.45×2.45 内径2.0×2.0 重さ3.1	北宋、初鑄年1038、篆書	
〃	47	293墓	元祐通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.1×2.05 重さ3.6	北宋、初鑄年1086、行書	
〃	48	293墓	元豊通宝	完形	銅	錢径2.45×2.45 内径1.9×1.9 重さ3.2	北宋、初鑄年1078、行書	
〃	49	293墓	皇宋通宝	5/6	銅	錢径2.5×2.5 内径1.9×1.8 重さ2.6	北宋、初鑄年1038、真書	
〃	50	686墓	治平元宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ2.9	北宋、初鑄年1064、篆書	
〃	51	945墓	永楽通宝	完形	銅	錢径2.55×2.55 内径2.15×2.15 重さ3.6	明、初鑄年1408	
〃	52	945墓	皇宋通宝	文字摩滅	銅	錢径2.45×2.4 内径1.8×1.8 重さ2.2	北宋、初鑄年1038、摩滅	
〃	53	945墓	元豊通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径1.8×1.8 重さ3.1	北宋、初鑄年1078、篆書	
〃	54	945墓	治平元宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ2.9	北宋、初鑄年1064、真書	
〃	55	945墓	洪武通宝	完形	銅	錢径2.45×2.45 内径2.05×2.05 裏内径1.95×1.95 重さ3.8	明、初鑄年1368	背文字「断」
〃	56	968墓	開元通宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ2.5	唐、初鑄年621	
〃	57	968墓	熙寧元宝	完形	銅	錢径2.35×2.4 内径1.9×1.9 重さ 2.4	北宋、初鑄年1068、篆書	
〃	58	968墓	熙寧元宝	ほぼ完形	銅	錢径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ1.9	北宋、初鑄年1068、真書	
〃	59	968墓	宣和通宝	完形	銅	錢径2.6×2.6 内径2.0×2.0 重さ3.8	北宋、初鑄年1119、分楷	
〃	60	968墓	元祐通宝	4/5	銅	錢径2.6×(2.6) 内径1.95×(2.0) 重さ<2.3>	北宋、初鑄年1086、篆書	
〃	61	968墓	不明	1/4	銅	重さ<1.8>		
〃	62	969墓	大観通宝	完形	銅	錢径2.45×2.45 内径2.1×2.1 重さ3.3	北宋、初鑄年1107	
〃	63	969墓	貞元重宝	ほぼ完形	銅	錢径2.4×2.4 内径2.0×2.05 重さ2.6	唐、初鑄年758	
〃	64	969墓	熙寧元宝	3/4	銅	錢径2.4×2.4 内径2.0×2.0 重さ2.3	北宋、初鑄年1068、篆書	
〃	65	M-20	熙寧元宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.0×2.0 重さ3.6	北宋、初鑄年1068、真書	
〃	66	R-11	永楽通宝	完形	銅	錢径2.55×2.55 内径2.1×2.1 重さ3.4	明、初鑄年1408	
〃	67	R-11	政和通宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径2.1×2.1 重さ2.6	北宋、初鑄年1111、篆書	
〃	68	遺構外	熙寧元宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.1×2.1 重さ2.8	北宋、初鑄年1068、真書	
〃	69	遺構外	永楽通宝	ほぼ完形	銅	錢径(2.4)×(2.4) 内径1.9×1.9 重さ2.0	明、初鑄年1408	
〃	70	遺構外	嘉祐通宝	文字摩滅	銅	錢径2.35×2.35 内径2.0×1.95 重さ3.1	北宋、初鑄年1078、真書	
〃	71	遺構外	開元通宝	完形	銅	錢径2.45×2.45 内径2.0×2.0 重さ2.7	唐、初鑄年621	
〃	72	遺構外	元符通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.0×2.0 重さ3.8	北宋、初鑄年1098、篆書	
〃	73	遺構外	皇宋通宝	3/4	銅	錢径2.4×(2.4) 内径1.9×(1.9) 重さ<2.0>	北宋、初鑄年1038、篆書	
〃	74	遺構外	元豊通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.0×2.05 重さ3.0	北宋、初鑄年1078、行書	
〃	75	遺構外	元豊通宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ2.8	北宋、初鑄年1078、行書	
〃	76	遺構外	嘉祐元宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径1.9×1.9 重さ3.2	北宋、初鑄年1056、篆書	
〃	77	遺構外	天聖元宝	完形	銅	錢径2.55×2.6 内径2.1×2.1 重さ3.3	北宋、初鑄年1023、真書	
〃	78	遺構外	祥符元宝	4/5	銅	錢径(2.6)×2.55 内径(1.9)×1.9 重さ<2.2>	北宋、初鑄年1009、真書	
〃	79	遺構外	寛永通宝	4/5	銅	錢径2.45×2.45 内径2.0×2.0 重さ<2.9>	江戸、初鑄年1636	
〃	80	遺構外	一符一一	1/4	銅			
〃	81	遺構外	元豊通宝	ほぼ完形	銅	錢径(2.5)×(2.5) 内径1.8×0.8 重さ3.4	北宋、初鑄年1078、篆書	
〃	82	遺構外	元祐通宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.0×2.0 重さ2.9	北宋、初鑄年1086、篆書	
〃	83	遺構外	天聖元宝	完形	銅	錢径2.5×2.5 内径2.05×2.05 重さ3.2	北宋、初鑄年1023、真書	
〃	84	遺構外	隆平永宝	完形	銅	錢径2.6×2.6 内径2.1×2.1 重さ3.1	平安、初鑄年796	
〃	85	遺構外	寛永通宝	完形	銅	錢径2.4×2.4 内径2.0×1.95 重さ2.4	江戸、初鑄年1636	

表21 第7章 上原古墳群 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
189	2 堅	1	内黒埴	底3/4		7.8			橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	2	灰釉埴	底1/2		(7.5)			にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	外全面施釉
"	"	3	灰釉埴	底1/5		7.6			灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	釉ハケ塗り
"	"	4	灰釉埴	口~底1/3	(12.3)	(6.6)	3.0		灰白	ロクロナデ、底部回転系切り不調整	ロクロナデ	釉ハケ塗り、大原2号窯式か
191	3 住	1	内黒坏	口~底1/2	(12.4)	6.0	4.9		橙	ロクロナデ→体下~底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	2	内黒坏	体~底2/3		6.5			橙	ロクロナデ、底部回転系切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	3	小形甕	口~胴上1/4	(13.4)				橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	4	甕	口~肩1/3	(17.8)				橙	ロクロナデ、胴部カキ目	ロクロナデ	
"	"	5	甕	口~胴上1/4	(19.2)				にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	口縁端面取り
"	"	6	甕	口~底2/3	22.5	3.5	28.0		灰赤	ロクロナデ→胴~底部静止ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、胴~底部ハケナデ	口縁端面取り
196	18 坑	1	内黒坏	口~底1/2	(13.1)	(5.0)	4.1		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転離し糸切り不調整	ヘラミガキ	
197	遺構外	1	甕	頸~肩2/5					褐	櫛描波状文・簾状文	ヨコナデ	
"	"	2	小形甕	口~胴2/5	(10.8)				にぶい褐	櫛描波状文・簾状文	ヨコナデ	
198	"	3	内黒坏	口~底1/2	(12.0)	(5.2)	3.7		橙	ロクロナデ、底部回転系切り→ナデ	ヘラミガキ	
"	"	4	灰釉埴	口~底1/2	(17.0)	7.8	5.1		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	光ヶ丘1号窯式
"	"	5	須恵插鉢	口~体1/9					褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	6	插鉢	口~体1/8					褐	ロクロナデ	ロクロナデ	

表22 第7章 上原古墳群 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
189	5	2 堅	鉄製紡錘車	ほぼ完形	鉄	錘径5.9 厚さ0.25 軸径0.4 長さ11.9 重さ24.3	軸は錘直下で折れ曲がっている。軸断面楕円形	
196	2	25 坑	台石		安山岩	長さ24.0 幅14.7 厚さ5.8 重さ3500.0	磨面1(正面)	
"	3	10ピット	矛状鉄器	完形	鉄	全長18.3 刃幅(1.4) 基部径2.3×2.2 重さ134.1	刃部横断面：長方形、基部断面：円形	基部内面に木質痕
197	1	遺構外	羽口	1/4先端部	酸化炎焼成	長さ3.3 重さ20	磁着度2、メタル度なし、胎土：8mm程のスサ有	
"	2	"	羽口	破片先端部	酸化炎焼成	長さ5.0 重さ83	磁着度4、メタル度なし、胎土：4~10mm程のスサ有	
"	3	2 堅	含鉄碗形鍛冶滓	3/4	鉄滓	長軸8.1 短軸7.2 厚さ3.8 重さ273.26	磁着度8、メタル度H(○)、破面数1、表：暗褐 地：褐	
"	4	"	含鉄碗形鍛冶滓	2/3	鉄滓	長軸8.4 短軸7.5 厚さ4.5 重さ301.10	磁着度8、メタル度L(●)、破面数1、表：黄赤褐 地：暗黒褐	2段形成、「碗形精錬鍛冶滓」
"	5	遺構外	含鉄碗形鍛冶滓	1/3	鉄滓	長軸6.6 短軸5.0 厚さ3.3 重さ160.46	磁着度8、メタル度L(●)、破面数3、表：黒褐 地：黒褐	
"	6	"	含鉄碗形鍛冶滓	完形	鉄滓	長軸5.3 短軸4.6 厚さ1.9 重さ68.70	磁着度8、メタル度H(○)、破面なし、表：黒褐	
"	7	"	含鉄碗形鍛冶滓	1/2	鉄滓	長軸5.1 短軸5.0 厚さ3.4 重さ93.26	磁着度8、メタル度L(●)、破面数1、表：暗褐 地：黒	
"	8	"	碗形鍛冶滓	1/3	鉄滓	長軸5.0 短軸4.1 厚さ2.1 重さ62.00	磁着度7、メタル度なし、破面数2、表：暗赤褐 地：青黒	
198	7	I-S-1	元祐通宝	ほぼ完形	銅	銭径2.4×2.4 内径2.0×1.95 重さ2.6	北宋、初鑄年1086、行書	
"	8	遺構外	打製石斧	完形	千枚岩質粘板岩	長さ8.7 幅4.8 厚さ1.5 重さ70.0	基部両側面に抉りのある長方形	風化が著しい千枚岩質粘板岩
"	9	"	凹石	完形	凝灰岩	長さ7.8 幅8.0 厚さ4.8 重さ336.0	正面に凹み	
"	10	"	磨石	一部欠損	安山岩	長さ15.2 幅5.0 厚さ4.6 重さ440.0	正面、右側、裏面に磨面、下側面に敲痕	
"	11	"	磨石	一部欠損	安山岩	長さ15.6 幅6.6 厚さ5.0 重さ<844.0>	正面、右側、裏面一部に磨面、上下側面に敲痕	
"	12	"	石鉢	1/2残存	安山岩	最大径<22.7> 高さ<10.8> 凹部径<16.1> 凹部深さ<7.7>	凹部は2段状になっている。	重さ3800.0
"	13	"	石臼(上臼)	1/4残存	安山岩	直径(16.6) 高さ11.5 上面くぼみ2.9 下面へこみ<0.8>	溝は放射状、供給口形状は円形か？	重さ4080.0

表23 第8章 山崎古墳群・山崎遺跡 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
202	山1住	1	内黒坏	ほぼ完形	12.6	5.4	3.6		黄橙	ロクロナデ、底部静止ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	2	坏	ほぼ完形	12.1	4.4	3.7		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	内黒碗	口～底1/2	(13.8)	7.0	4.5		黄橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	4	内黒碗	底完存		7.0			橙	ロクロナデ	摩滅の為不明瞭	
204	山遺構外	1	内黒碗	底～高台1/3		(7.9)			黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	灰釉碗	体～底1/3		(7.2)			灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	釉ハケ塗り
"	"	3	灰釉皿	体～底2/7		(6.4)			黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	釉ハケ塗り
"	"	4	須恵盤	口～体1/10					橙	ヨコ方向ナデ→体下部ヘラケズリ	ヨコ方向ナデ	
"	"	5	須恵播鉢	底1/4		(15.0)			黄灰	ヘラナデ、底部ナデ	ナデ	罎目5条-単位
206	山北古墳	1	須恵大甕	口頸1/3	(36.5)				暗赤褐	ロクロナデ→肩上部タタキ	ロクロナデ→肩上部タタキ	
"	"	2	須恵横瓶	ほぼ完形	(12.3)		29.2		灰	口頸部ヨコナデ、体部内面円心タタキ目→平行タタキ目	口頸部ヨコナデ、体部内面タタキ痕	
"	"	3	高坏	脚2/3		(11.2)			橙	脚部ヘラケズリ→ヘラミガキ 脚裾部ヨコナデ→ヘラミガキ	脚部ヘラケズリ、脚裾部ヨコナデ	
207	山北1住	1	内黒坏	口～底1/3	(12.8)	(6.6)	3.4		にぶい黄橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	2	小形甕	口～胴1/2	(11.4)				にぶい褐	口頸部ロクロナデ、胴部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	"	3	甌	口～体1/2	(27.0)				赤褐	口～体上部ヨコナデ、体中部ヘラナデ	ナデ	
"	"	4	羽釜	体～底1/3		(13.4)			褐	体下部ハケナデ、体下端部指頭圧痕 底部ナデ	ナデ	
208	山北2住	1	坏	口～底1/3	(13.2)	(4.6)	5.0		にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	2	坏	完形	9.9	5.1	2.9		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	灰釉皿	口～底1/4	(12.7)	6.6	2.5		灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	釉液け掛け
209	山北3住	1	内黒坏	口～底1/3	(12.0)	(5.2)	3.0		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	摩滅の為不明瞭	
"	"	2	甕	口～胴1/2	(24.6)				にぶい橙	口頸部ヨコナデ	ヨコナデ	
212	山北1坑	1	碗	体～底1/3		6.9			にぶい橙	ロクロナデ	高台部ロクロナデ	
"	"	2	甕	口縁1/8	(24.0)				にぶい褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	小形甕	口～胴1/6	(13.1)				にぶい橙	ロクロナデ、肩部カキ目	ロクロナデ	
"	山北19坑	4	坏	体～底3/4		5.0			橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	山北9坑	5	内黒碗	体～底1/4		(6.0)			橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	山北11坑	6	内黒坏	口～体1/6	(17.0)				にぶい黄橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	7	内黒坏	ほぼ完形	9.4	4.5	2.9		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→一部ヘラケズリ	ヘラミガキ	
215	山北遺構外	1	甕	口～胴上1/6	(21.0)				橙	ロクロナデ	ロクロナデ	

表24 第8章 山崎古墳群・山崎遺跡 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
204	6	山遺構外	石鏃	先端・基部欠損	黒曜石	長さ<1.7> 幅<1.2> 厚さ0.4 重さ<0.40>	先端角33°	
"	7	"	石鏃	先端・基部欠損	黒曜石	長さ<1.8> 幅<1.1> 厚さ0.4 重さ<0.60>	先端角30°	
"	8	"	石鏃	先端欠損	黒曜石	長さ<2.1> 幅1.8 厚さ0.6 重さ<1.70>	凹基(B1)	
"	9	"	石鏃	先端・右脚部欠損	黒曜石	長さ<1.6> 幅<1.5> 厚さ0.3 重さ<0.50>	凹基(B1)	
"	10	"	石鏃	右脚部先端と左脚部欠損	黒曜石	長さ<1.8> 幅<1.2> 厚さ0.3 重さ<0.40>	凹基(B1)、先端角49°	
"	11	"	石鏃	右隅部欠損	チャート	長さ2.2 幅<1.1> 厚さ0.3 重さ<0.80>	平基(A)、先端角48°	青灰色に灰色にシマ
"	12	"	磨石	右側一部欠損	安山岩	長さ17.2 幅7.6 厚さ4.0 重さ<814.0>	正面に磨面、上下側面に敲痕	
"	13	"	磨石	下部一部欠損	安山岩	長さ<11.8> 幅8.3 厚さ5.8 重さ<814.0>	正面と裏面の一部及び右・左側部と上側部に磨面	
"	14	"	磨石	下部一部欠損	安山岩	長さ<9.8> 幅6.1 厚さ6.0 重さ<554.0>	正・裏面及び右・左側面に磨面	
"	15	"	磨石	上部一部欠損	安山岩	長さ<7.6> 幅7.3 厚さ5.5 重さ<453.0>	正・裏面及び右・左側面に磨面	
"	16	"	磨石		安山岩	長さ10.2 幅8.4 厚さ5.0 重さ608.0	正面に磨面	
"	17	"	磨石		安山岩	長さ10.0 幅8.7 厚さ4.7 重さ584.0	正・裏面に磨面	
"	18	"	磨石		安山岩	長さ10.7 幅8.2 厚さ4.7 重さ690.0	正・裏面及び右側面に磨面 左側面と下側面の一部に敲痕	

第8章 山崎古墳群・山崎遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
207	5	山北1住	磨石	下部一部欠損	安山岩	長さ<12.2> 幅6.7 厚さ4.2 重さ<630.0>	右側面に磨面、裏面にこわれ	
208	4	山北2住	磨石	下部一部欠損	安山岩	長さ9.8 幅8.8 厚さ4.7 重さ<500.0>	正面に磨面	
209	3	山北3住	棒状鉄製品		鉄	長さ7.1以上 幅0.7~0.6 厚さ0.25~0.15		接合しない
212	8	山北1坑	鉄塊系遺物			長軸3.2 短軸2.2 厚さ1.8 重さ22.28	磁着度7、メタル度L(●)、表：赤褐	
〃	9	山北1坑	含鉄塊形鍛冶滓	完形		長軸9.2 短軸7.6 厚さ2.3 重さ186.70	磁着度5、メタル度H(○)、破面なし 表：茶褐	
〃	10	山北20墓	鉄塊系遺物			長軸2.8 短軸1.4 厚さ1.4 重さ4.46	磁着度5、メタル度H(○)、表：暗茶褐 放射割れ	
〃	11	山北2坑	鉄塊系遺物	完形		長軸1.5 短軸1.3 厚さ1.0 重さ3.46	磁着度5、メタル度L(●)、表：赤褐 地：鉛、放射割れ	
214	1	山北12墓	元祐通宝	完形	銅	銭径2.35×2.35 内径1.9×1.9 重さ2.5	北宋、初鑄年1086、行書	
〃	2	〃	開元通宝	完形	銅	銭径2.3×2.3 内径1.8×1.75 重さ3.0	唐、初鑄年621	
〃	3	〃	聖宋元宝	ほぼ完形	銅	銭径(2.4)×2.4 内径1.95×1.95 重さ3.0	北宋、初鑄年1101、篆書	
〃	4	〃	天聖元宝	完形	銅	銭径2.45×2.45 内径2.0×2.0 重さ2.2	北宋、初鑄年1023、真書	
〃	5	山北12墓	永樂通宝	完形	銅	銭径2.45×2.45 内径2.05×2.05 重さ3.4	明、初鑄年1408	
〃	6	〃	洪武通宝	完形	銅	銭径2.3×2.3 内径2.0×2.0 重さ3.7	明、初鑄年1368	
215	2	山北遺構外	石鏃	左脚部欠損	黒曜石	長さ2.2 幅<1.7> 厚さ0.4 重さ<0.90>	無茎凹基(B1)、先端角58°	
〃	3	〃	石鏃	基部欠損	黒曜石	長さ<1.9> 幅<1.4> 厚さ0.3 重さ<0.40>	先端角40°、両側辺に抉り	
〃	4	〃	石鏃	右脚部欠損	チャート	長さ1.9 幅<1.3> 厚さ0.3 重さ<0.40>	無茎凹基(B1)、先端角38°	灰色
〃	5	〃	石鏃	基部欠損	黒曜石	長さ<2.3> 幅1.9 厚さ0.4 重さ<1.20>	有茎凹基(D1)、先端角50°	
〃	6	〃	石鏃	右脚部と左脚一部欠損	黒曜石	長さ2.3 幅<1.9> 厚さ0.7 重さ<2.00>	無茎凹基(B1)、先端角60°	
〃	7	〃	石鏃	基部欠損	黒曜石	長さ<1.5> 幅<1.2> 厚さ0.3 重さ<0.30>	先端角48°	
〃	8	〃	石鏃	先端欠損	チャート	長さ<1.5> 幅1.4 厚さ0.3 重さ<0.60>	無茎平基(A)	灰色
〃	9	〃	釘	先端部欠	鉄	長さ<5.5> 基部幅5.5 軸幅0.4~0.2 厚さ0.4~0.2		
〃	10	〃	釘	軸部、先端欠	鉄	長さ<3.9> 軸幅0.4 厚さ0.45		
〃	11	〃	刀子	茎	鉄	刀身部幅1.4 背幅0.25		

第9章 東平古墳群

表25 第9章 東平古墳群 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
228	2号墳墳裾	1	円筒埴輪	ほぼ完形	28.5	9.9	20.7		にぶい黄橙	口縁下部ヘラケズリ→ヨコナデ、胴～底部ヨコ方向ナデ	胴上部ヘラケズリ→ナデ 口縁～底部ヨコ方向ナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
"	"	2	円筒埴輪	ほぼ完形	25.7	10.5	18.7		暗赤灰	ヨコ方向ナデ←基底部ヘラケズリ	ヨコ方向ナデ←胴部ヘラナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
"	"	3	円筒埴輪	ほぼ完形	25.2	(16.3)	24.5		にぶい橙	ヨコ方向ナデ←胴部タテハケ	ヨコ方向ナデ←胴～底部ヘラナデ	口縁端面面取り 胎土：金雲母・石英
"	"	4	円筒埴輪	ほぼ完形	21.2	(14.8)	24.4		橙	ヨコ方向ナデ←胴部タテハケ一部ヘラナデ	ヨコ方向ナデ	口縁端面面取り 胎土：金雲母・石英
"	"	5	円筒埴輪	ほぼ完形	25.1	16.5	27.2		黒褐	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ←胴部ヘラナデ	口縁端わずかな平坦面 胎土：金雲母・石英
"	"	6	円筒埴輪	口～胴1/2					にぶい褐	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
"	"	7	円筒埴輪	胴1/2					黒褐	タテ方向ナデ、第1突帯ヨコ方向ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	8	円筒埴輪	基底部1/4		(15.4)			黒褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	9	円筒埴輪	口～胴					灰褐	ヨコ方向ナデ←胴部タテハケ	ヨコ方向ナデ	不連続、胎土：金雲母・石英
229	"	10	壺形埴輪	ほぼ完形	24.3		(35.7)		橙	口縁部ヨコナデ、頸部強いヨコナデ(オサエ)、胴部かるいヘラケズリ	口～肩部ヨコナデ、胴上部コビオサエ、胴中部ヘラナデ	外面赤彩(口～胴中まで薄染) 内面赤彩(口～胴)、胎土：金雲母
"	"	11	壺形埴輪	口～胴	24.3				灰褐	口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ、胴部摩滅の為不明瞭	外面赤彩、内面赤彩(口～胴) 胎土：金雲母・石英
"	"	12	壺形埴輪	口～胴1/3	(22.0)				にぶい橙	口縁部ヨコナデ、胴部摩滅の為不明瞭	口縁部ヨコナデ、胴部摩滅の為不明瞭	外面赤彩、内面赤彩(口～胴部)、胎土：金雲母・石英
"	"	13	壺形埴輪	口～胴1/2	(19.0)				にぶい橙	摩滅の為不明瞭	摩滅の為不明瞭	胎土：金雲母・石英
"	"	14	壺形埴輪	口縁					にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
"	"	15	壺形埴輪	口縁1/10					にぶい橙	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	16	壺形埴輪?	口縁					褐灰	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	17	壺形埴輪	口頸1/3					にぶい褐	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	18	壺形埴輪	口頸1/5					にぶい橙	口縁部ヨコナデ、頸部ヨコナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	19	壺形埴輪	口頸1/8					灰褐	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	内面赤彩(口縁部) 胎土：金雲母・石英
"	"	20	壺形埴輪	口～肩1/4					にぶい橙	肩部ヨコナデ	ナデ	両面赤彩(内面口縁部) 胎土：金雲母・石英
"	"	21	壺形埴輪	胴1/2					灰黄褐	ナデ	左上りのナナメヘラナデ	外面赤彩(観察しづらい) 胎土：金雲母・石英
230	"	22	埴輪底部片	胴下～底1/2		9.9			にぶい橙	ナデ	ナデ	外面赤彩 胎土： 金雲母・石英
"	"	23	埴輪底部片	胴～底1/4		(12.6)			褐灰	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	24	埴輪底部片	底4/5		8.9			橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	25	埴輪底部片	底1/4		(13.4)			褐灰	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	26	埴輪底部片	底1/4		(11.4)			褐灰	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	27	埴輪底部片	底1/4		(11.8)			褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	28	埴輪底部片	底1/8					橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	29	埴輪底部片	底1/4		(11.9)			にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	30	埴輪底部片	底1/3		(11.4)			にぶい褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母
"	"	31	埴輪底部片	底1/8					にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
231	2号墳主体	1	壺	口～底不連続1/6	(18.6)	(6.5)			にぶい橙	ヘラナデ、底部ヘラナデ	ヘラナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
"	"	2	壺	口～底4/5	(8.7)	4.5	(11.0)		にぶい褐	ヘラナデあるいはナデ、底部ヘラナデ	ヘラナデあるいはナデ	外面赤彩(底部) 内面赤彩(口～肩)、胎土：金雲母・石英
"	"	3	壺	口～肩1/8	(17.2)				橙	ヘラナデ	ヘラナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
"	"	4	壺	口頸部1/8					にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母
"	"	5	壺	底完存		4.9			にぶい黄橙	ヘラナデ	ヘラナデ	外面赤彩?胎土： 金雲母・石英
"	"	6	高坏	口～裾1/5	(19.4)		(12.9)		にぶい黄橙	ヘラミガキ	坏部摩滅の為不明瞭 脚上部シボリ、胴中～裾部ヘラミガキ	不連続
"	"	7	高坏	坏～裾1/5		(11.6)			橙	ヘラミガキ	脚部ハケ→ヘラミガキ、胴上部シボリ、脚中部ヘラケズリ、脚底部ヨコナデ	不連続
"	"	8	高坏	坏部1/4					橙	ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
"	"	9	高坏	接合部～脚柱部					橙	摩滅の為不明瞭	脚上部シボリ、脚中部ヨコナデ	
"	"	10	高坏	脚～裾2/5					にぶい黄橙	脚部ヨコミガキ、裾部ヘラミガキ?	脚上部シボリ、脚中部ヘラケズリ	不連続
"	"	11	高坏	脚1/3					橙	脚裾部ヨコナデ	脚上部シボリ、脚中～脚部裾ヨコナデ	
"	"	12	高坏	脚1/5					橙	摩滅の為不明瞭	脚上部シボリ、脚中部ヨコヘラナデ	
"	"	13	高坏	脚裾1/8		(11.3)			橙	ヘラミガキ	ヨコナデ	
"	2号墳墳裾	14	壺	ほぼ完形	10.1		(10.9)		橙	ナデ、底部ヘラケズリ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	15	壺	口～胴不連続1/3	(10.3)				橙	口縁部ナデ、胴部ハケ	ナデ、胴上部ヘラケズリ?	

第9章 東平古墳群

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
231	2号墳墳裾	16	壺	口縁1/4	(13.1)				にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	17	壺	口縁1/4	(17.6)				褐灰	ヨコナデ	ヨコナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	18	壺?	口頸部1/5	(15.7)				にぶい褐	口縁上部ヨコナデ、口縁部ナデ	ナデ	外面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	19	壺	口縁					褐灰	ナデ	ナデ	
〃	〃	20	壺	口縁					にぶい橙	ナデ	ナデ	
〃	〃	21	壺	頸部					褐灰	ナデ	ナデ	外面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	22	壺	頸～肩1/5					灰褐	頸部ヨコナデ	頸部シボリ→タテナデ、肩部 ヘラナデ	外面赤彩、内面赤彩(頸 ～肩上)、胎土：金雲母
232	〃	23	壺	頸～底1/4		6.1			明赤褐	摩滅の為不明瞭	摩滅の為不明瞭	胎土：石英・雲母・ 長石
〃	〃	24	壺	胴下					にぶい褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	25	壺	胴下					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：石英
〃	〃	26	壺	底1/2		(5.0)			灰褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	27	壺	底1/4		(4.6)			黒褐	ナデ	ナデ	
〃	〃	28	壺	底1/5		(6.8)			褐灰	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	29	高坏	脚柱1/4					にぶい橙	ナメナデ	シボリ	
〃	〃	30	坏	ほぼ完形	(14.2)		5.4		橙	摩滅の為不明瞭	摩滅の為不明瞭	胎土：黒雲母
〃	〃	31	坏	ほぼ完形	(14.6)		5.5		にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	32	坏	口～体1/7	(13.6)				黄橙	ナデ	ナデ	
237	1号墳墳裾	1	円筒埴輪	口縁1/10	(24.4)				灰褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	2	円筒埴輪	口縁					にぶい橙	ナデ	ナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	3	円筒埴輪	口縁					にぶい橙	ナデ	ナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	4	円筒埴輪	口縁					橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	5	円筒埴輪	口縁					橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	6	円筒埴輪	突帯					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	7	円筒埴輪	突帯					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	8	円筒埴輪	突帯					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	9	円筒埴輪	突帯					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	10	円筒埴輪	胴(突帯)					にぶい褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	11	円筒埴輪	胴(突帯)					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	12	円筒埴輪	胴					橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	1号墳旧表土	13	円筒埴輪	胴1/4					にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	14	円筒埴輪	胴1/4					にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	1号墳墳裾	15	壺形埴輪	口～肩2/5	(22.6)				にぶい黄橙	口縁部ヨコナデ、頸～肩部 ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	16	壺形埴輪	口縁1/5	(23.4)				にぶい橙	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	17	壺形埴輪	口頸部1/5					にぶい褐	ナデ	ヨコナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	18	壺形埴輪	口～胴上 1/4					にぶい橙	ナデ	ナデ	両面赤彩、胎土： 金雲母・石英
〃	〃	19	埴輪底部片	底1/2		(9.2)			にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	20	埴輪底部片	底					灰褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	21	埴輪底部片	胴下～底 2/5		7.2			橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	22	埴輪底部片	底1/5					灰黄褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	23	埴輪底部片	底					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	24	埴輪底部片	底					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	25	埴輪底部片	底					にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	26	埴輪底部片	底					にぶい橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石 英
〃	〃	27	壺	胴					橙	ナデ	ナデ	
〃	〃	28	壺	口縁1/7					橙	ナデ	ナデ	
〃	〃	29	高坏	坏1/5					黄橙	ヘラミガキ	ナデ	胎土：角閃石
242	墳外集中	1	壺	ほぼ完形					橙	口縁部ナデ、他摩滅の為不明 瞭	口縁部ナデ、他摩滅の為不明 瞭	胎土：石英・角閃 石

第9章 東平古墳群

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
242	墳外集中	2	小形甕	口縁1/2	(11.8)				にぶい褐	摩滅の為不明瞭、頸部ヨコナデ	ヘラケズリ	
"	"	3	高杯	脚1/5					浅黄橙	摩滅の為不明瞭	脚上部ヨコナデ、脚中部シボリーナデ、脚裾部ヨコナデ?	
"	"	4	甕	口～胴1/2	16.8	(7.0)			にぶい赤褐	頸部ヘラナデ→ナナメハケ	ヘラナデ	胎土：石英
250	砥沢古墳	1	壺	口頸1/5					赤褐	ヘラミガキ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	2	壺	口頸1/8					明赤褐	ヘラミガキ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	3	壺	頸部1/6					橙	ヨコナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	4	壺	底1/2		(5.0)			橙	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
"	"	5	壺	底		(5.8)			にぶい褐	ナデ	ナデ	胎土：金雲母・石英
252	2号炭焼窯	1	坏	口～体1/4	(13.9)				橙	ナデ	ナデ	
"	"	2	内黒坏	底2/3		(5.2)			にぶい黄橙	ナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	3	塊	底4/5		8.6			橙	ナデ	ナデ	

表26 第9章 東平古墳群 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
233	1	2号墳主体	竪櫛	棟部2/3	漆塗り	棟幅6.6 棟長5.4 歯数46本(23×2)		
"	2	"	竪櫛	棟部一部欠	漆塗り	棟幅4.3 棟長4.35 歯数32本?		
"	3	"	竪櫛	棟部端部欠	漆塗り	棟幅<4.3> 棟長<3.8> 歯数32本		
"	4	"	竪櫛	棟部3/4	漆塗り	棟幅(4.7) 棟長(3.4) 歯数36本		
"	5	"	竪櫛	棟部1/2	漆塗り	棟幅(1.6) 棟長(1.45) 歯数14本?		
238	1	1号墳主体	直刀		鉄	刀身長(66.9) 幅3.0～2.1 背幅0.7 茎長16.9	平造、片闕、フクラ切先、目釘孔1	
"	2	"	直刀		鉄	刀身長(57.1) 幅2.4～1.8 背幅0.5 茎長<16.5>	平造、片闕、フクラ切先、隅状尻茎	刀身に木質
"	3	"	剣		鉄	刀身長(49.0) 幅(3.4)～2.4 厚さ0.6 茎長12.9	両闕、目釘孔3	
"	4	"	剣		鉄	刀身長(42.7) 幅(3.5)～(2.7) 厚さ0.6 茎長13.3	両闕、目釘孔2	
"	5	"	剣		鉄	刀身長41.1 幅3.5～2.8 厚さ0.6 茎長10.3	両闕、目釘孔2	
"	6	"	剣		鉄	刀身長(25.3) 幅3.0～2.2 厚さ0.5 茎長10.1	両闕、目釘孔1	
"	7	"	刀装具	漆膜のみ	漆塗り	長さ<3.8>	直弧文	2号刀に伴う
239	1	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅5.2 棟長4.2		
"	2	"	竪櫛	棟部2/3	漆塗り	棟幅(5.0) 棟長3.8		
"	3	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.9 棟長1.8 歯数16本		
"	4	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.8 棟長1.9 歯数14本?		
"	5	"	竪櫛	棟部・歯一部	漆塗り	棟幅1.7 棟長1.8 歯数16本		
"	6	"	竪櫛	棟部・歯一部	漆塗り	棟幅1.8 棟長1.8 歯数18本		
"	7	"	竪櫛	棟部1/3	漆塗り			
"	8	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅(1.8) 棟長1.55 歯数14本?		
"	9	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.75 棟長1.5 歯数18本?		
"	10	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.5 棟長(1.6) 歯数12本?		
"	11	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.7 棟長1.4 歯数16本		
"	12	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.6 棟長1.35 歯数14本?		
"	13	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.65 棟長1.4 歯数16本		
"	14	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.5 棟長1.35 歯数14本?		
"	15	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅(1.6) 棟長(1.5) 歯数14本		
"	16	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.55 棟長1.3 歯数16本		
"	17	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.35 棟長1.4 歯数14本	連結?	
"	18	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅(1.4) 棟長1.35 歯数12本?		
"	19	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.4 棟長(1.45) 歯数14本?		
"	20	"	竪櫛	棟部1/2	漆塗り	棟幅1.3 棟長(1.5)		

第9章 東平古墳群

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
239	21	1号墳主体	竪櫛	棟部3/4	漆塗り	棟幅(1.5) 棟長1.35 歯数14本		
"	22	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3 棟長1.4 歯数14本		
"	23	"	竪櫛	棟部2/3	漆塗り			
"	24	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3 棟長1.3 歯数14本		
"	25	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3 棟長1.25 歯数12本?		
"	26	"	竪櫛	棟部2/3	漆塗り			
"	27	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.25 棟長1.2 歯数14本?		
"	28	"	竪櫛	棟部1/3	漆塗り	棟幅(1.4) 棟長1.4 歯数14本		
"	29	"	竪櫛	棟部1/3	漆塗り	棟幅(1.3) 棟長1.3 歯数16本		
"	30	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.25 棟長1.05		
"	31	"	竪櫛	棟部1/2	漆塗り			
"	32	"	竪櫛	棟部	漆塗り			
"	33	"	竪櫛	棟部・歯一部	漆塗り	棟幅1.4(最大4.2) 棟長(1.5) 歯数14本	3連結以上	
"	34	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3(最大2.35) 棟長1.3 歯数12本	2連結以上、横木端(図左端)は斜めにカット	
"	35	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.4(最大1.5) 棟長1.5 歯数12本か14本	2連結以上	
"	36	1号墳主体	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅(1.3) 棟長1.3 歯数14本		
"	37	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3(最大2.3) 棟長1.4	2連結以上	
"	38	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3(最大1.7) 棟長1.4 歯数14本	2連結以上	
"	39	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.2(最大1.8) 棟長1.4 歯数14本	2連結以上	
"	40	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.3(最大1.6) 棟長1.3	2連結以上	
"	41	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.25 棟長1.55 歯数12本以上	2連結以上	
"	42	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.25(最大1.9) 棟長1.4 歯数16本か14本	2連結以上	
"	43	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅2.0 棟長1.9 歯数18本		
"	44	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅2.1 棟長1.9 歯数18本		
"	45	"	竪櫛	棟部1/3	漆塗り	棟幅1.9 棟長1.8 歯数18本?		
"	46	"	竪櫛	棟部	漆塗り	棟幅1.95 棟長1.65 歯数16本		
"	47	"	竪櫛	棟部1/2	漆塗り	棟幅1.6 棟長1.4		
240	1	古墳以外	鉄斧	ほぼ完形	鉄	全長7.8 刀幅3.3 基部3.0×2.4 重さ108.1	有袋鉄斧、基部断面楕円形	
"	2	"	磨石	完形	安山岩	長さ17.1 幅7.9 厚さ4.5 重さ925.0	正・裏面に磨面 下半面ややザラついている、弱い敲痕か?	
"	3	"	磨石	完形	安山岩	長さ20.2 幅8.0 厚さ5.5 重さ1500.0	正面及び左・右側面に磨面 下半面、敲痕か?	
250	1	砥沢古墳	鉄鏃	ほぼ完形	鉄	身部長2.9 幅1.1 頸部長8.4 茎長2.7		
"	2	"	鉄鏃	鏃身部	鉄			
"	3	"	鉄鏃	鏃身部欠	鉄	頸部長<7.0> 茎長<2.2>		
"	4	"	鉄鏃	頸部	鉄			
"	5	"	刀子	茎	鉄			
"	6	"	刀子又は刀剣	刀部破片	鉄			
252	1	古墳以外	打製石斧	完形	凝灰岩	長さ12.4 幅4.9 厚さ1.9 重さ128.0	裏面(凹面): 刃部摩耗 正面(凸面): 刃部広範囲摩耗	

表27 第9章 東平古墳群 玉類計測表

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考
233	1	管玉	<1.2>	<0.4>	<0.4>	<0.13>	2号墳主体	緑色凝灰岩
"	2	管玉	<2.1>	0.45	0.45	<0.44>	2号墳主体	緑色凝灰岩
"	3	管玉	<2.0>	<0.5>	<0.45>	<0.32>	2号墳主体	緑色凝灰岩
"	4	管玉	<2.2>	<0.45>	<0.45>	<0.17>	2号墳主体	緑色凝灰岩
"	5	管玉	<2.0>	<0.4>	<0.4>	<0.16>	2号墳主体	緑色凝灰岩
"	6	管玉	<1.7>	0.5	0.45	<0.38>	2号墳主体	緑色凝灰岩
233	7	滑石管玉?	0.8	0.2	0.1	0.02	2号墳主体	灰白
"	8	滑石管玉?	0.4	0.2	0.15	0.01	2号墳主体	灰白
"	9	滑石勾玉	0.3	0.9	0.6	0.14	2号墳主体	緑灰白
"	10	滑石勾玉	0.3	<0.75>	<0.45>	<0.1>	2号墳主体	緑灰白
"	11	滑石勾玉	0.3	0.8	0.5	0.09	2号墳主体	緑灰白
"	12	滑石勾玉	0.25	0.9	0.5	0.1	2号墳主体	緑灰白

第9章 東平古墳群

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考
233	13	滑石勾玉	0.3	0.8	0.5	0.12	2号墳主体	緑灰白
〃	14	滑石勾玉	0.3	0.8	0.5	0.14	2号墳主体	緑灰白
〃	15	滑石勾玉	0.3	0.85	0.55	<0.14>	2号墳主体	緑灰白
〃	16	滑石勾玉	0.25	0.8	0.5	0.10	2号墳主体	緑灰白
〃	17	滑石勾玉	0.3	<0.8>	<0.55>	<0.13>	2号墳主体	緑灰白
〃	18	滑石勾玉	0.3	0.8	0.45	0.12	2号墳主体	緑灰白
〃	19	滑石勾玉	0.2	0.8	0.5	0.12	2号墳主体	緑灰白
〃	20	滑石勾玉	0.3	<0.9>	<0.6>	<0.14>	2号墳主体	緑灰白
〃	21	滑石勾玉	0.25	0.7	0.45	0.08	2号墳主体	緑灰白
〃	22	滑石勾玉	0.25	0.85	0.5	0.11	2号墳主体	緑灰白
〃	23	滑石勾玉	0.3	0.85	0.5	0.11	2号墳主体	緑灰白
〃	24	滑石勾玉	0.3	0.9	0.55	<0.14>	2号墳主体	緑灰白
〃	25	滑石勾玉	0.3	0.9	0.55	0.18	2号墳主体	緑灰白
〃	26	滑石勾玉	0.3	0.85	0.6	<0.1>	2号墳主体	緑灰白
〃	27	滑石白玉	<0.25>	<0.35>	<0.3>	<0.04>	2号墳主体	緑濃灰
〃	28	滑石白玉	0.25	0.4	0.4	<0.08>	2号墳主体	緑濃灰
〃	29	滑石白玉	0.3	0.4	0.4	0.07	2号墳主体	緑濃灰
〃	30	滑石白玉	0.3	0.4	0.35	<0.08>	2号墳主体	緑濃灰
〃	31	滑石白玉	<0.3>	0.45	0.4	<0.08>	2号墳主体	緑濃灰
〃	32	滑石白玉	<0.2>	<0.35>	<0.35>	<0.01>	2号墳主体	緑濃灰
〃	33	白玉	<0.3>	0.4	0.4	<0.03>	2号墳主体	緑色凝灰岩
〃	34	滑石白玉	0.25	0.35	0.35	0.04	2号墳主体	緑灰
〃	35	滑石白玉	0.20	0.35	0.35	0.04	2号墳主体	緑濃灰
〃	36	滑石白玉	0.25	0.4	0.35	0.03	2号墳主体	緑濃灰
〃	37	滑石白玉	0.2	0.35	0.35	0.03	2号墳主体	緑灰白
〃	38	滑石白玉	0.2	0.4	0.35	0.04	2号墳主体	緑濃灰
〃	39	滑石白玉	0.2	0.35	0.35	0.03	2号墳主体	緑灰
〃	40	滑石白玉	0.25	0.35	<0.3>	<0.03>	2号墳主体	緑灰
〃	41	滑石白玉	0.2	0.4	0.35	0.03	2号墳主体	緑灰
〃	42	滑石白玉	<0.2>	0.5	0.5	<0.05>	2号墳主体	緑灰白
〃	43	滑石白玉	0.2	0.5	0.5	0.07	2号墳主体	緑灰白
〃	44	滑石白玉	0.2	<0.5>	0.5	<0.08>	2号墳主体	緑灰白
〃	45	滑石白玉	0.2	0.5	0.5	<0.06>	2号墳主体	緑灰白
242	1	管玉	<3.0>	<0.45>	<0.4>	<0.32>	墳外集中	緑色凝灰岩
〃	2	管玉	<3.1>	0.45	0.45	<0.65>	墳外集中	緑色凝灰岩
〃	3	滑石勾玉	1.3	3.45	2.4	<12.35>	墳外集中	緑灰

図版 番号	遺物 番号	種類	厚さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	重量 (g)	出土 位置	備考
242	4	滑石勾玉	0.45	1.8	1.2	1.15	墳外集中	緑灰
〃	5	滑石白玉	0.3	0.4	0.4	0.07	墳外集中	緑灰白
〃	6	滑石白玉	0.25	0.4	0.4	0.07	墳外集中	緑灰白
〃	7	滑石白玉	0.25	0.45	0.4	0.07	墳外集中	緑灰白
〃	8	滑石白玉	0.25	0.4	0.4	0.06	墳外集中	緑灰白
〃	9	滑石白玉	0.25	0.4	0.4	0.05	墳外集中	緑灰白
〃	10	滑石白玉	<0.2>	0.45	0.4	<0.06>	墳外集中	緑灰白
〃	11	滑石白玉	<0.15>	0.45	0.45	<0.03>	墳外集中	緑灰白
〃	12	滑石白玉	0.2	0.4	0.4	<0.04>	墳外集中	緑灰白
〃	13	滑石白玉	0.25	0.45	0.45	<0.06>	墳外集中	緑灰
〃	14	滑石白玉	0.2	0.45	0.4	<0.04>	墳外集中	緑灰白
〃	15	滑石白玉	0.2	0.45	0.45	0.06	墳外集中	緑灰白
〃	16	滑石白玉	0.2	<0.45>	0.45	<0.08>	墳外集中	緑灰白
〃	17	滑石白玉	0.2	0.4	0.4	<0.06>	墳外集中	緑灰白
〃	18	滑石白玉	0.2	0.4	0.4	0.05	墳外集中	緑灰白
〃	19	滑石白玉	0.2	0.45	0.4	0.06	墳外集中	緑灰白
〃	20	滑石白玉	0.2	0.45	0.4	0.07	墳外集中	緑灰白
〃	21	滑石白玉	0.2	0.4	0.4	0.08	墳外集中	緑灰白
〃	22	滑石白玉	<0.2>	0.4	(0.4)	<0.05>	墳外集中	緑灰白
〃	23	滑石白玉	<0.2>	0.45	0.4	<0.06>	墳外集中	緑灰白
〃	24	滑石白玉	0.35	0.5	0.45	0.15	墳外集中	緑濃灰
〃	25	滑石白玉	0.4	0.5	0.5	<0.18>	墳外集中	緑濃灰
〃	26	滑石白玉	0.35	0.5	0.5	<0.17>	墳外集中	緑濃灰
〃	27	滑石白玉	0.5	0.5	0.45	0.13	墳外集中	緑濃灰
〃	28	滑石白玉	0.25	0.35	0.3	0.06	墳外集中	緑灰白
〃	29	滑石白玉	0.15	0.4	0.35	<0.04>	墳外集中	緑灰白
〃	30	ガラス小玉	0.25	0.4	0.35	0.06	墳外集中	紺
〃	31	ガラス小玉	0.2	0.35	0.35	0.06	墳外集中	紺
〃	32	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	墳外集中	紺
〃	33	ガラス小玉	0.15	0.35	0.3	0.03	墳外集中	紺
〃	34	ガラス小玉	0.25	0.3	0.3	0.05	墳外集中	紺
〃	35	ガラス小玉	0.35	0.4	0.35	0.09	墳外集中	濃紺
〃	36	ガラス小玉	0.2	0.3	0.3	0.03	墳外集中	青
〃	37	ガラス小玉	0.15	0.3	0.3	0.03	墳外集中	青
〃	38	ガラス小玉	0.25	0.3	0.3	0.02	墳外集中	緑青

第11章 観音平経塚

表28 第11章 観音平経塚 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
266	墓2	1	瀬戸四耳壺	完形	11.2	6.7	21.2		灰白	肩部回転ケズリ→ロクロナデ +胴中～底部タテヘラケズリ	断続カキ目→口頸部ロクロナ デ	自然熱：外面口縁～胴 中、内面口頸部・底部
〃	F-P4	2	小皿	完形	8.3	5.4	1.6		浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り →中央部1回ハケナデ	ロクロナデ	底部外面スス付着

表29 第11章 観音平経塚 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
266	3	E-P23	開元通宝	完形	銅	銭径2.45×2.45 内径1.95×1.9 重さ3.0	唐、初鑄年621	
〃	4	E-P23	政和通宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径2.0×2.0 重さ3.4	北宋、初鑄年1111、分楷	
〃	5	E-P23	熙寧元宝	完形	銅	銭径2.45×2.5 内径1.9×1.85 重さ3.2	北宋、初鑄年1068、真書	
〃	6	E-P26	元豊通宝	完形	銅	銭径2.4×2.35 内径1.8×1.8 重さ3.8	北宋、初鑄年1078、行書	被熱変形
〃	7	E群	開元通宝	周囲欠	銅	内径(1.9)×(1.9)	唐、初鑄年621	被熱変形
〃	8	G-P1	至道元宝	完形	銅	銭径2.5×2.5 内径1.8×1.8 重さ2.9	北宋、初鑄年995、真書	被熱変形
〃	9	G-P1	淳化元宝	1/4	銅		北宋、初鑄年990	被熱変形
〃	10	E-P4	刀子	刀身部先端 欠	鉄	刀身部長<9.4> 幅1.4~1.2 背幅0.3 茎長6.7	平造、両関、目釘孔1	
〃	11	E-P24	刀子	刀身部先端 欠	鉄	刀身部長<15.1> 幅1.6~1.4 背幅0.4 茎長8.0	平造、両関、目釘孔1	目釘孔の位置で茎を折り 曲げている。
〃	12	E群	直刀	刀身部・茎 部欠	鉄	刀身部長(22.2) 幅2.0~1.8 背幅0.5 茎長<7.8>	平造、両関、目釘孔1	

表30 第11章 観音平経塚 五輪塔計測表(空風輪)

重量kg 長さcm

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	F/B	H/D	F/H	I/H	B/D
268	A12	ⅡCd	安A	5.2	15.4	15.4	14.1	6.0	2.7	16.6	13.3	16.3	6.4	—	—	1.08	2.72	1.02	0.39	2.57
268	B11	I Aa	安A	8.8	28.2	21.9	13.5	11.2	1.2	19.5	13.5	15.8	6.6	—	—	0.89	1.41	1.23	0.42	1.96
—	B13	ⅣBb	砂A	4.6	18.7	12.8	8.8	6.1	0.9	15.4	11.0	11.7	5.5	—	—	1.20	1.92	1.32	0.47	2.10
—	B14	ⅡBa	安A	3.3	20.9	15.5	10.3	7.6	0.4	15.1	11.7	12.9	5.0	—	—	0.97	1.70	1.17	0.39	2.04
268	B①	I Ab	安A	空1.3	20.1	15.6	8.8	8.5	0.0	13.4	7.7	11.6	6.2	—	—	0.86	1.36	1.16	0.53	1.84
				風1.4																
268	B2-2	- -a	擬D	空2.2	—	—	—	—	—	15.5	10.5	12.4	4.4	—	—	—	—	1.25	0.35	—
—	B2-5	ⅡCb	擬F	1.5	17.1	13.7	10.5	5.0	0.5	13.7	10.7	11.6	5.0	—	—	1.00	2.32	1.18	0.43	2.74
268	C2	ⅡCa	擬A	3.6	18.3	14.8	11.6	4.8	1.0	15.0	11.2	12.5	4.0	—	—	1.01	2.60	1.20	0.32	3.08
—	C5	ⅡCa	擬A	4.5	19.1	15.1	11.2	5.0	1.1	16.5	13.1	13.1	3.9	—	—	1.09	2.62	1.26	0.30	3.02
268	C8	ⅡAd	安A	2.6	19.7	15.7	11.4	7.3	1.3	14.7	10.2	11.0	8.5	—	—	0.94	1.51	1.34	0.77	2.15
—	C①	ⅡCd	擬A	4.2	18.3	15.6	10.5	5.7	0.7	16.2	12.8	11.9	5.1	—	—	1.04	2.09	1.36	0.43	2.74
—	C②	ⅡBa	砂A	4.5	16.5	15.0	11.8	5.5	1.2	14.7	11.3	9.8	4.3	—	—	0.98	1.78	1.50	0.44	2.73
268	D7	ⅢAd	安A	3.5	20.4	13.2	9.0	9.2	0.9	15.3	12.0	10.2	5.1	4.3	2.2	1.16	1.11	1.50	0.50	1.43
—	D8	V Bb	安A	4.4	22.2	12.7	10.6	7.6	1.4	20.4	10.5	13.2	5.8	4.5	2.5	1.61	1.74	1.55	0.44	1.67
—	D10	V Ab	安A	2.7	21.2	11.7	10.9	8.9	0.4	15.6	9.7	11.9	6.4	2.3	2.3	1.33	1.34	1.31	0.54	1.31
268	D19	V Ab	安A	6.6	25.6	14.1	11.3	9.8	1.3	22.0	10.9	14.6	7.2	3.7	1.8	1.56	1.49	1.51	0.49	1.44
—	D20	ⅣAd	安A	3.6	22.3	11.5	10.7	7.1	0.7	14.0	9.9	14.5	7.2	4.5	3.5	1.22	2.04	0.97	0.50	1.62
—	D26	V Ab	安A	4.9	21.9	13.1	12.1	9.6	0.5	18.5	11.9	11.8	7.0	4.0	2.3	1.41	1.23	1.57	0.59	1.36
268	D30	ⅡAa	擬B	2.8	18.1	17.7	9.6	6.4	1.0	17.0	14.7	9.6	3.1	—	—	0.96	1.50	1.77	0.32	2.77
—	D①	ⅡCd	擬A	2.3	17.2	11.1	9.0	5.1	0.3	12.0	9.0	11.8	4.6	—	—	1.08	2.31	1.02	0.39	2.18
—	D②	ⅢCa	擬A	5.4	20.9	14.8	10.1	5.7	1.1	17.3	11.7	14.1	5.0	—	—	1.17	2.47	1.23	0.35	2.60
—	E7	ⅡBd	砂A	6.3	21.6	14.1	10.4	7.8	0.8	15.3	11.7	13.0	5.9	—	—	1.09	1.67	1.18	0.45	1.81
—	E8	ⅡBd	砂A	2.3	16.2	—	—	—	1.0	15.3	12.3	12.6	8.5	—	—	—	—	1.21	0.67	—
—	E15	ⅣDc	安A	3.1	25.1	14.1	10.4	4.4	0.8	17.0	11.4	13.1	6.0	4.6	3.0	1.21	2.98	1.30	0.46	3.20
268	E16	ⅣCc	安A	5.4	23.4	16.0	12.8	5.8	1.1	20.1	13.1	16.5	7.8	—	—	1.26	2.84	1.22	0.47	2.76
—	E31	ⅢDb	安A	3.5	21.1	15.2	12.0	5.4	1.0	17.0	11.0	14.7	6.1	—	—	1.12	2.72	1.16	0.41	2.81
268	E33	ⅣDb	安A	5.1	23.1	15.0	10.8	4.0	0.5	19.4	12.7	18.8	9.5	7.7	2.3	1.29	4.70	1.03	0.51	3.75
268	E36	ⅡBa	擬A	7.1	22.5	15.5	13.3	7.6	0.4	17.2	13.5	14.5	4.8	—	—	1.11	1.91	1.19	0.33	2.04
—	E37	ⅡBd	安A	3.9	21.1	14.3	11.8	7.0	0.8	15.0	11.1	13.3	9.0	6.5	3.4	1.05	1.09	1.13	0.68	2.04
268	E40	ⅡCd	擬A	3.9	16.5	12.3	10.8	5.1	0.9	13.1	10.2	10.4	9.4	—	—	1.07	2.04	1.26	0.90	2.41
268	E43	I Aa	安A	1.6	17.1	12.8	7.5	7.4	0.6	10.9	7.8	9.1	3.1	—	—	0.85	1.23	1.20	0.34	1.73
—	E51	ⅢBa	擬A	4.0	18.8	12.9	11.1	6.8	0.4	14.3	12.0	11.6	4.4	—	—	1.11	1.71	1.23	0.38	1.90
268	E58	ⅢCd	砂A	5.0	18.5	13.1	11.4	5.2	1.2	15.0	10.3	12.1	7.5	4.7	1.8	1.15	2.33	1.24	0.62	2.52
—	E63	ⅢDb	安A	8.3	27.4	18.1	14.3	6.4	0.7	20.4	12.9	20.3	7.9	—	—	1.13	3.17	1.00	0.39	2.83
—	E70	ⅣDb	安A	3.4	19.6	13.4	11.2	4.8	0.6	18.1	11.8	14.2	6.2	—	—	1.35	2.96	1.27	0.44	2.79
268	E75	ⅢDc	安A	5.4	20.5	16.5	13.7	4.7	0.6	18.4	12.3	15.2	6.8	4.4	4.2	1.12	3.23	1.21	0.45	3.51
—	E76	ⅡBa	擬A	5.7	21.0	(15.0)	11.1	7.1	0.7	16.0	12.2	13.2	5.7	—	—	(1.07)	1.86	1.21	0.43	(2.11)
—	E78	ⅡCc	安A	6.3	22.4	19.3	12.9	6.3	0.3	20.5	14.5	15.8	7.0	3.5	2.3	1.06	2.51	1.30	0.44	3.06
268	E87	ⅡAa	砂A	4.8	17.9	14.1	9.6	6.9	0.5	14.6	11.9	10.5	3.6	—	—	1.04	1.52	1.39	0.34	2.04
—	E88	ⅢCa	砂A	3.6	18.7	11.5	8.5	5.6	1.0	13.5	9.7	12.1	5.4	—	—	1.17	2.16	1.12	0.45	2.05
—	E98	ⅢBc	砂A	6.4	20.6	14.3	11.4	7.5	0.8	16.0	12.4	12.3	6.2	—	—	1.12	1.64	1.30	0.50	1.91
—	E①	ⅢCd	擬A	3.5	17.5	12.8	10.1	5.1	0.9	14.4	10.1	11.5	7.0	—	—	1.13	2.25	1.25	0.61	2.51
268	E②	ⅡAd	砂A	6.9	19.1	15.4	11.7	7.3	0.7	16.3	13.1	11.0	7.9	—	—	1.06	1.51	1.48	0.72	2.11
—	E③	ⅢCb	安C	4.8	20.1	15.6	12.3	5.8	1.1	18.0	12.7	13.2	6.0	5.5	4.0	1.15	2.28	1.36	0.45	2.69
268	F2	ⅡAa	安A	3.4	19.0	14.0	10.0	7.0	1.2	13.8	10.8	10.8	3.8	—	—	0.99	1.54	1.28	0.35	2.00
268	F3	ⅡAa	擬A	5.8	21.2	15.2	11.0	7.9	2.1	15.5	12.0	11.2	3.0	—	—	1.02	1.42	1.38	0.27	1.92
268	F7	ⅢDb	安A	1.5	16.5	10.9	8.6	4.2	0.6	12.2	8.7	11.7	4.3	—	—	1.12	2.79	1.04	0.37	2.60
—	F9	ⅢDb	安A	4.1	21.2	16.0	11.2	5.2	0.8	17.2	11.6	15.2	6.5	—	—	1.08	2.92	1.13	0.43	3.08
268	F29	ⅡBb	擬A	6.0	23.0	14.7	10.5	7.5	0.7	15.4	10.9	14.3	5.8	—	—	1.05	1.91	1.08	0.41	1.96

图版	番号	分類	石材	重量	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	F/B	H/D	F/H	I/H	B/D
268	F33	I Aa	安A	4.0	21.4	17.2	11.2	8.1	0.5	16.2	12.7	12.8	4.8	—	—	0.94	1.58	1.27	0.38	2.12
—	F35	II Aa	安A	4.0	21.6	16.3	12.5	7.7	0.2	15.6	11.3	13.7	5.1	—	—	0.96	1.78	1.14	0.37	2.12
268	F40	II Aa	安A	4.4	19.7	16.7	12.4	7.9	0.6	15.9	12.8	11.2	3.9	—	—	0.95	1.42	1.42	0.35	2.11
268	F41	II Db	凝A	3.9	18.6	13.2	11.0	4.6	0.6	13.7	10.1	13.4	5.3	—	—	1.04	2.91	1.02	0.40	2.87
—	F52	II Aa	安A	2.0	18.6	14.2	10.9	6.3	0.8	13.3	10.4	11.5	4.5	—	—	0.94	1.83	1.16	0.39	2.25
268	F53	II Ca	凝A	3.7	16.8	14.0	11.5	5.0	0.5	14.8	11.3	11.2	4.0	—	—	1.06	2.24	1.32	0.36	2.80
—	F54	III Da	安A	1.3	16.6	10.9	8.4	4.3	0.6	12.0	8.7	11.7	4.0	—	—	1.10	2.72	1.03	0.34	2.53
—	F59	I Bb	安A	5.0	23.9	19.7	13.7	8.3	0.3	18.2	14.0	15.3	5.6	—	—	0.92	1.84	1.19	0.37	2.37
269	G9	III Db	安A	2.4	19.5	13.9	9.6	4.7	0.9	16.0	11.3	13.8	5.3	—	—	1.15	2.94	1.16	0.38	2.96
—	G18	II Bd	安A	2.4	15.9	14.1	11.8	5.2	0.7	12.8	9.9	10.0	5.7	4.5	2.6	0.91	1.92	1.28	0.57	2.71
268	G30	II Cd	安A	2.1	15.4	12.0	10.1	4.3	0.9	12.0	9.9	10.3	6.3	4.7	2.7	1.00	2.40	1.17	0.61	2.79
268	G32	III Ad	砂A	3.1	16.9	10.8	8.5	7.0	0.7	12.3	9.3	9.1	3.8	—	—	1.14	1.30	1.35	0.42	1.54
268	G34	III Db	安A	2.7	18.4	13.7	9.9	3.9	0.4	14.5	9.3	14.2	6.1	5.0	4.4	1.06	3.64	1.02	0.43	3.51
269	H5	V Bb	安A	2.8	20.7	11.4	8.1	7.5	0.8	17.3	9.5	12.4	6.0	3.0	2.0	1.52	1.65	1.40	0.48	1.52
269	H8	V Ab	安A	4.4	20.7	12.0	10.4	8.2	0.4	17.4	10.9	12.1	5.6	4.0	2.1	1.45	1.48	1.44	0.46	1.46
269	H11	V Ab	安A	1.7	17.1	10.8	9.3	7.0	0.6	14.1	8.7	9.5	5.2	3.2	2.8	1.31	1.36	1.48	0.55	1.54
269	H12	V Ab	安A	2.6	18.2	10.5	8.5	7.0	0.5	15.0	9.6	10.7	5.4	2.4	<0.9>	1.43	1.53	1.40	0.50	1.50
269	H15	V Ab	安A	2.2	17.6	11.4	9.5	6.8	0.8	14.8	9.7	9.9	4.2	2.9	2.1	1.30	1.46	1.49	0.42	1.68
269	H21	V Ab	安A	2.7	19.4	11.8	9.9	7.6	1.0	16.0	9.0	10.8	5.4	3.0	2.0	1.36	1.42	1.48	0.50	1.55
269	H23	V Bb	安A	3.0	21.0	11.7	9.0	7.3	0.6	17.6	10.0	13.1	6.3	2.9	2.3	1.50	1.79	1.34	0.48	1.60
269	H24	V Bb	安A	2.5	19.4	12.2	9.4	6.7	0.8	17.9	10.4	11.9	6.2	3.6	2.3	1.47	1.78	1.50	0.52	1.82
269	H29	V Bb	安A	3.0	19.9	12.4	9.7	7.0	0.6	16.7	10.3	12.1	6.2	2.2	<1.0>	1.35	1.73	1.38	0.51	1.77

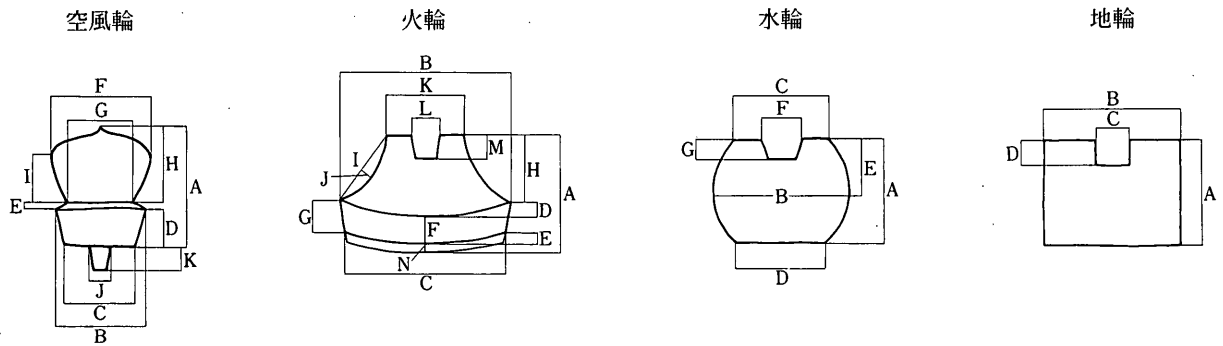


图 297 五輪塔計測部位凡例

表31 第11章 観音平経塚 五輪塔計測表(火輪①)

重量kg 長さcm

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
269	B2	V A ₂ b	擬B	35.4	25.1	35.5	34.8	3.9	1.6	5.2	7.5	14.5	21.0	1.1	14.0	—	—	0.5
269	B4	II B ₃ a	砂B	15.6	18.0	24.5	25.8	2.2	2.4	4.0	3.9	11.4	15.0	0.2	(11.9)	—	—	0.4
269	B9	I B ₃ a	擬D	12.4	16.0	25.0	26.2	1.3	1.0	5.7	6.4	7.6	12.5	0.2	9.7	—	—	1.0
269	B2-4	I A ₂ b	安A	6.8	12.9	22.0	21.5	0.2	0.1	3.6	3.2	7.9	12.5	0.0	7.0	—	—	1.6
269	C1	III B ₁ b	安A	9.4	17.0	26.0	25.0	3.9	2.6	4.9	6.2	7.8	14.1	0.1	9.0	—	—	0.4
—	C3	II C ₁ a	擬A	11.5	13.8	24.3	24.2	2.0	2.4	4.5	4.1	6.3	10.5	0.5	11.7	—	—	1.0
—	C4	III C ₁ b	擬A	16.4	15.6	27.3	26.7	3.3	1.6	4.0	5.7	7.3	13.5	0.7	9.5	—	—	1.0
—	C7	II C ₁ a	擬A	10.0	13.2	22.2	22.2	1.1	0.8	3.9	4.2	7.0	10.5	1.1	10.4	—	—	1.2
—	C①	V C ₁ a	砂A	10.7	13.7	20.0	20.0	0.3	0.2	3.1	3.2	8.7	11.7	0.0	8.8	—	—	1.6
269	C②	I B ₃ a	砂A	15.8	15.3	24.6	23.0	0.7	0.7	4.5	4.5	9.7	13.5	0.0	12.0	—	—	0.5
—	D3	II C ₁ a	擬A	6.0	9.6	19.0	19.7	1.8	1.4	3.3	3.7	3.3	8.0	0.5	8.6	—	—	1.2
—	D5	V B ₃ a	擬A	6.8	10.2	19.0	19.5	0.6	0.9	3.0	2.9	5.6	9.7	0.2	9.3	—	—	0.8
269	D6	VIII A ₂ b	安A	6.2	10.6	23.6	21.6	3.6	0.8	4.1	6.7	2.5	6.7	1.9	13.3	5.0	4.3	—
—	D9	IV A ₂ b	安A	4.5	10.2	20.0	19.2	6.1	0.5	4.6	10.2	0.0	6.0	0.5	11.2	4.5	3.0	0.8
—	D12	IV C ₂ d	安A	4.8	10.7	20.7	18.0	3.5	0.4	4.2	7.3	1.7	7.0	0.8	11.3	4.7	3.2	1.3
—	D13	VIII A ₂ b	安A	7.8	10.7	21.5	19.5	4.3	0.7	6.4	10.0	-0.3	9.5	0.7	9.7	5.4	3.9	0.3
269	D18	IV A ₁ b	安A	7.3	12.9	24.2	18.8	6.4	0.4	6.8	12.8	-0.3	5.3	0.2	15.1	5.4	2.9	—
269	D21	IV A ₁ c	安A	4.8	9.8	25.4	19.4	5.0	0.0	5.4	10.4	-0.6	6.8	0.3	14.4	5.2	3.1	—
—	D22	III A ₁ c	安A	4.6	10.5	22.4	18.4	2.9	1.1	6.8	8.6	0.8	8.0	1.0	11.4	4.7	2.9	—
—	D31	II C ₂ c	安A	15.4	18.8	19.5	18.5	1.4	1.5	5.6	5.5	10.8	15.0	0.0	11.1	—	—	1.0
—	D32	V B ₂ c	安A	8.3	16.2	23.0	21.5	1.9	2.8	5.5	4.6	8.8	12.3	0.8	12.4	—	—	—
—	D①	II A ₂ d	擬A	6.9	12.2	21.5	20.0	0.9	0.6	3.1	3.4	8.0	11.0	0.0	11.0	—	—	0.2
269	D②	V B ₃ c	砂A	14.0	14.7	25.4	24.1	2.5	0.9	3.2	4.7	8.5	14.3	0.9	10.6	—	—	0.6
—	D③	—	擬E	12.3	16.0	(25.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	(13.0)	—	—	—
—	E2	II B ₂ c	擬C	13.9	16.0	23.7	22.7	1.2	2.2	3.6	2.6	10.4	13.8	0.0	9.5	—	—	0.8
270	E5	III B ₂ b	擬A	16.8	13.1	31.2	28.5	3.4	0.1	4.4	6.8	5.1	11.5	0.6	14.5	—	—	0.5
270	E10	VIII C ₁ b	擬A	13.0	16.0	24.5	23.7	3.6	2.4	2.4	3.6	8.5	12.0	1.0	10.6	—	—	1.6
—	E11	II A ₁ c	砂A	14.2	14.1	26.7	24.6	2.0	1.0	3.5	4.5	8.6	14.0	0.4	10.9	5.0	1.0	—
—	E14	III A ₂ c	安A	7.7	10.4	28.0	26.4	2.9	2.2	4.1	4.8	3.0	11.7	1.1	10.8	5.5	3.6	0.4
270	E18	VIII B ₁ a	安A	6.2	15.3	23.4	22.4	4.3	2.0	3.8	6.1	6.4	10.3	1.1	13.8	—	—	0.8
270	E19	V B ₃ c	砂A	16.4	18.0	24.5	23.8	3.0	1.3	3.5	5.5	11.0	15.5	1.0	10.7	—	—	0.2
—	E23	II C ₁ d	擬A	8.0	12.7	22.5	20.4	2.3	1.1	3.1	4.3	6.7	10.5	0.1	10.2	—	—	0.6
270	E29	VI B ₂ b	安A	11.0	17.1	26.8	25.5	4.7	3.5	4.0	5.2	8.4	13.4	1.8	13.1	—	—	—
—	E38	II A ₂ c	安A	4.0	15.2	23.2	20.8	1.7	1.2	3.9	4.4	9.6	12.8	0.3	9.8	—	—	—
270	E41	VIII B ₂ c	擬A	18.8	17.4	27.7	26.6	4.6	3.1	3.2	5.0	9.2	14.0	1.1	13.6	—	—	0.3
—	E42	II A ₁ c	砂A	13.8	16.1	25.3	22.6	2.4	0.7	4.2	4.9	10.5	14.3	0.6	10.7	—	—	—
269	E53	II A ₁ c	砂A	13.0	14.3	26.2	24.2	1.9	0.4	3.2	4.7	9.3	14.2	0.5	10.7	4.9	2.1	—
270	E57	VI B ₂ b	安A	20.3	18.0	33.4	33.9	4.7	4.8	3.1	2.9	10.0	16.8	1.4	15.0	—	—	0.2
—	E59	VI B ₁ b	安A	5.3	13.5	21.7	22.2	2.8	2.9	3.2	3.1	7.5	11.0	0.9	11.2	5.7	4.1	—
—	E60	VI B ₂ b	安A	12.5	15.3	29.8	28.5	4.4	3.2	3.5	4.7	7.4	14.2	1.4	12.5	—	—	—
—	E65	VIII B ₂ b	安A	9.8	15.9	26.2	23.1	4.7	2.0	4.9	7.6	6.0	11.5	1.1	11.8	—	—	—
—	E66	III B ₂ b	安A	9.2	14.6	23.4	22.5	2.3	1.4	4.6	5.5	7.7	10.8	1.7	12.0	5.1	5.1	—
—	E72	VI B ₂ b	安A	9.4	14.6	25.2	24.7	4.1	2.1	3.1	5.1	7.4	11.9	1.3	12.5	—	—	—
—	E73	III C ₂ b	安A	9.4	15.7	24.0	18.5	3.2	1.4	4.5	6.3	7.1	12.3	1.2	10.7	—	—	0.9
269	E82	II B ₂ c	擬A	25.2	20.1	31.6	28.6	2.8	1.0	4.4	6.2	12.7	16.8	0.8	15.0	—	—	0.3
270	E83	III B ₂ b	安A	7.3	16.8	23.6	21.8	3.3	1.1	4.7	6.8	8.8	10.7	1.5	10.5	5.7	3.6	—
270	E85	VI B ₁ d	安A	20.5	20.1	33.0	29.0	8.1	1.0	4.0	7.1	12.0	15.1	1.2	15.9	6.8	5.7	—
269	E89	II A ₁ c	砂A	6.8	9.4	21.0	18.0	1.4	0.2	4.5	5.7	3.5	7.3	0.6	11.0	—	—	—
270	E92	IV A ₂ b	安A	6.1	12.8	24.0	20.5	4.5	0.6	3.2	7.2	4.3	11.5	1.1	9.3	5.1	4.7	0.6
—	E97	II C ₂ b	安A	17.1	18.6	27.6	27.4	2.0	1.8	5.0	5.2	10.4	15.5	0.8	12.7	5.2	1.8	1.2

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
—	E100	ⅡC _{1b}	凝A	10.0	16.8	—	—	—	—	4.3	5.6	9.2	13.3	0.6	10.0	—	—	1.0
—	E101	ⅤB _{1c}	凝A	6.2	10.2	21.5	19.5	2.2	0.5	3.8	5.5	4.2	8.8	0.8	10.5	—	—	—
270	E102	ⅢB _{1c}	凝A	9.2	13.2	24.3	21.7	2.8	1.8	3.7	5.3	6.7	11.7	1.5	11.3	—	—	—
—	E①	ⅢA _{1b}	砂A	9.6	13.6	26.0	(23.5)	2.8	1.6	3.4	4.6	6.6	11.8	1.2	(12.5)	—	—	0.8
—	E②	ⅡB _{1c}	安A	11.0	17.5	26.8	25.2	2.1	1.4	3.9	5.2	10.3	14.3	0.9	11.7	7.0	4.3	0.6
—	E③	ⅡA _{2c}	安A	4.7	13.8	21.5	19.8	2.4	1.8	4.0	4.6	7.4	11.3	0.3	9.4	—	—	—
—	E④	ⅤA _{2d}	凝A	10.0	13.8	24.7	21.6	1.4	0.7	3.3	4.0	8.6	12.0	0.4	11.0	—	—	0.5
—	E⑤	ⅡB _{1b}	安A	9.4	20.4	33.8	32.2	1.4	2.2	5.2	4.4	13.2	19.9	0.6	12.0	—	—	0.6
269	E⑥	ⅡC _{2c}	安A	16.1	19.8	32.3	29.6	2.7	2.4	5.4	5.7	10.7	17.0	0.7	13.9	—	—	1.0
—	E⑦	ⅡC _{1d}	凝A	9.1	14.4	23.5	20.2	2.9	0.7	2.8	5.0	8.0	13.2	0.3	10.5	—	—	0.7
—	F5	ⅠB _{3a}	凝A	13.5	16.3	22.9	23.8	0.2	1.7	4.3	2.8	11.1	14.6	0.6	10.5	—	—	0.7
—	F13	ⅡC _{1c}	安A	8.0	16.3	26.2	21.7	2.1	1.2	4.3	5.2	9.9	14.3	0.5	12.1	—	—	—
270	F15	ⅤC _{1a}	凝A	11.0	13.3	22.5	23.0	2.0	1.6	4.3	4.7	5.8	10.1	0.5	11.3	—	—	1.2
—	F16	ⅡB _{2a}	凝A	5.0	10.9	18.8	18.4	1.3	1.1	4.5	4.7	5.1	8.8	0.1	8.6	—	—	—
270	F20	ⅡC _{1a}	凝A	5.3	11.5	19.8	19.7	1.7	1.8	3.4	3.5	4.4	9.9	0.5	8.2	—	—	1.7
270	F23	ⅢC _{1c}	凝A	10.7	13.9	23.5	22.8	2.7	2.0	3.5	4.2	6.9	11.7	0.5	9.7	—	—	0.8
270	F28	ⅡC _{1a}	凝A	10.3	12.5	23.5	23.7	2.8	2.8	3.2	4.4	4.8	10.3	0.6	9.8	—	—	0.5
270	F32	ⅡA _{2c}	安A	7.9	17.0	26.0	23.0	1.3	1.0	4.5	4.7	11.7	14.0	0.4	11.7	—	—	—
270	F37	ⅡC _{2c}	安A	10.4	18.4	27.8	24.2	1.2	1.0	5.5	5.3	11.8	14.0	0.4	13.3	—	—	0.8
—	F38	ⅠA _a	凝C	14.3	14.2	28.8	—	—	—	—	—	—	—	—	19.0	—	—	—
—	F39	ⅣB _{1b}	安A	6.0	13.9	21.2	20.2	2.6	1.6	3.4	4.4	7.3	11.2	0.6	9.1	—	—	0.6
—	F44	ⅤC _{2c}	凝A	7.0	12.5	—	—	—	—	2.3	—	—	—	0.0	12.0	—	—	1.2
270	F46	ⅢB _{1b}	凝A	11.4	15.5	25.6	23.1	2.3	1.2	3.7	4.6	9.5	13.3	0.7	10.8	—	—	—
270	F47	ⅢB _{1b}	凝A	12.4	15.9	25.4	23.5	2.6	1.2	3.0	4.4	10.1	13.8	0.5	12.6	—	—	0.2
—	F48	ⅡC _{1c}	安A	5.4	15.1	22.2	18.9	1.7	1.2	4.1	4.6	8.5	12.6	0.6	10.2	—	—	0.8
—	F58	ⅡB _{1b}	安A	2.9	9.9	15.6	15.2	1.6	1.1	2.5	3.0	5.8	7.4	0.2	9.4	—	—	—
270	F①	ⅤB _{2d}	安A	5.8	14.4	20.9	20.4	3.9	5.4	2.8	1.3	7.4	10.1	0.9	11.0	5.7	6.5	0.3
—	F②	ⅡA _{2d}	凝A	0.6	—	—	—	1.5	—	3.3	4.8	—	—	—	—	—	—	—
271	G10	ⅤB _{1c}	安A	7.0	14.7	21.5	21.3	3.0	1.9	2.8	3.9	9.3	12.0	1.0	12.2	—	—	—
270	G11	ⅢA _{1b}	凝B	13.4	15.5	27.5	25.5	3.0	0.2	4.3	7.2	8.2	9.8	1.0	15.0	—	—	—
270	G12	ⅡA _{1b}	砂A	6.2	12.0	19.2	17.7	1.4	0.5	3.8	4.8	6.6	10.5	0.3	6.1	—	—	0.2
271	G13	ⅤB _{1b}	安A	6.2	17.5	22.2	21.8	5.0	4.4	3.4	4.1	9.0	12.0	1.1	11.0	—	—	—
—	G14	ⅤB _{1b}	安A	5.3	16.0	22.5	21.4	3.5	2.6	2.9	4.1	8.8	11.7	1.1	10.5	—	—	—
270	G16	ⅡC _{1b}	安A	11.8	17.1	26.6	26.4	1.4	2.4	4.9	3.8	10.2	16.4	0.3	8.3	—	—	0.6
—	G17	ⅡC _{1a}	安A	5.7	12.9	21.0	20.8	2.1	1.8	3.3	3.1	5.9	10.2	0.5	10.7	5.0	3.2	1.0
—	G22	ⅢC _{1b}	凝A	17.4	17.9	26.2	25.4	2.8	2.3	5.4	5.9	8.0	14.4	0.5	11.3	—	—	1.4
—	G23	ⅢA _{2c}	砂A	13.1	16.0	26.1	22.0	3.2	0.9	3.9	6.3	8.5	13.0	1.7	11.2	6.2	1.7	0.4
270	G27	ⅢB _{1b}	安A	3.9	12.2	21.7	20.8	1.0	1.4	2.5	2.0	8.2	10.2	0.6	10.6	5.6	3.0	—
271	H6	ⅥA _{1c}	安A	3.0	9.2	19.3	15.6	4.1	0.1	4.3	8.0	0.9	8.5	0.6	8.2	4.2	2.5	—
271	H7	ⅥA _{1c}	安A	3.8	10.7	20.2	14.3	3.5	0.3	6.3	9.5	4.0	8.2	0.4	9.0	4.3	2.5	—
271	H13	ⅣA _{2c}	安A	4.6	11.5	18.4	15.0	4.8	0.6	5.8	9.8	5.8	7.0	0.6	8.0	4.3	2.9	—
271	H16	ⅥA _{1c}	安A	3.3	11.9	18.6	15.1	5.0	0.2	6.8	11.6	0.3	4.8	0.6	7.7	4.2	3.0	—
—	H17	ⅥA _{1c}	安A	4.4	9.9	21.0	16.2	4.3	0.3	5.6	9.6	1.3	8.7	0.8	9.1	4.3	2.6	—
271	H20	ⅣA _{1c}	安A	5.1	11.7	19.8	14.2	5.0	0.3	5.4	10.3	1.1	7.5	0.3	9.5	4.5	3.6	—
—	H22	ⅣA _{1c}	安A	3.7	10.6	19.5	13.4	4.3	0.0	5.7	9.9	1.4	7.0	0.8	9.5	4.3	3.3	—
—	H27	ⅣA _{1c}	安A	3.5	10.2	18.0	14.2	4.0	0.2	5.8	9.5	0.7	7.3	0.7	7.8	4.5	3.2	—
—	I3	ⅢB _{1b}	安A	3.7	13.3	22.0	21.5	3.1	2.1	2.5	3.8	7.5	10.5	0.5	10.2	—	—	—
271	I6	ⅤB _{1c}	砂A	8.9	13.8	21.3	20.2	2.8	1.0	2.8	4.7	7.4	13.0	0.9	8.0	—	—	0.8
271	I7	ⅤB _{2a}	砂A	16.0	17.5	23.5	23.0	2.2	1.1	5.2	6.5	9.6	11.4	0.8	11.2	—	—	0.6
271	I8	ⅡB _{3a}	砂A	10.0	13.9	21.8	23.0	1.7	1.4	4.3	4.4	7.4	12.4	0.9	9.3	—	—	0.7
—	I10	ⅢB _{2b}	安A	3.3	12.4	20.0	18.5	4.4	0.7	2.0	3.7	6.9	10.0	0.4	9.2	—	—	0.9

表32 第11章 観音平経塚 五輪塔計測表(火輪②)

図版	番号	分類	D/B	E/C	D/B-E/C	B/C	J/I	F/A-N	図版	番号	分類	D/B	E/C	D/B-E/C	B/C	J/I	F/A-N
269	B2	V A _{2b}	0.11	0.05	0.06	1.02	0.05	0.21	—	E101	VB _{1c}	0.10	0.03	0.07	1.10	0.09	0.37
269	B4	II B _{2a}	0.09	0.09	0.00	0.95	0.01	0.23	270	E102	III B _{1c}	0.12	0.08	0.04	1.12	0.13	0.28
269	B9	I B _{2a}	0.05	0.04	0.01	0.95	0.02	0.38	—	E①	III A _{1b}	0.11	—	—	—	0.10	0.27
269	B2-4	I A _{2b}	0.01	0.00	0.01	1.02	0.00	0.32	—	E②	II B _{1c}	0.08	0.06	0.02	1.06	0.06	0.23
269	C1	III B _{1b}	0.15	0.10	0.05	1.04	0.01	0.30	—	E③	II A _{2c}	0.11	0.09	0.02	1.09	0.03	0.29
—	C3	II C _{1a}	0.08	0.10	-0.02	1.00	0.05	0.35	—	E④	V A _{2d}	0.06	0.03	0.03	1.14	0.03	0.25
—	C4	III C _{1b}	0.12	0.06	0.06	1.02	0.05	0.27	—	E⑤	II B _{1b}	0.04	0.07	-0.03	1.05	0.03	0.26
—	C7	II C _{1a}	0.05	0.04	0.01	1.00	0.10	0.33	269	E⑥	II C _{2c}	0.08	0.08	0.00	1.09	0.04	0.29
—	C①	VC _{1a}	0.02	0.00	0.01	1.00	0.00	0.26	—	E⑦	II C _{1d}	0.12	0.03	0.09	1.16	0.02	0.20
269	C②	I B _{2a}	0.03	0.03	0.00	1.07	0.00	0.30	—	F5	I B _{2a}	0.01	0.07	-0.06	0.96	0.04	0.28
—	D3	II C _{1a}	0.09	0.07	0.02	0.96	0.06	0.39	—	F13	II C _{1c}	0.08	0.06	0.02	1.12	0.03	0.26
—	D5	VB _{2a}	0.03	0.05	-0.02	0.97	0.02	0.32	270	F15	VC _{1a}	0.09	0.07	0.02	0.98	0.05	0.36
269	D6	VIII A _{2b}	0.15	0.04	0.11	1.09	0.28	0.39	—	F16	II B _{2a}	0.07	0.06	0.01	1.02	0.01	0.41
—	D9	IV A _{2b}	0.31	0.03	0.28	1.04	0.08	0.49	270	F20	II C _{1a}	0.09	0.09	0.00	1.01	0.05	0.35
—	D12	IV C _{2d}	0.17	0.02	0.15	1.15	0.11	0.45	270	F23	III C _{1c}	0.11	0.09	0.02	1.03	0.04	0.27
—	D13	VIII A _{2b}	0.20	0.04	0.16	1.10	0.07	0.62	270	F28	II C _{1a}	0.12	0.12	0.00	0.99	0.06	0.27
269	D18	IV A _{1b}	0.26	0.02	0.24	1.29	0.04	0.53	270	F32	II A _{2c}	0.05	0.04	0.01	1.13	0.03	0.26
269	D21	IV A _{1c}	0.20	0.00	0.20	1.31	0.04	0.55	270	F37	II C _{2c}	0.04	0.04	0.00	1.15	0.03	0.31
—	D22	III A _{1c}	0.13	0.06	0.07	1.22	0.13	0.65	—	F38	I A _a	—	—	—	—	—	—
—	D31	II C _{2c}	0.07	0.08	-0.01	1.05	0.00	0.31	—	F39	IV B _{3b}	0.12	0.08	0.04	1.05	0.05	0.26
—	D32	VB _{2c}	0.08	0.13	-0.05	1.07	0.07	0.34	—	F44	VC _{2c}	—	—	—	—	0.00	0.20
—	D①	II A _{2d}	0.04	0.03	0.01	1.08	0.00	0.26	270	F46	III B _{1b}	0.09	0.05	0.04	1.11	0.05	0.24
269	D②	VB _{2c}	0.10	0.04	0.06	1.05	0.06	0.23	270	F47	III B _{1b}	0.10	0.05	0.05	1.08	0.04	0.19
—	D③	—	—	—	—	—	—	—	—	F48	II C _{1c}	0.08	0.06	0.02	1.17	0.05	0.29
—	E2	II B _{2c}	0.05	0.10	-0.05	1.04	0.00	0.24	—	F58	II B _{1b}	0.10	0.07	0.03	1.03	0.03	0.25
270	E5	III B _{2b}	0.11	0.00	0.11	1.09	0.05	0.35	270	F①	VB _{2b}	0.19	0.26	-0.07	1.02	0.09	0.20
270	E10	VIII C _{1b}	0.15	0.10	0.05	1.03	0.08	0.17	—	F②	II A _{2d}	—	—	—	—	—	—
—	E11	II A _{1c}	0.07	0.04	0.03	1.09	0.03	0.25	271	G10	VB _{2c}	0.14	0.09	0.05	1.01	0.08	0.19
—	E14	III A _{2c}	0.10	0.08	0.02	1.06	0.09	0.41	270	G11	III A _{1b}	0.11	0.01	0.10	1.08	0.10	0.28
270	E18	VIII B _{1a}	0.18	0.09	0.09	1.04	0.11	0.26	270	G12	II A _{1b}	0.07	0.03	0.04	1.08	0.03	0.32
270	E19	VB _{2c}	0.12	0.05	0.07	1.03	0.06	0.20	271	G13	VI B _{1b}	0.23	0.20	0.03	1.02	0.09	0.19
—	E23	II C _{1d}	0.10	0.05	0.05	1.10	0.01	0.26	—	G14	VI B _{1b}	0.16	0.12	0.04	1.05	0.09	0.18
270	E29	VI B _{2b}	0.18	0.14	0.04	1.05	0.13	0.23	270	G16	II C _{1b}	0.05	0.09	-0.04	1.01	0.02	0.30
—	E38	II A _{2c}	0.07	0.06	0.01	1.12	0.02	0.26	—	G17	II C _{1a}	0.10	0.09	0.01	1.01	0.05	0.28
270	E41	VIII B _{1c}	0.17	0.12	0.05	1.04	0.08	0.19	—	G22	III C _{1b}	0.11	0.09	0.02	1.03	0.03	0.33
—	E42	II A _{1c}	0.09	0.03	0.06	1.12	0.04	0.26	—	G23	III A _{2c}	0.12	0.04	0.08	1.19	0.13	0.25
269	E53	II A _{1c}	0.04	0.02	0.02	1.08	0.04	0.22	270	G27	III B _{1b}	0.05	0.07	-0.02	1.04	0.06	0.20
270	E57	VB _{2b}	0.14	0.14	0.00	0.99	0.08	0.17	271	H6	VI A _{1c}	0.21	0.01	0.20	1.24	0.07	0.47
—	E59	VB _{1b}	0.13	0.13	0.00	0.98	0.08	0.24	271	H7	VI A _{1c}	0.17	0.02	0.15	1.14	0.05	0.59
—	E60	VB _{2b}	0.15	0.11	0.04	1.05	0.10	0.23	271	H13	IV A _{2c}	0.26	0.04	0.22	1.23	0.09	0.50
—	E65	VIII B _{2b}	0.18	0.09	0.09	1.13	0.10	0.31	271	H16	VI A _{1c}	0.27	0.01	0.26	1.23	0.13	0.57
—	E66	III B _{2b}	0.10	0.06	0.04	1.04	0.16	0.32	—	H17	VI A _{1c}	0.20	0.02	0.18	1.30	0.09	0.57
—	E72	VI B _{2b}	0.16	0.09	0.07	1.02	0.11	0.21	271	H20	IV A _{1c}	0.25	0.02	0.23	1.39	0.04	0.46
—	E73	III C _{2b}	0.13	0.08	0.05	1.30	0.10	0.30	—	H22	IV A _{1c}	0.22	0.00	0.22	1.46	0.11	0.54
269	E82	II B _{2c}	0.09	0.03	0.06	1.10	0.05	0.22	—	H27	IV A _{1c}	0.22	0.01	0.21	1.27	0.10	0.57
270	E83	III B _{1b}	0.14	0.05	0.09	1.08	0.14	0.28	—	I3	III B _{1b}	0.14	0.10	0.04	1.02	0.05	0.19
270	E85	VB _{1d}	0.25	0.03	0.22	1.14	0.08	0.20	271	I6	VB _{2c}	0.13	0.05	0.08	1.05	0.07	0.22
269	E89	II A _{1c}	0.07	0.01	0.06	1.17	0.08	0.48	271	I7	VB _{2a}	0.09	0.05	0.04	1.02	0.07	0.31
270	E92	IV A _{2b}	0.19	0.03	0.16	1.17	0.10	0.26	271	I8	II B _{2a}	0.08	0.06	0.02	0.95	0.07	0.33
—	E97	II C _{2b}	0.07	0.07	0.00	1.01	0.05	0.29	—	I10	III B _{2b}	0.22	0.04	0.18	1.08	0.04	0.17
—	E100	II C _{1b}	—	—	—	—	0.05	0.27									

表33 第11章 観音平経塚 五輪塔計測表(水輪)

重量kg 長さcm

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	C	D	E	B/C	B/A	E/A	工具痕他
271	B3	ⅡCd	凝B	16.9	20.5	(33.5)	(24.2)	(24.8)	10.3	1.38	1.63	0.50	上1側ナ下1
271	B7	ⅡAc	凝D	12.3	18.5	25.7	13.4	14.0	9.5	1.92	1.39	0.51	側ナ下2
271	B12	ⅠCc	砂B	14.0	16.8	24.4	17.7	17.7	7.7	1.38	1.45	0.46	
—	B2—3	ⅠBc	凝A	8.6	15.1	22.0	14.5	15.5	7.1	1.52	1.46	0.47	上2側3下2
271	B2—6	ⅠAc	安A	7.8	17.9	24.8	11.9	12.8	10.4	2.08	1.39	0.58	上1側3下2
271	D16	ⅢAc	安A	10.4	18.4	28.7	16.2	16.2	8.8	1.77	1.56	0.48	上多側ナ下直2
271	D17	ⅢBc	安A	4.2	14.9	21.9	13.0	13.8	7.2	1.69	1.47	0.48	上2側ナ下2 「十」字形線刻
271	D23	ⅣAd	安A	7.9	15.2	27.3	15.3	16.4	7.2	1.78	1.80	0.47	上直2側ナ下直2
—	D25	ⅢAd	安A	5.0	13.2	23.0	13.5	13.8	5.9	1.70	1.74	0.45	上直2側ナ下直2
—	D27	ⅠBc	凝A	20.2	20.5	27.6	17.5	17.5	10.5	1.58	1.35	0.51	上2側3下2
—	D28	ⅠAd	安A	6.0	16.6	26.5	15.0	15.9	8.1	1.77	1.60	0.49	上2側2下2
271	D33	—Ab	安A	12.6	20.2	26.9	13.0	10.2	9.6	2.07	1.33	0.48	上2側2下2
—	E1	ⅠAc	凝B	15.6	20.4	29.7	(14.0)	17.6	10.8	2.12	1.46	0.53	側1
—	E9	ⅡCd	砂A	13.7	14.8	24.8	18.1	20.0	7.1	1.37	1.68	0.48	上直2側ナ下3
271	E13	ⅡCc	安A	9.0	17.8	25.8	19.3	21.3	8.9	1.34	1.45	0.50	上2側3下多
271	E20	ⅡCb	砂A	15.5	18.8	24.0	17.2	18.8	9.8	1.40	1.28	0.52	上2側ナ下直2
272	E22	ⅣBc	安A	32.6	27.2	36.9	22.6	24.0	13.2	1.63	1.36	0.49	上2側ナ下2
—	E24	ⅠCc	凝A	8.0	14.6	22.2	15.0	16.4	7.9	1.48	1.52	0.54	上2側2下多
—	E26	ⅡAc	安A	5.9	15.6	23.4	12.0	14.8	8.6	1.95	1.50	0.55	上1側3下多
—	E30	ⅢBc	安A	7.9	16.6	24.4	16.0	16.5	8.6	1.53	1.47	0.52	上2側2下2
—	E35	ⅠCc	凝A	9.4	14.8	22.9	15.9	18.1	8.1	1.44	1.55	0.55	上2側2下多
271	E45	ⅠAc	砂A	21.4	18.6	29.6	17.1	19.5	8.9	1.73	1.59	0.48	上直2側ナ下直2
272	E47	ⅢBd	凝A	15.4	15.7	29.0	17.5	18.5	7.7	1.66	1.85	0.49	上2側2下2
—	E49	ⅠCc	砂A	15.9	17.1	25.6	18.6	19.0	8.7	1.38	1.50	0.51	上直2側2下直2
272	E55	ⅢBc	安A	33.6	25.4	36.4	22.4	22.7	12.7	1.63	1.43	0.50	上直2側2下直2
—	E56	ⅠBc	安A	3.8	14.5	20.0	12.8	14.5	7.5	1.56	1.38	0.52	上2側2下2
272	E57	ⅢBc	安A	34.0	26.2	36.6	24.3	23.7	13.2	1.51	1.40	0.50	上2側ナ下2
272	E61	ⅡCd	凝A	9.1	12.0	23.4	17.3	17.0	6.0	1.35	1.95	0.50	上1側2下1
—	E62	ⅢBc	安A	6.8	17.8	24.4	15.1	15.7	8.1	1.62	1.37	0.46	上2側2下2
272	E69	ⅢAd	安C	17.9	17.9	28.6	16.7	18.3	9.4	1.71	1.60	0.53	上2側2下2
272	E71	ⅡCd	安A	8.8	16.8	27.2	18.8	18.8	8.3	1.45	1.62	0.49	上多側2下2
—	E74	ⅡCc	安A	6.3	15.1	22.2	17.5	17.8	6.9	1.27	1.47	0.46	上2側2下2
—	E79	ⅠCc	安A	11.3	18.0	26.8	18.2	19.1	9.2	1.47	1.49	0.51	上直2側3下2
271	E80	ⅠBc	砂A	22.9	19.8	29.4	19.1	20.6	10.5	1.54	1.49	0.53	上2側1下直2
271	E82	ⅡCd	凝A	21.2	18.5	30.0	22.2	21.1	8.5	1.35	1.62	0.46	上直2側1下直2
271	E83	ⅠCc	安A	7.0	16.3	23.9	18.0	19.2	8.3	1.33	1.47	0.51	上2側2下1
271	E84	ⅠCc	安C	16.8	17.4	27.1	18.4	19.3	8.4	1.47	1.56	0.48	上2側2下2
272	E85	ⅢAc	安C	30.2	24.6	34.3	17.6	17.5	12.6	1.95	1.39	0.51	上2側2下2
—	E86	ⅠBc	砂A	6.6	12.4	19.4	12.7	13.7	5.9	1.53	1.56	0.48	上多側ナ下1
—	E95	ⅠBc	安A	8.5	15.1	21.2	13.8	15.0	7.1	1.54	1.40	0.47	上多側2下2
—	E96	ⅢAc	安A	7.2	15.0	23.7	13.3	13.4	8.0	1.78	1.58	0.53	上2側2下2
—	E99	ⅠCc	砂A	11.7	15.0	22.7	16.2	17.3	7.7	1.40	1.51	0.51	上2側2下2
—	E①	ⅠCc	安A	6.7	17.6	25.0	17.3	<18.5>	9.0	1.45	1.42	0.51	上2側1下2
—	E②	ⅠCc	凝A	10.2	15.3	22.0	16.7	17.4	7.8	1.32	1.44	0.51	上直2側3下2
—	E③	ⅡCc	安A	4.8	15.0	21.8	17.0	18.3	7.6	1.28	1.45	0.51	上2側ナ下2
—	F10	ⅠBc	凝A	16.0	18.8	25.8	15.4	17.0	9.2	1.68	1.37	0.49	上2側タ下2

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	C	D	E	B/C	B/A	E/A	工具痕他
272	F11	I Bc	凝A	11.0	16.0	23.2	14.6	15.1	7.8	1.59	1.45	0.49	上2側2下2
—	F14	II Cc	凝A	6.5	13.3	19.0	14.2	14.8	7.3	1.34	1.43	0.55	上2側2下2
—	F17	I Bc	安A	7.7	14.9	21.8	14.0	13.7	6.9	1.56	1.46	0.46	上2側2下2
—	F30	II Cc	凝A	12.8	16.5	24.4	17.8	19.1	8.3	1.36	1.48	0.50	上2側ナ下多
—	F36	II Cc	安A	9.0	17.5	23.8	16.8	18.8	9.7	1.42	1.36	0.55	上2側ナ下2
272	F37	I Cd	安A	10.8	16.6	27.5	19.9	19.7	7.8	1.38	1.66	0.47	上2側ナ下2
272	F38	I Bc	凝C	19.8	19.3	29.0	18.0	20.1	10.0	1.61	1.50	0.52	側タ
272	F42	I Cc	安A	7.1	14.7	22.1	16.5	16.8	6.7	1.34	1.50	0.46	上2側2下2
272	F45	I Cc	凝A	8.6	14.5	22.0	15.5	16.3	7.0	1.42	1.52	0.48	上直2側2下2
272	F46	III Cd	凝A	11.5	15.0	25.8	17.7	18.8	6.8	1.46	1.72	0.45	上直2側ナ下多
272	F47	III Cd	凝A	12.0	15.2	25.6	18.1	18.1	7.2	1.41	1.68	0.47	上2側ナ下直2
—	F49	I Cc	安A	6.3	15.7	22.4	16.0	16.0	7.7	1.40	1.43	0.49	上2側2下2
—	F56	I Cd	安A	2.9	10.2	18.1	13.0	14.0	5.4	1.39	1.77	0.53	上2側2下2
—	F①	III Cc	安A	7.8	16.8	25.9	17.5	17.5	8.8	1.48	1.54	0.52	上2側ナ
—	F②	I Cc	安A	12.4	22.3	30.0	20.8	21.0	11.3	1.44	1.35	0.51	上1側2下2
—	F③	I Cc	安A	11.8	20.0	28.8	19.6	20.5	9.6	1.47	1.44	0.48	上2側ナ下2
—	F④	II Cc	凝A	17.5	18.2	27.2	20.5	20.0	8.2	1.33	1.49	0.45	上2側ナ下2
—	F⑤	II Cd	安A	7.4	13.3	24.6	18.2	19.0	6.3	1.35	1.85	0.47	上2側2下2
272	G3	I Cd	凝B	18.6	17.5	29.0	22.5	22.2	9.5	1.29	1.66	0.54	上2側ナ下2
—	G7	II Ac	安A	4.5	14.4	19.9	10.5	10.3	6.9	1.90	1.38	0.48	上2側タ下2
272	G21	II Ac	安A	8.4	17.1	24.0	14.1	15.0	8.6	1.70	1.40	0.50	上直2側タ下2
—	G25	I Bc	凝A	17.1	19.6	27.2	17.5	19.0	9.6	1.55	1.39	0.49	上1側タ下1
—	G26	I Ac	安A	5.9	15.5	23.3	13.5	13.8	8.0	1.73	1.50	0.52	上2側2下2
—	H4	II Bc	安A	5.7	14.1	21.5	13.9	16.2	6.5	1.55	1.52	0.46	上2側ナ下2
272	H6	III Bd	安A	4.3	12.9	21.5	12.7	16.1	4.9	1.69	1.67	0.38	上2側ナ下2
272	H9	III Cd	安A	2.5	11.5	20.0	13.4	14.3	5.8	1.49	1.74	0.50	上2側ナ下3
—	H10	III Bd	安A	4.5	12.2	21.2	14.1	14.7	6.2	1.50	1.74	0.51	上2側ナ下3
—	H14	III Bd	安A	4.6	12.4	22.0	14.7	14.9	5.8	1.50	1.77	0.47	上多側ナ下2
272	H18	III Cc	安A	4.3	13.8	21.0	14.1	13.4	5.8	1.49	1.52	0.42	上3側ナ下3
272	H19	II Bd	安A	4.0	11.8	22.2	13.5	15.7	4.8	1.64	1.88	0.40	上2側ナ下直2
272	H20	III Bd	安A	4.8	12.8	21.6	14.2	15.0	6.4	1.52	1.69	0.50	上直2側ナ下直2
—	H25	II Ac	安A	6.0	13.9	21.6	10.8	13.4	6.4	2.00	1.55	0.46	上3側ナ下多
—	I4	III Bc	安A	5.0	15.0	21.3	14.0	13.8	7.7	1.52	1.42	0.51	上2側ナ下2

工具痕

上：上面 側：側面 下：下面

1：1方向 2：2方向 3：3方向 多：多方向 直2：直交2方向

ナ：斜め方向 タ：縦方向 ヨ：横方向

表34 第11章 観音平経塚 五輪塔計測表 (地輪)

重量kg 長さcm

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	B/A	工具痕他	図版	番号	分類	石材	重量	A	B	B/A	工具痕他
—	B1	I	凝D	50以上	36.6	39.3	1.07	側ナ下ナ	—	F6	IV	安A	10.4	13.1	23.4	1.79	上2側下2
273	B5	III	凝D	18.0	19.8	27.2	1.37	側ナ下2	—	F8	III	安A	14.4	16.2	23.6	1.46	上3側下2
273	B6	II	凝B	48.9	26.5	33.4	1.26	側ナ下ナ	—	F12	II	凝A	22.9	19.6	25.0	1.28	上2側下1
—	B8	II	砂A	40.5	24.0	30.1	1.25	上2側ナ下2	—	F18	III	凝A	18.1	17.5	23.9	1.37	上2側下2
—	B10	II	凝B	50以上	26.7	35.4	1.33	上ナ側ナ下2	—	F19	III	凝A	10.2	13.8	21.3	1.54	側タ
273	B2-1	IV	砂B	21.5	16.7	26.9	1.61	上ナ 下ナ	—	F21	III	安A	18.8	21.9	31.0	1.42	上多側下2多
—	B2-6	V	安A	17.4	12.6	33.6	2.67	上2側2下2	—	F22	III	安A	13.0	16.2	25.3	1.56	上多側下多
—	C6	II	凝A	19.4	18.8	24.3	1.29	上1側タ下2	—	F24	III	安A	18.0	19.7	26.5	1.35	上2側下2
—	D1	IV	安A	9.8	13.1	33.2	2.53	上2側ナ下2	—	F25	III	安A	26.2	24.0	34.5	1.44	上2側下多
—	D2	IV	凝A	9.5	13.5	22.2	1.64	上ヨ側タ下2	—	F26	III	凝A	31.9	20.8	30.0	1.44	上1側ヨ下2
—	D4	IV	凝A	10.8	14.1	22.7	1.61	上2側2	—	F27	II	凝A	19.3	18.9	23.4	1.24	上2側下2
—	D11	III	安A	13.5	15.0	23.5	1.57	上多側下3	—	F31	II	凝A	24.6	21.2	26.0	1.23	側下下2
—	D14	IV	安B	12.0	11.7	23.8	2.03	上2側直下2	—	F34	III	安A	10.2	17.1	25.9	1.51	上2側下多
—	D15	III	安A	7.3	13.6	21.3	1.57	上2側ナ下2	—	F37	III	安A	14.2	20.2	27.2	1.35	上2側下2
—	D16	III	安A	12.4	16.0	24.6	1.54	上タ側ヨ下ナ	273	F38	III	凝C	25.2	20.4	28.0	1.37	上2側ナ
—	D23	III	安A	9.6	15.4	24.0	1.56	上2側ナ下2	—	F42	III	安A	10.3	16.5	23.6	1.43	上1側ナ
—	D24	IV	安A	14.4	15.5	25.8	1.66	上2側下多	—	F43	IV	安A	10.0	12.8	23.1	1.80	上2側下2
—	D29	IV	砂A	26.0	16.2	30.2	1.86	側タ	—	F45	IV	凝A	12.1	13.6	22.5	1.65	上2側3下ナ
—	D34	IV	砂A	22.6	14.6	32.0	2.19	側タ下2	273	F46	IV	凝A	15.0	13.5	24.3	1.80	上直2側下1
—	D35	III	凝A	11.5	14.3	21.6	1.51	上ナ側2下ナ	273	F47	III	凝A	19.4	16.2	25.2	1.56	上2側下1
—	D36	(III)	—	6.7	<18.0>	<26.5>	—		—	F50	IV	安A	8.4	14.4	24.1	1.67	上2側下1
—	D①	IV	凝A	9.4	10.7	25.4	2.37	上ナ側タ下ナ	273	F51	II	安A	9.6	17.8	23.2	1.30	上1側下2
—	E3	II	凝C	17.2	18.4	22.6	1.23	側ナ	—	F55	II	安A	32.8	23.6	31.7	1.34	上2側下2
—	E4	III	凝A	31.3	19.7	29.5	1.50	上多側下2	—	F57	IV	砂A	18.6	14.6	25.6	1.75	上多側ナ
—	E6	III	砂A	22.0	16.9	25.8	1.53	上2側下2	—	F60	IV	安A	10.8	13.8	23.0	1.67	上2側下2
—	E12	III	安A	16.6	19.9	28.3	1.42	上2側ナ下2	—	F61	IV	凝A	10.6	10.4	24.7	2.38	上2側ヨ
—	E13	II	安A	13.7	19.1	25.5	1.34	上多側2下多	—	G1	II	安A	13.5	20.1	26.7	1.33	上2側下1
—	E17	II	安A	15.3	19.0	24.0	1.26	上ナ側2下多	—	G2	III	安A	15.8	17.7	26.1	1.47	上2側下直2
—	E21	II	砂A	27.6	20.5	25.8	1.26	上2側2下ナ	273	G4	IV	凝B	28.8	18.7	30.7	1.64	上ナ側ヨ下直2
—	E25	IV	凝A	5.6	<9.6>	23.2	—	上2側2	—	G5	III	安A	9.9	14.9	22.6	1.52	上2側下2
—	E27	III	安A	11.3	14.8	23.2	1.57	上ヨ側ナ下タ	—	G6	II	砂A	23.6	20.0	23.4	1.17	上多側下2
—	E28	III	安A	50以上	27.5	39.0	1.42	C19 D10.2	—	G8	III	凝A	23.5	19.6	26.5	1.35	上2側下多
								上多側下2	—	G15	IV	安A	5.6	12.2	19.5	1.60	上2側ヨ下2
—	E32	IV	安A	14.2	14.9	25.1	1.68	上2側下2	—	G19	IV	安A	11.1	12.5	25.1	2.01	上2側下2
—	E34	IV	凝A	15.2	15.4	24.8	1.61	上2側2下ナ	—	G20	III	安A	13.2	16.2	24.8	1.53	上1側下多2
—	E39	III	安A	10.0	14.8	22.0	1.49	上2側2下2	—	G24	III	安A	16.0	16.4	25.7	1.57	上2側下2
—	E44	III	砂A	35.1	19.2	30.2	1.57	上ナ側下ナ	—	G28	IV	安A	6.4	11.9	23.0	1.93	上2側下2
—	E46	III	安A	21.5	19.0	25.6	1.35	上多側3下2	—	G29	III	凝A	17.4	16.1	25.0	1.55	上2 下多
—	E48	III	凝A	16.4	16.9	24.7	1.46	上多側ヨ下多	—	G31	II	凝A	30.6	21.2	27.6	1.30	上2側下ナ
—	E52	IV	凝A	14.8	15.1	24.7	1.64	上3側下2	—	G33	III	砂B	15.7	15.3	23.4	1.53	側下下多
—	E54	III	砂A	26.4	19.1	26.1	1.37	上2側下2	—	G35	IV	安A	9.2	13.8	23.2	1.68	上2側下2
—	E55	III	安A	37.9	23.2	36.4	1.57	上多側下2	—	G36	IV	安A	22.1	18.4	30.0	1.63	上2側下2
273	E57	III	安A	46.0	22.0	34.8	1.58	上多側下2	—	H1	III	安A	6.4	12.0	16.7	1.39	上3側下2多
—	E64	IV	安A	8.4	14.0	23.3	1.66	上2側下ナ	—	H2	III	安A	5.1	11.4	17.4	1.53	上2側下2
—	E67	IV	安A	19.2	16.2	27.2	1.68	上2側2下2	—	H3	II	安A	6.4	12.6	16.6	1.32	上直2側下2
—	E68	II	安A	10.8	17.2	22.3	1.30	上2側2下2	—	H4	III	安A	4.6	10.7	16.4	1.53	上3側下2

図版	番号	分類	石材	重量	A	B	B/A	工具痕他	図版	番号	分類	石材	重量	A	B	B/A	工具痕他
—	E69	Ⅲ	安A	34.6	24.7	39.0	1.58	上2側タ下2	273	H6	Ⅲ	安A	5.2	11.5	16.3	1.42	上直2側ナ下多
—	E71	Ⅳ	安A	13.2	13.3	27.8	2.09	上ナ側2下ナ	273	H9	Ⅲ	安A	5.7	13.7	19.0	1.39	上2側ナ下2
—	E77	Ⅳ	安A	16.0	15.3	28.8	1.88	上多側2下2	—	H10	Ⅲ	安A	4.7	11.9	17.1	1.44	上直2側ナ下2
—	E80	Ⅱ	砂A	36.1	21.2	28.2	1.33	上2側2下2	—	H14	Ⅲ	安A	4.7	11.6	17.7	1.53	上2側ナ下2
—	E81	Ⅱ	凝B	29.6	20.8	27.8	1.34	上2側2下直2	273	H18	Ⅲ	安A	4.7	11.7	17.4	1.49	上2側ナ下3
273	E82	Ⅱ	凝A	36.5	22.0	29.1	1.32	上2側ナ下ナ	273	H19	Ⅱ	安A	5.9	12.3	16.4	1.33	上2側2下2
273	E83	Ⅱ	安A	13.8	19.1	25.5	1.34	上多側2下直2	273	H20	Ⅳ	安A	4.4	10.3	16.5	1.60	上多側ナ下多
273	E85	Ⅱ	安A	46.7	27.5	32.0	1.16	上多側ナ下多	—	H26	Ⅳ	安A	3.8	9.5	16.8	1.77	上2側ナ下2
—	E90	Ⅲ	砂A	11.4	14.4	21.0	1.46	上ナ側タ下多	—	H28	Ⅲ	安A	3.9	10.8	16.0	1.48	上2側ナ下3
—	E91	Ⅲ	安A	15.5	16.8	23.8	1.42	上2側2下直2	—	I1	Ⅳ	凝A	15.0	14.0	24.0	1.71	上多側直2下2
—	E93	Ⅳ	凝A	16.0	15.6	28.6	1.83	上ヨ側タ下ヨ	—	I2	Ⅳ	凝A	15.3	13.8	24.0	1.74	上2側ヨ下1
—	E94	Ⅳ	安A	8.2	15.4	25.9	1.68	上3側タ下2	—	I5	Ⅱ	砂A	21.9	18.4	24.1	1.31	上1側タ下2
—	E①	Ⅳ	安A	10.9	12.1	24.8	2.05	上2側ナ下直2	—	I9	Ⅱ	砂A	23.8	19.7	25.0	1.27	上2側ナ下多
—	E②	Ⅳ	凝A	10.6	12.1	21.3	1.76	上タ側2下2	—	I11	Ⅲ	安A	6.2	14.1	19.5	1.38	上2側ナ下2
—	F1	Ⅳ	砂A	11.9	13.2	22.8	1.73	側ナ下2									
—	F4	Ⅲ	安A	12.2	16.4	24.4	1.49	上2側ナ下2									

表35 第12章 小山製鉄遺跡 土器観察表

図版 番号	地点名	土器 番号	器 種	残 存	法量 (cm)				色 調	外 面 整 形	内 面 整 形	備 考
					口径	底径	器高	内底				
284	1住	1	坏	口~底1/7	(13.2)	(7.8)	3.2		にぶい橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	口縁端面取り状
"	"	2	内黒埴	完形	12.3	5.2	4.1		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ放射状暗文	両面タール状物質付着
"	"	3	内黒	完形	15.6	8.0	5.4		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→ナデ	体~底部放射状ミガキ	
"	"	4	内黒埴	口~体3/4	(14.7)	(8.4)	5.5		黄橙	ロクロナデ	摩滅の為不明瞭	
"	"	5	灰釉皿	口~底1/2	17.9	7.1	4.2		灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	内面に重ね焼き痕あり 三日月高台
"	"	6	小形甕	口~底1/2	17.8				にぶい黄橙	ロクロナデ→胴下部ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土：雲母
"	"	7	甕	口~底1/5	(21.2)		(26.7)		橙	ロクロナデ→胴中~胴下部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ→胴部ヘラナデ	
"	"	8	甕	口~胴1/4	(22.2)				橙	ロクロナデ→胴部ヘラケズリ	ロクロナデ→胴部ヘラナデ	
"	"	9	小形甕	口~胴1/3	(11.8)				にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	10	小形甕	口~底1/4		(6.2)			橙	ロクロナデ、肩~胴上部カキ目、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	2住	1	坏	ほぼ完形	13.4	5.4	4.8		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	摩滅の為不明瞭	
"	"	2	内黒坏	口~底1/2	(13.0)	(5.3)	5.2		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	口縁摩滅の為不明瞭、体~底部放射状ミガキ	
"	"	3	内黒高台皿	皿脚~底1/4					橙	ロクロナデ	皿部ヘラミガキ、高台部ロクロナデ	
"	"	4	須恵四耳壺	胴					灰	タタキ	ハケ	
"	"	5	小形甕	口~胴1/5	(17.4)				明赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土：角閃石
"	"	6	甕	口~胴1/5	(27.1)				明赤褐	ロクロナデ→胴中部ヘラケズリ	ロクロナデ	胎土：角閃石
"	"	7	鍋	ほぼ完形	34.2		16.2		橙	ロクロナデ→体中~底部ヘラケズリ	ロクロナデ→体上~底部ハケ	
285	14炉	1	内黒高台皿	底3/4					橙	ロクロナデ	ロクロナデ、皿底部ヘラミガキ	
"	"	2	灰釉埴	口~体1/4	(15.4)				灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	釉ハケ塗り
"	2坑	1	内黒埴	口~底2/3	15.2	(8.0)	5.7		にぶい橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	3坑	1	内黒埴	口~底1/2	(16.6)	(8.6)			にぶい赤褐	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	"	2	内黒埴	口~底1/3	(16.0)	(8.4)	5.3		にぶい橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	21坑	1	内黒坏	口~底1/3	14.0	(6.6)	5.6		橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	
"	SF10	1	甕	口~肩1/8					橙	口~肩ヨコナデ→胴中部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	A地点	1	内黒高台皿	完形	13.0	6.4	3.3		橙	ロクロナデ	ヘラミガキ	胎土：雲母、50坑わき出土
"	B地点	1	小形甕	口~肩1/10					橙	口縁部ヨコナデ、肩部ヘラナデ	ロクロナデ	
"	D地点	1	小形甕	胴~底1/2		(7.4)			にぶい黄橙	ロクロナデ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	G地点	1	坏	口~底1/3	(12.4)	(5.0)	3.2		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ摩滅の為ミガキは不明	
"	"	2	坏	口~体1/3	(12.2)				にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	3	坏	口~体2/3	(10.8)				明黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	4	内黒坏	ほぼ完形	13.4	5.2	4.4		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ放射状暗文	
"	"	5	内黒小埴	ほぼ完形	11.3	6.7	5.0		橙	ロクロナデ	ヘラミガキ放射状暗文	
"	"	6	羽釜	口~取手					にぶい黄橙	あらいナデ	ヨコナデ	
"	"	7	甕	胴~底1/4		9.5			橙	ロクロナデ→胴下部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	ロクロナデ	
"	L地点	1	不明土製品						明赤褐	ヘラケズリ→ナデ	ハケ→ナデ	
"	O地点	1	内黒埴	体~底1/3		6.8			浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→ナデ	ヘラミガキ	
"	T地点	1	坏	ほぼ完形	11.8	5.1	3.7		明黄褐	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	2	坏	口~底	(12.0)	4.9	3.6		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	
"	"	3	灰釉皿	ほぼ完形	15.0	6.9	3.1		灰オリーブ	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	釉ハケ塗り
"	"	4	小形甕	口~胴上1/5	(12.3)				橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
286	F-4	1	両黒高台皿	口~底1/8	(13.6)	(6.4)	3.7		灰黄褐	ロクロナデ→体部放射状ミガキ、高台部ヨコミガキ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ→放射ミガキ	
"	F-9	1	内黒坏	口~底2/3	12.5	5.4	5.4		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	F-10	1	内黒坏	口~底1/3	(17.0)	(6.0)	6.7		浅黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
"	"	2	内黒埴	口~底1/3	(12.6)	(6.2)	4.6		橙	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ	
"	"	3	小形甕	口~胴1/8	(15.1)				橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
"	"	4	甕	口頸1/10					橙	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ、頸部ヨコハケ、頸下部タテハケ	

第12章 小山製鉄遺跡

図版 番号	地点名	土器 番号	器種	残存	法量 (cm)				色調	外面整形	内面整形	備考
					口径	底径	器高	内底				
286	G-1	1	緑釉高台皿	底1/3		(8.0)			灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	両面緑釉灰オリブ
〃	G-2	1	内黒高台皿	体~底1/6					にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	
〃	G-6	1	内黒環	口~底2/3	12.2	5.1	3.9		にぶい黄橙	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ヘラミガキ	口縁端つまみ出し
〃	〃	2	内黒環	口~底1/3	(12.8)	4.6	5.0		橙	ロクロナデ、底部回転糸切り→外周ヘラナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	3	内黒環	口~底3/5	(14.2)	5.9	4.9		にぶい橙	口~体部ロクロナデ、体下部ヘラケズリ、底部ナデ	ヘラミガキ	
〃	〃	4	両黒碗	口~底1/4	(12.3)	5.9	4.6		黒	ロクロナデ→口縁~体中部ヘラミガキ	ロクロナデ→ヘラミガキ	
〃	〃	5	須恵高台環	口~底1/2	(15.4)	10.0	4.1		緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	6	小形甕	口辺1/6					黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	〃	7	小形甕	口辺1/6					にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	
〃	検出面	1	軟質須恵環	口~底1/3	(13.2)	4.9	4.6		灰白	ロクロナデ、底部回転糸切り不調整	ロクロナデ	

表36 第12章 小山製鉄遺跡 遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
287	1	F-10	石鏃	先端部欠損	チャート	長さ<3.1> 幅1.4 厚さ0.50 重さ<1.60>	有茎凹基(D1)、先端角35°	暗オリブ灰
〃	2	遺構外	石鏃	完形	黒曜石	長さ1.8 幅1.6 厚さ0.40 重さ0.70	無茎凹基(B1)、先端角54°	
〃	3	G-1	石鏃	先端部欠損	黒曜石	長さ2.0 幅1.6 厚さ0.40 重さ1.10	無茎凹基(B1)、先端角58° 先端に階段状剥離	
〃	4	G-6	石鏃	左側、片脚欠損	黒曜石	長さ<2.0> 幅<1.3> 厚さ0.40 重さ<0.80>	無茎凹基(B1)、先端角45° 左側辺に長い割れ	
〃	5	遺構外	石鏃	先端、茎欠損	黒曜石	長さ<1.2> 幅<1.4> 厚さ0.50 重さ<0.70>	有茎凹基(B1)	
〃	6	遺構外	石鏃	先端、両脚欠損	黒曜石	長さ<1.5> 幅<1.4> 厚さ0.40 重さ<0.50>	無茎凹基(B1)、先端角45°	
〃	7	2住	石鏃	先端、片脚欠損	黒曜石	長さ<2.5> 幅<1.4> 厚さ0.40 重さ<1.00>	無茎凹基(B1)、先端角55°	
〃	8	G-6	石匙	つまみ部残存	黒曜石	長さ<2.4> 幅<2.0> 厚さ<0.8> 重さ<3.0>	斜形であろう	
〃	9	遺構外	スクレイパー	完形?	黒曜石	長さ2.7 幅2.0 厚さ0.6 重さ3.0	左側~下辺に刃部	
〃	10	遺構外	スクレイパー	完形	チャート	長さ2.9 幅2.1 厚さ0.6 重さ2.9	下辺に刃部	
〃	11	G-1	スクレイパー	完形	凝灰岩	長さ16.0 幅6.7 厚さ1.4 重さ145.0	右側下半部が刃部、刃部摩耗、刃部伏り、奥部摩耗	
〃	12	F-5	砥石	欠損	凝灰岩	長さ<9.1> 幅<8.6> 厚さ<7.0> 重さ<792.0>	砥面6 (正面、裏面、側面)	
〃	13	遺構外	砥石	欠損	粘板岩	長さ<9.3> 幅<3.6> 厚さ<0.9> 重さ<42.0>	全面砥面	
〃	14	F-10	打斧	完形	千枚岩質粘板岩?	長さ7.1 幅4.1 厚さ2.0 重さ52.0	長方形	
〃	15	1住	軽石製品	完形	浮石	長さ6.4 幅6.1 厚さ2.6 重さ36.0	裏面、周縁部に擦痕	
〃	16	F-10	磨石	完形	安山岩	長さ12.8 幅6.9 厚さ5.5 重さ670.0	正・裏面に磨面、下側面に敲痕	
〃	17	G-6	磨石	完形	安山岩	長さ13.3 幅7.0 厚さ6.1 重さ778.0	正面に2面、裏面の一部に磨面、上・下側面に敲痕	
〃	18	G-1	磨石	欠損	砂岩	長さ<13.6> 幅<8.9> 厚さ<5.6> 重さ<976.0>	全面に擦痕	
288	19	2住	磨石	完形	安山岩	長さ11.1 幅9.6 厚さ5.3 重さ850.0	正面に磨面、上側面に敲痕、正面に線状の強い擦痕	
〃	20	G-6	磨石	完形	安山岩	長さ10.4 幅8.7 厚さ5.1 重さ582.0	正・裏面に磨面、上側面に敲痕、右側にも続くか?	
〃	21	G-2	磨石	完形	安山岩	長さ12.7 幅12.3 厚さ3.6 重さ885.0	正・裏面に磨面、周縁に敲痕	
〃	22	1住	磨石	完形	安山岩	長さ18.5 幅16.3 厚さ5.0 重さ2200.0	正面に磨面	
289	1	G-8	刀子	先端部	鉄	長さ<3.4> 幅~1.5 背幅<0.2>		
〃	2	遺構外	刀子	刀身部	鉄	刀身部長<4.7> 幅~0.8 背幅<0.3>	平造	
〃	3	1住	刀子	茎	鉄	茎長<3.3>		
〃	4	2坑	刀子	茎	鉄	茎長<1.2>		
〃	5	2坑	刀子	茎	鉄	茎長<2.6>		
〃	6	G地点	鎌	身部	鉄	幅1.6 背幅0.4		
〃	7	F-10	釘	軸部	鉄	長さ<2.5> 幅0.5 厚さ0.4		
〃	8	1住	釘	軸部	鉄	長さ<2.8> 幅0.5 厚さ0.4		
〃	9	1住	釘	軸部	鉄	長さ<2.7> 幅0.4~0.25 厚さ0.4~0.25		
〃	10	遺構外	釘	頭部~軸部	鉄	長さ<1.9> 基部幅0.4 厚さ0.5 軸部幅0.35 厚さ0.4		
〃	11	G-6	釘	軸部	鉄	長さ<2.1> 幅0.4 厚さ0.3		

第12章 小山製鉄遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	種類	残存	材質	大きさ (cm) ・ 重さ (g)	形態の特徴ほか	備考
289	12	G-6	釘	軸部	鉄	長さ<1.9> 幅0.6~0.4 厚さ0.6~0.4		
"	13	14炉	釘	軸部	鉄	長さ<2.8> 幅0.5~0.4 厚さ0.5~0.4		
"	14	遺構外	釘	先端部	鉄	長さ<1.5> 幅0.3 厚さ0.2		
"	15	1住	釘	軸部~先端部	鉄	長さ<2.9> 幅0.5~0.3 厚さ0.3~0.2		
"	16	I地点	釘	軸部	鉄	長さ<3.0> 幅0.65 厚さ0.4		
"	17	14炉	釘	軸部~先端部	鉄	長さ<6.4> 幅0.7 厚さ0.2		
"	18	F-14	鉄製品	欠損	鉄	長さ<2.3> 幅<1.6> 太さ0.3×0.3	残存部は鉤状、断面方形	
"	19	2坑	鉄製品	先端欠損	鉄	長さ<3.6> 頭部幅1.3 太さ0.4×0.4		
"	20	SF10	板状鉄製品	欠損	鉄			両面に木質遺存
"	21	2住	鉄製品	完形	鉄			吊手金具?
"	22	遺構外	寛永通宝	完形	銅	銭径2.3×2.3 内径1.8×1.8 重さ2.8	江戸、初鋳年1636	

表37 第12章 小山製鉄遺跡 羽口計測表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	残存 (%)	重量 (g)	現存 長 (cm)	外 径 (cm)	口 径 (cm)	磁着度	メタル度	設置 角度	胎 土	焼成	色 調	整形の特徴ほか
290	1	14炉	滓化~身部100	454	9.0	先:5.9 身:7.5	先:2.2 身:2.2	4	無	-24°	緻密 15mm程のスサ	良好 軟質	にぶい橙	外:ナデ 内:ナデ?
"	2	"	滓化25	83	6.1	先:(7.4)	先:(2.4)	4	無	-	スサ	軟質	-	破片
"	3	2坑	滓化~先端100	339	6.6	先:6.6 身:7.0	先:2.2 身:2.2	4	無	-16°	白色粒子	不良 軟質	にぶい黄	外:ナデ 内:ナデ?
"	4	"	滓化~先端50	103	4.5	先:(7.0)	先:2.0	3	無	-22°	粗 3~6mm程のスサ	不良	-	外:ナデ?
"	5	43坑	滓化~身部100	515	14.0	先:6.2 身:7.7	先:2.4 身:2.4	7	H(○)	-30°	粗 7mm程のスサ	良好 軟質	橙	外:ナデ
"	6	"	滓化~身部100	614	12.4	先:7.5 身:7.7	先:2.1 身:2.1	5	無	-13°	スサ	軟質	赤褐	外:長軸方向の面取り
"	7	C地点	滓化~先端100	184	4.4	先:7.3	先:2.3	4	無	-	粗	良好	-	内:ナデ?
"	8	"	滓化~身部100	265	6.7	先:6.6 身:6.8	先:1.8 身:2.0	5	H(○)	-20°	粗 白色粒子	不良	-	外:ナデ
"	9	D地点	先端~身部50	346	12.6	先:(8.0) 身:(8.8)	先:(2.4) 身:(2.6)	2	無	-45°	スサ	軟質	明赤褐	外:ハケナデ
291	10	G地点	身部~基部100	1500	16.5	先:9.5 基:9.9	先:2.0 基:2.1	3	無	-24°	粗 4~6mm程のスサ	不良	橙	外:ナデ指圧痕 内:ナデ
"	11	"	身部~基部100	774	9.1	先:9.2 基:9.8	先:2.1 基:2.4	3	無	-	粗 6~10mm程のスサ	不良	橙	外:ナデ指圧痕 内:ナデ?
"	12	S地点	滓化~先端100	246	4.5	先:8.0	先:2.4	5	無	-16°	粗 7mm程のスサ	不良	-	
"	13	"	先端~身部50	194	10.2	先:(7.0)	先:(2.4)		無	-42°	スサ	軟質	-	外:先端付近オサエ
"	14	T地点	滓化~身部100	511	8.0	先:7.2 身:7.5	先:2.3 身:2.3	滓:6 先:7	滓:H(○) 羽:無	-16°	粗 1~15mm程のスサ	不良	-	外:ナデ 内:ナデ?
"	15	"	滓化~身部100	688	11.0	先:8.5 身:8.8	先:2.5 身:2.7	6	無	-26°	粗 1~25mm程のスサ	良好	黄橙	外:ナデ 内:ナデ?
"	16	"	滓化~先端100	302	7.5	先:6.8 身:7.1	先:1.9 身:2.1	6	無	-17°	粗 5mm程のスサ	不良	-	外:ナデと指オサエ
"	17	G-1	滓化~先端100	235	5.3	先:7.3	先:2.3	3	H(○)	-30°	粗 5mm程のスサ	不良 軟質	-	
"	18	F-5	滓化~先端60	145	5.2	先:6.0	先:2.1	4	H(○)	-17°	密 10mm程のスサ	良好 軟質	橙	外・内:ナデ 2回使用

表38 第12章 小山製鉄遺跡 鍛冶滓・鉄塊系遺物計測表

図版 番号	遺物 番号	出土位置	遺物名称	残存	重量 (g)	長 軸 (cm)	短 軸 (cm)	厚 さ (cm)	磁着度	メタル度	備考
292	19	1住	碗形鍛冶滓	90%	87.13	7.65	4.85	1.8	4	無	破面数1 表:赤黒 地:暗灰 緻密
"	20	14炉	碗形鍛冶滓	25%	84.51	5.35	5.0	2.2	7	無	破面数2 表:黒褐 地:黒褐 重量感有
"	21	"	碗形鍛冶滓(粘土質)	100%	29.24	6.0	5.75	2.2	無	無	破面なし 表:灰赤 地:黒褐 極めて軽量
"	22	"	碗形鍛冶滓(粘土質)	100%	15.0	5.3	4.7	1.4	4	無	破面なし 表:黒 地:黒褐 軽量
"	23	"	含鉄碗形鍛冶滓	100%	81.0	6.4	4.9	2.1	8	L(●)	破面なし 表:黒褐 地:黒褐 わずかな放射割れ有
"	24	"	碗形鍛冶滓	破片	46.90	5.05	4.1	1.6	6	無	破面数3 表:にぶい褐 地:緑黒 緻密で重量感有
"	25	"	含鉄碗形鍛冶滓	破片	107.67	8.0	4.2	3.0	7	H(○)	破面数2 表:赤褐 地:黒褐 下部緻密
"	26	19炉	碗形鍛冶滓	70%	138.54	7.8	6.0	2.2	7	無	破面数2 表:黒褐 地:暗青灰
"	27	"	含鉄碗形鍛冶滓	100%	605.30	15.5	9.3	4.3	8	H(○)	剥離面6 表:暗赤褐 地:黒灰褐 二段形成 重量感有
"	28	2坑	含鉄碗形鍛冶滓	50%	73.43	5.4	4.8	2.3	8	M(○)	破面数2 表:褐 地:青黒 重量感有 放射割れ有
"	29	"	鍛冶滓(粘土質)	80%	18.85	5.4	4.4	2.6	2	無	破面数1 表:にぶい赤褐 地:暗オリブ灰 極めて軽量

第12章 小山製鉄遺跡

図版 番号	遺物 番号	出土位置	遺物名称	残存	重量 (g)	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	磁着度	メタル度	備考
292	30	2坑	碗形鍛冶滓	破片	29.24	3.9	3.1	2.4	2	無	破面数3 表:黄赤褐 地:黒褐 軽量
"	31	18坑	碗形鍛冶滓	100%	24.19	5.8	3.75	0.9	無	無	破面なし 表:褐 地:極暗褐
"	32	"	碗形鍛冶滓	70%	127.83	7.5	7.2	2.0	6	無	破面数1 表:赤褐 地:オリーブ黒
293	33	"	碗形鍛冶滓(粘土質)	100%	15.17	5.3	5.3	2.9	無	無	破面なし 表:灰 地:オリーブ黒 非常に軽量
"	34	"	碗形鍛冶滓(粘土質)	100%	23.26	6.5	3.1	2.3	無	無	破面なし 表:黒 軽量
"	35	"	碗形鍛冶滓	70%	59.55	5.95	5.6	2.0	8	無	破面数1 表:極暗赤褐 地:暗緑灰
"	36	"	碗形鍛冶滓	50%	129.21	5.85	7.9	2.4	6	無	破面数1 表:暗赤褐 地:オリーブ黒
"	37	"	碗形鍛冶滓	100%	118.75	7.7	5.7	2.0	8	無	破面なし 表:赤黒 緻密で重量感有
"	38	"	碗形鍛冶滓	50%	150.09	7.0	7.45	2.6	6	無	破面数2 表:極暗赤褐 地:赤黒 緻密 羽口先端が溶着する
"	39	"	碗形鍛冶滓	30%	98.02	6.0	6.0	2.2	4	無	破面数3 表:黒褐 地:暗青灰 比較的密で重量感有
"	40	24坑	含鉄碗形鍛冶滓	100%	111.82	7.0	5.0	2.2	8	H(○)	破面なし 表:黄灰
"	41	"	含鉄碗形鍛冶滓	破片	350.54	9.0	7.7	3.6	8	H(○)	破面数3 表:黄赤褐 地:黒灰
"	42	S地点	含鉄碗形鍛冶滓	50%	184.70	9.6	6.7	2.9	8	H(○)	破面数3 表:黄赤褐 地:黒褐 やや重量感有
"	43	43坑	碗形鍛冶滓	30%	123.43	8.3	4.3	2.0	7	無	破面数2 表:黒褐 地:暗青灰 重量感有
294	44	"	碗形鍛冶滓	100%	101.30	8.1	7.8	2.1	3	無	破面なし 表:暗赤灰 地:黒褐 軽量
"	45	"	碗形鍛冶滓	50%	177.81	10.8	7.8	1.6	4	無	破面数1 表:灰黄褐 地:暗青灰
"	46	"	含鉄碗形鍛冶滓	100%	393.60	12.4	9.5	4.2	8	H(○)	破面なし 表:茶褐 地:茶褐・鉛 緻密で重量感有
"	47	"	碗形鍛冶滓	50%	254.36	9.1	7.7	3.5	5	無	破面数3 表:黒褐 地:暗青灰 重量感有
"	48	"	碗形鍛冶滓	100%	399.0	13.1	8.9	1.7	7	無	破面なし 表:黒褐
"	49	"	含鉄碗形鍛冶滓	破片	305.90	7.4	7.0	5.1	8	L(●)	破面数4 表:黄赤褐 地:黒褐 三段形成
"	50	"	碗形鍛冶滓	100%	38.70	5.2	4.9	1.5	4	無	破面なし 表:黄赤褐 地:黒褐 軽量
"	51	"	含鉄碗形鍛冶滓	100%	248.20	9.5	8.2	3.7	8	H(○)	破面なし 表:黒褐 地:黒褐 緻密で重量感有
"	52	"	含鉄碗形鍛冶滓	破片	93.00	5.0	4.3	3.1	8	L(●)	破面数3 表:暗赤褐 地:黒褐 黒錆、放射割れ有
295	53	"	碗形鍛冶滓(粘土質)	100%	23.68	6.0	5.5	3.3	無	無	破面なし 表:青黒 地:暗黄灰 非常に軽量
"	54	"	含鉄碗形鍛冶滓	20%	74.76	4.5	4.8	2.1	8	L(●)	破面数4 表:暗青灰 地:黒褐 黒錆、放射割れ有
"	55	47坑	碗形鍛冶滓	破片	70.90	6.0	5.1	2.4	3	無	破面数1 表:赤褐 地:黒褐
"	56	"	碗形鍛冶滓	破片	71.95	3.9	6.2	2.4	4	無	破面数3 表:青黒 地:暗緑灰 緻密
"	57	"	碗形鍛冶滓	破片	69.29	3.4	5.0	2.6	8	無	破面数4 表:極暗赤褐 地:暗青灰
"	58	"	含鉄碗形鍛冶滓	10%	88.9	4.45	3.6	3.0	8	H(○)	破面数4 表:暗褐 地:暗青灰
"	59	"	碗形鍛冶滓	破片	52.40	5.2	4.8	2.1	4	無	破面数1 表:黄赤褐 地:黒褐
"	60	"	含鉄碗形鍛冶滓	破片	30.22	3.8	3.4	3.1	8	H(○)	破面数不明 表:青黒 地:青黒 工具痕有
"	61	"	含鉄碗形鍛冶滓	30%	28.51	3.85	4.5	1.5	8	H(○)	破面数1 表:赤黒 地:赤黒
"	62	"	含鉄碗形鍛冶滓	30%	63.06	4.85	5.3	1.8	8	H(○)	破面数3 表:暗赤灰 地:暗青灰
"	63	E地点	含鉄碗形鍛冶滓	100%	115.20	7.8	5.8	2.7	8	L(●)	破面数1 表:赤褐 地:黒褐 青錆、放射割れ有 重量感有
"	64	R地点	含鉄碗形鍛冶滓	破片	86.90	4.2	3.9	4.0	8	L(●)	破面数8 表:赤褐 地:黒鉛 比較的緻密
"	65	"	含鉄碗形鍛冶滓	90%	126.90	7.1	5.4	3.4	8	L(●)	破面数1 表:黄赤褐 地:鉛 黒錆有
"	66	"	含鉄碗形鍛冶滓	100%	305.61	9.9	8.1	3.4	8	H(○)	破面なし 表:にぶい黄褐 地:黒
"	67	"	含鉄碗形鍛冶滓	90%	419.6	9.7	7.9	4.8	8	H(○)	破面数1 表:黄褐 地:暗灰 重量感有
296	68	"	含鉄碗形鍛冶滓	100%	409.6	11.3	7.8	3.2	8	H(○)	破面数1 表:暗褐 地:青黒
"	69	遺構外	含鉄碗形鍛冶滓	破片	186.90	7.9	6.7	3.1	8	L(●)	破面数2 表:黄赤褐 地:黒褐 緻密 重量感有
"	70	R地点	含鉄碗形鍛冶滓	20%	117.44	5.6	4.6	2.7	8	L(●)	破面数2 表:暗赤褐 地:暗青灰 放射割れ有
"	71	F-10	含鉄碗形鍛冶滓	破片	51.52	5.3	4.8	1.6	8	L(●)	破面数2 表:黄褐 地:黒褐 黒錆有
"	72	14炉	鉄塊系遺物	-	5.90	2.4	1.9	1.2	8	H(○)	破面数不明 表:暗褐 地:不明
"	73	"	鉄塊系遺物	-	10.3	2.6	2.3	1.7	8	H(○)	破面数不明 表:にぶい黄褐 地:不明
"	74	"	鉄塊系遺物	100%	12.03	3.9	2.6	1.3	8	H(○)	破面なし 表:暗褐 地:不明
"	75	19炉	鍛冶鉄塊系遺物	100%	19.78	3.6	2.7	1.7	8	H(○)	破面なし 表:黒褐 地:不明 放射割れ有
"	76	"	鍛冶鉄塊系遺物	100%	12.57	3.1	2.1	1.2	8	L(●)	破面なし 表:黒褐 地:不明 黒錆、放射割れ有

図版 番号	遺物 番号	出土位置	遺物名称	残存	重量 (g)	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	磁着度	メタル度	備考
296	77	S地点	鉄塊系遺物	破片	2.53	2.0	1.65	0.7	8	H(○)	破面数不明 表：明褐 地：不明
"	78	"	鉄塊系遺物	破片	3.82	2.0	1.7	1.1	6	H(○)	破面数不明 表：黄褐 地：不明
"	79	"	鉄塊系遺物	破片	4.71	1.95	1.55	1.3	8	H(○)	破面数不明 表：褐 地：不明
"	80	2坑	鉄塊系遺物	破片	4.69	1.9	1.4	1.2	7	L(●)	破面数不明 表：黒褐 地：不明
"	81	"	鉄塊系遺物	100%	16.80	3.6	2.8	1.8	8	H(○)	破面数不明 表：暗褐 地：不明
"	82	18坑	鉄塊系遺物	100%	13.24	3.2	3.15	1.3	8	H(○)	破面なし 表：黒褐 放射割れ有 重量感有
"	83	"	鉄塊系遺物	100%	13.39	3.25	2.3	1.9	8	L(●)	破面なし 表：赤黒 全体に放射割れ有
"	84	"	鉄塊系遺物	100%	29.96	4.3	2.8	2.0	8	L(●)	破面なし 表：黒褐 地：不明
"	85	43坑	鉄塊系遺物	破片	7.04	2.25	1.7	1.2	7	L(●)	破面数不明 表：極暗褐 地：不明
"	86	"	鉄塊系遺物	100%	15.75	4.0	3.1	1.5	8	H(○)	破面なし 表：暗赤褐 地：不明
"	87	47坑	鉄塊系遺物	破片	5.46	2.35	1.75	1.4	8	M(◎)	破面数不明 表：にぶい黄褐 地：暗青灰 わずかな放射割れ有
"	88	"	鉄塊系遺物	破片	4.35	2.85	2.0	1.1	6	H(○)	破面数不明 表：暗赤褐 地：不明
"	89	"	再結合滓	100%	10.80	3.1	2.6	1.9	7	H(○)	破面なし 表：黄赤褐 地：茶褐
"	90	"	鉄塊系遺物	破片	6.88	3.25	2.25	1.2	8	H(○)	破面数不明 表：にぶい赤褐 地：暗褐 放射割れ有
"	91	O・T地点	鍛冶鉄塊系遺物	100%	26.42	3.9	2.8	1.5	8	L(●)	破面なし 表：黄赤褐 地：鉛 黒錆、放射割れ有 重量感有
"	92	E地点	製(精)練鉄塊系遺物	100%	40.37	3.6	3.3	2.1	8	L(●)	破面なし 表：暗赤褐 地：黒褐 黒錆、放射割れ有 重量感有
"	93	G地点	製(精)練鉄塊系遺物	50%	105.94	6.7	4.9	3.5	8	L(●)	破面数1 表：赤褐 地：黒褐 黒錆、放射割れ有 重量感有
"	94	M地点	鉄錠状遺物	100%	17.42	4.4	2.0	2.0	8	L(●)	破面数1 表：暗赤褐 地：鉛 黒錆、放射割れ有
"	95	G-6	銅溶解物	破片	15.53	4.2	3.1	0.4	2	L(●)	破面数1 表：青緑 地：不明 緑青有 重量感有

表39 第12章 銀冶関連遺物 化学分析資料観察所見・分析結果

注：EPMAの項の◎はEPMA-XDAによる元素分析を表す

図版番号	遺物番号	遺物名称	考古学的観察所見ほか		各面の状況	分析調査項目							分析調査結果		
			平面形と概観	観察所見ほか		時期	成分分析	組織写真	X線回折	EPMA	X線透過	硬度		耐火度	
290	2	羽口	先端表面がガラス化した鍛冶羽口の破片である。溶解物の流れは認められるがその方向などは掴めない。	先端部は暗緑灰色にガラス化し、そこから暗赤紫色の溶解部分、青灰色部分へと変化している。口部内面は2mm程ガラス化。	表：黄赤褐 地：—	10	○	○	○	○	○	○	○	○	分析調査者による総合的評価
"	6	羽口	先端表面がガラス化した鍛冶羽口の先端部から身部までの破片である。下端には溶化した炉壁と羽口胎土が付着している。溶解物の垂れる方向は一方であり、使用回数は1回と考えられる。	先端部は全面黒色ガラス化しており、部分的に光沢を持っている。溶解部から青灰色部分までは被熱作用により亀裂がある。	表：赤褐 地：—	10	○	○	○	○	○	○	○	○	1200℃の耐火度
"	9	羽口	鍛冶羽口の破片である。先端部を欠損し、先端付近の被熱による変色部分から身部の途中までの下半部である。変色部分の頂点はほぼ1点であり、使用回数は1回と推定される。	被熱により外面が青灰色に変色した部分がある。その変色状況はほぼ1点を頂点とした先端部に向う放物線を描き、その部分が装着時の下部に当たると推定される。	表：明赤褐 地：—	10	○	○	○	○	○	○	○	○	1230℃強の耐火度
291	13	羽口	先端表面が溶解してガラス化した鍛冶羽口の破片である。溶解物の垂れる方向は、一方のみ認められるため使用回数は1回と推定される。	先端部は黒色にガラス化して窪み、その溶解物は下端部に垂れ固まっている。外面はそこから溶解部分、青灰色部分へと変化した部分がある。先端部の被熱による変色は大きく、作業頻度は高かったと推定される。	表：赤褐 地：—	10	○	○	○	○	○	○	○	○	1200℃強の耐火度
292	25	合鉄 碗形鍛冶滓	不整な楕円形を呈する。碗形滓の周縁部の破片である。底部の一部が二枚気味に形成されている。表面は薄く酸化している。	上面は波打っていて、5～10mm程の気孔があり、薄く酸化土砂が付着。下面は滑らかで径30mmの滓が瘤状に溶着。滓内部から下面は緻密で気孔が少なく、上面は気孔を多量に含んでいる。	表：赤褐 地：黒褐	10	○	○	○	○	○	○	○	○	製錬滓
"	27	合鉄 碗形鍛冶滓	長楕円形の碗形滓の上面に、更に楕円形の碗形滓が軸方向を同じくして短軸方向にややずれるように溶着した二段形成の滓である。厚みがあり重量感のある滓である。	上部の滓の上面は平らで細かく波打ち、大きく剥離した部分では1mm程の気孔が密に観察できる。下部の滓の下面は緩やかな碗形を呈するが、2ヶ所に瘤状に土砂が付着。	表：暗赤褐 地：黒灰褐	10	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
"	30	碗形鍛冶滓	あまり重量感のない、不整形で小型の碗形滓の破片である。どの面も凹凸が顕著である。側面に3ヶ所の破面があり、全体に酸化している。	上面は顆粒状突起のある部分はやや平坦であるが、それ以外は木炭痕や工具痕？などの影響で凹凸が目立つ。破面では0.5mm以下の気孔が全体に観察できる。	表：黄赤褐 地：黒褐	10	○	○	○	○	○	○	○	○	製錬滓
293	41	合鉄 碗形鍛冶滓	楕円形を呈する碗形滓の破片である。長楕両端の側面に計3ヶ所の破面を持ち、最も厚みのある中央部付近が残っている。	上面はやや中央が窪むもののはほぼ平坦である。中央部には酸化土砂が厚く付着しその付近には、木炭痕が見られる。下面は緩やかな碗形を呈している。破面では観察できる滓内部は大きな気孔が数ヶ所ある。それ以外の部分には細かな気孔が無数にある。	表：黄赤褐 地：黒灰	10	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
"	42	合鉄 碗形鍛冶滓	不整な楕円形を呈する碗形滓のほぼ半割された破片である。中央付近が厚みを持ち、重量感がある。	上面は全体にゴツゴツした酸化気味である。下面は比較的滑らかで、緩やかな碗形を呈する。やや酸化気味である。破面では1mm以下の気孔が全体に認められ、酸化していない部分はやや光沢がある。側面は下方への垂れがみられる。	表：黄赤褐 地：黒褐	10	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形鍛錬鍛冶滓
294	44	碗形鍛冶滓	上面の凹凸が目立つ不整形な滓であるが、基本的に楕円形を呈する碗形滓の一端が突出した状態といえる。薄形で軽量の滓で、破面は全く完形である。	上面の楕円形部分はいずれも凹みがあり、突出した部分には比較的滑らかな曲面を呈する。土砂は全体に付着するが、一部にはやや厚く残る。木炭痕と顆粒状突起は土砂付着のない部分に集中する。	表：暗赤褐 地：黒褐	10	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
"	46	合鉄 碗形鍛冶滓	平面形は不整な楕円形を呈し、緻密で重量感のある碗形滓の完形遺物である。	上面は全体に平坦であり、ガラス質、土砂付着部分を除いて、破面では滑らかな曲面を持つ碗形である。側面は滑らかな凹みがある。	表：茶褐 地：茶褐・鉛	10	○	○	○	○	○	○	○	○	合鉄碗形鍛冶滓
"	49	合鉄 碗形鍛冶滓 (三段形成)	三段に形成された非常に厚みのある碗形滓である。外縁部に破面を4面持つがほぼ全体が連存している。最下段の滓の下面が特殊な金属探知機にL反応する。	最上段の上面は中央が窪む曲面で、外周付近はやや凹み。ガラス質を付着させた質感で酸化土砂が付着。最下段の下面は緩やかな碗形を成し、全体に細かな凹凸。	表：黄赤褐 地：黒褐	10	○	○	○	○	○	○	○	○	合鉄碗形鍛冶滓

図版 番号	遺物 番号	遺物名称	考古学的観察所見はか		時期	分析調査項目						分析調査結果		
			平面形と概観	各面の状況		色調	成分 分析	組織 写真	X線 回折 MA	EP X線 透過	硬度		耐火 度	
294	50	碗形鍛冶滓	不整形な円形を呈する。薄く小型の完形碗形滓である。外見は緻密な滓だが軽量である。	上面は中央が僅かにくぼむ皿状を呈し、表面は滑らかな滓が付着する。酸化土砂に覆われ、木炭痕や8mm程度の粒状の滓の落ち込みがある。下面は緩やかな曲面を呈するが瘤状の滓の落ち込みがある。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	分析調査者による総合的評価 碗形精錬鍛冶滓
"	51	含鉄 碗形鍛冶滓	不整形な台形を呈し、緻密で重量感のある碗形滓の完形遺物。特殊金属探知機で反応する箇所は上面のごく一部で、金属鉄の含量は少ないと推定される。	上面は平坦な碗状を呈し、中央付近は滑らかで、周辺は細かな凹凸がある。下面は緩やかな曲面を呈している。側面は直線に近い周縁で、一部顆粒状突起。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	含鉄碗形 精錬鍛冶滓
"	52	含鉄 碗形鍛冶滓	円形を呈すると考えられる碗形滓の破片である。黒錆や放射割れが観察され、破面も含め全体に酸化土砂が付着している。	上面は平坦であるが、外縁部周辺に木炭痕や酸化土砂が目立つ。立上りの急な碗形を呈する下面の中央は、ガラス質洋化して光沢を持つ。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	含鉄碗形 鍛冶滓
295	55	碗形鍛冶滓	小型の碗形滓の破片である。完形とするとほぼ楕円形を呈する碗形滓であり、その長軸一端が割られていると考えられる。表面は全体に薄く酸化している。	上面は平坦で滑らか。やや急な碗形を呈する下面に不定形滓が2ヶ所付着。一方の側縁にはほぼ水平である。滓内部は全体に気孔が多い。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
"	59	碗形鍛冶滓	楕円形または円形の小型の碗形滓の破片である。遺存状況からは半割されたものと推測される。全体に、薄く酸化土砂が付着し、鍛造剥片の付着も認められる。	上面はやや凸面状に膨らみ、緩やかに波打った状態で、滓の下方への垂れが側面に認められる。下面は中央が突出気味の碗形で、顆粒状突起、木炭の付着が目立つ	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
"	63	含鉄 碗形鍛冶滓	やや小型で重量感のある、不定形な碗形滓である。上下面とも黒錆と放射割れがあり、酸化土砂の付着も目立つ	上面は波状の凹凸がある。側面の一端にも酸化土砂があり、上面から下方への垂れが見られる。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	含鉄碗形 鍛冶滓
"	64	含鉄 碗形鍛冶滓	細かく打ち割られた碗形滓の破片である。側面にはほぼ全周(8ヶ所)が破面となっている。金属鉄を取り出しのために故意に打ち割った状況が推測される。	上面は滑らかな曲面を呈している。下面の一部には大きな顆粒状突起、木炭痕も見られる。滓の内部には、気孔も見られるが比較的に緻密な様相である。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	含鉄碗形 鍛冶滓
"	65	含鉄 碗形鍛冶滓	不整形な楕円形を呈する、小型の碗形滓である。上下面中央付近には黒錆が吹き出している。	上面は凹凸が激しく短軸一端で大きく窪む。下面は急な曲面の碗形で顆粒状突起が認められ、全体に残る木炭痕に混じって初級痕が観察される。滓の内部には気孔が見られる。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
296	69	含鉄 碗形鍛冶滓	楕円形を呈し、緻密で重量感のある碗形滓の破片である。長軸両端を割り取られ、最も厚みのある中央部付近を残す個体である。	上面は波状に凹凸を持つが全体に平坦で滑らか。下面はやや急な曲面で表面は顆粒状突起。側縁はほぼ水平で、滓の下方への緩やかな垂れ。滓の内部は殆ど気孔がなく緻密。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	碗形精錬鍛冶滓
"	71	含鉄 碗形鍛冶滓	不整形な台形を呈する、小型の碗形滓の破片である。長軸一端を欠損し、全体のはほぼ3/5程度遺存している。	上面は中央部が窪み、全体に細かな凹凸がある。側縁はほぼ水平。滓内部はやや気孔が目立つ	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	含鉄碗形 精錬鍛冶滓
"	76	鍛冶 鉄塊 系遺物	極めて不整形な三角形の平面形を成す、小型の鉄塊系遺物である。長軸一端には黒錆の吹き出しと放射割れが観察できる。	上面は瘤状の隆起がいくつもあり、凹凸の激しい状態である。中央部分に放射割れがある。下面は木炭痕が密に付着し黒錆も吹き出している。それ以外は気孔が見られ、ザラザラした様相である。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	含鉄鍛冶 鍛冶滓
"	89	再結合滓	不定形なやや厚みのある鍛冶滓に、粒状滓や鍛冶剥片、木炭片が結合した再結合滓である。特殊金属探知機での反応、磁着反応は表面にある鍛冶剥片によるものと考えられる。	上面は木炭痕が目立ち、付着した土砂の中に鍛冶剥片も埋まっている。下面中央に鍛冶剥片が集中しており、粒状滓が1点ある。一部亀裂が認められる。	10 C	○	○	○	○	○	○	○	○	酸化鉄塊 (滓、硬包含)

図版番号	遺物番号	遺物名称	考古学的観察所見はか		色調	時期	分析調査項目						分析調査結果	
			平面形と概観	各面の状況			組成分析	X線回折	EPMA	X線透過	硬度	耐火度		分析調査者による総合的評価
296	91	鍛冶鉄塊系遺物	不整形な楕円形を呈する、やや扁平な鉄塊系遺物である。小型であるが重量感があり、短軸一端から黒錆が吹き出し、放射割れを起している。	上下面とも、全体に酸化土砂が付着している。側面には僅かながら下方への洋の理れが認められる。	表：黄赤褐 地：鉛	10 C	○	○	○	○	○	○	○	精錬鉄塊系遺物
"	92	製(精)錬鉄塊系遺物	不整形な台形様で非常に重量感がある。全体に酸化土砂が付着して、ゴツゴツとした状態で、黒錆が吹き出している。	上下面とも酸化土砂が付着し、中央付近に黒錆が吹き出している。放射割れも上面2ヶ所、下面4ヶ所観察される。	表：暗赤褐 地：黒褐	10 C	○	○	○	○	○	○	○	精錬鉄塊系遺物
"	93	製(精)錬鉄塊系遺物	重量感があり、黒錆と放射割れが目立つ不定形な鉄塊系遺物である。放射割れの結果、短軸中央で2分割。全体に金属鉄の遺存が認められる。	上下面とも凹凸が激しく、酸化土砂に覆われている。放射割れは上面6ヶ所、下面7ヶ所に及び、割れに沿って黒錆が吹き出している。上面に木炭痕が僅かに付着。	表：赤褐 地：黒褐	10 C	○	○	○	○	○	○	○	製錬鉄塊系遺物
"	94	鉄錠状遺物(未成品)	平面不整形な小型で扁平なものである。鍛冶工程で鍛打された半成品であろう。酸化土砂が付着し、黒錆が吹き出し、放射割れも起している。	上下面とも黒錆により表面がザラザラしている。形状はやや砂がんでいるが、ほぼ同一の厚さに整えられている。	表：暗赤褐 地：鉛	10 C	○	○	○	○	○	○	○	製錬鉄塊系遺物
"	95	銅溶解物	薄い重量感があり、碗形洋様の銅溶解物の破片である。全体に緑青が吹き出している。	上面は滑らかな凹曲面を呈していて、中央には銅の細板状のものが突出している。下面は凸面を呈して、細かく波立ち、土砂が付着。	表：青緑 地：不明	10 C	○	○	○	○	○	○	○	銅溶解物
289	17	釘	現存長6.7cmを測る釘である。腐食作用の影響が多面で全体に剥落して、殆ど芯の部分しか残存していない。現存する部分も錆化がすすみ電線が目立つ。特殊金属探知機には反応を示す。	製造時の表面を残す部分はなく、全体に渡って剥落している。全体に酸化して、非常に脆い状況である。先端部は何とか尖った状態が観察できるが、頭部は欠損して、その様相を掴めない。	表：茶褐 地：不明	10 C	○	○	◎	○	○	○	○	鉄製品(釘)

表40 第12章 小山製鉄遺跡 鍛冶関連微細遺物検出結果

遺構名	採取土重量 (g)	砂鉄・鍛造 剥片重量(g)	採取土比 (%)	粒状滓重量 (g)	採取土比 (%)	鍛造剥片 重量(g)	採取土比 (%)	鉄滓等重量 (g)	採取土比 (%)
1住	195,585	595.85	0.305	0.24	—	1.35	—	11.55	0.006
2住	22,090	20.61	0.093	0.01	—	0.64	0.003	0.78	0.004
14炉	115,490	361.35	0.312	4.90	0.004	97.65	0.085	224.91	0.195
14炉下部構造	44,180	402.25	0.910	26.98	0.061	444.65	1.006	615.77	1.394
41炉	870	2.39	0.275	0.01	0.001	0.04	0.005	0.75	0.086
35炉	660	2.08	0.315	0.02	0.003	0.08	0.012	0.39	0.059
35炉	6,140	20.93	0.341	0.07	0.001	0.06	0.001	5.25	0.086
35炉	4,780	40.55	0.848	2.06	0.043	27.99	0.586	47.41	0.992
19炉	6,250	28.22	0.452	0.21	0.003	1.42	0.023	46.05	0.737
12炉	980	1.13	0.115	—	—	0.19	0.019	0.25	0.026
38坑	1,690	2.75	0.163	0.01	0.006	0.01	0.001	0.39	0.023
18坑	83,150	150.77	0.181	4.13	0.005	25.02	0.150	385.01	0.463
47坑	58,300	559.00	0.959	33.47	0.057	592.31	1.016	1344.21	2.306
43坑	53,500	163.60	0.306	11.65	0.022	232.25	0.434	348.98	0.652
3坑	65,700	41.64	0.063	0.12	—	0.35	0.001	3.88	0.006
24坑	700	1.09	0.156	0.00	—	1.30	0.003	3.78	0.008
2坑	332,300	357.63	0.108	4.36	0.001	0.07	0.012	338.47	0.102
45坑	880	2.35	0.267	0.03	0.003	0.04	0.005	0.61	0.069
16坑	810	1.61	0.143	0.02	0.002	0.12	0.015	1.47	0.181
42坑	4,800	9.30	0.193	—	—	0.02	—	1.61	0.034
4坑	470	0.44	0.094	—	—	0.02	0.004	0.07	0.015
5坑	400	0.24	0.060	—	—	0.00	—	0.01	0.003
6坑	260	0.30	0.115	—	—	0.00	—	0.01	0.004
7坑	240	0.44	0.183	—	—	0.00	—	0.05	0.021
8坑	310	0.52	0.168	—	—	0.00	—	0.00	—
9坑	330	0.34	0.103	—	—	0.00	—	0.00	—
12坑	630	0.85	0.135	—	—	0.01	0.002	0.11	0.017
13坑	350	0.48	0.137	—	—	—	—	0.03	0.009
20坑	1,320	1.49	0.113	0.00	—	0.06	0.005	0.11	0.008
21坑	1,190	1.55	0.130	0.00	—	0.07	0.006	0.08	0.007
22坑	630	0.64	0.102	—	—	0.01	0.002	0.03	0.005
26坑	800	0.72	0.090	—	—	0.03	0.004	0.01	0.001
27坑	700	0.63	0.090	—	—	0.04	0.006	0.01	0.001
28坑	770	0.66	0.086	—	—	0.01	0.001	0.00	—
29坑	830	0.59	0.071	—	—	0.00	—	—	—
30坑	1,190	1.47	0.124	—	—	0.05	0.004	0.00	—
31坑	1,200	0.97	0.081	—	—	0.01	0.001	0.01	0.001
32坑	790	0.94	0.119	—	—	0.00	—	0.02	0.003
40坑	12,500	67.76	0.542	0.98	0.008	50.51	0.404	61.43	0.491
46坑	930	1.53	0.165	0.00	—	0.13	0.014	0.00	—
SF01	420	0.59	0.140	0.00	—	0.01	0.002	0.09	0.021
SF02	2,050	3.98	0.194	0.10	0.005	0.98	0.048	6.28	0.306
SF04	550	1.04	0.189	—	—	0.02	0.004	—	—
SF05	640	1.37	0.214	—	—	0.00	—	0.02	0.003
SF06	670	0.86	0.128	0.00	—	0.01	0.001	0.02	0.003
SF07	1,390	1.50	0.108	0.02	0.001	0.17	0.012	2.64	0.190
SF08	730	1.58	0.216	0.00	—	0.02	0.003	1.17	0.160

第12章 小山製鉄遺跡

遺構名	採取土重量 (g)	砂鉄・鍛造 剥片重量(g)	採取土比 (%)	粒状滓重量 (g)	採取土比 (%)	鍛造剥片 重量(g)	採取土比 (%)	鉄滓等重量 (g)	採取土比 (%)
SF09	750	1.60	0.213	0.01	0.001	0.04	0.005	0.75	0.100
SF10	48,140	78.02	0.162	0.13	—	1.70	0.004	25.38	0.053
SF11	1,740	6.78	0.390	0.36	0.021	1.61	0.093	4.38	0.252
A地点	147,700	97.76	0.066	0.06	—	1.41	0.001	8.72	0.006
B地点	160,800	79.76	0.050	0.29	—	8.79	0.005	12.36	0.008
CH地点	165,200	240.58	0.146	1.39	0.001	13.50	0.008	34.70	0.021
G地点	33,300	39.15	0.118	0.17	0.001	4.56	0.014	37.52	0.113
H地点	66,600	73.54	0.110	0.04	—	1.50	0.002	6.02	0.009
J地点	5,100	9.11	0.179	0.00	—	0.06	0.001	0.41	0.008
K地点	168,300	317.15	0.188	2.97	0.002	44.74	0.027	69.68	0.041
O地点	332,300	480.14	0.144	1.07	—	11.37	0.003	46.31	0.014
R地点	31,770	66.12	0.208	0.29	0.001	8.63	0.027	27.69	0.087
S地点	73,210	246.11	0.336	0.37	0.001	27.02	0.037	123.99	0.169
T地点	27,350	129.84	0.475	3.88	0.014	64.97	0.238	144.54	0.528
OT地点	1,221,620	1861.48	0.154	1.75	—	32.80	0.003	207.28	0.017
Q地点	308,300	397.64	0.129	0.37	—	3.72	0.001	5.38	0.018
2坑									
覆土	182,500	169.49	0.093	0.13	—	6.62	0.004		
覆土トレンチ	17,000	29.32	0.172	0.62	0.004	3.18	0.019		
覆土1層	11,400	12.22	0.107	0.04	0.000	0.94	0.008		
覆土2層	18,600	15.26	0.082	0.11	0.001	1.45	0.008		
覆土3層	13,300	14.49	0.109	0.24	0.002	1.66	0.012		
覆土4層	25,500	20.27	0.079	0.27	0.001	2.44	0.010		
覆土5層	54,200	84.75	0.156	2.76	0.005	23.89	0.044		
覆土5層(炭層)	12,800	18.83	0.147	0.01	—	0.27	0.002		
14炉									
1—A	860	2.16	0.251	0.01	0.001	0.13	0.015		
1—B	790	2.95	0.373	0.01	0.001	0.07	0.009		
1—C	870	2.64	0.303	—	—	0.01	0.001		
1—D	860	2.66	0.309	—	—	0.01	0.001		
1—E	800	2.23	0.279	—	—	0.01	0.001		
1—F	710	1.29	0.182	—	—	0.02	0.003		
1—G	700	1.60	0.229	—	—	0.03	0.004		
1—H	790	2.06	0.260	0.00	—	0.05	0.006		
1—I	740	2.77	0.374	—	—	0.02	0.003		
1—J	720	1.93	0.268	0.00	—	0.04	0.006		
1—K	800	1.35	0.169	—	—	0.03	0.004		
1—L	880	1.89	0.215	0.01	0.001	0.05	0.006		
2—A	820	2.79	0.340	0.00	—	0.08	0.010		
2—B	850	3.01	0.354	0.01	0.001	0.05	0.006		
2—C	840	3.16	0.376	—	—	0.03	0.004		
2—D	830	2.94	0.354	—	—	0.01	0.001		
2—E	810	1.85	0.228	0.00	—	0.03	0.004		
2—F	750	1.88	0.250	—	—	0.02	0.003		
2—G	780	1.59	0.204	0.00	—	0.04	0.005		
2—H	760	2.28	0.300	0.00	—	0.04	0.005		
2—I	860	2.66	0.309	0.00	—	0.02	0.002		

第12章 小山製鉄遺跡

遺構名	採取土重量 (g)	砂鉄・鍛造 剥片重量(g)	採取土比 (%)	粒状滓重量 (g)	採取土比 (%)	鍛造剥片 重量(g)	採取土比 (%)	鉄滓等重量 (g)	採取土比 (%)
2-J	750	2.30	0.307	0.00	—	0.04	0.005		
2-K	780	2.45	0.314	—	—	—	—		
2-L	820	1.93	0.235	—	—	—	—		
3-A	760	2.60	0.342	0.03	0.004	0.38	0.050		
3-B	810	8.61	1.063	0.24	0.030	4.88	0.602		
3-C	830	6.36	0.766	0.03	0.004	0.95	0.235		
3-D	770	2.07	0.269	0.00	—	0.23	0.030		
3-E	840	3.56	0.424	0.01	0.001	0.11	0.013		
3-F	820	2.22	0.270	0.00	—	0.07	0.009		
3-G	740	1.41	0.190	0.00	—	0.01	0.001		
3-H	730	2.29	0.314	0.00	—	0.02	0.003		
3-I	800	2.09	0.261	0.00	—	0.03	0.004		
3-J	800	2.84	0.355	0.00	—	0.15	0.019		
3-K	790	1.59	0.201	—	—	0.05	0.006		
3-L	820	1.48	0.180	—	—	0.01	0.001		
4-A	750	3.45	0.460	0.13	0.017	0.99	0.132		
4-B	760	3.76	0.495	0.02	0.003	0.72	0.095		
4-C	850	5.26	0.619	0.09	0.011	2.21	0.260		
4-D	750	9.29	1.239	0.16	0.021	2.29	0.305		
4-E	770	5.62	0.730	0.12	0.016	3.36	0.436		
4-F	780	2.45	0.314	0.01	0.001	0.22	0.028		
4-G	760	2.08	0.274	0.00	—	0.02	0.003		
4-H	800	2.24	0.280	0.01	0.001	0.12	0.015		
4-I	740	2.40	0.324	0.00	—	0.07	0.009		
4-J	810	1.53	0.189	0.00	—	0.02	0.002		
4-K	770	1.38	0.179	0.00	—	0.00	—		
4-L	750	1.85	0.247	—	—	0.01	0.001		
5-A	870	3.78	0.434	0.00	—	0.23	0.026		
5-B	780	5.72	0.733	0.10	0.013	3.37	0.432		
5-C	790	5.99	0.758	0.04	0.005	1.82	0.230		
5-D	800	23.09	2.886	0.37	0.046	17.94	2.243		
5-E	770	3.19	0.414	0.05	0.006	0.54	0.070		
5-F	750	2.60	0.347	0.06	0.008	1.51	0.201		
5-G	720	2.01	0.280	0.03	0.004	0.36	0.050		
5-H	790	2.20	0.274	0.02	0.003	0.67	0.085		
5-I	780	2.48	0.318	0.00	—	0.11	0.014		
5-J	740	1.47	0.199	—	—	0.02	0.003		
5-K	710	1.90	0.268	—	—	0.05	0.007		
5-L	770	1.64	0.213	0.00	—	0.02	0.003		
6-A	830	3.74	0.450	0.00	—	0.06	0.007		
6-B	760	2.88	0.379	0.00	—	0.26	0.034		
6-C	780	2.87	0.368	0.00	—	0.05	0.006		
6-D	730	13.17	1.804	0.29	0.040	9.77	1.338		
6-E	690	13.78	1.997	0.35	0.020	9.95	1.442		
6-F	730	3.52	0.482	0.02	0.003	0.55	0.075		
6-G	700	2.24	0.320	0.04	0.006	0.75	0.107		
6-H	710	2.28	0.321	0.02	0.003	0.65	0.092		

遺構名	採取土重量 (g)	砂鉄・鍛造 剥片重量(g)	採取土比 (%)	粒状滓重量 (g)	採取土比 (%)	鍛造剥片 重量(g)	採取土比 (%)	鉄滓等重量 (g)	採取土比 (%)
6-I	700	2.22	0.317	0.03	0.004	0.18	0.026		
6-J	770	1.52	0.197	0.00	—	0.01	0.001		
6-K	800	0.64	0.080	0.00	—	0.01	0.001		
6-L	840	1.69	0.201	0.00	—	0.03	0.004		
7-A	810	3.33	0.411	0.00	—	0.06	0.007		
7-B	750	2.74	0.365	0.01	0.001	0.16	0.021		
7-C	790	1.92	0.243	0.00	—	0.02	0.003		
7-D	740	0.63	0.085	0.00	—	0.02	0.003		
7-E	720	2.56	0.356	0.02	0.003	0.09	0.013		
7-F	790	2.04	0.258	0.01	0.001	0.04	0.005		
7-G	770	2.92	0.379	0.11	0.014	0.50	0.065		
7-H	770	1.82	0.236	—	—	0.06	0.008		
7-I	740	1.30	0.176	—	—	0.00	—		
7-J	770	1.28	0.166	0.00	—	0.00	—		
7-K	810	1.28	0.158	0.00	—	0.09	0.011		
7-L	850	1.53	0.180	0.00	—	0.05	0.006		
1層	24,500	41.42	0.169	0.18	0.001	5.39	0.022		
2層	7,500	11.90	0.159	0.32	0.004	5.14	0.069		
2層(炭層)	3,900	5.35	0.137	0.04	0.001	0.73	0.019		
覆土2層(炭層)	7,800	14.68	0.188	0.65	0.008	5.32	0.068		
粘土1層	6,200	25.23	0.407	0.47	0.008	9.78	0.158		
14炉下部構造									
覆土・黒褐	11,980	122.68	1.024	11.74	0.098	213.39	1.781		
P地点下覆土	32,200	279.57	0.868	15.18	0.047	230.92	0.717		
47坑									
T地点覆土1層	25,200	53.57	0.213	0.70	0.003	23.08	0.092		
T地点覆土2層	15,100	91.43	0.605	7.75	0.051	135.61	0.898		
T地点覆土3層	5,500	115.20	2.095	12.25	0.223	189.19	3.440		
T地点覆土4層	2,100	100.81	4.800	7.21	0.343	125.98	5.999		
T地点覆土4層	10,400	197.99	1.904	5.42	0.052	205.13	1.972		

表41 第12章 小山製鉄遺跡 鍛造剥片計測表

遺 構	採取土重量 (g)	鍛 造 剥 片 出 土 量 (g)							小 計
		1	2	3	4	5	6	7	
		7.1mm~	4.1~7.0mm	2.1~4.0mm	1.6~2.0mm	1.1~1.5mm	0.5~1.0mm	~0.4mm	
1号住居	195,585			0.03	0.05	0.26	1.01		1.35
2号住居	22,090				0.03	0.07	0.54		0.64
12号炉	630					0	0.01		0.01
14号炉	115,490		0.17	5.04	5.59	19.93	66.92		97.65
14号炉下部構造	44,180		1.27	27.21	43.02	91.47	281.68		444.65
19号炉	6,250			0.37	0.37	0.36	0.32		1.42
35号炉	660					0	0.08		0.08
37号炉	6,140			0	0.01	0.02	0.03		0.06
41号炉	870					0.02	0.02		0.04
48号炉	4,780			1.52	2.01	5.34	19.12		27.99
2号土抗	332,300		1.54	2.98	4.8	9.29	21.46		40.07
3号土抗	65,700			0.01	0.01	0.11	0.32		0.35
16号土抗	810					0.02	0.1		0.12
18号土抗	83,150		0.37	11.42	10.79	27.89	74.55		125.02
24号土抗	700				0	0.08	0.2		0.28
36号土抗	46,700			0.01	0.03	0.22	1.04		1.3
38号土抗	1,690					0.01			0.01
42号土抗	4,800				0.01	0	0.01		0.02
43号土抗	53,500		0.57	13.41	18.32	59.28	134.41	6.26	232.25
45号土抗	880				0	0.02	0.02		0.04
47号土抗	58,300		0.03	26.73	68	139.77	347.53	9.98	592.31
SF1	420					0.01	0		0.01
SF2	2,050			0.08	0.07	0.28	0.55		0.98
SF4	550					0.01	0.01		0.02
SF5	640					0	0		0
SF6	670					0.01			0.01
SF10	48,140		0.36	0.45	0.24	0.36	0.29		1.7
SF11	1,740			0.11	0.14	0.3	1.06		1.61
A地点	147,700			0.03	0.09	0.28	1.01		1.41
B地点	160,800			0.56	0.4	1.68	6.15		8.79
CH地点	165,200			0.9	1.05	2.87	8.68		13.5
G地点	33,300			0.17	0.25	1.4	2.74		4.56
H地点	66,600			0.06	0.14	0.48	0.82		1.5
J地点	5,100					0.02	0.04		0.06
K地点	168,300			1.13	2.1	11.89	29.62		44.74
O地点	332,300			0.38	2.85	0.86	7.28		11.37
R地点	31,770			0.06	0.31	1.71	6.55		8.63
S地点	73,210			0.39	0.97	6.34	19.32		27.02
T地点	27,350	0.11	0.13	3.98	4.46	14.08	42.21		64.97

表42 第12章 小山製鉄遺跡 粒状滓計測表

遺構	採取土重量 (g)	鍛造剥片出土量 (g)							小計
		1	2	3	4	5	6	7	
		7.1mm~	4.1~7.0mm	2.1~4.0mm	1.6~2.0mm	1.1~1.5mm	0.5~1.0mm	~0.4mm	
1号住居	195,585			0.12	0	0.08	0.04		0.24
2号住居	22,090					0	0.01		0.01
12号炉	630								
14号炉	115,490			0.88	0.49	1.32	1.15	1.06	4.9
14号炉下部構造	44,180		8.48	9.72	2.7	3.9	2.18	0	26.98
19号炉	6,250			0.13		0.03	0.05		0.21
35号炉	660			0.02		0	0		0.02
37号炉	6,140			0.03		0	0.03	0.01	0.07
41号炉	870						0.01	0	0.01
48号炉	4,780		0.78	0.31	0.23	0.43	0.24	0.07	2.06
2号土坑	332,300		0.97	1.33	0.73	0.97	0.36		4.36
3号土坑	65,700		0.08	0.02	0	0.01	0.01		0.12
16号土坑	810					0.01	0.01		0.02
18号土坑	83,150		0.18	1.94	0.57	0.83	0.54	0.07	4.13
24号土坑	700					0	0		0
36号土坑	46,700					0.01	0.02	0	0.03
38号土坑	1,690						0.01		0.01
42号土坑	4,800								
43号土坑	53,500	0.35	1.64	1.99	1.62	3.95	2.08	0.02	11.65
45号土坑	880					0.02	0.01		0.03
47号土坑	58,300	2.01	7.41	12.24	3.6	4.58	3.62	0.01	33.47
SF 1	420					0			0
SF 2	2,050			0.02	0.02	0.03	0.01	0.01	0.1
SF 4	550								
SF 5	640								
SF 6	670							0	0
SF10	48,140			0.07	0.02	0.02	0.02	0	0.13
SF11	1,740			0.16	0.06	0.08	0.05	0.01	0.36
A地点	147,700				0.01	0.05	0		0.06
B地点	160,800			0.11	0.02	0.09	0.07		0.29
CH地点	165,200		0.18	0.45	0.17	0.39	0.2		1.39
G地点	33,300			0.03	0.04	0.07	0.03		0.17
H地点	66,600					0.03	0.01		0.04
J地点	5,100				0				0
K地点	168,300	0.82	0.1	0.44	0.36	0.75	0.5		2.97
O地点	332,300			0.38	0.33	0.14	0.22		1.07
R地点	31,770			0.13	0.06	0.07	0.03		0.29
S地点	73,210			0.12	0.05	0.1	0.1		0.37
T地点	27,350		0.08	1.67	0.62	1.25	0.26		3.88

写 真 图 版



左：遺跡遠望（北から）
右：平成6年度発掘区
（南から）



左：平成6年度発掘区
（左上が北）
右：5号住居跡炉（南から）



左：18号住居跡
（南西から）
右：同炉（南から）



23号住居跡
炭化材出土状況
（南西から）



左：23号住居跡
炭化材出土状況
（南西から）
右：同（北東から）



左：同遺物出土状況
（南から）
右：同（東から）



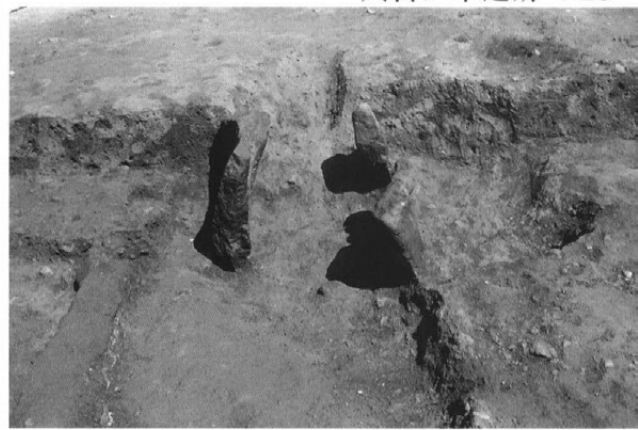
左：同炉（南西から）
右：同遺物出土状況
（南から）



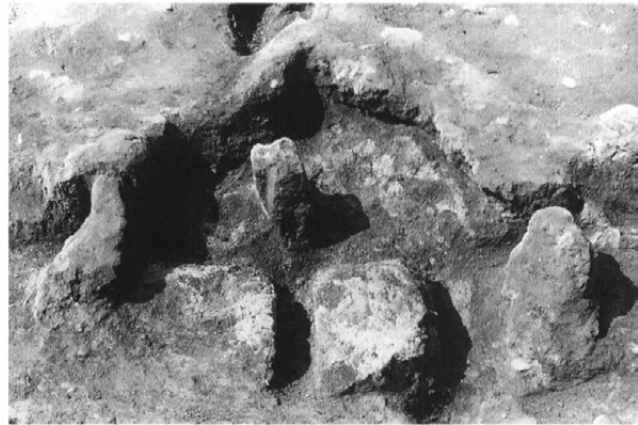
左：同完掘（南西から）
右：27号住居跡
（南西から）



左：調査風景（東から）
右：32号住居周辺
（南から）



左：21号住居跡
遺物出土状況（南から）
右：同カマド袖石
（南から）



左：11号住居跡（南から）
右：同カマド（南から）



左：26号住居跡（南から）
右：同カマド（南から）



左：同カマド完掘
（南から）
右：32号住居跡
（南東から）



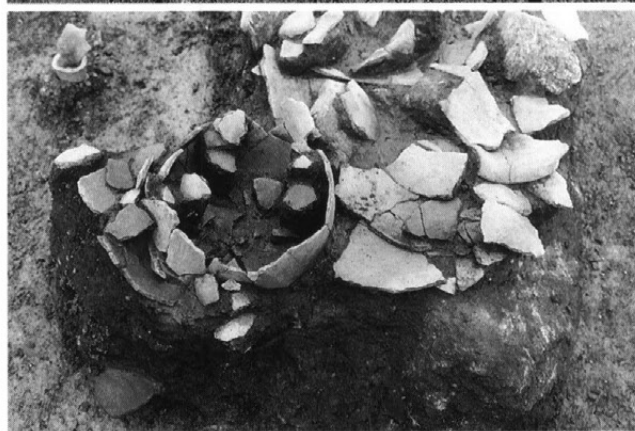
左：同カマド（南東から）
右：1号建物跡（南から）



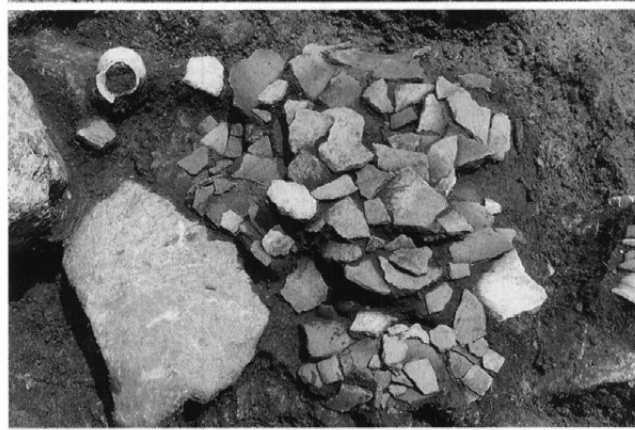
左：1号自然流路
断面（南から）
右：同（東から）



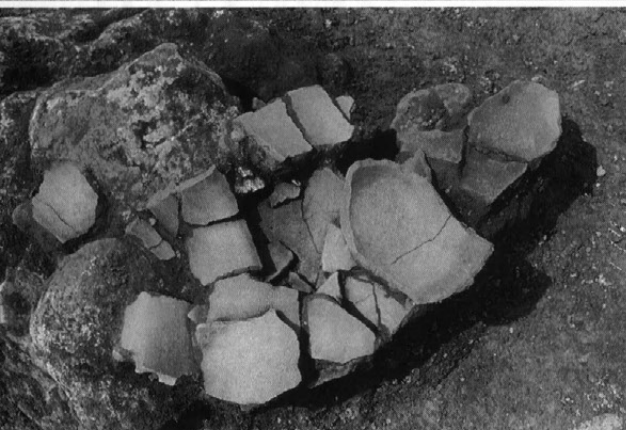
左：2号自然流路
断面（南西から）
右：同勾玉出土状況



左：同石剣出土状況
右：同遺物出土状況
（南西から）

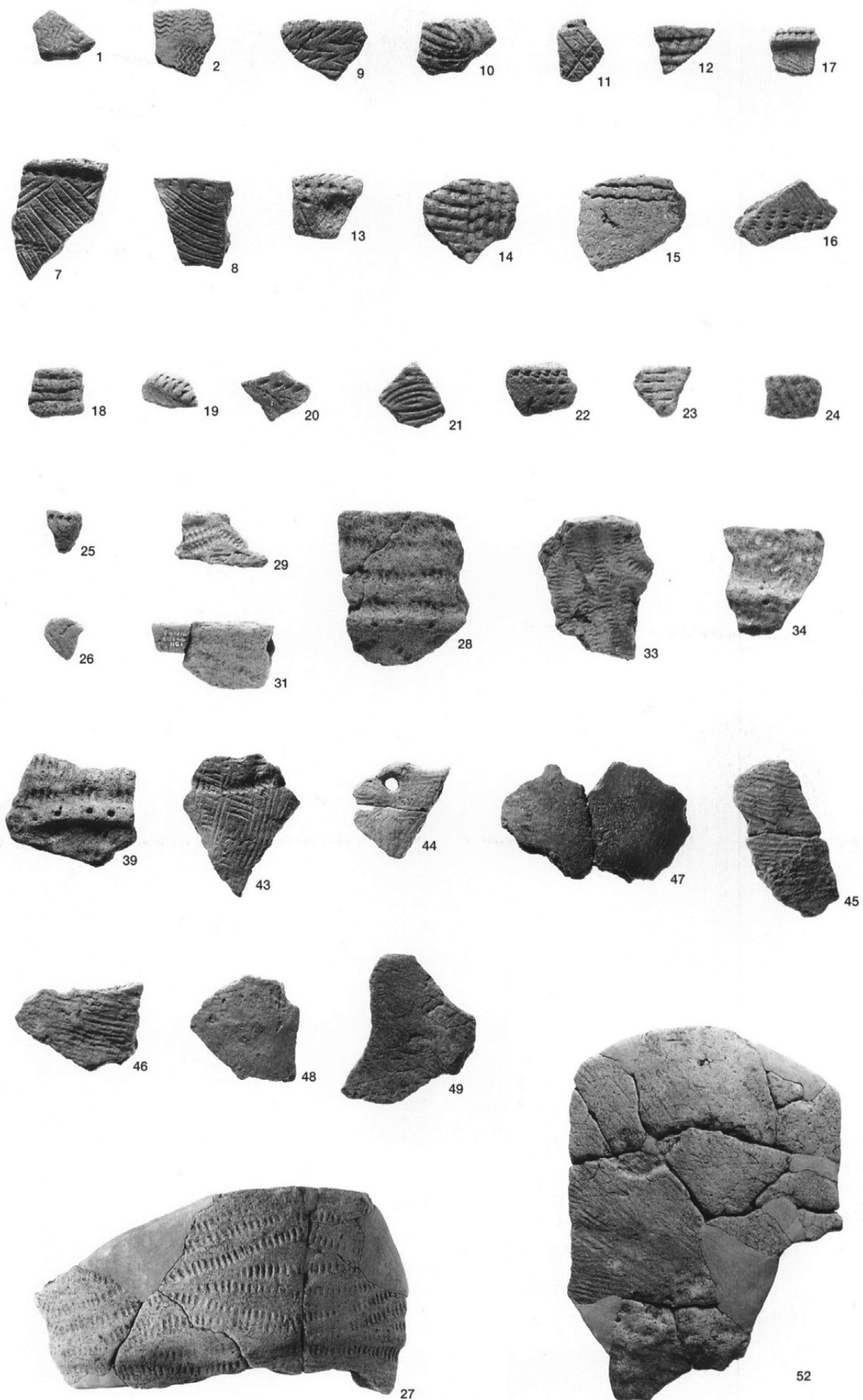


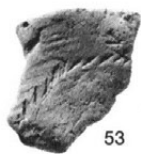
左：同（南から）
右：同（南西から）



左：同（南東から）
右：同（北から）

(1 : 3)





53



54



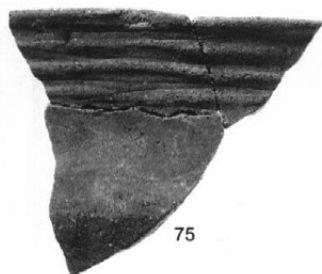
55



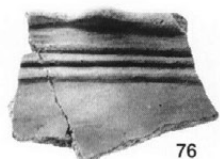
56



58



75



76



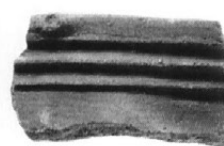
77



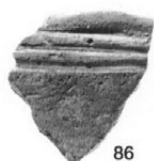
82



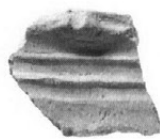
83



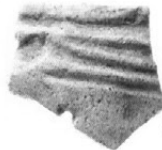
85



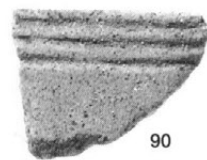
86



88



89



90



91



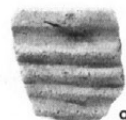
92



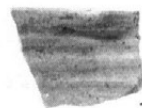
95



97



99



107



100



108



116



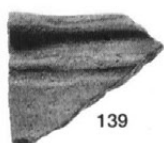
119



124



129



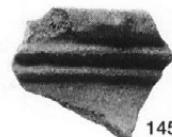
139



141



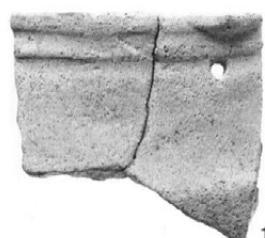
142



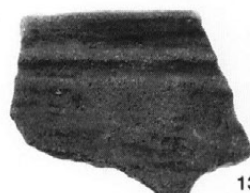
145



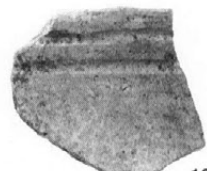
153



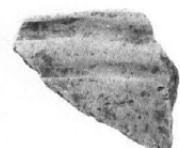
132



133



134



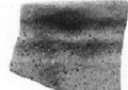
137



154



155



166



168

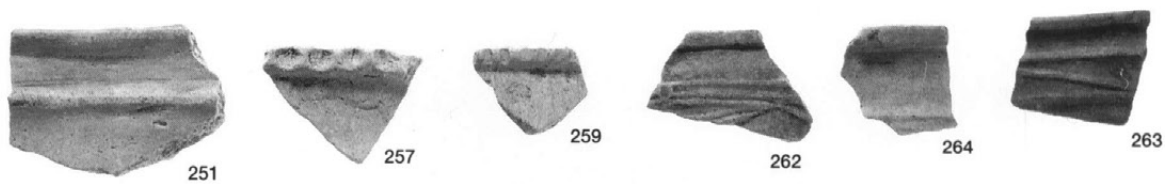
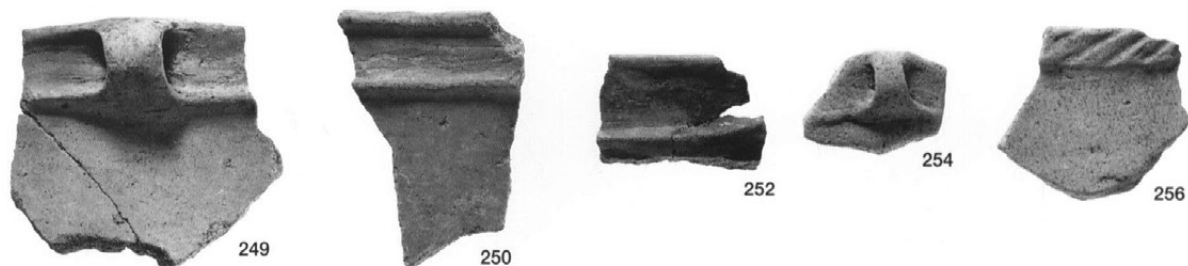
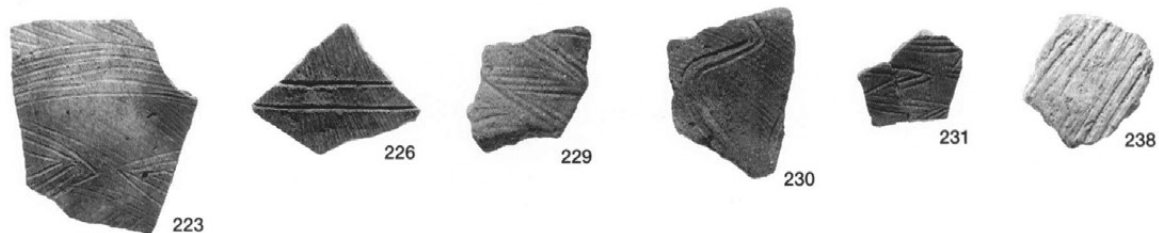
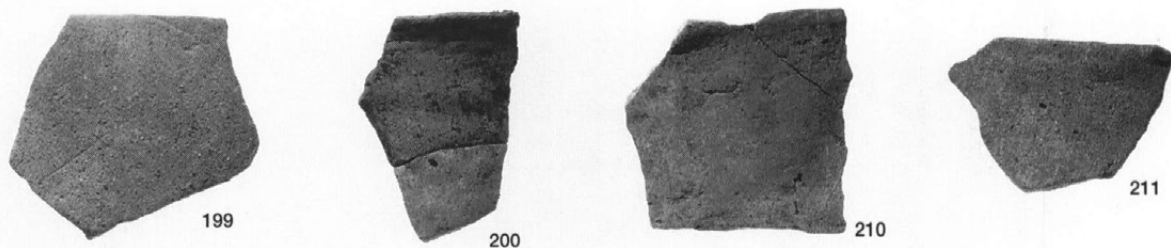
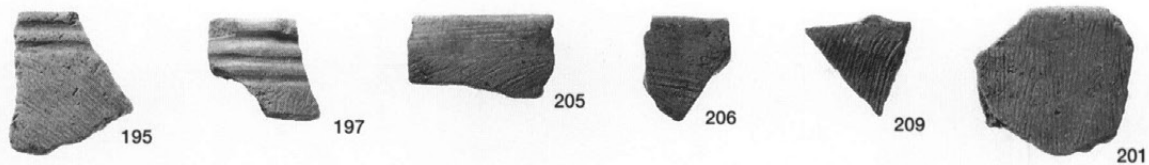
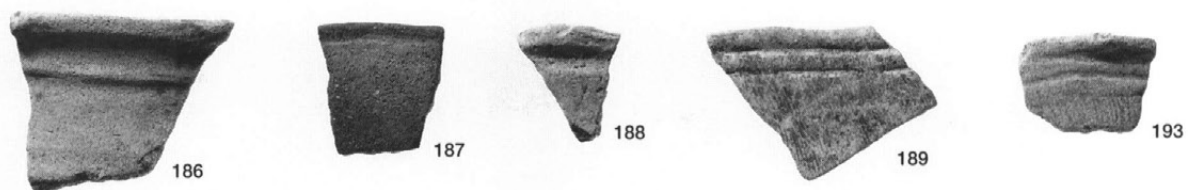


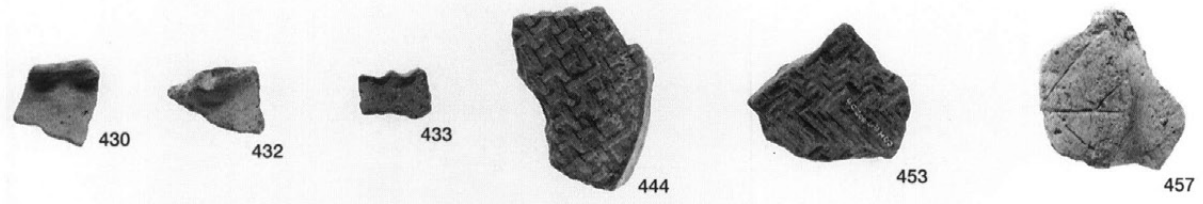
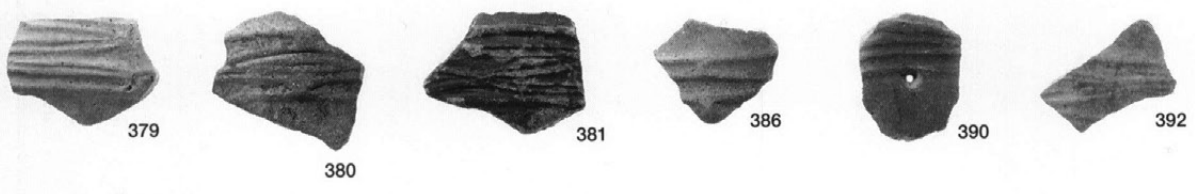
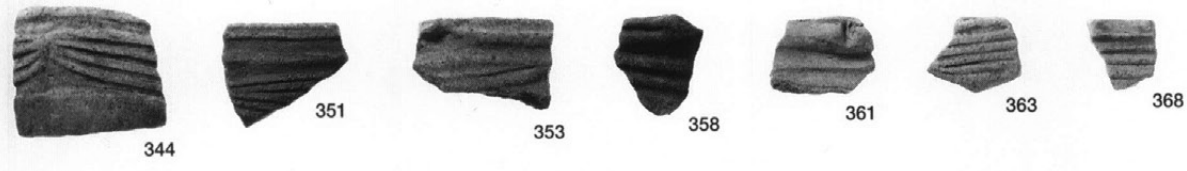
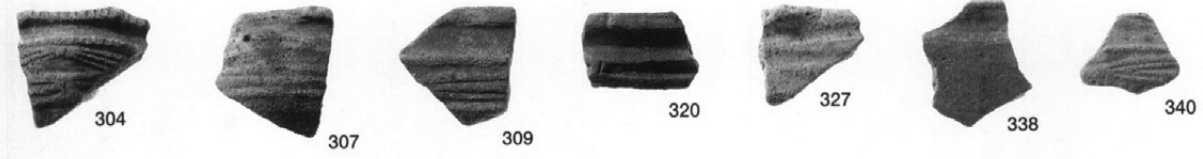
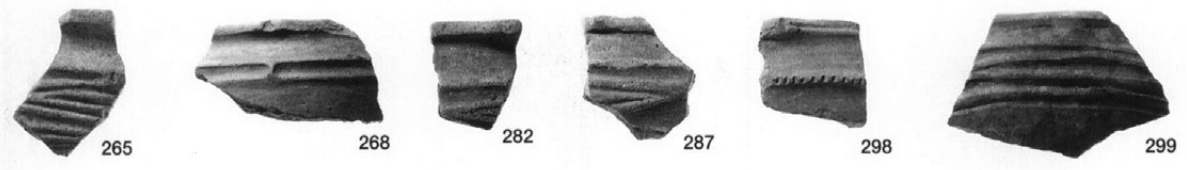
170



171

(1:3)







1住-1



1住-3



7住-4



7住-7



13住-8



23住-2



13住-9



23住-5



23住-11



23住-3



23住-6



23住-10



23住-12



23住-16



23住-19



23住-26



23住-27



23住-30



23住-22



23住-35



23住-41



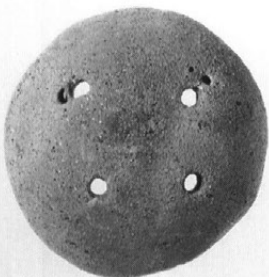
23住-36



35住-3



35住-4



35住-2



35住-6



38住-1



遺構外-4



2流路-22



2流路-27



2流路-8



2流路-24



2流路-25



2流路-2



2流路-3



2流路-6



2流路-4



2流路-5



2流路-7



2流路-14



6住-1



11住-1



11住-2



19住-1



19住-2



19住-4



19住-3



6住-3



19住-5



19住-6



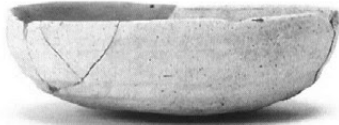
21住-1



21住-2



21住-3



21住-4



21住-5



21住-7



21住-8



21住-11



21住-13



21住-17



21住-18



21住-21



21住-22



21住-19



21住-20



21住-23



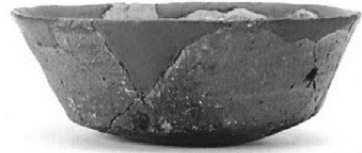
21住-24



24住-2



26住-2



32住-1



24住-6



26住-3



32住-2



26住-5



26住-9



26住-11



34住-3

32住-5



34住-5



1流路-1



1流路-2



1流路-6



1流路-3

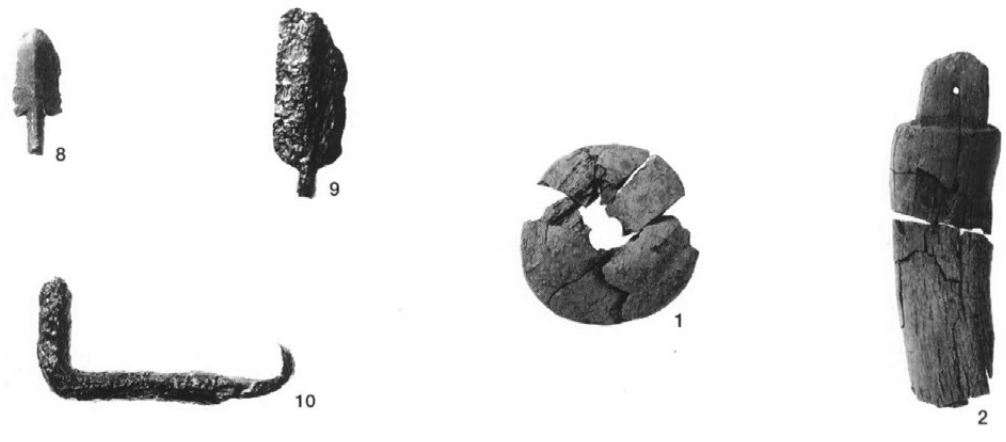
9：土製紡錘車
4~7：匙形土製品
1~3：異形土製品
8：碁石状土製品
10~14：土器片板
(1：2)

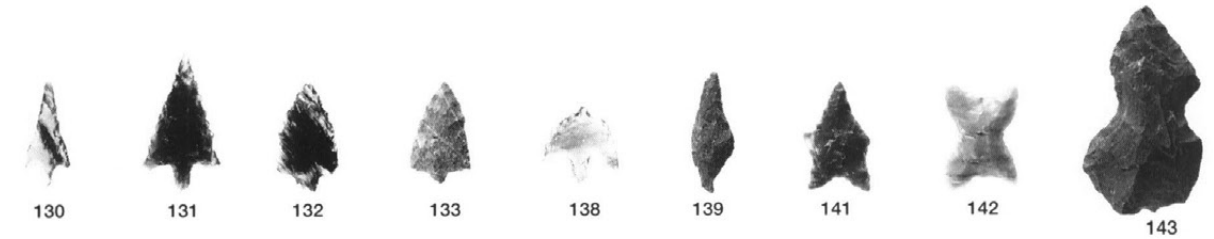
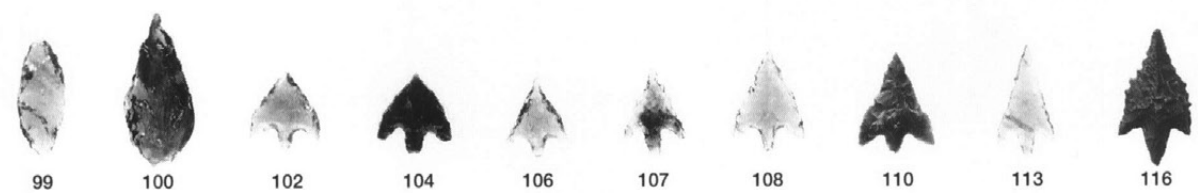
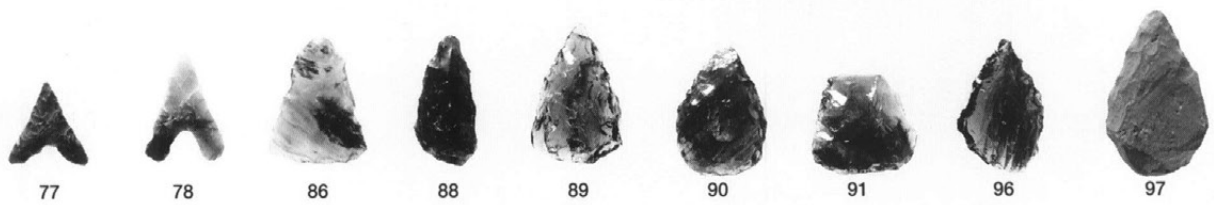
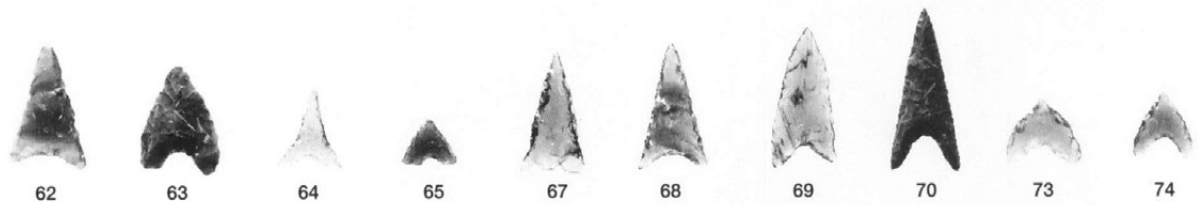
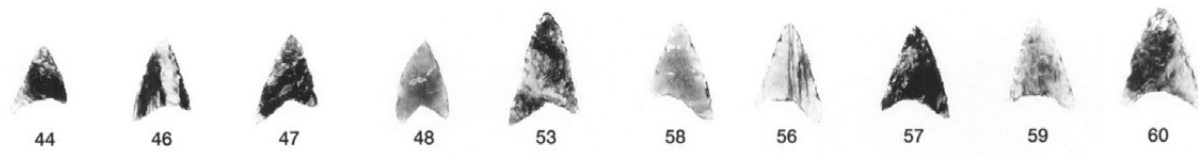
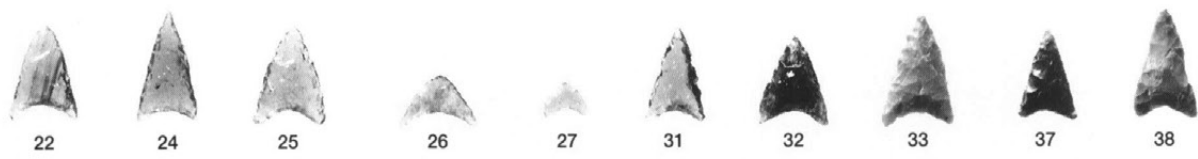
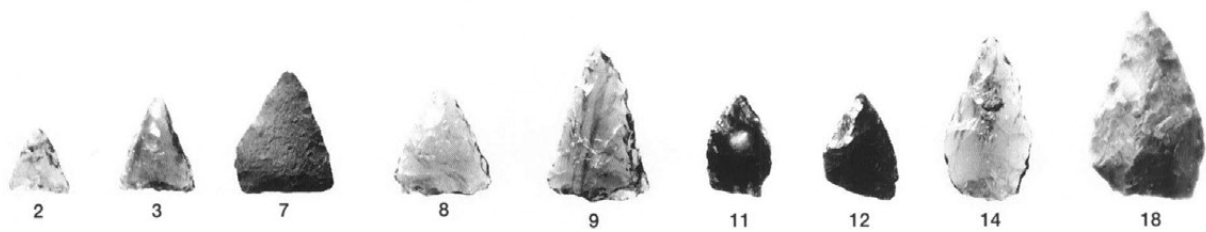


錢貨 (2：3)



8：銅鏃
9：鉄鏃
10：不明鉄製品
1：木製紡輪
2：木製棒
(1：2)

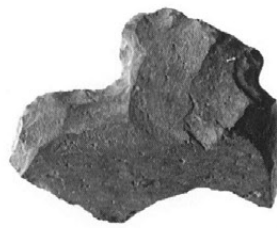




144~154 : 石匙
155~167 : 石錐
168~177 :
スクレイパー
(2 : 3)



144



146



145



147



148



150



152



149



151



153



154



155



156



157



158



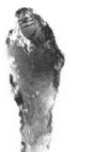
159



160



161



162



163



164



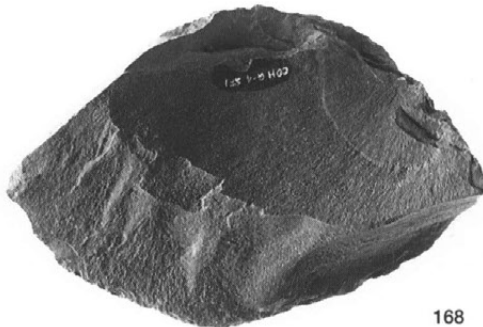
165



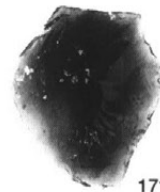
166



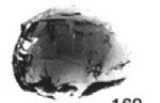
167



168



171



169



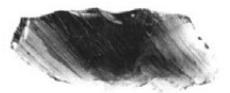
170



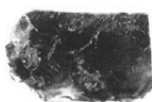
172



174



176



173



175



177



178



179



184



185



181



182



183



186



187



189



190



191



192



193



194



198



197



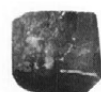
196



195



199



200